
脱出

残念無念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脱出

【Nコード】

N5489G

【作者名】

残念無念

【あらすじ】

世界は崩壊した。人間をミュータントに変貌させるウイルスが蔓延した世界で、人類とミュータントの生存競争がはじまる。果たして、生き残るのはどちらか？そしてそんな世界でサバイバル生活を送る兵士達と子供達の運命は？ 現在、1話から順に加筆・修正を加えています。

序 本州封鎖編（前書き）

別の作品終わってないのに何やってんだよ、とは言わないで下さい。
1年間暖めてきた作品なんです・・・。

序 本州封鎖編

薬莖が当たり一面に散らばっている。

右では同僚の中沢雄一なかざわ ゆういちがミニミニ分隊支援火器を撃ちまくっている。

左では同じ同僚の堂々章吾どうどう しょうごが狙撃銃じゅげいじゆを構えている。

視線を前に戻す。

俺ひがし、東龍りゅうは手の中にある9式小銃を撃っている。

何を撃っているのかって？そりゃあアレだよアレ。

化け物だよ。

俺達海兵隊第5師団に下った命令は、ここ、千葉県初春市で発生した異常事態を食い止める事だった。だが、今は死傷者こそ少ないものの、各隊がばらばらに分散してしまいもはやまとりに戦えない。生き残っている奴等は海兵隊初春基地に立て籠もって、へりと陸路で脱出をするように命令が下っている。

本州で同時多発的に発生したこの異常事態は、人間が理性を失って

しまう感染症が原因で、感染者は理性や知能、そして太陽光（紫外線）への耐性を完全に失い、常人を遙かに上回る身体能力を持ち、他の人を襲ってその感染を広げる、というものだった。

そんなの映画やゲームの中の話だと笑えたのは3週間前までだった。3週間前、俺等は最初の感染の兆候があった地域に派遣された。

そこで見たのは地獄であった。人が人を襲い、感染者が未感染者を食い散らかす様が展開されていた。

俺達はそこから何とか帰還した。それでまたこんな状況に巻き込まれているのだから、俺の不運も極まれり、といったところか。

え？3週間前のことを知りたい？・・・めんどうだからまた今度な。

今は生き延びるのに必死だからな・・・。

序 本州封鎖編（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。
なお、「3週間前の出来事」についてはおいおい語っていくつもり
です。

第1話 side 龍 「本州動乱 1」

俺は銃の狙いを化け物の頭部に移した。ドットサイトの赤い光点がヤツの頭に重なった瞬間銃を撃つ。

さっきからこんな事を何度繰り返したか、手持ちの銃弾も少なくなってきた。このままではヤツらの餌になるだけだ。

「おい中沢、堂々！移動するぞ！」

堂々は一発撃つてから

「どこに行くんだ？」

と返してきた。中沢もミニミニに給弾しつつ

「そうだ。他の奴らとはばらばらになっちまったし、第一もう弾が残り少ない」

そこで給弾を終え、また射撃を再開する。

俺達は初春基地に戻ろうとしていたのだが、運悪く細道の脇の炎上していた木造住宅が崩れ、俺達3人と他の兵士達とが分断されてしまったのだ。

だがそこにも化け物どもが集まってきてしまい、俺達は今燃える崩れた住宅を背にして戦っているわけで……。

俺はすばやく視線を動かし、何か脱出手段が無いかを探す。すると脇の鉄筋コンクリートの建物の窓が開いているのが見えた。しかし1人で上るには高い。

「おい堂々！」

「何だ？」

「お前がその建物の中に入れ。俺が手を貸す」

そういつて俺はさらに発砲。

「中に化け物がないだろうな？」

「いるならとつくに窓から顔出して歓迎してくれてるさ。時間が無い。中沢は援護してくれ。お前が最後になるが、いいか？」

俺はそういつて景気よく銃をぶつ放している中沢に聞く。

「いいさ、その代わりに俺が登るときしつかり援護してくれよ」

「よし堂々、登れ！」

俺は手の平を出し、堂々の足を持ち上げる。堂々が拳銃片手に中に入り、「クリア！」と言う声が聞こえた。

「よし堂々、俺を引っ張り上げてくれ！」

俺は先に堂々に小銃を渡し、引っ張り上げてもらった。

「中沢、来い！」

と中沢に言つと、最後に一連射して中沢が走ってきた。俺がミニミを受け取り、中沢を引っ張り上げる堂々を援護する。巨漢の中沢を引っ張り上げるのは大変そうだ。

そうしてなんとか中沢も登ってきた。

「よし、基地に行こう！」

と、俺達は建物から出た。

第1話 side 龍 「本州動乱 1」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第2話 side 優 「本州動乱 2」

少女が走っていた。いや、髪が短く少年に間違えそうだが……。

「あーもう、何でこんな事になっちゃったんだよー！」

そう言いつつ全力疾走している。

彼女の名前は秋村優^{あきむら ゆう}。高校1年生で初春市の私立女子校に通っている。

彼女は辺りを見回し、化け物がこちらを見ていないことを確認して、またダツシュする。

「とりあえず軍の基地にまで行けたら何とかなるんだろうけど……」

彼女はもう10キロ近く走っていた。そのせいで体力も残り少ない。

(長距離走の選手でよかった)。普通の人だったらとっくに倒れて化け物のエサになってるところだしね)

その時近くで炎上していた車が突然爆発した。彼女は驚いて転んでしまう。

爆発音が聞こえたのか、彼女の方へと化け物が近づいてきた。彼女はとっさに路肩に放置されている車の陰へと隠れる。

(どうしよう……。あいつら10体はいるよ。どうか気付かれませんように……！)

しかし化け物達は彼女に気付いたのか、人間とは比べ物にならない速度で近づいて来る。

(やばい、やばい、やばい!!どうする?)

その時突然後ろのコンビニのシャッターが開き

「早く入れ!!」

と声がした。何とか優が店に転がり込むと、またシャッターが閉じた。

「ありがとうございます、助かりました」

そういうと、優を中に入れた男が

「危なかったな」

と返してきた。その男は迷彩服姿で銃も持っていたので、優は

「もしかして、兵隊さん？」

と聞いた。しかもかなり若い。男は

「そうだ、俺は海兵隊第5師団所属、まき牧廉_{れん}3等陸曹だ」

と答えた。

「何でこんなところにいるんですか？」

「俺等の部隊がばらばらになっちまって俺1人で基地に戻ろうとし

てたところに、途中で民間人を拾ったんでな。しかもみんな疲れてるから、こうしてここで小休止してた所に君が見えたんだよ、少年」「ボクは男じゃありません！女です！」

そう、この子は一人称が「ボク」で、外見も男の子に見えるからよく間違われているのだ。

「あらそうなの、じゃあごめんよ少女」

そういつて牧はシャッターの覗き穴からまた外を警戒し始めた。優が周りを見回すと知っている顔がいくつもあった。中にはクラスメイトもいる。

その時シャッターがガンガン鳴り響いた。その大きな音に皆がおびえ始めた。

「マズイな……。」

「どうしたんですか？」

と優が聞くと、牧は無言で外を指さした。

「俺等の位置がばれた。外に10体ぐらいいる。今出たら確実にヤツ等の餌になるわな」

「じゃあどうするんですか!？」

皆が泣き始めたり、奥の壁際に寄ったりしている。

「俺1人じゃどうしようもならん、あいつ等がいなくなるまで待つか、誰かが来てくれる事を祈るしかない」

そう言つて牧は壁に寄りかかつて銃を構えた。

(助かったと思ったのに……。ホント、どうしよう)

優の疑問に答えてくれる人はいなかった。

第2話 side 優 「本州動乱 2」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第3話 side 龍 「本州動乱 3」 (前書き)

いやあ1日で150人以上の人に見てもらえました。皆さんに感謝
感激です。

第3話 side 龍 「本州動乱 3」

「何だ、ありゃ」

突然前を走っていた中沢が止まった。

「おい、どうした。早くしないと置いて行かれるぞ」

そう、さっき俺達の無線に入って来た通信は、01:00時に最後のヘリコプターが初春基地を飛び立つ、という物だった。

現在時刻は00:03時。基地までは歩いて30分。つまり急がないと余裕を持って基地にたどり着けなくなり、置いて行かれてしまう。

「いや、あれおかしくないか？」

そうやって中沢はコンビニを指差した。コンビニはシャッターが閉じられていたが、そこに化け物どもがうようよ集まってシャッターを叩いていたのだ。

「バーゲンセールじゃあるまいし、何で集まってんだ？」

堂々が首を傾げた。

「まさか、中に人が居たりするんじゃないか？」

俺はある事を思い出した。

（感染者は非感染者を襲う・・・）

出発前のブリーフィング、そして3週間前もそんなことを聞いたことがあったような……。

「おい、それじゃまずいな。どうする?」

中沢が聞いてきた。そんなこと決まっている。

「助けるしかないだろ。この距離で俺達はまだ気付かれてない。拳銃で仕留めちまおう」

俺達はSIG P226自動拳銃を取り出した。この拳銃はかつて採用していた9mm拳銃の後継で、装弾数が9+1発から15+1発まで増えている。

「じゃ、9体いるから仲良く3体ずつ分けよう。俺が右、中沢が真ん中、堂々が左のをやるう」

俺達はこっそり背後10メートルまで近づいた。

銃声が9回響いた。

第3話 side 龍 「本州動乱 3」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第4話 side 優 「本州動乱 4」(前書き)

なんともうアクセスが200件を越えてしまいました。本当にあり
がとつございます。

第4話 side 優 「本州動乱 4」

シャッターの外で銃声がした。それと同時にガンガンなっていた音が止んだ。

「誰か来たみたいだ」

と牧が呟いた。構えていた銃が下げられている。その直後、「誰か居るんですか!？」とシャッターの外から声が聞こえた

「やった!!!ボク達助かった!」

と優とその友達が喜んでいる横で牧はシャッターを開けた。そこには3人の兵士がいた。迷彩服は煤と血で汚れていた。優が外へ目を向けると9体の化け物が頭を撃ち抜かれて転がっていた。

「おおマッキー。また会えたな」

1人の兵士が言った。マッキーって牧のことか、と優は納得する。この人達と牧は友達のようなのだ。

「おお龍じゃねえか、お前も無事か!」

牧に話しかけたのは龍という兵士らしい。コンビニの中の人たちは立ち上がって「助かった」とか「死ぬかと思った」などと言っている。

優もクラスメイトの榊舞さかき まいに話しかけた。

「助かったね、舞ちゃん」

「うん、でもこれからどうするんだろう?」

そう、まだこの地獄のような場所から抜け出さなければいけないのだ。

「大丈夫だよ、あの兵隊さん達が安全な所に連れてってくれるよ」

優はそこであることを思い出した。

(あ、でもまだ学校に友達が残っているんだっ)

そう、優の何人かの友人は彼女達の高校「山之内女子高」に避難している。その友達とはさつきどうにか繋がったケータイで「今何とか鍵のかかる部屋に立て籠もっているから誰かにそれを伝えて欲しい」旨の事を頼まれていた。

(あの人達に頼んで誰か高校に行ってもらって助けてもらおう。そうして皆でここから逃げ出そう!)

優はそう思っていた。皆でここから出られると信じていた。

第4話 side 優 「本州動乱 4」 (後書き)

御意見、感想お待ちしております。

第5話 side 龍 「本州動乱 5」(前書き)

なんともうアクセス400を越えてしまいました。本当にありがとうございます！！

第5話 side 龍 「本州動乱 5」

「そつちは誰がやられた？」

と牧が聞いてきた。俺達と牧の所属分隊は違う。

「いや、幸い誰も殺されてない。重傷者が2人出たがな」

そう、何とか俺達の分隊には死者が出ていなかった。だが他の部隊では死者が出ているらしい。

「お前等の分隊は？」

「・・・中田と葉山がやられた。首を噛まれて出血多量で死んじまった」

「・・・そうか」

俺は中田と葉山に心の中で黙祷を捧げた。どちらも新兵で中田は人に優しく、葉山は子供好きで（別にロリコンという訳じゃないよ）いい奴等だった。

「んで牧、これからどうする？」

中沢が牧に聞いた。

「この民間人達を護衛しつつ初春基地に向かう予定だが？」

「そうだな、それが一番いいプランだな」

と堂々が頷く。そこに後ろで話を聞いていた少年？が

「あゝ、このまままっすぐ基地に行っちゃうんですか？」
と聞いてきた。

「ああ、そのつもりだが。何か問題あるか少年？」

「ボクは男じゃありません！女です！」

と返してきた。何だコイツ、今流行のオカマか？ニューハーフ志望の奴か？

「・・・どう見ても少年にしか見えないんだが。それに一人称がボクだと絶対男に見える」

「いいじゃないですか一人称なんて！！それにこの格好だと絶対女の子に・・・」

「・・・いや、見えないって」「」「」

全員が突っ込む。

すると少女一（俺は少年にしか見えないが）はいじけてしまった。

「ところで、まっすぐ帰ることに何か問題があるのか少女よ」

「・・・ボクの名前は秋村優です。ところで、ボクの友達が学校に立て籠もっているんですけど、助けに行ってくれませんか？」

第5話 side 龍 「本州動乱 5」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第6話 side 優 「本州動乱 6」

ボクは友達が山之内女子高に立て籠もっているのを伝えた。もちろん助けを求めている事も。

それを聞いた東と名乗った人は開口一番

「無理だな」

と答えた。

ボクは頭を殴られたようなショックを受けた。

「何ですか！？別にあなた達でなくてもいいんです。他の部隊の人たちをそこに・・・」

「・・・今山之内女子高が一番近いのは俺達だ。だがここから山之内女子高までは往復20分かかる」

何を言っているのかわからなかった。

「だから、ここから歩いていかなくたって、ヘリか車とかに乗っている人たちを行かせればすぐに・・・」

「もう車両部隊は撤退したんだ。ヘリ部隊だって今は避難民と兵を撤退させるのにフル活用してるんだ、使えるヘリは無い」

「じゃあ仕方ないから、ここから歩いて助けに行きましょう。時間はかかるけど何とかかなりますよ」

「・・・もう時間が無いんだ！！1時までには初春基地に着かないと俺等が置いていかれるんだ！ここから基地まで最短で20分かかる。女子高までは往復20分だ、あわせて40分かかる。対して残り時

間は50分だ。何かあるかわからないから50分以上かかるかもしれない。だから、行けない」

「……逃げるんですか？」

「……ああそつだ。本部からも撤退命令が下つた。だから……」

ボクは悔しくなった。希望の糸が次々断ち切られていくようで。

だから、こんな事を言ってしまった。

「人を助けられないくせに、何が軍隊ですか。本当に役立たずの人殺しですねあなたたちは！！」

第6話 side 優 「本州動乱 6」(後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第7話 side 龍 「決断 1」 (前書き)

何ともう700アクセスを突破しました。本当に皆さんのお陰です。この作品に出てくる地名や組織の詳細は自分の同じ作品『逃亡』に出しております。よろしければそちらもどうぞ。

第7話 side 龍 「決断 1」

「人殺し・・・!?」

俺は突然目の前の少女がそのような言葉を放つたのにショックを受けた。

『人殺し』・・・それは俺達兵士に対する侮蔑の名で、かつては自衛隊、今は軍に所属する人なら1度は言われたことがあるだろう。

『人殺し・・・!!何でお母さんを撃つたの!?何で殺したの!?』

ああ・・・、3週間前もこんな事を言われたな。その少女は自分も噛まれている事に気付いてなかったっけ。

だから、母親と同じく俺が頭を撃ち抜いたんだ。

3週間前の事がフラッシュバックしてくる。血の海、銃声、叫び声と怒号。一番多かったのが悲鳴と奴等の唸り声。

『撃て、早く撃つんだ!!』

『・・・くそ!!彼等は子供なのに!!』

『彼等はまだ人間じゃない!ためらうな、やらなきゃやられるんだ!!』

そう言っていた分隊長の足に、化け物が噛み付いた。足から血が出る。

『分隊長！！』

そこで俺はそいつらに向けて銃を向けた。その瞬間、化け物がこちらを向いた。

目が赤く染まり、肌は異様に白く、爪は尖り、口には牙が生えていた。

俺は一瞬撃つのを躊躇してしまった。その瞬間、化け物がすごい跳躍力でこちらへ跳んできた。俺は何も出来ず、跳んでくる様がスロモーションのように見えた。

だが化け物の頭は空中で弾けとんだ。分隊長が拳銃で撃ち落したのだ。

『ありがとうございます、分隊長』

だが、分隊長は無言だった。持っていた09式小銃をフルオートに設定すると、化け物に向けて撃ち始めた。

『撤退しましょう、分隊長。肩貸します』

『いや駄目だ東、俺も噛まれた。いずれ発症して奴等の仲間入りしちまう。だから俺は行けない』

『ですが、まだ治るかもしれ・・・』

『駄目だ、まだ抗ウイルス薬が出来てない。それにこの感染症は発症率ほぼ100%なんだ。治らんよ』

『ですが・・・！！』

『行け！東3曹！！これは命令だ。一人でも多くの民間人を連れて、ここから撤退するんだ！！』

『・・・了解。・・・分隊長はどうするんですか？』

俺は泣いていた、尊敬する分隊長を置いていくことに。それと同時に俺は自分を責めていた。自分があの時撃っていたら、分隊長は嘔まれずに済んだかもしれないと。

『1体でも奴等を道連れにしてやるさ。弾が後一発になったら・・・。オイ東、自分を責めるな。これからはお前が分隊長だ、部下をしっかり指揮して、間違わせるなよ』

そう言っ分隊長は射撃を再開した。

『分隊長、今までありがとうございました！！』

『ああ！先にあの世で待ってるからな！！』

俺は目の前の少女を見た。こいつが本当に誰かを助けたいのか、それを確かめたかった。

第7話 side 龍 「決断」 1 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第8話 side 優 「決断 2」 (前書き)

なんともう9000アクセス!!目が回りそうです。

第8話 side 優 「決断 2」

「・・・俺達が人殺しだって？」

堂々が呟いた。

「何で俺達が人殺しなんだ？」

中沢が聞いた。ボクはそれに答える。

「だって、助けを求めている人達を見捨てて逃げるんでしょ！大
体軍隊つて人の命を守るためにあるんでしょ！？なのに逃げるな
んて・・・」

「俺達が最優先するのは任務だ、いつも人命を優先する訳じゃない」

東がぞつとするほど低い声で言った。なんで人が大事じゃないんだ
！？

「じゃあその任務を止めて、助けに行けばいいじゃないですか。人
命は大事なんでしょう？なのに・・・」

「秋村さんよ、その理論でいけば俺達が人命のことを掲げればクー
デターを起こしてもいいと、そうなるんだがどうなんだ？」

「・・・」

「それに、もし俺達がその人達を救助しに行くとしたら。だがこの
人達はどうする？一緒に連れて行くのか？危険なのはわかっている
のに？」

「・・・」

「もし誰かが死んだら、お前は責任を取れるのか？」

何も言えなかった。それが悔しかった。ボクの目から涙があふれてきた。

「大体命令違反は最高で銃殺刑なんだがな、もし帰ってきてても俺らが憲兵隊に捕まっちゃう」

「おい東・・・」

堂々が何か言おうとしたが、東が手で制す。

「大体危険すぎる。途中で死ぬかもしれない。だがお前はそれでも助けに行きたいか？」

ボクは助けを待っているであろう友達の顔を思い浮かべた。皆大切な仲間だ、皆と一緒に生きたい！！

「お願いします、皆を助けてください！！」

ボクは土下座した。その時、東が微かに微笑むのが見えた。

第8話 side 優 「決断 2」 (後書き)

。どうか明日、晴のちテポドンのような事態になりませんように・・・

第9話 side 龍 「決断 3」

優が土下座した。まさかここまで必死なやつだったとは、少し驚いたくらいである。

それによって俺の行動も決まった。

「おいマツキー、お前フル装填してある弾倉^{マガジン}、何個残ってる？」

「5個残ってるが・・・、それがどうかしたのか東」

「2個くれ。俺もう予備が2個しかないんだ」

そうして俺は優の方を向いた。

「秋村さんよ、お前走るのは速い方か？」

泣いている優が顔を上げた。

「・・・はい、陸上の選手ですけど・・・」

これは好都合だ。

「おい東、まさか・・・」

堂々がはっとしたように言った。

「・・・何？何するんですか東さん？」

秋村はまだ気付かないようだ。まあいい、教えてやろう。

「脱走する。んでお前の友達を助けに行く」

優はこちらを驚いたような目で見ている。

「・・・本当にいいんですか？」

「ああ、女に泣かれて土下座までされちゃあ、男として黙ってられん。それに・・・」

先ほどフラッシュバックしたことを思い出す。

「分隊長に民間人を1人でも多く助けろと言われたしな」

優が泣き止んでいた。

「ありがとうございます!!」

「東、俺も行く」

そう言ったのだ堂々だ。

「俺も」

「俺も行かせてくれ」

中沢と牧も言ったが俺は

「駄目だ、お前等は民間人を基地まで連れてってくれ」

「だが・・・!!」

「頼む、この人達を連れて行くのは危険すぎる」

そう言って俺は頭を下げる。それを見た中沢が

「・・・わかったよ、但し、絶対死ぬなよ」

と言った。牧と堂々も

「死んだら殺すぞ」

「お前は後先見ずに突っ走るからな、無茶すんなよ」

と声をかけている。

さあ、もう時間だ。

「さあ、皆出発だ!!」

第9話 side 龍 「決断 3」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第10話 side 優 「決断 4」 (前書き)

あと少しで10000アクセスです!!こんな小説を読んでも、
本当にありがとうございます。

第10話 side 優 「決断 4」

ボクは東さんと行動をともにすることになった。その東さんは、仲間と色々打ち合わせている。

その後牧さん達は基地へと出発した。基地に行く人たちには舞ちゃんもいる。

「優、死なないでね」

「大丈夫、皆で帰ってくるよ!!」

そう言つてボクたちは別れた。すると東さんが地図を引っ張り出してボクに見せてきた。その地図には×マークがたくさん書いてある。

「何ですか、この×マーク？」

「これはさつき偵察ヘリから聞いた、車が燃えてたり化け物どもがたくさん居たりして通れそうに無い道だ。だから俺たちはこう・・・」

「そう言つて東さんは、かなり蛇行した道を指さした。」

「こういった道を通ることになる。まあ徒歩で走つてぎりぎり往復40分てどこか。だから車を調達して行けるところまで行く。そうしてさつさとお友達を助ける。立て籠もってるのは何人くらいだ？」

と聞かれた。

「30人くらいつてさつき言つてました」

「じゃあ帰りは徒歩だ。10分で高校に着かないと」

そう言っ
て東さんは
ドアが開け
っぱなしに
なっていた
車にもぐり
込んだ。

「よし、この車キーが付いたままだ！燃料ガソリンも充分」

「運転できるんですか？」

「ああ、一応な。まあ道がこんなだから荒っぽい運転になるかもし
れんが。ほらさっさと乗れ」

ボクは東さんに手を引かれて車に乗り込んだ。

「よし、行くぞー！！」

車は猛スピードで走り出した。

第10話 side 優 「決断 4」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第11話 side 龍 「決断 5」 (前書き)

1800アクセスを突破しました。皆さんありがとうございます。

第11話 side 龍 「決断 5」

「そういえば、いつからこの状態になってるんですか？」

優が頭を押さえつつ質問してきた。路上には色々なものが散乱し、全速力で運転しているの中はカクテルシェイカーのような状態になっていた。優がせめてシートベルトを締めようとしていたが、襲われてもすぐ脱出できるように俺が締めさせていない。よって二人で頭を天井にガンガンぶつけている。

「ん、この状態って？」

「あの化け物達がいっつ出てきたかですよ。確か3週間前にも・・・」

「ああ、こいつらが出てきたのは3週間前だ。だがこんなにたくさん現れたのは昨日からだ」

見れば路上に頭を粉碎されたり、体が真っ二つになった化け物どもの死体が転がっている。俺はそれを避けつつ運転する。

「何か知ってんですか？三週間前の事」

「ああ知っている、というより実際俺もそこにいた」

優がまた頭をぶつけた。コイツ馬鹿にならなきゃいいが・・・。

「・・・教えてくれませんか、3週間前のこと」

俺の頭に銃を乱射していた分隊長の最期の姿が思い出される。もちろんその時戦死した仲間達の顔も。

「・・・3週間前、俺達はある任務を言い渡された。派遣地域は東

京・マリンシティ。あの埋め立てで出来た島のような場所だ。そこで今回のような事態が起こった・・・」

俺達海兵隊は全防衛軍の中でもっとも実戦経験がある。竹島奪還作戦、中国動乱時の邦人撤退作戦、アフガニスタン復興支援の派遣。だから俺達を選ばれたんだろうな。

3週間前

俺達はブリーフィング時にある映像を見せられた。それには何匹かのネズミが映っていた。ただ様子が少しおかしい。ズームするとそれがわかった。

まず全身の毛が無い。そして目が異様に赤い。爪がとても尖っていて、牙が生えていた。

その次は別の映像だ。何匹かのネズミにある注射が打たれた。そして早送り。そうするとさっき見た映像のヤツになった。

それでまた別の映像。何もしてないネズミとさっきのおかしいネズミが仕切りで分けられている。

その仕切りが取り去られると、俺達は目をむいた。なんとあのネズミが普通のネズミを食い始めたのだ。見ていたヤツには目をそむけるヤツもいた。

そして最後の映像。体のどこかをおかしいネズミに噛まれたネズミ

が数匹クリアケースに入っていた。そして早送り。
そのネズミもさっきのおかしいネズミになってしまった。

俺達は絶句した。そして司令が

「これが、今マリンシティに起こっている事態だ。但し、人間に起こっているがな」

と言った。

第11話 side 龍 「決断 5」 (後書き)

さっきの『飛翔体』に関する誤報にはヒヤリとしました。これを機
に、MDシステムの整備をしっかりと欲しいものです。

第12話 side 龍 「三週間前 1」 (前書き)

なんと2500アクセスを突破していました。本当にありがとうございます！
ざいます！！

第12話 side 龍 「三週間前 1」

映像を見せられた後、俺達はUH-60JAヘリコプターで空の上
にいた。

俺達に与えられた命令は

- ・マリンシティ内部の住民救助、誘導
- ・上の二つの終了次第、マリンシティと本土を繋ぐ唯一の橋の検問
所で警備、封鎖を援護

この二つである。

「よし皆、今まで行ったような事の無い任務だ。だが、俺達は海兵
隊強襲偵察隊だ！どんな事もやってやろう！！皆で仲良く帰ってく
るぞー！！」

きやま せいじ
木山清二少尉が声を張り上げた。彼は俺達が所属する海兵隊強襲偵
察隊、チーム3分隊の分隊長である。

海兵隊強襲偵察隊とは、自衛隊改編によって防衛軍と共に新たに創
設された海兵隊の精鋭部隊である。前身は西部方面普通化連体だっ
たので、精鋭中の精鋭が揃っている。主な任務は、名前の通り強襲、
偵察、潜入、破壊工作、そして対テロ特殊作戦である。

俺は2年前の中国動乱時に実戦を経験した。その後、強襲偵察隊に
スカウトされた。俺の他にもその時一緒の部隊だった堂々、中沢、
牧がスカウトされている。

「よし、そろそろ降下地点だ！全員注意しろ！」

機体のドアからロープが降ろされ、隊員が次々とロープ降下していく。俺が降下すると、先に降りた隊員達が円形に周囲を警戒していた。

俺も折り畳んでいた09式小銃の銃床ストックを展開させ、折りたたみ式兼伸縮ストックを最大位置に伸ばす。

この09式小銃は2009年に採用された新型小銃で、内部機構はAK-47に似ているため故障しにくい。ハンドガードにはレイルが付けられ、沢山のアクセサリが付けられる。使用弾は5.56mm x 45 NATO弾。

「よし皆、もう一度言っ！」

最後に降下した分隊長が言った。

「噛まれるなよ!!もし噛まれたら・・・」

その先は言わなくてもわかっている。俺達はブリーフィングの最後にこう言われた。

『もし噛まれるような事があつたら、即座に自決せよ。噛まれた者は、即射殺せよ。だが諸君が誰一人欠けずに戻ってくると信じている。以上』

俺達の部隊の任務上、ばれたら自決しなきゃならない任務は沢山ある。だから死を常に覚悟している。だが本当は誰も死なないのが一番だ。

「よし、移動だ!!」

俺達はおちこちに煙が立ち昇る地獄へと突入していった。

第12話 side 籠 「三週間前 1」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第13話 side 龍 「三週間前 2」

俺達A分隊が大通りに出た時、そこは悲惨な事になっていた。あちこちで車が玉突き事後を起こし、炎上し、路上には色々な物が散乱していた。

俺達はそこで大量の血痕を見つけた。但し死体は余り無かったが・

「やばいな・・・」

分隊長が呟いた。

「何がですか？」

「おそらくここには生存者はほとんどいない。多分橋の方に向かったんだろう。んで、あの化け物どもも生存者を追っている」

隣では時雨恵一曹長しぐれ けいいちが死体の検分をしていた。

「こりやすごい。皆首を一噛みされてる」

その死体を相場裕也あいはま ゆうや3曹が詳しく調べている。彼は衛生要員で、生存者が感染してないかを調べる重要な人物だ。

「首を噛まれたことにより動脈がやられています。こいつはおそらく失血死が死因です。んでこいつは」

と別の死体を指さした。その死体は首の部分の肉がほとんど無い。

「喉を噛み切られています。それにより呼吸が出来なくなったのと失

血が原因で死んだんでしょ」

「喉を噛み切るって、すごい顎の力だな」

時雨曹長が死体から目をそらしている。

「やはり、あのウイルスが人を凶暴化させて、力が何倍にもなるのは本当らしいな」

分隊長が呟いた。すると本部から無線が来た。

『えー、救助の要請です。さっき何とか電話が繋がったそうです。救助要請者は12人。今東上証券ビルの三階に立て籠もっている模様で、ドアの外には例の化け物がいるらしいです』

東上証券ビルは目と鼻の先だ。必然的に救助に行くのは俺達になる。

「よし皆！！さっさと行ってさっさと帰るぞ！そして早く基地に戻って酒でも飲もう！！」

「分隊長、それ死亡フラグ・・・」

中沢が言った。皆が笑う。

そう、俺達はこういう時のために訓練を積んできた。その成果を発揮する時だ。

「よし、ゴーゴーゴー！！」

第13話 side 籠 「三週間前 2」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第14話 side 龍 「三週間前 4」 (前書き)

3600アクセス突破!!ありがとうございます。

第14話 side 籠 「三週間前 4」

東上証券ビルにはすぐに着いた。東上証券ビルは12階建てのビルで、中には沢山の事務所が入っている。

ビルの1階、2階には誰もいなかった、死体以外は……。

だが、化け物もいなかった。

3階に着いて、散弾銃ショットガンを構えた斥候兵が急に停まった。

「どうした？」

木山分隊長が訊いた。

「あそこが立て籠もってる場所だと思います」

と斥候兵が指さした。暗視装置ナイトビジョン越しの緑色の視界の向こうに、何体かの化け物がドアの前に集まっているのが確認できた。

「よし、閃光手榴弾フラッシュバンを使って無力化させた後、仕留める」

と分隊長が閃光手榴弾を取り出し、投げた。俺達が物陰に隠れた後、一瞬閃光と大音響が発生した。

閃光手榴弾は光と音によって相手を数秒の間ショック状態にさせる。並の人間では到底耐えられない上、化け物は光に弱いという性質をもっていた。

物陰から出ると、化け物どもがのた打ち回っていた。俺達はそいつらに向けて消音器付サプレッサーの小銃を向けた。

「悪いな、成仏してくれよ」

そう言っつて引き金を引いた。こいつらはもともと人間だったらしい。だが今は化け物だ、さっさと死なせてやる方がこいつらも本望だろう。

俺達に人を殺す事への迷いは無かった。俺達は全員何らかの形で実戦を経験しており、人を殺したことがある隊員が多い。

「誰かいるんですか!？」

と分隊長が声を張り上げる。するとドアの向こうから

「助けに来てくれたんですか!？」

との声が聞こえた。

「おい長野、中沢、日村。お前達は4階を警戒しろ」

と分隊長が命令する。分隊長が3人が走って行ったあとドアを開けようとしたが、化け物が馬鹿力で叩きまくっていたのか、ドア枠ごと歪んで全然開かない。

「仕方ない、ドアを爆破する。おい陣内……」

爆発物のエキスパートの陣内二曹がドアに爆薬を仕掛ける。

「ドアから出来るだけ離れてください!!」

中から「わかりました!!」と声が聞こえた。俺たちもドアから離れておく。

「爆破!!」

ドアが吹っ飛んだ。そして俺達は部屋の中に入る。

「動かないで下さい！！感染していないか確認します！」

部屋にはサラリーマンやOLが20人いたが、皆おびえた顔になった。まあ感染は死だと思っているのだろう。・・・あながち間違いないが。

「あなたは大丈夫。あなたは・・・」

と相場3曹が一人一人瞳孔が通常より開いていないか確認している。感染者は暗闇でも目が見えるよう瞳孔が開いてしまう。そして目も充血とは言えないほど真っ赤になる。

それを機械で調べれば感染者かどうかすぐにわかるという訳だ。

「分隊長、感染者はいません。全員シロです」

部屋にいた20人を調べ終わった相場3曹が報告する。

「よし、全員移動だ。ヘリに乗せて本土まで連れて行く」

そうすると分隊長は4階を警戒していた3人を呼び戻す。そして俺達が行先して経路を警戒し、その後を本隊が民間人を囲んで護衛する。

そして東上証券ビルの近くの公園まで民間人を護衛した。そこには既にヘリが着陸して待機していた。

「本当に、本当にありがとうございます！！」

民間人の1人が代表して大声で御礼を言っている。まあ回転するメインローターの音で余り聞こえなかったが。

「いえいえ、お体に気をつけて!!」

分隊長も大声で返している。

ヘリが飛んでいった後、無線が入った。

『救助要請があつた地点には、全て部隊が救出に向かいました。あなた達は橋の封鎖の支援と警備に向かつてください』

「やれやれ、さっさと終わらせて帰ろう」

分隊長が呟いた。そこで中沢が

「そつえば分隊長、前俺に賭けで負けたからおごってくれるんですよね？」

と思い出したように言った。

「げ、まだ覚えてやがったのか。お前は沢山飲むからおごるとんでもない事になるんだがな・・・」

「約束を守るのが男です。そして食べ物事は俺は絶対忘れません」

と中沢。その言葉に皆が笑う。

「よし、さっさと終わらせよう!!」

そして俺達は別のヘリに乗り込み、橋へと向かった。

この時までには皆が楽勝な任務だと思っていた。だが違った。この任務は俺達が今まで行ったどんな任務よりも難しく、戦死者が過去最高という事態になってしまったんだ……。

第14話 side 籠 「三週間前 4」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第15話 side 龍 「三週間前 5」(前書き)

4700アクセス突破!!!本当にありがとうございます。

第15話 side 龍 「三週間前 5」

本土とマリンシティを繋ぐ唯一の連絡橋には沢山の人がいた。ぎゅうぎゅうのすし詰め状態で移動もほとんど出来なそうだ。もしかしたらマリンシティの生存者全員がここに押しかけているのかもしれない。

俺達のへりは、橋の根元に出来た第一検問所の近くに着陸した。ここも通勤電車以上に混雑している。

「よし堂々、お前と林は監視塔に登っていつでも狙撃できるようにしろ。他は全員市民の検査を行う！」

堂々と彼をサポートする観測手スポッターの林三曹が臨時に設けられた監視塔に走っていった。俺達は第一検問所で警備していた一般部隊の一部と交代する。

「はい、通っていいですよ。次の人・・・」

と言う声があちこちから聞こえてくる。ちなみにここで検査に引っ掛かると、別の場所に設けられた隔離所に連れて行かれ、再検査される。そこでも引っ掛かると隔離所に隔離されてしまう。

人々の顔は皆恐怖に歪んでいた。自分は大丈夫なはずだという願いと、周囲の人が感染してないかという疑問が混ざって皆興奮している。

「ちょっと待ってください、あなたは感染している恐れがあります！」

市民の検査をしていた相場が言った。相手は20代くらいの女性で、周囲の人が一気にその女性から離れた。俺達はその人に注意を巡らせる。

「えっ・・・、うそでしょ！？もう一度しっかり調べてください！」

女性が叫んだ。周囲の人達は

「感染するぞ・・・。注意しよう」

「えっ亜矢子、嘘でしょう!?!」

「やっぱりな、あいつは怪しいと思ってたんだ」

と口々にひそひそ話している。

相場はもう一度目を機械で調べる。

「あつ、大丈夫です！あなたは大丈夫です！！通ってください」

どうやら誤認だったようだ。まあ今日配備されたばかりの機械だからな。俺達もその女性への注意を解く。その女性は逃げるように走っていった。

そんなんでおよそ10分が過ぎた。俺は感染者が何人かいると思っていた。未発症者も多数いるのではないかと思っていたが、どうやら杞憂だったよう。

「待ってください、もう一度検査します！」

相場が怒鳴った。そう言われた10代の高校生だと思われる少女は、携帯をいじっている。今携帯が使えるかわからないが。

また誤認かもしれない。さっきだって4人目の誤認者が出たしな。

だが、状況は違った。

「やっぱり……」

相場が哀れむ目を向けた。

「彼等に付いて行ってください!!」

と相場が怒鳴る。相場が俺に目で知らせた。

この人は感染している。

俺ともう1人の隊員がその少女の脇に立った。何かを感じ取ったのか、周囲の人間が一斉に少女から離れる。

「え？は？何？どういうこと？チヨー意味わかんないんだけど」

その少女は何も気付いていない。俺はその少女にささやく。

「あなたは感染している恐れがあります」

瞬間、少女の顔が絶望に歪んだ。

「え？嘘!!ウチは感染してない!!大丈夫!!だからこの先に通して!!」

感染という言葉が出た瞬間、周囲の人がさらに遠く離れた。その少女の友人と思われる人たちも。

「ウチは感染してない！！大丈夫！！」

「嘘だ！！じゃあその足の傷は何なんだ！！」

と少女の後ろにいた中年男性が喚く。周囲の視線が少女の足に集まる。

傷があつた。何かで引つかいたような傷が。

「違う！これは枯れた葉で切つて」

「そう言えばあんた、さつき感染者の集団に会って、それを何とか抜け出した時あんた言ったよね。何かで足を切つたって・・・」

俺ともう1人の隊員が少女の腕を掴む。そうすると少女は暴れ始めた。

「ねえユウジ、ウチ感染してない。だから助けて・・・」

と彼氏らしき少年に助けを求める。だが彼はさらに少女から離れる。

「ごめん・・・」

と少年が呟くのが聞こえた。

「ユウカ、ウチら親友だよな？だからこの人達に言って。ウチは感

染してないって・・・」

「やだ！！あんた感染したんでしょ！？だったらあの化け物の仲間になるんでしょ！？私だって襲われるのは御免よ！！！」

ユウカと呼ばれた少女が怒鳴る。それをきっかけに、周囲の人々から非難がおこる。

「化け物は死ね！！！」

「こつちに来るな！！！」

「さっさと殺せ！！！」

それを聞いた少女はさらに暴れ始めたが、俺達があつちりガードしているので動けない。もちろん俺達は噛まれたり引つかれたりしないよう注意しているが。やがて少女は静かになった。だが俺達が隔離所に連れて行くこうとすると

「やだ！！ウチまだ死にたくない！！！」

と喚いて隣の隊員を突き飛ばした。不意を突かれた格好になった俺達は、一瞬対応が遅れた。少女は検問をしていた相場を突き飛ばし、検問所の外に出た。

「止まれ、止まるんだ！！！」

と1人の隊員が警告し、威嚇射撃をする。だが少女は止まらない。

「まずい、あいつが第二検問所までの間で発症したら・・・」

相場が立ち上がりつつ言った。足等を撃って動きを止めるにしても、ここから少女までの射線には沢山の人が入り込んでいる。

「そつだ、堂々！上から狙撃できないか！？」

分隊長が無線に向かって怒鳴る。

『少し待ってください。まだ撃つには人が多い』

「足を狙えよ！それと皆は手錠を用意しろ！しばらく拘束する！」

何人かが第二検問所に向けて走り出す。検問所に停まっていた、軽装甲機動車まで急発進で出て行く。

『もう少し……。よし……。今だ！！』

銃声が響く。それと同時に少女が足から血を流して倒れる。

「拘束しろ！！」

分隊長の命令で、隊員が少女に手錠をかける。人権団体が見たら即抗議しそうな光景だが、この際手加減できない。

「ヤダ！ヤダ！連れてかないで！！」

「大丈夫です！少し隔離するだけです！！」

「ウチ知ってるもん！感染したら奴らの仲間になるんですよ。連れてって殺すんでしょ！？お願い連れて行かないで……」

だが隊員はお構い無しに装甲車に乗せる。少女は最後まで何かを喚んでいたが、ドアが閉まると同時にその声も聞こえなくなった。

やがて装甲車が隔離所に向けて発進した。

「あれで良かったのかな・・・？」

分隊長が呟いた。

「仕方ありません。拘束せずに発症したら、被害がさらに酷くなっていたかもしれません」

副官の時雨曹長が言った。その通りだ。少女には悪いが、俺は噛まれたら自決を選ぶ。化け物になりたくないしな。

俺達は検問所に戻った。

だが数分後、最悪の事態が起こった。

第15話 side 籠 「三週間前 5」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第16話 side 龍 「三週間前 6」

銃声が響いた。しかも威嚇射撃のものではなく、何発も撃っている。

「どうした！？状況を！」

分隊長が訊くと、すぐに答えが返ってきた。

『こちら01小隊の伊藤三尉！橋の入り口に多数の感染者！！その数約50！！』

撃っているのは橋の入り口の警備部隊のようだ。

「持ちこたえられるか？」

『この数なら大丈夫です！犠牲者もまだ出ていません！』

「了解！一体も通さないでくれよ！」

だが市民は、銃声を聞いてパニックを起こしていた。彼らは列を乱して、検問所に一斉に押し寄せる。

「おい！通せよ！！」

「お願い！！早く通して！！」

「通せって言ってるんだろ！！」

このままでは検問所を突破されてしまうかもしれない。よって分隊長はホルスターから拳銃を抜き、上に向けて撃った。

「並んでください！！大丈夫です。あなた達が脱出するまで我々が

護衛します。だから並んで!！」

その言葉と銃声に市民がまた並び始める。だが皆の顔には恐怖の色が浮かんでいた。

そして検問所に並んでいる市民が後200人くらいになった時、それは起こった。

「ねえママ、大丈夫？」

俺がそちらを向くと、幼稚園生くらいの少年と、その横で膝をついて俯いている母親の姿が見えた。

「どうしました？」

若い隊員の1人が駆け寄って訊いた。

「ママがさっき疲れたって言って、それからこうなの」
少年が答える。

「大丈夫ですか？肩貸しましょうか？」
「……………」

母親は答えない。隊員がその顔を上げさせると

次の瞬間、俺の目に首筋から血を噴き出して倒れる兵士と、その首に噛み付いている母親の姿が映った。

「感染者だー!!」

誰かが言った。その間に化け物と化した少年の母親は、別の市民の首に噛み付いていた。

「ウワーツ!!」

その市民は化け物を蹴り飛ばした。噛まれた傷は大したことはないらしい。だが次の瞬間、そいつも発症した。

「撃てーっ!!」

隊員が次々に発砲する。だが動きがすばやく、当たらない。その間にもどんどん発症者が増えていく。

「来るな、来るなー!!」

「助けて!!」

「足が!!」

そして市民の何人ががすし詰め状態の検問所を突破した。

「くそ!堂々、発症者を狙撃しろ!!」

『駄目です！！一般人との区別が出来ません！』

他の隊も同じようなものだった。皆撃つ事が出来ない。そして、隊員の犠牲も増えていく。

「分隊長！時雨曹長が・・・！！」

曹長は発症していた。奴らと同じく誰かに噛み付いている。

「すまない、時雨」

分隊長は小銃を時雨曹長に向けて撃った。彼の頭が半分吹き飛び、時雨曹長は動かなくなった。

彼は分隊長の右腕だった。そんな彼を撃つのは分隊長も辛かっただろう。

「・・・クソツ！おい本部！指示を求む！！発症者と一般市民の区別がつかない！！」

『後退してください！！早く！！他の部隊も後退しています！！』

「了解！！」

見ると検問所にはもう市民はいない。突破されてしまったのだ。

「おい皆！後退だ！後退しろ！！」

「ですが市民は！？」

「もう誰が発症してないかわからん！！早く後退しろ！！」

見れば多数の市民が後ろを逃げ惑っている。だが俺達にはどうする事も出来ない。誰が感染しているかわからない以上、むやみに発砲できない。

「・・・クソ!!」

俺は叫んでいた。そして、第二検問所へと走り出した。

第16話 side 籠 「三週間前 6」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第17話 side 籠 「三週間前」7 (前書き)

「三週間前」編は次回で終了する予定です。

第二検問所までやって来た俺達だが、人数は最初の10人から5人へと減っていた。他の部隊も同じようなもので、今動ける兵士は50人くらいのものである。

第二検問所も沢山の人が殺到していた。健康と診断された人達が次々に車両に乗って脱出しているが、まだ何百人も検問を通過していない。

そんな中、驚くべき命令が入ってきた。

「……何！？ここを空爆する!？」

「……その通りだ。既に爆装したF-2が上空に待機している。

これ以上感染を広めるわけにはいかない」

「ですが、ここにはまだ大勢の市民が残っています。彼らを見捨てるんですか!？」

分隊長が本部の司令に向かって食い下がる。だが返ってきた返事は

「……そうだ。誰が感染しているか解らない以上、彼らも一緒に・

・

「ですが……!」

「木山三尉!!これは命令だ!!……それに、君達を死なせたくない」

「……了解」

分隊長は無線を切った。

「……全員移動するぞ。撤退するんだ」

だが、ここから検問を抜けるには何百人ものすし詰め状態の市民の中を通らなければならない。大丈夫だろうか。

「自分としてもこれは承服しがたい命令だ。だが、ここで感染を食い止めなくては死んだ奴らに顔向けできない」

既に動ける部隊は撤退を始めている。検問所の警備部隊が最後に撤退するようだ。

その時、検問所に並んでいる市民達の真ん中辺りで発症者が出た。悲鳴と怒号があがり、検問所から市民が遠ざかった。沢山の市民が今は誰もいない第一検問所の方へ向かって走り出す。

「よし移動だ！今なら検問所まで通れる！！」

そうとうと分隊長が走り出した。俺達も続いて走り出す。

検問所まで後100メートルだろうか。逃げ惑い、ばらばらな方向へと逃げる市民をかき分けて俺達は走った。

その時後方で悲鳴があがった。第一検問所を突破した化け物がここまで来たのだ。俺達は前後を化け物に挟まれる格好となった。

その時、俺は転んでしまった。足に痛みが走る。どうやら捻挫したらしい。何とか走れるが、他の隊員に次々抜かれていく。

「おい東！大丈夫か！？」

分隊長が俺に気付いて戻ってきた。他のやつらに「先に行け！！」と怒鳴ってから、俺に肩を貸す。

「……すいません、迷惑かけて」

「何言ってるんだ。しゃべる暇があったらさっさと走れ」

検問所まで後50メートル。

そこで、俺は分隊長を死なせてしまった。

第17話 side 龍 「三週間前 7」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第18話 side 龍 「三週間前 8」

検問所まであと50メートルというところで、俺達は車の陰に隠れていた20人くらいの小学生の集団を見つけた。

「おい、早く逃げるんだ君たち！」

だが彼らは動かない。俺達は彼らが普通の小学生に見えたので、近づいた。

彼らが顔を上げた。

目が赤く染まっていた。

俺と分隊長はとっさに銃を構えた。だが分隊長は肩を組んでいる俺が邪魔で上手く構えられない。

俺は彼らが子供に見えたので、撃つ事を躊躇ってしまった。

(クソ、いつもは撃てるのに、何でこういう時に子供が・・・)

俺は子供は殺したくない。だが彼らは感染者だ。

「撃て、早く撃つんだ!!」

「・・・くそ!!彼等は子供なのに!!」

「彼等はもう人間じゃない!ためらうな、やらなきゃやられるんだ!!」

そう言っていた分隊長の足に、化け物が噛み付いた。足から血が出る。

「分隊長！！」

そこで俺はそいつらに銃を向けた。その瞬間、子供であつただろう化け物がこちらを向いた。

目が赤く染まり、肌は異様に白く、爪は尖り、口には牙が生えていた。

やはり俺は、一瞬撃つのを躊躇してしまった。その瞬間、化け物がすごい跳躍力でこちらへ跳んできた。俺は何も出来ず、跳んでくる様がスローモーションのように見えた。

だが化け物の頭は空中で弾けとんだ。分隊長が拳銃で撃ち落したのだ。

「ありがとうございます、分隊長」

だが、分隊長は無言だった。持っていた09式小銃をフルオートに設定すると、化け物に向けて撃ち始めた。

「撤退しましょう、分隊長。肩貸します」

「いや駄目だ東、俺も噛まれた。いずれ発症して奴等の仲間入りしちまう。だから俺は行けない」

「ですが、まだ治るかもしれ・・・」

俺は知っていた、分隊長は助からない事を。そして化け物の仲間になつてしまうことも。

だが、それを認めたくなかった。

「駄目だ、まだ抗ウイルス薬が出来てない。それにこの感染症は発症率ほぼ100%なんだ。治らんよ」

「ですが……!!!」

「行け！東3曹！！これは命令だ。一人でも多くの民間人を連れて、ここから撤退するんだ！！」

「……了解。……分隊長はどうするんですか？」

俺は泣いていた、尊敬する分隊長を置いていくことに。それと同時に俺は自分を責めていた。自分があの時撃っていたら、分隊長は嘔まれずに済んだかもしれないと。

「お前が脱出するまで援護する。1体でも奴等を道連れにしてやるさ。弾が後一発になったら……。オイ東、自分を責めるな。これからはお前が分隊長だ、部下をしつかり指揮して、間違わせるなよ」

そう言っ分隊長は射撃を再開した。

「分隊長、今までありがとうございました！！」

「ああ！先にあの世で待ってるからな！！」

俺は検問所へと足を引きずって走り出した。

検問所にはわずかな人達が残っていた。そこで俺は、女性の親子を見つけた。まだ発症者ではないようだ。

「どうしたんですか？」

「お母さんがあいつらに……」

腕を見せてきた。

噛まれていた。

「・・・何分前頃に噛まれたんですか？」

「5分くらい前に・・・」

この感染症は、噛まれた場所が頭に近いほど発症が早くなる。最短で噛まれた瞬間、最長で30分位だ。

腕を噛まれると、大概5分以内に発症する。この人はもういつ発症するか解らない。

俺はその子の母親の目を見た。かなり赤く、瞳孔もだいぶ開いている。

危険だ。俺はそう判断し、拳銃を抜いて母親の頭に向けた。

一瞬迷ったが、また過ちを犯してはいけない。俺は心を鬼にして、

撃った。

俺が撃つ直前、彼女は俺に歯を剥いた。撃つ直前に発症してしまっただろう。

少女は頭が半分無くなっている母親だったものを見て、呆然としていた。

そして口を開いた。

「人殺し・・・！！何でお母さんを撃つたの！？何で殺したの！？」

俺は構わず、少女の腕も見ようとした。

「ねえ、何で!？」

「もう発症していた。そうしたら君もやられてた」

「でも、頭をいきなり撃つ事無いでしょう!？」

この子はこの感染症について何も知らないらしい。

「じゃあ警告すりゃ良かったのか？急所を外して撃てと？そんな事は意味無い。発症したら理性意なんて無くなる。手足を撃つてもやつらはまだ攻撃しようとする。普通は動けなくなるだろ」

少女の腕を見た。

やはり噛まれていた。

「アンタも噛まれている。何分前に噛まれた？」

「お母さんと同じ頃に・・・」

拳銃を少女の頭に向ける。その瞬間、少女の瞳が恐怖の色に染まった。

「・・・何で？何で銃を向けるの?」

(すまない・・・、成仏してくれ)

撃った。

少女は最後まで自分が危険な存在になった事に自覚していなかった。ただ、感染した事による絶望を感じる事が無かったのが幸이었다。

俺は無人となった検問所を抜けた。周りに人影は見えない。

「おーい東！！早く来い！！」

そこには堂々、中沢、牧が待っていてくれた。隣には装甲車の姿も見える。

その時俺は1人の少女の姿を見かけた。外傷は無く、感染している様にも見えない。

「君！早くこっちに来るんだ！！ここは危険だ」

少女は誰かを待っているようで、その場から動こうとしない。

「でも、まだ弟が来てないんです！」

先ほどから上空に戦闘機が飛来しているようで、ジェットエンジンの爆音が響いている。そろそろ空爆が開始される頃だ。

「諦めるんだ！君も死ぬぞ！早く来い！！」

俺はそう言っつて少女の腕を引っ張る。

「イヤ！イヤ！！正夫！！」

そういつて戻ろうとするが、俺はがっちり腕を掴んで装甲車へと押し込む。

俺も乗って、装甲車は急発進した。

少女はまだ喚いていた。だがジェット機の爆音が大きくなっていくのを聞いて黙った。

『こちらサンダー1。目標を確認。我に続いて攻撃を開始せよ』

無線機から空軍のF-2攻撃機の無線が聞こえた。

『サンダー1、照準完了。気化爆弾投下！』

『こちらサンダー2。投下！！』

『サンダー3、投下』

『サンダー4、投下した！』

一斉に爆弾を投下したようだ。その時俺達は、何とか爆撃予定区域から脱出した。

『・・・3、2、1、着弾！！』

その瞬間、空が赤く染まった。

第18話 side 籠 「三週間前 8」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第19話 side 優 「救出 1」 (前書き)

7700アクセス突破しました。これからも頑張ります。

第19話 side 優 「救出」1

「三週間前にそんなことがあった。お前もテレビで見ただろ」

東さんが訊いて来た。焦土と化した町に、焼け焦げた橋。焼夷弾やら気化爆弾やら何やらが投下されて・・・といった話を評論家が言っていた。あの映像を始めて見た時、ボクは特撮映像か外国の事かと思っていた。

確か、深夜にも関わらずNHKが視聴率50パーセントを越えていたような気がする。

「あの後色々大変だったんだぜ。橋を報道陣から封鎖するためにまた出動したりしてな」

確か橋のアップの映像の後、お花畑の映像も流れていた。その事を話すと

「ああ、アレは民間の取材ヘリが制限空域を破って侵入してな、威嚇発砲までしたけど引き返さなくて。それでそのヘリが爆風で圧死した死体やら、食い散らかされた人の一部やらを映したらしい」

この人も、色々苦労しているらしい。そう思うと、さっき人殺しと聞いた事が恥ずかしくなった。

「・・・すみません、何も知らないで人殺しなんて言って」

「ん？ああ気にするな。俺達は確かに人殺しが仕事だし、いまさらそれを否定することは出来ない」

視線を前に戻した。あちこちから煙が立ち昇り、いたるところに車が乗り捨てられている。

「それで、俺達のA分隊は壊滅、B分隊も壊滅でAB分隊の生き残りを統合したんだが、二曹の俺より上級のヤツがいなくて俺が臨時分隊長になっちまった。まったく面倒な事だ。また感染が発生したと疑われた場所にあちこち派遣されたりしてな。まあそれらは全部空振りだったんだが、俺達はとても疲れた。それで、今日こんな事態になったから、余り休みも取れてない。倒れたら労災で訴えてやる。・・・うお危なっ」

乗り捨てられていた車にぶつかりそうになったが、東さんは器用に避けている。

「ああくそ、この先塞がってる」

と前方を指差した。車が何台も追突していて、とても通れそうにな

い。
「どうするんですか？」

「歩くしかないだろう。まあ幸い高校まで後500メートルってところか」

そういつて東さんは車を降りた。ボクも注意して降りる。

「見える範囲には誰もいない。人間も化け物も」

ボクも辺りを見渡すが、暗視装置をつけている東さんとは違ってほとんども見えない。まあ辺りで車が燃えたりしていて、近いところなら見えるけど。

「よし、後3分で高校に着かなきゃならない。かなり走るんだが、大丈夫か？」

「大丈夫です。これでも陸上選手で、県大会で優勝した事もあるんですよ」

ボクは長距離走が大得意だ。自慢じゃないけど、いつも大会でベスト4を取れるほどの実力がある。

「ふーん、そうなの。じゃ安心した。それじゃお前が先導してくれ、俺は後方から警戒する。曲がり角とかには気をつけるよ」

「わかってます。それじゃ行きましょう！急がないと！」

そう言い、ボク達は走り出した。

第19話 side 優 「救出1」(後書き)

御意見、ご感想おまちしています。

第20話 side 龍 「救出 2」(前書き)

8200アクセス突破。皆様から応援のメッセージを頂いて、頑張る気力が出ています。

第20話 side 龍 「救出 2」

不思議な事に、山之内女子高に着くまで化け物には遭遇しなかった。まあ良い事だが……。そのおかげで予定より早く俺達は女子高へとたどり着けた。

「ちよつと待て。お前丸腰で乗り込んでいくつもりか？つか何も考えてないのか？」

優は猪突猛進な性格らしく、早速校舎へと入ろうとしていた。俺からその事を指摘されると、はつとした顔になって俯いてしまった。

「何も考えてなかったの!？」

ここまで単純なヤツだとは……。俺は少しだけ、コイツを連れてきたのを後悔した。

素人に銃を持たせてもいいことは無い。せいぜい弾を無駄遣いするだけだ。さてどうするか……。と考えていた俺の目に、木に添えてある角材が映った。

さっそくそれを引っこ抜く。長さは1メートルくらいで、女性の手でも握りやすそうだ。

俺は泥のついたままの角材を優に渡した。

「お前それ持つとけ。もし化け物が近づいて来たら、それで殴れ。それでお前の友達が立て籠もっているのはどこだ？」

「ええと、2階の音楽室ですけど……」

「じゃあお前が後ろから案内してくれ。俺が前に行く」

俺達は校舎に入った。中は荒らされていたが、血痕等は無かった。

「誰もいないな・・・」

優が呟いた。確かに誰もいない、化け物さえもない。

「あ、その階段を上です」

優が後ろから案内する。俺は警戒しながら進むが、やはり誰もいない。

俺は暗視装置をつけていない優のために、銃のフラッシュライト（強烈な光を出す懐中電灯のようなもの）を点けた。暗視装置をつけている俺が隅々まで目を通すが、特に変わっているところは無い。

「この廊下を真っ直ぐ進んで、一番奥の部屋です」

上にも注意しつつ、廊下を進んだ。

「おかしいな・・・」

「何がですか？」

俺が呟くと、優が訊いて来た。

「何で化け物がない？俺が前見た時は、生存者の周りにウジャウジャ集まってた」

「どっか行ったんでしょう。それより早く中の人達を・・・」

どうもコイツは深く考えるということが苦手なようだ。俺はドアの前に立って怒鳴った。

「誰かいますか？いたら返事してください！」

すると中から返事が返ってきた。若い女性の声で、他にもいくつかざわめきが中から聞こえる。

「誰かいるんですか！？助けてくださいー！！」

俺はドアを開けようとしたが、鍵が変な風に引っ掛かっているのか開かない。

「ドアから離れてくださいー！！」

そう叫び、俺はドアに渾身の力前蹴りを放った。職業柄、ドアを蹴破るのはよくやるのでなれているが、やはり足が痛い。ドアが蝶番と鍵ごと吹っ飛び、中の人達が出てくる。20人はいるだろうか。ほとんどもしくは学生で、1名教師らしき人も見える。

「すみません、ちょっと目を見せてください」

そう言っただけ俺は皆が感染していないか確認する。機械もないし、俺は衛生要員では無いので大雑把なやり方だが、目立った所に怪我は無いし、感染している兆候も無かった。

その間に俺は友達と手を取り合っただけで喜んでた。お、かなりかわいい子がいるじゃん、後でナンパ・・・というのは冗談だ。俺はそんな人間じゃない。

音楽室に立て籠もっていたのが良かったようだ。音楽室は防音の為に壁やドアが厚くなっている。化け物の馬鹿力でも破るのは難しかっただろう。

「その・・・、ありがとうございます。私、松本詩織まつもと しおりっていいいます」
女の子の1人が言ってきた。かなりかわいい。

「あなた達を助けるのが我々の任務ですから。さ、早くここを出しましょう。早くしないと置いて行かれま
す」

俺は全員揃ったのを確認すると、また前に立って歩き始めた。時間はかなり余裕があった。
そして階段を下りて一回に着いた時、俺の体に何かが上から落下してきた。

体に衝撃が走るが、素早く立ち上がって前を見る。

化け物がいた。

第20話 side 龍 「救出 2」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第21話 side 優 「救出 3」

ボク達の前にいきなり3体の化け物が現れた。天井のパイプに捕まっていたのだらう。

東さんが小銃を構え、撃った。銃火が廊下を明るく照らす。2体を倒したが、一体が物凄い速さで弾丸を避け、東さんに急接近した。その腕が一閃され、小銃が弾き飛ばされる。

「クソ！」

拳銃を抜こうとしていた東さんを、化け物が押し倒した。そして首を執拗に噛もうとするが、東さんの抵抗で上手くいかない。ボク達は手が出せず、東さんと化け物が戦っているのを見ているしかない。

「うおおおおおお！！！」

気付いたらボクは、手にした角材で化け物に殴りかかっていた。何回か頭を殴ったが、余りダメージは無いようだ。

だが化け物の注意が一瞬こちらに移った。その隙に東さんは拳銃を抜き、化け物の頭に突き付ける。

「くたばれ」

そう言って引き金を引いた。化け物の頭は粉々に吹き飛び、東さんが化け物の下からはいでた。

「助かった。ありがとう」

そう言つてボクの頭を撫でてきた。だが、ボクは東さんの手を見て凍りついた。

後ろでも誰かが気付いたらしく、叫んだ。

「噛まれてる!!!」

そう言つて皆が東さんから離れる。僕も足が勝手に動いていた。

「東さん・・・、そんな」

ボクはとてもショックを受けた。そして、自分がもつと早く動いていたら東さんが噛まれずに済んだのにと、自分を責めた。

だが、東さんの返事は予想外のものだった。

「おいおい、俺は噛まれても大丈夫だって。ワクチン打ってるし、発症しないよ」

「ワクチン？」

そんなワクチンが出来ていたなんて聞いたことがない。デタラメを言っているのだろうか。ボクと同じ事を考えたらしい中年のオバサン先生が、ヒステリックに叫んだ。

「嘘よ!!!皆騙されちゃ駄目よ!ワクチンが出来たなんて聞いたこと無いわ!この男は死にたくないからデタラメ言ってるだけよ!秋

村さん離れなさい!!」

そういつてボクは東さんの側から引き離された。この先生はヒステリーをよく起こし、自分の意見を一方的に喋るだけなので、生徒からは嫌われている。ボクも嫌いだ。

その先生の様子を見て、東さんが面倒くさそうに喋る。

「ホントだつて。まあまだ国民には知らされてないがな」

そう言うと、ほれと腕をまくった。確かに新しい注射痕が腕にある。そうすると先生がまた怒鳴った。

「じゃあ何で国民に知らされていないの!？」

「まだ国民全員に行き渡る分だけ出来ていないのさ。今はせいぜい医療、警察、軍、消防そして政府関係者に配られているくらいかな」
「普通は国民にまず配るでしょう!何であなた達だけ・・・」

そういつて東さんは玄関へと向かおうとするが、まだ先生は喚く。東さんは時間を無駄にする気は無いらしく、歩きながら答える。

「まあ最優先で配られてるのは国の機能を維持する人達だけだ。国民に行き渡る分が出来たら発表する予定だったらしい。少ないワケチンのために暴動が起きても仕方ないからな。まあこの状態じゃ、1億2000万の国民がどこまで残っているかわからんが」

校庭に出たが辺りに誰もいない。東さんは警戒しつつ、ボクにこっちに来いというように手を振った。

そしていきなり、

「気になる事がある」

と話しかけてきた。ボクは何のことだか解らなかったが、重大な話のようだ。

「何ですか？」

「奴らに知能が芽生えてきているかも知れん」

ボクは少し驚いた。でもあの化け物に変わったところがあるかはわからない。今までは遭遇したらひたすら逃げ、今は東さんに戦闘をまかせつきりだからだ。

「俺らがさつき皆を音楽室から救助した時、化け物はいなかった。なのに俺が階段を下りた瞬間に襲ってきた。しかも集団で、だ」

「そのどこがおかしいんですか？」

「今までだったらこつちが向かなくても、化け物が勝手に出てきた。だが、奴らは俺達が階段を下りた時を狙って襲ってきた。待ち伏せだな」

「別のところに行っていたんじゃないんですか？」

だが東さんは、辺りに目を光らせながら答える。

「奴らは人間に対する執着が強い。それに俺にはどうも・・・」

そこで一度区切り、こう言った。

「ドアが開かないから俺達を利用して開けさせ、油断していたとこ

ろを襲ったように思える」

ボクはそれを聞いてぞっとした。奴らの頭が良くなった？そしたらどうすればいいんだ？

「それに奴らは武器を持った俺に一直線に向かってきた。三体で同時に攻撃して俺を殺そうとした。今までだったらたんでばらばらに攻撃していたのに、俺だけを狙っていた」

「・・・何が言いたいんですか？」

「奴らは頭が良くなつて、群を作る事を覚えたのかも知れん。これからは手ごわくなる。注意しろ」

そして、ボク達は学校を後にした。

第21話 side 優 「救出3」(後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

先ほど俺達を通った道には誰もいなかった。最後のヘリが飛び立つまで後20分ある。俺は余裕を持っていた。

その時通信が入った。ヘッドセットに手をあて、よく聞こえるようにする。

『やつほーい東、今元気にしてる？』

牧だった。それにしても、こんな状況でこんな口調で話せるのは一種の才能ではないだろうか。

「何だ牧か。市民はどうした？後今どこにいる？」

『市民は無事にヘリで飛んでったさ。後俺達は今浜浦小学校にいる』

「浜浦小学校！？お前何でそんなところにいるんだ！？」

浜浦小学校はこの近辺で最も有名な私立小学校である。数年前に侵入者騒ぎがあつてから、防犯対策が充実している。確かに立て籠もる場所としてはうってつけだろう。

『基地に戻ったら救援要請が来ててな、司令は人数が足りないし救援部隊の派遣に難色を示したんだが、俺達が拝み倒して救援に行くのを許してくれた。まあ人数はそう割けないし、俺と堂々と中沢の3人しかいないんだがな』

「今の状況はどうなんだ？」

『今は生き残ってるガキ共を集めてる』

「何人くらいいる？」

『ん、ざつと150人』
『ひやくつ・・・!?!?』

150人もいたとは驚いた。まああそこは安全な場所だから、たくさんいても不自然ではない。

だが、問題はその人数だ。100人以上を一気に輸送するには、大型の輸送機が必要だ。しかし飛行機がこんな市街地に着陸できるはずもない。ヘリを飛ばすにしても、大型機が数機必要だろう。

「んで、お前どうやって避難させるんだ？」

『さすがに基地までは連れて行けないし、校庭にチヌーク（大型の輸送ヘリコプター）呼んで来てもらうしかない』

「来てもらえるのか？」

『多分無理だな。ヘリはフル活用してるし、やっぱり歩いて連れて行くしかない』

その時、女子高生の1人が持っていた携帯電話から、ワンセグ放送で緊急会見のニュースが流れてきた。

「ちょっと待て、総理が会見してる」

そういつて、一度無線を切る。もちろん警戒しつつ前に進むのを忘れない。

『北海道の臨時政府庁舎より総理の緊急会見のニュースです。今から総理が会見を行います』

『えー、日本国民の皆さん。内閣総理大臣の浜田はまだ俊彦としひこです。今日本の本州で発生している非常事態について報告します・・・』

その後は俺達が知っている事が報告されている。そして、最後にこ

う言った。

『・・・ですので、被害が甚大なことも勘案し協議した結果、本州は放棄・放棄いたします。生存者の皆様は、北海道、四国、九州、沖縄に移住してもらいます。なお、本州に住んでいる皆様は、最寄の軍基地もしくは警察所、空港、避難所に集合してもらい、航空機によって本州を脱出してもらいます。なお、脱出の最終期限は本日07:00時までとなっております。パニックを起こさず、落ち着いて・・・』

本州を捨てるとは、総理も思い切った決断をしたものだ。だが、俺達が脱出できるのは01:00時までだ。何とか間に合うかもしれないが・・・。

「・・・だそうだ。どうする牧？」

『あと20分もないな。仕方がないが、ガキ共は基地まで連れて行くしかない』

「ちゃんと連れて行くんだぞ。一人も死なせるな」

『了解！！お前も無事でな！！』

そういつて無線は切れた。アイツ等なら上手くやってくれるだろう。

「よし、全員走るぞ！！早くここからおさらばしよう！！」

そう声を張り上げた時、基地から通信が入ってきた。

最悪の知らせだった。

第22話 side 龍 「絶望 1」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第23話 side 龍 「絶望 2」 (前書き)

1万アクセス突破いたしました!!!皆様のお陰で自分も頑張れます。
これからもよろしく願います!!!

第23話 side 龍 「絶望 2」

最悪の知らせが届いたのは、基地まであと5分だということだった。ヘリコプターの爆音が鳴り響いているが、同時に銃声や化け物のうめき声が聞こえてきている。

俺はヘッドセットの音量を最大限にして、皆にも聞こえるようにした。

『……現在初春基地に戻って来ていない兵員諸君へ。こちらは陸軍第一ヘリコプター団第13飛行隊、タンゴ1機長の川田^{かわた}光^{こういち}二等陸尉だ』

その声はとても暗かった。そして無線からは銃声や『奴らを近づけるな!!』とか、『銃弾が足りない!!誰かくれ!!』といった叫び声が聞こえる。そして、ここから聞こえる何倍もの化け物の声。

「こちら海兵隊第8師団、強襲偵察隊A分隊分隊長の東龍二等海兵曹です。どうかしたんですか？」

俺は不安を覚えながらも答えた。俺の他に牧達や他の部隊も応答しているらしい。

『非常に残念だが……』

『化け物の群がヘリに近づいて来ている。これ以上は持ちこたえられない。よって、君達を置いて行くことになる』

その瞬間、皆の顔が驚愕に歪んだ。俺は訳がわからずもう一度訊く。

「・・・すいませんが、もう一度言ってください」

『もうこれ以上君達を待つていられない。これ以上待つていたら我々も危険だ』

「せめて後5分待つてください。もう近いところまで来ているんです！」

後ろで中年教師が何か叫んだが、優達が口を押さえる。俺の頭が真っ白になり、正常な思考が働かない。

『悪いが、もう機体まで後5メートルほどの距離まで迫っている。それに、もう後少ししかスペースがない』

銃声が少なくなっていく代わりに、化け物のうめき声が大きくなっていく。どうやら劣勢のようだ。

牧達の声が無線から流れた。

『こちら強襲偵察隊の牧3曹、現在浜浦小学校に130人の子供達と共にいます。こちらに寄って回収・・・なんてしてくれないでしようね』

『残念ながら出来ない。この便が初春市を飛び立つ最後の便だ。しかも150人も乗れない。それにもう初春市に帰って来ることは無いだろう』

そこに俺は疑問を持った。何故戻って来ないんだ？

「どうして戻って来れないんですか？本州は完全放棄するらしいですけど、まだ余裕はあるでしょう？」

『半島の「北」の動きがここ数時間で活発になっている。「南」も、大陸の各国もだ。よって政府は残存部隊は全て北海道、九州、四国の防衛に当たらせて、本州には兵員を割かない。全部隊は一度撤収したら、ウイルスを運んでしまう恐れがあるので本州には戻れない。全部隊には感染者と非感染者との区別をつけずに無差別攻撃を許可されているから、本州に派遣される事があるなら、それは皆殺しの始まりだ』

『・・・海岸部に向かって船で脱出する方法は？』

他の部隊の隊員が訊いた。

『駄目だ、船を出せるのは検疫を受けた人間だけだ、しかも決められた船しか乗れない。それ以外の船は海軍によって砲撃される。現に今も多数の船が撃沈されたらしい。それにそんな事態を防ぐために、沿岸部の船は残らず破壊されることが決定している』

「・・・つまり、完全に置いていかれる訳ですか」

優が絶望したように言った。俺は皆を脱出させると言ったのに、約束は果たせそうに無い。

『くそつ、奴らがもうそこまで迫っている。離陸す・・・』

「何よ！！私達を助けなさいよ！！何のために税金で成り立ってると思ってるのよアンタ達は！？」

あの中年先生が喚いた。ヒステリーを起こしてかなりうるさい。

『このままあんた達を待つことは出来る。だがその間にこの機は奴らに制圧され、乗っている民間人は全員死ぬだろう。アンタはそれに責任を持てるのか？今出れば絶対助かるのに、助かるか解らないあんた達を待つて全員死なせるつもりか！？自分だって出来れば待

ちたい。だがそのために20人の民間人と10人の兵士を死なせる訳にはいかない。自分はこの機に乗っている人達の命を預かっている。助かるか解らんあんた達の為に全滅する訳にはいかない』

機長が怒鳴った。それは今皆が同じ気持ちだろう。俺だってそういう状況に立たされたら機長と同じ事をするかもしれない。

皆が黙る。すると無線から

『・・・いいですよ、行ってください』

と牧の声が聞こえた。すると他の部隊も

『頼みます、皆を死なせないで下さい』

『1人でも多くの命を助けてください。それが俺達の願いです』

と同調した。俺は皆の顔を見る。皆覚悟を決めた表情をしている。いや、あの中年先生はまだ何か喚いているが・・・。

「いいですよ、行くように行ってください。それでいいでしょ、皆？」

優が皆に聞く。皆は苦笑しつつ、「いいよ」「仕方ないなあ」と優に答えた。

俺はそれを聞いたうえで言った。

「行ってください、早く」

『了解！！おい藤井、戦ってる連中に機内に入るように言え！！』

銃撃音が収まり、ローターの回転音が大きくなっていく。

『すまない東2曹。自分に出る事は何も無いが、この事態が収まるまで生き残ってくれ。そうでないと自分は一生後悔することになる』

「了解！レンジャー訓練のサバイバル訓練の成果を生かす時だと思つて頑張ります！」

『それでは、貴官らの無事を祈る！！』

そうして、ヘリが基地から飛び立っていくのが見えた。そのまま南に向かい、やがて見えなくなった。

「皆、本当に良かったのか？」

俺は訊いた。もしかしたらもう助けは死ぬまで来ないかもしれないいや、明日死ぬかもしれない。それでもいいのか俺は知りたかった。

「大丈夫ですよ、私達は生き延びる。何があっても」

詩織が力強く言う。優も頷く。ちなみに、ヒステリックな女教師は後ろで気絶していた。

俺はそれを聞き、決心した。

自分が死んでも、何があっても皆を守ると。

第23話 side 龍 「絶望 2」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第24話 side 優 「浜浦小学校」1

「さて、これからどうするか・・・」

と東さんが言った。そうだ、ボク達はこれからこの地獄のような場所ですべて生きていかなければならないのだ。

「とりあえずは牧達と合流しなきゃならん」

「どうするんですか？」

ボクは訊いてみた。東さんは顎に手を当て、何かを考えているようだ。

「ここから走って浜浦小学校に行くのは・・・無理だな」

東さんは皆を見て言った。皆肩で息をしている。皆ボクのような陸上選手ではないので、何分もずっと走りっぱなしだったのは辛かったようだ。

「まあ皆が俺やお前みたいなたくまな体力を持つてる訳じゃないしな。まあ仕方ない。歩いて行くか、安全な所を見つけて朝まで隠れるしかない」

そう言って、浜浦小学校の方向へと歩いていく。皆もそれについていく。

数分後、ボク達はあるものを見つけた。

「・・・警官だな、精一杯抵抗している最中に首をやられて失血死・・・と言ったところか」

ボク達は3人の警察官の死体を見つけた。辺りには薬莖と血液と化け物の死体が散乱している。警察官の死体は首に傷がある以外綺麗だった。

東さんは警察官達の手から自動拳銃を取った。ついでにベルトから弾倉を抜き取る。そして手を合わせて数秒間黙禱を捧げると、ボクに拳銃を渡して来た。

「俺だけで皆を守るのは無理だ。お前達にも武装してもらおう」

そして東さんは詩織と、冬元ふゆもと 春奈はるなという女の子を呼んだ。どちらもボクの友達だ。そして2人に拳銃を渡す。

「えっと、私達銃なんて持った事無いんですけど・・・」

戸惑いながら春奈が答える。ボクも詩織も、当然ながら同じく持った事なんてない。

「んな事知ってる。だから俺が使い方を教える」

「でも、東さんが持ってた方が無駄に使わなくて済むと思うんですけど・・・」

そう言うと東さんは

「俺一人で20人も護衛するのは無理だ。誰かを守っている間に誰かが襲われたら意味が無い。だから頼む」

そう言ってきたので、ボク達は仕方ないので了承した。そしてそれぞれ弾倉を3つずつ渡して来た。

「これはP220自動拳銃、装弾数は9+1発。撃ち尽くしたらスライドが後退するから、グリップ底部のツメを押して弾倉を排出し、新たな弾倉を装填する。そして、このレバー・・・スライドストップを下に下げたらまた撃てるようになる」

実演しながら説明する。ボク達は何とかそれを真似するが、どうしても時間が掛かってしまう。

「いや、今はそれでいい。全員で一斉に撃つんじゃない、交代で撃つんだ」

そして、照準の仕方を教えてきた。

「この銃の先端の突起が、後部の2つの突起の間で同じ高さに見えたら照準出来てる。そこで撃てば当たる」

ボクは銃を構えてみた。これでいいのだろうか。

「いいぞ皆。よく出来てる。あとこれが安全装置だ、これを下げれば撃てるようになる。皆俺が撃てと言っただけで撃つな」

そう、奴らは何だかんだで人間だったのだ。今はウィルスのせいで凶暴になっているだけだ。ボクは人間だったものを撃てるのだろうか

か・・・？

そんな考えを見透かしたように東さんが言った。

「大丈夫、出来るだけお前達には撃たせないようにするから。だから安心しろ」

そう言うのと東さんはもう一度警察官達に手を合わせた。ボク達もそれに続いて手を合わせる。

そうしてボク達は浜浦小学校に向けて歩き始めたが、また東さんが話しかけてきた。

「やっぱり奴ら、知能が芽生えてきている。さっきの警察官達、全員銃をリロードしてる最中に死んだみたいだ。奴ら隙を狙って攻撃してくるようになったらしいから気をつける」

そう言うてまた警戒を始めた。

ここから小学校まで後30分くらいで着く。全員無事に着ける事をボクは祈った。

第24話 side 優 「浜浦小学校 1」 (後書き)

御意見、感想お待ちしております。

俺達が大通りに出た時、道路は乗り捨てられた車で埋まっていた。きちんと列に並んでいたが、車の中に人影は無く、開きっぱなしのドアと掛けっぱなしのエンジン音が慌てて逃げ出した様を物語っていた。あちらこちらに水溜りがあり、それは光の下で見たら、きつと真っ赤な色をしているのだろう。

「うわあ、通れる隙間がほとんど無いですね」

優が言った。確かに道路は車が渋滞時の様な状態で、まともに通れない。

「仕方ない、ここを通れば浜浦小学校なんだ」

俺は地図で確認しながら答えた。小学校までの最短ルートはこれしかない。

その時、あの中年のオバサン先生が何かを喚きながら、小学校とは別の方向に向かって走っていった。とうとう気が狂ったらしい。

「俺が連れて戻ってくるから、皆はここで待っていてくれ」

俺はそういってオバサンを追う。途中でオバサンは角を曲がり、細い裏道へと入っていった。

俺もそれを追って角を曲がった……のだが。

「・・・まじかよ」

裏道には化け物が50体くらいうようよいた。どうやらそこでオバサンも噛まれたらしく、化け物の仲間入りしていた。化け物が一斉にこちらを向いた。全部と目が合った。さて、どうする？

- 1 逃げる
- 2 逃げる
- 3 逃げる

ここは逃げる！！

「おわああああ！！」

そう言っただけ俺は駆け出した。化け物達も後を追ってきた。俺の姿に優達は一瞬安堵したようだったが、直後に俺をとんでもないスピードで追ってくる化け物達を見て逃げ出した。俺は銃で追いつがる化け物を撃ちつつ、車と車の隙間を縫って走る。そして優達に追いついた。

「何であんなにいるんですか！？」

走りながら優は怒鳴る。俺も猛スピードで走りつつ答える。

「知るか！！あのオバサンも化け物になった！！」

そう言つて振り向き、また銃を撃つ。何体かが倒れたが、後ろにまだたくさんいる。

俺はある事を閃き、それが可能か数秒考えて優達に言った。

「皆！！早くこの車列から早く出る！！」

先頭集団の何人かはもう車列の先頭から抜け出している。俺も何とか車列から抜け出し、まだ脱出していない人達を援護する。化け物達は俺達から、後100メートルくらいの所まで迫っていた。

何とか全員が車列から抜け出したので、俺はM67手榴弾を取り出した。化け物達は50メートルの所にいた。

俺は手榴弾の安全ピンを引き抜き、車の下に手榴弾を放り込んだ。

「皆伏せろ！！」

俺も物陰に隠れた。その直後、手榴弾が爆発し、車も爆発した。近い間隔にあつた車が次々誘爆し、化け物達が炎に吞まれ、車の破片に引き裂かれる。大通りは炎に包まれた。

俺の頭の上を爆風が通り過ぎ、俺は頭を出した。皆も物陰からはいでて来た。

「皆大丈夫か！？全員いるか！？」

しばらくして全員いることが確認できたので、俺達は再び学校へと向かった。

もう銃弾も残り少ない。大丈夫だろうか……。

第25話 side 龍 「浜浦小学校 2」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

ボク達の上をへりが飛んで行った。それを見て東さんは、

「米軍か・・・」

と呟いた。

在日米軍は、日米安全保障条約の改定に伴い、ずいぶん前にその大部分を日本から撤退させたはずだ。関東一帯で駐留している米軍は殆どないはずなので、何で米軍のへりが飛んでいるのだろうか？

「何でアメリカ軍がいるんですか？何年か前に日本から撤退したんですでしょ？」

と言うと、東さんは呆れた顔で

「お前ちゃんとニュース見てるのか？」

と返してきた。詩織と春奈も同じ様に呆れている。

「2週間前からアメリカ、EU、中国軍が『人道支援』の名目で日本に部隊を派遣してるだろ。まあ多分ウィルスのサンプルが欲しいだけだろうがな。ニュースでもやってたはずだが」

知らなかった。ボクはニュース等はほとんど見てない。新聞を見ただけで、スポーツ面とテレビ欄くらいしか読んでいないのだ。

「そんなんじゃないぞ」

とまで言われてしまった。恥ずかしく、顔が真っ赤になる。

そうこうしている間に、浜浦小学校に着いた。周りに化け物はいない。

浜浦小学校は私立の小中一貫校で、浜浦校とも言われている。広大な敷地にいくつか校舎が並び、各種の施設も充実しているが、数年前に不審者が侵入する騒ぎがあったから、警備がかなり厳重になったと聞いている。

「さて、どうやって入るか・・・」

周りは高い塀で囲まれていて、ところどころに監視カメラが設置されている。その内の一つが動いていた。ボク達に監視カメラのレンズが向けられ、そのまま動かなくなる。

「東さん、カメラが動いてるんですけど・・・」

東さんはカメラを見て、大きく手を振った。すると、正門がいきなり開いた。

どうやら、カメラの映像を見て、誰かが校門を開けたらしい。

「大丈夫だ、入ろう」

そう言って東さんは中に入った。すると、中には牧さんが立っていた。

「遅いぞ、こっちはガキのお守りで大変だったんだからな」

そういつて先頭に立ち、ボク達を校舎に案内した。敷地はとても広い。少なくとも、そこら辺にある普通の学校よりは、倍以上の面積があるだろう。

「堂々と中沢は何やってる？」

「中沢は警備室で監視、堂々は屋上でいつでも狙撃できるようにしてる」

そう言われて東さんが手を振ると、一番近い校舎の屋上から人影が立ち上がり、手を振り返した。

「ガキは何人になったんだ？」

「小学生120人、中学生40人、あと……、美里みさとがいたんだが」

堂々さんがそう言うと、東さんはいきなり咳き込んだ。

「うへっ、何で美里が!？」

「知らん。まあここ地元だし、帰郷してたんじゃない？」

どうやら東さんは、その美里さんとやらとは知り合いらしい。なぜそんなに慌てるんだらう？

「それで、ボク達どうすればいいんですか？」

そう言うと、二人はやっとボク存在を思い出したようだ。

「寝てれば？」
「やること無いし」

がくつとなった。こうなった以上、働かなくては気が済まないのだ。そう思ったボクはそう懇願したが……。

「でも、何かさせてください！」

そう言うと2人は困った顔で

「やる事無いよな」

「てか下手にやられると迷惑」

「でも……」

そうボクが言うと、二人は

「いいからいいから」

「ゆっくり休め」

と笑って言った。そして校舎の中へと入っていくので、ボク達も後続く。

浜浦小学校は6つの校舎で出来ている。3つが小学校、残りの3つが中学校だ。小学校の校舎にボク達は案内された。校舎もとても広い。廊下がとても長く、教室もたくさんあるのが見えた。

牧さんはボク達を4階に案内した。そこには子供たちがたくさんいて、起きている子も何人かいたが、ほとんどの子供は寝ていた。どうやら恐怖より睡眠欲が勝つたらしい。ま、子供だしね。

「いやあ、避難所になった時のための、災害用の毛布と非常食があった助かった」

牧さんが言った。ボク達は誰も使っていない教室に案内され、一人一枚ずつ毛布を渡された。教室の中にあつたらしい机と椅子は、既に廊下に放り出されている。

「電気は自家発電で点くけど、出来れば使わないでくれ。奴らにここを知られたくない。何かあつたら俺達に言え。この校舎の4階端の警備室にいる」

そう言つて2人は教室を出て行つた。ボクはとりあえず床に毛布を敷き、横になつた。皆も同じ様に毛布を敷き、寄り添つて横になつた。

「今日、眠れないかも・・・」

と言つていた詩織はもう爆睡していて、春奈もうつうつとしている。

今日は色々な事があつた。夕方、帰宅途中に騒ぎが発生し、見に行つたら人が人を噛んでいた。慌てて1人暮らしをしているマンションに逃げ帰つたら、そこにも化け物がいた。そして逃げていたら東さん達と会つたんだっけ・・・。

疲れがどつと出てきた。預かっていた拳銃の安全装置が掛かっているのを確認し、枕元に置いた。最後に時計で時刻を確認し、そこでボクの記憶はいったん途絶えた。

現在時刻
5月17日
01:52

第26話 side 優 「浜浦小学校 3」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第27話 side 龍 「絶望と希望」

現在 06:00時

俺達は一晩中モニターを睨みながら夜を過ごした。まあレンジャー訓練で寝ない、食べない、飲まないの訓練を受けている俺達にとっては楽な仕事だったが。学校に化け物が近づくことも無く、銃弾を温存出来た。

日の出が近づくにつれて、市内から聞こえる化け物の呻き声は減っていった。やはり奴らは日光に弱いらしい。

聞いていたラジオの生中継も、最後は悲鳴と何かがこすれる音、そしてアナウンサーの悲鳴を最後に途絶えていた。どうやらアナウンサーも基地局もやられたようだ。

俺は警備室を出、屋上に出た。発電用の太陽光パネルや小型風車を通り抜ける。そこから眺める光景は、この世の終わりの様だった。のどかな田園地帯の向こう、街のあちこちから煙が立ち昇り、血と腐臭がここまで漂ってくる気がする。電線いっぱい、カラスがとまっている。

「さて、どうするか・・・」

とりあえず中に戻り、堂々達とこれからの事を話し合った。生存者がいないか無線で呼びかけてみたが、俺達の持つ個人携行用の無線機では通信範囲がかなり狭く、誰も応答しなかった。

「とりあえず基地に戻って無線を使ってみよう。弾薬も回収できるかもしれない」

そう中沢が提案したので、俺達は食事後基地に向かうことになった。警備室に備え付けのマイクを使って、全校放送で子供を起こす。

「あーあー、今浜浦小学校にいる皆さんへ。今から体育館へ集まってください。重大なお話があります。繰り返します、体育館に集まってください」

そう言ってマイクを置いた。廊下に出ると、あちこちの教室で子供が起きて、体育館へと向かって行く。

「さて、行くか」

体育館には多くの子供がいた。だが200人にも満たないため、かなり体育館が広く見える。・・・実際普通の学校より広いのだが。俺はステージに立ち、辺りを見回した。皆は口々に声を発している。のでともうるさい。その中に俺は見知った顔を見つけた。

なかはら みさと
仲原美里、俺の高校時代からの友達で、今は現役東大生アイドルという事で大ブレーク中だ。

美里は俺の顔を見ると、驚いたように目を見開いた。俺はそれを無視してマイクを手にした。

「皆さん、海兵隊員の東と言います。現在起きている非常事態について説明したいと思います」

子供相手に難しい話が通じるか解らなかったが、俺の話を皆はじつくり聞いていた。そして現在の状況を説明し終えると、一人の少女

が立ち上がって手を挙げた。

「中学3年生の原真由美（はらいまゆみ）といっています。救助はいつ来るんですか？」

周りでも「救助はいつ来るんだ!!」とか何人かが怒鳴った。うるさいDONだと思っただが、無視しておく。

「救助は来ません」

そう答えると、子供達のざわめきが広がった。

「来ないって、どういうことですか？」

「もう本州は完全に放棄されたんです。つまり、自分達はもうここで死ぬか、北海道、四国、九州まで行くか、この事態が収束して化け物がいなくなるのを待つしかないんです」

その言葉に皆は絶望した顔になった。

「そんな、何ですか!?!」

「それは機密に抵触するため、お答えできません」

「何だよ!!! 言えよ!!!」

少女の近くにいた少年が怒鳴った。

「だから、言えません。言ったとしても、救助は来ません」

「じゃあ俺達を本州から出せよ!!! それが軍の役目だろ!!!」

まわりの子供も怒鳴り始めた。面倒なのでさっさと切り上げる。

「軍で訓練してる俺達なら本州から脱出するのは容易いでしょ。」

ですが150人も連れて行くのは無理です。車を使うとしても、燃料の補給が出来るかわかりませんし、第一そんなたくさん乗せていくのは無理です。それに・・・」

そう言っつて俺はトドメの一言を放つ。

「あなたが絶対感染していないという保障が無い限り、あなた達は射殺されます」

その言葉で皆が黙った。そして俺はこう言った。

「大丈夫です。自分達があなた達を守ります。ここで生き残るために、皆さん協力してください」

第27話 side 龍 「絶望と希望」(後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第28話 side 龍 「物資調達 1」 (前書き)

ここからしばらく龍編が続きます。

俺達がやる事はたくさんあった。

とりあえず食料・水の確保。学校にも非常時の備蓄はあるが、それも一週間くらいしかもたない。よって、近くの駅前のスーパーから食料を取ってきてもらう。

そして基地に行つて残存部隊の確認および武器弾薬の確保。これは俺と中沢が行く事となった。

俺がその事を伝え、志願者を募つた。結果、食料確保は30人が志願してくれた。・・・まあ他は小学生が大半なので仕方ないが。

そして一端警備室に行こうとすると、美里が俺の側に寄つて来た。周りでは、「あれ仲原美里じゃない?」「ほんとだ」「後でサイン・・・」とか言う声が聞こえる。

「龍君なの?」

「ああ、そつだが」

そう言うと、美里は笑顔を見せた。

「やっぱり・・・。良かった、会えて」

「ああ」

「龍君・・・、やっぱり変わったね」

その言葉を昔も言われた。ただ、前よりも優しい声だった。

俺が嫌なことしかない過去を思い出していたが、美里はそのことなど気にしない風に続けた。

「当たり前だ、変わらない人はいない」

「やっぱり、あの時私を嫌いになったの？」

その声にいらつとしたが、俺は足を止めない。

「ああ」

「……後で話したいことがあるんだけど、いい？」

「……帰ってきてからな」

そう言つて俺は警備室に入った。中には堂々、牧、中沢がいた。気持ち悪い。ニヤニヤした顔でこっちを見るな。

「やっぱりまだ関係はギスギスしたままか」

「あんなかわい子嫌いになるなんて、お前天罰が下るぞ」

「てか俺の方がかつこいいだろ」

3人にはやけたまま言つたが、俺はそれを無視して言つた。

「屋上に来い。俺達が生きている事を示さないと」

そう言つて俺は屋上に向かう。3人も真剣な表情に戻り、後をついて来る。

屋上に上がり、比較的広い場所に出ると俺は発煙手榴弾スモークグレネードを取り出した。他の3人もそれを取り出し、俺に渡した。

俺は安全ピンを引き抜き、地面に置いた。すると発煙手榴弾から赤く着色された煙が出てきた。

この手榴弾は通常近接航空支援を受ける時、攻撃箇所を示すために使っているが、煙幕用としても信号用としても使える。

そして俺は小銃を前方斜め上に構え、3発、10秒おきに撃った。これで誰かが俺達の存在に気付いてくれるはずだ。俺は全ての発煙手榴弾を、学校に残る堂々に渡した。

「十秒ごとに一発、計三発を30分おきに撃つてくれ。んで、煙を休み無く出せ。そうすれば誰かが気付くはずだ」

そうやって、俺はスーパーから持ってきて欲しい物のリストを牧に渡した。牧はスーパーに子供達と行って、必要なものを持って来てもらう。リストには食料、飲料水、薬品等が書いてある。

「これに書いてある物を持って来てくれ。腐ってなかったら生鮮食品も」

そうやって俺は手を叩き、

「さあ、状況開始！！」

俺達は行動を開始した。

第28話 side 龍 「物資調達 1」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

俺達は子供達に非常食の乾パンとペットボトル入りの水を配り、校庭に出た。牧達はどうかやら基地からここまで車（民間の乗用車なので、そこら辺から調達したのだろう）で来たらしく、俺と中沢も車で基地に向かう事となった。

4人乗りの車の運転席には中沢が座り、俺は助手席で窓を開けて外を警戒する。

学校を出ると、住宅街があった。周りには田や畑も見えるが、人が無い。農家で飼われている鶏や牛の鳴き声が聞こえた。

やがて市街地に出たが、あちこちに車が放置され、凄惨な死体が転がっている。

「ひでえな」

「ああ、全くだ」

そう言つて中沢は死体を轢かないよう注意深く運転する。その時俺はある物を見つけた。

「おい、止まれ」

俺が見つけたのは軍用車両「ハンビー」だった。ジープを2周りほど大きくしたようなその車両は、現在世界中で使用されている。

俺は車を降りて周りを見る。ハンビーの側面には「U・S・ARMY」の文字があった。アメリカ陸軍の物だ、日本派遣部隊のものだろう。そして周りには6名の米兵の死体があった。大量の空薬莖とハンビーを囲むような死体の山が状況を物語っている。

ハンビーの屋根には12.7mm重機関銃M2が設置してあり、機銃にもたれるようにして死んでいる米兵がいた。屋根の上にはあの化け物の死体もあった。

これから推測すると、米兵達はここで戦闘を行っていたが、街路樹か何かの上から化け物が機銃手を襲い、それに気を取られた隙に化け物に全員殺された　　といったところか。

俺と中沢は米兵達に敬礼し、それから使える装備を探した。彼らが持っていたM4A1カービンやM249分隊支援火器、M92F自動拳銃を集め、弾倉ポーチから弾倉を抜き取った。

「死体、どうする？」

中沢が訊いてきた。

「土葬すると野犬が集まる。火葬するしかないだろう」

「どこでやる？」

「基地でやる。あそこにも死体はたくさんあるはずだ」

そう言っただけで俺はハンビーが使えるか調べた。ガソリンも充分あったので、俺達はハンビーを使う事になった。というのも、あちこちに放置されていた乗用車に、化け物が窓を割って乗員を襲った形跡があったからだ。ハンビーは防弾仕様なので、簡単には窓を破られたりしないだろう。

その後ハンビーに米兵の死体を乗せ（ハンビーは6人乗りだったからスペースが多い）、基地に向かった。俺は機銃座について、M2重機関銃を構えて警戒する。

「おい、大丈夫か？」

中沢の運転が急に危なくなったので、俺は不安になった。

「うるせえ、左ハンドルは馴れてないんだよ」

その間にもハンビーは進んでいく。

初春基地に着いたのはそれから5分後だった。基地の門は大きく折れ曲がり、死体の道がヘリポートまで真っ直ぐ続いていた。流れている血はちよつとした池ほどの量があるだろう。

「生きてる人、いるかな？」

「さあ？」

俺達はハンビーから降り、基地内に入った。まずはヘリポートを確認しに行ったが、途中にも化け物、市民、海兵隊員の死体があった。俺と仲のよかった兵士も死んでいた。ただ兵士の死体は少なかつた。ヘリポートの地面は血の赤で染まっていた。化け物の死体は1000体以上はあるだろうか。そして折り重なって死んでいる海兵隊員達を見つけた。銃を調べたが全員弾がほとんど無かつた。状況から考えて、どうやらここで最後までヘリポートを守って死んだようだ。

「そういえば、今まで見た死体って首しか噛まれてないよな」

中沢が話しかけてきた。確かにそんな気がする。

「前見た実験映像のネズミは派手に食い散らかしてたのに・・・、

何でだ？」

「腹がまだ減ってないんじゃないか？」

「・・・東、お前が言う事って何か適当でいて正しいような気がする」

俺達は司令部が設けられていた建物に入った。中は所々日が射して
いて、化け物が出てきそうな気配は無い。廊下には机や椅子でバリ
ケードが設けられていた所もあった。

その時、背後で足音がした。俺と中沢はそれぞれ振り向きざまに銃
を構える。

「待つて！！撃たないで下さい！！」

そういつて人影は近づいてきた。手に何かを持っている。
兵士だった。

「第3中隊所属、古橋雄大^{ふるはし ゆうだい}一等海兵士です！！」

そういつて古橋は敬礼してきた。俺達も答礼する。

「まだこちらに仲間がいます！ついて来てください！！」

第29話 side 龍 「物資調達 2」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

それにしても豚インフルエンザ、怖いですね。世界的流行しなければ良いのですが・・・。

俺達は古橋に通信室に案内された。通信室には2人の海兵隊員がいた。

「白井玲人一等海兵士です」

「同じく黒田裕樹一等海兵士です」

そう言つて二人は俺達に敬礼した。俺達も答礼する。

「とにかく、現在の状況を教えて欲しい」

俺が言つと、二人は気まずそうに顔を見合わせた。

「現在、松戸、習志野、下志津、木更津の陸軍基地、下総、館山の海軍航空隊基地からの通信は03:00時に完全放棄されたようである。応答がありません。同様に関東を中心とした基地も次々放棄されています」

「通信は出来ませんが、衛星通信のみです。それ以外は無線が届かないか、届いても応答する人間がいないので意味がありません」

それを聞いた俺は少し落胆しつつ、3人が何故ここにいるかを尋ねた。

「なんでお前等ここにいるんだ？」

「実はへりに乗って脱出しようと思つたのですが、化け物どもに道を塞がれてしまいました。仕方なくここにバリケード作つて立て籠もつてたんです」

白井は通信兵らしく、通信機に向かったまま動かない。どこから通信が入って来ないか注意深く無線を聞いている。

「んで、上から何か命令か通達が届いてないか？」

「届いてますが、最悪な状況ばかりです」

黒田が答えた。

「まず、本州から脱出できたのは4000万人です。軍全体の戦死者は2000人。意外と少ないです。そして・・・」

一度言葉を区切り、こう言った。

「海外でも感染爆発パンデミックが発生しました」

その言葉に少し頭が痛くなった。無論想定していたことではあったが、それでも頭の痛い事態だ。その間にも黒田は続ける。

「アメリカ、南米、ヨーロッパ、アフリカ、そしてユーラシア大陸でも発生しています。最も被害の大きいニューヨーク州が閉鎖されたとの報告も入っています。」

「各国の対策は？」

「まず感染者の区別。次に町の封鎖。感染が確認された町の周りに高い壁を作って封鎖しましたが、これも封鎖より感染が広がるスピードが速いので効果がほとんどありません。橋の破壊等はかなり効果があるようです。そして、感染地域の空爆」

最後の言葉で、俺は3週間前の事を思い出してしまった。ああ、く

そ。

日本で感染者が再発生したのは一週間くらい前、その頃はまだ化け物は夜町をうろついているくらいだった。だがそれが変わったのは昨日、化け物は日没と同時に大量に発生した。

通信室に置いてあった新聞を見た。一週間前の新聞には

「新型コロナウイルスの感染者再発生か？」

「感染者は凶暴化」

「政府、夜間外出禁止令を発令」

「被害は軽微の見込み」

「事態は収束する模様」

こんな見出しがあった。この頃は、まだマスクも封じ込めが出来たろうと楽観視していた。そしてお決まりのように、記事の最後には

「体に異常を感じたらすぐ病院へ」

この言葉でただの軽い病気の患者が病院へ押し寄せ、病院機能はパンクした。そこで本物の感染者を見抜けず、こうなってしまったのかも知れない。無責任なマスクミにも責任の一部はある。

その時白井がいじっていた衛生無線機がノイズとともに使えなくなった。

「どうしたんだ」

「いえ、化け物が大量に押し寄せた結果、衛生無線機のパラボラアンテナが一部破損したんです。その結果時々通信が出来なくなってます」

「直せるか？」

俺のその質問に、白井は力なく答えた。

「部品がありません、あっても完全に直せる技術が無いんです。技術者がいれば話は別ですが、この状況では……………」

そう言つて無線のヘッドセットを放置して、こちらを向いた。

「このウイルスは何だ？ 奴らは何だ？」

中沢が質問した。すると黒田が答える。

「長くなりますが……………」

そう言つて現在知っている全ての事を話した。

このウイルスはアリス・クルピン博士によつて作られたそうだ。もつとも、最初にはしかウイルスを元に作成したガンの治療薬だった。博士はこれを世界中から集めたガン患者1万9人に投与した。全部の患者は回復したように見えたが、5000人に狂犬病のような症状が出た。

まず発生したのはアメリカ、カリフォルニア州の人口500人の田舎。そこは州軍によつて封鎖され、空爆で焼き尽くされた。パニックになるからとそこは災害で壊滅したとアメリカ政府は嘘の発表をしたが、次に日本に帰国したガン患者がマリンスイで発症。これはマスコミによつて大々的に報道され、このウイルスはK・V、クルピン・ウイルスと名づけられた。

その後博士達は帰国した患者達を搜索したが、時既に遅し。最初の発症者達は高齢だったのですぐにウイルスが変異したが、それ以外はほとんど全員50代以下。変異するまで2週間かかり、それが一週間前から全世界で次々に変異、発症した。最初は少数だったが、昨日か今日に大量発生したらしい。

発症者はダーク・シーカーズと名付けられたが、夜間にしか行動できないう点で吸血鬼とマスコミは呼んでいる。

発症者は凶暴化、紫外線への耐性を完全に失い、体温、心拍数が上昇する。体力や治癒能力も上昇、痛みに対する感覚も弱っているように、通常の間人間が即死するような傷でも数分は生きていられるらしい……。

という事を白井達は北海道の臨時防衛省から無線で聞いたそうだが、ちなみにクルピン博士はWHOに協力してワクチンを作った後、感染して射殺されたらしい。

「まあ奴らも生物です。頭や心臓を撃てば死にますし、撃たれれば大怪我をして死にます」

そう言つて古橋は話を締めくくつた。

「まあ、凄いやライオンかクマが大量発生したとでも考えればいい。撃てば死ぬんだからな」

中沢がそう言つた。まあその考えで問題ないだろう。

「んでどうする？俺達はここでサバイバルしなきゃならんが、武器弾薬はあるのか？」

俺は古橋達に訊いたが、3人は力強く頷いた。

「大丈夫です。だいぶ撤退時に持ってかれましたが、それでも2週間は毎日撃つても戦える分は残ってます」

それを聞いて俺達は安心した。まず奴らを追い払っただけの武器が無ければ話にならない。

「それと、市内に残っている兵士の位置がGPSで送られてきています。これを使えば効率的に合流できるはずです。・・・ほとんど死体かもしれません」

いまや軍の全ての兵士にはGPSが装備されている。これを使えば誰がどこにいるかわかるという訳だ。俺達は位置を知らせるためのデバイスを持っていなかったため、GPSを活用できなかったのだが。

搜索は古橋、中沢が行く事になった。俺と黒井は基地で死体を埋葬する。身元がわかる遺体は埋葬、身元不明は火葬することになった。古橋、中沢がハンビーで出て行った後、俺と黒井はひたすらに死体を集め、何か身元がわかる物を探す羽目になった。遺体はダーク・シーカーズも含め、約300体ほどあった。兵士、警官、医師等は簡単にわかったが、それ以外はほとんどわからなかった。

黒田の動かすシヨベルカーでひたすら穴を掘り、遺体を身元がわかる物と埋め、大量にあった塩化ビニール製のパイプを突き刺して墓標代わりとした。身元不明遺体は大きな穴を掘ってまとめて放り込み、ガソリンをかけて火をつけた。

腐臭と肉が焼ける嫌な臭いが充満する中、それは6時間ばかり続いた。

地獄だった。

第30話 side 龍 「物資調達 3」 (後書き)

昨日アイ・アム・レジェンドのブルーレイをもう一度借りて見ました。個人的にはやはり別エンディングの方が良かったと思います。あと、この話のウィルスの話云々は映画設定に自分で追加したものがありません。ご注意ください。

第31話 side 龍 「物資調達 4」

火葬を始めて6時間後、基地内のほとんどの遺体の処理が終わった午後3時に中沢達が戻ってきていた。ハンビーの後ろには、どこかで回収してきたのか、4輪の軽装甲機動車が二台続いていた。中沢達が車両から出てきた。装甲車からも1人ずつ降りて来る。迷彩服のパターンから陸軍の兵士だとわかった。

「山寺修一等陸士です」

「海原弘毅陸士長です」

そう言つて2人は敬礼した。俺も答礼する。

「こいつらだけでも見つけられて良かったよ」

聞くと2人は街中を基地に向かっていて、それを古橋が見つけたらしい。

昨日の感染者らの襲撃を2人だけで切り抜けられたのは、幸運と実力が重なったのだろう。

「あの軽装甲機動車はどうしたんだ？」

「ああ、あれは乗り捨てられてたんだ。道路に放置車がたくさんあった場所に乗り捨てられていた」

装甲車の中を覗くと、中には兵士の死体があつた。全部合わせて13人はいるだろうか。

全員血塗れで、あちこちに咬まれた痕があつた。最後まで戦つて死んだに違いない。

「結局その2人しか見つけれなかったんで、兵士の死体を全部乗せてきた」

その後兵士達の死体を埋葬し、武器庫から武器を運んで装甲車に積み込んだ。

武器庫から銃器類を全て搬出し、廊下を何回も往復して装甲車へと運ぶ。

「これは・・・、反則武器だな」

古橋がそう言って持った武器を眺めた。持っているのはパンツァーファウスト3、使い捨てロケット弾だ。戦車の装甲も破壊するこの武器なら、ダークシーカーズにとっても反則的な武器だろう。

その後もM82A1対物狙撃銃や、MGL140グレネードランチャー、M2重機関銃やその3脚を積めるだけ積み込んでいく。もちろん、基地に残っていた食料等もあるだけ車両に放り込んでおく。

俺は基地内の売店へ行った。基地には自家発電装置や、太陽、風力発電等の設備があったので冷蔵庫はまだ生きていた。冷蔵庫の中からコーラを取り出し、一息に飲む。うーん、やっぱり炭酸はいいね。売店にあった嗜好品等も邪魔にならない限り持って行く。本当は基地に立て籠もりたいところだが、正門やあちこちの柵が破壊されてどこにダークシーカーズが潜んでいるかわからず、仕方なく浜浦小学校を要塞化することになった。全ての装備を装甲車へと搬入した俺達は車列を組んで、一路浜浦小学校へと向かった。

浜浦小学校に着いたのは午後4時、日没まで後2時間ほどある。皆は3両の装甲車の姿に驚いていたよ。さらに増えた迷彩服の姿に心

強くなつたらしく、安堵した表情を見せる子も多かつた。

俺達はこれからどうするかを、既に無線で堂々達に伝えていた。堂々達も学校に2名の兵士が来たと伝え、どこの警備を強化するかを提案してきた。最終的に決定した事に沿ってこれから行動する事になる。

各自車両を降りてすぐ、黒田と中沢は指向性散弾クレイモア

ようは無線でお手軽に爆破できる地雷　　を仕掛けるために、ク

レイモアを持って学校を囲む壁に向かつて行つた。古橋と白井は学校の周りに放置されている車両にC4爆弾を仕掛ける。俺と牧と堂々々は屋上に体育祭で使うようなテント（学校に備品としてあつた）を張り、M2重機関銃を手分けして運んだ。M2は38キロもあるが、ぎっくり腰に注意すれば1人でも運べる。そうして4丁のM2と三脚を東西北の方向に配置した。その後基地から持ち出した大型の赤外線暗視装置を、夜間の監視のためにテント下に置く。新しくやって来た2人の兵士は怪我していたようで、現在教室で休んでいた。

全ての作業が終わつたのは、日没直前だつた。

第31話 side 龍 「物資調達 4」 (後書き)

ついに豚インフルエンザがフェーズ4になりましたね。新型インフルエンザの発生は覚悟していましたが、やはり実際に発生するのは怖いです。皆さんも注意してください。

ボク達は今日、駅前のスーパーまで5往復以上して食料を集めた。略奪でも起きて、あちこちの店は荒らされているだろうと予想していたが、意外な事にスーパーは荒らされていないかった。皆感染者から逃れるのに精一杯で、略奪なんてする暇が無かったのかもしれない。

集めた食料は牧さんがそこから拝借した軽トラに載せ、学校まで運んだ。新鮮さが命の魚類はさすがに腐り始めていたが、肉類や野菜類は大半が無事だった。どうやらスーパーの屋上にも太陽光と風力の発電機がついていて発電できていたかららしい。

そうして集められた食料は、学校の給食室にある冷蔵庫の中に入れられた。この冷蔵庫も最優先で電力が送られているので、いつも通り動いている。冷蔵庫も、数百人分の食材を蓄えられるということで、持って来た食料は殆どが納められた。

ちなみに食料調達に行った子には、ご褒美として菓子とジュースが配られた。1日ぶりに食べる甘いものはとても美味しかった。

その後牧さんの指示で、肉を塩につけている最中に（どうやら干し肉にするらしい）東さん達が帰ってきた。何故か装甲車が3両もあり、昼前に浜浦小学校に来た二人と合わせて兵士が11人になった。東さん達は車を降りるとすぐに色々な武器やら何やらを運び出し、あちこちに何かを仕掛けていた。そういえば、まだ拳銃を返していなかったっけ。

日没直後、ボク達は体育館に集められた。軍の人達が全員自己紹介

した後、東さん達は次のような事を行うと発表した。

1、10人ずつまとまって班を作り、班長を決める

2、次の班を作る

・物資調達班・・・必要な物、食料を集める

・食料班・・・同じく食料を集める。また、近隣の農家にある

野菜、家畜等を育てて収穫する

・施設班・・・壊れたり補強する場所を工事する

・衛生班・・・応急手当、健康調査等を行う

・武器班・・・銃器の管理、整備を行う。これは兵士が行うの

で、人手が必要な時だけ編成

・警備班・・・学校の警備、管理を行い、銃器を携帯する。こ

れも兵士が行うので人手が必要な時だけ編成

3、12歳以上の者はローテーションで兵士と共に夜間の見張り

4、15歳以上の者で、選抜された（信用できる）人は銃器の取扱、
撃ち方を教わる

5、選抜された（信用できる）人は銃器を携帯する

6、先ほど決めた仕事の班長には、銃器を携帯してもらう

・・・ということだ。何人かが反対したが、最終的には決定した。
ボクは女子高生組の班長に選ばれた。何人か不良っぽい中学生の少
年達が、銃を寄越せと喚いていたが東さん達は無視した。ギャルっ
ぱい子達はそもそも話を聞いていなかった。

その後またボク達は第一校舎に戻され、食事 食材を調理する

暇が無く、昨日と同じく乾パンだったが　　を配られた。明かりは点けてはいけないという事だったので、スーパ―から持って来たロウソクに火をつけて明かりとした。特にやる事もなく、トイレ（この辺り一帯は地下水が豊富で、電源さえあれば地下水が汲み上げられる）に行く途中、東さんとアイドルの仲原美里が何か言い争っているのが聞こえた。それにしてもあの2人、知り合いなのだろうか。

トイレから教室へ戻った時には、皆は既に寝ていた。ボクも寝ようとしたが、なかなか寝付けなかった。仕方ないので毛布を持って屋上に行く。今は東さんが見張りをしているという事だったので、何か話したかった。

第32話 side 優 「役割」 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第33話 side 龍 「過去」

俺は疲れていた。美里と口論する羽目になり（詳細は省く）、それが終わって屋上で監視を行おうとしたら尾田軍司おたぐんじとかいう高校1年の軍事オタクから質問攻めにあい（疲れた）、さっき小銃を持たせてやって写真を撮ってやったら帰って行った。

そこでようやく監視に専念出来ると思つたら、今度は優が毛布を持って（なぜ？）屋上が上がってきた。どうやら眠れないらしい。

「何やってるんですか？」

優が訊いて来た。どうやら俺が見ている赤外線暗視装置の事を言っているようだ。

「ん、ああ監視してんの」

そう言つて優をこちらに呼ぶ。この暗視装置に繋いだ画面には、熱を発するものは白く、低音のものは黒く表示されている。これによつて生物がいるかどうか確認できるという訳だ。

「そつえば、何でお前ここに居るんだ？」

「えっと、眠れなくて・・・」

優はそう言つてテントの下に置いてあつた椅子に座つた。俺は牧が調達してきてくれたウイスキーを飲む。

その時、街の方から数回の銃声が聞こえた。2回、そしてまた2回。それが何回か同時に鳴っている。どうやら民間用の猟銃らしい。

「大丈夫でしょうか・・・」

優が心配そうに言った。まだ銃声は響いているが、焦って撃つているというよりも、余裕を持って撃つている感じがする。

「大丈夫じゃないか？ 追いついたり殺そうとして撃つてる様には聞こえない。むしろ楽しんで撃つてる感じがする？」

「でも、結構危ないんじゃないんですか？ 銃を持ってても」

確かに奴らは危険だが、対処法が無いわけじゃない。

「そりゃ近い場所で襲われたら危険だ。ただし距離が開いていれば余裕を持って対処できる。銃は飛び道具だからな。まあ近接戦でもバットやら鉄パイプとかリーチの長い武器を使えば大丈夫だろう」

「ふーん、そうなんですか」

そう言つて優は黙った。さっきラジオ（本州に取り残されたマスコミが流しているらしい）では、各地で武器を持った吸血鬼狩猟団ダーク・シーカーズが発生していると放送していた。民間用の猟銃からバットまでありとあらゆる武器を持った人達が、各地で集団でダークシーカーズを襲っているらしい。街から聞こえる銃声も、そういった類の人達がダークシーカーズを襲っているかもしれない。

「そういえば、何でさっき仲原美里と喧嘩してたんですか？」

優が訊いて来た。俺の心を抉り、尚且つ面倒くさいが、暇だったので説明することにした。

「教えてもいいけど、少し前フリ長いぞ」

「いいですよ、どうせ眠れないし」

そう言つて優は毛布を被つたので、俺は説明してやる事にした。
まあ、年表みたいにするとこんな感じか。

2009年4月 「北」が弾道ミサイル実験を行う。これにより憲法改正運動が大きくなる。

2009年10月 「北」は立て続けに核実験と弾道ミサイル実験を強行。弾道ミサイルは不具合により、日本へ落下。MDシステムにより迎撃を行うも失敗。ミサイルは都心へ落下し、死者は991人。これにより「北」は国際社会より大きな批判を浴び、経済封鎖が実施される。

2009年12月 憲法改正。九条改定と防衛軍設置。同時に離島奪回、上陸作戦のために海兵隊が創設される。

2010年4月 国際裁判所の審判の結果、「南」の竹島占拠は不法行為と判断される。しかし期限が来ても撤退しなかったため、海兵隊による奪還作戦を発動。多大な抵抗を受けるも、双方死者無しの奇跡の作戦を成功させる。国際審判に逆らう事に抵抗を感じた部隊が、短時間の内に投降したことも戦死者無しの理由とも言われている。

俺の親父と母は、陸上自衛隊時代に西部方面普通科連隊に所属していた。同じ部隊で出会い、そして結婚し、そして俺を生んだ。

2人は海兵隊設置と共に所属を海兵隊へ移し、竹島奪還作戦にも参

加した。その後設立された海兵隊強襲偵察隊に2人は籍を移した。俺は当時15歳だった。

2011年 防衛軍はアフガニスタンへ復興支援の名目で派遣される。強襲偵察隊もこれに派遣される。

両親は、そこで戦死した。

親父達は山間部の村の支援のため、技術者や援助物資を積んだ大型ヘリに護衛として乗り込んでいた。まだ戦死者は発生せず、地元民も友好的だったためかこのまま何も起きずに終わると思っていた。だが村に向かう途中、過激派のミサイル攻撃を受けヘリは不時着。不時着時は死者は出なかったが、直後に過激派が100名もの部隊を引き連れて攻撃してきた。母は負傷した仲間を援護している最中に戦死、仲間も次々負傷、または戦死した。親父は被弾しながらも最後までヘリを守り、その後救援が到着した直後に死んだ。

この時戦死者4名、負傷者12名。日本は戦後初めての戦死者を出した。

俺の家には、直後からマスコミが押しかけてきた。俺もショックを受けていた、なぜなら親がいきなり死んでしまったからだ。だがマスコミはそんな俺の気持ちも知らず、行く先々で取材を行った。中には高校の教室に乗り込んで来てまで取材を行おうとしたこともあった。マスコミにとっては、俺は両親を一度に失った悲劇の少年として扱おうとしたのだろう。

葬式の際には右翼、左翼、マスコミが大集結して、機動隊まで出動する羽目になった。市民団体とやらは、葬式の最中でも外から拡声器で大声を上げ、葬式を妨害した。

俺は学校の薦めもあつてしばらく休学した。だがそうすると、マスコミは次に俺の友達に次々取材をかけた。俺の親のあること無い事、色々な事が報道された。

その時俺には同じクラスの彼女がいた。その名は仲原美里、当時もアイドルとして活動していて、マスコミの取材を最も受けていた。つきあう事になった理由は高校入学式の終了後、帰宅途中にチェーンが外れた彼女の自転車を俺が直し、彼女が好意を抱いてくれて一カ月後に告白された。

美里はマスコミの取材にも黙秘を通し、毎晩俺を案ずるメールを送ってきてくれた。美里は俺の心の支えになっていた。

俺が高校三年生になったころ、俺は進路に海兵隊を志望した。親父と同じ道を歩みたいと思つたからだ。だが美里は反対した。理由は危険だからという事で、彼女と俺は大喧嘩をってしまったが、最終的には美里も渋々同意してくれた。

2015年 俺は任官初年で、いきなり中国に派遣された。当時中国では内紛真つ盛りで、邦人を撤退させる作戦に俺は派遣された。その作戦は最終的には成功したが、民兵の攻撃により戦死者19名という被害が出た。俺の同期も死んだ。

俺が始めて人を殺したのはその時だ。

俺が帰国した直後、美里は俺に軍を辞めてくれと言い出した。美里の本音は危険だからということだったが、彼女の事務所は俺に体面的な事で辞めてくれと言った。

当時週刊誌に美里の彼氏 俺の事だが の存在がばれ始めていた。正体はわかっていなかったが、彼氏が兵士だという噂も野

次馬根性を加速させたのだろう。

映画の主演も決まった彼女にそんなスキャンダルがあつてはまずい、転職するか別れてくれ。そうマネージャーに言われた。彼女のアイドルとしての人生を終わらせてはいけない。そう判断し俺は覚悟を決め、

美里に別れを切り出した。

別れてくれと俺が言ったら、美里は当然拒否した。まだアイドルを辞めたくないし、俺とも別れたくない。俺とも数年後結婚したい、そう言ったが俺も軍を辞める訳にはいかなかった。中国での作戦で俺が発揮した才能を、強襲偵察隊で役立たせてくれとスカウトが来ていたし、俺を必要としている作戦もあった。ここで中途半端に俺の任務を投げ出してはいけない。

そう俺が言つと美里は、

「そう、龍君つて人殺しが好きなんだね」

と言つた。俺はその言葉に切れた。俺が仲間を失つてまで人を殺すのは、お前達を守るためだ、批判する謂われは無い。そう言つて俺は美里の家を飛び出して、以後連絡を絶つた。

彼女が本気でそう言ったのでは無いことはわかっていたが、俺はその言葉に納得できなかった。

そうして俺は美里と別れたが、何の因果か昨日初春市に戻っていた美里にばったり会ってしまった、という訳だ。

優は最後まで聞いた後、寝てしまった。俺は優に毛布をしっかりと掛け、監視を続行した。その後牧と古橋が交代に来て、俺は優を教室

まで背負って行き、そこで寝かせた。

俺も別の教室に行き、そこで寝る。思えば37時間以上睡眠を取って
ていなかったなので、俺はあつという間に
夢の世界へ行った。

現在時刻 2018年 5月18日 00:04

第33話 side 龍 「過去」(後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。なお、龍の中国での作戦内容は、希望者が多かったら外伝という形で書きたいと思います。

第34話 side 優（前書き）

2万アクセス突破しました！頑張ります！！

第34話 side 優

現在 5月18日 06:30

ボクが起きた時、そこは屋上ではなく皆で使っている教室だった。どうやら東さんの話を聞いた後ボクは眠ってしまい、その後東さんはここまで運んで来てくれたのだろう。

皆も起き始めていて、ボクが顔を洗った後、放送で食堂に皆来るように言われた。どうやら朝食の時間らしい。昨日決めた炊事のローテーションでは、今日は詩織たちが朝食の担当だった。

食堂に着くと、既に多くの子供達が席に着いていた。詩織達は給食室にある大型調理器で食事を作っていた。どうやら東さん達の基地にあるのと使い方が似ているらしく、東さん達によって食事方法が指導された。

その後皆に配られたのは、昨日駅前から持って来た（盗って来た）食パン、オムレツ、ハムだった。ようやくまともな食事でありつけたので、皆喜んでいる。

「んじゃ、いただきます」

詩織達に料理の指導をしていた白井さんが言った。それに続いて皆もいただきますと言い、食事を始めた。やはりおいしかったが、何人かが文句をつけ始めた。

「んだよ、まずいじゃねーか!」

そう怒鳴ったのは、昨日も何かにつけて文句を言っていた少年だった。周りの子がおびえている。

「おい君、食事中は大声をださない」

そうなだめた黒田さんに、少年が怒鳴り返した。

「うるせえ!!こんなもん食えるか!!」

そう言つて席を立つた。皆の雰囲気が悪くなる。だが近くにいた東さんが少年の手を掴んだ。

「君、名前は？」

「澤田健さわだ けんだ!!何か文句あんのか？」

「じゃあ澤田君。君はこの料理を作ってくれた松本さん達に文句を言いたいのか？」

「そうだ!!こんなまずいもん食ってられるか!!」

そう言つと澤田は食堂を出て行こうとしたが、東さんが腕をがっちりホールドしていて放さない。

「じゃあ、君はおいしい食事を作ってくれるの？」

「うっ……」

「まずいまずい言うなら君が作ればいい。さあどうぞ、食材も道具もあるから自由に作れば？そんな事が言えるならこれよりおいしいものを作つてよ」

「……」

「それとも、君は文句だけしか言えないようなお子様なのかな？」
「……」

そう言つと澤田は東さんを殴ろうとした、だが相手が悪かつたようだ。東さんは素早く澤田の腕を掴み、逆手に捻り上げる。澤田は抵抗しようとしたが、全く動けないようだ。ぎりぎり腕を捻り上げ、澤田の口から悲鳴が聞こえる。

「おい東、やりすぎだ」

堂々さんがそう言ったので、東さんはようやく手を離した。澤田は椅子を蹴飛ばし、食堂から出て行った。

「んじゃ皆、食事に戻って」

そう言つて堂々さんは手を叩き、皆は食事に戻った。だが空気は一気に重くなつた。

「んだよ、偉そうに」

まだ食堂に残っていた、澤田の取り巻きがそう言った。澤田のことでストレスが溜まっていたボクは、そいつに怒鳴つた。

「何だよ、自分じゃ何も出来ないくせに文句ばかり言うな!!」

「うっせーんだよ!! てめえは黙ってる!!」

そう言われたがボクは反論した。

「自分達が今まで何かやったの!?! 東さん達に守られてばかりで、そのくせ何も手伝おうとしない。そんなやつが文句を言うな!!」

「おいちよつと・・・」

東さんが何か言ったが、ボクは続けた。

「だいたいなんなの？文句をつける以外に何かすることは無いの？」

「おい・・・」

「うっせーんだよ！！女の癖に変な風に喋って、男に口答えするな
！！！」

「黙れ！！！！！」

東さんがいきなり怒鳴った。食堂が一気に静まりかえる。

「何か聞こえないか？」

そう言つて東さんは天井を見上げた。ガラス張りの天井の向こう、
青空から何か金属音が聞こえた。だんだん近づいて来るそれは、ま
るでジェット機のエンジン音のような・・・。
ジェット機？

その時、無線係として、屋上に詰めていたはずの牧さんが、食堂に
飛び込んできた。

「おい！！軍の輸送機だ！！！」

皆が一斉に天井を見上げた。金属音はどんどん大きくなり・・・、

ガラス張りの天井に、飛行する輸送機が見えた。

第34話 side 優（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

第35話 side 龍

俺は走って食堂の外へ出た。そしてもう一度その輸送機を見る。2発のエンジン、C-2輸送機だった。C-1輸送機の後継で、色々なところが高性能になっている。

とっさに発炎筒を（放置してある車から盗った）ポーチから引き抜き、点火して振り回した。どうやらC-2も俺達の存在に気付いたらしく、旋回を始めた。その後浜浦小学校の上空で、貨物室から何かを投下した。それは空中でパラシュートを開き、こちらへ降下してくる。全部で4つはあるだろうか。

「何じゃ、ありゃ。デージーカッター（超高威力の爆弾の一種。大型なので輸送機から投下する）か？」

牧が呟いた。その可能性は充分ある。本州で感染が広がっている以上、発生した街を爆弾でふっ飛ばしてもおかしくない。まあ本州全土に投下するだけの爆弾があるはずもないが。堂々が軽装甲機動車の無線機を握ると、いきなり声が聞こえた。

『あー、あー、こちら防衛空軍航空支援集団、第401飛行隊所属ヘラクレス3-4だ。機長は中沢博一^{なかにわ ひろし}等空尉だ』

ん？中沢？どつかで聞いたことが・・・。

「兄貴！？何やってんだこんなところで！！」

中沢が怒鳴った。ああ思い出した、確か中沢には空軍所属の兄がい

たんだっけ。

『何って、物資投下任務を遂行中だが、何か？』

「物資？中身は何ですか？」

俺は訊いてみた。爆弾だったりしないだろうな・・・？

『食料、水、医薬品・・・。そして武器弾薬』

「何で武器があるんだ？」

中沢弟が訊いた。

『いやあ、もう軍や警察は国民を全員守る事なんて出来ん。だからこういう事態になったら、全ての成人に武器を渡して自衛してもらおう。って事が2週間前に決まったらしい。海外からありったけの武器弾薬をかき集めて来たけど、それを配布する前にこういう事態になった。だけど本州ではまだたくさんの方が生きてる、だから生存者が多いと思われる地域にはこうして武器を配ってるって訳さ』

と中沢兄が答えた。やがて地上に着地した箱を、牧が駆け寄って開けた。一メートル50センチ×50センチ×50センチくらいのその箱の中には、多種多様の武器弾薬が入っていた。新品同様の銃もあれば、傷がついている銃もあった。まるでアメリカの銃器店で売っている物をそのまま持って来たような感じだ。

「まさか全部銃が入っている訳じゃないですよね？」

『他の2つは食料、水、医薬品だ。そして赤く塗られてる箱があるだろ？それはお前等へのプレゼントだ』

確かに他の3つの箱は銀色なのに対し、一つだけ青い。箱を開けてみた。

「おお！小銃の弾倉に機関銃の弾薬帯、手榴弾、そして・・・、なんだこりゃ？」

牧がそう言って取り出したのは、かなり大きめの封筒だった。何か入ってる。

『それは俺からのプレゼントだ。俺の宝物だったんだからな』

牧は封筒を開けた。中に入っていたのは

エロ本だった。

「・・・何ですかこのエロ本？」

『俺が大切にとつといたもんだが、お前等に　へブウ！！』

『何てモン渡してんですかアンタは！！』

『やめて！！今フライト中だから殴るのはやめて！！』

そう中沢兄の悲鳴が聞こえ、機体がふらふらと傾いた。誰かが中沢兄を殴っているようだ。

『　　今のは忘れてくれ。とにかく、これだけあれば当分やっていけるだろう』

「俺達の救助は　　してくれないんですよね」

俺が訊くと、中沢兄は残念そうな声で答えた。

『ああ。昨日発表された通り、本州にいる人は感染の疑いや、ウイ

ルスを本州の外に運ぶ恐れがあるから連れて行けない。まあ本州を放棄・封鎖するとはいつても、通行を遮断して必要なものを本州の外に持つていったただけだ。それに・・・」

「それに？」

「軍人や警官、医師等ワクチンを打った人は本州へ行けるらしい。まあ行くなら民間人を見捨てるって事だから、あまり薦められないが」

なるほど、確かにワクチンを打てば感染はしない。ウイルスを運ぶ恐れはあるが、消毒すれば問題は無いだろう。

「大丈夫です。そんなことはしません。それより、本州にも俺達の外に誰かいるんですか？」

「ああ、偵察衛星から本州にはまだ多数の人間がいることが確認されている。初春市の市街地にも誰かいるっぽいな」

昨日聞こえた銃声も、その人達が撃っていたんだろう。まあ今生きているかはわからないが。

「とにかく、俺達は他の町にも物資を投下して帰還する。ここに留まるのはそろそろ限界だ」

「わかった。じゃあ兄貴も頑張れよ」

中沢弟が無線に呼びかけた。兄もそれに答え

「了解、それでは貴官らの無事を祈る！！」

そう言って、C-2輸送機は南に進路を向け、翼を上下に振った。俺達も手を振って答える。

機体が遠ざかり、やがてC-2は見えなくなった。

第35話 side 龍（後書き）

外伝の製作が決定しました。舞台は中国です。

第36話 side 龍

今日やる事はまだあった。昨日に引き続き生活必需品や食料の搜索。軍人組は基地に行つてまだ残っている武器や、その他物資を搜索する。その他警察署に行つて武器の確保、ガソリンスタンドからガソリンを盗つて来る。工事現場から鉄板を持ってきて、学校の窓を全て塞ぐという作業もあった。

朝に物資調達班や、食料班、施設班を決めて行動を開始した。だがその前に女子が水を浴びたいと言つてきた。まあ3日も風呂に入っていないからな。学校に風呂なんて無いので、プールにあるシャワーを使わせたが、全員が出るまで1時間は掛かった。

俺は今日は学校に残つて警備をする。昨日直接学校に来た2人の兵士、赤井大和と青野武蔵も物資を調達する事になった。

皆が出て行つた後、俺は先程投下された武器弾薬を調べ始めた。使えるかどうか調べ、今まで集めた武器と一緒に管理するためだ。銃のほとんどは、安く、堅牢で大量に調達出来るものが多かった。

自動拳銃のほとんどが軍用でも使われている物で、信頼性が高く、装弾数も多い。ただし構造が複雑なので、素人が持つには少し不安である。

リボルバーは装弾数が少ないものの威力の高い銃弾が使える。反動

が少なく、構造が簡単で強度が高く、信頼性も高いので素人に持たせても大丈夫だろう。

散弾銃は近距離での命中力、破壊力がとんでもなくすごいが、こんな大きな物子供に持たせる訳にはいかない。

最後に出てきたのは、ボルトアクション式小銃だった。一発撃つ毎にボルトで装填しなければならないが、遠距離での命中率、破壊力は大きい。また構造が簡単で安く、反動が少ないため狩猟や狙撃にもってこいだ。スコープは付いていなかったが。

俺が銃を点検していると、いつの間にか隣に尾田軍司が立っていた。たしかコイツは施設班で、学校で待機していたんだっけ。どうやら軍オタの血が騒ぐらしい。コイツは銃に詳しいだろう。

「おい軍オタ、暇だったらその銃を分別しといてくれ」

「軍オタって・・・僕のことですか？」

「お前以外に誰がいる？だから、素人が使えそうなものを選んでくれ」

そう言つて俺は作業に戻った。後ろでは軍司が作業を始めたようだ。おいおい、目が危ない輝きを放ってるぞ・・・。

作業を続ける。投下された武器は民間用として売っている物が多い。まあ下手に複雑な軍用のを投下して、銃に疎い日本人が使えなかつたら困るし、この事態が収拾した後に強力な武器で犯罪を行われたら困るしな。

軍の基地から持って来た装備や死んだ米兵の装備は強力な物だ。そ

れも俺は仕分けていく。拳銃、短機関銃、突撃銃、軽機関銃等の装備が確実に作動するかを調べた。幸い、全て使用出来る。

「これでいいですか？」

点検が大体終わった頃、軍司が訊いて来た。軍司が選んだ素人用拳銃はリボルバー拳銃が多く、自動拳銃は少なかった。

「おお、いい感じじゃん。じゃ、この中からどれ持つか決めていいよ」

俺がそう言うと、軍司は一瞬鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。俺達は昨晚、誰に銃を渡すか決めていて、軍司にも渡すと決まっていた（ちなみに不良には渡さん）。銃に関する豊富な知識があるので、コイツなら教えて10分で銃を使いこなせるだろう。

「えええ！？まじですか！？ええと、それなら・・・」

それから一分余り悩み、ようやく軍司は持つ拳銃を決めた。

「ベレッタM92Fか、いいセンスだ」

ベレッタM92Fは米軍で使用されているベストセラーの自動拳銃だ。装弾数は15発、9mm弾を使用する。軍司なら、何か問題が起きても大丈夫だろう。

「おっと待て、まだそれは預かつとく」

俺は目が怪しい輝きを放つ軍司の手から拳銃を取る。正式に渡すのは皆が帰ってきてからだ。

その時無線がなった。電源節約のため、緊急事態以外には通信はないと言っておいたのだが、何かあったのだろうか。

「どうした？何かあったのか？」

無線をしてきたのは中沢達だった。彼らは基地に向かったはずだが・

『いや何かって訳じゃないけど、ちょっと気になることが起きてな・』

「何だよ、早く言えよ」

そう言えば今日は、昨日あれほど電線に止まっていたカラスが余りいないな。昨日は死体を食っていて沢山いたはずだが・・・。

『死体が無い。町中の死体が、だ』

第36話 side 龍(後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

第37話 side 龍

「死体が無い・・・？」

『ああ、街中の死体が綺麗さっぱりない。多分食われたんじゃないか、奴らに』

「まずいな。あれだけあった死体が無いって事は、それだけ奴らの数が多いということだ。それに、奴らが餌を求めてさらに行動を強化するかもしれない。そうすると学校も見つかるかも知れん」

やがて市内の食べるものは無くなり、奴らは人間を襲い始めるかもしれない。そうするとこの学校は確実に見つかる。

その後数分対応策を協議した後無線を切り、俺は昼食の準備を始めた。学校に大量にあった飯ごうを使って米を炊こうとしたが、手伝うはずの子供達はほとんど米を炊けなかった。これだから最近の子は・・・

（俺はじじいか？）。

正午になって皆が戻ってきた。食料が大量に集まったが、鉄板も沢山集まった。中沢が工事現場のダンプカーに鉄板を大量に載せて戻って来ていたのは圧巻だった。

昼食を食っている最中、子供達がある事を頼んできた。曰く、服や色々なものを取って来たいので、一度家に帰りたいらしい。さらに動物を飼っている子は、ペットが飢え死にするかも知れないから早く連れてきたいと頼み込んできた。

兵士達で協議した結果、動物を飼っている子は今日中に家に一度帰らせ（子供達に押し切られた）、それ以外の子は明日から順に一時帰宅させる事になった。ほとんどの子は近くに住んでいるものの、

遠くに住んでいる子供達は兵士が付き添って帰らせる事にする。

俺は遠くに住んでいる（とはいってもここから30キロ位だが）少年を、車で家に連れて行く事になった。どうやら犬を飼っているらしく、とても心配しているようだ。

全員日没までに帰ることを確認して、俺達は出発した。誰もいない道路を最高速度で走り続けたので、少年の家にはすぐに着いた。

少年は車を降りるとすぐに家に入ろうとしたが、危険なので俺が先に入った。俺が家に先に入って安全を確認した後、少年はすぐに犬を見つけた。犬は立派なシェパードのオスで、名前はサムというらしい。

少年が服や必要な物をバッグに詰めている間、俺も台所で食料等を探していた。冷蔵庫は停電で止まっていて中身は腐っていたが、俺はカップラーメンや米等を見つけることが出来た。

少年の家族は見当たらなかった。本州から脱出したのか、死んだのか、感染したのか、俺には知る術がない。

荷物をまとめた少年とサムを車に乗せると、俺達は少年の家を離れた。その後市街地に入って、必要な物　人間の臭いを消す為の塩素系の薬品等　を調達するためにドラッグストアに入った。ドラッグストアにダークシーカーズはおらず、すぐに必要な物は手に入った。少年は荷物運びを手伝っていてサムを放していた。

必要な物をあらかた車に積み終わった頃、サムが何かを見つけたのか、隣の空きビルに入って行ってしまった。ビルの窓は全て遮光カーテンで遮られていて、中にはダークシーカーズがいるかもしれない。

サムを連れ戻そうとビルの中に入ろうとした少年を引きとめ、危険なので俺が連れ戻す事になった。

第37話 side 龍（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

第38話 side 龍

俺はサムが飛び込んでいった空きビルに入った。中はとても暗く、2メートル先も見えない。

「しまった。暗視装置持ってきてりや良かった」

俺は暗視装置を使うとは思っていなかったもので、学校に置いてきてしまった。だが今更取りに帰るのは時間が無いし、かといってサムを連れ帰らなかつたら少年は悲しむだろう。

俺は意を決めて小銃のフラッシュユニットとレーザーサイト（レーザー光で大まかな弾着点を示す装置）を点け、先に進んだ。ライトの明かりが漏れないように時々手で覆い、わずかな光をもとに慎重に前に進む。

一階は学習塾が入っていたようで、わずかに学習机が残っていたが、他はがらんとこの空間だった。ここには何の気配も無い。他の小部屋も調べていくが、サムもダークシーカーズもない。

二階へ進んでいくが、階段に何かを引きずったような後と赤い筋

血だ。

暗闇は人を恐怖に陥れる。俺も今とても怖い。物陰から何か出てくるかもしれないという恐怖で、いつも以上に神経質になってしまう。一歩一歩足元を確かめ、時々ライトで前を照らしながら階段を上る。二階は何かの事務所が入っていたようだ。そして二階に上がった瞬

間　　実際はもっと早く気付いていたが　　強烈な鉄の臭いと腐敗臭がした。何かの気配がする。それも一つ二つではない。

小部屋の前を通った瞬間、何かが視界の端に映った。慌てて物陰に隠れ、ライトを手で塞いで明かりを少なくする。

ゆっくりと、俺は小部屋を覗き込み、そして言葉を失った。わずかな光の先に見えたのは、何かを囲むようにして立っているダークシ―カーズの集団と、血の海、そして何か赤い塊。

俺は「それ」に目を凝らし、その瞬間吐きそうになった。なぜならそれは

人の一部だったから。

白い管のようなもの　　腸だ　　や、体から離れ、白く、血の気を失った手。そしてこちらを向いている、胴から離れた女性の頭。

俺は気付いた。こいつ等死体を食っているのだ。部屋の奥には、まだ死体がいくつもある。

とっさに後ずさった俺の足に、何かが当たった。見たくはなかったが、意を決して下を向いた。白く、ライトの光を照らし返すそれは、人のものと思われる骨だった。綺麗に食われていて、肉がついていない。

パニックを起こしそうになったが、何とか声を出さずに済んだ。今のは見なかった事にして、事務所があったらしき大きな部屋に入った。中は少し机がある以外は、何も無かった。窓には遮光カーテンがある。

「サム！！サム！！」

小声で叫ぶ。すると、机の下で何か動いたような気がした。すぐに駆け寄ると、そこにはサムがいた。頭を撫でてやり、

「オーケイサム、いい子だからさっさとご主人様のところに帰ろう」

そう言っただけはサムを連れもどそうとしたが、サムは何か怯えたように俺の後ろをずっと見ていた。気付いた。振り返った。

ダークシーカーがいた。

そいつは吼えると、俺に向けて飛び掛ってきた。即座に危険を察知し、俺は小銃をそいつに向け、3点バーストで撃った。

ダークシーカーズは空中で吹き飛んだが、銃声を聞いて大量のダークシーカーズが現れた。

「走れサム！！走れ！！」

俺はそう言っただけはフルオートに切り替え、撃った。何体かが倒れたが、全部倒す前に小銃の弾倉が空になる。すかさず拳銃を抜いて3発撃ち、一体を倒した。

このままでは弾が切れた瞬間に殺される。そう思い、俺は広い窓に向けて走った。窓に何発か撃つ。窓を破るためだ。遮光カーテンが着弾で揺れたが、窓が割れたかはわからない。

それでも俺は窓に向けて走る。サムは狭い別の場所を通って外に出たようだ。窓まで後1メートルという所で、両肩をダークシーカーズに掴まれた。構わず窓に突っ込み、窓ガラスをぶち破って外に出て　　浮遊感と共に落ちた。

俺と二体のダークシーカーズは共に2階の高さから落ちたが、下にワゴン車があった。何とか受身を取ってワゴン車の上に落ちたが、体中に痛みが走った。ワゴン車は3人分の体重を受け止めて屋根がつぶれ、窓が粉々に割れた。

ダークシーカーズは外に出て日光を浴びた瞬間にもがき始め、煙のようなものを出してのた打ち回った。ワゴン車の上から降りた俺は黙ってその様を見ていた。だがすぐに、ダークシーカーズは動かなくなった。

「大丈夫ですか!？」

外で待機していた少年が驚いたように駆けつけてきた。そりゃ驚くだろう、玄関から入っていった奴が、2階の窓から出てきたんだから。

「いや、大丈夫」

ガラスの破片で切った傷や、打撲のあざも出来ていたが、幸い大きな怪我は無い。差し出された手を掴んで立ち上がり、ちゃっかり先に外に出ていたサムの頭を撫でる。

「もう勝手にどこかに行くなよ」

サムがワンと吼えた。反省しているのか、コイツ? まあ犬だしな。取りあえず怪我の手当てをし、地図にマーキングする。誰かが不用意に、このビルに入らないようにするためだ。

その後車に戻り、俺達は学校に戻った。

学校に戻ったのは日没の数分前だった。俺達が最後に返ってきたので、車から降りると今日ドラッグストアで調達してきた塩素系薬品を取り出し、門の付近にまいた。人間の臭いを消すためだ。塩素の嫌な臭いが漂ったが、安全には代えられない。

全ての出入り口に薬品を撒き終わったのは、日没の直後だった。

第38話 side 龍（後書き）

この話のシーンは、本家アイアムレジェンドを参考にしました。
御意見、ご感想お待ちしております。

ボクは今日、近くの農家に行つて来た。仕事は家畜と野菜の量を調べる事だった。どうやら食べるため、これから育てていくらしい。農家には誰もおらず、何日も餌をもらっていないかった数羽の鶏や牛が元気を無くしていた。

それらに餌と水をやり（なぜか兵士の1人が餌のやり方をよく知っていた。農家出身？）、庭で作られていた野菜を調べて回った。どうやら販売用のようで、数はとても多かった。それらにも水を与え、今日の仕事は終わった。

夕方、東さんが迷彩服をボロボロにし、血まみれで帰ってきた（本人曰く、よくあることらしい）。皆驚いていたけど、本人が元気そうなので結局心配はしていなかった。

夕飯をまた食堂で食べ（あの文句をつけていた奴もなんだかんだで来ていた）、早い就寝時間が来た。東さん達曰く、夜には極力発見されるのを防ぐために、明かりを点けないということだ。そのせいでまだ20時から寝る事になった。ボクは今日の23時から3交代制の監視を手伝う事になっているのでさっさと寝る。今日は昨日と違い、よく眠れた。

22時50分になり、腕時計のアラーム音で目が覚めた。他の子を起こさないように気をつけ、そつと教室から出た。

屋上には既に3人の兵士がいた。確か、赤井さんと白井さんと黒田さんだっけ。他の子6人も来て（あの仲原美里もいた。色々訊きたい事があった）、監視任務が始まった。監視といつても、警備室で

監視カメラの映像を見るか、屋上で暗視装置をのぞいているだけの仕事だ。

ボクと仲原美里は警備室で監視、他の5人と兵士達は屋上で監視することになった。カメラの見方と使い方を教わり、ボク達は警備室に入った。

いくつもある画面を見ているのは少し苦痛だったが、質問もあるので2人しかない警備室は逆に最高の環境だ。数分がたち、ボクは思い切って仲原美里に話しかけてみた。

「あの、仲原美里さんですね。少し訊きたいことがあるんですけど」

少し驚いたような顔をしていたが、すぐに笑って

「いいよ。それと、呼び方は美里でいい」

どうやら話しかけてもいい雰囲気だ。意を決して質問する。

「東さんの、どこを好きになったんですか？」

「それを訊くって事は、私と龍君が恋人同士だったって知ってるのね・・・」

美里さんは苦笑いしながら答えてくれた。

「そうね・・・、基本的には全部だけど。特にいうならその優しさかな。誰かが困っていたらすぐに助けてくれる。そのためには自分が犠牲になってもいいって考えてるみたい」

「いい人じゃないですか」

「でも、龍君は優しすぎる。どんな危険な場所でも、相手が誰でも

助けを求められたら助けずにはいられない。だから軍に入ったんだと思う」

「そういえば、何で大学入らなかつたんでしょね。大学に入ってからでもよかつたのに。やっぱり偏差値が足りないのかな？それともお金の問題ですかね？」

「ううん、それも違う。龍君と私、県立高校通つてたんだけど、龍君、そこでいつも飢えから10番に入る成績だった。だから進学してたら東大・・・、いや、世界トップクラスの外国の大学に入れたかもしれない。先生達も物凄く期待してた」

その県立高校は、千葉県どころか公立高としては日本最高水準の学校だ。そんな彼が進学しなかつたのは、やはりお金の問題なのだろうか。

そう訊くと、

「お金の問題じゃなかつたと思う。龍君の両親は一生懸命働いて結構所得あつたらしいし、それに、あまり嬉しい事じゃないけど両親が戦死されて、国から補償金合計4億もらつたらしいよ。だから、金銭的なことじゃ無いと思う」

「じゃあ何で大学入らなかつたんでしょね。大学入ってから軍に入つてもよかつたのに」

「龍君が言つてた。今の大学は腐つてる、大学に入つても馬鹿ばかりで勉強すらない人が多い。俺は一応大学でやる授業の知識は持っている。そんな風に時間を無駄にせず、貴重な経験を今の内に積んでおく。そう言つてた」

「大学生が激怒しそうですね」

「先生達は一生懸命進学を勧めたけど、龍君は首を縦に振らなかつた。大企業からも就職の誘いが沢山来てたけど、それらを蹴つて軍に入った。私も龍君の心情はわからないけど、彼はそういう道を選んだ。だから私はそれを尊重すべきだつたのに、反対した。その後

酷い事も言った。だから龍君は私と別れたんだと思う」

そういえば東さんもそんな事を言っていた。東さんは、美里さんのためを思っただけで別れたと言っていた。

これはいわゆる、お互いの意見の不一致、とでもいうのかな？

美里さんが暗い表情になってしまったので、ボクはあわてて彼女を上げます。

「それは多分違いますよ。東さんはあなたの為に別れたんです」

「私の為……？」

ボクは昨日聞いたことを話した。美里さんはそれを聞いて

「そう……、やっぱり龍君は優しいな」

そう言った。その後、2人で交代時間が来るまで色々な話をした。そしてボクと美里さんは友達になった。

現在時刻 2018年 5月19日 03:00

第39話 side 優（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

第40話 side 籠

現在 5月19日 07:00

今日は朝から雨が降っている。なので今日は学校の補強を行うことになった。朝飯を食べ終わり、昨日大量にやって来た動物達に餌をあげた後、昨日調達した鉄板を窓に張る。

もつとも全ての窓に鉄板を張るのは無理なので、4階の子供達がいる教室だけ鉄板を張る事になる。鉄板にちようつがいを取り付け、窓の下にぶら下げて緊急時にすぐ窓を塞げるようにする。同じく窓枠にレールを溶接し、鉄板をスライドさせられるようにした。だが鉄板にちようつがいを取り付ける作業は結構難しく、時間がかかってしまった。

加工し終わった鉄板は取り付け方を教わった子供達に渡され、子供達が窓に鉄板を取り付ける。取り付け終わったら兵士がちゃんと出ているかを確認した。

そうして4階の窓に全て鉄板を貼り付け終わったが、作業にかかった時間は8時間だった。

作業が終わった後、俺達は一応食料調達に行つたが、近くの店には何も残っていないかった。中には明らかに俺達以外の人間が持つて行った形跡もあつた。生存者がいるなら俺達も助けたいが、何故か生存者は生きている事を知らせていない。なぜだろうか？

こうして俺達のサバイバル生活は軌道に乗り始めた。朝起きたら食料調達や野菜栽培を行い、夜になったら極力生きている痕跡を隠して外を監視する。数週間後には子供達に勉強も教えることになった。この事態が収拾したら皆普通の生活に戻る事になる、そうなった時に皆が馬鹿になってたら笑えない。暇な時には高校生や俺達が教科

書片手に勉強を教えた。

食料面の心配も当分はいらなくなった。給食室の冷凍室には食料も大量に残っているし、近くの農家の畑や校庭を耕して野菜を収穫した。

銃器の取扱方法も選抜した子供達に教えた。最初は戸惑う子供もいたが、最終的には皆上達した。余談だが、尾田軍司は教えてから10分で扱い方をマスターし、さらにその30分後には他の子供達に扱い方を教えていた。未恐ろしいな、コイツは。

必要な物は無人の店から調達するか自作し、電気も風力、太陽光から得る。必要な時には車のバッテリーを大量に繋げて大容量の電力を発生させた。

度々基地にも戻り、時々通信できる衛生無線機で世界の様子を調べてみた。どうやら世界中でダークシーカーズが現れて大混乱に陥っているらしい。高緯度の寒い地方に行くほど発生率は少ないらしいが、逆に生存者が大量に押しかけて大変なことになっている。世界中のあらゆる組織が崩壊しかけていて、規律をまだ保っているのはワクチンを優先的に配られた軍隊、警察、消防、そして政府機関の一部だけ（医師は患者に紛れたダークシーカーズにやられて死者が多かった）という有様で、それらの組織はあちこちで集合し要塞を作っている。民族も宗教も関係ない。昨日まで戦っていた敵と、今日は手を取り合ってダークシーカーズとの脅威に共に立ち向かう、なんて事も世界各地で起きている。

日本でも、九州、四国、北海道では今のところあまり感染者はいないらしい。何とか普通の生活がまだ出来ていると、偶然繋がった臨時防衛省の通信士が言っていた。

世界が平和を取り戻すのはいつだろうか。そして俺達はいつまで生き延びれるのか。

第40話 side 龍（後書き）

この次から一気に時間が飛びます。そして新たな展開も・・・。

第41話 side 龍(前書き)

3万アクセス突破!!これからも引き続き頑張ります!!外伝も現在だいぶ構想が浮かび上がっています。

第41話 side 龍

現在 2018年 8月15日 07:54

朝飯を食い、二度寝をしていた俺は何か怒鳴りあう声で目を覚ました。昨日は4時まで見張りだったから眠いのだが、喧嘩をしているならば止めなければなるまい。

廊下に出ると、中学生の少年が澤田に殴られていた。澤田は最近乱暴になってきていて、何かと因縁をつけているらしい。

「おい！何やってんだ！！」

そうやって俺は澤田から少年を離すが、澤田はまだ殴ろうとする。仕方なく俺は澤田の腕を掴み、捻りあげた。簡単な無力化術で、澤田は悲鳴をあげ、ようやく大人しくなった。

「おい、誰か風紀委員呼んで来い！」

俺は野次馬に向けてそう言った。風紀委員とは学校での治安の維持、事件の防止を行うために作られた委員である。風紀委員は会議で決められ、全部で6名いる。風紀委員は警棒、手錠の他、拳銃の携帯が認められている。軍で言う憲兵隊（日本じゃ警務隊だな）のようなものだ。

委員とついているのは、主体的に行動しているのは子供達であるからだ。彼らができるだけ、学校のような体裁を取りたいらしい。

「どうして殴ったりしたんだ？」

俺は風紀委員が来るまでの間、少し澤田に訊いた。

「だってコイツ、肩がぶつかっても謝らないんだぜ！」

そんな理由で殴るなんて不良か、コイツは？あ、不良だった。

「謝りましたよ、そしたら土下座しろとか何とか言ってきて殴られたんです」

少年は必死に弁解する。まあ少年の言っている事が正しいだろう。

澤田は最近、何かといちゃもんをつけて誰かに暴力を振るっている。その時風紀委員が到着した。風紀委員は澤田に手錠をかけ（最初はかけていなかったのだが、暴行がエスカレートしていくのでやむなく手錠をさせた）、独房と呼ばれる部屋に連れて行った。独房は教室の一室を改造し、窓とドアに鉄格子をつけたものである。何か問題を起こした者はそこに入れられ、「評議会」で処罰が決められる。

評議会とは、子供達が作った自治組織だ。議長を中心に12人の議員で構成されていて、行動予定や決まり事の制定、各班の統制を行う。議長と議員は、子供達の中から選挙で決められる。

ちなみに俺達大人は評議会には余り干渉しない。せいぜい助言をするだけだ。これは子供達に自分自身を律してもらったためである。

「さてと今日は・・・、何も予定は入ってないな」

風紀委員達が澤田を連行していった後、俺は今日の予定を確認した。黒板に書かれている俺の名前の下の予定欄には何も書かれていない。

つまり今日は自由に行動していいということだ。
やる事も無いので、今日は狩りをする事になった。

俺は現在武器庫兼警備室まで行き、武器を借りた。警備室で当番をしていた中沢に話を通し、ボルトアクション式狙撃銃と車の鍵を借りた。

「そういえばお前、今日基地に行くのか？」

ロッカーを改造した武器庫から銃を取り出しつつ、中沢が訊いて来た。そういえば今日は終戦の日だ。基地にはその慰霊碑があるから、俺が慰霊に行くのか訊いているのだろう。

「ああ、特に予定も入ってないしな。花でも捧げてくるよ」

そうやって俺は車の鍵を受け取った。警備室を出て俺達が使っている教室に戻り、必要な物を持って学校を出た。校舎を出た頃、野菜を育てている農家へ水撒きと家畜の餌やりに行つて来た優達にあった。

「あれ、どこいくんですか？」

「ちよつと一狩り行つてくる」

優は一応評議会の評議をやっている。先程澤田が独房に入れられたと伝えると、

「またですか……。いい加減おとなしくして欲しいですね」

「ああ、全くだ」

そう言つて優と別れ、今日乗っていく軽トラ（無論農家から調達）に乗り込んだ。狩つてきた獲物を乗せるために軽トラックを選択している。

ちなみに今の俺の服装は、下は迷彩服のズボンにスニーカー、上は黒のＴシャツの上に迷彩服を羽織っているようなラフな格好だ。拳銃や小銃の弾倉はベルトに付けたポーチに放り込んである。

軽トラのエンジンを点け、俺は学校を出発した。

第41話 side 龍（後書き）

一気に3ヶ月飛びました。今回はサバイバル生活を描いてみました。

第42話 side 龍

無人の街を軽トラックが走っていく。歩道を歩く人間も、車道を走る車もない。あるのは、道端を歩く野良猫・野良犬と、放置され、錆び始めた乗用車だけだ。

誰も手入れていないので、道路脇の草がすごい長さに育っている。俺は周囲に注意しながら、獲物がどこかにいないか探した。すると、一瞬横道に一匹の鹿がいるのが見えた。俺は速度を落とし、注意しながら鹿の50メートル手前で車を停める。

どうやら雄鹿らしく、角が大きい。鹿がこんなところにいるのは、動物園から脱走したからだ。他にも猪や何か（何が脱走したかは正確にはわからない）が脱走し、天敵もいないので大繁殖しているという訳だ。

鹿は道路脇に生えた草を食べるのに夢中で、俺の存在に気付いていない。俺は助手席からレミントン M700 狙撃銃を取り出し、構えた。スコープの調整は事前に済ませてある。

極力音を立てないようにボルトを引き、初弾を装填した。狙撃銃を構えてスコープを覗き、鹿の額に十字線の中心を合わせた。鹿はまだこちらに気付いていない。

「悪いな、成仏しろよ・・・」

そう言っただけ俺は引き金を引いた。鹿の頭に穴が開き、鹿はどつと倒れた。近寄って見てみると、まだ若い雄鹿だった。

俺は鹿にしばらく手を合わせ、そしてトラックに（苦勞して）載せた。そして基地に向かう。

基地には太平洋戦争の犠牲者の慰霊碑がある。俺は途中でとってき

た花を供え、敬礼した。太平洋戦争はもう70年以上昔のことだが、俺達軍人は戦争の悲惨さを忘れてはいけない。そんな事を思いつつ、敬礼を解いた。

基地には時々衛生無線を聞きに行く程度なので、基地内の草や木が伸び放題になっている。俺は慰霊碑の周りの草だけ刈って帰ることにした。意外と時間がかかったが、何とか慰霊碑の周りを綺麗にして俺は帰った。

学校に帰る途中に大きな猪を発見し、これも仕留めた。これで当分の心配は無い。肉は現在狩って来た鹿や猪や鳥か、農家にあつた鶏を食べている。牛は残念ながら乳牛だったので食べていない。

今日の夕飯の献立を考えながら14:00時に学校に帰って来たが、何か騒がしい。何かあつたようだ。兵士達が武装を整えているのを見て、俺はこれはただごとでは無いと悟った。

やれやれ、また面倒事か・・・。

第42話 side 龍(後書き)

さて、何があったのでしょうか？次回明らかになります。

第43話 side 優

今日ボク達は暇なので、少し街に行つてみる事にした。学校から外に出るには許可が必要だが、日没までに帰ってくる事、誰かが拳銃を持っていること（ボクは拳銃携帯を許可されていた。本当ならこんな物騒な物持ち歩きたくないけど・・・）を確約して許可が出た。

ボクと詩織と春奈、そして中学生の女子数人と一緒に街まで行く事になった。水、食料、拳銃を持つて学校から出る。今は9時だった。街までは歩いていく事になったが、皆はそれに文句をつけなかった。自分が望んで外出するからだ。

色々な事を話しつつ、誰もいない道路を街まで歩いて行く。ここで生活し始めた頃は、皆怯えてホームシックになっていた。だが自分達だけで生活していかないといけない状況だったので、次第に落ち着いて皆がまとまってきた。最初の頃は色々大変だったが、次第に皆慣れてきて、食事や洗濯なども上手に出来るようになった。

これは東さんを始めとした大人たちと、多くの仲間がいたからだろう。でなければ、皆と協力することは出来なかつたはずだ。最も、澤田みたいに協調性ゼロの奴もいるけどね。

30分ほど皆と話しているうちに、市街地に着いた。

誰もいない街は何か物悲しかった。動くものは動物だけ。車が沢山走っていた大通りには放置された車がある。

ボク達が来た理由はここで色々調達する物があったからだ。といっても本や娯楽品や化粧品等である。

まずは手近な雑貨屋に入り（誰かに荒らされていた）、洗剤や石鹸を調達し、持って来たバッグに入れた。次に本屋に入ってまだ読んでいない小説を調達した。レンタルビデオショップに入りDVDを持ち出し（学校にあるテレビは、時々使う事が許可されていた）、ついでに好きなアーティストのCDも失敬した。

学校での娯楽は、本を読むか、将棋などのアナログゲームをするか、外に出て遊ぶくらいしかない。電気を使うような遊びは、余裕がない限り許可されていないからだ。

なのでいつでも読める本は、皆の娯楽方法として広く受け入れられていた。それでもいつかは全部の本を読みきってしまうので、新しく調達しなければならぬ。

物資調達もあらかた終わり、さあ帰ろうかという所で中学生の少女がトイレに行きたいと言って来た。まだ時間があつたので詩織と一緒に行かせ（詩織も拳銃を携帯している）、ボク達5人は2人が帰って来るまでしばらく待つことにする。

数分後、草を踏み分けるがさがさという音がした。2人が帰って来たのかと思っただけ、それにしても足音が多い。

まだ昼だし、ダークシーカーズは出ないはずだったので猫か犬かが歩いているのかと思っただけ。

けど、それは間違っていた。

足音はこちらに近づいて来て、やがてボク達の近くで止まった。ボクはそちらを見た。

ビルの陰から出てきたのは、銃を持った男だった。

同時に、頭に何か硬い物が押し付けられた。

「女じゃねえか、やったな！」

物陰から一斉に10人ほどの男が現れ、ボク達に銃を向けた。

「銃を捨てる。言う通りにすれば悪いようにはしない」

第43話 side 優（後書き）

脱出・外伝執筆始めました。よろしかったらそちらもご覧下さい。

第44話 side 龍

「・・・なるほど、そういう事なの」

俺は中沢から話を聞いて、現在の状況を把握した。簡単に言うと、ついさつき男達に解放された松本詩織の話によると、優達は頭のイカした男達に捕まって、人質として俺達との交渉に使われるらしい。

「んで、どうする？」

牧が聞いてきた。

「そりゃ早く助けるしかないだろ。それに早くしないと乱暴されるかもしれない」

俺は防弾チョッキに袖を通しつつ言った。今は交渉材料として（何を交渉するのは知らないが）使えるが、交渉できないと男達が知ったら何をされるかわかったもんじゃなし。

久々に完全武装し、軽装甲機動車に乗り込む。優達の所に行くのは俺、牧、堂々、赤井、青野の5人で、残りは学校で待機させる。

男達はどうかやら10人以上いるらしい。どうかやら街から銃声が時々響いていたのは、そいつらが銃を撃っていたようだ。

皆で作戦を慎重に練り、現場まで向かった。

街に着いて、優達が捕まっている所からかなり遠い所で軽装甲機動車から降りた。発見されるのを防ぐためだ。

男達との交渉は俺1人で行い、他の皆は俺が合図するまで隠れて待機させる。

「よし、行け！」

俺がそういうと、4人は事前に決められた場所に向かって走って行った。俺は1人で現場に向かう。

しばらく大通りを歩いていくと、ジーパンにTシャツの10人ほどの男達と、彼らに囲まれて座っている優達の姿が見えた。

「おい、止まれ！！」

リーダーらしき男が怒鳴り、数人の男に拳銃を向けられる。彼らが持っている拳銃は、どうやら2ヶ月前に市内に投下されたものようだ。

今は抵抗しても無駄なので素直に止まり、両手を上に挙げる。

「俺はそいつらのグループのリーダーだ。彼女等を引き渡してもらいたい」

俺はそのリーダーらしき男に言う。男達に取り囲まれ、ボディチェックを受けた。防弾チョッキを脱がされ、持っていた小銃と拳銃とナイフを取り上げられた。

「引き渡してもいいが、条件がある」

「何でしょう？」

「貴様等が持っている武器弾薬、食料、燃料、医薬品を全て渡せ。さもなきゃこいつ等は返さない」

男達は俺が1人だと思っているのか、辺りにあまり警戒していない。

そういえば松本達は、大人は兵士1人だけしかいないと誤魔化してくれていたらしい。機転の利くやつらだ。

「生憎ですがその条件は飲めません。何分子供達が沢山いるので」「じゃあ交渉は終わりだ。おい、こいつらを連れて行け」

そもそも交渉ですら無いじゃん、と思ったが、ここで連れて行かれるのは少し困る。男達が優達に銃を突きつけた。

「待って下さい、こちらも2つ提案します」

「提案？」

「ええ。我々の隠れ家に来ませんか？安全と食料を提供します」

これは中々素晴らしい提案だと思うのだが、思った通り即座に却下された。ま、こういうバカどもは自分の思う通りに事が進まないのがいやなタイプ、いわゆる自己中ってやつだからな。

「嫌だね。俺達に指揮権をくれるなら話は別だがな」

「それは無理ですね」

アホだなこいつ等。頭おかしいんじゃないか？

「なあ斉木、その男殺してさっさとこの女達とヤっちゃおうぜ」

仲間の男がにやけながらリーダー（今の話から斉木というらしい）に言った。そいつの腕には青い無数の注射痕があった。覚醒剤もやっているのか？

そういえば周りの男達もほとんど覚醒剤かシンナーをやっているようだ。どうやら恐怖で発狂しないように薬物を使っていたのが、ついに頭がおかしくなっただけらしい。

「まあ待て。2つ目の提案とやらを聞いてから、そいつら自由にしていぜ」

その言葉に優達が恐怖に震えた。出来れば穏便に済ませたかったが、面倒なのでさっさと終わらせよう。

「2つ目の提案は・・・」

一旦区切り、続けた。

「彼女達を放して、さっさとつせる」

俺の言葉に男達は、は？何言ってるのコイツ？とばかりに一瞬ほくけ、そして大笑いした。

「放せ？何言ってるのお前？お前1人で何が出来るんだ？」

ぎゃははは、と大笑いして斉木は拳銃を俺に向けた。俺は最後通牒を男達に突きつける。

「そう、今彼女達を放せば少なくとも死なずに済むぞ。だから俺に銃を突きつけるのはやめとけ」

「武器もないお前がどうやって俺達を殺すんだ？まあいい」

そう言っつて斉木は俺にリボルバー拳銃を突きつけた。俺は一回上に挙げている両手の拳を握り、また開いた。

「武器や食料のありかを教えてくれなかったのは残念だが、まあいい。女達をいたぶって訊くさ。それじゃ、死ね」
「そっくりそのままあんたらに返すさ、その言葉」

馬鹿にされていると思ったのか斉木の顔が歪み、リボルバーの引き金に指をかけた。俺はもう一度両手の拳を握り、開いた。

銃声が辺りに木霊した。

だが俺は撃たれなかった。かわりに目の前の斉木の胸に穴が開き、血を噴き出して倒れた。

続いてあちこちから連続した銃声が響き、優達に銃を突きつけていた男達の頭が弾け、胸に大穴を開けて次々倒れた。

「だからやめろと言っただ」

俺はそう呟いて、何が起きたかわからないような顔をしている優達の所に歩いた。優達に銃を突きつけていた男達は、体のあちこちに穴を開けてピクリとも動かない。

「大丈夫か!？」

俺はそう言っつて優達に手を貸して立たせた。ようやく状況を理解したらしく、死体を見て悲鳴を上げる子もいた。

「・・・何があっただんですか？」

中学生の少女に手を貸して立たせる。この子はまだ状況が理解できていないらしい。一応説明する。

俺は事前に優達と男達を取り囲むように兵を配置していた。もちろん誰にも見えないように。そして俺が合図したら撃つように命じておいた。手の拳を2度開いたら発砲の合図で、片手だけ開いたら殺さないように（腕等狙って）、両手を開いたら殺害目的で発砲、ということだった。

できれば殺したくは無かったが、男達が優達に銃を突きつけていたので、優達の安全を最優先するため殺害を許可した。

「ほら立て。帰るぞ」

俺がそう言っただけでまだ座り込んでいた優に手を貸した。倒れている背木に背を向ける格好になる。その時、

「危ない!!」

と優が怒鳴り・・・

左肩に大きな衝撃が走った。

第44話 side 龍（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

第45話 side 優

銃声と共に、東さんが肩から血の筋を引いて倒れた。その後ろには、胸を撃たれたはずの斉木が、上半身を起こして銃を握っていた。

斉木はまだ硝煙の昇る銃口をこちらに向けた。ボクの周りに銃は無い、あつても構える時間が無い。

やばい、死ぬ。

また銃声が響き、思わず目を瞑った。

ボクは死んでいなかった。

代わりに斉木の頭が半分弾け飛び、赤い脳漿と白い骨を撒き散らして倒れた。今度こそ斉木は死んだようだ。

「ああ、クソッ」

そう言つて東さんが起き上がった。ボクは駆け寄つて、まだ血が流れている東さんの肩の傷を押さえる。

「大丈夫ですか!？」

「ああ、何とか。心臓を撃たれなくて良かった」

そう言つて、東さんは腰のポーチから取り出した包帯を取り出して、自分の肩に巻こうとした。でも左手が使えないせいか随分手間取っているの、ボクが巻いていく。

「大丈夫か東!？」

兵士の皆が駆け寄ってきた。怪我を負っている人はいない。

「大丈夫だ。多分致命傷じゃなかったんだな、斉木は」

そう言うて誰の手も借りず立ち上がった。

「弾は貫通してません。だからさっさと取り除かないと」

撃たれた傷を調べていた青野さんが言った。ここで治療するのは無理なので、学校に戻って行こうらしい。

「俺と子供達は学校に帰る。何人がここに残って、こいつらの武器弾薬をかき集めてくれ」

そういうことで、怪我をした東さんとボク達、それを送る赤井さんは装甲車に押し込まれ(定員オーバーだった)、学校に帰った。

それから数時間後の夜。

ボク達はきつちり叱られ、そして反省するように言われた。今回は油断していたのが悪かった。

東さんは麻酔を打って肩から銃弾を摘出し、絶対安静を皆に言い渡された。幸い全治3週間程で、後遺症も無く治りそうだと言われていた。

ボクは今日の事を謝りに、東さんの部屋に向かった。

東さんは部屋で音楽を聴いていた。ボクが東さんに謝ると

「いいっていいって、これから気をつける。撃たれるのだからよくある事だし」

と言って笑っていた。

「そういえば、美里さんとは仲直りしたんですか？」

しばらく色々話した後、ボクは少し訊いてみた。この前ボクは東さんに、美里さんと仲直りするように頼んだのだ。理由は、美里さんが東さんに話しかけられないで悲しんでいたからだ。

「ん？ああ。少し話してみたよ。向こうもいきなり謝ってきたし、俺ももう気にしてないって言つといた」

「それ、本当ですか？」

「本当だよ、その後色々話した」

それなら本当に良かった。美里さんもこれ以上悲しまずにすむ。その後東さんとはしばらく談笑し、ボクは部屋に戻って眠った。

現在 2018年 8月16日 0:00

第45話 side 優（後書き）

次回から、色々やばい展開になっていきます。

第46話 side 龍(前書き)

やっとテストが終わりました……。これからなんとなくppする予定です。

第46話 side 龍

2018年 12月29日 11:00

いきなりそれは起きた。

寝ていた俺は、女の子の悲鳴で起きた。結構やばそうな悲鳴だったので俺が見に行くと、澤田と5人の仲間が数人の女の子を取り囲んでいた。澤田達の手にはナイフ、少女達は服を破かれほとんど半裸状態で泣いていた。

事態を察知した俺は即座に澤田達を無力化し（警棒で半殺しにした）、風紀委員に引き渡して牢屋にぶち込んだ。

話を訊くと、少女達は澤田達にナイフで脅され、強姦されそうになっていたらしい。澤田は悪い事ばかりやっていたが、今度は最悪だ。早速処罰を決める評議会が開かれ、俺達大人も意見を出すために呼ばれた。評議会では澤田達に厳罰を与える意見が多数だった。今のところ暇なので、俺は一緒に呼ばれた堂々に話しかけた。

「どうなるんだろうな？」

「さあ？最低で拘禁一ヶ月か（懲役は無い、ここの皆は労働義務があるからだ）、最悪で追放か・・・」

「まあそれが妥当だな」

そんな事を話している内に、だいぶ話がまとまってきた。どうやら厳罰を与える方向でまとまっているらしい。

「ここは禁固5ヶ月くらいが妥当じゃないか？」

「駄目だよ、だって危ないもん。今後誰かにまた同じ事するかもしれないじゃん」

少年少女の喧々諤々の議論の後、ようやく刑が決まった。ちなみに今回の議長は尾田軍司である。

「え、刑が決定したようなので発表します。澤田健、長谷博、近藤平治、江戸健一、大石宗次、竹田正樹、これらの6名は追放、これが今回の決定です。異議は？」

「無し！！！」

全員が唱和した。これで澤田達に対する処遇が決定した事になる。

「それでは、これにて評議会は終了します。風紀委員の方は6名に今回の決定を伝えてください」

その言葉で皆が起立し、解散した。風紀委員は牢屋に走って結果を伝える。

「追放か・・・、かなり厳しい決定だな」

「まあ、それだけの事をしたからな。特に澤田は」

追放とは、ここでは最も重い罰である。生きるのに必要最低限の物資を持たせた後、この学校から追放され、今後近づいてはいけないという事だ。

俺達も必要な物をまとめるよう頼まれたので、俺達も行動を開始した。

数時間後、俺や評議委員の面々、そして野次馬が校庭に集まっていた。俺達の前には追放される6人。風紀委員達が、6人の手錠を外した。手をさする者、こちらを睨み付ける者、様々な反応を見せた。

「必要な物は中に入っている。必要な物、住む所は自分達で探せ」

そうやって俺は大きいバッグを人数分渡した。彼らが持っていた私物も渡す。中には地図、工具、一週間分の水、食料、燃料、無線機。そして何人かは拳銃と弾薬、残りはボウガンと矢が入っている。最初は拳銃を渡すかどうか悩んだが、自衛と食料調達のために持たせる事になった。どのみち拳銃程度では、ここを襲撃しても俺達に一蹴されるのがオチだ。あまり脅威ではない。

「上等だ、こんな所出て行ってやるよ!!」

そうやって澤田達はバッグを受け取った。結局、彼らは今まで暴力を振るった相手に対して最後まで謝罪しなかった。

「出て行け!!」

「戻ってくるな!!」

「さっさと死ね!!」

そう言った声の子供達の間から聞こえた。澤田達に何らかの被害を受けた人は多い。彼らに対する恨みも多いのだろう。

「何!?ぶつ殺してやる!!」

そうやって澤田の仲間の1人が怒鳴り、バッグの中の拳銃を取り出

そうとした……が俺が素早く拳銃を突きつけたので動きが止まった。

「不審な動きはするな、死にたくなければ」

既に堂々が屋上上がった、こちらに狙撃銃を向けている。6人が誰かに危害を加えようとしたら、即座に射殺する予定だ。

他にも数人の兵士が小銃を構えた。初弾も装填し、俺の命令次第でいつでも撃てる。

「ほら、さっさと行け」

門が開けられ、澤田達が外に出た。こちらを睨み何か言おうとしたが、俺がさっさと行けと拳銃を振ったので、街に向かって歩き出した。

「いつかお前らぶつ殺してやる!!」

そう言つて澤田達は歩いて行つて、曲がり角を曲がつて姿が見えなくなつた。

結局この後、こいつらが原因で最悪の事態を迎えてしまつ訳だが、この時の俺達にはそれを知る術は無かつた。

第46話 side 龍（後書き）

随分久しぶりの投稿になりました。試験のせいです。結果？訊かないで下さい。今は紐なしバンジーで、自由落下の物理法則を自ら確かめたい気分です。

そういえば、最近

「自衛官にならないか？」

という勧誘を地連の人達に受けています。詳しくは次回で……。

第47話 side 龍

現在 2018年 12月31日 17:30

窓の外を見た。この地方では珍しく、雪が降っていた。かなりの大雪になりそうだ。
そんな俺達は今年越しの準備をしている。大掃除、年越し蕎麦の用意などなど。

「今年も終わりか・・・」

いつの間にかそう呟いていた。まあ毎年いつも、この季節にこの台詞を言っている気がするが。

しかし今年は、本当に最悪の年だ。来年こそは良い年になってもらいたい・・・。

とそんな事を考えていると、腕時計のアラームが鳴り、俺は整備していた銃から手を離れた。監視の時間だ。もう暗く、日はほとんど沈んでいた。

整備した銃を全て武器庫のロッカーに仕舞い、武器室兼警備室から出て屋上に向かった。廊下は冷たい空気で満たされており、吐く息が真っ白になる。

「結構降ってるな・・・」

俺が屋上に上がると、結構な量の雪が降っていた。後でソーラーパネルに積もった雪を取り除かなくては・・・。

その時、銃声が遠くから聞こえた。結構撃っているようだ。3日前

に追放された澤田達が撃っているのだろうか。
俺と同じく監視に来た中沢と、男子生徒3人による監視が始まった。

数分後、赤外線暗視装置を覗いていた俺は、こちらに走ってくる数名の人影を発見した。誰だろうか？

「中沢、誰かこっちに近づいてくる」

俺がそう言っていると、中沢は双眼鏡を取り出して覗いた。

「澤田だ。後他にやつの仲間2人がこっちに来ている」

「周囲にダークシーカーズは？」

「いない。何か必死そうな顔をしてるが・・・」

澤田？何でこちらに来るのだろうか。やつは俺達をぶっ殺してくれ
るんじゃないかったのか（笑）？俺は半ば呆れて言った。

「門を開けてやれ」

「何でお前等、ここに戻ってきた？」

俺がそう訊くと、澤田達3人はばつの悪そうな顔をして答えた。

「化け物に、襲われた。他の3人は奴らに殺された」

「何!？」

確かに3人の服には血がついているように見えた。

もし澤田達がダークシーカーズに襲われたなら、やつらは俺達に近付いてきているかもしれない。俺はそう思い、監視を強化するよう無線で命令した。

「確かに日が沈んでいないとはいえ、この暗さでは奴等も行動しているかもしれない。どこで襲われた？」

「街のビル街だ。そこで……」

「奴らに追われたか？後ろを何か追いかけて来なかったか？」

「来ていない……」

そう言うと、澤田は地面に座り込んだ。相当の距離を、全力で走ってきたようだ。

さつき赤外線暗視装置で周囲を調べたが、ダークシーカーズらしきものは見当たらなかった。ひとまず澤田達は追跡を逃れたようだが。

その時俺に代わって屋上にいた堂々が、無線をしてきた。

俺は、自分の考えが甘かった事を思い知らされた。

「ああ東、大変だ……。ダークシーカーズが、数十体こっちに来ている……」

最悪の事態が、迫りつつあった。

第47話 side 龍（後書き）

今年のある日、僕が近所の某空挺団の演習を見に行つてさ帰ろうという時、僕は視線を感じました。

周囲を見回すと、「自衛官募集」の旗が躍るテントがあり、制服姿の自衛官のお兄さんが僕を手招きしていました。

「キミキミ、ちょっとこっちに来て」

辺りを見回しても、僕以外に子供の姿は見えません。

「俺？」

と自分に指さすと、お兄さんは満面の笑みで

「そう！キミだよ！ちよつとこっちに来て」

近寄ると、そこには名簿があり、そこに

「田 男 17歳」

「x 沢x美 16歳」

の文字が多数。もしかして・・・

「キミ、自衛隊に興味ある？」

そうお兄さんに聞かれました。それから質問を沢山受け（高校どこ？進路決まつてる？どこ住んでる？等々）、そして

「良かったら、ここに名前書いてくれないかなあ」

僕はプライバシー云々に気をつけると親に聞かされていたので、最初は断りました。するとお兄さんは、沢山の利点（自衛隊のへり乗れるよ！護衛艦乗れるよ！！）を言い、トドメに

「じゃあ、書いてくれたらカレンダーあげるよ」

この一言で、僕は名簿に住所、氏名、電話番号、年齢を書きました（そういえば、13歳の少女の名前があった気が・・・）

今月初め

朝、自衛隊から電話がかかって来ました。内容は

「護衛艦乗りませんか？」

僕は興味もあつたのでOKしました。今月の30日に乗ってくる予定です。

そして今日・・・

「陸自のへりに乗りませんか？」

完全に目をつけられたな・・・。

第48話 side 龍 (前書き)

パソコンが不調になってしまい、更新がかなり遅れてしまいました。
・・o r z

第48話 side 龍

「何だと！？どこにいる！？」

俺は無線に怒鳴り返した。

『ここから約1.5キロ南！距離が1キロを切ったら狙撃を始める
！』

そう言っただけは無線を切った。くそ、大晦日に何てことだ。

俺はこつちを見ている澤田らに言っただけだ。

「とんでもない奴等を連れて来たな」

そう言っただけ俺は校舎に入り、屋上に向かって階段を駆け上がった。どうやらダークシーカーズは澤田達をわざと俺達の所に返し、そして人間が沢山いる場所ここを突き止め、そして襲おうとしているのだろう。とんでもなく知性が発達している。ダークシーカーズが進化しているのは本当のようだ。

その時、銃声が鳴り始めた。堂々が狙撃を始めたようだ。だが、いくら狙撃の天才の堂々でも、オリンピックの短距離走の選手並の速さで走る数十人もの敵を狙撃できるだろうか。

数十秒走って、俺はようやく屋上に出た。屋上では堂々が伏せ、馬鹿でかいバレットM82狙撃銃を撃っていた。周囲には葉莢が多数転がっている。

「駄目だ東、決定的な打撃を与えられん」

堂々が発砲しつつ言った。

「距離が500を切った！機銃を撃て！！」

狙撃銃のスコープを覗いていた堂々が怒鳴った。その声で、既にM2重機関銃に取り付いていた中沢が射撃を始めた。数発に一発の割合で混ぜられていた曳光弾が、レーザーのように夜空に直線を描いて飛んでゆく。

「駄目だ！奴等全然動きを止めないぞ！！」

既に他の兵士も携帯していた小銃をフルオートにして弾幕を張っているが、素早い動きの前に次々回避されている。どうやらC4爆弾を使うしかないようだ。

「C4を使う！番号は1から8番！牧、準備しろ！！」

俺は牧に指示した。牧はC4の起爆装置を取り出し、そしてタイミングを計り始める。

「距離100！！」

堂々が怒鳴った。学校に接近しつつあるダークシーカーズは弾幕によつてだいぶ数を減らしているが、それでもまだ50体はいるだろうか。俺は双眼鏡を取り出し、牧のためにカウントを始めた。

「距離50！！」

ダークシーカーズは集団でこちらにやって来ている。この様子だと、C4は奴らに大打撃を与えるだろう。・・・たぶん。

「カウント開始！！全員気をつける！！」

「了解！！」

俺の注意で皆が射撃を止め、降ってくるであろう破片等から体を防御する体勢になった。奴らは、後数秒で学校の塀に到達する。

「3、2、1、起爆！！」

牧が遠隔起爆装置のスイッチを押した。その瞬間俺も頭を下げる。

オレンジ色の閃光が走って空が一瞬昼のように明るくなり、続いて轟音が響いた。

そして様々な物が大きな放物線を描いて、俺達の頭の上に降ってきた。被ったヘルメットに何かの破片があたる音が聞こえる。

それらの破片からしばらく体を守り、降ってくる物が少なくなったのを見計らって立ち上がった。

学校の塀のすぐ隣にある、南側の道路上に放置してあった車が、ほとんど原型をとどめず破壊されていた。その周りには爆風で圧死したらしきダークシーカーズや、頭や体を車の金属板に引きちぎられてグチャグチャになっている死体があった。

さらに数体は、体を燃え上がらせてのた打ち回っている。俺にはそれが、何だか踊りを踊っているように見えた。

俺達はわざと車を道路上に放置し、その中にそれぞれC4爆弾を仕掛けていた。敵がやってきたらそいつを起爆させ、爆風と破片で殺害する作戦を立てていた。仕掛けられたC4は、きっちり役割を果たしていた。

さらに俺は、軽油をベースとして学校の理科室にあった材料を用いて（もちろん軍で習った）、特製の焼夷薬を作って車に搭載していた。車を爆破した際にその焼夷薬が飛散し、付着した対象を炎上させる（要はナパーム弾と同じ原理だ）予定だったが、ここまで上手くいくとは思っていなかった。化学万歳！！

「生きている奴はいるか？」

俺は立ち上がった堂々に訊いた。すでに堂々は狙撃銃を構え、周囲を警戒している。

「少なくともこの学校の周りにはいない。遠距離は煙と炎でよく見えんが」

「そうか」

俺はそう言っただけで状況を把握する事に努めた。南側を向いている校舎のガラスがあちこち割れている。屋上の太陽光発電のパネルも、降ってきた破片が当たったのか、1枚割れていた。さらに警備室からは、爆風で外部監視カメラが数台ぶっ壊れたと報告があった。被害は甚大、でもダークシーカーズを殲滅出来たんだからまあいいか。

「大変です二曹！！こっちに来てください！！」

赤外線暗視装置を覗いていた青野が叫んだ。急いで駆け寄り、そして俺は絶句した。

「嘘だろ・・・？」

俺が覗いたモニターには、画像処理された炎上する車の炎の白い色、そしてここから約10キロの場所が真っ白に染まって映っていた。火事でも起きていない限り、何か生物がいる反応だが、まさかあれは。

即座に双眼鏡を取り出し、確認する。俺の悪い予想は当たっていた。

「冗談だろ・・・！？」

狙撃銃のスコープを覗いていた堂々も呻いた。

俺達が見たもの、それはこちらに向けて走ってくる何百体ものダークシーカーズだった。

「・・・武器を扱える奴を全員集めて、武器を持たせる。そして銃座を設置するんだ」

俺はそう言い、息を大きく吸い込んだ。

どうやら、最悪の状況は、これから始まるらしい。

第48話 side 龍 (後書き)

御意見、ご感想お待ちしてます。

ちなみに、焼夷薬は本当に市販の薬品で作ることが出来るそうです。
もちろん作ってはいけませんよ。

第49話 side 龍

「急げ、早く武器を取るんだ!!」

俺はそう言い、武器の扱い方を教えた少年少女らに武器を次々手渡す。彼らは戸惑いながらも銃を受け取った。

「武器を貰った奴は下に行け。牧がいる!」

そう言つて拳銃と散弾銃を、高校生の少年に押し付けた。少年は青ざめた顔で銃を受け取る。そして皆の後に続き、急いで階段の方向へ走つて行く。

「何があつたんですか!？」

優が訊いてきたが、説明している暇は無い。

「後で説明する!これを持ってさっさと下に行け」

優にMP-5短機関銃サブマシンガンと弾倉を押し付け(優は拳銃を携帯している)、それ以上の話を遮る。優も皆の後に続き、牧のいる1階へと向かった。

ほとんど全員に銃の配布が終わった頃、尾田軍司が現れた。アメリカ軍の迷彩服を着ていて、腰にベレッタM92F拳銃(死んだ米兵から拝借)を下げている。

「・・・何だその迷彩服？」

「アメリカ軍の払い下げ品です。通販で買いました」
「・・・・・・・・」

そんなもん、買うな。

「そんな事より、どうしたんです？」

「ダークシーカーズが大量にこっちに来ている。全員で迎撃しないとやばい」

「子供達は？」

「部屋に入れた。窓とドアには鉄板が張ってて頑丈だが、まだ全員入っている訳じゃない。時間を稼がないと」

そう言うと、俺は武器庫に残っている武器を一瞥した。だいぶ子供達に渡したが、それでもまだ何丁か残っている。

「ほれ、お前にはこれがいいだろ」

俺はそう言って、M-4 A1カービンを渡した。この銃は軍用銃で単発、連発が選択でき、先程ほとんどの子供達に渡した民間用の銃より高性能だ（何故子供達に渡さなかったかということ、実弾訓練の時に軍用銃をマトモに扱える奴がほとんどいなかったから）。

「お前ならコイツを扱えるだろ。使い方はわかるな？」

そう言って、弾倉を数個差し出す。軍司はM-4を受け取ると弾倉をはめ、ボルトを引いて初弾を装填した。そしてベルトに弾倉を挿す。

ちなみに軍司は実弾訓練で他の子供達が的にほとんど銃弾を当てられないのに比べ、命中率がとんでもなく良かった。一般の兵士がレベル10、素人が1とすると、コイツは7くらいのレベルである。多分コイツは、ここにある武器はほとんど使えるだろう。

「もちろん使い方はわかってますとも。それで、どこに集合ですか？」

「この校舎の玄関だ。さっさと行け」

そう言うと、軍司は敬礼して部屋を出て行った。もはやアメリカ兵にしか見えない気がする。

「さて、俺も行かないと」

俺が武器庫にあったM240軽機関銃を持って玄関に行くと、すでに牧が状況を説明していた。全員の顔が青ざめ、牧に視線を合わせている。

「……そういうことで、君達は校舎の窓か校庭、もしくは玄関に出て射撃してもらうことになる。奴らが来るのは南の方向だ。何か質問はあるか？」

1人のライフルを持っている少女が手を挙げた。俺は牧に代わって質問する。

「何だい？」

「私、上手く銃なんか使えないんですけど……」

確かに、この少女は実弾訓練で最悪の成績だったな。実弾を使った訓練を校庭で行ったが、殆どの生徒は球を無駄にただけであった。

「今回は射撃が上手か下手かなんて関係ない。奴らが来たら一斉に

射撃して弾幕を張るだけだ、下手でも方向さえ間違わなきゃいい」
そう言うと、少女は黙って座った。そうしたら今度は散弾銃を持った少年が手を挙げた。

「奴らを撃つって事は殺すって事ですよね・・・？」

「そつだ。俺だって本当はこんな事させたくない。だが、ここで迎え撃たなかったら死ぬ奴が出るかもしれない。だから、頼む」

俺はそう言つて、頭を下げた。子供達に動揺が走る。

「・・・仕方ないですね。頑張りましょう！」

そう言つて少年は座った。皆も覚悟を決めたようだ。

「他に質問は？」

今度は、誰も手を挙げなかった。ここで退いたら死ぬ。なら戦うしかない事を、皆はようやく悟ったようだ。

「・・・よし、行くぞ!!！」

第49話 side 龍(後書き)

ああ、ターミネーターとトランスフォーマーが見たい!!!

第50話 side 龍

俺達は現在、無人となった2階にいる。ライフルを持った奴は2階、散弾銃と短機関銃を持った奴は1階の玄関に配置してある。ちなみに玄関には、真っ先にどこかに隠れようとしていた澤田達がいるはずだ（俺がボコって連れて行った）。

「うわ、積もってるな」

雪がだいぶ降ってきた。校庭には5センチくらい雪が積もっている。吐く息は白く、この地方では異常な程の降雪量だ。

「もっと降るかもしれませんね」

そう答えたのは尾田軍司だ。軍司には、俺の隣で援護してもらおう事になっている。

その時屋上から銃声が響いた。南側を向くように移動させた、4基のM2重機関銃が発砲を始めたのだ。曳光弾が屋上から、まだ車の燃えている塀の向こうへ飛んでいくのが見える。

『奴らが近づいてきた。全員、合図があったら発砲しろ』

無線機から堂々の声が聞こえた。玄関から赤井、牧、中沢が飛び出し、校庭に停めてあるハンビーと軽装甲機動車に乗り込み、屋根に設置してあるM2重機関銃を構えた。

銃声に混じり、爆発音まで聞こえてきた。グレネードランチャーを

使っているのだろうか。

『あと数十秒でここに到達する！ダークシーカーズを目視次第発砲しろー！』

また通信が聞こえた。俺はM240軽機関銃の2脚を立て、ベランダの柵の上に設置した。初弾を装填し、奴らが来るであろう方向に機関銃を向けた。軍司もM4カービンを構える。

数秒後、ダークシーカーズの大群が、学校前の家の陰から現れた。まるで地面が動いているようだ。

「撃てー！」

俺はそう怒鳴り、引き金を引いた。照準機の先で、ダークシーカーズが次々倒れるのが見えた。

続いて軍司が発砲し、他の子供達も撃ち始めた。物凄い数の銃弾がダークシーカーズに襲い掛かるが、倒しても倒しても後ろから現れる。

「死ね、死ねッー！」

「お前等なんかに殺されてたまるかー！」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

何か叫んでいる奴もいるが、銃声でよく聞き取れない。

「リロードする！援護しろー！」

俺はそう叫び、短くなった弾薬帯を別の弾薬帯を繋げた。その隙を、

ベランダから身を乗り出した軍司がカバーする。

弾の補給の終わった軽機関銃を奴らに向けたとき、奴らが塀をよじ登って侵入してくるのが見えた。すかさず照準を直し、塀の上に向けて発砲する。塀を登りきったダークシーカーズが、また塀の向こうへ落下していくのが見えた。

だがそれでも、ダークシーカーズは死体を乗り越えて来る。一体何体いるんだ！？まだ塀の向こうには沢山のダークシーカーズがいるのが見えた。

「塀を乗り越えられた！！」

誰かの叫び声が聞こえ、そちらを向いた。死体が山のように積み重なっているの、おそらくそれを踏み台にしてきたのだろう。

「牧、クレイモアをつかえ！！」

俺は無線機を掴むと怒鳴り、そしてまた射撃を始めた。焼けた薬莖が手に当たり、火傷を起こしそうになった。

ダークシーカーズが校庭に引かれた白線を越えようとした時、爆発が起きた。仕掛けられていたクレイモア指向性散弾が、牧の操作によって一斉に爆発したのだ。クレイモアは一瞬にして数百個の鉄球をばら撒き、正面にいた数十体のダークシーカーズをミンチ肉にした。

それでも、まだこちらに迫ってくるダークシーカーズは数百体以上いるように見えた。

積もった雪が、血に染まっている。

第50話 side 龍（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

第51話 side 龍

連射で加熱した銃身に雪が当たり、ジュツという音と共に蒸発した。ダークシーカーズの集団は既に校舎から約10メートル程まで近づいている。その向こうには、既に放棄された装甲車輛がダークシーカーズの群の中に埋もれている。

「数が減らない！一体どれだけいるんだ！？」

隣でM-4を連射している軍司が叫んだ。もう何百、いや何千発撃つただろうか。倒しても倒しても次々出てきているダークシーカーズに、俺は少し恐怖感を抱いていた。

「口を動かす暇があるなら撃て！」

俺はそう返してM240を連射した。照準機の間隙で2、3体のダークシーカーズが斃れるのを見てから、俺は短くなった弾薬帯を新たな弾薬帯と繋げようとした。だが、あたりにあるのは空薬莖だけで、弾薬箱の中は空になっていた。

「マジかよ……、もう弾が無いなんて……」

俺が何度も往復して持って来ていたM240の弾は5000発程あったと思う。それを撃ち切ってしまうとは……。

見れば他の子供達も弾を使い切ってしまったのか、銃声が少なくなっていた。弾は警備室にあるが、持つてくる暇が無い。持つてきても、こんなに接近されてしまっただけでは意味が無い。

俺は覚悟を決めて軽機関銃を連射し、全ての軽機関銃弾を撃ち尽くした。そして傍らに立てかけておいた09式小銃を取り上げると、フルオートで発砲する。

だが弾幕が薄くなつたせいで、ダークシーカーズが一気に接近してきた。ベランダから身を乗り出し、真下に向けて発砲する。ガラスが割れる音がして、玄関からの銃声が大きくなった。

『玄関に侵入された！！指示を！』

中沢が無線で訊いてきた。俺が返答しようとした時、目の前に一体のダークシーカーが現れた。壁を登って来たのだ！！
とっさに小銃の銃口を向けて発砲する。ダークシーカーの頭が粉々になり、下に落ちて行った。

「全員後退するぞ！早く4階に避難するんだ！！」

無線機にそう怒鳴り、俺は最後に壁を這い上がるつとする奴等を撃ち落とす。その場に留まろうとする軍司を廊下側に押しやる。子供達が次々ベランダから教室に入っていくのが見えた。

俺が後退しようとしたとき、1人ベランダで突っ立っている少年が見えた。少年は奇妙な笑みを顔に浮かべつつ、動こうとしない。

「君、聞こえたたる！さっさと後退するんだ！！」

俺がそう怒鳴っても少年は動かない。気が狂ったのか？

少年のいるベランダに、ダークシーカーズが這い上がって行った。

俺がそれを次々撃ち落すが、弾が切れた瞬間に一気にダークシーカーズはベランダの淵にたどり着いた。そして突っ立っている少年の

腕を掴み、下に引きずり落とそうとした。

少年はようやく正気に戻ったらしく、悲鳴を上げて腕を振り払おうとした。

「は、離せ、離せ!!」

俺は少年目掛けて登っていくダークシーカーズを次々撃ち落した。しかし俺の目の前にもダークシーカーズ達が現れ、一瞬そちらに気が移ってしまった。

どうにかそいつ等を倒し、少年の方を見て俺は絶句した。何かの心靈写真のようにベランダの外から腕が無数に突き出し、その何本かが少年の体を掴んで外に引っ張っていた。

「い、嫌だ! 離せ! 誰か助けて!!」

「少年ーッ!!」

俺は腕を突き出しているダークシーカーズ達に向けて銃口を向けたが、遅かった。

少年は無数の腕に引っ張られ、ベランダの外に落ちていった。

俺が少年の悲鳴を聞いて我に返り下を見ると、少年は多数のダークシーカーズに取り囲まれていた。少年は足を折ったらしく、変な方向に曲がった足を引きずりつつ拳銃を抜き、叫んだ。

「来るな!! 来ると撃つぞ! ぶっ殺すぞ!!」

だがそんな警告は通じるはずがない。ダークシーカーの一体が飛び掛ると、

「来るなって言ってるだろ!!」

と叫び、発砲した。飛び掛ってきたダークシーカーは頭が吹っ飛んで動かなくなつたが、他の奴らが次々襲い掛かった。

俺は無駄だと悟りつつ援護射撃をするが、多勢に無勢。たちまち少年とダークシーカーズの群の距離が縮まり、一体が少年の足に噛み付いた。それに続いて少年の体に次々とダークシーカーズが群がっていく。

「痛い！止める、止めてくれ!!嫌だ、まだ死にたくない!!」

少年は体のあちこちを喰われつつ絶叫していた。俺は少年が助からない事を悟り、ダークシーカーズの群の間から見える少年の頭に銃口を向けた。

俺が引き金を引く直前、少年は俺の方を向いてこう言った。

「おかあさん……」

その言葉を聞いた直後、俺は引き金を引いた。

「すまん、少年！許せ!!」

少年の体が一度大きく揺れた。

やがてその体もダークシーカーズの群に覆われ見えなくなった。俺はそれを見た後、ベランダから教室に入り、そして廊下に出た。

廊下には、返り血をあちこちに浴びた中沢達が立っていた。

第51話 side 龍（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

最近暇が無く、更新が滞っていますが、お許し下さい。

第52話 side 籠

俺が廊下に出ると中沢達が出て、俺はいきなり銃を突きつけられた。

「ちょ、待て。俺はまだ人間だぞ」

そついうと、皆は銃を降ろした。

「すまん、血でちよつと人間に見えなかった」

と牧が弁解する。俺が顔を触ると、手が真っ赤になった。多分さつき壁を登って来た奴を撃つた時に付いたんだろつ。

「脅かすなよ、皆」

俺はそつ言つて廊下にいる面々を見回した。数が少なすぎる。子供達は20人ほど下に行かせたが、今ここに居るのはどう見ても10人以下である。

最悪だな、全く。

「これだけしかいないつて事は、やっぱり・・・」

「ああ、奴らにやられた。玄関にあるバリケードを突破された時、皆対応が遅れて次々やられた」

中沢が答える。俺は10人以上死ぬという事態にショックを受けていた。さつさと後退させなかった俺の判断ミスが招いた惨事だとも言える。

だがそんな俺の心情を見透かしたように、生き残っていた優が口を開いた。

「東さんのせいじゃないですよ。自分を責めないで下さい」

その言葉に俺は若干救われた気がした。俺は後悔するのを止め、これからどう行動するかを考えた。

「早く4階に行くぞ。あそこの教室は鉄板が窓とドアに張ってあるから大丈夫なはずだ」

俺がそう言って、階段で4階に行こうとした時、ガラスが割れる音がした。そして降りている防火シャッター（おそらく中沢達が降ろしたのだろう）に、何かがぶつかる音が聞こえた。ダークシーカーズだ。

俺達が取る選択肢は2つ。

- 1 ．ここで迎撃する
- 2 ．さっさと4階に避難して、朝になるのを待つ

俺は迷うことなく後者を取った。残弾は僅かだし、ここで何体倒しても無駄だろうと思ったからだ。

「皆4階に行くぞ。俺達が殿をする」

そう言って俺は廊下の向こうに銃を向けた。生き残っている子供達が階段を登ろうとした時、ガラスの割れる音と共に窓からダークシーカーズが飛び込んできた。続いて教室のドアがドア枠ごと吹っ飛び、中からダークシーカーズの大群が溢れ出てきた。

俺達はダークシーカーズを撃つたが、先程同様、倒しても倒してもキリが無い。

「おい、さっさと行け!!」

まだその場を動いていなかった子供達に怒鳴り、俺達も後ろに下がりはじめた。ダークシーカーズは廊下を全力で走り、こちらまで後10メートル程の所まで近づいてきていた。コラ!廊下は走っちゃいけません!!と言いたくなる。

俺達が階段を登り始めた時、牧が壁にある防火シャッターを降ろす装置のスイッチを入れた。天井からシャッターが降りて来て、ダークシーカーズと俺達の間には壁を作った。ダークシーカーズがシャッターを叩く音が鳴り響く。

「これでひとまず時間は稼げるか?」

「いや、すぐに他の所から進入してくるだろう。さっさと4階に行かないと」

俺は訊いて来た牧にそう返し、廊下を2段飛ばしで駆け上がる。

俺達が3階に着いたとき、階下からシャッターを叩く音が消えた。

第52話 side 龍（後書き）

先日、陸上自衛隊のヘリ体験搭乗に行って来ました。乗ったのはUH-1Hヘリです。感想は、

- 1、飛行中、とても揺れる。
- 2、窓が椅子より低い位置にあり、しかも自分は窓際に座っていたので地上が良く見える。
- 3、高度が物凄く高い。人間が米粒サイズでした。人がゴミのよう（ry

結論：今後出来ればヘリコプターには乗りたくない。
以上です。

第53話 side 龍（前書き）

ようやくテストが終わり更新する事が出来ました。

後、皆様から「早く続きが読みたい！」「面白い！」等の感想が来ていて、とても力になりました。

願わくば、これから先も皆様に読んでもらいたいです。

第53話 side 籠

4階にはまだダークシーカーズはいなかった。

子供達が先に避難している（俺達もこれから避難する）教室は、階段から100メートルくらいの校舎の端あたりにある。そこで先に逃げた子供達が手を振っていた。

「よし、皆警戒しつつ前進だ。特に窓際に警戒し・・・」

最後まで言う前に、金網を張っている窓が割れて一斉に腕が突き出てきた。ダークシーカーズ達がここまで壁を登ってきたのだ。

「走れ！！」

牧が怒鳴り、俺達は全力で走り始めた。金網の間から突き出ている無数の腕を見て、俺は場違いにも幼い頃両親と行ったお化け屋敷を思い出していた。確か、障子が割れてそこから血塗られていた腕が無数に突き出ていた。

もうほとんど銃弾の手持ちが無い為、俺達は無駄な発砲を避けた。

「二曹！警備室に逃げ込んだ方が良いのでは！？あそこにはまだ弾が沢山残ってます！」

青野が走りつつ質問してきた。だが警備室は、教室の更に先に位置している。

「時間が無い！！まずは隠れる事を優先しろ！」

ダークシーカーズ達は金網を素手で引きちぎり始めている。何て力だ。

そのまま走り続け、教室まで後20メートルというところで、俺達の背後から何かが干切れる音が聞こえた。とつさに後ろを見ると、金網を引きちぎったダークシーカーズが廊下に入り込んでいた。俺は問答無用でそいつを射殺し、そしてまた走り始めた。

俺より先を走っていた兵士らが次々避難所の一室に滑り込み、最後に俺も駆け込もうとしたその時、

「危ない!!」

と教室の入り口にいた優の声が聞こえ、そしてガラスの割れる音と共に俺のヘルメットを被った頭に強い衝撃が走った。

「がっ・・・・・・・・・・・・・・・・!!?」

一瞬視界が暗転し、ふらつく頭を何とか背後に向けた俺が見たのは、教室前の金網を破って突入してきた男のダークシーカーだった。

そしてそいつの腕には、廊下に設置してある消火器が抱えられていた。俺は消火器で（しかも馬鹿力で）殴られたのだ。ヘルメットを被っていないかったら、確実にあの世に逝っていただろう。

ヘルメットのお陰で頭蓋骨陥没という事態は避けられたものの、殴られた衝撃で俺は上手く動けなかった。なんとか小銃をダークシーカーズに向けたが、体を素早く動かせない。牧達は俺とダークシーカーズの距離が近いせいか、撃つ事が出来ないようだ。

片手で保持した小銃の引き金を引いたが、全て見当違いの方向に当

たった。そして弾倉が空になり、最後の弾倉をポーチから取り出そうとした時に、ダークシーカーズが消火器を振り上げるのが見えた。とっさに09式小銃を両手で持ち上げて打撃を防ごうとしたものの、ダークシーカーズが振り下ろした消火器の重み（プラス馬鹿力）を受けて小銃は真ん中から折れてしまった。さらに消火器が振り上げられた。周りに受け止める事ができる物はない。ヘルメットは割れて効果を発揮しない。

殺される・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！

最悪の考えが頭をよぎった時、フルオートの小銃が響き目の前のダークシーカーズの体が吹っ飛んだ。

「うわああああああああああああああああああ！！！！」

何とか頭を動かして後を見ると、優が絶叫しつつMP-5短機関銃を連射していた。とりあえず俺の周りから一瞬ダークシーカーズ達が離れ、その隙に俺は中沢に教室へ引つ張りこまれた。

「早く扉を閉める！！」

そう中沢が怒鳴り、牧と青野が鉄板を張って強度を上げたドアを素早く閉めて鉄棒のかんぬきをかけた。部屋には20人程の子供達がいる。

「龍君大丈夫！？」

先にこの部屋に避難していた美里が飛びついてきた。ただし殴られた後遺症なのか、少し視界がぼやけている。

「ああ、大丈夫だ・・・」

なんとかそう返し、手を握ってやった。美里は安心したのか、それ以上何も言わなかった。

「こちら中沢、生き残っている奴がいたら返事してくれ」

中沢が部屋にあった無線機で呼びかけている。ちなみに避難所となる教室5部屋には、無線機や拳銃等を設置してある。誰かいたら返事をしてくるだろう。

『こちらは堂々三曹だ。自分以下4名の兵員は現在警備室に立て籠もっている』

堂々が無線に答えた。恐らく俺達より先に撤収したのだろう。まああの状況では撤収するのが最善策だったので、俺は彼らを責めるつもりは無い。

『えっと、こちらは松本詩織です。現在3号室にいます。人数は、私を含めて36名います』

その後も次々と報告が来た。どうやら先に避難できた子供達に死者はいないようだ。死んだのは、子供達が避難するまで時間を稼ぐために戦っていた少年少女だけだった。

どうやら窓もドアもまだ破られていないらしい。まあ鉄板が張っているから破れる方がおかしいが。

俺達は床に座り込んで、朝が来るのを待っていた。

「……窓とドア、破られないでしょうね？」

「……大丈夫だと思う」

赤井が牧に質問している。俺も大丈夫だろうと思ったが、

「……？廊下から物音がしなくなった」

ドアに耳を着けていた中沢が言った。俺もようやく満足に動くようになった体を動かし、同じ様にドアに耳を着けた。先程までうるさくドアが叩かれていたのに、今は確かに何の音もしない。

おかしいと思って覗き窓から外を覗くと、見える範囲にダークシーカーズはいなかった。

「朝になるから帰ったのか？」

「いや、日の出までまだまだ沢山ある。それに奴らがそんなに俺達^{エサ}を諦めるとは思えん」

「じゃあ……」

その時、鉄板が張つてある窓で物音がした。全員の視線がそちらに向かった瞬間、鉄板を叩く音がした。

ダークシーカーズ達は、今度は窓から入ってこようとしているのだ。

「大丈夫だ。この窓はそう簡単には破れない。安心しろ」

俺は皆を安心させる為にそう言った。この窓には鉄板を張り、数十

個のボルトで固定してある。

こんな物はさすがのダークシーカーズも破れないだろうと思っ
たが……。

鉄板を叩く音は更に大きくなっている。あちこちの部屋から無線で
指示を求められたが、一応外には出るなど言った。そして窓の前に
何かでバリケードを築き、もし窓が破られ中に侵入されそうになっ
たら各部屋の銃器で応戦しろと指示しておいた。

「そういえば、誰か咬まれている奴はいないか？」

牧が全員に質問した。そういえば俺もまだ全員の安全を確認してい
ない。

兵士達が全員の体を見てみたが、この部屋で咬まれている奴はいな
さそうだ。他の部屋にも無線で聞いてみる。

「おい、誰か咬まれた奴はいるか？」

『こちら2号室、一応咬まれた人はいなさそうです』

『1号室、現在確認中です』

『4号室、咬まれた人はいません』

『こちら警備室、咬まれた奴はいない』

『こちら3号室、怪しい人が1名います……』

無線機から不安そうな詩織の声が聞こえた。

「怪しいとは？」

『腕とか足から出血しています。本人は、ガラスで切ったと言ってますけど・・・』

「その人は今どうしてる？」

『一応他の皆から離してます』

「わかった、じゃあ・・・」

そこまで言った瞬間、無線機の向こうで悲鳴が聞こえた。

「おいどうした！？何があった！？」

『・・・』

さっきまで話していた詩織の声が消え、後ろで

『咬まれた！！』

『化け物に成りやがった！！』

『逃げろ、逃げろ！！』

と声が聞こえた。しばらくして、銃声が一回聞こえた。

「何があったんだ！？」

『うう・・・、詩織です。さっきの生徒の1人がダークシーカ

ーズになり、射殺しました。その際、私を含む6名が咬まれました』

「何・・・！！？」

無線機からは更に悲鳴や怒鳴り声が聞こえている。

『ああ、また1人なった・・・！！』

さらに銃声。

『もう何人も咬まれました。指示を下さい！』

「とりあえず、その場を動くな。待機している、今考える」

そして、パニックに陥った3号室の子供達は、外に逃げようとしたようだ。

『逃げる！！外に逃げる！！』

『駄目！今出たら・・・』

そして無線機からドアを開ける音がして、直後に悲鳴があがった。

『奴ら外に沢山いるぞ！！』

『下がれ、下がれ！！！！』

『おい押すなよ！！戻れ！！』

3号室のドアが開いたせいか、銃声が無線機からだけでなく、直接聞こえるようになった。

「皆落ち着け！！外には出るな！」

俺も無線機に怒鳴りつつ、必死に対応策を考えた。

ここから出て、3号室の生徒を助けるのは無理だ。どうやら廊下には、大量のダークシーカーズが戻ってきたらしい。このドアを開けた瞬間、奴らは教室に雪崩れ込んでくるだろう。

だとすれば、取る方法は一つしか無い。それは、彼らを見殺しにする事だ。

『こちら1号室、こつちでも生徒が咬まれていた！そいつは今ダークシーカーズになった！！指示を！！』

その言葉で俺は我に返り、無線機を掴んでこう言った。

「咬まれた奴は全員射殺しろ。 . . . 死にたくなければ」

第53話 side 龍(後書き)

御意見、ご感想、ご質問等お待ちしております。

第54話 side 龍(前書き)

久しぶりに見たら、アクセスが70000を超えていました。本当にありがとうございます。

第54話 side 龍

「咬まれた奴らは全員射殺しろ」

俺はどうかその言葉を言った。だが言った瞬間、室内の全員の視線が俺に突き刺さった。子供達は疑問と敵意、兵士達は同情の視線を。

「もし死にたくなかったら、咬まれた人は全員射殺するんだ」

『ちよつと、待って下さい！本気で言ってるんですか！？他に手段は無いんですか！？』

「無い。そして俺は本気だ」

そう言つて少し周りを見回した。子供たちの皆が、おそらく俺に敵意を抱いただろう。

その時、優が立ち上がってドアの近くまで歩いて行き、そしてドアの取っ手に手を掛けた。

「何するつもりだ？」

「詩織たちを助けに行きます」

「外にはやつらがウヨウヨ居るんだが、その事も考えているのか？」

「はい、ボクはあなたが何と言おうと詩織たちを助けます」

兵士達は優の行動をただ眺めていた。そして優がドアのかんぬきを外そうとした瞬間、俺は優にP226拳銃を突きつけた。

「・・・何のつもりですか？」

「そのドアを開けるな。もし開けようとしたら、俺がお前を殺す」
優も拳銃を抜き、俺に向けて突きつける。それを見て、とっさに牧がホルスターから拳銃を抜こうとしたが、俺が手で制した。

「へえ、俺とやりあうつもりか？」

「ええ、あなたが皆を助けられないなら、ボクは何をしても皆を助けます」

優はそう言つて、ドアのかんぬきに再び手を掛けた。

「そのドアを開けた瞬間、やつらがなだれ込んできて皆死ぬぞ」

「っ……っ……!!」

「お前はそんな事も考えてないのか？ そうなったら、詩織たちだけでなく全員死ぬ。全滅するんだ」

優の拳銃を握る手が、少し震えている。

「じゃあ、どうすればいいんですか？ 皆を見殺しにするんですか？」

「……ああ、それが俺達が生き残る最善の策だ」

その時また無線が鳴る。

『早く俺を撃て!!』

『そんな事、出来るはずが無い!!』

『頼む、……………うっおおあああ!!』

『おい、原田？原田!?!』

次の瞬間、悲鳴が聞こえて無線が途絶した。恐らく咬まれた人を射

殺するのに戸惑い、そして殺されてしまったのだろう。
また銃声が響き、他の子供が無線に出た。

『こちら1号室!どうすればいいんですか!?!』

俺は思わず怒鳴っていた。

「だから射殺しろ!!死にたいのか!?!」

『そんな事、出来ません!!』

「撃て!!」

『嫌です!!』

無線機の向こうから、ダークシーカーズのうなり声が聞こえる。

「撃て!子供達を死なせる気か!?!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・つ!!』

次の瞬間、銃声が響きうなり声が消えた。

「・・・・・・・・そう、それでいい。俺を恨んでくれていい、後で殴ってくれてもいい。だから、迷わず撃て」

無線機の向こうからすすり泣く声が聞こえる。俺は最悪の人間だな、子供に殺人をさせて、友達を殺させて・・・・・・・・。

『こちら3号室の詩織です!!室内のダークシーカーズを全員排除しました!』

3号室か連絡が来た。そういえば、詩織も咬まれていたな。

「今現在、咬まれてもまだ発症していない人は何人いる？」
『私1人です。他の人達は手遅れで、私が……』

……最悪の事態だな、全く。

「……そこに、他に銃を扱える人はいるか？」

『いいえ、他の6人は全員小学生です』

「そうか、なら……」

俺はそこでそれを言うか一瞬迷ったが、感情を押し殺して言った。

「銃を使って、自殺するんだ」

「……!?!?」

その瞬間、優が目を見開き何か言おうとしていたが、俺はそれを手で制して言った。

「このままでは、君もいずれ奴らのようになる。そしたら、そこに
いる子供達まで殺してしまう」

『……』
「それに、もし人間のまま死にたいなら、自殺するしかない。……
……頼む、わかってくれ。」

俺も言いたくて言ってる訳じゃないんだ。だから……」
『……わかりました。仕方ないんですね?』

「……ああ」

『じゃあ、私は一足先にあの世に行きます。あの世で皆を待ってます。あの、少し優に変わってくれますか?』

俺は無言で優にマイクを差し出した。そして無線機から離れた。2人は何かを話していたが、俺は何も聞かなかった。いや、聞けなかったのだ。最期を迎えた時の人間の言葉が。

ふと俺は、マリシティでの分隊長の言葉を思い出していた。視界が涙で滲んだ。

「うん……、うん……、それじゃ……。……また会おうね」

そう言つて優は俺にマイクを向けてきた。

『それじゃ、さようなら』

「本当にすまない。俺がもっとしっかりしていれば……。……」

『そんなこと言わないで下さい。むしろ、世界がこんな状況になつて7ヶ月も生き延びられたのはあなたのお陰です。あなたがいなくなつたら、私はあの時死んでいたでしょう』

「……。……」

『だから、自分を責めないで下さい。覚悟は出来てました。子供達には、朝になったらドアを開けるように言っておきました』

「……。ああ、それじゃ、むこうで会おう」

『はい。……。……今まで、ありがとうございました!!』

最後はどちらも涙声になっていた。室内にいる子供達の大半が、涙を流していた。兵士達も、上を向いて涙を見せないようにしていた。

『はあ……。……はあ……。……はあ……。……!!!!』

その直後、銃声が聞こえ、無線機から子供達の泣き声、叫び声が聞こえた。

現在
2019年
1月1日
0:00

第54話 side 龍(後書き)

御意見、感想、質問お待ちしております。

第55話 side 優(前書き)

久しぶりに優編です。

第55話 side 優

現在 2019年 1月1日 06:30

がぎつという音と共に、ドアが開いた。兵士達が素早く外に出てダークシーカーズがいらないのを確認した後、ボク達は廊下に出た。

「うわ、ドアが凹みまくってる」

中沢さんのその言葉でドアを見ると、ドアはダークシーカーズ達の激しい殴打であちこち凹んでいた。

廊下を慎重に進んでいくと、ドアが開いている教室があった。確かに昨夜、連絡が途絶えた部屋だ。東さんが先行し、中を覗き込む。

「駄目だ・・・、全滅してる」

ボクが中を見ようとすると、牧さんが素早く前に立って視界を塞いだ。

「見ない方がいい。酷すぎる」

そうして進むと、廊下の向こうの警備室から5人の兵士が出てきた。昨日最後まで屋上で戦っていた堂々さん達だろう。

「東、1号室と3号室は見たか？」

こちらに走ってきた堂々さんが東さんに訊いた。

「いや、まだだ。生存者がいるはずだが・・・」

他の子供達は中沢さんに誘導されて校庭へ向かっていたが、ボクは詩織が死んだ3号室を見たかった。

「すみません、ボクも行つていいですか？」

「駄目だ、お前もみんなと外に・・・」

東さんがそう言う前に、ボクは3号室へと走っていた。後から「待て！」と声が聞こえていたが、ボクは無視して走った。

3号室では既に兵士の山寺さんと海原さんが遺体を搬出していた。廊下には昨日生き残った子供達の姿と、毛布を掛けられた遺体らしき物体が並んでいる。

「詩織！！詩織は！？」

ボクはそういつて遺体の一番手前の毛布を捲つて、そして思わず口を押さえた。

毛布の下の遺体の顔には、皮膚がほとんどなかった。顔の赤黒い筋肉の下には、骨らしき白い色も見える。遺体の服装で、この遺体はボクと仲の良かった少年だとわかった。

次に捲つた毛布の下の少女は、四肢が無かった。少女の顔には憤怒の形相が張り付いている。

どちらも、ボクと仲が良かった子だ。ゆえに、遺体を見てもまだ死んだ実感がわかなかった。

「おい優！何やってんだ！！そこから離れる！！」

東さんの声が聞こえたが、構わずもう一枚毛布を捲った。その下には……

「詩織……」

そこにあっただのは、詩織の遺体だった。他の遺体に比べれば損壊が少なかった。だがそれでも、額には小さな穴が開いていて、後頭部には大穴が開いて脳味噌と頭蓋骨のかけらがグチャグチャに混じっていた。

だが、詩織の顔は安らかだった。ボクは、詩織が今にも起き上がりそうに見える。

ボクと詩織が出会ったのは高校の入学式の時だった。詩織が教室で不安そうに1人でいたのを見て、ボクが声を掛けたのだ。それで意気投合し、詩織はボクのかげがえのない友達になった。

他にもいろいろな事が思い出される。気が付くと目から涙が溢れていた。

「優！何してる！！離れるって言って……」

気が付くと近づいて来てボクの腕を掴んだ東さんの胸倉を、ボクは

締め上げていた。

「全部、アンタのせいだ……！！アンタが皆を死なせたんだ……！！」

ボクは今東さんがとても憎かった。皆を死なせる命令を、簡単に出したのだ。

「何で、もつと努力しなかつたんですか！？なんで簡単に皆を死なせたんですか！？」

東さんは胸倉を掴まれたまま、黙ってボクの言う事を聞いていた。海原さんがボクの腕を掴むのがわかったが、構わず続けた。

「皆を何で助けようとしなかつたんですか！？」

そう言つて東さんを揺さぶる。それでも何も東さんは言わない。

またボクが怒鳴ろうとした時、突然東さんは口を開いた。

「……言いたい事はそれだけか？俺が何もしようとしなかつたって本当に思ってるのか？」

ボクはその言葉に一瞬戸惑った。そして東さんは、

「俺を怒鳴つて気が晴れるんならそうしろ。何なら、殴ってくれたって構わない」

「……」

「何もしないのなら、さっさと校庭に出ろ」

そう言つて、東さんは警備室へと向かつて行った。

何も言えない自分に苛立つて、ボクは教室の入り口近くにあった机を蹴り飛ばした。机の上の様々な物が床に落ちる。山寺さんと海原さんは、ボクの行動を黙って見ていた。

と、その時床に落ちたラジオからノイズが聞こえた。床に落ちたときにスイッチが入ったのだろう。もはやラジオ放送の電波が入らないので、もっぱらCDやカセットの音楽再生用に使われていた物だ。スイッチをオフにしようとラジオに手を伸ばした瞬間、ノイズに混じって何か声らしきものが聞こえた。思わず手を止め、音を注意深く聞く。

そして……、

『……、こちら日本国政府……、現在生き残っている国民の皆様へ……、本州の封鎖措置……、解除……、繰り返し……、こちら日本国……、北海道臨時庁舎……、本州の封鎖措置を解除します。国民の皆様は北海道、九州、四国へと向かってください……、繰り返します……』

第55話 side 優（後書き）

御意見、ご感想、ご質問お待ちしております。
それと、次回から「脱出編」が始まる予定です。

第56話 side 龍

「それでは、これより評議会を始めます」

先の戦闘で死亡した評議会長の詩織に代わり、新たな評議会議長となつた優の言葉で評議会が始まつた。

なお、ここは浜浦小学校から10キロ離れたマンションである。浜浦小学校は先の戦闘で、門、監視装置、地雷原等々多数の施設を失つた為放棄された。そのため、俺が第二拠点として確保しておいたこのマンションに全員が移つた。このマンションの周囲の家は、昨年俺が火を点けて焼き払つたので視界も良い。

「では初めに、死者数の報告を。中村さんなかむらお願いします」

中村と呼ばれた男子が、優に促されて立ち上がった。

「・・・はい。死者は、合計92名です」
その数に皆が少しざわついた。そして、何人かは俺に鋭い視線を向けてくる。

「そして、行方不明者が21名います。・・・行方不明と言つても、恐らく全員ダークシーカーズになつたと思われず。よつて彼らも死亡扱いですと、全体の死者は113名です」

浜浦小学校には俺達も含めて188人いたから、実に60パーセント以上が死亡した事になる。

今朝子供たちをここに移動させた時、外は血で赤く染まつた雪に覆われていた。そして所々から、千切れた腕や足、四肢を失つた死体等が覗いていた。

それを見て吐いた子供達が沢山いた。雪が死体の大半を埋めてくれなければ、発狂していた子供もいたかも知れない。

その報告に皆が少し目を伏せたが、優は冷静に続けて言った。

「次に、残存物資の確認から入ります。それではまず、食料班の^お大田さん、お願いします」

「はい、食料は幸いダークシーカーズに狙われなかった為、全部で約2週間分残っています。ですが、死者が多かったのもつと余裕があると思います」

大田と呼ばれた女子が、手元のバインダーを見ながら答えた。もちろん、そんな大量の食料を持ってこれる訳が無く、大半は浜浦小学校に放置してあるが。

「あと、近くの農家の牛、鶏は全部食べられていました。野菜の方は無事でしたが、当分肉は塩漬けのを食べるしかありません」

「分かりました。それでは、医薬品、燃料の残りをお願いします。

田中さん、どうぞ」

その言葉で田中と呼ばれた女子が立ち上がり、答えた。

「医薬品、燃料はどちらもまだ大量に残っています。昨日使わなかったのが幸いでした」

「そうですね。それでは東さん、武器弾薬の残りを教えてください。優の冷たい声に俺はぞつとしながらも、答えるために立ち上がった。

「武器に関しては、昨日数丁が壊れた、もしくは所在不明になった。続いて弾薬だが、昨日約40パーセントの弾薬を消費してしまった。もし次に同じ様な戦闘を行えば、約30分で全弾撃ち尽くす。まあ銃弾の種類にもよるがな」

俺はそう答えて着席した。皆は隣の人と何かをひそひそ話したり、俺を見ていた。

「それで優、本題には入らないのか？」

俺は優に問いかけた。

「本題？本題って何だ？」

あちこちからそんな声が聞こえた。

「わかっていきます東さん。それでは皆さん、これを聞いてください」
優はそう言って、手元のラジオのスイッチを入れた。

第56話 side 龍（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

なお、新小説「宇宙戦争 大阪編」の連載を始めました。大体3話で終わる予定です。

第57話 side 龍(前書き)

約一ヶ月ぶりの更新です。かなり更新が遅れてしまいました。

第57話 side 龍

「国民の皆様こんにちは。日本国内閣総理大臣の浜田俊彦です。皆様も既にご存知かと思われませんが、我が国を初め世界各国では現在、新型コロナウイルス『クルピン・ウイルス』による生物災害が発生しております。このウイルスは感染者を凶暴化させ、人を襲わせるものです。

現在の我が国の人口は約4000万人で、国民は北海道、四国、九州へと移住しております。その事でご報告があります。

研究とその後経過観察により、クルピン・ウイルスは低温に弱い事が判明しました。実際に、この冬でかなりの感染者が死亡したと思われております。またウイルスの活動も弱ってきており、感染者に咬まれても発症する時間が遅くなる等の事が判明しました。

そこで臨時内閣で閣議を行ったところ、本州の封鎖が解除される事が決定されました。本州に住んでいる方々は至急北海道、四国、九州に向かってもらい、検疫を行います。感染していない場合、その方は先の3地方のいずれかに移住を許可されます。また感染していた場合、その方は隔離され一定期間様子を見た後処遇を決定します。この封鎖解除措置は、2018年12月20日から開始されます。

後、残念ながら救援を求められていても、軍、警察は救助に向かう事が出来ません。これは活動が鈍っているウイルスでも、先の3地方に持っていかない為の措置です。よって国民の皆様には、自力で北海道、四国、九州に向かってもらいます。このことに御理解、御協力をお願いします。

なお検問は、青函トンネル、明石海峡大橋、関門トンネルに設置されています。

あなたは1人ではありません。生きようとする希望を持つ方のみが生き残ります。どうか、希望を捨てないで下さい。

内閣総理大臣、浜田俊彦でした。

.....第、559、回目の再生です.....」

「.....」

部屋中に沈黙が降りていた。

「あの.....、これって2週間前から流れているんですか？」
1人の少年が、恐る恐る手を挙げた。

「そうだ。誰もラジオなんて点けていなかった。だから気付かなかった」

俺は質問に答えてやった。実際ラジオ放送は途絶えて久しかったので、専ら音楽を聴く用途に使われていた。

「ガセネタってことは？」

軍司が手を挙げて質問した。

「そうだな。その可能性もある。だが、」

「わざわざ放送を行う理由が無い。でしよう？」
優がすかさず答えていた。頭が良くなったなと感心しつつ、俺は続ける。

「そうだ。これは衛星経由で放送されている。放送設備のあるラジオなんて殆どが大都市部にあるし、大量の電力も必要だ。このご時世にこんな事を行う余裕なんて、どこにも無いだろう」

「つまり、この放送は本物ってことですか」

軍司は納得したように言い、席に着いた。
周りを見回すと、評議会出席者達は隣の人とこそそ話し合い、何か相談しているようだった。話を聞かなくなりそうなので、俺は手を叩いて皆の注意を惹く。

「そこで提案がある。これからどうするかだ」

俺は優の近くまで歩いて行き、ホワイトボードに大雑把な日本地図を描いた。

「A案、ここでこのまま生活する。」

B案、北海道、四国、九州のいずれかまで脱出する。

但しどちらにも欠点がある。A案は、ここにこのままいてもダークシーカーズにいずれ発見されてしまうという事。B案は危険が大きい。約百人をここから移動させる事は困難だ。食料、武器、弾薬等、問題が多すぎる。だが、成功すれば皆が助かる」

「B案を採用したとして、ルートは？」

1人の少女から質問が来た。彼女は今回大量に死亡した高校生達に代わり、中学生から評議員に選抜されている。

「甲案。北へと向かい、青函トンネルに向かう。」

乙案。西へと向かい、明石海峡大橋に向かう。」

丙案。同じく西へと向かい、関門トンネルに向かう。以上だ。他に質問は？」

「一番安全と思われるルートは？」

軍司が訊いて来た。

「乙案だ。丙案は距離が長すぎて却下。甲案は距離が比較的近い代わりに、多数のダークシーカーズが東北地方にいる可能性があるからだ。」

理由は、東北地方ではウイルスの活動が鈍い分、多数の避難民がいると思われる。そしてその活きのいい餌《人間》を追って多数のダークシーカーズが集結しているかもしれない。」

対して乙案は、甲案に対して移動距離が長いが、先の理由によってダークシーカーズが余りいないと思われる。安全と時間をとるなら、俺は安全を取りたい」

「今すぐこの方法にするか決めてとは言わない。各評議員は所属班に帰り、この事を各班員に話して意見をまとめて来て。その意見を明日評議会で報告して欲しい。これにて今日の評議会は終了します」評議長の優が言い終えた途端、各評議員は一斉にメモを取り始めた。

第57話 side 龍(後書き)

御意見、御感想、御質問、アイディアお待ちしております。

第58話 side 優(前書き)

久しぶりに読者数を確認したら、12万人目前でした。ここまで来れたのも、皆様方のおかげです。これからも頑張っていきます。

第58話 side 優

「それで、どうするべきだと思う？」

ボクは評議会が終わったあと、部屋（とはいってもマンションの一室）に戻って先程の議題を皆に伝えた。

そしてラジオの放送内容を伝え、脱出するかどうか皆で議論していた。

さっきまで皆の意見は北海道、四国、九州のいずれかに脱出するという事でまとまっていたが、脱出先をどこにするかで揉めていた。

北海道を推しているグループは、早く親や兄弟に会いたい、こんな所も居たくないという理由で、早く行けるが危険のありそうな北海道に行きたいと言っていた。

対して四国を推すグループは、危険が少ないからという理由で北海道組と激論を交わしていた。

それが、ある少女の放った一言によって別の議論が発生してしまう。

「ねえ、東さん達って信用できるのかな？」

それは皆の心の片隅に引つかかっていた事だった。

「何言ってるの？東さん達は今まで私達を守ってくれてたでしょ？」

別の女の子がそう言ったけども、東さん達に対する不信任はどんどん高まっていった。

「だけど、あの人達戦いで子供のこと簡単に見捨ててたでしょ？信用できないよ」

さらに別の子がそう言い、議論が発生した。

東さん達を信用できない子達は、兵士達について行ったら見捨てられる、いざという時にダークシーカーズ達の餌として放り出されると喚き、ついて行ったら危ないから別行動をしようと言っている。

対してあくまでも東さん達を信用するという子達は、今まで助けて

くれたのにその言い草は酷い、子供達を見捨てたのは仕方なかった事だと言い、大体まともな戦闘能力が無いのに別行動をするなんて自殺行為だと主張した。

ボクはどちらかという東さん達を信用出来なくなっていたが、今までの借りもあるし、東さん達を表面的には信用する事にした。

「……大体、兵士つてのは国の命令が最優先、民間人の命なんて二の次だつて歴史の教科書でもあつたでしょ!? ついて行って邪魔つて思われたり、食料が無くなつたりしたら私達間違ひなく放り出されるよ!」

「アンタそれが命の恩人達に対する言葉!? 大体、アンタも私も東さん達がいなかったらとつくの昔に死んでたかも知れないのよ!」
「それは私達に利用価値があつたからそうしていただけかも知れない」

「利用価値つて言うけど、大体あの人達、私達を見捨ててればさつさと本州から出られたのよ。なのに助けてくれて……」

「そうだよ。お荷物みたいな私達に、安全な場所を提供してくれて、食事を出してくれて、それなのに利用されてたつて言うの? ……」

もはや話の内容は北海道に行くか四国に行くかというより、兵士達について行くかどうか、ということになってしまっている。

「ねえ、優はどう思うの?」

いきなりボクに話が振られた。すこし動揺しつつ、ボクは口を開いた。

「ボクは…、東さん達を正直言つて信用できない。今まで助けてもらつて失礼だけど、ボクはそう思う。でも東さん達について行った方が生き残れる確立が高くなるかもしれない。だから、ボクは東さん達について行く」

そう、ボクは詩織を自殺させた東さんを少し憎んでいた。そりゃあ、詩織が噛まれていて一緒にいた子供達が危なかったというのは理解

している。それでも、容赦なく子供達を切り捨てた東さんが憎い。その時ドアがノックされた。ボクは万一の事を考えて拳銃にそつと手を伸ばしつっ、ドアに近づいた。

「誰ですか？」

「俺だ、東だ」

ドアの向こうから聞こえた声は東さんのものだった。ほつと胸を撫で下ろしつっ、拳銃から手を離す。

「飯を配りに来た。入っていいか？」

と東さんが言ったので、ボクはドアを開けた。

「レトルトだが、勘弁してくれ。明日になったら学校に食材をとりに行く」

そう言つて東さんは部屋を出て行くとしたが、ドアノブに手をかけた瞬間東さんの体が傾いた。

「大丈夫ですか!？」

そう言つて冬元春名が駆け寄り、手を貸して立ち上がらせた。

「大丈夫、大丈夫。ちよつと立ちくらみがしただけだ」

そう言つて東さんは笑いながら立ち上がった。春名は心配そうな顔をして言つ。

「ちゃんと休んだ方がいいですよ」

「休み、ねえ……。そういえば、小学校に立てこもり始めた時から、マトモに寝てないなあ」

東さんは苦笑しつっ、部屋を出て行つた。

マトモに寝てない。

そういえば東さん達大人は、毎晩監視をするために交代で起きていた。一晩中ぐっすり寝た事なんて無いだろう。

ボクは前に「たまには一晩寝た方がよいのではないか」と東さんに言つてみたが、こつ返された。

「悪いけど、お前達だけで監視が出来るとは言えないな。何かあったら不安だし、それに俺達がいなかったらお前ら不安じゃない?」その時はボク達は頼りにされていないのか、と少し怒つたけど、言

われてみればその通りだった。

ボク達だけでは何も出来ない。暗視装置の使い方は習ったがちんぷんかんぷんだったし、銃火器の扱いなんてはつきり言って酷かった。もしもダークシーカーズが現れていたら、ボク達はおろおろするだけだっただろう。

何て馬鹿なんだ、ボクは。唐突にそう思った。

疲れているはずなのに無理して、昼は食料をとってきたり子供達の面倒を見たり、夜は監視などで満足に寝ることすら出来ない。

そして先日の学校での戦いで、東さん達は最後の最後まで戦っていた。ダークシーカーズの群れに恐れをなして子供達が次々逃げていく中、最後まで持ち場を離れず戦ったのは東さん達だ。

そしてボクが詩織を助けようと教室のドアを開けそうになった時、東さんは必死にボクを止めた。あの時ボクが感情のままドアを開けていたら、どうなっていただろう？

おそらく室内にダークシーカーズが雪崩れ込んできて、ドアを開けたボクはもちろん、室内にいた全員が死んだだろう。

もし詩織が自殺していなかったら？詩織はダークシーカーズになり、室内にいた子供達は全滅していた。

東さんは、皆を生かすために他の子供達を切り捨てるという辛い事を、自分の責任でやったのだ。

ボクや他の子だったらきつと出来なかっただろう。それがどれ程辛い事かを、ボク達は理解できなかった。それを解らず、助けるだけの見捨てただの、酷いことばかりを考えてしまった。

急に自分のことが恥ずかしくなってきた。そして、東さん達がボク達を利用してしている云々言っている子供達に怒りが湧いてきた。

「皆、聞いてちょうだい」

ボクの声に、少女達の議論が止んだ。

「ボクは東さんを信用する。その結果、どうなってもボクは後悔しない」

皆がボクに注目し、次の言葉を待っている。

「ボクは東さんについて行こうと思う。東さん達を信用できない人は、自分だけで何が出来るか改めて考えて、その上でもう一度結論を出して。期限は明日の6時まで」

そう言っただけボクはあっけにとられている皆に背を向けて、東さんの所に行くためにドアを開けた。

第58話 side 優（後書き）

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第59話 番外編 side others

2018年 12月31日 22:43

北海道 臨時総理官邸

side 内閣総理大臣 浜田俊彦

「総理。総理！総理！！」

目が覚めた時、補佐官の心配そうな顔が見えた。どうやら居眠りをしてしまっただけらしい。

「大丈夫ですか？少しお休みになられた方が……」

「いや、大丈夫だ」

私はそう言っただけで立ち上がった。そして窓の外を見る。

電力の節約の為に灯火管制された北海道札幌市内は、まるで人が皆死に絶えたかのように真っ暗だった。空には無数の星が見える。

「ですが、大晦日ですよ。あと数分で新年になりますし、今日はお休みになられた方が……」

「大晦日もくそもあるか。この仕事が終わったら休むよ」

そう言っただけで机に向き合い、残っている書類数枚に目を通す。ワケチン生産、武器弾薬の増産要請、食料生産や配給、資源輸送路を確保中の護衛艦隊からの報告書etc……。

「ああ、早くおせち料理が食べたい……」

知らず知らずの内に呟いていた。

2018年 5月16日

「総理。夜分遅くに申し訳ありませんが、緊急事態が発生しました。一刻も早くここを出てください」

「ちょっと待った。緊急事態とはなんだ？」

いきなり部屋に入ってきた補佐官とSP達を見て、私はただならぬものを感じていた。

「クルピン・ウイルスが感染爆発パンデミックを起こしました」

その言葉に私は息を飲む。

クルピン・ウイルスは感染した人間を凶暴化させる。3週間前にマリンシティで感染爆発を起こし、空爆で島ごとウイルスを焼き払ったつもりだったのだが……。

「感染者数と死者数は？」

「わかりません。ですが、相当数に上ると思います」

補佐官は表情を変えずに言った。

「本州で大規模なパンデミックが発生しているので、ここは危険です。特に、人口の多い東京は……」

そんなことは、マリンシティでの後の対策会議で承知していた。対策会議では、感染拡大を防ぐ方法、ワクチンの生産数およびワクチン接種の優先順位を決めていた。もちろん、今日も対策会議があった。

「総理には官邸を出てもらい、東京湾上の空母『あかぎ』へと退避してもらいます。屋上にヘリがやって来るので、すぐに移動を……」
補佐官がそこまで言ったとき、スピーカーから大音量で警報がなった。この音は、官邸内に侵入者があった知らせだ！

「侵入者だ！総理をお守りしろ！！」

SPのリーダーらしきスーツの男が怒鳴り、SP達はそれぞれスーツの下から拳銃、短機関銃を取り出して弾を装填した。

「感染者に門を突破されたようです！すぐにここを移動します。夫人とご子息は我々がついて行きますので、総理は先に退避してください！！」

リーダーがそう言い、私は前後をSP達に固められて廊下に出た。

「総理、軍が出動命令を求めています……」

「許可する！詳しい事は防衛大臣に任せる！！」

補佐官の言葉に私は即答した。総理の私が下手に指揮するより、私より軍事に詳しくカリスマの防衛大臣に任せた方がよい。そう思っ
て私は防衛大臣に指揮を一任した。

「治安出動でも、防衛出動でもいい！とにかく感染の拡大を……」
そう言った瞬間、廊下の向こうから誰かが走ってきた。

青白い肌に赤く充血した目、そして異様に長い爪と歯。

対策会議の資料で見た、感染者そのものだった。

「感染者だ！！総理を守れ！！」

S Pのリーダーが怒鳴り、S P達は構えていた拳銃を感染者に向け、
撃った。感染者は素早く避けて最初の弾丸を回避してこちらに走っ
てきたが、一発が足に着弾すると勝手に動きが鈍くなり、そこに
次々と銃弾が襲い掛かった。

全身に弾丸を受けた感染者はしばらく這い回っていたが、S Pのと
どめの一撃を頭に食らって動かなくなった。

「クソツ、官邸内にまで侵入されたか！」

「前進して進路を確保しろ！！」

そんな声が交錯する中、私は恐る恐る死体に近づき、そして思わず
口を塞いだ。

「うえええええ……」

私は頭を割ったスイカのようにされて絶命した感染者を見て、吐き
そうになる。だが何とかこらえ、ヘリポートのある屋上まで歩き出
した。

「射殺しましたが、構いませんよね？」

「当たり前だ。大体対策会議で感染者は即射殺って決めてあるでし
ょう」

対策会議では感染者を射殺するかどうかが最も白熱した議論となっ
た。警察幹部、防衛省幹部達は声高に射殺を掲げ、厚生労働省の幹
部達は射殺反対を唱えた。結局、生かしておいては危険だというこ

とで感染者は即射殺が決定した（全国の警察、軍への射殺の通達がマスコミに漏れ、猛然と批判されてしまったが）。

屋上に近づくにつれて、ヘリのローター音が聞こえてくる。どうやら、既に着陸しているようだ。

屋上に出ると、そこには海軍の掃海、輸送ヘリのMH-101が猛然とローターを回転させていた。

「総理、どうかご無事で！！」

そう言っただけで官邸内の職員達を誘導するために戻って行ったSP達を見送り、私はヘリに乗り込んだ。数名のSPや官邸内にいた閣僚、職員達と共に座席に座ってシートベルトを締めると、すぐにヘリは離陸した。

窓から外を眺めると、東京都内のあるところから火が立ち上っている。私には見えないが、下では地獄絵図が繰り広げられているに違いない。

「総理、悪い知らせです。環境大臣、国土交通大臣、文部科学大臣、農水大臣との連絡が取れません」

下を眺めていると、隣に座っている補佐官が報告してきた。

「くそ……。で、それだけではないんだらう？」

「はい、海外でもパンデミックが発生しました。詳しい情報はまだ入ってきておりませんが……。あと、いい知らせかはわかりませんが、本州以外での感染拡大は起こっていないようです。被害も本州に比べて少ないとか」

そう言っただけで補佐官も窓から下を見て、そして顔を上げて続ける。

「総理、対策会議では出席者がプランEを発動すべきという意見が出ています」

プランEとは、本州で感染が拡大した場合、本州を放棄するという計画である。

「プランE？本気で言っているのか？」

「はい、もう本州の死者は2000万名以上と思われまます。だから、本州を放棄して他の安全な地方に逃れるべきです」

「君の意見は？」

私の質問に補佐官はしばらく答えを迷ったようだが、意を決したように言った。

「私も、そうした方が良いと思います」

「……そうか」

ヘリは東京都の上空を過ぎ去り、東京湾上へと到達した。窓の外を見ると、海には多数の船が浮かび、その間を海軍、海兵隊の艦船や海上保安庁の巡視船が動いている。

「これより着艦します！合図が出るまで外に降りないで下さい！」
機内にいた海軍兵の言葉で我に返り、私は外をもう一度見た。そこには大型の艦船がある。

航空母艦「あかぎ」であった。あかぎは日本がアメリカの技術提供を受け、何年もかけて開発した原子力動力の空母である。航空機を60機以上搭載することが出来、災害時などには指揮通信艦としても機能する。

わずかな衝撃と共に気体が揺れ、しばらくしてドアが開いた。

ヘリから降りると、広大な飛行甲板の上に何機ものヘリが着艦しているのが見えた。さらにその上空には、着艦許可を待っているのか多数のヘリがホバリングしている。

海上では、海兵隊の強襲揚陸母艦が多数の舟艇を艦内から発進させ、そして入れ替わるようにして港から多数の避難民を乗せた舟艇を収容する。

その向こうではどうやら個人のものらしき多数のクルーザー、ヨット、漁船が浮かび、海上保安庁の巡視船と海軍の護衛艦が岸に引き返すよう拡声器で警告していた。

「警告です。個人所有の船舶を航行させる事は現在禁止されています。速やかに港へ……」

「繰り返す。指示に従わない場合、撃沈する。繰り返す……」

そこまで見ていた時、私は補佐官に袖を引っ張られるようにして艦

内に連れて行かれた。会議室らしき広い部屋に着いた途端、次々に報告が入ってきた。

その後厚生労働大臣、防衛大臣、対策会議のメンバーが集結し、喧々囂々の議論の末にプランEを発動することが決定された。これによつて本州は放棄され、生存者は北海道、四国、九州のいずれかに移住することになる（沖縄は感染者が大量発生したが、現在軍が那覇市以南への感染者の侵入を食い止めている）。

会議の後、私は全国民にメッセージを送るために記者会見を開くことになった。とはいっても、ラジオ中継とテレビ中継を行う為の最低限の要員しかいないため、記者はいない。まあうるさく質問する記者がいないのはありがたいが。

服装を整え、カメラの前に向き合う。下を向いて原稿を確認した後、私は喋り始めた。

「えー、日本国民の皆さん。内閣総理大臣のはまだとしひこ浜田俊彦です。今日日本の本州で発生している非常事態について報告します・・・」

現在

2018年 12月31日 23:59

「……はっ!？」

どうやらまた眠ってしまったらしい。

「だから、あれほど休んでくださいと……」

室内の机で書類仕事を続けていた補佐官が、あきれたような顔で言った。

「わかつてる。もう仕事も終わるから、終わったらゆっくり休むよ。そう言つて目の前の書類に再び目を通す。」

結局、北海道、四国、九州でも感染爆発が起こってしまった。本州から逃げてきた多数の人々が、やっと無事だと思つた所で死んでいった。

どうやら、避難民の中に感染者がいたらしい。結局、感染の拡大を防げなかった。

冬の寒さも借りてようやく感染者達を北海道、四国、九州から殲滅したとき、日本国民の人口は4000万人をきっていた。食料は配給制になり、一般人は電力を決まった時間帯にしか使えない。

だが、それでも我々は生きている。生き続けなければならない。日本国の首相として、一人の人間として、私は出きることを何でもしなければならぬ。

「…総理」

いきなり補佐官が話しかけてきた。

「何だね？」

「明けましておめでとうございます」

ふと時計を見ると、時計の針は既に0時を指していた。

「…ああ。明けましておめでとう。今年もよろしく」

私の言葉に補佐官は微笑み、そしてまた書類に目を通す。

ようやく訪れた新年。だが国民にとっては不安と絶望の年になるかも知れない。

だから私は、この国のトップとして、彼らが一分一秒でも長く生き延びられるよう、全力を尽くす。

私は室内に飾ってある神棚を見て、椅子から立ち上がり、手を叩いて言った。

「今年は、いい年になりますように…！」

第59話 番外編 side others (後書き)

今回、この事件を始めて他者の視線で描いてみました。総理の人物像には少し悩みましたが……。

本当はあれこれと書きたい総理のエピソードもあるんですが、それを書いてると多分本編より長くなるので割愛します。

今後、このような番外編は気が向いたら書きたいと思います。番外編に出して欲しいような人物があれば、是非メッセージ下さい。

御意見、御感想、御質問、アイデアお待ちしております。

第60話 side 龍

「……後悔しない？」

「あつたりまえだ！お前らと行動なんか共にできるか！」
そう言つて澤田は俺の前から去つていった。

「説得、失敗したみたいだな」

陰から覗いていた中沢が言った。

「ああ。だが、これでやりやすくなった」

そう言つた俺に対して怪訝な表情を中沢は浮かべたが、何か納得したような顔をして部屋に戻つて行つた。

北海道に向かうか四国に向かうか、どつちかに決めろという提案に対し、学校襲撃でも生き残つていた澤田が反対意見を唱えた。曰く、
「仲間を平気で見捨てるような奴らに、俺はついていけない」

俺は勝手にしろとその時は言つたが、驚くべきことに澤田の意見に追従する者が現れはじめた。その数は時間が経つにつれて増え、現在では生存者の半分が俺達と袂を分かつと言っている。

「それにしても、何で皆澤田について行こうと思つたんですかね？」
俺の隣を歩いてきた優が呟く。今俺と優は、残つた武器弾薬を装甲車に積み込んでいる所だった。

昨日いきなり優は俺に謝つてきた。どうやら小学校で俺を罵倒したことを謝罪したかつたらしい。

「さあな。皆俺についてきたから、あんな事件が起こつたと思つてるんだろ」

そう言つて軽装甲機動車の後部ドアを開け、車内に武器弾薬を積み込む。ちなみに装甲車の隣では、黒田達がバスに金網を溶接している。

「でも、よく考えればボク達についてきた方が安全だつてわかるのに……」

「俺が結果を残せなかったから、良し悪しはともかくリーダーを変えてみようとも思ったんだろ。目に見えるような結果を出せなかった自生党を衆院選で野党にさせ、穴だらけの不安なマニフェストを掲げる民生党をマシと思った国民のようにな」
俺は10年前に起こった政権交代に例えて言った。

「まあ70人も連れて行くような余裕はないし、俺としては助かつ……」

そこで俺は、優の非難するような視線を受けた。

「なんだよ、その目は？」

「……いえ、別に」

そう言つて優は黙々と作業を続けた。何か非難しているようなので、一応理由を説明しておく。

「ここから北海道か四国のいずれかに行くとしても、まず歩きは無理だ。バスとか大型車を使うにしても、俺達の中で大型車の運転免許を持つてるのは二人しかない。しかもその内一台にはガソリンを積むから、必然的に残るのは一台。装甲車を合わせても合計5台の車列を組むことになる。装甲車にはせいぜい5、6人しか乗れないし、バスは全部椅子を取り外すにしても70人全員を乗せるのは無理だ。居住性を無視すれば何とかなるかもしれんが」

「だから、むしろ別行動してくれた方がありがたい、と？」

「そうだ。残酷な話だが、俺達には70人全員を安全に連れて行く力は無い」

そう言つて最後の弾薬箱を車内に放り込むと、俺は優に向き合つて言った。

「日本は自由の国だしな。あいつらが自分達だけで考えて行動するってんなら、俺は止めたりはしない。ただし……」

そこで一旦間を空けて、続けた。

「その行動がどんな結果を引き起こすにしても、俺達は助けたりしない。わざわざ安全な方法を提供してやったのに、あいつらがそれを蹴って最悪の結果を招き寄せようとも、俺は一切責任を取らない」

その日の夜。俺達は四国へ向かうと澤田達に言い、澤田達は北海道を目指す。俺達に言ってきた。澤田はいつの間にか、どうやら北海道組のリーダーになっていたらしい。

「そんで、お前らどうやって北海道に行くんだ？徒歩？」

「自転車を市内から集めてきて、それで北海道へ行く」

馬鹿だこいつら、と俺は思った。だが澤田達は、それが最高のプランだと疑っていないようだ。こちらとしては別行動をしてもらった方がありがたいのだが、一応良心に従って忠告くらいはしてやる。

「大体、自転車で青森の青函トンネルまで行くのにどれくらいかかるかわかってんの？夜襲われたらひとたまりも無いし、体力を大幅に使うことになる」

「夜は皆で交代で警戒して、朝に移動する。ゆっくり行くから、大体4週間以内に着くはずだ。それに東北には生存者がたくさんいるだろうし、彼らに合流する」

「生存者がそうそう都合よく助けてくれるかねえ？」

もし東北に生存者がたくさんいても、彼らは新しくやってきた者達に対していい顔はしないと。なぜなら、武器、弾薬、食料、医薬品、その他諸々……を他人に分けてくれる余裕は無いだろうし、第一ウイルスを持ち込むような恐れのある者達をホイホイ受け入れられるか疑問である。そもそもラジオ放送を聴いて、皆で青函トンネルを目指す東北地方にもう人は居ない、という可能性もある。「大体、車の方が危ない可能性がある。大きな音を出すし、ガソリンが無くなったらおしまいだ」

「ガソリンは燃料タンクを大量に使って、トラックで輸送するつもりだが？」

「燃料が劣化している可能性は捨てきれない。それに小回りが利かないし、狭い所は通れないから行動できる場所も必然的に限られる」

俺はちゃんとここまで考えられている澤田に、少し感心した。もつとも、澤田の案が良いという訳ではないが。

「結局、お前らは俺達と行動したくない、と？」

「そうだ」

そう言つて澤田は去つていった。俺はその背中を見つつ、こう呟いた。

後悔するぞ。

2019年 1月9日 10:00 浜浦小学校校庭

いよいよ初春市を発つ日がやってきた。浜浦小学校から残存物資を運んできて、武器弾薬、食料、医薬品、その他諸々を半分に分けて北海道組と四国組にそれぞれ分けた。ただし、燃料は車で行く俺達しか使わないためポリタンクに大量に詰めてトラックに搭載した。結局、四国へ向かうのは兵士の9人と、美里、優を始めとする高校生6人、中学生15人、小学生4人の計35人となった。

対して澤田をリーダーとした北海道へ向かう奴らは、高校生5人、中学生16人、小学生19人の計40名だった（なぜ小学生がこんなに少ないかというと、学校襲撃の際死んだのは多くが小学生だったからだ。

「最後にもう一度聞く。本当にいいのか？」

「ああ！軍人が俺達を守る能力が無いなら、自分達で生き残るまでだ！！あんた達の手は借りない」

そう言つて澤田は自分達のグループに戻り、市内の自転車屋から持ってきたマウンテンバイクに荷物を積み始めた。俺達も日が出てくる内に出発したいので、それ以上は何も言わない。

「いいんですか？」

「何が？」

軍司が聞いてきた。ちなみに彼の今の服装は、上下共に米軍の払い下げ迷彩服で、編み上げブーツを履いている（本人曰く、全て通販で買った）。肩にはM-4A1カービン銃をストラップで掛け、腰にはM92F自動拳銃を下けている。

「何が何でも、澤田たちを連れて行った方がいいんじゃないですか？」

「あいな、あいつらは俺らを信用しないと云ってる。自分達は今まで散々俺達に色々押し付けていたのに、何か問題が発生したら俺達のせいだといって非難しているような連中だぞ？どうせ今まで軍は民間人を助けるのが当然とばかり考えて、どうすれば生き残れるかとかマトモな思考もしていなかったに違いない」

「でも、何で澤田なんかについて行こうとか思ったんですかね？あいつは今まで乱暴者で、学校襲撃だってあいつに責任の一端があるのよ」

「異常事態ほど異常な奴が成り上がるのさ。かつて不況に喘いだドイツ国民が、ヒトラーという独裁者を選んだように。今まで俺達のおかげで安全に暮らしていたのに、学校襲撃で安全は消えてしまった。誰について行けば安全になれるか……。そんな考えだったんだろっ」

「そこで、澤田を選んでしまったんですね」
軍司はなるほど頷き、続きを求めた。

「誰も自分がリーダーになろうなんて考えちゃいないんだ。もし澤田がああグループで澤田が失敗したら、皆で澤田を非難して新しいリーダーを求めるだけだ。自分は何もしようとせず、何か失敗したら非難すればいいなんて考えてる連中なんて、俺は守りたくないね」
俺は軽装甲機動車の機銃の具合を確かめつつ、続ける。

「それに、ここは民主主義の国、日本だ。俺達軍人は国民に統制されなきゃならないから、あいつらには口出ししない」

最後の皮肉交じりの意見に、軍司は少し苦笑した。

「それじゃ、俺はバスに乗るんで」

と、軍司はバスに向けて歩き出した。

今回俺達が使用する車両は、軽装甲機動車2両、ハンビー1両、73式大型トラック1両（基地に無人で放置してあったのを持ってきた）、そして魔改造市バス1両。

このバスは、乗り手がいなくて数ヶ月バス会社の倉庫に放置してあった中から、満足に動作するバスを選んで改造したものだ。窓には金網を張り、タイヤを守れるように鉄板を張った。

バスの正面には除雪用の板を設置し、いざという時はダークシーカーズを轆きながら走れる。更に轆いた時の血や脂でタイヤがスリッブしないよう、冬用タイヤに換装した。

数ヶ月間放置してあった物なのでいつ壊れてもおかしくない。なので73式大型トラックに大量の予備の部品とタイヤ、そしてタイヤ交換道具も大量に載せた。

そうして出来た魔改造バスの外見は、某市民達がシヨッピングモールに立て籠もるゾンビ映画に出てくるバスにそっくりだった。というより、黒田を始めとする奴らがその映画を見つつ、ノリノリでバスを改造していたのだから仕方が無い（本人達曰く、「一度やってみたかったんですよね〜。こういう魔改造」）。

そうこうしている内に出発する時間がやって来た。俺は先導する軽装甲機動車に乗り込み、屋上のM2重機関銃に取り付く。トラックには大型車の運転免許を持つ青野が乗り込み、魔改造バスには同じく大型車の運転免許を持つ黒田が乗り込む。

俺はちらつと澤田達を見た。澤田達は背中に荷物が入ったバッグを背負い、同じく荷物を括りつけた自転車に乗っている。中には3輪の自転車まであり、その自転車は大量の荷物の入ったリヤカーを牽引していた。

「おい東！出発しないのか？」

運転手の中沢の声で、俺は澤田達を見るのを止めた。各車既にエンジンを動かしており、いつでも出発できる。

もしかしたら、もう2度とここには戻って来れない。そう考えた子

供達が、窓に顔を押し付けるようにして外を見ていた。俺も一瞬校舎を見た。

数ヶ月をここで過ごし、そして今は校庭にたくさんの死者の墓標の立つ浜浦小学校。俺は感慨深く校舎を眺め、そして言った。

「全員出発だ！！皆で四国に行くぞ！」

俺の言葉で中沢が装甲車を出発させ、後の4両が続く。校庭から出る瞬間ふと後を見た俺は、澤田達が手を振っているのに気づいた。

「またどこかで　　！！！」

「今までありがとう　　！！！」

「東さん、ありがとうございました　　！！！」

そう言う声が聞こえた。

俺達の事を信頼しないと云っていたのに、それでも手を振ってくれる子供達に不思議と俺は微笑んでいた。

バスに乗る子供達も窓を開け、何事か叫んでいる。俺も手を振り返し、「気をつけるよー！！！」と叫ぶ。

俺達が出発すると同時に澤田達も出発し、こうして数ヶ月を過ごしてきた初春市を俺達は後にした。

第60話 side 龍（後書き）

次回から東たちが四国へと向かう道中を描く「脱出編」が始まる予定です。

どこか出して欲しい地域（出来れば太平洋沿岸）を送ってくれたら、もしかしたら作中で出てくるかもしれません。また登場人物の案もお待ちしています。

御意見、御感想、御質問、アイデア等お待ちしております。

第61話 登場人物紹介1（前書き）

今更ながら登場人物紹介です。今回は政府・軍人側をメインにして、次回は民間人の紹介をしたいと思います。

第61話 登場人物紹介1

軍人達

東龍ひがしりゅう

23歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 強襲偵察隊A分隊長
階級 海兵二曹

一応この話の主人公。60話までは浜浦小学校に立て籠もっているグループのリーダーだったが、ラジオ放送によってグループが分裂し、四国へと向かうグループのリーダーとなる。

子供の時から兵士の両親に鍛えられていた為、身体能力が高い。又学力も高かった。

軍に入隊したことによって自らの才能に目覚め、特殊部隊「強襲偵察隊」に21歳で入隊出来た。マリンシテイの事件の際に分隊長が壊滅状態になり、東の階級が一番高くなってしまったので分隊長になつてしまった。

あらゆる戦闘能力に秀でているが、特に近接戦闘が得意である。本人曰く、ジェットコースターとホラー映画は大嫌い。

昔に仲原美里と付き合い合っていたが破局。しかし何の因果か浜浦小学校に彼女も逃げ込んでいたので、必然的に合う羽目になった。

愛用武器は軍正式採用の9式小銃とP226自動拳銃。

堂々《どんどん》 章吾ちやうご

23歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 強襲偵察隊A分隊
階級 海兵三曹

東の親友であり部下。そして小兵。

高校生の時に射撃競技部に所属しており、1年生で全国大会出場、2年で全国制覇してしまう程の狙撃の才能がある。その後才能を見出した軍の地方連絡部のオッサンに勧誘され、ホイホイについていたところいつの間にか軍に入隊していたらしい。オリンピック選手にも選抜されそうになったが、紛争が発生したため出場できなくなった。

中国内乱時の派遣によって「強襲偵察隊」に引っこ抜かれ、以後分隊で活躍。拳銃から大型対物ライフルまで、ありとあらゆる銃器を使つて狙撃する。

同僚曰く、「あれこそゴゴ13」

性格は冷静。でも身長の高さに悩んでいる。

愛用武器は軍正式採用の10式狙撃銃（9式小銃を7.62mm弾仕様にした半自動小銃^{セミオートマチック}）とM82A1対物狙撃銃。そしてP226自動拳銃。

なかざわ
中沢 雄一 ^{ゆういち}

23歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 強襲偵察隊A分隊
階級 海兵三曹

同じく東の親友であり部下。九州出身。

小さい頃から柔道を習っており、格闘技を得意とする。

両親が17歳の時に失踪し、3人の弟と妹を養う為に軍に入隊した。

堂々と同様に、中国で才能を発揮し強襲偵察隊に入隊した。兄が空軍にいる。

後輩や子供の面倒見がよく、学校では子供達に「クマさん」の愛称で親しまれていた（理由は、そのでかい図体から）

愛用武器は、5.56mm軽機関銃ミニミとP226自動拳銃。

牧 廉まき れん

22歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 強襲偵察隊A分隊
階級 海兵三曹

東の部下であり親友。中学校は東と同じだった。

本当は自立するための資金を手に入れる為に軍に短期入隊したが、気がついたら5年もいた。

いつも女を口説く事しか考えていないが、成功したことはほぼ無い。本人曰く、「皆俺の魅力にまだ気づいていないだけさ」

責任感は強く、皆に信頼されている。

愛用武器はM320グレネードランチャー付き9式小銃とP226自動拳銃。

古橋 雄大ふるはし ゆうだい

20歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 第二普通科中隊
階級 海兵一士

小銃手

白井 玲人

20歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 第一通信中隊
階級 海兵一士
通信手

黒田 裕樹

20歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 第三施設化中隊
階級 海兵一士
73式大型トラック運転手

山寺 修

19歳

所属 日本国防衛軍 陸軍第一師団 第一連隊第三中隊
階級 一等陸士
小銃手

海原 弘毅

20歳

所属 日本国防衛軍 陸軍第一師団 第一連隊第三中隊
階級 陸士長
擲弾手

赤井 大和

21歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 衛生隊

階級 海兵士長
衛生要員

青野 武蔵 あおの むさし

22歳

所属 日本国防衛軍 海兵隊第五師団 高射特科大隊

階級 海兵一士

81式短距離地对空誘導弾発射機運転手

中沢博 なかざわひろし

30歳

所属 日本国防衛軍 空軍航空支援集団 第401飛行隊 ヘラク

レス3-4

階級 一等空尉

C-2輸送機機長

中沢の兄。防衛大学校に入った後、輸送機パイロットになった。本人曰く、国際貢献が出来ると思っただけらしい。

愛知県の基地にいたが、本州放棄に伴い四国に移転。その後本州に取り残された民間人への食糧、武器弾薬の投下任務で千葉県まで来たところ、地上に中沢（弟）達がいるのに気付いた。

投下物資の中に密かに工口本を紛れ込ませているらしく、度々副機長の女性パイロットに殴られている。

政府側

はまだ としひこ
浜田 俊彦

日本国総理大臣

44歳

自生党総裁

日本国の総理大臣。かなりの若手で、国民に人気がある。

前政権と同じく軍拡路線をとり、国民の安全を第一に考えている。

本人曰く、「国民の生活を守るには、国の安全を守らんと」

本州放棄に伴い、北海道の臨時官邸に移動。同時に移転した臨時国会で、日々野党に色々と責任追及されている。だが本人は、「この事態が終わったら総理なんて辞めてやんよ」と辞任要求をスルー。

一人でも多くの国民を生き延びらせるため、日々奮闘中。

第61話 登場人物紹介1（後書き）

御意見、御感想、御質問、アイディアお待ちしております。

第62話 登場人物紹介2

民間人

秋村 優あきむら ゆう

17歳

私立山之内女子高等学校 2年生

一応この話の主人公の一人。

一人暮らしをしていたマンションに帰ってきた時に、ダークシーカーズが人を喰っているのを目撃し、その場を離れた。

その後山之内女子高に立て籠もっている友達から電話が来て、学校に行く途中にダークシーカーズに襲われるも、兵士の牧に助けられた。

その後紆余曲折を経て東達と行動を共にする。立て籠もった浜浦小学校では、子供達のリーダーとして活躍する。両親は四国に住んでいて、現在音信不通。

大晦日に学校が襲撃された時、東達の対応を巡って東と対立するも和解し、四国へ向かう事となる。

陸上選手で県大会出場経験もあり、身体能力は高い。

使用武器はMP-5F短機関銃と、FNハイパワー自動拳銃。

尾田 軍司おた ぐんじ

17歳

県立初春高等学校 2年生

軍事オタクで、銃火器、サバイバル方法などの知識がハンパない。その知識は浜浦小学校でのサバイバルで重宝されることになる。本州でダークシーカーズが大量発生した時、隣家の友人の親が経営する銃砲店に立て籠もって一夜を明かす。銃砲店の周囲にダークシーカーズが大量にいたため、強行突破出来ず本州から脱出し損ねる。その後浜浦小学校にいた東達の合図を見つけ、彼らに合流する。当時両親は東北に趣味の狩猟に行っていて、現在音信不通。兄は防衛陸軍に6年勤めた後退官し、日系のPMC（民間軍事会社）「ヤタガラス」の社員として、現在中東某所の油田地帯でプラント護衛を行っている。

銃の腕前はとても良く、学校に集められた武器は殆ど扱えて分解・清掃も行える。

現在の服装は通販で買ったアメリカ軍払い下げの迷彩服と帽子に、同じく払い下げの軍用ブーツ、そして改造してアメリカ軍風にした市販の防弾チョッキ。

使用武器はM-4A1RIS突撃銃にM92F自動拳銃（これらは死亡した米陸軍兵から拝借）。

ふゆもと
冬元 春名 はるな

17歳

私立山之内女子高等学校 2年生

優の同級生で友人。

進路は医師を志望していた為、医療関係の知識が深い。そのため浜浦小学校にいた時、衛生班に所属していた。

両親は二人とも医者で、事件当時海外に行っていた。そのため現在音信不通。

使用武器はS & a m p ; W M 6 8 6 回転式拳銃。

なかはら
仲原 美里 みさと

23歳

葉月芸能プロダクション所属

東の元彼女であり現役アイドル。

地方公演の為に故郷の初春市に来ていたところ、本州でダークシーカーズが大量発生し、たまたま近くの浜浦小学校に立て籠もった。そこで東に会う。

昔は東の彼女だったが、東が軍に入ることに反対し、仲が悪くなる。更に東が中国派遣から帰ってきた時軍を辞めるように頼んだが、拒否されて破局した。だが浜浦小学校で東と再会して以来、徐々に仲は良くなって来ている。

主演映画が公開直前だったが、感染爆発のため現在無期限延期。
使用武器はP220自動拳銃。

第62話 登場人物紹介2（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。そのうち、番外編で尾田軍司の話を書きたいと思います。

第63話 side 籠

浜浦小学校を出発してから数時間後、俺達は国道296号線に沿って東京に向かっていた。

「周囲に敵影無し…、ついでに人影も無し……」
重機関銃を周囲に向けて警戒しつつ、俺は呟いた。

296号線をこのまま行けば、陸軍第一空挺団の駐屯地がある。俺達は一応、そこで必要物資を調達することになっていた。

そのまま俺の搭乗する軽装甲機動車に、続々と車両が続いていく。

数秒後軽装甲機動車が曲がり角を曲がった時、俺達はある物を見つけた。

「全車停まれ。前方に障害物有り」

そう無線で伝えると、後続車両は次々に停まった。

《何だ？どうした束？》

最後尾を走るハンビーに搭乗する中沢から通信が入る。

俺達の前には、大量の放棄された自動車があった。所々錆びついた自動車の列は、みっちり国道を埋め尽くしている。

「車が国道を埋め尽くしてる。ここは進めなさそうだ。一旦後退し、500メートル後方の角を曲がる」

そう言うと、早速最後尾のハンビーが道をUターンし、もと来た道を引き返し始めた。トラック、バスもそれに続き、俺の乗る軽装甲機動車もUターンした。

数分後、先程通った国道の角を曲がり、俺達は住宅地を通る。

住人が消えて数ヶ月経った民家の窓はあらかた割られ、汚れたカーテンが風になびいている。軒先に停まった自動車には錆が広がり、伸びたツタが絡みついている。庭に生えている草は伸び放題で、一メートル以上の高さまで伸びていた。

(・・・たった数ヶ月で、こんなに変わってしまったのか)
俺はそんな事を考えつつ、立ち並ぶ住宅を見つめた。

数分後、俺達はあちこちを迂回して、ようやく第一空挺団の駐屯地に到着した。

駐屯地の大きな門は折れ曲がり、歩哨所の窓は割れ、ところどころに白骨化した遺体が転がっていた。予想はしていたものの、その様子を見て何か虚しさを感じた。

「全車停まれ。これより30分の小休止を取る」

そう無線に吹き込むと、後続車が次々と停まった。そして車両から子供達と兵士達が降りて整列する。

「これから30分小休止を取る！皆集団で行動し、決して一人になるな。そして暗い場所には近づかず、必ず武器を携行すること！以上だ！！」

俺がそう言うと、子供達は3〜4人ごとに固まってあちこちに散らばっていった。そして兵士達は俺の周りに集まり、俺は指示をする。「各員、あらかじめ指定された物資を持って来い。くれぐれも無茶はせず、物資確保が困難もしくはダークシーカーズと遭遇した場合、速やかに退避しろ。何かあったら連絡をくれ、以上だ」

俺がそう言うと、兵士達は頷いてそれぞれの持ち場に散っていった。俺も担当の弾薬を確保するため、廃墟となった駐屯地内に足を踏み入れた。

第63話 side 籠

(後書き)

実は作者、いわゆる新型インフルエンザに罹ってしまい、このところずっと寝込んでおりました。感染症の恐ろしさをこの身をもって体感しました。

御意見、ご感想お待ちしております。

駐屯地内は荒らされ放題だった。あちこちの窓が割れて廊下にはガラス片が散乱しており、室内は入って来ている風で書類が散乱していた。その書類も雨風に曝され、千切れていたり酷く変色していた。俺は隊員の宿舎に入った。やはりそこも荒れていて、廊下の所々に白骨遺体が散乱していた。

俺はしゃがむと、近くにあった白骨遺体の検分を始めた。遺体の服装は半袖Tシャツにジーパンで、兵士のように見えなかった。足元に拳銃が転がっていたが、使用された形跡は無い。遺体には所々喰われた形跡があった。

遺体の背中にリュックがあったので、慎重にそれを取り外して中を見る。中身をそのまま床にぶちまけた俺は、少し驚いた。

リュックサックの中からは、旧式となり二線級火器に指定されている9mm機関拳銃とその弾薬、弾倉が出てきた。こんなものが出てくるようだと、武器庫にはまだ武器弾薬が残っていそうだ。

だが反面、遺体があるということは、この駐屯地内にダークシーカーズがいる事を示していた。遺体の服装は半袖Tシャツで拳銃も持っていたので、去年の夏頃に殺されたのだろう。

「こちら東、駐屯地内にダークシーカーズがいる可能性がある。全員注意しろ」

俺はそう無線に言って、皆に注意を促した。それから遺体に合掌し、拳銃や弾薬等の見えそうな装備を持ってきたポストンバックの中に放り込んだ。

数分後、俺は武器庫の前に立っていた。ドアは施錠されておらず、

半開きの状態だった。

周囲が暗いので小銃のフラッシュライトを点け、俺は小銃の銃口でドアを押した。蝶番が少し軋んでドアが開き、俺は素早く銃を構えた。

中には誰もいなかった、同時に何も無かった。床には数発の弾丸が転がっていてライトの光を受け輝いていたが、本来小銃が収まっているはずの棚は空だった。俺は油断無く小銃を構えたまま室内に入る。

どうやら武器庫には長い間誰も入らなかつたらしく、棚には埃が積もり、室内には埃が舞っていた。

そのまま部屋を検分した俺は、武器弾薬が殆ど残っていないのに少し落胆した。どうやら駐屯地を放棄した時に殆ど武器を持っていかれ、そして後から本州に取り残された生存者達が、武器庫に残っていた武器を持って行ったのだろう。先程の死体も、武器庫から武器を持って帰る途中で殺されたのだろうか。

だがせめてあるものだけでも持って行こうと、俺は根気良く使えそうな装備を探した。そして少しして、俺は棚の屋根部分に置かれていた、弾薬箱に入っている約300発の小銃弾を発見した。弾倉も一緒に見つけ、ボストンバッグに放り込む。

手榴弾も一ダースほど発見した。ただし、二線級火器の倉庫の中に入っていたので作動するか不安だが……。

結局、小銃弾、手榴弾、重機関銃弾（あまり持っていないか）がなかった。まあ重機関銃を持ち歩く人がいるとは思えないが……（
を発見し、俺は全てバッグに放り込んで武器庫を出た。

数分後、一番最後に車に戻った俺を乗せて、車列は駐屯地を後にした。

第64話 side 龍(後書き)

御意見、御感想、御質問、アイディアお待ちしております。

第65話 side 優

現在 22:00

東京都某所 大型公園

ボクはバスの中で目覚めた。きつと寒いせいだろう。

今日は江戸川を渡った後、広く見晴らしの利く公園で夜営することになった。東さん達が車列の周囲半径700メートルにセンサーを設置した後、交代で見張りをしている。

どうにかして寝ようと頑張ったが、目がさえてしまつて全然寝付けない。仕方ないのでボクは外に出ることにした。

バスの中で寝ている皆を起こさないように気を付けながら、ボクは外に出た。

バスの外では東さん達が、焚き火を中心に見張りをしていた。焚き火の周りでは何人が寝袋に入って寝ている兵士達が数人いる。

「何やってんだ優？寝れないのか？」

ヘルメットに暗視装置を付けた東さんが、寒そうにしながら訊いて来たのでボクは頷いた。

「起きてるのはいいが、あまり動くなよ。見つかったら厄介だ」

東さんはそう言って、また周囲を警戒し始めた。

仕方ないので、ボクは焚き火の周りにある折りたたみ式の椅子に腰掛けた。

「あれ優さん、何やってんすか？」

そう訊いて来たのは、何故か焚き火の周りの寝袋で寝ていた尾田軍司だ。なぜここに？

「ちょっと眠れなくて。君は？」

「見張りの手伝いを。まだシフトは当分先ですけど」

そう言うと軍司は寝袋を抜け出し、傍らに立て掛けてあったM-4カービンを取り上げて肩にかけた。そうして焚き火の周りのテーブルにあったマシユマロに串を刺し、それを火で炙り始めた。

「食べます？」

少し焦げて膨れ上がったマシユマロを差し出しながら軍司が言った。ちよつと小腹も空いていたので、ありがたくそれを頂く。

ちなみに夕飯は、飯盒で炊いたご飯に戦闘糧食？型のタクアン缶、？型の筑前煮、そして味噌汁だった。どれも美味しかったのだが、食べたのが4時間前だったので少しお腹が減っている。

一方軍司は、串をもう一本取り出してまたマシユマロを火で炙り始めた。

「軍司君、何でそんなに一生懸命働いてるの？いや働く事が悪いって意味じゃなくて、もっと休む事も必要だよ」

ボクはずっと見張りをやっていたらしい軍司に話しかけた。

「うーん、休むのも良いですけど、何か働かなきゃって気持ちになるんですよ。大人に全部押し付けるのも悪いし」

そう言つて軍司はマシユマロを食べ始めた。

「それにこんな事を言うのも不謹慎ですけど、僕はこの状況が楽しいんです。自分の力だけで生き抜いていかなければならないこの状況が。それに・・・」

そういうと軍司は、背中に背負ったM-4を膝の上に乗せ、それを触りながら言った。

「こうして軍オタの知識が重宝されているってのは、結構うれしいんです。以前なら変な目で見られていたのに、今じゃ皆の為にその知識を使える。僕も誰かの役に立っているって実感できるんで」

最も、ただ単に実銃を持ってうれしいだけかも知れませんがね。そう言つて軍司は愛銃の手入れを始めた。

確かに軍司はこの状況で物凄く役に立っている。銃の腕前は良いし、

サバイバルに必要な知識を色々と持っていて、それを活用している。今じゃ東さん達大人の次に働いているかもしれない。

それに対してボクは、誰かに助けてもらってばかりで、何をしたいか判らないで何も出来ず、いざという時は東さん達に守ってもらう始末である。そのくせ東さんに怒鳴ったり怒りをぶつかけたりで、感情の制御すら出来ていない。ボクは軍司に比べれば物凄く役に立っていない。

「大丈夫ですよ。優さんも十分誰かの役に立ってますって」
ボクの心を読んだかのように軍司が言ってきた。

「そう・・・？だってボクは君と比べたら余り仕事もしてないし、何か重宝されるような知識を持っている訳でもない」

「それでも、優さんは皆の役に立ってます。リーダーシップもあるし、それに・・・。それに・・・。？」

続きが出てこないようだ。やはりボクは役に立っていないのかと再び落ち込んだが、軍司が笑って続けた。

「天然ボケなところがまたイイ！癒されるし、萌える！！」

何かキラキラした目でこちらを見てきた。はつきり言って、目がアブナイ・・・。

「この状況で人を癒すつてのは、結構重要なことですよ。だから優さんは優さんらしく、そのままいてください」

そう言つて銃の手入れを終えた軍司は、「じゃあ監視行つて来ます」と暗視装置を持って焚き火から離れた。

「そのまま、かあ・・・。」

ボクはそう呟いて、「よしっ！」と言つて立ち上がった。バスに一度戻つて銃を持ち出し、焚き火の側に戻つて来ていた東さんに話しかけた。

「ボクも監視に行きたいんですけど、いいですか？」

「何だ急に？お前は休んでた方が良くないか？それにシフトもまだ先だろ」

「役に立ちたいんです！お願いします」

東さんはやれやれというような顔をした後、「やるならキツチリやれよ。何かあったら知らせろ」と言っ、焚き火で寝袋に入った。焚き火の側のテーブルの上にあった暗視装置を頭につけ、ボクは軍司の側に走って行った。まだ色々と話したいことがあった。

現在 2019年 1月9日 22:30

第65話 side 優（後書き）

御意見。御感想お待ちしております。次回は番外編で尾田軍司の話を書きたいと思います。

第66話 番外編 尾田軍司の大冒険

今でも時々夢に見る。世界が変わってしまったあの日。僕はそれを振り返ってみたいと思う。

尾田軍司の大冒険

現在 2018年 5月16日 16:00

学校の授業を終え、自宅に僕は帰ってきた。2階の自室に上がり、制服をハンガーに掛けてTシャツ、Gパンに履き替えた。

そして自室のパソコンを点け、お気に入りのFPSのオンラインゲームを始めた。

親は昨日から隣家で銃砲店を経営する友人と、東北に狩に行っている。家には僕しかない。兄は数年前軍を辞めてPMC（民間軍事会社）に転職した後、今は四国の支部にいるらしい。

そのままFPSゲームを数十分ほどやった後、表の方が騒がしくなってきた。同時に、チャットの中でもこんな会話がなされた。

「17:12 名無し3等兵：おまいらテレビつけてみる。大変な事になつてるぞ」

「17:12 サーシャ：k w s k」

「17:12 名無し3等兵：いいからテレビ点けろ！死ぬぞ！！」
「何だ？荒らしか？そう思いつつ、僕は部屋のテレビを点けた。」

そして、世界の終わりを目にする事となった。

「現在警察が出動しており、群集の整理にあたっており……」

「この暴動に対して、政府は……」
「現在の所確認された死者は500人を超え……」
「発砲です！警察が発砲を始めました！！」

「……」

何だ何だ？何が起こっているんだ？

「軍が治安出動を開始したとも……」

「政府はこの事態に対し、全警察官、兵士に対し発砲許可を……」

「……」

「現場から伝えます。安田さん？」

どの局もこの「暴動」とやらを報道していた。地震の時でさえアニメを放送しているテレビ東京ですら、報道フロアから速報が流されていた。

「マジかよ……」

既にゲームの入室していた部屋では戦闘が止まり、皆がチャットをしていた。

「17:15 突撃 自爆兵：何これ？一体何なの！？」

「17:15 波動砲射手：俺の市でも暴動起こってる。表が騒がしい」

「17:16 らんらんるー：何か外から発砲音が聞こえる……」

「17:16 やらないか？：俺の家マンションの6階なんだが、大変だ。人が人を喰ってる……」

その文を見た途端、僕のケータイがいきなり鳴った。発信相手は兄だった。急いで電話に出る。

「何兄貴？一体何が起こってるの！？」

《軍司、長い間話してられない。俺の部隊にも出動命令が下った。手短に済ませよう》

「質問に答えろよ！てかPMCまで出動する事態って何！？」

《今から答える。で、質問は？》

「何が起きてんだ！？」

《いいだろう、教えてやる。今起こってるのは……》

《世界の終わりだ》

第66話 番外編 〔尾田軍司の大冒険〕（後書き）

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第67話 番外編 〱尾田軍司の大冒険？〱

「世界の終わり………?」

僕は唐突に出てきたその言葉を繰り返していた。

《そつだ。ウイルスの感染爆発が起こった。世界のあちこちでな。今はまだ起こっていない場所でも、何れ起こるだろう》

「なんのウイルス?」

《クルピン・ウイルスだ。3週間前に大きく報道されてただろう?》
確かに3週間前、東京の埋め立てで出来た島「マリンシティ」で、人を凶暴化させるウイルスが広まり、軍が空爆を行ったと報道されていた。

「でも、ウイルスの封じ込めは成功したんじゃない?」

《出来なかったからこんなになってるんだろ?! お前対処マニユアルとか貰わなかったか?》

「貰ったけど………」

僕はそう言つて、学校のカバンの中のファイルから、先週配られたウイルス対策のプリントを取り出した。内容はこんな感じだ。

「クルピンウイルスへの対処法

クルピンウイルスとは、感染した人間を凶暴化させるウイルスです。感染した場合の発症率はほぼ100%であり、感染した人間は身体能力が超人的になり、理性を失います。また紫外線にも弱くなり、太陽の光に当たると死ぬこともあります。

(中略)

対処法

夜間の外出は控え、戸締りをしっかりしてください。

(中略)

噛まれた時の対処法

噛まれた際は以下の番号に速やかに連絡し、外に出ずに室内で待機

していてください。

×××-×××-××××

《……そんなの全く役に立たない。生き残りたかったら戦うしかない》

「どうすれば？」

僕はそう言ってから、全ての窓を戸締りする為に部屋を出た。雨戸のある窓は全部雨戸を閉め、雨戸の無い窓には机や椅子を積み上げて塞いだ。

《とりあえず立て籠もるなら窓とドアを全て塞げ》

「今やってる！」

そう言つて次々と窓を塞いでいった。

《それから何か武器を見つけた》

「武器つて……。そんなの包丁と木刀くらいしかないよ」

今一応持っている武器らしいものといえば、自室に置いてある中学生の修学旅行で買ったみやげ物の木刀に、先程台所の勝手口を塞いだ時に得た包丁と、雑巾部分を外したモップの棒に包丁をテープで巻いて固定した簡易槍、そして金属バットくらいだ。電動ガン（18禁）も持っているが、そんなの屁の突っ張りにもならないだろう。《馬あ鹿。俺んちの隣は何を売っていたかな？》

いい加減に気づけというような口調で言われてようやく思い出した。僕の家は銃砲店なのだ。そしてその家の住人とは仲も良く、自分と同じ高校に通う同年の友人もいる。

《お前なら散弾銃の一挺や二挺くらい使えるだろ。外には出られるか？》

その言葉で、僕は家の前の道路を見渡せる母の部屋に行った。そして塞いだ窓の隙間から、慎重に外を見る。

「……だめだ。奴らがうろろしてる」

僕が外を見ると、道路にはいくつかの血まみれの死体が転がり、その周囲を口を真っ赤に染めた人間らしきものが徘徊していた。全部合わせて15体くらいいるだろうか。強行突破出来なくもなさそう

だが、リスクが大きそうだ。

「そうだ、俺の部屋の窓から隣の家に移れる！」

《ならそうしろ。それと……》

兄がそこまで言った時に、ケータイから兄以外の声が聞こえた。《全員出勤だ！》とか《急げ！》という声が聞こえる。

《やばい、もう出撃だ！これ以上話してられない。親父とお袋は？》

「二人とも休暇取って東北に狩に行った。銃も持ってたから、大丈夫だと思う」

僕の両親は大学の射撃競技のサークルで出会ったらしい。今でも銃の腕前は結構良いとよく言われる（現に両親の部屋には、競技会で優勝した時のトロフィーが大量に飾ってある）。

《……あの人たちらしいな。なら親の心配はしないで、自分の心配だけしろ》

「わかった。それじゃ兄貴も気をつけて」

《ああ。それと……》

そこで兄は一端区切り、こう言った。

《死ぬな。生き抜け。どんなことがあっても諦めるな》

そこで電話が切れた。

僕は行動を開始した。

まず自室の戻り、窓を開けてベランダに出た。そして目の前の隣家の窓を棒で叩いた。隣家との距離は2メートルも無いので、簡単に窓を叩けた。

電話は回線が混雑して通じなかったので、面倒だがこうするしかない。そうして10秒ほど窓を叩いた後、いきなり隣家の窓が開いて中から見知った顔が出てきた。

「よお軍司、元気？」

小早川銃砲店の一人息子、小早川明憲（しばやかわ あきのじ）が、散弾銃片手に僕に挨拶をしてきた。

「や、明憲、悪いけど今からそっち行っついていい？」

もちろん、断られても無理やり行くつもりだった。それ以前に、小早川はそんな事しないだろう。

「いいよいいよ、こっちの方がドアにはシャッターがあるし、侵入されないだろう。それに……」

そう言つて明憲は手の中の散弾銃を撫で、ニヤニヤしながら言った。

「銃もある。銃、持ちたいんだろ？」

「ハイハイハイハイ！！持ちたい持ちたい！！」

即座に返事をする。

「わかった。それじゃあ必要な物持つてこっちに来てくれ」

そう明憲に言われたので、僕は必要な物をまとめ始めた。

第67話 番外編 尾田軍司の大冒険? (後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第68話 番外編 尾田軍司の大冒険？

僕は必要な物を得るために、一度一階に戻った。台所から食料や飲料水を持ちだし、工具、救急箱、電池等と使えそうな物を全て持ち出す。

そして押入れから大きな脚立を取り出し、2階に向かう。この脚立が無いと、隣家へ渡ることが出来ないのととても重要だ。

そして自室に戻って衣服やパソコンをリュックサックに入れ、サバイバルゲームでいつも使っているアサルトベストを取り出した。一応市販品だが、明憲の家で銃を手に入れた時に弾薬を入れたりして有効活用出来るだろう。

アサルトベストを着込んだ僕は、脚立を梯子状に伸ばして明憲の家の窓に先を突っ込んだ。そしてこちら側の脚立をベランダの柵に結びつけ、僕は脚立の上を四つんばいで進み始めた。

「気をつけるよ。落ちたら感染者に気づかれる」

脚立を抑えている明憲が言った。

「大丈夫、そんなへマするか」

と僕は返し、そしてようやく明憲の家に到着した。

「ようこそ、小早川家へ」

「お邪魔します」

そうふざけて言い合った後、僕は明憲の家に窓から転がり込んだ。

「おお……」

僕は目の前に積み上げられた銃を見て、思わずため息をついていた。

「どれを選んでも良いぞ。弾はその箱の中だ」

明憲がそう言うのが聞こえた。だが僕は目の前の銃に夢中になっていた。

「うーん、じゃコレ」

そう言つて僕が掴んだのは、ベネリ M3 散弾銃だった。この散弾銃はセミオートとポンプアクションが切り替えられ、連射を重視する時はセミオート、通常るときはポンプアクションを行える。しかも散弾銃なのに命中精度がとて面白い。

「お、お前はそれか。俺はコレだよ」

そう言つて明憲が持ち上げたのは、モスバーク M500 散弾銃だった。この散弾銃は狩猟用から公的機関用までと、世界中で幅広く使用されている傑作散弾銃だ。

「うふふふふふふ．．．．．」

僕はそう呟きながら、M3 に弾を装填した。以前の銃刀法では散弾銃には3発までしか弾が装填できなかったが、銃刀法改正後は8発まで装填できるようになった。M3 には7+1 発まで装填できるので、長い間撃ち続けられる。

装填の終わったM3 を傍らに置き、僕は着ているアサルトベストのポーチに弾を入れ始めた。

「うわー、酷いな」

明憲のその声で振り返ると、テレビで感染爆発の事が報道されていた。

「．．．この暴動の原因はクルピン・ウイルスだと、政府から先程発表がありました。クルピン・ウイルスは三週間前に東京のマリンシティで．．．．．」

「既に総理大臣を始めとする政府閣僚は、東京湾上の海軍空母「あかぎ」へとへりで向かいました。これに対して野党、民生党の鳩田氏は、『政府は国民を見捨てた』と非難の声明を発表しました。しかし鳩田氏らも既に海軍護衛艦に移動しているため、この発言には非難が集まりそうです．．．．．」

「現在のところ、北海道、四国、九州、沖縄では被害が少ない模様です。既に政府はこれらの地域との移動を制限しており．．．．．」

「WHO、世界保健機関は先程、クルピン・ウイルスの警戒レベルをフェーズ6に引き上げると発表しました。これは日本を始めとするアジア地域での感染爆発の状況に鑑み……」

「うわ……、日本、いや世界オワタ」

僕はそう呟いていた。どうやら世界中でも感染爆発が起きているらしい。まだ感染爆発が起っていない国の方が多いが、感染者は夜に行動するので、まだ発生していない国々は夜になったら感染者が大量発生するだろう。

「それでは、現在警察と軍による通行規制が行われている明石海峡大橋からの中継です。山田さん？」

「はい。私は今明石海峡大橋の検問所の約500メートル前にいます。現在この橋は警察、軍による封鎖が行われ、一部では人手不足のためPMC、民間軍事会社の社員も検問に加わっているとの事です。海上は海上保安庁と海軍による封鎖が行われ、四国に行くにはこの橋を通るしかない状況です」

「山田さん、そちらの状況はどうですか？」

「……はい。現在この橋の片側2車線が警察、軍、消防等の緊急車両通過の為に封鎖されていて、残った2車線に避難民が集まっている状況です。なお四国に優先的に渡れるのは検問を終えて四国に身元引受人がいる方か、警察など重要な公的機関に勤める方の家族となっています。そのため通常の検問所は大変混雑していて、先程から全く通れない状況です」

「わかりましたー。そちらでは感染者などはいませんか？」

「……はい。いまのところは大丈夫」

「おいその人達！！取材の許可されてるのは橋の入り口までのはずだ！！」

女子アナが中継を続けていた時、一人の男が怒鳴り込んできた。銃を持って防弾ベストを着ているが、その下は軍服ではない。どうやらPMCの社員のようなのだ。

あれ、今の男どっかで見たことが……。

「って兄貴イイイ!?」

「兄貴って、PMCに勤めてる」

明憲が驚いたように聞いてきた。間違いない。あの声にあの顔は間違いなく兄貴だ。

《危険だから下がって、下がって!!》

《マスコミはここから離れて!!》

兄貴ともう一人のPMC社員らしき男が、取材陣の前に立ちほだかる。防弾ベストについているのは三本足のカラスのロゴ。間違いない。PMC「ヤタガラス」に勤める兄だ。

画面の中の兄貴は、持っていたHK416カービン銃を威嚇するようにつと、威圧するような声で怒鳴った。

《ここにいると一般の避難民の方々迷惑となります!マスコミの方々は橋の入り口まで戻るか、今すぐ取材機器を捨てて避難の列に加わるかして下さい!!》

《そんな無茶苦茶な……》

《そうしないと我々も警察官職務執行法に基づいて、あなた達を強制退去させます。我々にはその権限が与えられています!!》

《でも……》

《ほら電源切って!カメラの電源切って!!》

兄貴がそう言ってカメラに手を伸ばし、そして電源を切ったらしく画面には砂嵐が映っていた。数秒してから、画面がスタジオの画像に変わる。

「えー、橋からの取材は、橋の入り口に移動してから再開します。現在のところ被害者の総数は……」

「…………お前の兄ちゃん、すげえな」
「…………どうも」

明憲がそう言ってきたので、僕も生返事を返す。

その時、外から大きな悲鳴が聞こえた。

第68話 番外編 尾田軍司の大冒険? (後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第69話 番外編 尾田軍司の大冒険？

大きな悲鳴に、僕はとつさにM3散弾銃を掴んで2階へ駆け上がった。そして窓から家の前の道路を一望できる部屋に入り、そつと外を見る。

この銃砲店の前の道路から約100メートル程離れた場所で、高校生くらいの少年と少女が一人ずつ、そして同じく中学生くらいの男子と女子が一人ずついた。そして彼らは今、道路脇の塀に感染者に追い込まれてしまっている。高校生くらいの男子が金属バットを振りまわして感染者を遠ざけているが、あれではすぐに囲まれて殺されてしまうだろう。

「なんだ、どうした？」

遅れて部屋にやって来た明憲に、外を無言で指差して状況を伝える。明憲は外を見た後、「あちゃー」と言った。

「どうする？助けるか？」

僕の問いに、明憲は苦い顔で答えた。

「助けたいのは山々だが、今ここから出たら確実に感染者に気づかれる。それはいやだ。でも、見捨てるのはもつといやだ」

「じゃあ、助けますか」

明憲は少しうなった後、苦笑しながら言った。

「そうするか」

「いいか、お前は援護してくれ。僕が彼らを誘導する。絶対に感染者を中に入れるなよ」

僕は明憲にそう言い、閉じられたシャッターの前に向き合った。

「よし、開けるぞ！！」

明憲はそう言い、一気に通路用のシャッターを持ち上げた。通路用

のシャッターは狭い範囲が開くので、感染者は余り入ってこないだろう。

大きな音を立てて持ち上がったシャッターの先には、口の周りを真っ赤に染めた感染者が立っていた。感染者は僕達が中にいるのかわからなかったのか、一瞬動きが止まっていた。

「これでもくらえ!!」

僕はそう言い、手にしたM3散弾銃の引き金を引いた。散弾の群は感染者の頭を粉微塵に吹き飛ばす。

銃を撃つのは初めてだったが、反動も予想していた範囲だったので散弾の大半が感染者に命中した。

一方感染者とそれに囲まれている少年達は、散弾銃の発砲音でこちらに気づいたようだ。同時に、銃砲店の近くにいた感染者達が次々こちらに迫ってくる。

「オラオラオラオラ!! かがつて来い!!」

僕はそう叫びながら、店の前の道路に立った。一方少年達は、僕が感染者の注意を一瞬引き付けたおかげで、バットを持った少年が近くの感染者を殴り倒すことに成功した。そして4人全員で僕の方に走ってくる。

「逃げる奴はベトコンだ! 逃げない奴は良く訓練されたベトコンだ!!」

僕はベトナム戦争を題材にした海兵隊の鬼教官が出てくる映画の、とても有名な台詞を叫びながら感染者達を撃ち倒す。

「よく女子供が撃てるな!!」

シャッターの入り口で店に入ろうとする感染者達を撃ちながら、明憲が苦笑しながら叫んだ。

「簡単だ! 動きがのろいからな!!」

そう映画通りの台詞を返しつつ、僕は銃砲店に近づいてくる少年達を援護する。

とその時、僕の撃っていた散弾銃が弾切れを起こした。

「リロード、カバー!!」

僕はそう叫んで、次々と弾を散弾銃に装填する。僕が装填で撃てないときは、明憲が僕に近づくと感染者を射殺した。そうして僕がリロードを終え、あと50メートルにまで迫った少年達の援護を再開しようとした時。

目の前にぬつと、ちぎれた腕をくわえた感染者が現れた。

感染者は大きく口を開けて啞えていた腕を落とし、僕に噛み付こうとした。とっさに散弾銃を盾にし、噛み付かれるのは防いだ。

そしてそのまま散弾銃の銃床を振りまわし、感染者の顔面に打撃を加える。ぶしゅつと鼻の骨が折れる嫌な感触と音がして、感染者の顔面が陥没した。そして倒れた感染者に散弾銃の銃撃を加えた。

「こつちだ！早くこつちに来い！！」

僕はそう叫んで、M3散弾銃をセミオートに設定した。そのまま連射し、僕や少年達に近づいていた感染者らを次々射殺する。

ようやく銃砲店にたどり着いた少年達の姿を見た後、僕はポーチに入れていたある物を取り出した。先程倉庫で発見した、ストーブ用灯油（ただし季節外れのため少量だった）を酒瓶に入れてボロ雑巾で入り口を塞いだ火炎瓶だ。僕は走りつつ火炎瓶にライターで着火する。

「朝のナパームの香りは格別だ！！」

そう言つて火炎瓶を、店に殺到しようとしていた感染者の群れに投げ込む。明憲が「今度はキルゴア中佐かー！？」と叫んだが、僕は構わず店の中に入った。

ふと後ろを振り返ると、火炎瓶の燃える灯油を被った感染者達が地面をのた打ち回っていた。ただし火炎瓶は殺傷能力が低いので、余計に感染者の怒りを掻き立てるだけになったが、少なくとも足止めには役だった。

シャッターをくぐりぬけ、店内に入ろうとする感染者を散弾銃で吹っ飛ばした後、明憲は一気にシャッターを閉じた。すぐに、感染者達の物凄い数と勢いのノックが開始された。

「ふう、助かった。君達大丈夫？」

明憲が一息ついた後、全力疾走してへとへとになった少年達に訊いた。

「はあ、はい・・・、ありがとうございます・・・」

金属バットを持った坊主頭の少年が言った。全員学校の制服を着ているので、どこかの学生だろう。

「俺、私立峰霧高校の1年B組の、浅岡あさおか 裕次郎ゆうじろうっていいいます」

坊主少年がまず言った。つづいて長髪の少女が答える。

「私は浅岡君と同じ学校で、1年D組の牧野まきの 陽子ひょうこっていいいます。

危ないところを助けていただき、本当にありがとうございます」

そして中学生くらいの男の子も自己紹介する。

「僕は市立初春第2中学校の3年2組の南田みなみだ 尚志しょうしです。助けてく

れてありがとうございます」

「わ、私は南田君と同じ初春第2中学校の3年2組の権藤けんどう さくら

っていいいます。先程は本当にありがとうございます」

そう最後に少女が自己紹介を終えた後、僕達も自己紹介をした。

話を聞くと、浅岡と牧野は学校の部活が終わり、帰宅しようとしていたところ（浅岡は野球部、牧野はテニス部らしい）、校庭に不審者が入ってきた。それに気づいた教師達はその不審者を追い出そうとしたところ、不審者が教師達に噛み付き、教師達の様子がおかしくなったという。それを見に行つた生徒達がおかしくなった教師達に噛まれ、喰われたのを見て、浅岡と牧野は学校から逃げ出してき たという。

一方南田と権藤は、この異常事態が起きて避難所となっていた初春第2中学校に避難していたところ、校内に感染者がやって来たらしい。避難していた人がたくさんいた校内では阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられ（警察は他の所が手一杯で、駆けつけて来なかった）、それを見た南田と権藤は警察署まで逃げた。

そして警察署の近くで同じく逃げてきていた浅岡と牧野に出会い、一緒に警察署まで行こうとした。しかし警察署に近づくとつれて感染者の数が増え、遂には追われる事態になってしまった。

そして感染者に囲まれてしまったところを、僕と明憲が助けたというわけだ。

「…んで、これからどうする？」

僕はそう皆に聞いた。

「武器もあるし、今日一晩くらいなら持ち堪えられるだろう。それに感染者って、夜間しか行動できないみだから、朝になれば助けが来るか警察に行くかできる」

皆特に反論はないようだったので、僕は顔を洗うために洗面所へと向かった。明憲も後ろからついてくる。

「なあお前、人を殺しちゃったが、何ともないか？」

明憲がいきなり聴いてきた。僕は血で所々汚れた上着を脱ぎ、家から持ってきていた別の服に着替える。

「ん？何が何ともないんだ？」

「いや俺ら、今浅岡達を助けるために、何人も殺しちゃっただろ。」

お前はそれについて恐怖感とか覚えてないか？」

明憲が真剣な表情で訊いてきた。ふと明憲の手を見ると、少し震えていた。

「俺は怖い。たとえあいつらが凶暴で、理性を無くしていても、元はと言えば人間だったんだ。俺はそれを……」

「人だと思わなければいい」

僕は顔を洗い、水滴をふき取りつつ答えた。

「大体、殺さなければ殺されるんだ。一々そんな事気にしてられるかっての」

「いや、でも……いや、何でもない」

明憲は何か言いたそうだったが、僕の説が正しいと思ったのか何も言わなかった。

「お前、前はそんな性格じゃなかったよな。何かあったのか？」

「何かつて？この状況で一々感染者を殺す事を躊躇してる暇はないから、ただそう言ったただけだ。それに……」

「それに？」

僕は続けた。

「今はとても楽しい。銃を持ってあいつらを殺したのは、とても気持ち良かった」

明憲が絶句したが、本気で僕はそう思っていた。

銃を持って初めて感染者を射殺した時、僕の心の中にあつたのは恐怖ではなく、「よし、当たった！！」という歡喜の気持だった。

それを誰かに「お前は狂っている」と言われても、僕はそいつに反論できないだろう。でも、実際快感なんだから仕方ない。

軍隊で新兵は、最初に人を殺しても何も思わないらしいが、どんどん敵を殺してふとその事実気付いた時、言いようのない恐怖感に襲われるという。拳銃のはてにPTSDを患うか心に大きな傷を持ち、中には狂って味方に銃を乱射してしまう人もいるらしい。

僕もそうなるのだろうか。いつか感染者を射殺した事を後悔し、恐怖に襲われるのか。それとも気が狂ってしまうのか。

……馬鹿らしい。

そんな事を考えている余裕があつたら、どうやってこれから生き延びるかを考えるべきだ。でないとPTSDを患う前に、感染者に喰われるか奴らの仲間になってしまうだろう。

「まあ僕も出来れば殺したくは無いけど、自衛のため……」

僕がそこまで言ったとたん、浅岡が洗面所に走って来て言った。

「大変です。テレビを早く見て下さい！！」

第69話 番外編 尾田軍司の大冒険? (後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

・・・あれ？番外編が終わらない(汗)

第70話 番外編 尾田軍司の大冒険？

僕と明憲は、急いで店舗部分に設置されているテレビの元へ走った。
「何だ！何が・・・」

僕が聞こうとすると、権藤が唇に人差し指を当てて、「静かにして下さい」とジエスチャーで伝えた。僕と明憲は無言でテレビ画面を見て、そして息を飲んだ。

「・・・総理は先程、明日午前7時を以って本州を完全に放棄するとの発表を行いました。これはいまだ感染者の発生率の少ない北海道、九州、四国への感染拡大を防ぐ措置であると思われれます。なお本州の完全放棄および封鎖は、明日午前7時を以って行われるとの事です。これにより明日午前7時以降、本州から脱出する事は不可能となります。また総理は、明日午前7時以降に本州の外に出た人物については、『強制排除も問わない』と発言しています。

このテレビを御覧の方は、近くの人にも出来るだけ声をお掛けください。なお本州からの脱出方法は、最寄の警察署、軍基地、新たに指定された避難所、空港まで行くと、検査を受けた後先の3地域のいずれかまで輸送されます。

また感染者の発生率が高い地域は、明日午前7時前にその地域を放棄する可能性もあります。詳しくは画面右下の地図、もしくはデータ放送のdボタンを押すことによって、詳しい情報が得られます。なお、噛まれた人については最悪射殺の可能性も・・・」

「・・・うわ〜」

そう明憲が呟き、すぐにデータ放送のdボタンを押した。千葉県 の地図が画面に現れる。

本日午前1時を以って放棄される地域は赤、午前3時までには放棄さ

れる地域はオレンジ、午前5時までは黄色、午前7時に放棄されるのが青色で表示されている。画面の千葉県地図は殆ど赤もしくはオレンジ色に染まっていた。

「え〜と、初春市は………。うわ赤だ」

すかさず僕は時計（兄貴から貰ったG・SHOCKだ）を確認した。現在の時刻は00:12……。

「やっばい！！後1時間も無い！！」

浅岡がそう叫んでいた。皆も残り時間が少ない事にうろたえ、一気に室内には混乱が広まった。

「落ち着け！！まだ40分以上ある！！警察署までは歩いたって20分もかからん！！」

明憲がそう言っただけを落ち着かせようとした。が、僕たちはあることを忘れていた。

「でも私達、警察署に行く途中で襲われたんですよ！警察署まで行けば行くほど、感染者の数が増えていくんです！！」

牧野がそう言った。そういえば、こいつらは警察署に結局たどり着けなかったんだ。

僕はアサルトベストのポーチから地図を引っ張り出し、カウンターの上に広げた。

「いや、ここから歩いて40分の所に海兵隊初春基地がある！！あそこにたどり着ければ……」

先程から気づいていたのだが、やけにヘリコプターの羽音がする。きっと放棄が近いので戦力を総動員しているのだろう。つまり、まだ基地は安全だということだ。

「どうする、基地に行くか？それとも警察署か？それかここで朝を待つか！？」

僕は皆にそう問いかけた。皆、何か決意したような顔で「基地に行く！」と叫んだ。

「でも、どうやって外に出るんですか？外には感染者が……」
浅岡が不安そうに言った。先程からシャッターを叩く音が増え、外

からは不気味なうめき声が聞こえる。僕達がシャッターから外に出たら、待ち受けている感染者達にあつという間にやられてしまうだろう。

「そつだ！2階にはまだ脚立が掛けっぱなしだったよな！？あれで俺の部屋まで行って、俺んちの家の裏口から出れる！！」
その方針を採ることになり、僕達は脱出の準備を始めた。

「それじゃすぐに必要な物をまとめて！」
そう言うと皆すぐに作業に移った。僕がテレビを見ると、誰かが弄つたのか衛星放送で海外のニュースが流れていた。

「This virus which is popular around Asia is . . . (アジアを中心に流行しているこのウイルスは . . .)」

「The Prime Minister Japan transfers government function to a marine carrier . . . (日本国総理大臣は、政府機能を洋上の空母へ移転 . . .)」

「These viruses are popular very much with sunset, and the occurrence increasing countries of the infection . . . (このウイルスは日没と同時に大流行し、次々と感染者の発生する国が増え . . .)」

「 . . . くそつたれ」

僕はそう吐き捨てて、持ち出す武器弾薬をまとめ始めた。

数分後、全ての必要な物を持った僕達は、ドアの前に椅子や机が積みまれた部屋の前に立っていた。それらの障害物を全て取り除いた後、慎重にドアを開ける。

少しドアを開けたところで散弾銃の銃身を突っ込み、そしてそのまま構えながらドアを開けた。幸い、誰も部屋におらず、窓にかかっている脚立もそのままだった。

「それじゃ、俺がまず先に行つて安全を確かめる。お前らはその後ついてきてくれ」

明憲がそう言つて脚立を掴み、慎重に音を出さないよう脚立を渡つていった。その間僕は散弾銃を構え、外を警戒する。

「・・・大丈夫だ。奴らはいない」

脚立を渡り、僕の部屋の窓を開けて室内の様子を確認した明憲が、そう言いながら手を振った。その言葉に皆ほつとし、続々と脚立を渡る。

南田は高所恐怖症だったのか最初渡るのに抵抗があつたようだが、僕が説得することによつてようやく渡つた。最後に僕がその後につき、小早川銃砲店を後にした。

自分の部屋に戻った僕は、散弾銃を構えつつ慎重に廊下を渡つた。

窓のバリケードが一つも破られていなかったため、どうやら感染者に侵入されていないようだ。

「オーケー、皆静かについて来い。音を立てるなよ」

僕はそう言つて先頭に立ち、慎重に進んでいく。やがて台所に着き、僕と明憲は裏口のドアの前に積み上げられた椅子やテーブルをどかした。

1分もしないうちに障害は排除され、僕はゆっくりとドアを開けた。素早く外に出て周囲を警戒したが、感染者の姿は見当たらなかった。感染者がいないことを確認すると、僕達は塀を登り、大通りへと塀伝いに進む。

最後に一度だけ、もう帰つてこないかもしれない家を見て、それから僕は後ろを振り向かずひたすら塀の上を歩いた。

第70話 番外編 尾田軍司の大冒険? (後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

「・・・・・・・・」

僕は絶句していた。

初春市市街地に出た途端、そこで殺戮が繰り広げられていたからだ。大通りでは車が渋滞状態で放置され、あちこちのビルに車が突っ込み、交差点で車が衝突して炎上していた。

そしてその周りを、無事な人間がてんでばらばらの方向へと逃げ、そして感染者達もそれを追っていた。警察や軍はまだ抵抗しているらしく、各所で散発的な銃声がしている。

「おいどうする?ここを行くしか近道は無いぜ」

明憲がM500散弾銃を構えつつ、周囲に目を走らせて言った。

40分以内に海兵隊初春基地に着くには、この大通り沿いに走っていくしかない。だが大通りはあちこちが衝突した車で分断され、そして逃げ惑う人々が行く手を遮っている。

「行くも何も、本州から出たいんだろ?」

僕がそう言くと、皆は力強く頷いた。

「なら、ここを行くしかないだろ」

僕達は大通りを走りだした。途中で何人もの人たちにぶつかったが、何も言われなかった。僕達全員は散弾銃を持っていたが、そのことすら何も言われなかった。

大通りを移動する際は、安全を確保するため誰か一人が前進して偵察し、安全を確認したら皆で進むという方法をとった。時間がかかるが、全員無事であるためには仕方が無い。

まず僕が偵察することになった。物陰となっている放置車両から顔を出し、50メートル前方の放置された市バスへと視線を巡らせる。市バス付近の安全が確認されたら、皆を呼ぶ予定だ。

息を大きく吸い込み、そして市バスまで全力疾走する。50メートル走はいつも8秒台だったが、今は軽く7秒を切っているだろう。

火事場の馬鹿力というやつか。

市バスに着いた僕は、慎重にその陰から前方を覗いた。幸い、感染者はいないようだった。

僕は手を挙げ、皆を呼び寄せた。物凄い速さで皆走り、あつという間にバスに辿り着き、続いて明憲が偵察に出た。約100メートル前方のコンビニまで走った明憲は、到着して少しすると手を挙げ、周囲が安全だと知らせた。

僕達はその事を繰り返しつつ、順調に初春基地に近づいて行った、のだが……………。

人生、そうそう良い事ことばかりある訳じゃない。僕はそれを、基地に到着する直前に思い知った。

第71話 番外編 尾田軍司の大冒険? (後書き)

そろそろ番外編終了です。

・・・あれ?本当は5話くらいで終わる予定だったのに、何でだろ
う?

第72話 番外編 〱尾田軍司の大冒険?〱 (前書き)

いつの間にか18万アクセス突破していました。
いつもありがとうございます。

第72話 番外編 〱尾田軍司の大冒険？〱

現在 00:50

僕達が初春基地の近くまで来たとき、僕は基地から聞こえるヘリのローター音がないことに気がついた。

よく見れば先ほどまでたくさんいた基地上空を飛び交うヘリの姿は見え、かわりに遠くに初春市から離れていくヘリの部隊が見えた。

「まさか……」

「俺達、置いていかれた……!？」

皆が口々に呻いた。ヘリが脱出する時刻は01:00のはずだが、襲撃に耐え切れなかったのか!？」

「待て、まだ置いていかれたという確証はない。もしかしたら陸路で脱出できるかもしれない」

僕はそう言っただけを落ち着かせようとしたが、僕はそれに確証が無い事を悟っていた。

先程より重い足取りで、僕達は基地を目指した。

基地の門付近には、死体と放棄された車両しか無かった。基地の門はなぎ倒され、人間か感染者か判らない死体が基地の奥まで倒れている。

基地の奥からは、感染者達のうなり声が聞こえている。確実に、基地にいるのは人ではなく感染者だけだろう。

「……もう、終わりだ。何もかも終わったんだ」

浅岡がそう呟き、膝から崩れ落ちた。他の皆も力が抜けたようにしやがみこみ、同じような事を口に出していた。

よく見ると、基地の周囲には生きた人間もいた。僕達と同じように本州から脱出しようとして基地に来て、僕達と同じように置いてけぼりにされたのだろう。

感染者達はそんな人達に次々と襲い掛かった。あちこちで阿鼻叫喚の地獄が繰り広げられ、逃げようとした人達は周りの人達を押しつけて脱出しようとした。

中には全てに絶望したのか、何も抵抗せずに感染者に喰われる人もいた。そういう人は殆どが60代以上に見え、悲鳴を上げずに次々と体を喰われた。

「おい逃げるぞ！さっさと立て！！」

僕はそう言っただけで浅岡の手を掴んだ。だが浅岡はその手を振り払い、その場にしゃがみ続けた。

「い、イヤツ！来ないで！！」

その叫び声で振り返ると、権藤が感染者に足を掴まれていた。

「この野郎！！」

そう明憲が叫んで、M500のストックで感染者を殴りつけた。感染者が権藤を放したところで、明憲がその顔に散弾を浴びせる。この市内で安全な場所。それは僕達が先程までいた明憲の家だ。生き延びたいなら、まずはそこを目指すしかない。

「逃げるぞ！生きたい奴はついて来い！！」

そう僕は叫び、権藤の手を掴んで走り出した。明憲、南田、牧野と続く。結局、浅岡はしゃがみこんだままだった。僕は浅岡も連れて行きたい心情だったが、そんな暇は無かった。

しばらく走って後ろを振り返ると、浅岡の姿が感染者達に飲み込まれるところが見えた。

走って市街地に戻ると、そこには先程まで逃げ惑っていた市民の姿は見えず、感染者があちこちをうろついていた。

早速感染者に気づかれ、僕達の周りに多くの感染者が現れた。すぐに円形に包囲され、うなり声が僕達の耳に響く。

「生き残るぞ！！躊躇するな！！」

僕はそう叫び、M3散弾銃を発砲した。明憲達も個々の得物を構え、次々と周りの感染者達を射殺する。

セミオートで次々発砲し、感染者の包囲に穴を開ける。すかさずそこを走りぬげ、明憲たちも後に続いた。

「た、助けて！！誰か助けて！！」

南田のその声で振り向くと、南田が感染者達に腕を掴まれていた。他にも体のあちこちを掴まれ、南田は感染者の海に飲み込まれようとしていた。

「オラツ！！南田を放しやがれ！！」

明憲がそう叫び、南田の手を掴む。僕は南田に散弾が当たらないように気をつけながら発砲し、どうにか南田を助けようとした。

次の瞬間南田の顔が歪み、何か木を折るような音がした。

続いて南田の右手を掴んでいた明憲がしりもちを着き、信じられないというような表情を見せた。

明憲が掴んでいたのは、南田の「ちぎれた」右腕だった。

「ギヤアアアアアアアアアアアア！！！！」

南田が叫び、続いて感染者の海に飲み込まれた。悲鳴と肉が引き千切られ、潰され、喰われる湿った音が響く。

「うわああああ！！！！」

明憲が悲鳴を上げ、南田の千切れた腕を放り投げる。僕はすかさず明憲を立たせ、また走り出した。

と次の瞬間、牧野が何かを喚きながら、全く違う方向へ走り出した。銃を乱射し、狂った様に叫ぶ。

「おいどこに行く！？そつちは危険だ！！」
僕がそう叫び、牧野を引き戻そうとした。が、牧野は僕の忠告に耳を貸さず、どこかへ行ってしまった。
牧野がビルの陰に隠れて見えなくなった後、銃声と牧野の叫び声が聞こえた。

「くそ！！さつさとここを離れて……………」
僕がそう言って後ろを振り返ると、何か絶望した表情をみせる明憲と、左腕を押さえる権藤が立っていた。

「どうした、さつさと……………」
僕がそう言って二人を掴んで走ろうとすると、権藤は僕の腕を振り払った。そし押さえる手を離し、僕は権藤の左腕を見て目の前が暗くなった。

権藤も噛まれていた。

「……………すいません。やられちゃいました」
権藤はそう小さく笑い、そしていきなり持っていた散弾銃の銃口を口に咥えた。

轟音と共に、権藤の頭が木っ端微塵になった。

僕と明憲は、止めることも出来ず、ただ見ているしかなかった。

第72話 番外編 〱尾田軍司の大冒険?〱 (後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第73話 番外編 尾田軍司の大冒険FINAL

現在 2018年 5月19日 07:00

朝がやって来た。

僕達はあの後必死に来た道を戻り、僕の家から再び明憲の家に戻った。すぐに感染者がシャッターを叩き始めたが、頑丈なシャッターのおかげで突破されなかった。

そして日の出が近づくにつれ、シャッターを叩く音も少なくなった。

「・・・朝だな」

「・・・ああ」

夜間は交代で見張りをし、起きてきた明憲が僕に声をかけた。

結局、僕達は誰も救えなかった。そのことが心の重石になり、僕と明憲は銃砲店に戻ってから数える程しか言葉を交わしていない。

昨夜の3時ごろには発電所も放棄されたのか、テレビは映らなくなった。聞いていたラジオも、悲鳴と共に途絶えた。

「・・・そろそろ、飯でも食うか」

と明憲が言い、ガスボンベを使うコンロを取り出した。ペットボトル入りの水をやかんに注ぎ、やかんをコンロの火にかける。

僕の家から持ってきたカップヌードルを取り出し、僕は封を開け始めた。

「お前、あんまり自分を責めんなよ」

と、明憲は僕に突然言ってきた。権藤達を死なせた事を言っているのだろうか？

「結局、皆お前の提案に賛同したんだ。その結果までお前が背負う必要は無い。それに、ヘリが時間より早く行ってしまっなんて、誰にも予想できなかった」

「・・・それでも、基地から戻る途中に全員死んだ。僕がもつとしかり・・・」

僕がそこまで言った途端、明憲がずいと顔を近づけて言ってきた。

「いいか！？お前が皆を守る必要なんて無かったんだ！世界中でこんな事態になつてる時に、他人を守つてる余裕なんて無い！！自分が生き延びることだけを考える！！グジグジ終わった事を後悔してんじゃねえ！！」

そう言った後、明憲は小さく

「・・・怒鳴つてすまん」

と付け足した。

でも僕は、明憲の言葉で少し元気を取り戻せた。たしかに後悔している暇は無い。生き残ることを考えるまでだ。絶望している暇は無い。

カップラーメンを食い終わった僕と明憲は、持てるだけの武器と弾薬、食料等を持って銃砲店から飛び出した。

銃砲店の外には多数の死体が転がっていて、中には手足が無い、頭が無い、腹の中身が全部無いなど、無残な状態の死体も多くあった。「・・・うげえ、肉が食えなくなりそうだ」

「食える肉があつたらの話だな」

口を押さえてそう言った明憲に僕はつつこみ、取り合えず大通りを目指そうとした、その時だった。

遠くからかすかに銃声が聞こえた。1発づつ間を空けて、3回聞こえた。

「銃声か？だとしても、戦つてる感じじゃなさそうだ」

「それに感染者は夜しか行動しないんだろ？」

僕と明憲はそう言いあい、方針を変えて銃声がした方を指すことにした。誰でもいいから生きている人間に合いたかったのだ。

30分ほど歩いた後、また銃声が聞こえた。今度は先程に比べて大

きな音だったので、銃声を発する場所に近づいているという事だろう。

10秒間隔で3発なり、僕達は誰かが意図して銃声を発しているのだとわかった。

市街地の中心部から離れるように歩き続け、初春市郊外に出た時、再び銃声があった。はっきり聞こえたその銃声を、僕は脳内の銃器データベースの銃声と参照する。

聞く限りだと、その銃声はおそらく軍用突撃銃のものだ。しかも、日本の防衛軍で使用する9式小銃の銃声に酷似している。

どうやら発砲しているのは軍関係者だろう。あるいは、死んだ兵士の死体から銃器を拝借した民間人か。

僕は後者でないことを祈りつつ、銃声のした方へと明憲と歩き続けた。

僕達が市街地を抜け、田園地帯へやってきた時、僕は赤い煙が立ち昇っているのを見た。

その赤い煙は1キロほど先から立ち昇っていたので、僕と明憲はひたすら煙めがけて走り続けた。

「多分発炎筒を使ってる！！おそらく兵士か警官だ！！！」

「そうだといいな！」

そんな言葉を交わし、着々と煙に近づいて行った。

数分後、僕達は私立浜浦小学校の近くまで来ていた。浜浦小学校の屋上にはソーラーパネルや風力発電の風車が設置しており、赤い煙はその間から立ち昇っていた。

そして屋上には、迷彩服を着た人が手を振っているのが見えた。

こうして僕達は地獄を生き延び、浜浦小学校の皆と出会った。

第73話 番外編 〱尾田軍司の大冒険FINAL〱（後書き）

はい、という訳でようやく番外編完結です。いや〱長かった。
御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第74話 side 龍(前書き)

ひびびかに龍編を書くので、ちょっと短めです。

第74話 side 龍

《あのお~~~~すばあらしい~~~~、あ~~~~をもう一度お~~~~》
無線機から、男達の陽気な歌声がこれこれ30分以上響き渡っている。

優達の乗っているバスでも黒田が歌い、俺の乗る軽装甲機動車でも赤井が歌い、更にはバスの中の美里まで歌っている。
とても力オスな状況だった。

最初は結構皆知っている歌だったが、そのうちジャンルを選ばなくなったのか様々な歌が無線機から流れ始めた。

《わかつちやくれとは言わないが、そんなに、俺が悪いのか》

《ああくだから今夜だけはあ~~~~、君を抱いていたい~~~~》

《あるう〜晴れた日のこと~~~~、魔法以上の愉快が~~~~》

《やらないか やららいか やら やらかいかい》

皆が歌いながら、バスは一路陸軍立川駐屯地へと向かって行った。

立川駐屯地に向かったのは、弾薬や燃料、補給物資を探すためだった、のだが.....。

「.....マジですか？」

「.....最悪だな」

俺と中沢は、変わり果てた駐屯地を眺めつつ呟いた。

「変わり果てた」というのは、何も数ヶ月間無人で放置されていたからだけではない。

立川駐屯地の滑走路を横断するように数百メートルの地面が抉られ、

武器弾薬を収めていたらしき倉庫はグシャグシャに潰れていた。そしてその倉庫を押し潰すように、ジャンボジェットの機首が転がっていた。

「・・・どうやら墜落したみたいだな。東京放棄時に墜ちたのか」俺達は車列を止め、墜落した旅客機を眺めた。直線で数百メートル挟られた地面には、あちこちに機体の残骸が転がっていた。折れた主翼が家を真つ二つにして突き立ち、翼から外れたエンジンが放置された車を押し潰していた。

「墜落した方向から見て、どうやら羽田空港から飛び立った機体みたいだな」

牧がぼつりと呟く。おそらく、飛び立った直後に感染者が操縦席に侵入したのだろう。

何も回収できそうに無かったので、俺は再び車列に出発を命じた。

南下し海沿いに進むため、俺達は一路東京湾を目指した。途中商店街を通り抜けたが、シャッターには生存者が書いたと思われる落書きがいくつもあった。

『審判の日がやってきた』

『人類は罰せられる。今までの罪を懺悔せよ』

『知美へ。小学校に先に行く。これを見たらすぐに来てくれ』

『皆死ぬ。もう止められない。皆・・・（血で汚れていて読み取れない）』

書いた人間達の叫び声が聞こえてきそうだった。路上には白骨遺体もいくつかが転がっていたので、俺は落書きや死体を見せないため、子供達に頭を下げていろと命じた。

そのまま走り続け、ようやく高速道路に入れると思った矢先、高速道路の入り口を墜落したヘリが塞いでいた。

ヘリの焼け焦げたテールには「サンエイグループ」という、全国放

送のテレビ局の社名が書いてあった。念の為一端車列を止め、へりの機内を検分してみたが、焼け焦げたへりの機内には白骨しかなかった。

おまけにその骨の数は、どう考えても機体の定員数と合わない。

周囲をよく見渡せば、100メートルほど離れたビルの屋上の端が抉られ、へりのテールローターらしき物が突き刺さっていた。

この事から勘案するに、このへりは定員オーバーの状態で無理やり離陸し、バランスを崩して墜落したようだ。

人間の生きたいという欲求が、逆に自らを死なせてしまうなんて皮肉だと俺は思いつつ、再び車列に前進を命じた。

感傷に浸って時間を無駄にするヒマは、ない。

第74話 side 龍(後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第75話 side 優

ボク達は立ち往生していた。

立川駐屯地を離れ、高速道路に着いた直後から空が曇り、拳句猛吹雪が発生したのだ。吹雪のせいで視界は悪く、あっという間に積もった雪が車列の進行速度を遅くさせてしまった。

東さんはこのまま進むのは危険だと判断したのか、一端高速道路を降りて、地上で吹雪が止むまで待つ事を選択した。

「寒い、寒いよパトラッシュ」

誰かがバスの車内で呟いた。エアコンはフル稼働しているものの、所詮この猛吹雪では焼け石に水といった状況でしかなく、皆でくっついてどうにか寒さを凌いでいた。

「・・・そうだ。そろそろ監視の交代に行かないと」

ボクは時計を見てそう呟き、被っていた毛布を剥ぎ取って立ち上がった。バスの前方にある武器庫から、自分のMP-5F短機関銃を取り出し、マフラー、帽子、ゴーグルを装着して外に出た。

バスの外は極寒の世界だった。吹雪が吹き荒れ、10メートル先も見えない。ボクはバスの近くにある焚き火目指して走った。

バスの後方、そしてハンビーの間にはドラム缶が設置され、中では薪が燃え盛っていた。

「お、ようやく交代か。さっさと戻ろう・・・」

と先に監視についていた軍事が呟き、バスに走っていった。さすがの軍司でも、この寒さには耐え切れならしい。

「うー、さぶいさぶい」

と言いつつ、東さんがやって来た。目出し帽を被りゴーグルを付け、さらにその上にヘルメットを被っていたので一瞬誰か判らなかつた

けど。

「寒いですね……」

「ああ、八甲田山で受けた演習よりキツイ。凍傷にならんよう気をつけるよ。まだ日没まで時間はあるから」

その言葉を交わし、ボクは監視任務についた。

30分後

何事も無く終わると思われた監視任務は、突然、全く別の終わり方をした。

ボクがそろそろ終わるかな、と腕時計を見つつ思い、再び前方を見回した。もう雪は60センチ以上積もり、辺り一面が銀世界と化している。

「そろそろ監視が終わるんで、引継ぎお願いします」

とボクが東さんに言うと、東さんが

「ああ、じゃあ次の人を……」

と言った途端、

東さんの隣のハンビーが、突如、火花と共に金属の弾ける音がした。

「……?」

ボクが訳もわからず一瞬棒立ちになると、突然東さんがボクを押し倒した。

「東さん……!?!?」

「バカヤロウ! 頭下げてる!!」

との怒声と共に、上げかけた頭を積もった雪に押し付けられた(思い切り、容赦なく)。

頭を押し付けられた瞬間、再びハンビーの車体に火花が散った。続いてバスにも火花が散る。

「ヒトヒトより各員、銃撃を受けている！！子供達は姿勢を低くしろ！兵は応戦準備！！」

と、喉元のマイクに吹き込んだ。銃撃だつて！？

東さんの通達を聞いたのか、兵士達が装甲車のハッチから身を乗り出し、屋根上の重機関銃を構える。銃座に着かなかつた者は装甲車から下車し、地面に急いで伏せて小銃を構えた。

《2時の方向、距離300！！発砲炎が見えた！！応戦許可を！！》と、狙撃銃を構えた堂々さんが無線で伝える。東さんはその方向に小銃を構え、いきなり単発で発砲した。

《了解！応戦する！！》

東さんの応射が合図となり、伏せた兵士達が次々と発砲した。ボクもMP-5を構え、安全装置を安全から単発に設定する。

だけど、引き金が引けない。指が凍りついたように動かない。

相手が人間だからだ。

初春市にいた時は、銃を向ける相手はダークシーカーズだった。

今東さん達が応戦している相手は、人間だった。

人間を殺すのが怖いのだ。

ボクが引き金に指をかけたまま動けずにいると、東さんに突如肩を叩かれた。

「ここは俺達が何とかする。お前はバスに戻つてろ」
そう優しい声で言われた。

東さんは、ボクが人殺しをしないよう、最大限の配慮をしたのだ。

ここで戻れば、ボクはこれ以上辛い思いをしなくてすむ。
だがそれは同時に、逃げるという事でもあった。

また逃げて、嫌なことを東さん達に押し付ける事はイヤだった。

「……………ここにいます。ボクもここにいて、イヤな事ばかり押し付けられないようにします」

ボクがそう言うと、東さんは

「……………わかった。でも短機関銃じゃ弾が届かないから、いざという時まで発砲するな」

と言い、再び発砲する。

ボクはMP-5を構え、ドットサイトを覗き込んだ。

初めて“人間”相手に銃を向ける時が来た。

第75話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第76話 side 龍(前書き)

20万アクセス突破!これからも頑張っていきます!!

第76話 side 龍

反撃命令を下した後、俺は小銃上部に取り付けられた低倍率スコップを覗き込んだ。スコップの向こうで一瞬銃火が光り、俺は引き金を引いた。

しかし、手応えが無かった。おそらくこの猛吹雪で弾道が逸れているのだろう。

「皆小銃から持ち替える！誰か銃座に就け！！」

俺はそう言い、伏せたままごろごろと転がって、銃弾が飛んで来ないハンビーの側面に回りこんだ。銃撃されない事を確認すると、立ち上がってハンビーのドアを開ける。

車内に入った俺は屋根のハッチを開け、M2重機関銃を構えた。俺が重機関銃に取り付いた事を知ったのか、銃撃が一層強くなる。幸いハンビーの屋根には防盾が設置されているので、銃弾は一発も俺に当たらなかった。

俺はヘルメットにつけられた、赤外線暗視装置を目に当てた。

物体は多かれ少なかれ赤外線を発するので、それを可視化できるようにしたのが赤外線暗視装置だ。赤外線を発する物体は白く、発さない物体は黒く表示される。

俺が暗視装置を覗き込むと、あちこちに白い影、つまり人間がいることがわかった。更にその白い影の手元では、銃を発砲しているのか白い閃光が走っている。

全部で20くらいある白い影、その中でも俺が一番手近な奴に機銃の銃口を向け、発砲した。吐き出された12.7mm弾は伏せたまま発砲する敵に着弾、あつという間にそいつをミンチ肉に変えた。

暗視装置越しに、白い影が木っ端微塵になるのがわかった。

俺の機銃攻撃に続き、他の車両も発砲を始めた。全部で3挺ある重機関銃が、容赦無く敵を粉々にしていく。

一方俺達に発砲してきていた奴らも、機銃の脅威に気付いて射手を排除しようとしたようだった。先程より多くの弾丸が俺達に飛来するが、それらは全て猛吹雪で逸れるか装甲版に阻まれてしまった。逆に俺達は暗視装置で発砲してきた敵を捕捉、射撃した。

もはや一方的な戦いとなっていた。俺達を排除することが困難だと判断したらしい敵は、走って撤退を始めた。それを見た俺は、とっさにマイクに吹き込んでいた。

「追撃しろ！1人も生かして返すな！本隊に報告されたら厄介だ！」そう叫ぶと、俺は逃げてゆく敵に機銃の照準を合わせた。このまま逃がすという方法もあったが、本隊に報告されて増援が来たら厄介な事になる。素人の人間相手ならなんとか出来る自信はあるが、日が暮れてダークシーカーズまで引き寄せる事だけはごめんだった。

・・・数分後、俺達に攻撃を仕掛けてきた敵は、全て死んでいた。

俺は敵の全滅を確認した後、仲間に敵の死体を検分するよう命じた。俺自信もハンビーから降車し、小銃片手に歩き出した。

やがて吹雪が止み、周辺一帯の凄惨な様子が見て取れた。雪原のあちこちが朱に染まり、千切れた腕、足、頭、肉片が散乱していた。300メートルほど歩いた後、俺は頭に穴を開けて死んでいる敵を見つけた。小銃の銃口で死体をひっくり返した俺は、その死体の顔を見て息を呑んだ。

死体は、どう見ても子供のものだった。歳は20歳にもいっていないだろう。

俺はしばらく衝撃を受けていたが、やがて冷静に死体を調べた。

死体の服装は、市販のスキーウェアにサバイバルゲーム用の弾薬帯を身に着けていた。どう見ても兵士や警官ではない。

銃器もAK-47突撃銃を持っていたが、この銃は防衛軍では採用されていない。政府の武器投下時に得たのだろうか。俺は念の為、死体を調べていた中沢に訊いてみた。

「01東より02中沢へ。死体を見つけた。歳はだいたい10代後半、服装はスキーウェア。装備はAK-47だ。そちらが発見した死体の様子は？」

《東か。こっちの死体も似たようなもんだ。歳は・・・、若いな。頭が半分砕けてるからよく分からんが。装備は陸軍の刻印が入った9式小銃だ》

「じゃあ、軍関係者か？」

《違うと思う。こいつは黒いスキーウェアを着ているが、兵士だったらもつと入念に偽装するだろ？》

確かに、中沢の言うとおりだった。雪中で黒い服装を着ているのは、被発見率が上がり自殺行為だ。

その後も皆からの報告をまとめた結果、こいつらは素人の武装集団だという事で結論づけられた。増援が来るかはわかりようが無かったが、もし来られたら厄介な事になる。

俺達は死体から使えそうな銃器・装備を拝借し、さつさとここを離れる事になった。子供達は銃声に脅えているようだったが、優達が落ち着かせてくれたらしい。

雪掻き用の板を装備したバスが先頭を走り、その雪掻き板で深く積もった雪を押しつけて後続に道を作る。俺は軽装甲機動車の銃座につき、M2重機関銃を構えつつ思った。

すなわち、これから戦う相手はダークシーカーズだけでなく、同じ人間にもなるということ。

第76話 side 龍（後書き）

これからドロドロの戦いになっていきます。
御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第77話 side 優

1月19日 14:34

雪の中で襲撃されてから5日後。

ボク達は静岡県に入っていた。大雪によって立ち往生してしまい、予定が大幅に狂ってしまったが、それでも順調に四国に向かって走り続けていた。

塞がれていない道を探し、迂回し、逆戻りした結果、ボク達は市街地に入っていた。

《こちら一号車、進路は今のところ問題なし。全員外に注意しろ》
車列を先導する装甲車から、東さんの声が無線で聞こえてきた。ボクはその言葉で外を見てみる。

市街地のビルは、窓ガラスが殆ど割れ、火事でもあったのか壁面が大きく焼け焦げているものが多かった。

とその時、ボクは変な物を見つけた。ビルの壁面に、大きな矢印が描かれていたのだ。

「黒田さん、ちよつと横を見てください！」

とボクが言うと、バスを運転していた黒田さんは首を横に向け、少しバスの速度を落とした。

「なんだ、ありゃ？なんかの印か？」

そう呟いた後、黒田さんは無線を取り、一端車列を停めるよう要請した。しばらくして

《・・・了解、一端全車停車しろ》

との東さんの声が流れ、バスは停車した。

その後も何事か話し合っていた黒田さんは、運転席の脇に立て掛けておいた小銃を手に取り、ボクと軍司を呼んだ。念の為銃も持ち、ボクと軍司、そして黒田さんはバスを降りた。一方前方の装甲車からも東さん達が降車し、先程の矢印の描かれたビルまで歩いて行った。

そのビルには、赤いペンキでこう書いてあった

『生存者の集落まで、後5キロ』

「何だ、こりゃ？まさか落書きじゃねえよな？」と、青野さん。

ペンキの文字を指でなぞっていた黒田さんは、目を見開いて言った。「このペンキ、何度も上塗りされてます。しかも最近新しく塗り直しています」

その言葉で、全員が驚いた。即座に東さんは無線を手に取り、大人は全員下車し、ビルまで来るよう命じた。すぐに集まってきた兵士達は、その場で意見を交わし始めた。

「前に書かれた落書きって線はないよな？」

「だとしたら、最近塗った形跡は何なんだ？危険を覚悟で落書きするために市街地に戻って来る奴がどこにいる？」

「ってことは、このメッセージの信憑性も高いつてことですよね」

「問題は、これを書いたのが頭のイカれた野郎かどうかだ」

「そうか、おびき寄せて襲撃。って線もありますよね……」

10分ほど話し合い、やがて意見が一致したのか東さんは再び無線を手に取った。

「全員、よく聞いてくれ。生存者が書いた物と見られるメッセージが見つかった。我々としては、このメッセージに従い進路を取ろうと思うが、意見のある者は言ってくれ。反対意見でも結構だ」

そう言い、無線を受話モードに変更したが、バスから来た通信は、「生存者がいるならさっさと会いたいです」との一言だった。

こうして方針は決まった。取りあえずこの矢印に沿って移動し、生存者達の居場所が近くなってきたと思われる時は、偵察の為軽装甲機動車1両を先行させ、危険が無いと判断されたら残りの車両を呼ぶことに決めた。

全員が再び車両に戻り、車列は前進を再開した。

数分後

「あ、また矢印だ」

と誰かが呟いた。

矢印に沿って移動していくと、次々に新しいメッセージが書かれていた。例を挙げると、

『後4キロ。ガンバレ!』

『後3キロ。もう少し!』
』
などなど。

道の途中では、場所を案内するかのようにはタイヤが燃やされていたり、ドラム缶に入れられた木が燃えていた。

これを見てボク達は、本当に誰かが生きているというのを感じ取っていた。バスの車内の雰囲気も良くなり、自分達以外の人間に会うのを皆が心待ちにしていた。

やがて、先頭の軽装甲機動車が停車し、次々と後続車も停まった。どうやら、生存者の居場所が近いらしい。

偵察の為、中沢さん、青野さんが乗る軽装甲機動車が出発し、猛スピードで走り去っていった。ボク達に出来ることといえば、無事に中沢さん達が帰って来て、尚且つボク達に友好的な生存者達と邂逅する事を祈るだけだった。

十数分後・・・。

《偵察イチより全車！！生存者の集落を発見した！繰り返す、生存者の集落を発見した！！こちらに合流してくれ！！》

第77話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第78話 side 龍(前書き)

ずいぶん久しぶりの投稿になりました。
今年も頑張って執筆していくので、応援していただければ幸いです。

第78話 side 龍

生存者の集落を発見した中沢達は、一端帰って来て詳しい報告をさせた。

「で、やばそうな人達だけじゃなかったらうな？」

「多分大丈夫だ。クスリやら何やらやってる人は居なさそうだったし、老若男女問わず、全員健康そうに見えた」

俺はその報告に腕を組み、しばらく考えてから言った。

「大体何人くらいいたんだ？」

「そうだな……、500人くらいかな。俺達がリーダーらしい人と話し合ったら、何日か集落に滞在してもいいってさ」

その後皆に無線で連絡し、生存者の集落へ向かうかどうかを話し合った。結果、反対0で集落へ向かうこととなった。

集落までの道程を知っている中沢達が先導し、車列は一路集落へ向けて進む。取りあえず集落では車両の整備をしたり、生鮮食品を調達する予定だった。

だが、通貨制度が崩壊していると言ってもいいこの状況では、食料を手に入れるには物々交換をするしかないだろう。現在のところ、俺達には武器弾薬以外に交換できそうな物資は無い。

なので俺は、全員に対して武器弾薬の残りを調べるよう命令した。各車から次々と無線で報告が入り、俺はそれをメモにまとめた。現在のところ、俺達が所持する銃火器は

突撃銃 12挺

自動小銃 6挺

ボルトアクション式小銃 4挺

軽機関銃 3挺

分隊支援火器 3挺
重機関銃 4挺
短機関銃 5挺
散弾銃 6挺
拳銃 18挺

この中で分けられそうな物は、やはり拳銃だけだった。何丁か渡しても問題なさそうだったので、ひとまず物々交換の際には拳銃のみ渡すことにした。

真つ直ぐ北西の山岳地帯目指して進んでいくと、ところどころに最近作ったと思われる人工物の存在を確認できた。木の棒を組み合わせて×印を作ったり、道を塞いでいたと思われる自動車が退けてあったりした。

《こりや、本当にいるかもしれないな。生存者が》

《今までよく生きていられたな、俺達も人のこと言えないけど》
等の通信が無線から流れてきた。

「おいおい、気を引き締める。まだ生存者が友好的かどうかかわからんし、罠の可能性もある。警戒しろ」

俺はそう言い、重機関銃のグリップを握り締めて周囲を警戒した。俺がそんな事を言ったのは、先日の襲撃の件もあったからだ。生存者が全員友好的とは限らない。ましてやこんな状況なら、誰だっておかしくなる。

しばらく進むと、俺達は山に到達した。山には装甲車が通れそうな道が開けており、俺達は歩いて目的地まで進まずにすんだ。

山の木は所々切り倒されていて、しかも切り株の様子を見るに、切られたのは最近らしい。

そのまま進むと、監視塔のようなタワーが見えてきた。そしてその奥には……………。

「すげえな、おい」

大きな壁があった。丸太やコンテナを積み上げられて作られたらしい壁の上には、数人の人影が見えた。

双眼鏡を出して覗いてみると、自動小銃を持った男達が周囲を警戒している。

双眼鏡から目を離し、俺は装甲車を降りる準備をし始めた。とりあえず誤解を与えない為に、小銃は持っていかない。拳銃と銃剣のみを持って、俺は生存者のリーダーに会いに行くつもりだった。

《牧より東へ、小銃は持っていないのか》

突然、牧から通信が入った。俺は防弾チョッキを脱ぎつつ、無線を手にとって答えた。

「ああ、変な誤解は与えたくないしな。拳銃は持っていく」

《お前、撃たれたらどうするつもりだ？》

牧の不安そうな声が聞こえた。取りあえず俺は、レグホルスターからP226自動拳銃を取り出し、スライドを引いて初弾を装填した。薬室に9mm弾が収まったのを確認すると、安全装置をかけてホルスターに戻した。これでいつでも発砲できる。

「大丈夫だ。向こうが撃つつもりだったら、とっくに俺達を撃つてる。心配すんな」

《だが……》

「大丈夫だって。念のため、いつでも撃てるように即応体制をとっとけよ。それと、撃たれるまで撃つな」

《専守防衛、か？》

牧が皮肉っぽく言った。俺はその言葉にニヤリとすると、

「まあ、そういうことだ」

と答え、通信を切った。

車列の前方には、丸太を木って作られたらしい車止めが置いてあった。丸太の先を尖らせ、3本束ねて地面に置いたものだ。

俺は車列に止まるよう命令し、軽装甲機動車が止まったのを確認し

てからドアを開けて降りた。前方の壁の一部分が開き、銃を持った男達に囲まれた中年の男がこちらに歩いてくるのを見て、俺は思った。

彼らは心優しい人間か？

それとも人間の皮をかぶった狂人か？

第78話 side 龍(後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第79話 side 龍

軽装甲機動車を降りた俺に近づいてきたのは、30代後半と見られる男だった。俺は男に対して敬礼し、自分の姓名、階級を名乗る。

「日本国防衛軍海兵隊、第8師団所属の東 龍海兵2曹であります

！」

「私は八方村村長の、松戸 仁と言います。今回はどのような物件で、この村にいらっしゃったのですか？」

松戸と名乗った男は、少し警戒するような視線で見つめてきた。

「政府のラジオ放送を聞いたので、四国へ脱出すべく向かっていたのですが、途中でこの村の存在を知りまして。車両の修理や点検を行いたかったので、出来れば受け入れて頂ければうれしいのですが……

……」

俺の言葉を聞いた松戸は、俺の後ろの車列を眺めた。数秒間見た後、唐突に

「ま、いいでしょう」

と言った。

え？いいのか？そんな即断即決でいいのか？と俺は思ったが、ここは好意に甘えることにした。どちらにしても、休息は必要だ。

「いいんですか？」

「どうぞどうぞ。好きなだけ居て下さい。こちらとしても、軍人さんがいてくれれば安心ですから」

松戸はそう笑うと、俺に向けて手を差し出してきた。俺はその手を握り、

「それでは、これからしばらくお世話になります」

と、頭を下げた。

丸太の壁に設けられた、車両通行用と思われる大きな扉が開き、俺

の乗る軽装甲機動車を先頭にして村に入っていた。

八方村は、その名の通り八方を山に囲まれた盆地だ。人口は約500人で、主な産業は農業。

この辺りには火山が多く、その恩恵で八方村には温泉が湧いている。数年前に火山が小規模な噴火を起こしたが、今は（といても、最新の情報で1年前の物だが）火山活動は沈静化しているらしい。

八方村を囲むように作られた壁の向こうでは、家があちこちに建っていた。最初は村に入ってきた俺達を物珍しそうに眺めていたが、やがて三々五々帰っていった。

「はい、ここがあなた達に与えられる家です」

軽装甲機動車に乗る案内人の男が、大きな日本風の家を指差して言った。

俺達に与えられた家はかなり大きく、40人は軽く入れそうだった。庭も広く、車両の整備もしやすそうだ。

《・・・でけえ》

と、無線から誰かの声が聞こえてきたが、全くその通りだった。

「あの、いいんですか？こんなでかい家」

恐る恐る尋ねた俺に、男は笑って返した。

「いいんですよ。この家の住人はいないし、わたし達としても取り壊そうか倉庫にするか悩んでた所でしたから」

「でも、俺達がこの村にいるのはせいぜい3日かそこらですよ？」

「まあまあ、そんな事言わずに何日でも居てくださいな」

男はそう言って、軽装甲機動車を降りた。役場の方に用があるらしく、男は手を振って去っていった。

取りあえず、やることは沢山あった。

車両の整備、物資の残りの把握、武器の整備。そして、何より休息。今はまだ昼だったが、さっさと休みたいのか皆作業の速度は速かった。軍司や優が屋敷の中に荷物を運び、美里が弾薬の残りを数える

横で、俺も装甲車両から重機関銃を取り外し、庭に敷いた布の上に運んだ。先日発砲したので、銃身の交換や整備をしなければならぬからだ。

「おい、ちよつと。その兵隊さん」

と、誰かの声が聞こえたので振り返ると、庭先に若い女性が立っていた。えらい美人だ。

女性は火の点いたタバコを指に挟みつつ、こちらに歩いてきた。

「あんた達、どこから来たの？」

と質問されたので、俺は素直に答えた。

「千葉の初春市から・・・」

「千葉！？はあく千葉ね。随分遠いところ来たじゃない」

そこで女性はタバコを唇に挟み、煙を吸い込んで続けた。

「アタシは多賀^{たが} マリ。神奈川から来た」

「東 龍海兵2曹です。神奈川から来たってことは、あなたも放送を聞いて？」

敬礼して答えた俺は、多賀を上から下まで見た。歳は俺と同じくらい。腰にはS & amp; W M19リボルバーが下がっている。

「そう。どうにか政府の投下物資と銃で生き延びてきたけど、あれ以上神奈川に留まる事は出来なかつたんでね。仲間4人と一緒に、車でここまで来たのさ。そしたらこの村の存在を知って、やって来たら快く受け入れてもらえた。全く、いい人たちだね」

「はあ。それで、その方々は？」

多賀は短くなつたタバコを携帯灰皿に放り込み、箱から新たなタバコを取り出した。俺はタバコが余り好きではないので、少し多賀から遠ざかる。

「今は川で漁を手伝ってる。アタシは家で干物作ってたところ。ここに住ませてもらってる以上、何か手伝わないと」

多賀はそう言つて、「働かざる者何とやら」と続けた。適当に相槌を打ち、作業に戻る為会話を終わらせる方法を考えていた俺の耳に、多賀の驚いた声が聞こえた。

「ねえねえ、あれつてもしかして、仲原美里なの？」

「ええ、色々あつて俺達と・・・」

「うっわすっごい！！後で話してできるかな!?」

そうはしゃいだ多賀は、俺の姿を見て、俺が作業中だったことを思い出したようだった。「じゃ」と言い、去っていく彼女の後姿を見た後、俺は軽装甲機動車の整備をしていた堂々に近寄った。

「エンジンはどうだ？」

軽装甲機動車の整備用ハッチを開け、エンジンを調べていた堂々に訊くと、堂々は機械油で汚れた顔を上げて答えた。

「問題なし。ただしオイルは交換した方がいいかもしれない」

「りょーかい」

俺はそう答え、停めてある73式大型トラックの荷台から、缶に入ったオイルを運んだ。堂々は礼を言い、オイルを交換する作業に入った。

続いて俺は、ハンビーを整備していた中沢に近づいた。

「調子は？」

「さすがアメリカ製。どこも壊れてない。ただし部品の調達ができねえから、動かなくなったら捨てるしかないな」

「民間の車両の部品の転用は？」

「ちょっと難しいが、出来るかもしれん」

その言葉を交わし、再び中沢は整備に戻った。

俺は魔改造市バスに向けて歩き出した。バスでは白井と黒田が、ポンプでガソリンを給油している。

「かなりガソリン減ってますね・・・」

「先日の猛吹雪で、エアコンつけっぱなしだったからな」

等と言葉を交わしているのを横目に見つつ、俺は庭に敷かれた大きなビニールシートの上に座った。ビニールシートの上には、装甲車から取り外された重機関銃が4挺置いてある。

これから、この4挺を全て整備点検し、場合によっては部品の交換

を行わなければならないのだ。俺は気合を入れるため頬を叩き、重
機関銃の部品との格闘を開始した。

第79話 side 龍

(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第80話 武器紹介(前書き)

はつきり言って、作者のお遊びページです。ミリタリー成分多めなので、苦手な方は読まないようにしてください。あと今後も追加していく予定です。

第80話 武器紹介

- 1 武器名称
 - 2 有効射程（近く遠で表示）
 - 3 使用弾薬
 - 4 威力
 - 5 使用者
 - 6 入手場所
- という風に紹介します。

拳銃

- 1 P226
- 2 近 3、9mm×19 4 小 5 東龍ほか、軍人全員
- 6 軍からの支給品（初期装備）

スイスのSIG社製の自動拳銃。装弾数15発。信頼性、精度が高く、世界中の公安機関、軍で使用されている。

日本国防衛軍でも、それまでの9mm拳銃（SIG P220）の後継として、2009年から支給が始まった。今では階級に関係なく携行されている。

- 1 P220
- 2 近 3、9mm×19 4 小 5 千葉県警察官ほか、秋村優、冬元春名、松本詩織（3名とも死亡した警官から拝借）、仲原美里 6 初春市市街地

P226と同じくSIG社製の自動拳銃。装弾数9発。

日本国防衛軍の前身である、自衛隊が採用していた自動拳銃。装弾数などの問題からP226が軍に採用され、退役した本銃は警察に採用された。千葉県警ほか、各地の県警に配備されている。

1 / M 9 2 F
2 近 3 , 9 m m x 1 9 4 小 5 / アメリカ陸軍日本派遣部隊、尾田軍司ほか、多数の生徒（尾田軍司はアメリカ兵の装備を拝借、その他は政府の投下物資を装備） 6 / 初春市市街地、私立浜浦小学校

イタリア、ベレッタ社製の自動拳銃。装弾数15発。
高性能でありつつ価格も安いことから、民間・公的機関を問わず世界中で使用されている。政府の緊急投下物資ほか、死亡したアメリカ陸軍兵の装備を拝借。

1 / FNハイパワー
2 近 3 , 9 m m x 1 9 4 小 5 / 秋村優ほか、多数の生徒 6 / 私立初春小学校

ベルギー、FN社製。装弾数13発。
ジョン・ブローニング設計による、傑作自動拳銃。第2次大戦中に開発された。高性能で現在でも十分使用に堪えるため、公的機関でも使用されている。

政府の緊急投下物資で初春小学校に投下され、以降優が使用。

1 / M 6 8 6
2 近 3 , 3 5 7 マグナム 4 中 5 / 冬元春名 6 / 私立初春小学校

アメリカ、スミスアンドウエスン社（以降S & W社と表記）製の回転式拳銃。装弾数6発。
耐久性に優れており、357マグナム弾を撃つポピュラーな銃とな

っている。

1 /M19

2 近 3 , 357マグナム 4 /中 5 /多賀マリ 6 /神奈川
川県西部

S & W社製の回転式拳銃。装弾数6発。

中型・軽量であり、警察機関でよく使用されているほか、狩猟用としても使用されている。

1 トカレフ

2 近 3 , 7 . 6 2 ? × 2 5 4 /中 5 /イシヴアラ教徒、

東龍（教徒から奪取） 6 /八方村

旧ソ連製の自動拳銃。装弾数8 + 1発。

アメリカ製のコルト・ガバメント自動拳銃のコピー品だが、旧ソ連製らしく構造が簡素（初期の物は安全装置すら無い）かつ過酷な環境でも使用できるようになっていた。

それゆえあちこちの国でコピー品が作られ、日本でも道を極めた反社会的な人達がよく使って押収される銃としても知られている。

弾丸の弾頭が尖っていて強力であり、拳銃弾用のボディアーマー位なら貫通してしまう事がある。

1 /STEIイーグル

2 近 3 , 1 1 . 4 × 2 3 (4 5 A C P) 4 /中 5 /内田

勲 6 /名古屋刑務所（政府の緊急武器配布計画で入手）

アメリカ製の自動拳銃。装弾数12+1発。

アメリカ製のコルト・ガバメント自動拳銃を最新技術でカスタムしたものの。ポリマーフレーム（プラスチック）を採用し、軽量化されている。

内田老人は昔自衛隊に所属し、その時の制式採用拳銃がコルト・ガバメントだったため、この銃を選択する事となった。

1、MARK 23

2、近 3、45ACP 4、中 5、福田俊二 6、アメリカ（護身用に購入。そのまま日本にお持ち帰り）

ドイツ、H & amp; K社製のMk . 23自動拳銃を民間仕様にしたもの。装弾数12+1発。

とにかくデカイ。ポリマーフレームを採用してはいるが、それでも重い。元々が特殊部隊用の自動拳銃だったため、頑丈な半面重く作られている。

短機関銃

1、MP 5F

2、近 3、9mm x 19（9ミリパラベラム） 4、中 5、千葉県警警察官、秋村優、稲森恵美、愛知県警SAT 6、初春警察署

ドイツ、H & K社製。装弾数30発。

命中精度に優れ、警察用や軍用としても使用されているが、耐久性に難がある。優が使用しているMP - 5Fは、警察署で調達してき

た物。ドットサイト・フラッシュユライト付き。

- 1 / M P 5 K
- 2 / 近 3 , 9 m mパラベラム 4 / 中 5 / 松原菜々、愛知県警銃器対策部隊 6 / 県警の装備品

ドイツ、H & a m p ; K社製。装弾数30発。
同社製のM P 5短機関銃の短縮モデル。その短さ故にコートの下に隠し持ったりスーツケースに仕込んだりすることが可能。

- 1 / ミニウージー
- 2 / 近 3 , 9 ミリパラベラム 4 / 中 5 / イシヴァラ教徒、東龍、松戸由梨（後者2名は教徒から奪取） 6 / 八方村

イスラエル、I W I社製。装弾数32発。
同社のウージー短機関銃を小型化したもの。堅牢な作りかつ生産性に優れているが、命中精度は低い。

- 1 / M P 7
- 2 / 中 3 , 4 . 6 m m x 3 0 4 / 中 5 / 古橋雄大ほか軍人多数 6 / 海兵隊初春基地

ドイツ、H & a m p ; K社製。装弾数40発。
近年になって短機関銃の威力不足が叫ばれ始めたため、高速で貫通力に優れた新型弾薬を採用した銃。コンパクトなため、後方部隊やパイロットなどに配備されている。

日本国防衛軍では9 m m機関拳銃の後継として、2012年に採用

された。

1 /UMP・45
2 /近 3 /45ACP 4 /中 5 /大山恵美 6 /名古屋刑務所（外国軍用品審判所の装備品）

ドイツ、H&Amp;K社製。装弾数25発。

同社製のMP5短機関銃の後継として開発された短機関銃。MP5よりも安価で堅牢だが、命中率はMP5に及ばない。

マウントレールが装着されているため、多彩なアクセサリーが装着可能。

1 /9mm機関拳銃
2 /近 3 /9mmパラベラム 4 /中 東龍 6 /陸軍第一空挺団駐屯地

日本、ミネビア社製。装弾数25発。

陸上自衛隊の空挺部隊や指揮官向けに開発された短機関銃。イスラエル製のウージーを参考に開発したらしい。

開発元のミネビア社が生産する際にケチってプレス加工用機材を導入しなかった為、削り出し加工で製作されているため重くて高価（約42万円）である。

現在は二線級火器に指定されている。

突撃銃

1 /09式小銃

2 / 中 3 , 5 . 5 6 m m x 4 5 4 / 高 5 / 軍人多数 6 ,
軍からの支給品

架空の突撃銃。豊和社製で、装弾数30発。

6 4 式小銃・8 9 式小銃ともに問題点であった部品の脱落を解決する為、傑作突撃銃 A K - 4 7 の機関部を参考に製作された。部品数の低減を果たした結果、信頼性・耐久性が向上した。

現在の突撃銃らしく、ハンドガードと機関部上部にはマウントレールが取り付けられ、ドットサイトやレーザーサイトの装着が可能となっている。

1 / M 4 A 1

2 / 中 3、 5 . 5 6 m m x 4 5 4 / 高 5 / アメリカ陸軍日本派遣部隊、尾田軍司（死亡したアメリカ兵から拝借） 6 / 初春
市市街地

アメリカ、コルト社製。装弾数30発。

アメリカ軍で使用されていた M 1 6 A 2 突撃銃をカービン化（短縮・軽量）した突撃銃。各国の特殊部隊等で使用されている。

尾田軍司はアメリカ兵の死体から拝借した物を愛用している。

1 / H K 4 1 6

2 / 中 3 , 5 . 5 6 m m x 4 5 4 / 高 5 / 民間軍事会社「
ヤタガラス」社員 6 / 会社からの支給品

ドイツ、H & K 社製。装弾数30発。

コルト社製 M - 4 を近代化改修した突撃銃。信頼性が向上している。

- 1 / AK-47
- 2 / 中 3 , 7 . 6 2 m m x 3 9 4 / 高 5 / 武装集団、イシ
ヴアラ教徒、東龍（東は教徒から奪取） 6 / 東京都南西部、八方村

旧ソ連製の傑作突撃銃。装弾数30発。

構造が簡素で操作も単純な為、世界中の正規・非正規を問わず軍隊で使用されている。大口径なため威力が高いが、部品同士の隙間が大きいため命中精度はイマイチ。

- 1 / 89式小銃
- 2 / 中 3 , 5 . 5 6 m m x 4 5 4 / 高 5 / 陸軍第31普通
科連隊隊員 6 / 軍の装備品

日本、豊和工業社製。装弾数30発。

64式小銃の後継として採用された突撃銃。AR18突撃銃の設計を流用し、命中精度が高い。空挺部隊向けの折畳銃床モデルも存在し、警察や海上保安庁でも採用されている。

09式小銃の採用により二線級火器に指定され、予備役向けの装備とされている。

- 1 / G36C
- 2 / 近 3 , 5 . 5 6 m m x 4 5 4 / 高 5 / 東龍 6 / 名古屋
屋刑務所（外国軍用品審判所の装備品）

ドイツ、H&K社製。装弾数30発。

同社製のG36突撃銃をコンパクトにした物。射程・命中精度などを犠牲にしたが、その分閉所での取り回しがいい。プラスチックを

多用しているため、軽い。

狙撃銃

- 1 / 10式狙撃銃
- 2 / 遠 3 , 7 . 6 2 m m x 5 1 4 / 高 5 / 堂々章吾 6 ,
軍からの支給品

架空銃。9式小銃の発展型。装弾数20発。

9式小銃の使用弾薬を変更し、超射程・高精度での狙撃を行うために開発された。対人狙撃銃や64式狙撃銃の後継として配備されている。

- 1 / 64式小銃
- 2 / 遠 3 , 7 . 6 2 m m x 5 1 4 / 高 5 / 内田勲 6 / 名
古屋刑務所

日本、豊和工業製。装弾数20発。

戦後初の国産自動小銃。弱装弾を使用しているのでフルオートでも制御可能。命中精度もいい。

その反面部品点数が異常に多く、よく部品が脱落する。

内田老人は狙撃手であるため、スコープが装着されている。

- 1 / M 7 0 0
- 2 / 遠 3 , 7 . 6 2 m m x 5 1 4 / 高 5 / 東龍、多賀マリ
6 / 小早川銃砲店、東京都西部

アメリカ、レミントン社製。装弾数4発。

狩猟用ボルトアクション式小銃の傑作。狩猟用として開発されたが、命中精度・耐久性が優れているため、公安機関や軍にも採用されている。

1 / M 2 4 S W S

2 / 遠 3 , 7 . 6 2 m m x 5 1 4 / 高 5 / 尾田軍司 6 ,

名古屋刑務所（軍の装備品）

レミントンM700を軍用にしたもの。装弾数4発。

軍用であるため、民間向けのM700より堅牢に出来ている。

1 / M 8 2 A 1

2 / 超遠 3 , 1 2 . 7 m m x 9 9 4 / 超高 5 / 堂々章吾

6 / 海兵隊初春基地

アメリカ、バレット社製。装弾数10発。

本来は対装甲車用に開発された対物ライフル。しかしその長射程と威力を買われ、長距離対人狙撃にも用いられている。

イラク戦争では2000メートル先の装甲車を撃破し、1500メートル先の兵士を真つ二つにしてしまったとか。

本来は国際法で対人使用は禁止されているが、実戦ではお構い無しに使用されている。

散弾銃

1 / M 3

2 / 近 3 , 1 2 ゲージ各種弾薬 4 / 高 5 / 尾田軍司、中沢

雄一 6 小早川銃砲店、名古屋刑務所（刑務所の囚人鎮圧用装備）

イタリア、ベネリ社製。装弾数7+1発。

セミオートとポンプアクションを切り替えられる散弾銃。それまでの散弾銃とは違い、命中精度に優れているため、警察特殊部隊に多く採用されている。

中沢が使用したのは銃身とストックを切り詰めたショートモデル。

1 / M500

2 近 3 , 12ゲージ各種弾薬 4 高 5 小早川明憲 6 ,
小早川銃砲店

アメリカ、モスバーグ社製。装弾数7+1発。

頑丈かつ安く、工具無しで分解できるほど構造が簡素。そのため狩猟用や警察用として、世界中で広く使われている。

1 / M37

2 近 3 , 12ゲージ各種弾薬 4 高 5 秋村優 6 名
古屋刑務所（刑務所の囚人鎮圧用装備）

アメリカ、イサカ社製。装弾数4+1発。

装填口が排莢口を兼ねているため、従来のショットガンに比べ軽量である。某学園黙示録でも大活躍。

1 / USSAS12

2 近 3 , 12ゲージ各種弾薬 4 高 5 イシヴァラ教徒
6 八方村

韓国、大宇社製。装弾数20発。
フルオート射撃が可能なショットガン。ドラムマガジンを使用すると、装弾数は20発になる。
その分従来のショットガンよりも重く、米軍での制式採用は見送られた。

M24 MASS

2 近 3、12ゲージ各種弾薬 4 高 5 軍兵士 6 装

備品

アメリカ、Vertu Corporation社製。装弾数5発。
突撃銃の銃身下部等に取りつけるアンダーバレルショットガン。ド
アの破壊や近接戦闘などに用いられる。軍の制式採用装備。

1 M4

2 近 3、12ゲージ各種弾薬 4 高 5 軍兵士 6 装

備品

イタリア、ベネリ社製。装弾数7発。

アメリカ軍が次世代半自動散弾銃として要望を出したのを、イタリ
アのベレッタ社が制作した散弾銃。従来の半自動式散弾銃より信頼
性が高い。

軍では近接戦闘用などとして装備している。

機関銃

1、5.56mm機関銃MINIMI
2、中3、5.56mm×45 4、高5、中沢雄一、アメリカ陸軍日本派遣部隊 6、初春市市街地（中沢の場合は支給品）

ベルギー、FN社製。装弾数200発。

FN社がMAG軽機関銃を基にして開発した分隊支援火器。世界中で幅広く使用されている。

1、M240
2、遠3、7.62mm×51 4、高5、軍人多数 6、海兵隊初春基地

ベルギー、FN社製のMAG軽機関銃を、アメリカ軍が改修した物。ベルトリック給弾方式。

日本では2009年から調達が開始された。

1、MG3
2、遠3、7.62mm×51 4、高5、イシヴアラ教徒（軽トラに車載） 6、八方村

ドイツ、ラインメタル社製。ベルトリック給弾方式。

第二次世界大戦中にドイツ軍が使用したグロスフスMG42を、戦後に7.62mm弾仕様に改修されたもの。今でも現役でドイツ軍で使用されている。

異様に連射速度が速い（毎分1200発）

1、M134

2 / 遠 3 , 7 . 6 2 m m x 5 1 4 / 高 5 / 軍人多数 (軽装
甲機動車に車載) 6 / 軍の装備品

アメリカ、ゼネラル・エレクトリック社製。ベルトリンク給弾方式。
同社製のM61バルカンを小型化簡略化した6銃身機関銃。毎秒5
0発の銃弾を発射できる。

主に車両やヘリコプターの搭載火器として使用される。

1 / 1 2 . 7 m m 重機関銃M2

2 / 超遠 3 , 1 2 . 7 m m x 9 9 4 / 超高 5 / 軍人多数 (車載、固定銃座) 6 / 海兵隊初春基地

ベルギー、FN社製。ベルトリンク給弾方式。

開発から70年以上経つが、今だ各国で使用され続けている傑作重
機関銃。対装甲車・対空用途として使われているが、本来禁止され
ている対人用途として使われる方が多い。

作中では、軽装甲機動車やハンビーの車載機銃や、初春小学校の屋
上に据え付けて使用された。

爆発物

1 / M320

2 / 中 3 , 4 0 m m x 4 6 4 / 高 5 / 牧廉 6 / 軍からの
支給品

ドイツ、H&K社製。装弾数1発。

同社製のAG36グレネードランチャーを基にして製作された。普
段は突撃銃の銃身下部にマウントされて使用されるが、単体での使

用も可能。

日本では2009年から調達が始まった。

1 / MGL140

2 / 遠 3 / 40mm x 4 4 / 高 5 / 軍人多数 6 / 海兵

隊初春基地

南アフリカ、アームスコ社製。装弾数6発。

40mmグレネード弾を多数装填するために、リボルバー拳銃を大きくしたような形をしているグレネードランチャー。通常の榴弾ほか、照明弾や暴徒鎮圧用のゴム弾・催涙ガス弾を装填可能。

日本国防衛軍では、普通科隊員の火力増強のために本銃を2010年から調達開始した。

1 / 110mm個人携帯対戦車榴弾

2 / 遠 3 / 110mm榴弾 5 / 最強 5 / 東龍 6 / 海兵隊

初春基地

ドイツ、ダイナマイトノーベル社製。装弾数1発。

使い捨て方式の対戦車ロケット弾。通称は「パンツァーファウスト?」。

実に700mmの装甲板（もはや板ではない）を貫通させる程の威力を持ち、個人携帯式ロケット弾としては最大の威力を持つ。

取り扱いが簡単かつ安価なため、様々な軍隊で導入されている。日本でも1990年から調達が始まっている。

その他

1 角材

2 超近 3 , 2 c m x 2 c m x 1 m 4 最弱 5 秋村優

6 山之内女子高。

どこにでもある角材。杉製。

非武装だった優のために、山之内女子高で龍が、校庭の木の添え木だった角材を手渡した。威力・リーチともに心許なく、殆ど役に立たない。

1 包丁

2 超近 3 刃渡り16 c m 4 中 5 尾田軍司 6 尾田

家台所

どこの家庭にもある文化包丁。ステンレス製。

コレ一本で、料理から通り魔まで出来る優れ物。作中では軍司が武器を調達した時に入手し、後述のモップの柄にテープで括りつけて簡易槍を作った。

しかしすぐに散弾銃を入手したため、一度も使われていない。

1 モップの柄

2 近 3 , 1 m 2 0 c m 4 最弱 5 尾田軍司 6 尾田

家風呂場

学校や風呂場でよく見かけるモップの柄。木製。

- 1 木刀
- 2 近 3 , 長さ約1m 4 中 5 尾田軍司 6 軍司自室

よく修学旅行先のみやげ物屋で、何の意味もなく売っているアイテム。樫製。

みやげ物にあると、必要も無いのに必ず何人が買ってしまふ魔性のアイテム。しかし家に帰ってきてからは滅多に使わない。というか、使う機会がない。

作中の木刀は軍司が修学旅行先で買ってきた代物であるが、包丁ともども1度も使われる事はなかった。

- 1 電動ガン
- 2 中 3 , 6mmBB弾 4 最弱 5 尾田軍司 6 軍司自室

東京マ イ製。十八歳未満使用禁止。

電気力でモーターを回し、BB弾を発射する道具。サバゲーでの必須アイテム。

なぜ18歳未満の軍司が18禁の電動ガンを持っているかは不明。

作中では(当然だが)1度も使われなかった。ちなみに種類はM4

S - SYSTEM。

- 1 金属バット
- 2 短 3 , 長さ約80cm 4 強 5 尾田軍司、浅岡裕次郎 6 尾田家物置、浅岡の場合は私物

野球の必須アイテム。合金製。

甲子園で一発逆転のホームランを放つ事もあれば、一家撲殺事件の凶器にもなるアイテム。ちなみにコレで人を殴ると、かなりヤバイです。主にスポーツショップで入手可能。

- 1 セントリーガン
- 2 遠 3 , 7 . 6 2 m m x 5 1 4 今日 5 なし (無人火器のため) 6 軍の装備品

三脚に連射速度を落としたM134ミニガンを乗せ、カメラやセンサー等を追加した無人火器。ベルトリンク給弾方式。接近する目標を感知し、自動で銃撃を加える。

第80話 武器紹介（後書き）

御意見、御感想、御質問おまちしています。

第81話 side 優

1月18日 19:00

大宴会が続いていた。

ボク達がこの集落にやって来たのを歓迎する宴会らしく、村の人に誘われて広場にやって来たボク達は、そこに並べられていたありとあらゆる食材に目を見開いた。

鹿や猪の肉がドラム缶を利用した釜戸で焼かれ、串刺しにされた魚が火にくべられていた。

もちろん最初東さんは、豪勢な待遇を気にして断ろうとしたが、あれよあれよという間に村人達に引っ張られ、気がついたときには歓迎会は大宴会と化していた。

「・・・2次元の彼女とクリスマスを過ごして何が悪い!!!ラブ
ラスの彼女だっていいじゃないか!!!」

どうやら酒を飲んでしまったらしく、携帯ゲーム機片手に熱弁をふるっているのは軍司だった。軍司の周りには八方村の子供が何人もいたが、軍司同様酔っ払っていた。

酒が苦手だったらしい堂々さんは、祭りの輪から外れて、広場の隅のほうで一升瓶を枕にして寝ている。牧さんは女性をナンパしようとあちこち歩き、酒豪らしい中沢さんは、地元の人とどれだけ酒が飲めるか競争していた。

平和だった。

そんな事を考えていると、突如

「あらー？優さん飲んでないの？」

と、酔っ払って顔を真っ赤にした軍司が、一升瓶を掴んで寄ってきた。

「うん・・・、余りお酒飲めないし。つてか、そもそも未成年じゃん」

「細かいことは気にしな〜いの。お酒飲まないと、胸育たないよ〜」

余計なお世話だと、ボクが軍司にパンチを1発叩き込むと、軍司は

「ひでぶー!!」

と叫び、地面に崩れ落ちた。どうやら気絶したらしい。

そんな軍司を見て、地元の子供達が「優ちゃんつて、強いんだね〜」と、尊敬のまなざしでボクを見た。曖昧に苦笑し、宙を漂ったボクの視線が、村の中央に立つ大きな建築物を捕らえた。よく目を凝らすと、その建築物はどうやら人型をしているらしいことがわかる。気になったボクは、近くにいた10歳くらいの少女に訊いてみた。

「ねえ、あの像ってなに？」

「ああ、あれはイシバラ様の像だよ」

「イシバラ様？」

怪訝な表情を見せたボクに、少女は笑顔で返してきた。

「神様だよ。私たちも、イシバラ様に守られて暮らせてるんだよ」
「・・・へえ」

その後詳しく聞いた話によると、イシバラ様というのはこの村の住民が信仰している神様らしい。その名もイシバラ教というらしく、どうやら新興宗教のようだった。

無神論者であり、宗教に一切興味を持っていなかったボクは、適当に少女に相槌をうつってその場から離れた。

しばらく歩いたボクは、祭りの輪から離れて一人酒を飲んでいる東さんに出会った。

「あれ、美里さんは？」

「酔っ払って、今は屋敷で休んでる。それより、お前もどうした？」

そう訊かれたボクは、今見たことと聞いた事を全て話した。話題がイシバラ教の事に移った瞬間、東さんが突如ボクの話の遮った。

「待て。その子は確かにイシバラ様と言ったんだな？」

「ええ、そうですけど・・・。。。。。。どうかしたんですか？」

考え込んでいた東さんは、しばらくして口を開いた。

「今更な話だが、1〜2年くらい前の話だ。過激な新興宗教があったて、そいつが破壊行為を行おうって情報が入ってきてな。警察と一緒に俺たち強襲偵察隊が、破壊活動の前にその教団を強襲したんだ」
「はあ・・・。」

「でな、その教団の名前がイシバラ教だったんだよ・・・。」
「・・・!!」

東さんの話によると、その後教団は解散命令を受け、本州放棄前で

は全く活動していなかったという。

「イシバラ教が目論んでた破壊行為って、一体なんですか？」

「そこまでは言えんが……。まあとにかく、ここの住民が本当にイシバラ教の教徒だったら、警戒しておくに越したことはない」

そう言っつて再び酒を飲み始めた東さんから離れ、ボクは焚き火に向かつて歩き出した。ボクの脳内では、東さんが言ったことが、頭の中を駆け巡っていた。

まあ別に、宗教でも宗派が違えば行動も違うだろうし、この村の人は友好的だ。攻撃なんてしてこない　　というか、されたくない。

焚き火の近くでは、軍司が目を覚まして再び酒瓶を握り締め、大人たちと談笑していた。軍司はボクの姿を見ると、

「どつちが酒強いか、勝負しません？」

と、もう一本の酒瓶を差し出してきた。

上等だ、とばかりに酒瓶を受け取ったボクは、栓を開け、ぐいっと酒を飲んだ。周りの大人たちが囁し立て、ボクと軍司の競争が始まった。

……翌朝、酷い二日酔いになったのは秘密である。

第81話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第82話 年表

2018年

4月10日

アリス・クルピン博士、1万9人のガン患者に対しガン治療薬を投与。ガン患者は全員回復した。

4月22日

ガン治療薬を投与した実験用ネズミが凶暴化しているのが発見される。

4月23日

クルピン博士、極秘にワクチン開発を開始。

4月24日

アメリカ、カリフォルニア州西部の村で、ガン治療薬が変異したクルピン・ウイルス（以下KVと表記）による感染爆発発生。
州軍によって村は封鎖され、空軍が爆撃。

4月27日

17:30

東京都、マリンシティ中央医療センターにて、ガン治療薬を投与された男性が凶暴化。周囲の人間に噛み付くという事件が発生。
17:40

男性に噛まれた人間が凶暴化。医療センターはパニックに陥る。
18:00

政府はマリシティでの異常事態が、KVによるものだと判断。付近の警察を急行させ、マリシティと本土を繋ぐ橋を封鎖。

18:30

防衛陸軍第1師団と海兵隊第8師団が、治安出動。さらに海上からの感染者の脱出を防ぐ為、海上保安庁と海軍が出動。

23:20

橋上の検問所に、感染者が大量に押し寄せる。感染者・非感染者の区別が困難な為、無差別発砲が許可される。

23:30

第1検問所を感染者に突破される。

23:40

政府はこれ以上の感染阻止は困難と判断。攻撃機や巡航ミサイルによってマリシティを空爆する「滅菌作戦」の実行を決定。

00:00

「滅菌作戦」実行。

民間人死者推定19000人

兵士・警察官死者494人

4月28日

緊急対策会議が召集され、KV対策について議論が行われる。

5月1日

WHO（世界保健機関）、日本への渡航自粛を勧告。

5月2日

アメリカ、韓国、中国、EUの各国は、人道支援の名目で日本に軍と医療関係者を派遣することを決定。

5月3日

政府は1世帯あたり2挺ずつ、感染者対策の銃器の貸与を決定。海外からの調達を開始。

夜間外出禁止令も発令され、軍による治安出動も行われる。

5月8日

多国籍軍、日本に上陸開始。

5月9日

全国で、夜間にうろつく不審人物が目撃される。また「KVをばら撒く」などの愉快犯による脅迫が頻発する。

5月11日

防衛軍感染症研究所、KVの原因であるガン治療薬に別の化学物質を加えることにより、ワクチン開発に成功。

残存していたガン治療薬は全てワクチンに作り変えられる。

5月16日

KV用ワクチンを、兵士、警察官、医療関係者、政府要職職員に摂取開始。

5月18日

18:00

全国でKVによる感染爆発発生。軍・警察が感染者の無差別射殺を開始。

18:20

東京都の感染者多発により、内閣の主要大臣は東京湾上の航空母艦「あかぎ」へと移動。防衛大臣が対感染者作戦を指揮。

18:40

KVを国外に出さない為、検疫を受けず許可を得ないで離陸した航空機を撃墜するため、空軍戦闘機がスクランブル発進。

19:00

推定死者10万人を突破。

20:00

沖縄、北部一帯が感染者に占領される。

24:50

本州で感染者が多数発生した為、総理大臣は本州の放棄を決定。一部地域を除き、翌日07:00までに本州を脱出するよう国民に通達。

24:55

感染者の度重なる襲撃により、初春基地から海兵隊が撤退。

5月19日

01:00

感染者が多発している地域から軍・警察が撤退を開始。

03:00

本州の約3割の地域を放棄。

05:00

本州の約5割の地域を放棄。

07:00

本州完全放棄。本州以外の地域の国民総数は、合わせて5000万人。

推定死者または感染者600万人

殉職警官約6000名

戦死した兵士約4000名

5月20日

空母上の内閣は、北海道札幌市に政府機能の移転を決定。

5月21日

政府機能が札幌へと移される。

5月28日

原油確保の為、海兵隊1個連隊とPMC（民間軍事会社）を中東の油田地帯へ派遣することを決定。

10月29日

九州で長期未発症者が発症。3日後四国でも発症し、第2次感染爆発が発生。

12月1日

九州と四国の感染者の殲滅を完了。
死者600万名

12月15日

本州の封鎖を解除することが決定。

12月20日

本州の封鎖解除。ラジオ放送開始。

第82話 年表（後書き）

御意見、御感想お待ちしています。

．．．なんか最近、小話ばかりしか書いてない気がする．．．．．
。

第83話 side 龍

1月19日 08:30

朝食を食べに来たのは、ほんの20人だけだった。他の連中は全員、昨日酒を飲んで二日酔いしているらしい。

「無茶しやがって……………」

軽装甲機動車を整備していた中沢が呟く。大人である軍人一同は酒に強かったが、子供や美里は壮絶な二日酔いを引き起こしていた。

俺が心配になって部屋を見に行ったら、そこには地獄が広がっていた……………。

「まあ、これから大人になれば慣れてくるだろ。さっさと修理して、一刻も早く四国に行かないと」

車体の下に潜り込んで、配線のチェックをしていた堂々が返した。

「へいへい」と中沢が返し、再び全員が黙々と手を動かす。

一方俺も、整備が完了したM2重機関銃をハンビーの屋根に持ち上げ、古橋と協力して銃座に取り付けていた。

「よし、そつちをしっかり持て。1、2、3で持ち上げるぞ」

「はい！」

「それ、1、2、3!!!」

そう言い、俺はグリップの辺りを、古橋は機関部先端を持ち上げて銃座に固定した。ネジを締め、キッチリと固定されているのを確認してからハンビーから降りる。

「おーい、龍ー？いるー？」

誰かが呼ぶ声で振り向くと、多賀が口に手を当てて叫んでいた。多賀は俺の姿を確認すると駆け寄り、

「美里が呼んでるんだけど」

と言った。

取りえずまだ名前で呼ばれる程時間は経っていないと思ったが、取りあえず答えておく。

「呼んでるって、どうしてです？」

「うーん、わかんない。取りあえずなんか苦しそうだった」

多賀はそう言い、軽装甲機動車の整備をしていた白井に近づいた。

「うわこれすごい。何て言うの？」「12.7mm重機関銃M2ですが・・・」という声が後方で交わされるのを聞きつつ、行ってもいいか中沢達に確認する。

「行ってやれば？後は俺たちでやっつくから」

堂々がそう言ったので、俺は作業を中断して屋敷の中に入った。玄関から囲炉裏のある居間を通り、階段を上がって2階に行く。2階の広い部屋では、昨日飲みすぎて二日酔いを起こした女子たちが唸っている。

第83話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第84話 side 籠

「・・・寒い・・・」

上半身Tシャツ一枚になった俺は、一人で北に向けて歩いてきた。美里に吐瀉物を頭からぶっかけられ、迷彩服の上着はもうホント酷いことになってた。洗ってどうにか綺麗にしたが、Tシャツはびしょ濡れになってしまった。

美里は美里で俺にゲロを吐いてすっきりしたのか、トイレに入るとすぐに帰ってしまった。本当は俺が迷彩服を洗い終わるまで一緒にいようとしたらしいのだが、俺が皆を手伝えと帰らせたのだ。

「それにしても、屋敷はどこだっけ・・・？」

そう、俺は道に迷ってしまったのだ。

共同トイレに来る時は村の南側に設けられた監視塔を目印に辿り着けたのだが、帰る方向の北側にはこれといった目立つ物は無かった。取りあえず屋敷のある方向の北側に向けて歩き出したのだが、どうやら迷ってしまったようだ。何故か森の中に入ってしまい、俺は途方に暮れていた。

あと三分歩いて着かないようだったら、元来た道を引き返そうと決断した、その時。

「・・・式の準備は整っているのか？・・・」

という声が、風に乗って微かに聞こえた。とつさにP226拳銃を抜き出した（小銃の類は、村長から携帯しないよう要請があった）

俺は、声の聞こえる方向に注意を払った。

「・・・牛5頭と豚3頭・・・」

「・・・明日までに・・・」

途切れ途切れに聞こえてくる声は、どうやら複数の人間から発せられているらしい。

こんな森の中で一体何をやってるんだろうと思った俺は、声がする方向に近づいて行った。本当は今すぐ立ち去るのがベストな方法なのだが、イシバラ教と聞いて物騒なイメージしか湧かない俺は、念の為会話の内容を聞くことにしたのだ。

しばらく歩くと、小さな小屋が俺の視界に映った。スコップや桑、段ボール箱や薪が積み上げられているのを見ると、どうやら農機具を収めている小屋らしい。

俺は拳銃をホルスターに戻し、足音を立てないよう小屋に近寄った。所属は特殊部隊みたいなものだったので、隠密作戦は得意なのだ。ヒビが入っているガラスの窓の下に隠れた俺は、耳を澄ませて会話の内容を聞いた。

「・・・しかし、今年は幸運な年ですな」

「ああ全くだ。どこの家からも若者を出さずに済むからな」

幸運？若者？なんの話をしているんだらうか？

「準備は後どのくらいで終わる？」

「5日後には終わる見込みです」

「遅い！！それではあの者達が立ち去ってしまうのではないか！！」

老人のものと思しき声が、若い女性の声を罵倒する。声の数からど

うやら4人以上は部屋にいるだろうが、「あの者達」って……
・、俺達のことか？

「どうにか引き止める口実を作っておけ！あの儀式は大変重要な
だからな！！」

「……わかっています」

「それでは……、イシバラ様のために」

という老人の声の後、部屋にいる者達が全員、

「イシバラ様のために」

と唱和した。その後ドアを開ける音が続き、俺はとっさに隠れる場
所を探した。

別に素知らぬふりで立ち去る手段もあったが、何か疑われても面倒
だ。そう考えた俺の目に、折り畳んで積み重ねられているダンボールの束
が映った。

とっさにダンボールの山から一番大きそうな物を引き抜き素早く展
開する。そして野菜が入っているともしき段ボール箱群の近くに寄
り、頭からダンボールを被った。

まるでどこかのステルスアクションゲームに出てくる作業員のような、
間抜けな格好だったが、とっさに隠れるにはこうするしかない。

幸いにも、小屋の中にいた村民達は、俺に気づく事無く去っていつ
た。彼らが遠ざかるのを確認してからダンボールを脱いだ俺は、彼
らの話の内容に思考を巡らせた。

まず牛やら豚やらの話は、儀式という単語からして神への捧げ物だ
ろう。イシバラ教の中には、イシバラ神への供え物をする宗派もあ
ると聞いたことがある。

だが若者という言葉はわからない。その後が続く幸運という言葉も、何が幸運なのだろうか。

準備という単語は、おそらくその儀式の準備とみて間違いない。

あの者達というのは、おそらく俺達のことだ。だが何故引き止める必要がある？儀式に参加する人間は多い方が良くてもいいのか？

……頭が痛くなってきた。

そんな俺の頭上に、白いものが舞い降りてきた。なんだろうと上を見上げると、雪が降り始めていた。

「こりゃ明日出発出来ないかもしれんな……」

俺はそう呟き、本格的に振ってくる前にさっさと屋敷に戻るべく俺は走り出した。

第84話 side 龍（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第85話 side 優

1月20日 09:00

今日は出発予定の日、だったのだが……。

「こりゃあ当分出られないな」

東さんが、困った風に呟いた。

昨夜から突然大雪が振りだし、今では吹雪が吹いている。村の外に出る道は全てが雪で塞がれ、雪崩が発生した所もあるらしい。

「まいったな、こりゃあ……」

東さんの隣に座っていた軍司が言う。軍司は私物の迷彩服から普通の私服に着替えていて、長い間軍司の迷彩服姿を見ていたボクは違和感を持った。

「出発が遅れるどころじゃない。延期するしかないな」

「ホント、最近異常気象ばかりですもんね」

東さんと軍司が、口々に愚痴をこぼす。愚痴を言っても仕方が無いが、気を紛らわせる為なのだろう。

「集中豪雨に異常な数の台風。冷夏、暖冬、異常な寒波。今回は猛吹雪のオマケつきとききた」

「やっぱり、地球温暖化が原因ですかね？」

「温暖化はかなり抑制されてきてる。あまり関係はないと思うが・

「……」

はあく。と、東さんと軍司は同時に溜息をついた。

出発が出来なくなったことにより、皆は屋敷の中で吹雪が収まるのを待機している。もつとも、収まったところで出発できる訳でもないけど。

そんなところに、防寒具を身につけた村長がやって来た。村長は身体についていた雪を払い、

「東さんはいるかね？」

と、玄関にいたボクに訊いて来た。

ボクは急いで東さんを呼びに行き、東さんと一緒に玄関に戻った。

「急いで出発したかったのですが………。申し訳ありません、もう少しご迷惑をおかけします」

「いえいえ、気になさらないください。それよりお話があるのですが」

東さんと挨拶を交わした村長は、笑いながら言った。話ってなんだろう？

東さんもボクと同じく、当然の疑問を持ったようで、

「話とは？」

と村長に訊いた。

村長は変わらず笑みを浮かべながら、

「祭りですよ」

と答えた。

意外な答えに東さんは一瞬ポカーンと口を開けていたが、すぐに顔を引き締めて再び訊いた。

「祭りとは？」

「あなた方も知っているでしょうが、私たちはイシバラ教を信仰していますね。いつもの習慣で祭りを開くんですよ、4日後に」「はあ……………」

困惑した表情で東さんは答えたが、村長は嬉しそうに続けた。

「あなた方にも参加して欲しいんですよ」

「でも自分達は、雪が融けたらすぐに出発します。4日後までいるかどうか……………」

「まあまあ、そう言わずに」

そんなやりとりをしてから、村長は「じゃ、お願いしますよ」と言っ
って出て行った。

何でボク達まで祭りに参加する必要があるんだろう？

第85話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第86話 side 優(前書き)

PV30万アクセス突破しました！これも皆さんのおかげです！！
これからも頑張ってまいります！！！！

第86話 side 優

1月24日 17:00

今日は「祭り」とやらが開催される日らしい。とは言っても、部外者であるボク達は、呼ばれるまで待っていて欲しいと村長に言われ、やることも無く屋敷で待機する時間を過ごした。

やる事が無いと言っても、それは子供の話で、東さんたち大人は明日の出発に備えて荷物を車に積み込んだり、調達した食料を箱に詰めていた。自動小銃や機関銃と言った長物は、村長から「持ち歩かないように」と言われていた事もあり、早々にバスや装甲車に放り込まれていた。

「よし、全部積み終わったぞ。鍵くれ鍵」

バスに木箱を積んでいた東さんが、庭の縁側で鍵の番をしていたボクにいった。ボクは鍵束からバスの鍵を取り出し、東さんに渡した。東さんはバスに戻ると、ドアの鍵をしっかりと閉めてから戻ってきた。

「これでよし。爆薬でもなければドアは破れんはずだ」

「ドアを破るって、誰がそんな事するんですか？」

ボクの質問に、東さんは笑って

「たとえばの話だよ。真剣に考えるな」

と言って屋敷上がりこんでいった。その後姿を眺めたボクは、縁側に横になり、大きく手を伸ばした。

4日前に降った雪はほぼ溶け、麓まで降りるのは問題ないと東さん

が言っていたので、予定通り明日にはここを出発できるだろう。とその時、いきなり地面が揺れた。かなり大きい地震だ。

「・・・お前、なにやってんの？」

という東さんの言葉で我に帰ると、ボクはいつの間にか縁側の下に潜り込んでいた。どうやら小中高校で習った避難訓練のおかげで、とっさに隠れていたらしい。

赤面しつつ縁側の下から這い出たボクは、地震にも動じず座っている東さんを見て嘆息した。

この所地震が八方村で頻発していて、昨日もかなり強い地震があった。火山が噴火する予兆なのだろうか？

そんな事を思っていると、突然東さんは立ち上がり、身に着けた弾帯を外し始めた。拳銃の入ったレッグホルスターも取り外し、身軽になった東さんはボクに装備品を押し付けて言った。

「ちょっとばかり走ってくるから、これ片付けといて」

「走ってくるって・・・、今からですか」

困惑しつつ装備品を受け取ったボクに、東さんは続けた。

「別に走るくらいの事はしててもいいだろ？最近身体が鈍ってるから、鍛えとかないと」

「でも、今日はあんまり外を出歩かないように村長さんも言っていたじゃないですか」

「これ一回だから問題ないだろ。銃も持ってかないし、大丈夫大丈夫。すぐ帰るから」

今日の朝、村長は東さんに対し、「今日は祭りがあるから、こちら

から呼ぶまで余り外は出歩かないで欲しい」「武器を携帯するのは屋敷の中だけ、しかも拳銃のみ許可」等というお願いを東さんにしていた。東さんは疑問の眼差しで村長を見ていたが、無用な軋轢は生みたくないのか渋々願いを聞き入れていた。そのため、ボク達は朝からずっと屋敷に押し込められ、携帯火器も拳銃までしか持っていない。

「それじゃ、行って来るわ。誰かに聞かれたら、取りあえず走りに行きましたとでも伝えてくれ」

東さんはそう言い、思い出したように装備品の中からナイフと無線機を取り上げた。随分と刃が短いそのナイフを鞘に収め、懐に収めた東さんは、正門から村の中へと走っていった。

18:00

突然正門が開き、村長が男達を連れて屋敷の敷地に入ってきた。村長は縁側にいたボクを見つけ、笑いながら近づいてきた。

「こんにちは。東さんはいるかな？」

「えっと……、ランニングに行きました」

ボクの答えに村長は一瞬顔をしかめ、それから続けた。

「武器の類は持ち出してないだろうね？」

「ええ、大丈夫です。ここに置いて行きました」

そう言って東さんの装備品を持ち上げたボクに安堵したのか、村長

は再び顔に笑みを浮かべた。村長の後ろに立つ男達が、「なら大丈夫か……。」と呟いたのをボクは聞き逃さなかった。村長は思い出したように手を叩き、村長の背後から大きな鍋を持った男が進み出てきた。何が入っているのだろうか？

「今日は祭りだから、皆に甘酒を振舞うことになってね。皆を呼んできてくれ」

男が持っていた鍋を地面に置き、蓋を開いた。鍋の中から、甘酒の香りが広がってくる。

甘酒が好きなボクは、すぐに皆を呼んだ。続々と屋敷の中にいた子供達が庭に集まり、村長達が持ってきた甘酒をご馳走になる。

ちなみに軍司は「甘酒好きじゃない」と言ってもらうのを拒否していた。作業が終わった兵士達も列に並び、暖かい甘酒を味わって飲んでいた。

ボクも紙コップに入った甘酒を貰い、一口飲む。とても甘い味が口中に広がり、とても幸せな気分になった。

全員が甘酒を貰ったことを確認した村長たちは、

「それじゃあ、後で招待するので来て下さいね」

と言つて庭から出て行った。

村長が出て行ってから10分ほどして、また地震が起きた。どうやら先程の地震の余震らしい。

ボクは甘酒の入った紙コップを持つ美里さんと一緒に、再び屋敷の縁側に座った。少しづつ甘酒を飲みつつ、外を眺めながら話す。

「最近、地震多いですね」

「だね。ここは山が多いし火山地帯だから、そのせいかもよ？」

「まさか噴火とか起きないですよね……?」
「大丈夫だよ。心配しすぎ、優ちゃんは」

美里さんはそこで再び甘酒を飲み、続けた。

「そういえば第2次関東大震災つて、いつ起きるんだろうね。東海・
東南海地震とかも恐いし」

「いつそのこと今起きちゃえばいいですよね。今なら人もいないし」
「ハハッ、そんな物騒な事言ってる……」

そこで、突然美里さんが紙コップを取り落とした。目も半開きになり、様子がおかしい。

声をかけようとした瞬間、どさりという音と共に美里さんが倒れこんだ。

それだけではない。屋敷のあちこちから何かが倒れるような音が響き、先程まで聞こえていた子供達の会話も聞こえなくなった。

どうしたんだろうと立ち上がるうとした瞬間、急速に強い眠気がボクを襲った。上手く立てず、廊下に膝を着いた僕は、部屋の中で兵士の海原さんが床に倒れこむのを見た。

身体が言うことを聞かない。まるで激しい運動をした夜のような、強い脱力感と眠気だ。視界が霞み、思考が麻痺しかけたボクの脳内に、ある言葉が浮かんだ。

催眠薬。

その言葉が浮かぶと同時に、ボクの意識は急速に薄れていった。

第86話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第87話 side 龍

同日 17:30

屋敷を出た俺は、ひたすら北に向かって走り続けた。昨日まで雪が積もり。余り走ることが出来なかったのも、これはいいトレーニングだった。

村の中心部を離れ、森林地帯に入る。走るペースを上げていくと、突如として地面が揺れた。とっさに姿勢を低くして、地面に手を着く。

どうやら最近頻発している地震らしい。俺はそう考えつつ、村を囲む山々を眺めた。地下の火山帯の活動が活発になっているのかも知れない。

一瞬屋敷に戻ろうかとも考えたが、止めた。戻って何か起きるわけではあるまい。それに、本当に何かあったらむせんきで呼び出されるはずだ。

揺れが収まった頃合を見計らい、俺は再び走り出した。

森林地帯を抜ければ、次は傾斜のきつい山岳地帯が広がっている。

坂を駆け上がるのはいいトレーニングなので、俺はさっそく坂を駆け上がり始めた。

この坂道は左右を切り立った崖に挟まれるように位置していて、しかも幅が狭い。通る人間も少ないので、トレーニングにはうってつけの場所だった。

俺が坂をひたすら駆け上がり、頂上に着いたら降りるというダッシュのトレーニングを続けて獣数分後、また地震が起きた。今度の地震は揺れが小さかったが、道の左右の崖の上から小石や砂が降って

きた。

ここはヤバイから場所を変えてトレーニングしようかと思った俺は、坂道の頂上から下に歩き始めた。

200メートルくらいある坂道の中間地点辺りに来た時、俺は信じられない物を目にした。

崖の一部が崩れ、人が通れそうな洞窟が出現していたのだ。

俺は洞窟に近寄り、詳細に観察した。そしてその結果、どうやら地震のせいではなく、人為的に掘られた洞窟だと俺は考えた。

なぜなら、洞窟の奥行きはとても広く、日の光が届かず奥が見えなかった。おまけに入り口の近くには、入り口を塞いでいたと思しき腐食しかけた泥だらけの板が、土と一緒に転がっていたからだ。多分、さつきの地震ではがれたのだろう。

俺は洞窟の入り口に手をかざし、風が流れ込んでいることがわかった。つまり、この洞窟はとても広いということだ。

好奇心に駆られた俺は懐からペンライトを取り出し、点灯して洞窟に足を踏み入れた。奥まで行って、何があるのか知りたかったのだ。ペンライトの生み出す光を頼りに、俺は洞窟を進み始めた。

それから10分ほど歩いてしたが、行っても行っても洞窟の奥には辿り着かなかった。どれだけ奥行きがあるんだと思った俺は、奥の方が明るくなっていることに気づいた。

どうやらここには誰かがいるらしい。俺はそう思い、用心の為に懐からCQBナイフを取り出した。このナイフは近接戦闘(CQB)用に開発されたナイフで、刃渡りは10センチほどしかない。その代わり、金属をも貫く頑丈さが売りだ。

俺はナイフを逆手に持ち、左手にペンライト、右手にナイフを構えて進んだ。やがて洞窟を照らしていた光源に辿り着き、光源が蝋燭

であることを発見した。

火の着いた蝋燭は俺の立つ位置から、洞窟にそっていくつも置いてあった。誰かが通る時に、足元を明るくする為に置いたとは思えない。

この先に何かがある。そう思った俺は、蝋燭がの列に沿って再び洞窟を歩き始めた。

そして、俺は広い空間に出た。高さは3メートルくらいで、あちこちに箆笥や机など、家具が置いてあった。

ここに誰かが住んでいるのだろうか？そう思い、周囲を見回した俺の耳に、

「だれ？」

という女の声が聞こえた。

素早くナイフを構え、警戒態勢に入った俺の目の前に、ふらりと人影が現れた。

髪の毛の長い、ワンピースを着た美少女だった。

第87話 side 龍（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第88話 side 龍

「女……?」

少女を見た俺は呟いていた。何故、どうしてこんな所に少女がいる？俺は一端ナイフを下げ、しかしいつでも攻撃できるような態勢を取ったまま訊いた。

「君こそ誰だ？何故こんな洞窟の中にいる？」

「他人に名前を訊く時は、まず自分から名乗れって教えられたこと、無いのかしら？」

……

生意気なガキだ。

最初見たときは清楚なお嬢様みたいに感じたのだが、どうやらそれを見かけだけだったらしい。勝気な性格のようで、恐れを知らないようだ。

悔しいが少女の言っている事にも一理あるので、俺はナイフを鞘に納めて言った。

「東 龍だ。所属と階級は防衛軍海兵隊海兵2曹。それで、こっちが名乗ったから答えてくれるんだよな？」

「まっど松戸 ゆり由梨、17歳よ。満足した？」

ん？松戸って……?

俺の疑問に気づいたのか、由梨はフンと鼻を鳴らしていった。

「そう、八方村村長の松戸 仁の姪よ」

「何で村長の姪がこんな洞窟の中にいるんだ？」

俺はストレートに、思った事を訊いた。この広い空間の中には机や筆筒、ベッドまである。生活用の家具が一通り揃っているとは言っても、ここで生活する必要は無いはずだ。

由梨はやれやれという風に軽く手を上げると、

「あなた、イシバラ教って知ってるわね？」

と唐突に訊いてきた。

「知ってるも何も、昔強制捜査に参加したことがあったな」

「あつそ。じゃあその時に仁村にむらって男が捕まらなかったかしら？」

仁村と聞いても、俺の頭には何も浮かんでこなかった。大体、あの時の俺達の任務は警察の補助で、一々捕まった人間の名前など聞いていない。

教団の強制捜査は新聞記事にもなったが、そこには仁村という男が捕まったとは書いてなかったはずだ。

・・・多分。

「いや、ないと思う」

「仁村ってのは、松戸の偽名よ」

由梨は隠す事無く言い放った。

「松戸は教団で、武器の密輸に関わっていたの。教祖である石原いしはら照夫てあきを盲目的に信奉しててね、教団の実態を告発しようとした信者の殺害もしたことがある」

「どづいつことだ？ だったら何故松戸はこんなところにいて、この村の村長をしている？」

俺の疑問はますます増えていった。少女が何故こんな所にいるのかという問いから、驚愕の事実が発覚したせいだ。

最初の疑問から横道に逸れて行ってる気がしたが、今は松戸の正体を知ることが先決だ。

「1年前、本州でクルピン・ウイルスが流行した時、松戸は新たなテロを起こそうとしていたの。教祖を救う為のね。それがウイルスのせいでパーになった」

「それで？」

「人の話を途中で遮らないの。」

松戸はテロに備えて大量の武器を確保してあった。もちろん仲間もいたから、松戸達は流行中に感染者を撃退して無事だった。私の家族も松戸と一緒に暮らしてたから無事だった。

松戸は本州から敢えて脱出しなかったの。教祖の石原がいつも言っていた、世界の終末が訪れたってね。

そうして無事に生き残り、治安組織も無くなった本州で、松戸は自分の欲望を次々と実行していった。なんせ武器があるんだもの、誰も逆らわなかったわ。

まず松戸は自分に忠実な武装集団を作った。そして自らが新たなイシバラ教の教祖となり、この八方村にやってきたの」

「さて、じゃあこの村には元から住んでた人がいたのか？」

俺が訊くと、由梨は大きく頷いた。

「松戸達がこの村を訪れた時、ちょうどこの村は感染者達に襲撃されていたの。そこで救世主のように現れたのが松戸よ」

「まるで世紀末救世主伝説だな」

俺が知っていたアニメの名前を出し、軽口を叩くと、由梨は「なにそれ？」と訊いてきた。やっぱり最近の子は知らないんだな、昔は人気があったのに。

「いや、なんでもない」と俺が言うと、由梨は気になっているような表情をしつつも続けた。

「それで村人達はすっかり松戸の事を信用し、彼に従い始めたわ。そして彼の唱えるイシバラ教の信徒になったの」

「随分あっさりと従ったんだな。何人が反対した奴はいなかったのか？」

「いたわ。でもすぐに松戸達に消された。そして村人達も、松戸達の行為に反対しなかった。むしろ、積極的に従うようになった」

アレだな。異常事態で皆が強いリーダーを欲しているところに、武器を持った野郎が颯爽と現れて、皆が盲目的に信頼するようになったんだな。

「私の両親は松戸の行為に反対したわ。それを疎ましく思った松戸は、私の両親を生贄にしたの」

「は！？生贄！？いつたいたいどこの部族だよ？」

聞き間違いかと思い、おどけてそう言ったが、由梨の目は真剣そのものだった。

「生贄で合ってるわ。松戸達はイシバラ教でもかなり過激派でね、生贄などの行為を『村を守るのに必要な代償だ』って言って、気に入らない奴やおとなしく従わない奴を生贄にしたの」

「……………マジでか？」

「マジよ」

由梨がきっぱり言い放つ。

「後ね、松戸達は村の外から訪れた、もしくは避難してきた人達を快く受け入れたわ。あなた達もそうでしょ？」

「ああ、村の外に生存者がいるってメッセージを見つけたんでな。休養の為に訪れたんだが、それがどうかしたのか？」

「何で、わざわざそんな人達を受け入れてると思う？食料や武器だって、分けられるほど沢山あるわけじゃない」

松戸は狂人^{サイコ}だと知った俺は、狂人が考えそうなことを思い浮かべた。

「イシバラ教を信仰させて、自分達に従順な手駒を増やす。もしくは武器弾薬や食料、医薬品などの貴重品を奪うとか？」

「半分正解。でも本当の目的は違う」

違う？ならなんだ？

俺の疑問を感じたのか、由梨は真剣な表情のまま言った。

「生贄にする為よ」

な、ナンダッテー！？

という冗談はともかく、俺は予想の斜め上に行く答えに正直呆然となった。村の外から部外者を連れてきて生贄だ？どこの未開の部族だよそれは？

「何でわざわざ村の外から人間呼び込んで生贄にするんだ？村の住人を生贄にすればいいじゃないか」

「もちろん最初はそうしてたわ。でも生贄にすべき人間　この場合、松戸に反逆する者とかね　をあらかじめ生贄にしてしまい、

人間が足りてなかったの。

そうなつてから、最初は松戸は無作為に選んだ村の住人を生贄にしていたわ。でも何の落ち度もない村人を生贄にしているのは、次第に反感を買ってしまふ。

だから松戸は積極的に村の外から人間を呼び込んだわ。村人には『彼らはイシバラ教を信用しない異教徒だ』て言い、そして村人達もそれに納得して反対しなかった」

その話を聞いていて、俺は軽く眩暈を覚えた。俺は宗教に関心は少なかったが、宗教にそんな力があるとは信じられなかった。本当にここは日本なのか？
とその瞬間、俺はある結論に辿り着いた。

「じゃあ、俺達がここに入れたのは……」

「そう、生贄よ。生贄の儀式は周期的に行われるから、今夜あたりに儀式が執り行われるわね」

なんてこつた。それじゃあ、俺達は進んで畏に入ったようなものか？村人達は温厚に見え、松戸もいい人だったのは、あれは全て演技だったのか？俺達は騙されていたのか？

俺は由梨の言葉を聞いた瞬間、腰の携帯無線機を起動させた。イヤホンを装着し、喉のマイクに手をやって通信を試みる。

「東より全員へ。緊急連絡だ！……くそつ、通じない！」

ここが洞窟だからだろうか、イヤホンから聞こえてくるのは雑音だけだった。

こうなれば走って直接伝えるしかない。そう考え、洞窟の入り口に戻ろうとした俺の耳に、「待って！」という由梨の声が聞こえた。

「なんだ？早く行かないとヤバいんだ。手短に頼む」

「アンタ、私をここに置いて行くつもり？」

腰に手を当てて由梨が言った。

「何言つてんだお前？普通に外に出ればいいじゃないか？俺が入ってきた入り口の他にも通路があるんだろ？」

「そりゃああるけど、出れないからいつてるんじゃない」

「何………？」

そこで俺は、由梨が身体を動かす度に金属が擦れる音を聞いた。

由梨に近づき、彼女の足を見ると、右の足首に足枷がかけられていた。足枷には鎖が繋がりがり、さらにその鎖はこの空間の中心部の地面に突き刺された杭に繋がれていた。

まるで、古代の奴隷のようだった。

「ね？私は出たくても出られないの。枷の鍵を外せる針金の類はここに持ち込まれてないし、もし鎖を外しても入り口には見張りがある」

「俺の入ってきた入り口は、金属板で塞がれてたが？」

「あっちの通路は封鎖されてたの。連中、どうせ私がこの拘束を解けないと思って、入り口を1つにしてしまったの」

そこで俺は、何で由梨が軟禁されているのか聞くのを忘れていた。

「で、何でお前はそんな風に鎖で繋がれてんだ？」

「私の両親は生贄にされたって話はしたわよね？松戸の野郎、まだ私に利用価値があると思っついていやがるのよ」

由梨の口調が荒々しくなった。このまま続けさせては長くなると思

った俺は、由梨を落ち着かせるように手を振った。

「わかったわかった。それで、お前は具体的にどうして欲しいんだ？」

「ここからの脱出。それとあなた達に同行して四国に向かう。もし出してくれれば、あなたの仲間を助けるのを手伝うわ」

俺は少し考え、そして由梨を信用することにした。罠の可能性も捨て切れなかったが、今は皆を助けるのが先決だ。

「わかった。じゃあ鎖を・・・」

「後ろ！！」

俺がナイフを取り出した瞬間、由梨が叫んだ。同時に俺も背後に気配を感じ、ナイフを鞘から抜き出しつつ振り返った。

振り返った俺の5メートルほど前に、男が立っていた。男の手には拳銃が構えられ、銃口は真っ直ぐ俺の頭をポイントしていた。男が指で拳銃の撃鉄を起こし、引き金に指がかかる。

それを見た俺は背中から地面に倒れこんだ。男の拳銃が火を噴き、身体が斜めになった俺の頭上ギリギリを銃弾が飛んでいく。

俺は倒れこみつつナイフを構え、そして投擲した。投げられたナイフは回転しつつ、第二射を放とうとした男の額に突き刺さった。

男が奇声を発して倒れるのと、俺の背中が地面に着くのは同時だった。

俺は素早く立ち上がり、慎重に男に近づいて行った。どうやら俺の投げたナイフは男の頭蓋骨を割って脳を損傷させたらしく、男は地面に倒れて死後痙攣を起こしていた。

俺は男の手から拳銃

旧ソ連製トカレフ拳銃の中国製コピー品

である五四式拳銃だった。 をもぎ取り、男に向けて構えつつ周囲を警戒した。増援が来ない事を確認し、五四式をベルトに挟む。

「・・・たく、一体なんなんだ!？」

「尾行されていたみたいね。過去にも外をうるついていた生贄の対象は、尾行していた奴に連れ戻されたわ」

そこで俺は、男が松戸の取り巻きの1人であることに気づいた。こんな拳銃まで持っているとなると、屋敷にいる皆が本格的にヤバそうだ。松戸が武装は拳銃に限るとしつこかったのは、俺達に本格的な抵抗が出来ないようにするためだったのか。

俺はまんまと松戸を信じ、罠に嵌った自分に怒りを覚えた。もっと注意しているべきだった。そして4日前、何が何でも出発しておくべきだったんだ!!

「ねえ、ちょっと!」

由梨の言葉で、ようやく俺は彼女の願いを思い出した。俺は男の額からナイフを抜き、由梨に近づく。

「で、どうやって自由にしてくれるの?その拳銃で鎖を吹っ飛ばす?」

「いや、それじゃあ兆弾が危ない。ナイフを使う」

「ナイフ?これは鉄製の鎖よ?」

由梨はナイフじゃ鎖は切れないと思ってらしく、しゃがんで足枷から伸びる鎖を押さえた俺を不思議そうに見つめた。俺は出来るだけ足枷に繋がる鎖の長さが短くなるよう調整し、手にしたCQBナイフを振り下ろした。

金属がぶつかる音が洞窟内に反響し、ナイフが鎖に突き刺さる。防

弾チヨツキの防弾プレートをも貫くナイフの硬さと鋭さに、鉄で出来ていた鎖はあっさりと千切れた。その様子を見ていた由梨は、呆然としつつ――

「最近のナイフは凄いのね・・・」

と零した。

ナイフの血を男の死体のシャツで拭い、鞘に収めた俺は、男の身体を物色しつつ

「俺の私物だ。一本ウン万円」

と言つてやった。

俺のいた部隊では私物の使用が許可されていて、個々人が使い勝手の良い装備を購入していた。このナイフは俺が買った物だが、部隊の皆もその性能には驚いていたな。

まあ、今となつてはどうでもいいことだけだ。

男の死体から拳銃の予備弾倉2本を取り上げた俺は、近づいてきた由梨の顔を見た。

決意に満ち溢れた表情だった。

「じゃ、行くぞー!!」

「ええ!!」

そう言つて俺達は、俺が入ってきた入り口目掛けて走り出した。皆を助け、こんな狂った村からオサラバするために。

第88話 side 龍（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第89話 s i d e 籠（前書き）

いつの間にか、投稿開始から1年が経ちました。今後もご愛読して
いただければ幸いです。

俺が入ってきた入り口には、今は短機関銃を携えた男が見張りに立っていた。俺は由梨を連れ、気づかれないよう慎重に前進する。

入り口の近くの岩の窪みに隠れ、男の視界に入らないようにした後、俺は岩陰から顔を少し出して男を観察した。

入り口の見張りは1人。武装は短機関銃のみで、主に洞窟の外を見ているが、時々洞窟内部を振り向いて見張っている。恐らくさっきの男が俺を殺したと思って気を抜いているのだろう。

その証拠に、男は大欠伸までしていた。これなら楽に無力化できる。

「ちよつとここで待ってる」

「何するの？」

「アイツを片付ける」

俺はそう言い、男が洞窟の外を眺めるのを待った。そして男の視界から洞窟内部が消えた一瞬に男に駆け寄り、逆手に持ったナイフを構える。

俺は左手で男の口を押さえ、右手に持ったナイフを男の首に押し当てる。そのまま喉を掻き切って頸動脈と気管を切断し、男は首から血を吹き出して即死した。

「もう来ていいぞ」

俺がそう言つと、由梨は恐る恐る俺に近づいた。そして声も出さずに即死した男の死体を見て、

「あなた、本当にただの兵士？」

と訊いて来た。

俺はその質問を笑って誤魔化し、男の身体を漁った。男が持っていたIMI社製、ミニウージー短機関銃を奪い、ベルトの弾倉数本も頂く。

その時俺は、村の方から銃声が聞こえるのに気付いた。それも1つ2つではなく、激しい銃撃戦が起きているようだ。

ついでに男の携帯無線機を手に入れた俺は、取り合えず屋敷にいる牧達に通信を試みた。無線（これは元々俺が持っていた物だ）のマイクを耳に当て、屋敷にいるやつを呼び出す。

しばらくして、唐突に牧が無線に出た。

「牧、大丈夫か!？」

『龍か!？大丈夫な訳あるか!!こつちは今銃撃戦の真っ只中だ!』

どうやら俺の行動は間に合わなかったらしい。俺はそのことにショックを受けつつも、牧との交信を続ける。

マイクからは銃声がひっきりなしに響き、激しい戦闘の模様を俺に伝えていた。

「被害は?誰かやられたか？」

『幸いだが今は誰も・・・って、お前、何で銃撃戦になってるのか訊かないのか?』

「生贄、だろ?」

俺が訊くと、牧が無線の向こうで息を飲むのがわかった。俺は由梨の手を取り、とりあえず麓まで通じる道を駆け下りていく。

『ああそうだ。奴ら、俺達を異教徒だの何だのと言ってやがる。全く、とんだイカレポンチどもだ』

「お前は どうして無事だったんだ？」

『甘酒に睡眠薬が仕込まれてたんだがな、あの量じゃ俺達には通じないだろ？』

俺達強襲偵察隊の人員は、全員薬物の耐性訓練を受けている。普通の人間じゃ眠る量でも、俺達なら問題なく活動できる。

「お前の他には、後何人戦ってるんだ？」

『堂々、中沢。後は甘酒を飲んでいなかった軍司だけだ！後はまだ寝てるか、起きていても使い物にならん！！』

「現在の状況は？」

『とりあえず屋敷の2階に立て籠もってる！気絶した奴らは全員2階に引き上げたから無事だ！だが武器が拳銃しかないから牽制程度にしか発砲できん！！』

やっぱり、俺達から武器を遠ざけたのは、今日の為だったのか。まんまと罠に嵌った己の不覚に、俺は由梨の手を力を込めて強く握っていた。

「車両に積んだ武器は？奴らに奪われたか？」

『車両はまだ無事だ！連中、車両も武器も無傷で手に入れたいんだろ。幸い、まだ連中の手には渡っていない！』

「わかった！これから連中を陽動して、出来るだけお前らが脱出しやすいようにする！また後で！」

『了解！！オーバー』

そう言って、牧との交信を終了した。

俺の当面の目標は、屋敷に張り付いてる敵戦力を分散させることだ。そうすれば牧達が戦いやすくなるし、もしかしたら装備を奪還出来るかもしれない。

牧と通信している間に、俺と由梨はいつの間にか山を下りてしまっていた。俺は一端立ち止まり、今度は男が持っていた無線機のイヤホンを耳に当てた。

周波数は変えていないので、おそらく連中の通信を傍受できるはずだ。俺はそう思い、マイクの音量を上げる。

数秒も経つと、早速通信が傍受できた。

『……屋敷を抜け出した男の追跡に向かっていた2名との連絡が取れない。誰か奴らを見たものはいるか？』

『誰もいません』

『よし。A隊は、^{アルファ}追跡隊と最後に連絡がついた地点に向かえ。万一に備え、警戒を厳にしろ』

追跡隊というのは、恐らく俺が殺した2人だろう。となると、さっさとここを離れなければなるまい。

俺と由梨は走るスピードを上げ、早く森林地帯から脱出しようとした。

森林からあと少しで脱出できるという時、俺は自動車のエンジン音を聞いた。それと同時に道の前方から自動車のヘッドライトの明かりが見え、とっさに俺は由梨の身体を掴んで木陰に隠れた。由梨が抗議の声を上げようとしたが、俺が手で口を塞ぐ。

道を走ってきたのは、荷台に軽機関銃を搭載した軽トラックだった。トラックは数人の武装した男を乗せ、俺達が今来た方向へと走っていく。

これだと、俺がいないのは早々にばれるだろう。それだけでなく、由梨が逃げたことも露見するに違いない。俺達に対する搜索は厳しくなるだろう。

やっぱりゲリラ戦しかないか。

俺は数秒で作戦を練り、そして由梨に訊いた。

「なあ、発電所ってどこにある？」

「？発電所？何でそんな事訊くの？」

「発電所をぶっ壊せば奴らが混乱する。しかもそれだけじゃない。

携帯無線機つてのは、大概通信を中継する大型無線機がないと、広い範囲で使えない。そしてその大型無線機は電力を食うから、必ず発電施設と一緒に、もしくは近いところにあるはずだ。

だから大型無線機もぶっ壊せば、奴らは通信が出来なくなって更に混乱するだろう」

俺の言葉を聞いた由梨は、少し考え込むような仕草をした後、

「こつちよ。ついて来て」

と言って歩き出した。警戒の為銃を構え、俺も由梨の後を追う。

数分後、俺達は発電所らしき小屋の側にいた。近くの茂みに隠れ、俺は小屋を詳細に観察する。

小屋の屋根には通信用と思われるアンテナが立ち、発電機が稼動する音が聞こえる。小屋の周囲に人影は少なく、銃を構えた男が3人立っているだけだった。

俺は追跡隊から奪ったトカレフを取り出し、初弾が装填されているのを確かめて由梨に渡した。

「使い方はわかるな？自衛用に持ってる」

そう言って俺は由梨を茂みに隠れさせたまま、匍匐前進でその場から移動した。見張りの視界が俺のいる方向から離れた瞬間に走り、

小屋の前の空き地に停めてある軽トラの陰に滑り込む。

後の事を考えれば、出来るだけ無音で戦闘を行うのが望ましい。だがナイフで立ち向かうには分が悪い。

どうするかと考えた俺の目に、軽トラの荷台に置いてあった空のペットボトルが目に入った。電線や工具が載せてある所を見ると、どうやら送電設備の補修用に使うトラックらしい。

そこで俺はある事を閃いた。軽トラの荷台から工具箱を手元に引き寄せ、音を立てないよう開く。工具箱に入っていた絶縁用のビニールテープを取り出した俺は、ペットボトルの飲み口にミニウージー短機関銃の銃口を差し込んだ。

銃口と飲み口をビニールテープを巻いて密着させると、ペットボトル製簡易消音機サブレッサーが出来上がった。本物のサブレッサーには消音性能は劣るが、それでも大分やりやすくなるだろう。

俺は軽トラの陰から顔を出し、見張りが俺のいる方向から視線をそらした瞬間に、消音ミニウージーを構え、単発で見張りの頭に撃ち込んだ。

1人目を倒した俺は、別の方向を警戒しているもう2人の男を片付けるべく移動した。同じような手順で2里目、3人目の見張りを片付けた俺は、小屋のドアの前に立った。

さすがに中に何人いるかはわからないが、ここまで来たならやるしかない。大きく息を吐き、ミニウージーの安全装置を単発から連発に切り替えた俺は、ドアノブを掴んで回した。勢いをつけてドアを開く。

小屋の中には4人の男がいて、いきなり入ってきた俺をきよとんと見ていた。すぐさま俺が何者だかわかったようで、各々銃を抜こうとしたが、俺の方が速かった。

ミニウージーを構えた俺は、男達に向けて3発ずつ撃ち込んだ。抑制された銃声が鳴り、男達の身体に次々穴が開く。

数秒もしない内に、室内で生きているのは俺だけになった。

最初の部屋には、大型無線機の筐体がテーブルに載せてあった。俺は室内を進み、次の部屋に侵入する。

次の部屋にはいくつもの発電機が並んでいた。どうやらここがこの村の発電所と考えて構わないだろう。

俺は一端外に出て、手を振って由梨を呼んだ。茂みから這い出てきた由梨は俺が倒した男達を見て、再び目を丸くしていた。

「手伝え。ここを爆破する」

「爆破つて・・・どうやるのよ」

「俺が言う物を集めてくれ。そうすれば5分もかからない」

そう言つて俺は、由梨に電線・懐中電灯を持ってくるように言った。由梨は小屋の前の軽トラに走って行き、その間に俺は再び発電機の並ぶ部屋に入った。

発電機の並ぶ部屋にはいくつものガソリンが入ったポリタンクがあった。恐らく発電機を動かす為の物だろう。

俺はポリタンクの蓋を開け、室内にガソリンを撒いた。もちろん無線機のある部屋にも撒く。

発電機の部屋にあったガソリンを全て撒いた頃に、ちょうど由梨が電線と懐中電灯を持って来た。

「言われた通り持って来たけど、一体どうするの？」

「遠隔操作で爆破する。ここからは危ないから、お前は外に出ている。倒した奴らから武器を回収してくれ」

俺がそう言つと、由梨は素直に外に出て行った。

俺は由梨が持って来た2つの電線の束を持ち上げ、延ばした。相当な重量で、長さは恐らく20メートルくらいだろう。

俺は2本の電線を、5ミリ程の間隔を開けて平行に伸ばした。ビニ

ールテープで地面に固定し、ドアを開けて電線を外まで延ばす。電線は長く、さつきまで俺達が隠れていた茂みまで到達した。続いて俺は懐中電灯を取り出し、電池だけ取り出して後は捨てた。これで準備完了だ。

俺は由梨を呼び、彼女が回収した武器の中からAK-47突撃銃を拾い上げた。いくつもあつては邪魔なので、後の武器はまとめて小屋の中に放り込んで一緒に処分する。

小屋の中に撒いたガソリンが気化してきた頃合を見計らって、俺達は再び茂みの中へと戻った。そろそろ敵が指揮所と連絡がつかない事に気付いたころだろう。

俺は小屋から伸びた2本の電線を手に取り、懐中電灯から外した電池を握った。片方の電線に電池の+極を接触させ、そして俺は由梨に言った。

「ちょっと耳塞いで伏せてろ。結構大きな音がするから」
「わかった」

そう言つて、由梨は両耳に手を当てて伏せた。俺も地面に伏せ、それでもう1本の電線を電池の-極に接触させた。

これで回路は完成し、電線に電気が通電する。流れる電気は小屋の中、電線同士を5ミリ程離れた場所で火花を発生させた。発生した火花は室内の気化したガソリンに引火する。

瞬間、物凄い轟音と共に、小屋が爆発した。一瞬辺りが昼のように明るくなる。

由梨はその様を、呆然としたように見ていた。

「・・・アンタ、何者？戦うコックさん？ツイてないニューヨーク市警の刑事？」

「沈黙の艦とダイ・ードかよ。俺はただの兵士」

無論、俺はただの兵士ではないが、それはこの際黙っておく。この爆破方法も強襲偵察隊で、敵の攪乱を図る為の技術として習ったのだ。

それより、発電施設を吹っ飛ばした事で村中の電気が消えつつあった。村が暗闇に包まれる中、屋敷の方向からは赤い光が見える。

火事が発生しているのかもしれない。騒ぎを聞きつけてやってきた敵と一戦やらかすつもりも無いので、俺は由梨を連れ、屋敷のある方向に走り始めた。

第89話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

鈍い、何かが破裂するような音でボクは目覚めた。

視界が霞んで焦点が合わず、頭も上手く働かない状態だったが、ボクは今の状況を確認めようと身体を起こした。

フラフラと立ち上がったボクは、今自分がいるのが屋敷の2階だという事に気づいた。確か1階の縁側で意識を失ったはずじゃ

。そこまで思考を巡らせた瞬間、ボクは自分が倒れた時の状況を思い出した。確か甘酒を飲んだ途端、皆が倒れたのだ。その後は記憶が無い。

とその時、ボクの視界に軍司が入った。軍司は窓から拳銃を突き出して発砲している。

軍司はボクが起きたのに気づいたらしく、

「優が起きました！ちょっと離れます！！」

と叫んでボクの許に走って来た。手にしているM92F自動拳銃の銃口からは硝煙が立ち昇り、さっきまで軍司がいた窓際には多くの薬莖が転がっていた。

「大丈夫ですか？どこかおかしい場所は！？」

軍司はそう言い、ボクの目を見たり目の動きが正常か確かめていた。ボクはさっぱり状況がわからず、ただただ困惑するばかりである。

「ちょっと、何が起こってるの？」

「あいつら、甘酒に睡眠薬仕込んでたんですよ！生贄だ何だの訳判らない事言って、皆が倒れた瞬間に踏み込んで来たんです！全員撃退しましたけど」

軍司はそう言いつつボクに後遺症が無いことを確認したらしく、再びM92Fを手を取った。その時ようやくボクは、激しい銃撃戦が起こっているのに気づいた。

よく見れば窓際にはいくつもの弾痕が出来ているし、外からは激しい銃声が聞こえている。

「じゃ、そこでじっとして！動かないで！」

と軍司は言い、拳銃を構えて再び窓際に走って行った。

よく耳を澄ませば、屋敷の中から聞こえる銃声の数は少なく、また単発の銃声しか聞こえなかった。数日前に『銃器の携帯は拳銃まで』と村長が言っていたのは、こちらの戦力を下げる為だったのか。

だとすると、現在こちらには拳銃程度しか銃器が無く、劣勢に立たされているのは明らかだった。所詮拳銃は拳銃、何十人も敵がいたらひとたまりも無い。

ボクはしばらくその場を動かず、麻酔薬の効果が完全に切れたのを確認して、ベルトに挟んでいたFNハイパワー自動拳銃を抜いた。スライドを引き、薬室に初弾を装填した。予備の弾倉も4つはある。その事を確認して、ボクはハイパワーを構えて軍司の許へと走った。近づいてくるボクに気づいた軍司は、非難するような口調で激しく言った。

「動かないでって言ったでしょう！何で来たんですか！？」

「こっちの戦力は足りないんでしょ？援護するから！！」

ボクはそう言い、軍司と窓を挟んだ反対側に立った。少しだけ顔を外に出し、状況を確認する。

外の屋敷の敷地外には多くの自動車が止まり、あちこちに銃を構えた人影が見えた。ボクと同年代かそれ以下の少年少女の姿も見え、ざっと100人近くはいるだろう。

ボクがもう少し詳細に観察しようとした途端、人影の手元から閃光が瞬いた。次の瞬間、ボクが身を隠していた窓際にいくつもの弾痕が出来、とっさにボクは姿勢を低くした。

銃弾が当たらなかったのは射手が下手だったからか、はたまたボク達を無傷で捕らえようとしているからか。どっちにしてもヤバイ状況には変わらない。

ボクをおとなしくさせるのを諦めたらしい軍司は、真剣な表情で言った。

「いいですか？倒さなくてもいいから、敵を出来るだけ接近させないでください！万が一屋敷に踏み込まれたら一巻の終わりです！！」

「わかった。他の人たちは今どこに？」

「中沢さんと古橋さんは東に、牧さんは北、堂々さんと山寺さんは西を警戒しています。まだこっちは攻撃が少ない方です」

ボクは了解の意を伝え、窓際に立った。軍司はボクの反対側に立ち、そして窓から銃を突き出して発砲する。

軍司のM92Fの弾丸が撃ちつくされ、軍司は身を隠して弾倉を交換する。すかさずボクは銃を構え、窓の外に向けて突き出した。

外でライフル銃を手にした男に狙いを定め、3発ほど連射する。距離の問題で当たらなかったが、銃弾は男の近くに着弾し、慌てて男はその場から交代していった。

思えば初めて人間相手に発砲した瞬間だったが、何の感慨も沸かなかった。状況が状況だからかもしれない。

ボクと軍司は交代で銃を撃ち、接近する人影を追い払い続けた。絶望感が濃くなっていく中、ボクは東さんが何らかの行動を起こしてくれんことを願っていた。

第90話 side 優（後書き）

来週の日曜洋画劇場にて、本作品の原作「アイ・アム・レジェンド」の放送決定！！皆さんどうか御覧になってください！！！！

汗）
……………あ、筆者は決して朝の回し者ではありませんよ

通信施設と発電所を爆破した俺達は、屋敷に向かって田園地帯を走っていた。後5分もすれば屋敷に着くという地点で、俺は無線機を出して牧を呼び出す。

村の中心部から聞こえてくる銃撃音は、先程に比べて少なくなっていた。これがいいことなのか悪いことなのかはわからない。

ややあつて、牧が無線に出た。

「東だ、さっき発電所と通信施設を爆破した。そっちの様子はどうか？」

「こちら牧、今のところ大丈夫。さっき物凄い火柱が見えたぞ」

「そっちからも確認出来たか。状況は？」

「100人ほど屋敷を取り囲んでたが、お前が施設を爆破した直後に敵の統制が取れなくなつて、今は50人ほどしかこちらを包囲していない。残りはお前らを捜しに行つたと思う」

よし、ならば陽動は成功だ。この後は屋敷を包囲している残りの敵に銃撃を加え、敵が混乱している所を牧達に脱出してもらおう。

俺がその旨を伝えると、牧が『了解』と言つて無線を切つた。今頃退却する準備を進めているに違いない。

俺は後ろを振り向き、由梨に走るペースを上げるよう言おうとした、その時だった。

後ろから軽トラのヘッドライトが見え、俺はとっさに由梨の腕を掴み、道の脇を走る農業用水路に飛び込んだ。用水路には冷たい水が流れていて、由梨が抗議の声を上げようとしたが、軽トラの荷台か

ら銃火と連続した銃声が上がる方が早かった。用水路に伏せた俺達の頭上を銃弾の嵐が通過し、コンクリートで出来た用水路の破片が四方八方に飛び散る。恐らく軽機関銃を搭載しているのだろう。

俺は地面に伏せたままAK-47を頭上に突き出し、用水路の淵から銃口を出して連射した。牽制程度にしかないが。

軽トラは機関銃を連射しつつ俺達の前を通り過ぎ、俺は銃撃が止んだ一瞬に用水路から顔を出し、軽トラ目掛けてAK-47を連射した。

軽トラの荷台には3脚に設置されたMG3軽機関銃が搭載され、さらに2人の男が銃を手にしていた。助手席では女が短機関銃を窓から突き出し、運転手を援護するかのよう発砲していた。まるでハリネズミのような武装の軽トラだ。

再び荷台の軽機関銃が火を噴き、俺は慌てて用水路に伏せた。恐ろしい連射力と弾丸の威力の前に、用水路の淵がぐずぐずに崩れていく。

「どっすんのよ!？」

「とにかく撃て!このままじゃジリ貧だ!！」

用水路内に伏せたまま由梨が叫び、俺は怒鳴り返した。由梨のワンピースは、泥で茶色に染まっている。

再び銃撃が止んだ一瞬に、俺と由梨は立ち上がり、トラックに向けて撃った。由梨の持つミニウージーが火を噴き、トラックの周囲に弾着の土煙が上がる。由梨が撃っている間に、俺はAK-47の弾倉をベルトから抜き、空になった弾倉と交換する。

トラックは俺達の100メートル程前方でUターンし、再び俺達に向けて走って来た。

トラックの速度が早すぎるので、こちらがいくら正確に撃つても中々当たらない。最もそれは相手にも言えることなので、幸いな事に

俺達はまだ被弾していない。

とその時、俺の撃ったAK-47の銃弾が、幸運な事に軽トラの運転席に突き刺さった。窓ガラスにクモの巣のようなヒビが入り、内側から血で真っ赤に染まる。運転手を失った軽トラは俺達の目の前で大きく蛇行し、用水路の溝に突っ込んで各坐した。その衝撃で一瞬銃撃が止み、その隙に俺は用水路から這い上がった。

助手席の女が死んだ運転手のハンドルを取ろうとしているのが見え、俺は運転席付近に弾倉に残った銃弾を全て叩き込んだ。女は死んだらしく、助手席の人影が崩れ落ちた。

俺は弾丸を撃ちつくしたAK-47を捨て、トカレフを腰から抜いた。用水路に突っ込んだ衝撃で目を回していた荷台の男達が復活する気配を感じ、俺は歩きながらトカレフを連射した。

MG3軽機関銃に取り付いていた男の頭に風穴が開き、となりで俺に散弾銃を向けていた男の胸に弾丸が突き刺さる。

最後に残った荷台の男は、地面を這いずりつつ腰の拳銃を抜こうとしていた。俺はそれを見逃さず、すかさず男の肩目掛けてトカレフを撃った。男の肩に弾丸が突き刺さり、男が拳銃を取り落とす。

俺はトカレフの弾倉を交換しつつ男に近づき、その顔に蹴りを入れた。鼻の骨が折れる嫌な音と感触がした。

「た、頼む！撃たないでくれ！！」

俺がリロードを完了すると同時に、男が無事な方の手を上げて懇願した。顔は涙と鼻水、そして潰れた鼻から吹き出した鼻血でグチャグチャだった。

確かにもう男には抵抗するだけの体力も気力もない。そう思った俺は一端トカレフの銃口を下げた。

だが俺が銃口を下げた瞬間、男が「助かった」とでもいう風に表情を緩めたのが気に障った。俺は再び男に銃口を向け、男の表情が絶望に染まる。

「無理、俺ストレス溜まってんだ」

俺はそう言い、引き金を引いた。

5分後、俺と由梨は屋敷のすぐ側まで来ていた。用水路に隠れつつ前進し、慎重に屋敷の周囲を観察する。

牧が先程無線で言った通り、50人程の敵が屋敷を包囲していた。車や電柱の陰に隠れたり、地面に伏せて屋敷に銃口を向けていた。停電のせいで（俺が引き起こしたのだが）暗くてよく見えないが、優や軍司と同年代の少年少女まで混ざっているようだ。

それと同時に俺が先程から気になっていたのは、村の南方から激しい銃撃音が聞こえてくることだった。優も同じ疑問を持ったらしく、小声で俺に訊いてくる。

「銃声が聞こえるんだけど、何が起こってると思う？」

「停電と無線の不通で混乱した際に、ダークシーカーズが村の中に侵入したんだろ」

俺は普通に言い放った。由梨が息を飲むのが、暗闇の中でもわかった。

「アンタ、自分が何したかわかってんの!？」

「ああ。俺達が生き延びるには奴らを混乱させて、ダークシーカーズが襲撃してきたドサクサに紛れて脱出するしかない。それとも他に何か手段があったのか？」

「それは無いけど……まさかアンタ、最初からこうして脱出するつもりだったの？」

「ああ」

俺はそう言い、屋敷に視線を向けた。

俺は騙されたことがわかった以上、この村がどうなっても構わないと思っていた。生贄なんかやるカルト集団なんか、ダークシーカーズに喰われて死んでしまえばいい。

だがダークシーカーズが村内に入った以上、こちらも巻き添えを食わない内にとつとと離脱しないと。

「俺が今から連中の注意を引いて軽装甲機動車・・・あの装甲車だ、に乗り込む。お前はここにおいて、屋敷から俺の仲間達が出てくるまで隠れてろ」

俺が由梨にそう言うと、由梨は素直に頷いて用水路の中にしゃがみ込んだ。用水路には冷たい水が流れているが、この際仕方が無い。俺は用水路から飛び出すと、先程の武装軽トラの乗員から回収したUSAS12ショットガンを構えた。装甲車に向かって歩きつつ、俺は叫んだ。

「イツツア ショータイム!!!」

叫び、ショットガンの引き金を引く。USAS12はフルオートで20発もの散弾を連射できるショットガンとして開発されたのだが、その重さと有効性に疑問が持たれてどこの軍隊も採用しなかった。生産数も少ないので、なぜこんな代物がここにあるのかは不明だった。

だが、密集した敵に向けて撃つにはいい武器だ。フルオートで次々散弾が銃口から吐き出され、隠れていた敵に襲い掛かる。装弾数・連射力、そして散弾の有効範囲が広い事もあり、不意を突かれた敵は次々に倒れた。

暴れ馬よろしく跳ね回る銃口を腕力で押さえ込みつつ、俺は軽装甲機動車まで辿り着いた。ドアのロックを開け、俺が車内に飛び込むのと、俺に気づいた敵が応射してくるのはほぼ同時だった。銃弾が装甲を叩く音を聞きながら、俺は車内の武器を物色した。後部座席に放り込んであったMINIMI軽機関銃と、助手席に置いてあった9式小銃用の30連弾倉を掴み、俺は屋根のハッチを開けた。

本当なら重機関銃で応戦したいところだが、装填している暇がもつたない。俺はMINIMIに小銃用弾倉を叩き込み、機銃の防盾の隙間から銃口を突き出して応射した。ドットサイトを覗き込み、手近な敵に向けて弾丸をばら撒く。すぐに敵が応射し、防盾に着弾の火花が散った。

30連弾倉はすぐに空になり、俺は替えの弾倉を装填して再びMINIMIを撃った。牧達は今頃、外に出るタイミングを見計らっているのだろうか？

とその時、装甲で兆弾した銃弾が、俺の左眉上の額を掠めた。額の肉が裂けて血が溢れ、左目の視界が血で塞がれる。その痛みで俺はキレた。

「……いつてえじゃねえか。いいぜ野郎共、全員ぶっ殺してやるよ！……！」

俺はそう叫び、車内に戻った。後部座席から目当ての武器を担ぎ、再び屋根から身を乗り出す。

俺の姿を見た敵の1人が、驚いたように悲鳴を上げた。

「ろ、ロケット弾だーッ！……！」

そう、俺が担いだのはパンツァーファウスト？・対戦車ロケット弾だった。安全装置兼用のグリップを引き起こし、俺は機銃の防盾から身を乗り出した。対人使用なので弾頭先端のプローブ（信管）は伸ばさず、榴弾として発射する。

俺のその姿に気づいた敵は、武器を捨てて逃げ出し始めた。だが、そんなのを見逃す優しい東さんではない。

俺は手近な敵集団をパンツァーファウストの光学照準器に納め、そして引き金を引いた。

ロケット弾に点火され、ロケット弾が発射機から飛び出していくのと同時に、発射機の後部からカウンターマスという錘が排出され、強力な反動を相殺する。

ロケット弾はあつという間に逃走する敵集団に到達し、着弾して爆発した。

本来なら対戦車用として使用されているロケット弾なので、爆発の炎も大きい。10人程がまず爆炎の中に消え、続いて飛び散った破片が周囲の敵に突き刺さった。

1発のロケット弾で、屋敷を包囲していた敵集団が壊滅した。辺りには黒焦げになった人体の部品や肉片パーツが飛び散り、18歳以下閲覧禁止の地獄絵図が繰り広げられている。

俺は用済みになった発射機を捨て、周囲を見回した。

うん、最高に快感だね。

第91話 side 龍（後書き）

さて、そろそろ「狂気の村」編（そんな名前あったっけ？）も終わりです。後3回後辺りから最終章に入っていくので（多分）、皆さんどうかご声援をお願いします。

外から物凄い爆音が轟き、直後から銃撃音が消えた。

東さんがなんらかの行動を起こすと無線で連絡してきて、皆が1階に降りたのが5分前。それからひたすら侵入されないようドアに銃口を向けて警戒していたのだが、外で何があったんだろう？

ボクと同じ疑問を持ったらしい牧さんが、ドアの覗き窓から外を眺めた。その口がニヤリと曲げられると、

「いいぞ、外へ出る」

と言い、あちこちに穴が開いたドアの鍵とチェーンを外した。

開かれたドアからは、火薬と血の臭い、そして肉が焼けるような臭いが入り込んできた。外に出たボク達は、予想外の光景に目を見開いた。

焼け焦げた死体や人体の一部があちこちに転がり、庭の中心部が大きく抉られ、その周りにも死体が散乱していた。

呆然としていたボクの肩を軍司が叩き、走れと言っているように顔を揺らした。ボクはゆっくりとだが、バスに向かって歩き出す。その隣では、一緒に教団に捕まりそうになっていた多賀さんとその仲間達が、自分達が乗ってきていた車に走っていた。

他の子供達は先程まで恐怖に脅え泣き叫んでいたが、今では静かになっっていた。庭の惨状を目撃したからかもしれない。

その時、庭に止められていた軽装甲機動車のドアが開き、東さんが降りてきた。どうやら顔面に被弾したらしく、顔の左側が真っ赤に染まっていた。

「おう、お前ら無事だったか？」

「龍くんこそ大丈夫！？血がいつぱい出てるよ！」

美里さんがそう言って駆け出し、東さんに抱きつく。美里さんが傷口の具合を凶ろうと手を伸ばし、東さんは恥ずかしそうにそれらを回避していた。

衛生兵の赤井さんが東さんの元へ駆けつけ、傷口の具合を確かめて言った。

「傷は深いけど重要な血管は無事みたいですね。脳も大丈夫かも。でも傷は塞がっても跡になりますよ」

「いいさ、傷跡は男の勲章さ」

赤井さんにガーゼで血を拭かれつつ、東さんが言った。赤井さんは出血を止めると、包帯をポーチから取り出して東さんの頭に巻きつける。

他の人たちは続々とバスや装甲車に乗り込んでいたが、ボクは東さんに近寄って尋ねた。

「あの、何を使っただんですか？」

「何って？」

「あれだけの人を倒した武器のことですよ」

ボクがそう言うと、東さんは周囲を見回し、笑いながら言った。

「ああ、ロケット弾だよ。効果はてきめんだったな」

「・・・おまえ、人間相手にロケット弾なんてチートじゃね？」

軽装甲機動車に乗り込もうとしていた堂々さんが言い、東さんは

「ついカツとなつてやった。後悔はしていない」

と言った。それなんて犯行動機？とボクが訊こうとした瞬間

ドン、という音と共に地面が揺れた。

また地震かとボクは思ったが、規模が違っていた。下から突き上げるような衝撃とともにボクの身体は一瞬中に放り投げられ、地面に落下した。揺れで立つことも出来ず、地面に這いつくばっているボクの目の前で、軽装甲機動車のタイヤが一瞬地面から浮くのが見えた。

周りを見ると、東さんや他の人たちも地面に手をつけて、何事かと周囲を見回している。ボクが屋敷の方を向いた瞬間、とんでもない光景が広がっていた。

屋敷の庭の地面に大きな亀裂が走り、続いてそこから気体が噴出してきたのだ。

これは何なんだ、一体………？

呆然としたボクの耳に、軽装甲機動車の銃座についていた牧さんの叫び声が聞こえた。

「おい、あれを見る！！」

その言葉で牧さんが指差した方向を見て、ボクは息を飲んだ。

村を囲んでいる山の内、1つの山の中腹が大きく裂け、そこから赤い溶岩が流れ出していた。次々と流れ出る溶岩は、流れたり爆発で飛散したりして村に近づいてくる。

噴火だったのだ。

「チクシヨウ、今までの地震はこれの前兆だったのか」

揺れで地面に手をつきつつ東さんが言った。

やがて揺れが収まると、東さんは即座に立ち上がって叫んだ。

「ここから逃げるぞ！乗員割りは無視、手近な車両に乗り込め！！」

そう叫び、未だに地面に伏せていたボクを立たせると、東さんは開いた軽装甲機動車のドアからボクを車内に放り込んだ。続けて東さんも乗り込み、「出せ！！」と運転席の古橋さんに怒鳴る。

ボクが乗る軽装甲機動車を先頭に、装甲車2台とバス、トラックが続き、その後から多賀さん達が乗って来た乗用車が続く。

とその時、ボクは車内に見知らぬ少女が乗っている事に気づいた。

ドロドロのワンピースを着たその少女を見ると、彼女はいきなり

「何か用？」

と、刺々しい口調で言った。性格が悪そうだな……………。

そんな事を思っている内に、車列はあっという間に村の中心部を抜けた。屋根からは時折、火山弾の当たる軽い音が響いている。

村の中心部を抜けると、外には右往左往して走り回る八方村の住民の姿が見えた。ダークシーカーズが村に侵入してきた拳銃、火山まで噴火したのだから当然だろう。

住民の中には銃を持つ者もいて、そいつは車列を見ると真っ先に撃ってきた。だけど、銃座につく牧さんの威嚇射撃であっさりと逃げていく。

「クソッ！早く村を抜けないと、マグマの温泉に浸かるところになるぞ！！」

屋根のハッチを閉め、車内の戻った牧さんが舌打ちした。窓から外を眺めると、山の中腹から吹き出る溶岩の赤い帯は、既に村に到達しているようだった。

恐いのは溶岩だけでなく、噴火で飛んでくる火山弾や火山ガス、そして火砕流だ。狂った教団の人間達やダークシーカーズも脅威だが、大自然の猛威の前にはミジンコにも等しい。とにかく、とつとと逃げるのが一番のようだ。東さんは車載無線機のマイクを掴み、叫んだ。

「全車、速力上げ！ここからさっさと脱出する！！」

第92話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第93話 side 龍

数分後、どうにか村から逃げ切った俺達は、村を一望できる山の中腹に陣取っていた。

俺達が村から脱出する直前、とてつもない規模の火砕流が発生し、俺達が村から脱出した直後に火砕流が村を飲み込んだ。村民の殆どは脱出が間に合わず火砕流に飲まれ、また数少ない生き残りもダークシーカーズの餌食となったようだ。

俺達は村を脱出した後、断続的に発生している火山ガスにやられないうよう、今いる高所である山の中腹に戻った。今はここで、火山の噴火でエンジンに影響が出ていないか確認している。

「・・・それにしても、ひどいね・・・」

俺に寄りかかるように立っていた美里が呟いた。火山灰で頭が汚れないように、着こんだコートのフードの位置を調整しつつ俺は双眼鏡を覗いた。

盆地だった村の殆どは溶岩の中に沈み、かろうじて残った無事な土地には多くの人間が倒れていた。おそらく有毒である火山ガスを吸ったのか、あるいは溶岩の熱や水蒸気で蒸し焼きにされたのかのどつちかだろう。少なくとも、生きている人間は確認できなかった。

俺は双眼鏡を腰のポーチに戻すと、

「・・・何が？」

と美里に訊いた。

「何がって、皆死んじゃったんだよ！？それを何とも思っていないの？」
「別に。どうせ俺らを殺そうとしていた奴らだ。むしろ天罰が下ったんじゃないのか？」

俺がそう言つと、美里は「信じられない」とでもいう風な表情を見せた。

「龍くん、昔はそんなんじゃないよ。少なくとも誰かのために悲しんで・・・」

「あのな。繰り返すようだけど、あいつらは俺らを殺そうとしていたんだぞ。何でそんな奴らの為に悲しむ必要があるんだ？あんな狂人どもなんか・・・」

「皆が皆、悪い人だつて訳じゃないでしょ！！」

突然美里がそう叫んだ。一瞬全員の視線が美里に集まったが、関わらない方がいいと判断したのか、それとも関わる暇すら無いのか、すぐに美里から注目を外した。

俺は美里の考えがわからなかった。俺達を攻撃してきた奴らの中に「いい人」がいるだつて？何なの？バカなの？死ぬの？

どうせ「いい人」がいたつて、そいつが俺達と敵対していた組織の中に居た以上、「いい人」であつても敵だ。そんな事もわからないのか。

俺がその旨を美里に伝えると、美里は何も言わずバスに戻つて行った。軍人の俺達の理屈を一般人の美里に押し付けるのはよくないが、彼女達だつて俺達の保護下に置かれているんだから、それぐらい理解して欲しい。と俺は思う。

俺は生き残るためなら何だつてやる。ダークシーカーズだろうと人間だろうと、俺達に危害を加える奴は容赦なく殺す。その事を美里

にわかってほしかった。彼女から見たら、俺はただの殺しが大好きで人の生死に無頓着な人間にしか見えないだろう。

美里との距離が最近縮まってきていた気がしたのだが、この一件で再び距離が開いてきたのを感じつつ、俺は軽装甲機動車に乗り込んだ。

「んで、どこ行く？」

車両の点検を終え、運転席に乗り込んできた堂々が訊いた。先程の美里との口論に触れてくれないでいるのが、正直言っておりがたかった。

「ここで朝を待つのは危険だ。見晴らしがいい平野まで移動しよう」「りよーかい」

堂々はそう言って車を出した。俺の乗る軽装甲機動車を先頭に、7台となった車列は狂気に満ち溢れた村を後にした。

第93話 side 龍（後書き）

今回で「狂気の村」編は終わりです。

次は小話を2つくらい挟み、最終章に突入したいと思います。

第94話 side 龍 (前書き)

最終章突入！
すみませんが、小話はまた後で……。

第94話 side 龍

2月1日 17:30 愛知県豊田市

日が暮れた直後、いきなりバスがエンストした。

俺は車列に停まるよう命じ、即座に修理させ始めた。だが、エンジンの具合は相当悪いのか、煙を噴出したままエンジンは復活する兆しが無い。

「どうだ、エンジンは？」

降車し、周囲を警戒していた俺は、エンジンを点検していた黒田に訊いた。エンジンをいじっていた黒田は、オイルで汚れた手で汗を拭いつつ答えた。

「ダメです。完全にイカれてます。何とか部品交換で済むとしても、ほとんど部品を取り替えないと・・・」

そう言い、黒田はお手上げだとも言うように手を挙げた。日没の直後だというのに、全く運が悪いことだ。

俺は体格のいい中沢と古橋を呼び、73式大型トラックから部品を運んでくるよう命じた。子供達はバスに乗ったまま待機させ、大人は外に降りて銃を携行して警戒させた。

「・・・大丈夫かねえ？」

ワゴン車から降りて来た多賀は、腰の拳銃を抜いて周囲を見回した。暗視装置を着けた俺は肩を竦め、油断無く小銃を構えた。今車列が

停まっている道には障害物が少ないものの、この先の道の左右にはコンクリートブロックが設置され、その前にはパトカーが放置されていた。道には行き先を塞がれて捨てられた車が沢山放置されている。

さらに道の左右にはビルが立ち並んでいる。つまり、ダークシーカーズからしたら隠れる場所が沢山あるということだ。

修理が始まってから数十分が立ち、ようやくエンジンの調子が良くなって来た。その間も俺達は周囲を警戒し、黒田はオイルにまみれてエンジンを修理し、中沢と古橋はバスとトラックを往復して部品を運び続けた。

そして、それは起きた。

「うわっ………!!」

暗視装置の映像に一瞬影が走り、悲鳴と共に、トラックからエンジンの部品を降ろしていた古橋が消えた。

「何だ!?!どうした!?!」

すぐに全員が即応体制をとり、銃口を左右に振って消えた古橋を捜した。

「うわーーーーーッ!!」

古橋の悲鳴が聞こえたが、悲鳴は徐々に小さくなっていった。ダークシーカーズにさらわれたのだ!!!

俺は小銃の安全装置を解除し、叫んだ。

「牧、山寺、海原は俺について来い！残りはこちらに残ってエンジンの周囲を続行しろ！！俺達は古橋を救出する！！」

俺はそう怒鳴り、駆け出した。3人も俺の後に続いて走り出す。

俺は小銃のフラッシュライトを点灯し、暗視装置を外して地面を照らした。暗視装置の緑の視界では、色がよく見えないのだ。

地面には何かを引きずられたような血の跡と、血で染まった足跡が点々と続いていった。

「油断するな！どこからダークシーカーズが出てくるかわからんぞ！」

牧が叫んだ。

ここは大通りで、道の左右にはテナントビルが続いている。いつどこからダークシーカーズが飛び出してくるかわからない。

俺達はコンクリートブロックで塞がれた道に入った。道は放置車で埋め尽くされ、とても車の隙間を縫って走れそうにはない。そう判断した俺は、地面を蹴って放置されたタクシーのトランクの上に飛び乗った。後ろに続く3人も俺に倣って車の上に飛び乗り、放置車の上を走っていく。足元から、フロントの窓ガラスが割れる音や、屋根がへこむ音が鳴る。

俺は時々暗視装置を外して血の跡を確認し、走り続けた。血の量は少なく、古橋が出血死することはないだろう。

古橋の血の跡を追っていた俺達は、血の跡が一軒のビルの中に続いている事がわかった。

「どうするよ？待ち伏せしてる雰囲気があるぜ？」

ビルに銃口を向けつつ牧が言った。

確かにこのビルの中にはダークシーカーズが沢山いるだろう。見えている地雷をあえて踏むのは避けたかったが、古橋を助ける為には地雷を踏むしかない。

「・・・仕方ない。ビルに突入して、速やかに古橋を救出する。交戦は最小限に留める」

俺はそう言い、突入のフォーメーションを取るよう3人に命じた。俺が先頭、俺の後ろには牧と山寺、そしてその後ろには海原と、ダイヤモンドのようなフォーメーションだ。このフォーメーションならどの包囲からの攻撃にも対応できる。

俺達は慎重に前身し、自動ドアの割れたガラスが散乱する入り口からビル内に突入した。一階はロビーだったらしく、椅子や観葉植物が並んでいる意外は隠れる場所はなさそうだ。

俺は腰のポーチから軍用の発炎筒フレアを取り出し、点火して松明のように掲げた。発炎筒の先端から赤い炎が吹き出て、ロビーを赤く照らす。強い光源が現れたことに、暗視装置が自動で映像の光量を調整した。

念の為俺はしばらく待機し、ダークシーカーズが現れない事を確認すると足元に発炎筒を置いた。明かりの確保と帰る時の目印の為だ。発炎筒は乗用車に搭載されている物と殆ど同じで、軍用の物は点火時間が民間用よりも長い。10分は燃え続けるので、その間にとつと古橋を助けてサッと帰らなければ。

俺は埃で汚れたロビーの案内ボードを確認し、ビルの構造を把握した。

俺を先頭にして、チームはロビーを抜けて階段に向かった。

出来るだけ足音を立てないように階段を上り、俺達は2階に上がった。

2階には、廊下の左右に広いオフィスが1室ずつ並び、廊下の向こうまで血が点々と続いていた。

「牧、フレア貸せ」

俺はそう言い、後ろに手を出した。発炎筒は1人1本しか持っていないので、俺は牧の発炎筒を借り、点火した。火の点いた発炎筒を、俺はリノリウムの廊下目掛けて放り投げた。

発炎筒は床を転がり、壁に当たって止まった。発炎筒を中心とした一帯が赤い炎で明るくなり、廊下が隅々まで光に照らされる。とりあえず、見える範囲にダークシーカーズはいなかった。

俺は小銃を構えつつ言った。

「俺と海原は右、牧と山寺は左の部屋を調べる。ダークシーカーズがいたら問答無用で発砲おk」

「了解!!」

3人は答え、海原が俺の後ろに、牧と2人は廊下の左側の部屋を調べる。時間が惜しいのでスルーしてもよかったのだが、古橋を救出して帰ると時に襲われてはたまらない。まずダークシーカーズがない事を確認してから前進する。

俺と海原は、右の部屋のドアの両脇に立った。ドアは半開きになっていた、床には若干埃が積もっている。

俺は半開きのドアを、小銃の銃口でそっと押した。軋む音と共にドアが開き、俺と海原はだっと部屋に突入して銃を構えた。

フラッシュライトの光が室内を照らし、俺はこの部屋が会社のオフィスである事に気づいた。いくつも机が並び、割れた窓から風が入り込んで床に書類が散乱していた。

俺はハンドシグナルで、海原は廊下側の通路を調べるように命じた。

俺は窓側まで歩き、机の間を縫って物陰にダークシーカーズがいな
い事を確認する。

一歩一歩慎重に前進していると、どこからか水が滴る音が聞こえた。
雨漏りでもしているのだろうか。

とその瞬間、何かが倒れるような音がし、俺と海原は即座に音がし
た方へ銃口を向けていた。いつでも発砲出来るよう、人差し指をト
リガーガードからトリガーへとかける。

海原の方が物音の音源に近かったので、俺は顎をしゃくって海原に
前進するよう命じた。海原が早足で音のした方に近づく間、俺は海
原を援護すべく左右に銃口を向けた。

「・・・なんだ、大丈夫ですよ2曹。音はネズミのせいですよ」

海原の脱力したような声が響き、俺は海原の近くへ駆け寄った。海
原が小銃のフラッシュライトで足元を照らすと、そこには海原のブ
ーツで尻尾を押さえられたネズミがのたうちまわっていた。

「俺達が入ってきたのに驚いて、逃げるときに小物にでも当たって
落としたんでしょう」

海原はそう言った。

俺は肩から力を抜き、「離してやれ」と言った。海原は軽くブーツ
を持ち上げ、拘束を解かれたネズミはあっという間に闇の中へと消
えた。

気がつくところか部屋の端だったようで、俺と海原の隣にはドアが
あった。俺は喉元のマイクを押さえ、

「右オフィス、クリア。今から出る」

と言った。わざわざ「出る」と言ったのは、敵だと勘違いされて誤

射されないためだ。

俺は先頭に立ち、ドアから廊下に出た。牧と山寺はまだ室内を調べているらしい。

俺と海原がしばらく待つと、

「左オフィス、クリア。今から出るから撃つなよ」

との声と共にドアが開き、牧と山寺が出てきた。これで、2階にはダークシーカーズがいないことが確認された。

再びダイヤモンドのフォーメーションを組み、廊下を前進する。給湯室やトイレを調べ、何もいない事を確認すると、俺達は廊下の端の階段まで一気に走った。

血は階段を点々と汚しており、また雨漏りしている天井から流れる水が、廊下のあちこちを浸していた。血のついている部分は幸いにも水に浸されていない。

血の跡を追っていくと、最上階である4階に辿り着いた。4階はなんかのホールらしく、大きな入り口が1つあるだけだ。

とその時、無線機がいきなり鳴った。

第94話 side 龍

(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第95話 side 龍(前書き)

地獄のようなテスト期間が終わったので、ようやく更新できます。
大変長らくお待たせしましたorz

第95話 side 龍

通信してきたのは、本隊に居残る中沢だった。俺は出来るだけ声を小さくして通信に応じる。

「こちら搜索隊、中沢ドーズ」

『何だ東か……。たった今バスのエンジンの修理が完了した。エンジンの調子も良好だ』

「なるほど、そりゃ良かった。じゃ、なんかあったらまた呼んでくれ」

中沢は『了解』と答え、通信を終えた。

今俺達がいるのは、このビルの最上階である4階だ。4階には会議や研修の為のホールが設けられていると、1階の案内板には表示されていた。おそらくここに古橋がいるはずだ。

俺は手信号で、ドアの前に展開するよう皆に命じた。ドアを取り囲むように展開したあと、俺は牧にドアを開けるよう命じる。

牧が何故か閉められている両開きのドアに近づき、片側のドアノブに手をかけた。そのままドアノブを慎重に下ろすと、何の抵抗も無くドアノブは一番下まで下がった。

牧が手信号で、「鍵はかかっていない」と皆に伝えた。感染者に知能はないので、鍵をかける等という芸当は無理だったのか。と俺は一瞬思う。

牧は片手で小銃を保持し、ゆっくりとドアを開いた。牧がホール内に入った瞬間、俺達も一齐にホールに飛び込んで、襲ってくるであろうダークシーカーズを迎え撃つ為に銃を構えた。

「……が、数秒待っても何も襲い掛かっては来なかった。」

「……どういうことだ？ここに古橋がいるんなら、ダークシーカーズだっているはずだろ？何で襲い掛かってこない？」

「知らんがな。とにかく警戒して前進しろ」

困惑した口調で牧が呟いたが、襲い掛かってこない理由なんて俺が知るわけがない。

ダークシーカーズは獲物を見つけると、いかなる状況であつても襲い掛かってくる。今までの経験上俺達はその事を知っていたが、この状況は余りにも不可解すぎた。

赤外線暗視装置でホール内を隅々まで見回すと、ホールの一番向こう、演壇の上に人型の物体が倒れているのが見えた。俺は暗視装置を取り外し、小銃のフラッシュライトでそれを照らした。

ライトの光に照らされたその人影は、迷彩服を着ていた。古橋だ！俺達はすぐさま演壇に駆け寄り、古橋を演壇上から降ろした。古橋は気絶しているのか、目を閉じたまま動いていない。

「おい、しっかりしろ古橋！！」

山寺がそう叫び、腰の水筒の水を古橋にぶっ掛けた。ややあつて、古橋が目を開いた。

「……痛てて。ここは？」

古橋はそう言い、周囲を見回した。俺達は安堵の溜息を吐き、海原が古橋の身体を確かめていく。

古橋は身体のうちこちを咬まれていた。とくに最初に襲撃され、引

き摺られた時に咬まれたのであろう肩の傷は、防弾チョッキと迷彩服を貫通して肉を深く抉っているようだった。

「立てるか？」

身体の傷を確かめ、応急処置の包帯を巻き終わった山寺が訊いた。古橋は立ち上がるうとしたが、すぐによろめいて倒れてしまった。よく見ると古橋の右足のふくらはぎにも、咬まれた時についた歯型がくつきりと残っている。

「仕方ない。山寺と海原は古橋に肩を貸してやれ。俺と牧は3人の援護だ。ビルから出たら、本隊に回収を要請しよう」

俺がそう言つと、「了解」と3人は言い、山寺と海原は古橋を立たせて肩を貸し、牧は俺と一緒に3人を援護出来るポジションにつく。俺が先頭に立ち、元来た道を引き返す。ホールから出て廊下に出たが、やはりダークシーカーズは襲ってこない。

おかしい。俺はそう感じていたが、今は古橋の治療が最優先だ。見たところ出血量は死に到るほどでは無いが、やはりこちらとしては心配だ。

今のところ古橋本人は余り痛がつていない。あの深さの咬傷だったら俺達でもかなり痛がると思っただが、古橋は鈍感なのだろうか？これが子供達だったら、すぐさま隔離するなり射殺を検討するなりするのだが、俺達軍人はワクチンを接種しているので問題ない。いわゆる役得ってやつか？

3階の階段を降り、2階に到着した。安全の為、来た道を引き返すことにしたのだ。もっと時間を短縮できるルートもあるのだが、時間と安全だったら俺は時間を取る。それに古橋の出血も納まってき

たようだし。

2階の廊下には、俺達が来る時に設置した発炎筒が今でも燃えていた。ただし大分燃えて短くなっていたので、さっさとここを出なければ。

発炎筒を見た古橋は「うわっ、眩し！」と言い、目を細めて光から目をそらした。今まで暗い所にいたから、目が慣れていないのだろう。

古橋に肩を貸した山寺と海原が前進する間、俺と牧は銃を構えて周囲を警戒した。先程ダークシーカーズがいない事を確認したとはいえ、念には念を、だ。

無事に2階も通り過ぎ、俺達は1階に降りた。1階の発炎筒は殆ど燃え、弱々しい光がロビーを照らしている。どうやらここにもダークシーカーズはいないようだ。

俺は1人出口まで前進し、外にダークシーカーズがいない事を確認した。その後で手信号で皆を呼ぶ。

さて、ここからが問題だ。それは、ここからどうやって古橋を車列まで連れて行くかだ。

古橋は動けないので、誰かが支えてやるか、引き摺っていくか、背負っていかねければならない。だが目の前の道路は、放置された道路でみっちり埋め尽くされている。この状況では古橋を長距離移動させるのは無理だ。

俺は中沢に通信した。

「東より本隊、誰か応答してくれ」

『こちら本隊の中沢。どーぞ』

「古橋を回収した。怪我はしているが命に別状は無い。だが、足を負傷しているので長距離の移動は無理だ」

『・・・わかった。こっちで出来るだけそちらまで向かう。目印になるものは？』

中沢がそう訊いてきたので、俺は牧を呼んだ。

「なんだ？」

「照明弾を打ち上げて、周囲に目印になるものが無いか探すんだ」
「いいのか？この状況で照明弾を打ち上げると、容易にダークシーカーズに見つかっちゃうぞ？」

確かにダークシーカーズは夜目が利き、古橋の血の臭いを追って俺達を発見するだろう。照明弾なんか打ち上げたら、さらにこちらの位置はバレバレになる。だが、襲い掛かってくるならとつくにそうしている。従って、ここにはダークシーカーズはいないと俺は判断した。

俺がその旨を伝えると、牧は「了解」と言って、弾帯から40mm照明弾を取り出した。小銃下部に装着されたM320グレネードランチャーに照明弾を装填すると、真上に向けて照明弾を打ち上げるポンツ、と軽い音と共に照明弾がグレネードランチャーから吐き出され、空中でパラシュートを開いてふわふわと漂い始めた。照明弾に装填されたマグネシウムが燃焼し、強烈な光で周囲を照らす。

グレネードランチャー用の照明弾なのですぐに燃え尽きてしまったが、その間に俺は周囲の地形を把握していた。目の前に続く放置車両の列は、俺達の100メートルほど先で途切れている。どうやらそこは封鎖されていないらしく、バスでも乗り入れる事が可能だろう。

そしてその道路の脇に、「大田原証券」と大きなパネルが掲げられたビルがあった。

「大田原証券ってビルが、俺達の100メートル先にある。そこなら道が車両で塞がれてない」

『大田原証券ビルね……。ちよつと待つてる』

イヤホンから地図を広げるがさがさという音がして、ややあって中沢が無線に出た。

『ルートを確認した。状況にもよるが、多分5分くらいで着けるだろう。それまで待機していてくれ』

「了解、終わり」

俺はそう言い、通信を終了した。

古橋を支えていた山寺と海原を呼び、大田原証券ビルの前まで行くよう命じると、俺と牧は古橋達を援護できるポジションにつく。古橋を支える2人がそろそろと動く間、俺は頭の中の疑問について整理してみた。

何故古橋が無事なんだ？普通だったらとつくに喰われてる。もしかして不味いとも思われたのか？

何故古橋がいた地点にダークシーカーズがいなかった？待ち伏せには絶好の機会なのに。

何故俺達を襲ってこない？地の利や暗闇はダークシーカーズに有利なのに。数で押せばすぐに殺せるのに、何故だ？

他にもいくつが疑問があったが、古橋達が大田原証券ビル前に到着したので、俺は思考を中断して大田原証券ビルまで走った。大田原証券ビル前に到着すると、今度はそこで銃を構えて周囲を警戒する。

数分後、遠くからエンジン音が聞こえてきた。おそらく本隊の車列

が近くまで来たんだろう。

「おい、しっかりしろよ古橋。もうすぐちゃんと止血と痛み止めが出来るぞ」

山寺がそう言うと、古橋は弱々しく頷いた。気のせいだろうか、顔が真っ青になっている気がする。

やがてエンジン音が近くなり、曲がり角から車のヘッドライトの光が見えた。俺達は笑顔になり、立ち上がって手を振って自分の位置を知らせる。

その時だった。

俺達の後ろから古橋の呻き声が聞こえ、俺は後ろを振り返った。

俺は目を見開いた。

古橋は顔を真っ青にして、立ち上がっていた。

持っていたMP7短機関銃を俺達に向けて。

第95話 side 龍（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第96話 side 龍(前書き)

ここで警告です。

今回から、自分の考えたダークシーカーズの設定が原作と大きく逸脱していきます。それでも構わないとお考えの方のみ、読むことをおすすめします。

第96話 side 龍

古橋が銃を構えた時、俺はとっさに

「伏せろ!!」

と叫んだ。

俺の声に山寺と海原は即座に反応し、手近な乗用車の陰に隠れた。だが、牧は一瞬反応が遅れた。

連続した銃声が響き、古橋の持つMP7から火が吹く。銃口の先にいたのは 牧だった。

「ぐあつ………!!」

牧が右足から血の筋を空中に引き、地面に倒れこむ。俺は「牧!」と叫んで駆け寄ろうとしたが、俺の足元を銃弾が抉った。古橋が撃つて来たのだ。

「古橋! 銃を降ろせ! 何やってるんだ!？」

山寺が叫んだが、古橋は今度は山寺にMP7を向けた。慌てて山寺が車両に隠れると、再び古橋のMP7が火を噴き、山寺の隠れる乗用車を穴だらけにした。

それと同時に、ガチツという音と共に、MP7から吐き出される空薬莖の列が止まった。俺は古橋を取り押さえるべく駆け出したが、古橋は今度はホルスターからP226拳銃を抜き、俺に撃つて来た。俺の頭のすぐ脇を銃弾が掠め、俺は慌てて方向転換。山寺や海原の

隠れている車列に向けて走った。

俺の周囲に次々と弾着が弾け、目に砕けたコンクリートの破片が入ったが、構わず全力疾走する。俺は放置された乗用車の陰に滑り込んだ。

「おい、大丈夫か牧!？」

俺は乗用車の影に隠れつつ、足を撃たれて呻き声をあげている牧に駆け寄った。牧は俺に銃撃が集中している間、海原と山寺によって運ばれていた。

どうやら古橋が撃った銃弾は、牧の右の太腿に当たって貫通したようだった。海原が出血を止めるべく包帯を牧の太腿にまきつける。

「クソッ、古橋はどうしちまったんですか!？何で俺達を撃つてるんだ!？」

「気が狂ったのかよ!？」

山寺と海原が口々に叫び、その間にも古橋はMP7の引き金を引き、俺達が隠れている乗用車を穴だらけにする。

気が狂ったにしては、言動がおかしくない。それどころか、無口で俺達に銃撃を加えてくる。一体どうなってるんだ？

そこまで考えた俺は、ある事に気づいて背筋の凍る思いがした。

古橋は俺達に助けられた時、大きな傷なのに痛みを感じていなかった。

古橋は廊下に転がっていたフレアを見て、異様に眩しがっていた。さらに先程、異様に顔が真っ青だった。

これらは全て、人間がダークシーカーズ化する際の初期症状に似ている。それどころかほぼ一致する。

では、古橋はダークシーカーズになったとでもいうのか？ワクチンを打っているにも関わらず？

そこまで考えた俺は、倒れている牧の小銃を拝借し、牧の弾帯から40mm照明弾を取り出し、アンダーマウントされたグレネードランチャーに装填した。

「2曹、何するんです!？」

「古橋をよく見てる!！」

古橋に銃を向けつつも今だ発砲しない山寺が俺に訊いてきたので、俺は怒鳴り返した。

俺は乗用車の陰から身を乗り出し、M320グレネードランチャーの引き金を引いた。ただし、水平方向に向けて撃ったので、装填された照明弾はすぐに地面に落下し、数回地面をバウンドして古橋の間近で止まった。

照明弾の光を見て、古橋が悲鳴を上げて照明弾から遠ざかる。それと同時に、俺は暗視装置を外して古橋の顔を注視した。

古橋の顔色は白を通り越して蒼白になり、口からは牙が生えていた。

まるで………、俺達が今まで戦ってきたダークシーカーズと同じだった。

俺達から少し離れた所に止まった車列から、ミニミ軽機関銃を持った中沢が降りてきた。こんな異常事態が起きているので、状況を確かめようとしたのだろうか。

銃撃を避けつつ俺達の元までやって来た中沢は、

「一体何が起こってるんだ！？古橋は気が狂ったのか！？」
と訊いてきた。

「古橋は恐らくダークシーカーズになった！もう手遅れだ！！」

俺がそう叫ぶと、辺りにいた皆が息を飲んだ。俺が小銃の安全装置を解除すると、混乱した様子の中沢が訊いて来た。

「う、嘘だろ？俺達はワクチン打ってるから感染しないんじゃないのか！？」

俺はある事を全く忘れていた。感染症の基本でもあることだ。

ウイルスは変異する。

一度ウイルスが変異してしまうと、既存のワクチンは殆ど使い物にならなくなる。2009年に起きた新型インフルエンザの大流行が
いい例だ。

ただ、クルピンウイルス自体がガン治療薬の元となったはしかウイルスから変異したのもだったので、俺は変異を起こすのは当分先だろうと考えていたのだ。

・・・全く、俺はバカだった。

「じゃあ何で銃を撃ってきてるんですか！？ダークシーカーズに知能は殆ど残ってないはずでしょう！？」

今度は山寺が訊いて来た。

ダークシーカーズにだって、武器を使う等の知識はある。大晦日に俺が消化器で殴られたのがいい例だ。

ただし、銃などの複雑な道具は使うことが出来ないらしく、今まで俺達は銃を使うダークシーカーズに遭遇したことがない。もう、目の前にいるけど。

「ウイルスが変異した際、道具も使えるようになったんじゃないのか？恐らく古橋は『銃火器を使える知識』を保ったままダークシーカーズになっちまったんだ！！」

俺はそう叫び、単発に設定した小銃を古橋に向けて発砲した。弾丸が直撃すると思われたその瞬間、古橋は物凄い勢いで跳躍し、頭上の街灯に猿のように片手で捕まっていた。

さらに古橋は、片手でぶら下がったままの状態で、俺達にMP7の銃口を向けた。俺達が慌てて四方に分散した直後、今までいた場所が大量の銃弾で掘り起こされた。

MP7短機関銃は片手での射撃が可能な上、40発装填の弾倉を装着しているので、連射出来る時間が長い。幸いな事に、すぐに別の自動車に隠れた俺達に弾丸が当たることはなかった。

街灯にぶら下がったままの古橋は、MP7の弾丸を撃ちつくすと、街灯から下りて闇に消えていった。

「逃げたのかな？」

「いや、また来る」

不安そうにミニミを構えた中沢が呟いたが、俺は即座に答えた。

俺は赤外線暗視装置で、古橋が街灯から降りた直後、別の弾倉をMP7に装填するのを確認していた。弾倉の交換まで出来るようになる

つてるとは、かなりダークシーカーズの知識は向上しているようだった。

「皆、俺達のやり取りは聞いていたな？残念な事に、古橋はダークシーカーズになってしまった。もう、あいつは俺達が知ってる古橋じゃない」

俺は無線のマイクにそう言い、続けた。

「おそらく古橋はまた戻ってくる。仲間を連れてな」

そう、なぜダークシーカーズが古橋を放置していたのか、俺にはよくやくわかった。

ダークシーカーズは古橋を感染させた上、俺達がいる場所で発症するように仕込んだ。古橋に俺達を襲撃させ、おそらく感染を広げさせようとしたのか、あるいは不意を突かせて全滅させ、その後でゆつくり俺達を食べようとしたのか。

とにかく連中の目論みは失敗した。今度は総力を掛けて俺達に攻撃を仕掛けてくるに違いない。何せ向こうは夜目が利くし、今のドンパチで俺達の居場所は簡単にばれているだろう。

「今から逃げても無駄だ。だから、俺達はここでダークシーカーズを迎撃する。皆、絶対に咬まれるなよ。咬まれた奴は即射殺だ」

その一言で何人かが息を飲む気配が伝わったが、続ける。

「子供達はバスの中で大人しくしてる。大人や戦える者は、防衛線を築いて襲撃に備えろ。以上だ」

俺はそう言い、通信を切った。すぐに、装甲車から兵士達が降りて

配置につき、多賀達が乗ってきた乗用車からは大人たちが降りた。装甲車の屋根の重機関銃にも兵士が取り付く。

「軽機関銃はここに設置しろ！堂々、狙撃しやすい位置につけ！」

負傷した牧の代わりに、中沢が副隊長として皆に指示を飛ばす。装甲車からは機関銃や弾薬の入った箱が下ろされ、代わりに足を撃たれた牧が衛生兵の赤井と共に装甲車に収納される。指示を出した後、中沢が小さく呟いた。

「やるしか・・・、ないのか」

それは、今まで仲間だった古橋と戦う事を言ってるのか、それとも夜間、それもダークシーカーズの支配するエリアで迎撃しなければならぬことを言ってるのかと俺は訊こうとしたが、やめた。どちらにしても、俺が言う台詞は1つしかない。

「ああ。そうだ。容赦なくやれよ」

俺が言うと、中沢は肩を竦めて「了解」と言い、自分の持ち場についた。

今いる場所は、十字路の中心だ。四方から攻撃を受けることになる。だが、朝まで耐えるか敵を全滅させればこっちの勝ちだ。

まさか、太陽の下でも動けるようにはなっていないよな？

俺がそんな事を考えた時、周囲を見渡せるバスの上に陣取った堂々が叫んだ。

「東の方向に熱源多数！！ダークシーカーズだ！！」

その言葉と共に、早速堂々が狙撃を始める。俺達からはダークシーカーズが見えないので、それまで待機しているしかない。全ての銃口が一斉に東を向く。俺も装甲車から降ろしたM240軽機関銃を構え、ダークシーカーズ達が視界に入るのを待った。

第96話 side 龍(後書き)

御意見、御感想、御質問、アイディア等お待ちしております。

第97話 side 優

古橋さんが感染した。

その衝撃のニュースと共に、今度はダークシーカーズがこちらに向かってくると言い、戦える者は車から降りるように命令した。ボクは高校生なので、銃を持って軍司と一緒にバスを降りた。

とりあえずボクと軍司は、やるべきことを確認するために東さんの許へと走った。東さんは大型の軽機関銃を片手に携え、ランボーのように身体に弾薬の帯を巻きつけて皆に指示を出していた。

ボク達は東さんに必要な事を訊いた。

「何すればいいんですか？」

「そうだな、お前達は……」

東さんはそう言うと、ボク達の装備をしばらく見ていた。そして、

「軍司は俺の援護。優は俺の軽機関銃の給弾手をやれ。いいな？」

ボクと軍司は頷くと、東さんについて歩き出した。

東さんはしばらく歩くと、放置されていたパトカーの前で立ち止まった。パトカーの鼻先には大きなコンクリートブロックが置かれ、その先の道には放置車が延々と続いている。無線では、この方向からダークシーカーズが来ると言っていた。

既にバスの上には堂々さんが陣取り、高所である事を活用して狙撃を始めていた。だが堂々さん1人で倒せるダークシーカーズの数は高が知れている。

「東さん」

「何だ？」

「逃げた方が早くないですか？」

ボクの疑問を訊いた東さんは、溜息をついて言った。

「逃げたつて、あつという間にダークシーカーズに追いつかれて終わりだ。窓に金網と鉄板溶接しただけのバスじゃ、それを引き剥がされておしまいだ」

「じゃ、逃げない方がいいですね」

「ああ、だからここで迎撃する」

そう言つて東さんは軽機関銃の2脚を展開すると、その2脚をパトカーのボンネットの上に乗せた。どうやらここで射撃するらしい。東さんは中腰になり、身体に巻いていた弾薬の帯を外して地面に置いた。給弾手であるボクは、地面に置かれた機銃弾の帯の片方を取つた。

給弾手は、射撃手が連続した射撃を継続できるよう、弾薬を次々補給し、場合によっては銃身の交換も行う人員だ。射程が短い短機関銃を持っていたボクは、よっぽどの接近戦でなければ使えないと判断されたのだろう。

ある程度射程があるカービン銃を持つ軍司は、さっさと東さんの脇に立ち、前方に銃口を向けている。

そして………。

ボクの後方で照明弾が打ち上げられ、闇夜を明るく照らした。前方に目を凝らしたボクは、思わず息を飲んだ。

放置車の屋根の上を何体ものダークシーカーズが跳ね、こちらに向かってきていた。すぐさま、ボクの隣の東さんが叫んだ。

「前方に敵を確認！撃ちまくれ！！」

その声で、一斉に射撃が始まった。装甲車の屋根に設置された重機関銃が火を噴き、前方で着弾の火花が次々弾ける。

「やつらすばしっこいぞ！当たりません！！」

軽装甲機動車の重機関銃に取り付いていた山寺さんが叫んだ。

道には自動車があちこちに放置され、それが遮蔽物となって中々ダークシーカーズに当たらないようだった。

東さんもM240軽機関銃に取り付けられた低倍率スコープを覗きつつ、叫ぶ。

「んなこたあどうでもいい！！やつらを接近させるな！！」

そう言い、東さんは発砲した。

右手はグリップ、左手はストックに添え、東さんは引き金を引く。

銃口の中から銃火が迸り、同時に排莖口からいくつもの空莖と分離したメタルリンクが排出される。

東さんは短い間隔で軽機関銃を連射した。それと同時に弾薬帯も次々軽機関銃に吸い込まれて短くなり、数秒後にはあつというまに無くなっていた。

「リロード！！」

東さんが叫んだので、予備の弾薬帯を持っていたボクは慌てて頭を上げた。東さんが軽機関銃の給弾カバーを開いたので、ボクは持っていた弾薬帯を給弾トレイを載せた。給弾カバーを閉じた東さんは、再び射撃を再開した。

「左側弾幕薄いよ、何やってんの？」

ボク達の脇に立ち、M4カービンを撃っていた軍司が言った。続いて、

「アパム、弾！弾持って来い！アパム、アーパーム！！」

と言う声がどこから聞こえた。ネタだろうか？

そのやり取りを聞いた東さんは、微妙に口元を歪めると、「アホだな」と言った。

ダークシーカーズは十数体が倒れたが、車が障害物になって未だにこちらに向かってきている。ただし、その数は数十体程度だけど。既に3回以上弾薬帯を取り替えたボクは、ダークシーカーズが20メートル程の距離に迫ってきているのに気づいて戦慄した。マズイ、これはマズイ。

とその時、ボク達から離れた場所でライフル銃を撃っていた多賀さんが、上を見て叫んだ。

「ビルの壁にダークシーカーズがいる！かなり近いよ！！」

その言葉ですぐさま照明弾が打ち上げられ、ビルの壁面を明るく照らした。

ボク達が展開している道の隣のビルの壁面には、沢山のダークシーカーズが壁を這っていた。数十体に及ぶダークシーカーズは、まるでスパイダーマンのようにビルを這い下りていた。

「ビルに敵だ！撃て！撃てー！！」

中沢さんが叫び、持っていたMINIMI軽機関銃をビルに向けた。あちこちからビルに向かって銃火が立ち昇り、被弾したダークシーカーズが地面に落ちる。

だが皆の注意が壁面に向かっていている間に、前方から接近していたダークシーカーズはかなり近い距離まで接近していた。ビルから下りてくるダークシーカーズも、次々地面に近づいている。

これはヤバイ。火力が分散されて、このままでは車列に接近される！

「東さん、どうすればいいですか!？」

東さんはボクの問いを聞くと、少し何かを考える素振りを見せて叫んだ。

「機関銃担当以外は、ビルの敵を排除しろ! 急げ、接近されるぞ!」

東さんはそう叫ぶと、立ち上がってM240軽機関銃を連射した。10キロ以上あり、反動もキツイM240を連射する東さんは、はつきり言って凄い。

だがそんな事を考えたのも束の間、ボクは傍らに立て掛けておいたMP-5F短機関銃を取り上げると、ボルトを引いて初弾を薬室に装填した。

そして単発に設定したMP-5のドットサイトを覗くと、ビルを下りてくるダークシーカーズに狙いを定め、撃った。ドットサイトの向こうで、ダークシーカーズが地上に落下していくのが見える。

現状での戦力は物凄く少ない。古橋さんが感染し、牧さんが負傷し、衛生兵である赤井さんは牧さんの手当てに付きっ切りだ。なので軍人は6人しか戦えず、八方村で合流した多賀さん率いる大人のグル

ープは4人。それに美里さんも足すと、大人の戦力は11人。一方、中高生で戦えるのは、ボクと軍司を合わせて8名ほど。しかも子供なので練度が低く、当てに出来るとは言い難い（自分で言うのも何だけど）。

そして案の定、戦力が分散されてしまう。弾幕を張る機関銃を扱っているのは6人の軍人で、ビルから来るダークシーカーズを迎え撃っているのは殆どが民間人だ。

前方から来るダークシーカーズは順調に撃退できていたが、民間人グループが迎え撃つビルのダークシーカーズは次々地面に近づいている。

そして、最初の一体が無傷で地面に降り立った。

悲鳴が上がり、皆の銃撃がそのダークシーカーに集中する。最初の一体は穴だらけになって倒れたが、その隙に次々他のダークシーカーズが地面に降り立った。

数で勝るダークシーカーズは、あっという間に皆を襲い始めた。ボクもMP-5をフルオートに切り替え、目の前に立ちはだかったダークシーカーを撃った。

そのダークシーカーは腹に9mm弾を食らい、地面をのた打ち回った。その隙にボクは頭部を撃ち、ダークシーカーの息の根を止める。隣の軍司はM4カービンを単発で撃ちつつ、じりじりと後ずさっていた。さすがの軍司でも、この距離では恐怖が勝っているのだろうか。

幸い人間側に咬まれた者はまだいなかったが、皆は次々と後退し、バスの周囲に集まっていた。この距離では取り回しが悪いと思ったのか、東さんはM240を捨てて09式小銃を持つと、近づいてくるダークシーカーズに向けてフルオートで撃っていた。

すぐさま小銃が弾切れになり、東さんが再装填している間、ボクがMP-5を撃って近づいてくるダークシーズを牽制する。

だが、それでも近づいてくる。

ふと気づくと、ボクと東さん、そして軍司はダークシーカーズに包囲されていた。他の皆も、バスを背にするようにして取り囲まれている。バスの中からは、子供達が泣き叫ぶ声が聞こえた。

「……これまでか」

歯切りししっつ、東さんが呟いた。

そして、ボク達に向けてダークシーカーが一体飛び掛ってきた。ボク達の銃口がそのダークシーカーに向いた途端、

ボク達に向けて強烈な光が照射され、飛び掛ってきていたダークシーカーの頭が、銃声と共に「破裂」した。

第97話 side 優（後書き）

御意見、御感想、御質問、アイディア等お待ちしております。

第98話 side 籠

俺達に飛び掛ってきたダークシーカーの頭が弾けた途端、俺はそれが狙撃によるものだとかわかった。

同時に振り返り、俺達を照らしている光源を見た。強い光に一瞬視界に黒い染みが広がったが、目を細めて光源を見た俺は、その正体に驚いた。

光源は車のヘッドライトだった。しかし、普通の車ではない。

そこにあっただのは、軍正式採用の12式装輪装甲車だった。8輪で動く装甲車の巨体の後ろには、同じく軍が採用する軽装甲機動車が2、3両停まっている。

なぜ？どうしてここに装甲車が？俺がその疑問を抱く間もなく、

「その人達、伏せなさい！！」

と、装甲車から拡声器で女性の声が響いた。それと同時に、12式装甲車の屋根に設置された遠隔操作式の重機関銃が、俺達に銃口を向けた。

その瞬間、俺の隣にいる軍司は優の肩を抱き寄せ、地面に倒れこんだ。俺も同時に地面に倒れ込み、直後、弾丸の嵐が俺達の上を通り過ぎて行った。

弾丸の嵐に襲われたダークシーカーズは、なすすべもなく次々と倒れていく。12式装甲車の重機関銃や、軽装甲機動車に据え付けられたM134ミニガンが掃射を開始したのだ。

特にミニガンの連射力が、密集したダークシーカーズを掃射するの

に役立つていた。毎分3000発の連射力を誇るミニガンの前に、ダークシーカーズは蜘蛛の子を散らすように逃げ出し始めた。俺達を取り囲んでいたダークシーカーズが死んだか逃げたのを確認すると、俺は立ち上がった。装甲車を見ると、車内から兵士達が外へと展開し、手にした小銃でダークシーカーズを掃討している。

突然現れた兵士達に、俺達はあっけにとられてその光景を見ていた。兵士達はダークシーカーズが逃げていくのを見届けると、今度は俺達に近づいてきた。

迷彩服を着て、防弾チョッキとヘルメットの完全装備の兵士達は、俺と優達を取り囲むと、手にした小銃を腰だめに構えた。銃を向けられた俺は、とっさに銃を兵士達に向けた。

彼らが統制が取れている兵士ならまだいい。だが八方村の事例もあるし、助けられただけで信用する訳にはいかなかった。

彼らは俺が兵士だと知り、少し驚いているようだった。そして俺達を取り囲む兵士の中から1人が歩み出ると、俺達に向けて言った。

「武器をこちらに渡してください。念のためです」

同じく兵士達に囲まれていた中沢は、俺に通信してきた。

『どうする東、大人しく従うか？』

「・・・この数に抵抗するのは自殺行為だな」

俺は兵士達を見てそう言った。

兵士達は見える限りで15人程いる。加えて装甲車にも何人か残っているだろうから、全部あわせて20人は越えるだろう。

第一、抵抗する素振りを見せたら、12式の装甲車の重機関銃か、軽装甲機動車が火を噴き、俺達をあつという間に粉々にしてくれるに違いない。

俺は兵士達に向けていた09式小銃の銃口を下ろすと、安全装置を掛けて地面に置いた。レッグホルスターからP226拳銃を抜くと、同じように地面に置く。

俺の行動を見て、他の皆も素直に武器を置き始めた。軽装甲機動車の銃座についていた山寺、海原、白井が車外に降り、バスの屋上に陣取っていた堂々が両手を挙げて地面に降りた。

俺の隣にいた軍司は、最後まで優を庇うようにM4カービンを構えていたが、俺が肩を叩くと不承不承といった顔で銃を降ろした。

その後俺達は感染していないか検査を受け、全員が感染していない事がわかった。俺がその事実にあ堵すると、一人の兵士が歩み出て来て言った。襟章を見ると、俺より階級が下の1等陸士である事がわかった。

「所属と階級、氏名をお願いします」

「防衛軍海兵隊、第8師団強襲偵察隊A分隊所属、東 龍海兵2曹だ」

「了解しました」

1等陸士は脇に挟んでいたバインダーの用紙に何やら書き込むと、続いて優や軍司の名前も聞き始めた。どうやらここにいる全員の氏名を確認しているらしい。

その間に俺は銃器を返却された。とりあえず暇だったので、俺は手近な兵士を呼ぶと、「最上位の者に会いたい」と申し出た。

最上位者とコンタクトが取れるかどうか、その兵士が無線で確認している間、俺は改めて疑問点を整理してみた。

何故陸軍がこんな所に？とりあえず指揮系統の乱れはないし、装備もよく手入れされているようなので、勝手に部隊を離脱した訳じゃ

ないだろう。もしかして本州放棄時に取り残された部隊か？

俺がそんな事を考えていると、最上位者と会える許可がとれたらし
く、俺は兵士に呼ばれてついていった。

兵士について行くと、装甲車両群の間に停車している高機動車まで
案内された。大型のジープといった形の高機動車の助手席ドアが開
き、誰かが降りてきたので、俺は反射的に敬礼した。その男は医者
か研究者のようで、兵士達とは違って白衣を着ていた。

続いて助けてもらった礼を言おうと口を開いた瞬間、俺はその人物
を見て絶句した。

まさか、こいつが？なんでこんな所に？

そんな言葉が頭の中を駆け巡っていると、高機動車から降りてきた
男は俺を見て、

「やあ東、久しぶりだね」

と言って笑った。ただし、笑っているのは表面だけで、その瞳には
何の感情もこもっていなかった。

俺はこの男と面識があった。いや、そんな物ではなく、お互いによ
く知り合っている間柄と言ってもいいだろう。

「福田・・・・・・・・お前、何でここに・・・・・・・・」

俺がその男
福田ふくだ 俊二しゅんじの名前を呼ぶと、福田はニヤリと笑っ
た。

第98話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

次回は連載100回記念ということで、久々に番外編を投稿する予定です。

第99話 番外編 side others (前書き)

今回の番外編は、「28週後・・・」風味を加えてみました。楽しんでいただければ幸いです。

第99話 番外編 side others

番外編 とある狙撃手の1日

side 小野田^{おのだ} 勇氣^{ゆづき} 三等陸曹

2018年 5月18日 08:00 渋谷駅付近 雑居ビル屋上

『キャツスルより各隊、現状知らせ』

『こちらアーチャー1-1、異常なし』

『セイバー1-1、同じく異常なし』

『ランサー1-1、上に同じだ』

そんな内容の通信で、今となつては当たり前となつた定時連絡をイヤホンで聞きつつ、俺 小野田 勇氣 はビルの屋上の手すりにもたれかかった。そして構えていた10式狙撃銃のスコープを覗き込み、ビルの下、渋谷駅の八チ公前広場を眺めてみる。

そこには、「非日常」の光景が広がっていた。

渋谷駅前に位置する広場は、迷彩色やオリーブドラブに塗装された軍用車両が何台も停まっていた。

広場の一角には暗号名「キャツスル」を冠する部隊本部のテントが設営され、迷彩服を着た兵士達が忙しそうに出入りしていた。

広場の反対側には12式装輪装甲車や指揮通信車、軽装甲機動車と

いった「ゴツい」車両が何台も並び、その周囲を迷彩服に防弾チョッキ、ヘルメットを装着し、手には小銃や機関銃を携えた兵士達が、周囲に視線を走らせていた。

彼らの隣には、濃紺の出動服に身を包み、銀色の大盾を携えた警視庁の機動隊員が、兵士に負けじと殺気のこもった視線で周囲を見回している。

そして、その光景を遠巻きに眺める、会社員や学生服を着た若者達。彼らはそこにある「非日常」に興味深そうに視線を向けつつも、銃を携えた兵士と目が合うと、即座に目を伏せて早歩きで渋谷駅に入っていく。

全て、2週間前から繰り広げられている、今となっては見慣れた光景だった。

事の発端は、東京都沿岸に位置する埋め立てされて出来た土地、マリシティで危険なウイルスの感染爆発パンデミックが起こった事だった。

人間を凶暴化させ、さらに紫外線に極端に弱い身体にさせてしまうそのウイルスはクリピン・ウイルスと呼ばれ、本来はガンの治療薬として作られた物だった。

・・・が、それは凶悪なウイルスに変異し、ワクチンも治療薬も無いクリピン・ウイルスが蔓延したマリシティは「滅菌作戦」が行われ、空軍のナパーム弾や気化爆弾、海軍の巡航ミサイルによって焦土と化した。

そして、問題はここから始まった。

総理を筆頭に政府は「未だにウイルスの脅威は去っていない」として、軍に治安出動命令を出したのだ。

直ちに陸軍や海兵隊が治安出動し、全国で警戒に当たり始めた。

治安出動の目的は2つあった。

1つはクリピン・ウイルスが蔓延した際、感染者を掃討し、民間人を避難させる。

もう1つは、暴動への備えだ。

ウイルス感染者は夜間しか活動できないため、警戒するのは夜間だけでいい。だが暴動は昼夜問わず発生する恐れがあるので、こうして俺達も朝から配置に就いている訳だ。

第1師団所属、第3普通科中隊約200名は、渋谷駅に派遣された。ここに俺も含まれている。

俺のポジションは狙撃兵だ。ビルの屋上など見晴らしの良い場所に陣取り、感染者が現れた場合は狙撃によって真っ先に排除するのが任務だ。

俺の他にも約20人、狙撃任務に就く兵士がいて、彼らも俺と同じくビルの屋上やデパートの空き部屋等に配置についている。ちなみに暗号名はアーチャーだ。

誰か本部にオタクがいたらしく、何故か部隊の暗号名には某聖杯戦争に登場するサーヴァントの名前がつけられている。一体考えたの誰だよ。

09:00

相変わらず俺は雑居ビルの屋上に陣取り、渋谷駅周辺を狙撃銃のスコープで覗いて監視していた。異変はいつも通り特にならない。通勤や登校の時間は終わったらしく、渋谷駅周辺にはチャラチャラしているような男、メイクが凄いギャル、学校をサボったらしい制服の女子の集団がうるついていた。

『アーチャー2-3よりアーチャー2-1、八千公の銅像前を見
みる』

唐突に、同じ狙撃班に所属するアーチャー2-3
岡田敦三等 おかだあつし
陸曹が、無線で通信してきた。ちなみに俺と岡田は同期入隊で、結
構仲がいい。

「2-1より2-3、一体なんだ？」
『いいから見てみる。いい物が拝めるぜ』

何だよ・・・？と呟きつつ、俺は狙撃銃を八千公前に向け、スコ
プで覗き込んだ。見えたのは……………

巨乳の女性だった。

「……………2-1より2-3、もしかしていい物つてのは、巨乳のね
ーちゃんか？」

『おお！お前にも見えたか！！たまには目の保養が必要だ』
「黙れ。まずお前を狙撃するぞ」

そんなやり取りを無線で聞いていたのか、他の狙撃兵達も通信に割
り込んできた。

『うわっ！すげー乳！！D、いやE以上はあるな』
『あーありがたやありがたや。誰かカメラ持ってないか？スコープ
に密着させて写真撮る』

『おい、3時方向、300メートル先に露出のすごい女子がいるぞ』
『俺的には、今渋谷駅から出てきた制服の眼鏡っ子の方が好みだな』

そのやりとりを聞いた俺は「黙れヘンタイどもめ」と言ってやった。しかし、

『小野田、あんな巨乳に興味を持たないなんて、お前はホモか？』

『うわっ！小野田3曹ってガチホモなんですか！？』

『うわー、それはないわー』

「やかましいお前ら！俺は普通の男だ！！」

そんなふざけたやりとりは、中隊本部の女性通信士に一喝されるまで、延々と続いた。

18:00

日没。

休憩時間に入ったので、屋上の柵に身体を預けていると、無線が突然鳴った。

『キャツスルより全部隊、キャツスルより全部隊、コードイエローが発令された！繰り返し、コードイエローだ！！』

コードイエロー。それは、クルピン・ウィルスの感染者が現れたことを示す符丁だった。

俺達が反応する前に、本部の通信士が怒鳴るのに近い大声で、矢継ぎ早に情報を伝えてくる。

『感染者が発生した地域は関東方面……え！？関西方面からも！？』

『感染者が東京都内で多数の民間人を殺傷しているとの情報あり！警察官に多数の死傷者が出ている！！』

『上空の偵察ヘリによると、感染者の集団が渋谷駅に向かっているとの情報が入っています！！』

最後の言葉は、もはや悲鳴に近かった。俺は即座に立ち上がり、10式小銃のボルトを引き、初弾を薬室に装填した。今の情報が確かだとすると、すぐに感染者を射殺する命令が下されるだろう。

思ったとおり、すぐに《コード・オレンジ》が本部から発令された。コード・オレンジは、感染者の射殺指令だ。

俺は渋谷駅が見渡せる場所まで走ると、柵に狙撃銃の銃身を乗せた。スコープで渋谷駅の方を見ると、電車は全て止まり、サラリーマンや学生が戸惑ったように周囲を見回していた。

そして軍の装甲車からは銃を構えた兵士達が飛び出し、警察の輸送車からは機動隊員が大盾を持って降りる。

近くの交番から駆けつけてきたらしいパトカーから警察官が降り、拡声器を持って民間人を誘導し始めた。最初は戸惑っていたサラリーマンや学生たちは、ただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、警官の指示に従って駅の中に駆け込み始めた。

避難計画書によると、避難民は渋谷駅から電車で遠くまで避難させる手筈になっている。だから、感染者が押し寄せてくる前に一人でも多くの民間人を脱出させ、そして感染者の動きを止める事が俺たちの任務だった。

通りを挟んだ隣のビルの屋上には、無線を聞いたらしい岡田が、狙撃銃片手に飛び出してきた。他の狙撃兵達も配置に就き、いつでも狙撃出来る態勢を整える。

遠くの方からは、自動車の急ブレーキの音や何かがぶつかる音、そして赤い炎が立ち上り始めた。警察官が発砲しているのか、何かが弾ける音も聞こえてくる。

『こちらアーチャー4-1、民間人を追っている感染者を発見！発砲許可を！！』

『狙撃班に通達、発砲許可が降りた。繰り返す、発砲許可が降りた！感染者に限ってのみ射殺を許可する！！』

『地上班は配置に就け！！繰り返す、地上班は所定の持ち場に就け！！』

本部からの通信が届き、俺は即座に安全装置を解除した。いつでも撃てるようになった10式狙撃銃を構え、俺は通りを見下ろした。ビルの合間の道を、銃を構えた4〜6人の集団を作った兵士達が駆けて行く。兵士達はそれぞれ持ち場に就くと、いつでも撃てる態勢を整えた。

俺の位置からは感染者の姿は見えないが、すぐにここに押し寄せてくるだろう。既に通りを歩いていた若者達は駅に向かって逃げ出し、通りに歩いている人間はいなかった。

やがて銃声が鳴り響き始め、それと同時に、

『感染者を射殺！3人の民間人を確認した！』

『2人の民間人を確認！2体の感染者に追われている！！』

『同じく2人の民間人を確認！！渋谷駅に向かっているが、感染者に追われている！注意して発砲しろ！！』

その通信を聞き、俺は渋谷駅とは反対方向の通りを見下ろした。数百メートル先に何人かの人影が見えたので、俺はスコープを覗いた。スコープに映ったのは、2人の少女と、それを追う1組の男女だった。必死に走る少女達に異常は見られないが、それを追っている男は、口から血を流し、腕を怪我しているようだった。

間違いない。俺が参考映像で見た、感染者そのものだった。

「アーチャー2-1、感染者を確認。狙撃する」

俺はそうマイクに言うと、狙撃銃を構えた。

狙撃の際に気を付けるのは、距離、風、高度、気温、湿度e t c :
だった。特に狙撃する距離によって、それらの要因が弾道に与える
影響も大きい。

だがここから感染者までの距離は300メートルちょっとだった。
ビル風が心配だが、この距離なら外すことはないだろう。

俺はスコープを覗き、その十字線の中心に感染者の男の頭を収めた。
感染者は弾丸数発食らっても生きている場合があるらしいので、ヘ
ッドショットを心掛けないといけない。

俺は引き金を引いた。一瞬もしない内に、スコープの中で感染者の
男の頭が弾け飛ぶ。

続いて俺は、感染者の女に照準を定めた。再び引き金を引き、女の
感染者が地面に倒れた。

「ナイスショット！2-1！」

俺の狙撃を見ていた岡田が、口笛と共に言った。岡田も狙撃を始め
ているようだ。

俺が救出した少女達は、駅の広場で待ち構えていた機動隊員達によ
って保護された。すぐに彼女らは、駅舎に駆け込んで行った。

「3-1より全部隊、通りに避難民と感染者を確認！物凄い集団が
押し寄せてる！！」

イヤホンから3班のリーダーの声が聞こえ、俺は即座に視線を通り
の奥の方へ向け、スコープを覗いた。

通りの奥からは、必死に走る民間人達と、それを猛スピードで追う感染者の集団が押し寄せていた。どちらもわらわらと現れ、数え切れない程の数が迫ってきている。

幸運な事に、感染初期のクルピン・ウイルス患者の運動能力は、普通の人間と同じ事だった。足の速い人間なら走って逃げ切れるが、足の遅い人間は、感染者に追いつかれていた。

『子供が危ない！』

その言葉を聞いた俺は、10歳くらいの少年に飛びかかるうとしていた女の感染者の姿をスコープ越しに確認した。今すぐ撃たなければ、少年は感染者の餌食となってしまう。

「シヨタコンめ、消えろ」

俺はそう呟き、引き金を引く。女の感染者の頭に穴が開き、地面に倒れる。その隙に少年は、感染者の集団と距離を取ることが出来た。俺はすぐさま別の目標を求め、銃口を動かした。スコープに映った感染者を3体ばかり狙撃した時、

『民間人が襲われてるぞ！！』

とマイクから聞こえた。すぐさま銃口を動かし、俺は舌打ちした。一人の少女が、数人の感染者に捕まっていた。少女は地面に押し倒され、感染者がそこへ群がる。

すぐさま俺と岡田がその感染者達を射殺したが、感染者達の死体の間から見えた少女の体は、酷い事になっていた。まず、顔の表皮がなくなり、筋肉や骨がむき出しになっていた。腕や足の肉はあちこちが咬み千切られ、左腕は胴体と離れていた。

当然、少女が起き上がることは、無かった。

『クソツタレ!!』

岡田が悔しそうに叫び、しかし時間を無駄にする気はないのか、即座に狙撃を再開した。

その間にも、駅には次々と感染者から逃げ切った民間人が逃げ込んでいた。既に100名以上は収容されただろうか。

だが、民間人の数が増えていくに従い、感染者の数もどんどん増えていった。中には通りで感染者に咬まれ、自らも感染者と化してしまふ民間人も多くいる。

当然、発砲回数も増えたが、20人ばかりの狙撃班では数が圧倒的に足りなかった。一人を狙撃する間に二人の感染者が防衛戦を通り抜け、駅に向けて走っていた。

兵士が持つ突撃銃や機関銃は、誤射の恐れがあるという事で発砲が許可されていなかった。なので、駅前に到達した感染者は、機動隊が大盾でどつき、その間に警官隊が拳銃で射殺した。

駅前に到達した民間人に追いつがっていた感染者を、機動隊員が大盾を構えて突っ込み、強引に引き剥がす。その間に民間人を他の隊員が引き寄せ、大盾でボコボコにされていた感染者を、警官が射殺する。

だが、やはり数が足りない。

数分後。

俺は5個目の弾倉を交換し、再びスコープを覗いた。弾倉1個あたり20発の7.62?弾が装填されているので、既に100発近く撃った計算になる。

今や通りでは、民間人と感染者が入り乱れ、あちこちで地獄絵図が繰り広げられていた。どうにか駅への感染者の到達は許していないが、すでに民間人の犠牲は計り知れない程になっている。

そして、もはや民間人と感染者の区別はつけられなくなっていた。それほどまでに、民間人と感染者の距離は詰まっていたのだ。このままでは狙撃もままならない。誤射の恐れが大きくなり、発砲音は次第に減っていった。

『こちら4-2、民間人と感染者の距離が近すぎる！発砲出来ない』

『3-3、発砲を中止する』

『1-2、誤射の恐れあり。…チクシヨウ、撃てない』

そんな内容の無線が、何度も飛び交っていた。それに従い、狙撃を中止する兵士も増えて行く。

何とか俺は、婦人を追っていた感染者を射殺する事に成功した。だが次の瞬間、俺が援護していた婦人は別の感染者に喰い殺された。

俺は何度目かの舌打ちをすると、別の目標を探した。だが、あちこちで感染者と民間人が入り乱れ、発砲出来ない。

再び舌打ちした俺の耳に、本部からの通信が入って来た。

『…キャツスルより全部隊に通達。コード・レッドを発令する。繰り返す、コード・レッドを発令する。全ての装備の使用を許可する』

コード・レッド。それは、無差別射殺の命令だった。

「…アーチャー1-2よりキャツスル。もう一度言ってくれ」

誰かが、驚いたような口調で言っていた。

『全部隊へ、コード・レッドが発令された。民間人、感染者を問わず、射殺せよ』

中隊本部の女性通信士が、無感情な口調で続けた。

『このままでは感染者が渋谷駅に到達する。そうなる前に、すべての感染者を無力化させる。これは、首相直々の命令である』

首相が下した命令。それは、この非常事態が渋谷だけでなく、全国で発生している事を意味していた。

誰もが無言になり、やがて『…了解』といういくつもの言葉がイヤホンから聞こえた。

既に駅前の広場の装甲車の銃座には、兵士達が取りついていて、すぐさま、12式装輪装甲車の重機関銃や軽装甲機動車のミニガン、そして広場に設けられていた軽機関銃座が火を噴いた。

その瞬間、駅前広場に辿り着いていた民間人、感染者を問わず、動く物体全てに銃弾が浴びせかけられた。重機関銃弾が誰かの体を真っ二つに引き裂き、ミニガンは接近してくる人影全てに銃弾を浴びせ、ミンチ肉に変えていた。

駅に到達していた民間人は、その瞬間何が起こったのか分からなかっただろう。必死の思いで感染者から逃れ、ようやく生へのチケットが手に入ると思われた瞬間、彼らを守るはずの軍から一斉射撃を受けたのだから。

何が起きたのか分からない、といった表情のまま、重機関銃弾を受

けて体を真つ二つにされた少年。その光景を見て、引き返そうとした少女は、兵士の持つ突撃銃の銃撃を受けて倒れる。

一斉射撃は、民間人、感染者を問わず、死体を駅前には積み重ねさせた。銃撃を恐れて引き返そうとする集団と、何が起きたのか知らず、駅に向けて走り続ける集団。その2つの集団がぶつかり、押し合いへしあいしている間に、兵士の銃撃を受け、感染者に喰われる。

「逃げろー！撃たれるぞ！！」

「こつち来るな！殺される！！」

「何で…、何で私達が撃たれなきゃならないのよ！？」

そんな声が、通りから聞こえた。

隣のビルを見ると、岡田は悲痛な表情で狙撃銃を構え、撃っていた。俺は大きく息を吸い、思い切ってスコープを覗いた。もはや感染者と民間人の区別が出来ない光景を見た俺は、瞼を閉じ、そして叫んだ。

「……クソ！！」

そして俺は再び狙撃銃を構え、撃った。

スコープに映った人影を、無差別に撃つ。完全に日が沈んだ状態では、口から血を流している、どこか咬まれている、等という身体的特徴で見分ける事は不可能だった。

子供らしき人影に十字線の中心を合わせ、引き金を引く。倒れたその子供の顔が街灯の光にさらされ、俺は一瞬手が止まった。

その子供は、俺が撃った場所以外、どこも怪我していないようだった。顔もいたって普通。

つまり、俺は咬まれていない子供を撃ち殺してしまったのだ。

俺の頭が真っ白になった瞬間、無線から悲鳴が聞こえた。

『クソッ、感染者がビル内に侵入した！このままじゃやられる！！』

『感染者との距離が近い！接近を許すな！！』

『キャッスルより各隊、背後に注意せよ。感染者に接近されるな』

慌ただしく無線が飛び交い、そして、

『こちら2・3！クソッ！！背後に感染者が！！誰か援護を！！』

その声で、俺は隣のビルを見て、そして驚愕した。

隣のビルの屋上で狙撃を行っていた岡田の前に感染者が10体程いた。ビル内に感染者が侵入し、気付かない間に岡田の背後に近付いていたのだろうか。

『来るんじゃないっ！！』

岡田はそう叫び、発砲した。岡田を取り囲んでいた感染者の一体が吹っ飛んだが、その瞬間、残りの感染者が岡田に向かって走った。

俺は隣のビルに狙撃銃を向け、岡田に近付きつつあった感染者を撃った。岡田の銃撃もあって、生き残っている感染者はたちまち4体にまでへったが、その距離は数メートルも離れていなかった。

弾倉の弾が尽きたらしく、岡田は狙撃銃を捨て、拳銃を抜き出して撃った。2体が倒れたが、生き残っていた2体が岡田に飛びかかった。

『クソ、来るな！！来る…ぎゃああああああ！！！！』

岡田の絶叫がイヤホンから流れた。

「岡田ア　　ッ！！！！」

俺はスコープを覗き、岡田の姿を確認した。

2体の感染者は、岡田の腹と首に食らいついていた。感染者の強靭な牙は防弾チョッキをたやすく引き裂き、その腹に牙を立てる。

『ぐあああああ！く・・・そ・・・！！！！』

「岡田ーッ！」

俺は、岡田に喰らいついていた感染者を撃った。2体の感染者は即死したが、岡田は次の瞬間、糸が切れた操り人形のように地面に崩れ落ちた。

見ると、首のあたりの肉が食いちぎられ、そこから血が噴水のように噴出していた。頸動脈をやられたらしい。

兵士達にはワクチンが打たれているが、負傷した際の怪我までは防いでくれない。

つまり、どうやっても、岡田の傷は致命傷だった。

『く・・・そ・・・。死にたく・・・な・・・』

岡田の通信はそこで途切れた。

その瞬間、俺の頭の中で何かが弾けた。

『・・・小隊長戦死！！俺が指揮を引き継ぐ！！』

『負傷者多数！！後退だ、後退しろ！！』

『撃て！撃ちまくれ！！奴らを近寄せな！！！！』

怒声が飛び交い、銃声の数は少なくなっていく。

『ぎゃああああああああ！！！！』
『・・・誰か、助けてくれ！！』

それと同時に、兵士達の悲鳴も次々増え、そして無線に応答する人数も少なくなる。

次の瞬間、発電所か変電所でもやられたのか、辺り一帯の街灯や電光掲示板、屋内の明かりが一斉に消えた。渋谷は、闇に包まれる。

「・・・・・・・・おおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

俺は、親友を失った事、そして仲間が現在進行形で次々死んでいる事、そして子供を撃ち殺したことに對し、絶叫した。

都会の空は、闇に包まれた事で、星がいつもより多く見えた。

地上で、壮絶な殺し合いが起きているのには似つかない、とても綺麗な星空だった。

第99話 番外編 side others (後書き)

御意見、御感想、アイデア等お待ちしております。

第100話 side 龍(前書き)

今回は世界情勢が少しだけ明らかになってきます。

あんぐりと口を開いたままの俺に、福田は薄笑いを浮かべつつ、

「それにしても随分会ってなかったよねー。同窓会以来？」

と、言った。

そう、俺と福田は高校の同級生だった。牧や美里も同じ初春高校の同じクラスに通っていたので、その点では彼らも福田と級友と言える。

そして俺、牧、福田は、高校では「3バカ」と呼ばれる程親密な関係だった。実際俺と福田はバカではないのだが（むしろその逆である）、それほどまでに俺達の仲は良かったのだ。

福田は天才だった。定期テストはいつも全教科満点などという驚異の記録を保持し続け（入学から卒業まで）、3年になって行われた全国模試は「何か暇だった」という理由で全教科の模試を受け、そして同じく全教科満点で全国一位の記録を保持し続けていた。

そんな超天才である福田は、卒業と同時に海外の大学へ進学した。東大すらラクラク合格できると言われていた福田には、海外の名門校は「ちようどいいレベル」だったらしい。

福田と俺の出会いの後々語るとして、俺は福田がここにいる理由がわからなかった。そもそも、今何をしているのか？なぜ軍人のグループを率いているのか？

「・・・お前、何でここにいる？」

俺は福田に対し、どうかその言葉を搾り出した。福田はへらへら笑いつつ、

「まあ、その事は後でゆっくり話そう。それよりもここにいるのは危ないから、ちょっと安全な所まで君のグループを誘導したいんだけど。このまま拠点に帰って感染者に追跡されるのもいやだし」

「安全な場所とは？」

「港さ。あそこなら岸壁によれば、背後は海だから襲われる心配も無いよ」

福田はそう言い、俺に皆を説得するように言った。確かに、未だに俺のグループの何人かは、突然現れた軍人達に対して警戒しているだろう。

実を言うと俺も少し警戒しているのだが、その事は言っていない。たとえ俺が不信感を口にしても、それでどうこうなるという話ではない。

俺は無線機の送信ボタンを押しつつ、

「あー、こちら東。たった今兵士のグループのリーダーから、ここは危険なので移動したい、という提案があった。皆はどうしたい？」

と言った。ややあって、移動する事を全員が承諾したという通信が中沢から入った。どの道、抵抗しても無駄という事を悟ったらしい。全員が移動することを承諾したので、外に展開していた陸軍の兵士達は、すぐさま乗ってきた装甲車や高機動車に戻り始めた。外にいた俺の仲間達も、未だに兵士達を信用出来ないような顔をしていた

が、大人しくバスや装甲車に戻った。
俺は福田から様々な話を聞くために高機動車に残り、そして10両以上にもなる車列は、南へ向けて走り始めた。

そして、俺は揺れる高機動車の中で、福田から有益な情報を得るべく話し始めた。

「まず、お前は何でここにいるんだ？何で兵士を率いている？」

俺が向かいの席に座る福田に訊くと、福田は再び笑みを浮かべて言った。

「僕がここにいる理由は、クリピン・ウイルスの治療薬とワクチンを作る為さ。兵士達は、僕を守る為に与えられた護衛、ってところかな」

「研究のためか？何でお前が？」

「だって、ウイルスのワクチン作ったの、僕だからね」

福田はさらりと、とても重大な情報を口にした。

コイツがワクチンを作っただと？確かに福田は大学を卒業した後科学者になったらしいが、なぜこんな若造がワクチンを作る機会があった？

俺の疑問を見透かしたように、福田は続けた。

「まあ作ったといっても、僕は補助的な役割だったけどね。ほら、アメリカ陸軍のロバート・ネビル中佐は知ってるだろ？初期のウイルスのワクチンを作った人」

「ああ……。確かニュースでも名前は聞いた事はあったな」

「僕はアメリカの大学に通っていた時、たまたまネビル中佐と知り合ったのさ。それから彼と僕の交流は続いて、クリピン・ウイルスのワクチンを作る時に、天才だった僕が中佐に召喚されたんだよ」

そこまで言うと、福田はへらへらと笑った。

確かに福田は天才だ。その才能を使う分なら、福田は優秀な助手になるだろう。

「一介の科学者に過ぎなかった僕は、ウイルスのワクチンを作った功績が認められて、軍のお偉いさん方からウイルスの治療薬も作るよう依頼されたんだ。そうして僕は研究を始めたけど、運悪く全国でウイルスが蔓延してしまった」

「本州から逃げ損ねたのか？」

「まあそれもあったんだけど、実際は研究の為って理由が大きいかな。本州なら被検体もいっぱいいるし」

今出てきた「被検体」という言葉について俺は訊こうとしたが

やめた。聞いても気持ちのいい話ではないだろう。

とりあえず俺は質問を続ける。

「何で兵士も感染するようになった？」

「それについては今も研究中だけど、まあざっくり言えば突然変異だね。詳しい事は研究所に着いてから話すよ。他に訊きたい事は？」

「今のところの世界情勢、日本の様子を教えてくれ」

俺達が初春市にいた時は、駐屯地の衛星無線機のアンテナが壊れていたのさ、世界情勢は断片的にしかわからなかったのだ。優先順位はそう高くは無いが、できれば知っておきたい。

「オーケー。じゃまず日本の状況から教えてあげよう。今のところ

は最悪の一言しか出てこないね。

突然変異したウイルスは、本州だけでなく四国、九州、北海道といった、今まで安全な場所だった地域まで汚染した。多分首相の放送を聞いて本州を脱出した避難民が、ウイルスを運んできたんだろう」「やはりか……。最悪だな」

「だね。初期のウイルスは、本州を物理的に封鎖することで安全地域での蔓延を防げた。本州に取り残された数千万の人間を犠牲にしてね。

それほどの犠牲を払ったけど、今度はその安全地帯でも感染爆発が起きた。・・・ああそうそう、コレは変異前のウイルスだよ」

「わかった。続けてくれ」

俺は聞かなければよかったと後悔しつつ、言った。

「まあその時は軍が感染拡大を食い止めたんだけどね。今度はヤバかった。

従来のワクチンが効かないから、真っ先に対処に当たった軍人達が多く感染した。彼らは武器を使って今度は民間人を襲い始め……」

そこで福田は「お手上げ」とでもいうように両手を挙げた。

「今のところ、陸軍と海兵隊の戦力は30パーセントまで下がってるね。空軍は50パーセント、洋上の活動で陸地と離れていた海軍は70パーセントかな。

民間人の死者は、ざっと数えただけで数千万単位だね。何とか無事な地域は北海道くらいだよ」

「マジか…、それはいつの情報だ？」

「最新のも1月初頭のだね。それ以降はこっちが呼び掛けてもなんの反応もない」

再び福田は手を挙げ、「今度は何がいい？」と訊いてきた。その後も情報を聞き続け、それらをまとめると、人類が絶滅の危機に瀕している事がよくわかった。

まず、元々治安が悪く衛生状態も悪かったアフリカ大陸はほぼ全滅。ダークシーカーズが跋扈する地域となってしまった。

14億人以上の人口を抱えていた中国はウイルスの封じ込めに失敗し（というより人口が多すぎたのだ）、億単位の死者と感染者を出した。今のところの健全な人間は1億いるかどうかで、それも人間同士の争いが勃発し、急激にその数も減っているようだ。

南米はアフリカと同様に壊滅状態。そしてそれらの難民が北米に押し寄せ、北米でも急激に感染が広がっている。今の所の合衆国の人口は、大体数千万といったところか。

朝鮮半島の北朝鮮、韓国は中国からの難民が押し寄せ、ほぼ壊滅。難民は海を渡って日本に来ようとしているが、海軍が次々難民の乗るボートを撃沈している。

被害が少ない地域は、日本のように島国か、流行初期に被害を抑えられた国だけだった。

日本は本州を物理的に封鎖するという荒療治で被害の拡大を抑えられたが、それが出来ない大陸の国々は難民の流入、感染者の移動といった要因で被害が拡大中だという。

「…そういえば、ウイルスはいつ変異したんだ？」

俺は肝心な事を訊いていなかった事を思い出し、福田に言った。俺らは1月初めに初春市を出発し、中旬には八方村にしばらく滞在していたせいで、いつ変異したのかわからなかったのだ。

「うーん、今年に入ってからかなあ。僕達の部隊の兵士が感染したのがそれくらいだったからね」

「やっぱり……。そっちにも被害が出てんの？」

「だね。もう20人以上がやられたよ」

福田はため息をわざとらしく吐き、そして続けた。

「僕達が君達を見つけられた理由を知りたいかい？」

「ああ…、頼む」

俺が言うと、福田は得意そうな表情に戻り、言った。

「僕達は今もUAV《無人偵察機》を運用していてね。何日かに一遍、夜間に飛ばしてるんだよ。今日は偶々その日で、こっちに多数の熱源を確認したから、僕の部下が救助に向かうよう進言してきただ。僕は反対だったんだけどね」

「『自分の利益にならない事はやらない』が、お前の主義だったもんな」

俺が言うと、福田はニヤリと笑い、続けた。こいつの性格は破綻しているのだが、それも追々話すとしてしよう。

「それで来てみたら、何と軍人。しかも龍がいた。これはラッキーだよ」

「何がラッキーだ。どうせ利用価値があると思っただけだろ」

俺がつつ込むと、福田は再びへらへら笑ってそれを誤魔化した。

俺達が話している内に、車列は港に着いた。豊田市から南に向けてずっと走っていたので、どうやらここは三河湾らしい。

車列は沿岸の道路に一行に停まった。一方は海、もう一方は見晴らしのいい畑に挟まれているので、警戒が容易だと判断したのだろう。装甲車や高機動車から兵士達が降車し、周囲を警戒するように展開した。俺も手伝おうとしたが、福田は笑って、

「東は休んでなよ。助けてあげた分、朝になったら働いてもらうから」

と言って、高機動車内のシートに横になり、たちまち鼾をかき始めた。

腕時計をみると、深夜12時頃だった。ダークシーカーズとの激戦に加え、古橋がいなくなった事のショックもあり、俺は急速に眠くなっていった。

……そういえば、古橋はあの後どうなったんだろうか？

俺はそんな事を考えている内に、いつの間にか眠ってしまっていた。

第100話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第101話 side 優

日も高く昇った朝。

昨日の夜に軍の人達に助け出され、それから行動を共にしたボク達は、ダークシーカーズが活動しなくなる朝を湾岸で待っていた。

日が高く昇り、やがて街の隅々を照らすようになる。その頃合を見計らい、車列は軍の拠点となっているらしき場所に向かうこととなった。

軍の大型装甲車が先導する中、ボク達の乗るバスは無人の道路を走り抜けていく。道端には放置された車があちこちに取り、誰も手入れをしていないせいか、花壇や道端に生えている草花が異常なまでに増えていた。

まるで、初春市のようなだった。ボクがそんな事を思っていると、隣からカメラのシャッター音が聞こえてきた。

「12式装甲車に高機動車にミニガン搭載の軽装甲機動車に……
……。ヒャッハー！生きてて良かった！！」

そう言いつつ前を走る装甲車を撮っていたのは軍司だった。軍司は昨晚から異常にテンションが上がっていた。おそらく軍の部隊と遭遇したからだろうけど。

ある事が気になっていたボクは、軍司に話しかけた。

「……ねえ軍司、あの人達信用できると思う？」

「え？あの人達って？」

「軍の人達だよ」

軍司は一瞬呆けた表情をしつつも、

「いやー、信用出来るとか出来ないとかの問題じゃないでしょ。現に彼らに助けられたわけだし、このご時勢他人を助けてる余裕はないのに助けてくれたってことは、まだ彼らが規律を失っていないって事ですよ」

「でもさ、八方村の事もあるじゃん。ホイホイ信用するのはどうかと思うよ」

「アレは狂人の集団、こっちは規律ある軍隊。どっちが安全だと思います？」

そう言われて、ボクはぐうの音も出なかった。

確かに、助けられたことには感謝すべきだろう。でもあつさり信用してもいいのか。何か要求されるのではないか。そんな不安がボクの中を駆け巡っていた。

「でも、少し気になることもあるんですよ」

軍司はそう言い、先程まで盛んに写真を撮っていたデジカメをボクに見せてきた。

「ほら、この写真ですよ。何か一人一人装備が若干違ってるんですよ。そう言われ、ボクはデジカメの液晶画面を覗き込んだ。映っていたのは数人の兵士達で、よく見るとそれぞれ装備が微妙に異なっていた。

まず手にしていた銃器が違う。東さんの持つ軍正式採用の小銃を持つ兵士が何人かいるが、他の兵士達が持っている銃は形が異なっ

いた。

未来的なフォルムをもつ銃から、テロリスト御用達の突撃銃まで。各々が自分に合った銃を持っているような感じだ。

続いて服装面。昨日合った時は暗くてよく分からなかったのだが、軍司の写真では兵士達の服装が微妙に異なっているのが確認できた。防弾チョッキを装着している兵士もいれば、ポーチがいくつも付いたただの弾帯を着けている兵士もいる。ヘルメットを被っていたり、迷彩の帽子やいわゆる「ブッシュハット」を被っている兵士もいた。全員の服装が微妙に異なっている。

「どういうこと、これ？規律があるなら装備は統一していないと」「そこが少し引つかかるんですよねえ……。ま、彼らが1つの意思の下に行動しているんなら問題はないんでしょうけど」

ボク達がそんな話を話しているうちに、どうやら目的地まで来たようだ。バスの窓から標識を見ると「みよし市」とある。

しばらく進んでいくと、まるで焼き払ったかのような燃えて黒い残骸と化した家が立ち並ぶ地域に出た。広範囲に渡って家々が焼き払われ、見晴らしが良くなっている。

そしてその向こうには、高いコンクリートの塀に囲まれた、大きな施設が見えた。

「あれは……。名古屋刑務所か!？」

バスの運転席でハンドルを握っていた黒田さんが言った。

確かに高い塀は、よく映画に出てくる刑務所のイメージとぴったり合っていた。先導する装甲車進行方向から考えても、行き先が名古屋刑務所らしいことがわかる。

でも、何で刑務所？ボクがそのような事を言つと、軍司はすかさず答えてくれた。

「そりゃあ、よくよく考えてみれば刑務所より安全な場所つて無いんじゃないですか？囚人の脱走を防ぐ高い塀や監視システムは、逆に外からの侵入を防ぐいい防壁になりますし」

去年までいた初春小学校も、不審者侵入を防止する為に塀と監視カメラが設けられていた。危険性が高い犯罪者を収容する刑務所なら、小学校よりもガードが堅いだろう。

問題は収容されているはずの囚人なのだが、彼らはどう扱われているのだろうか？

そんな事を考えている内に、車列はあつという間に刑務所まで到達した。

刑務所の塀の外側には、3脚に乗ったガトリングガンの様な物が設置されていた。しかし、銃座に就いている者の姿はない。

それなのに、ガトリングガンは勝手に動き、銃口を左右に動かしていた。一体どうということだろうとボクが思っていると、隣の軍司が、「ヒヤッハー！セントリーガンがこんな所で見られるなんて！！」感極まった叫び声を上げていた。

「セントリーガンって何？」

「センサーをつけたミニガンのことです！自動で接近する目標を捕捉し、自動で迎撃するシステムですよ！配備数は少ないのに、こんな所で見られるなんて……」

軍司はそう言い、写真を撮った。

確かに、人数が少ないなら自動で迎撃する火器の必要性も高いだろ

う。集団で押し寄せるダークシーカーズ相手に勝手に弾幕を張ってくれるセントリーガンは、施設防衛には最も適している。そう軍司は熱く語った。

軍司が熱い説明をしている間に、刑務所の門が開き、車列は刑務所内に入った。ボクは半ば軍司の力説を右から左に受け流しつつ、刑務所の様子を眺めた。

塀の内側にはいくつも機関銃が設置された監視塔が設けられ、銃を携えた兵士達が外の様子を見ていた。収容棟がいくつも並び、中には親子らしき姿が現れる。

その他にも家族らしき姿があちこちに散見され、グラウンドでは野球をする子供達までいた。

平和そのものだった。表面的には。

第101話 side 優（後書き）

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第102話 side 龍(前書き)

ついに50万アクセスを突破いたしました。これも皆様のおかげです。

これからも御覧になっていただければ幸いです。

第102話 side 籠

「いいもの見せてあげるよ」

俺はそう福田に言われ、皆と別れて福田について行った。ちなみに他の皆は、今は刑務所職員用の建物で休息を取っている。

「いい物って何だ？」

「それを今言ったら楽しくないでしょ？」

「・・・何か帰りたくなってきた」

福田は大きな笑みを浮かべたので、俺はそう呟いていた。

囚人達の収容棟の1つに俺達は入り、廊下を進む。収容棟は改造されていて、1階の集団房は鉄格子が取っ払われ、代わりに机や椅子が並べられて事務室のようになっていた。

劇的ビフォーアフターである。なんということでしょう。

1階を進み、俺達は「地下倉庫入り口」とのプレートが掲げられているドアの前に到着した。後から書き足されたのか、ドアには「関係者以外の立ち入りを禁ず」とのプレートも張られていた。

福田はポケットから鍵束を取り出し、その中から迷う事無く一本の鍵を取り出し、ドアの鍵穴に突っ込んだ。ドアが開くと、そこには地下への階段があった。

「んじゃ、ついて来て」

福田はそう言い、階段を降りていく。俺は慌ててついて行き、急で狭い階段を降りる。

階段を降りきると、そこには小部屋があった。白衣がハンガーでいくつも壁に掛けてあり、壁面には大きなロッカーがあった。その先にもう一つドアがある。

「ライフルは邪魔だからロッカーにしまっておいてね」

「わかった。拳銃はどうする？」

「うーん、持っておいたほうがいいかな」

福田にそう言われたので、俺は素直に肩に翔けていた09式小銃を降ろし、壁面のロッカーに収納した。ちなみにロッカーには、緊急時に使用すると思しき散弾銃や拳銃が、弾薬と共にいくつも収まっていた。

そして俺が前を向くと、今まで着ていた白衣を別の白衣に着替えていた福田の腰に、拳銃が納まったホルスターが吊り下げられているのが目に入った。ドイツ製のMARK23自動拳銃、TANカラー（茶色）のフレーム仕様だ。

MARK23は強力な45口径弾を使用するが、民間仕様なので俺の記憶では軍で採用している部隊は無い。政府が海外から緊急で調達したとしても、MARK23は高価なので買う訳が無いだろう。となると、福田はどこからコイツを調達したのか？

さっき見た外国製銃器も所持している福田の部隊。一体何が目的なんだ………？

「んじゃ、白衣を着て手を消毒してね」

俺の疑問に気づいた様子も無く、福田は言った。俺は慌てて返事を返すと、壁に掛けられた白衣を手を取った。

白衣を着た後、壁に取り付けられたアルコール殺菌装置を使用して手を消毒する。アルコールジェルが自動で噴霧され、手が冷たくなる。

俺が消毒を終えると、福田はドアを開いた。最初は真つ暗で何も見えなかったが、福田が壁面のスイッチを押すと、室内が明るく照らされた。

元々は地下倉庫だったらしいこの部屋は、すっかり実験室へと様変わりしていた。いくつもテーブルが並び、その上には何台もパソコンが機種を問わず置いてある。壁面にはいくつも棚が設置され、瓶や袋に入った薬品らしき物がいくつも置かれている。

そして、注射器やピーカー、用途のわからない実験器具のような物もあり、ある物は机の上、ある物は積み重なった段ボールの上に放置されていた。

「・・・何か子供の秘密基地みたいな感じだな」

「ありがとう。ここまで揃えるのに結構かかったんだよね」

「もしかして、見せたいものってこの部屋か？」

俺が訊くと、福田は笑みを浮かべて首を横に振った。

じゃあなんだ、と俺が問う暇も無く、福田はテーブルの上にある一台のデスクトップパソコンの電源ボタンを押した。スリープ状態だったのか、パソコンはすぐに待機状態になった。

そして福田は、そのパソコンの隣に放置されていた眼鏡を取った。福田が俺を向くと、パソコンの画面に俺が映った。眼鏡のフレームの脇に、小さなＣＤカメラが付いているようだ。

福田はそのまま、壁際にある大きな遮光カーテンで覆われた物体に近づいていった。遮光カーテンの内部からは、何か引っかくような音がいくつも聞こえる。

そして福田は遮光カーテンを取り払い、俺は思わず後ずさっていた。カーテンの下に隠れていたのは、ネズミが入ったいくつものガラスケースだった。しかも、内部に納まっているのは普通のネズミではない。

全身の毛が抜け落ち、俺達を攻撃したいかのようにガラスケースの壁に何度も突進してくるそれは、どう見てもクルピン・ウイルスに感染したネズミ達だった。

「はあー。残念ながらFE群のワクチンは失敗。1番から12番までの全ての個体が発症している」

福田は大きく溜息を吐き、言った。どうやらパソコンに記録しているらしい。

その合間にもネズミ達は福田目掛けて突進を続け、そしてガラスの壁に跳ね返されていた。

福田は全ての個体を眺めると、興味は無くなったとも言つように、積み重ねられたガラスケースに遮光カーテンを掛けた。

「なあ、見せたかったってのは感染したネズミか？そんな俺達は以前にも見せられたし、ドラ もんくらいしか驚かないぞ」

「まあまあ、東はせつかちだね。これから見せてあげるよ」

福田はそっくり、今度は部屋の奥へ向かった。

部屋の奥には分厚いガラスで囲まれた空間があった。部屋の中にはベッドが置かれ、そこで誰かが横になっている。

福田がガラスの扉に手をかけ、そして一気に開く。

「ねえ東、何で僕達は刑務所に駐留していると思う？」

「まさか
」

俺が見たもの、それはベッドで寝ている男のダークシーカーの姿だった。

ただし、俺達が今まで見てきた奴とは違い、汚れたりはしていなかった。服装はよく受刑者が良く着ている服に酷似している、というかそのものである。

ここから導き出される結論は　　。

「そう、囚人を使つての人体実験の為だよ」

そう言うと、福田は事の顛末を事細かに話し始めた……。

第102話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

東さんは「福田」と名乗った白衣の男に随行し、ボク達は東さんが帰ってくるまで待つ事となった。今いるのは、かつて看守用の宿舎だったらしい棟の1階ロビーだ。ロビーにはいくつもソファアが並べられ、部屋の端のテレビではニュース番組をやっていた。ただし、まだ放送局が無事の時に録画されたビデオだけだ。

「はあ」

と、誰かが溜息を吐くのが聞こえた。古橋さんはウイルスに感染してダークシーカーになり、彼を止めようとした牧さんは撃たれて負傷した。今は刑務所内の救護室に運ばれて手当てを受けているが、重傷なのか軽症なのか、すぐに復帰できるのかはボクにはわからなかった。

刑務所に着いた後、民間人であるボク達はウイルスに感染していないか検査され、ここに通されたのだ。ロビーの出入り口には突撃銃を肩に掛けた兵士が見張りに立ち、こちらを見ている。軍に所属している堂々さんを始めとする兵士達は、どこか別の部屋に通されていた。なのでボク達には、情報が殆ど入って来ない。色々心配になったボクは、隣に座る軍司に話しかけた。

「ねえ、この後どうなると思う？」

「それはどういう意味ですか？」

「このまま無事に四国に行けるかって意味だよ」

軍司は顎に手をやり、「それは・・・」と言いかけた途端、宿舎の1階ロビーの出入り口から誰かが入ってきた。東さん達だった。彼らの先頭には、迷彩服を着た女性の軍人が立っている。

「うわ、女性の二尉だ。しかもあの若さで中尉なら、多分防衛大出だな」

軍司が女性軍人の襟章を見て呟いた。

ボクはここ数ヶ月で（一応）軍のことには詳しくなったので、二等陸尉が海兵二曹よりも階級が高いことにすぐ気づいた。顔をよく見ると美人ではあるが、表情には軍人特有の険しさのようなものが感じられる。

女性の二尉はボク達の前に立つと、

「私は陸軍中部方面隊、第10師団第35普通科連隊所属、おおやま大山恵美^{えみ}二等陸尉です。ここに駐屯する部隊を率いています。皆さんにお話があります！」

と言った。

東さん達は相変わらず何も言わず、ただ大山二尉の話を訊いているだけだった。既に何か打ち合わせをした後なのだろうか？

「現在我々の部隊は大きく数を減らし、正規の軍人は30名程しかいません。元自衛官や除隊した軍人、そして民間人の志願者を合わせても、ここを防衛している人数は50名弱しかいません。なので皆さんの中から我々の手伝いをする志願者を募りたいと思います！」

それを聞いた皆は、口々に近くの人とひそひそ話を始めた。皆眉

にしわを寄せていて、大山二尉の話について何かおかしいと感じているようだ。

やがて多賀さんの手が上がる。

「アタシは多賀っていうんだけど、アタシ達は今四国に向かってる。ここには留まらないつもりよ」

そう言うと多賀さんは「そうよね、龍？」と東さんに訊いた。だが東さんの口から出てきた言葉は、

「…いや。俺達は話し合って、この部隊と合流して留まる事に決めた」

という予想外のものだった。

その言葉に室内は騒然とした。ざわめきが大きくなり、皆が口々に疑問を言う。

「何でいきなりそんな事言ってますか？親が四国にいるから東さん達について来たのに！」

初春小学校で、ボク達のグループに加わっていた中学生の少女が叫んだ。

大山二尉は反論しようとしたが、東さんは大山二尉を手で制し、自ら答えた。

「確かに千葉を出る時は、装備や食糧、燃料や人員等、全てが完璧だった。だが今は古橋を失い、牧は負傷し、おまけに昨日銃弾を沢山使った。この状況で出発するのは自殺行為だ。

おまけにウイルスは変異し、俺達の打ったワクチンも効かない。この状況でどうやって四国に辿り着けと？」

東さんはそう言った。

少女は目を赤くし、黙ってソファアに座った。代わって、八方村で合流した多賀さん達のグループの、元はサラリーマンだったらしい男が立ちあがって言った。

「それはあんた達が臆病チキンになったって話だろう！俺達には関係ない！！もしあんた達が行きたくないって言うなら、俺達が装備を全部持って出発してやる！！」

「どの道銃弾も燃料も少ない。今の状況では四国に辿り着く前に燃料が切れ、銃弾はあつという間に撃ち尽くして終わりだぞ？」

東さんが言った。

昨晩の弾薬消費量は激しく、残っていた銃弾の半分以上を使ってしまったらしい。しかも元々あつた分も少なく、精々弾薬箱数箱分とあった所だった。

燃料は打ち捨てられたガソリンスタンドで補給するとしても、銃弾は補給の見込みがない。男はその事も考えていたのか、

「そんな事はどうにでもなる。ここには軍が駐屯してるんだろ？補給物資くらい分けてくれるよな？」

と、質問の矛先を大山二尉に変えた。

だが大山二尉から返って来たのは、東さんと同じく（男にとっては）予想外の言葉だった。

「いいえ。我々は我々に従わない者には、一切の物資の援助を行わない事になっています」

その言葉に、さらに室内が騒然となる。

「な、なんでだ？軍なんだから、国民のために尽くすんだろ！？物資ぐらい分けるよ！！」

「アンタは黙りなさい」

と、多賀さんが男を制した。男は渋々といった表情で座り、代わって多賀さんが立ちあがって言う。

「もしよかったら、その物資を分けてくれない理由を聞かせてもらえらる？」

「ここは重要拠点だったので、我々は本州封鎖後もしばらく空軍の輸送機から補給を受け取っていました。しかし今年に入り輸送機は来なくなりまして。なので補給物資は減る事はあっても、これ以上増えることは無いでしょう。」

その結果私達は話し合い、我々に従わない者には一切の物資を分けない事に決めました。簡単に言うと『従いもしない奴に物を分けてやる道理はない』って事です」

と、大山二尉が答えた。

どうやらここにいる軍人達は、あまり友好的ではないようだ。ボクがそう考えた時、唐突に美里さんが立ちあがった。

「もしかして籠くん、ここにいれば物には困らないって事で四国には行かないの？物で釣られるような人だったの！？私達の事はどうだっかっていいの！？」

と美里さんが叫ぶ。

八方村での一件後、ボクは度々言い争う東さんと美里さんの姿を目撃していた。二人の仲は悪くなっているようで、もしかしたら今回も美里さんは東さんに悪印象を受けたのかもしれない。

「違うな。俺はお前達のためにここに残ると言ってるんだ。そして、お前たちもそうすべきだと俺は思うね」

と、東さんが言った。

東さんは後ろを振り返り、「あの事言っただいいか？」と兵士達に訊いていた。兵士達が頷き、東さんが前を向く。そして東さんは口を開いた。

「封鎖対象じゃない地域にも新型コロナウイルスが広まったらしい。このまま四国に行っても、生きてる『人間』はいないかもしれない」

想像を絶する言葉に、室内は水を打ったように静まり返った。ボクは頭を殴られたような衝撃を受けつつも、必死に思考を整理していた。

東さんの言葉が正しければ、四国は安全どころか感染者の巣窟となつている可能性がある。いやそれだけではない。東さんはさっき「封鎖対象じゃない地域」とも言った。つまり、北海道や九州も新型コロナウイルスに汚染されているかもしれないという事だ。

なんてこった。これじゃあ、ボク達はなんのためにここまで来たんだ……？

静まり返った室内で、再び大山二尉が口を開く。

「当面の我々の目的は、この新型コロナウイルスのワクチン、もしくは治

療薬の開発です。開発に成功すれば、我々も本州から脱出する予定です」

「俺達はワクチンか治療薬の開発を手助けする事が、軍人の責務でありお前達を無事に四国まで送り届ける事に繋がると思った。だからここに留まる事を俺は推薦する。」

それに、ワクチンか治療薬が完成すれば、より多くの人命が救える。これは生き残っている人間の義務だと俺は思う」

東さんがそう言った。

「ここで我々を手伝ってくださる人には、十分な食料と安全を与えます。我々に従わない人については、壁の中に留まるのは認めますが、一切援助は行いません。それをお忘れなく」

「このまま安全が確認されていない四国に行くか、それとも彼らを手伝って安全な状態で四国に行くのか、自分で決めてくれ。俺達は全員一致でここに留まる事を決めた。自分で自分の事ぐらい決めろ、いつまでも俺達に頼れるとは思うな」

大山二尉と東さんはそう言い、ロビーを出て行った。兵士達も続き、ロビーには気まずい雰囲気の中、ボク達だけが残された。

第103話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

俺達は皆に自分で考えるように伝えた後、大山二尉に先導され、兵士達の集まっている会議室にやってきた。

会議室には元々兵士だった者、志願して兵士になった避難民などがいて、彼らの服装も銃器の種類もバラバラだった。室内に居るのは、全員で40人にも満たないだろうか。

会議室に入った俺達は敬礼した後、それぞれ階級や氏名を名乗った。俺達が自己紹介をすると、続けて彼らも立ちあがって氏名を名乗る。兵士達が次々と氏名を名乗る中、空軍仕様の迷彩服を着た青年が立ちあがった。ただし見た目はどう見てもモヤシで、貧相な体つきをしている。

「く、空軍無人航空機運用部隊の高木^{たかぎ}俊^{しゅん}と申します！階級は三等空曹であります！よろしく、お、お願いします！！」

どもりながら名乗った高木を見た俺達は、「本当にこんなのが兵士なのか？」との疑問を全員が抱いていたに違いない。それほど高木は臆病な青年にしか見えないのだ。

「高木三曹はこう見えても、無人偵察機^{フレター}の操縦の腕は確かだ。彼には夜間の偵察飛行の際に活躍してもらっている」

横から大山二尉のフォローが入った。

俺よりも年下に見えるので、おそらく一般入隊か曹候補生として軍に入隊したのだろう。でもこんなモヤシ君が兵士だとは、未だに信

じられない。どちらかというと、ひきこもってゲームをやっている方が似合っている。

高木の次に立ちあがったのは、おそらく70歳近い老人だった。白髪の上に口髭と蓄え、陸軍使用の迷彩服を着ている。

軍の定年は最高でも65歳くらいまでなので、この老人は志願して兵士になったのだろう。でも、大丈夫なのか？

俺の疑問に答えるように、老人が口を開いた。

「ワシは内田 勲だ。40年前に陸自を除隊した後、農業をやってきた」

「内田さんは陸自時代に名狙撃手として知られていた。今は主に野菜を育てて食糧を作ってもらっているが、時々警備任務にも就いてもらっている」

再び、横から大山二尉のフォロー。

内田さんが肩に背負っているのは、とくに用途廃止になったはずの64式小銃だった。しかもスコープが装着されているので、狙撃手だったという話は本当だろう。

そして腰のホルスターに収まっているのは、コルト・ガバメントの最新カスタム品であるSTI イーグルだった。

シユールな光景だった。半世紀以上昔の骨董品である64式と、最新鋭のカスタムハンドガンと一緒に装備している人が居るとは。

64式小銃は89式小銃が全部隊に装備された後、二線級火器として補給処に保管されていた。しかし89式の光景である09式小銃と狙撃用の10式小銃が採用された後は、保管されていた64式の大半は廃棄されるか、連発機能を外されて猟銃として民間に若干数が流通しただけだったはずだ。

俺の考えを見透かしたのか、内田さんが口を開いた。

「ワシが現役の時には64式小銃とガバメントしかなかったんだ。昔も使っていた物の方が使いやすいから用意してもらったんだ」

「大丈夫だ。内田さんの腕は確かだ」

またまた、大山二尉のフォロー。

やっぱり内田さんは、どっちかというと鍬でも持って農業をやっている方が似合っているし、本当はそうらしいのだが、しかし狙撃は上手いという。

俺はあいまいに頷き、堂々と内田さんはどっちが狙撃の腕が凄いかなどと考えていた。

全員の自己紹介が終わった所で、俺達は今度は武器庫に連れて行かれた。元は牢屋だったらしき部屋は、今では武器の収まるロッカーが沢山並び武器庫へと改装されていた。

そしてロッカーの中には、古今東西多種多様の銃器が並んでいた。

「うわ。ヘッケラーとFNの最新モデルからAKまで、何でも揃ってんな」

並んでいた銃器を見て、誰かが呟いた。

ここにあるロッカーの数から見ても、100丁は銃器が揃っているだろう。そして弾薬の入った箱も、部屋の隅にうず高く、いくつも積み上げられていた。

ある疑問を抱いた俺は、大山二尉に訊いてみた。

「これだけの銃、どこから仕入れたんですか？しかも国外メーカー

品まで揃っているなんて……」

「どうやら福田さんはあちこちにコネがあるらしくてな。一声かけたら外国軍用品審判所（外国の装備を研究する防衛省の機関）からあちこちの国の銃と弾薬が送られてきた」

福田、恐ろしい奴だ。

実際、福田のコネは凄いらしい。それは福田の生まれた家がいわゆる「上流家庭」であったのもあるし、何より善悪問わずにカリスマを發揮する奴なので、防衛省にも親しい人間が居たからこのようなことが出来たのかもしれない。

実際問題、福田はワクチンや治療薬開発の要なので、上層部がその要望に出来るだけ答えただけなのかもしれないが。

「我々の部隊に加わった以上、君達には自由に武器を選ぶ権利が与えられる。ただし携帯出来るのは2丁まで。それ以上必要になった場合は、武器庫に詰めている兵士に言ってくれ。使用した弾薬の数はキッチリ報告する事」

大山二尉が言った。

俺の使用していた09式小銃は、昨夜の戦闘でオシヤカになった。接近してきたダークシーカーを殴打した時、銃身にヒビが入ってしまった。ハンドガードが大きく割れたのだ。

仕方がないので、ここで新しい銃を選んでいくことにする。それも使いやすいヤツを。

俺はロッカーの中から、ドイツ製のG36Cを取り出した。これはドイツ連邦軍等で使用されているG36アサルトライフルの銃身を半分程まで短縮し、取り回しを良くした銃だ。

今まではフルサイズの09式小銃を使用していたので、室内戦では取り回しが悪かった。だがこのG36Cはコンパクトで取り回しが

良いので、ダークシーカーが潜む狭くて暗い場所でも問題なく戦闘が行えるだろう。

武器庫に詰めていた若い兵士が、銃を構えた俺を見て訊いてきた。

「G36を使った事はありませんか？」

「前にEU軍との合同演習の時、ドイツ兵が装備していたG36を持たせてもらった事がある。構造自体はあまり変わらんだろ」

俺はそう言いつつ、G36Cの機関部真上のボルトを引き、引き金を引いた。カチリという軽い音がする。

それを確認した俺は、G36Cのハンドガードやキャリングハンドルに設置されているレールに、戦闘を補助するための機器を取り付け始めた。

ハンドガード下部にはフォアグリップ。側面にはフラッシュライトとレーザーサイト。そしてキャリングハンドルには照準補助用に、アメリカのイオテック社製のホログラフィックサイトを装着した。

色々と装着しすぎたが、元々G36Cは軽量なので問題は無い。俺がカスタムし終わったG36Cを構えてみると、重さも許容範囲でコンパクトな分機動力が上がるだろうと思った。

「よし、次は警備態勢を確認してもらう」

と大山二尉が言い、俺達は今度は屋上に連れて行かれた。

收容棟の屋上は、今や要塞と化していた。

あちこちに機銃座が設置され、迫撃砲も設置されている。屋上の一
角には天幕が張られ、天幕内には大型の無線機が設置されていた。

「各收容棟の屋上には機関銃座が東西南北方向に1基ずつ。迫撃砲
は1基、全方位に攻撃出来るよう設置されている」

「監視塔は？」

「東西南北方向に1基ずつ設置した。それぞれサーチライトと機銃
を設置してある」

「無人銃座はどうなってます？」
セントリーガン

「塀の外側に、東西南北方向に2基ずつ。その他にも指向性散弾や
爆薬を無数に設置してある。それらはここから何時でも起爆可能だ」
クレイモア

大山二尉が、警備態勢について説明している。

屋上からの見晴らしは良く、設置してある大型赤外線暗視装置も使
用すれば、即座に接近してくるダークシーカーを発見出来るだろう。
俺達の居た浜浦小学校よりも警備状況は嚴重だ。もともと、兵員数
や装備が充実しているおかげだろうが。

俺が屋上から刑務所の周囲を見回していると、所々に無事な家が建
っているのが見えた。障害物になりそうな家屋は全部焼き払ったと
大山二尉が言っていたので、何故無事に残っているのだろうか。
疑問に思った俺は、

「二尉、あそこの家は何故残っているんですか？監視や戦闘の邪魔
になるのでは？」

と訊いた。

「ああ、あれは……」

と大山二尉と言いかけた途端、

「文民統制を守れ……！！！」

と、大きな声が下から響いた。

何だと俺達が屋上から下を見下ろすと、そこにはプラカードを掲げ、メガホンを持った民間人の集団がいた。少なくとも50人はいるだろうか。

持っているプラカードには

『軍の暴走を許すな！』

『文民統制を死守せよ！』

『物資の独占を許すな！』

『平和憲法の順守を！！』

『感染者に人権を！！』

と書かれている。

「なんだありや……。左翼か？」

と堂々が呟いた。

集団にはほとんど民間人が加わり始め、その数を増やしている。指揮所となっているこの収容棟の前に陣取った集団は、持っていたメガホンでシュプレヒコールを上げ始めた。

そして収容棟の入り口を守る兵士達は、面倒くさそうにその集団を見守っている。

「二尉、あの集団は？」

「まあ…、いわゆる左翼の皆さんだ」

中沢が訊き、『あーウザい』というような表情で二尉が答えた。

「あの集団の中心となっているのは、平和実現党の党首の福原穂積だ。党員と一緒に名古屋に遊説に来た時に本州封鎖に巻き込まれて、そこを我々が救出したんだが……」

と、二尉が遠くを見るような目をした。

平和実現党とは、「平和憲法遵守・人権擁護」を軸として活動している政党である。政党とは言っても、衆参合わせて議員数が両手で数えられる程もないような弱小組織だが。

そして平和実現党は平和憲法の順守のため、軍の解体・縮小を叫んでいる政党としても知られている。何かあるごとに駐屯地や基地の前で抗議行動を起こし、毎回兵士達に迷惑をかけている（俺達も迷惑を被った）。

625

「何であんな事叫んでるんですか？」

「我々が文民に従わないから…らしい。軍に従わない者には一切の援助をしないと云ったら、即日抗議行動を始めた」

再び、面倒くさそうな表情で答える二尉。

「彼らは働いてるんですか？」

「いや、全く。『軍は国民に奉仕すべき』とか言っつて、自分達は全く働かないで我々が獲得した物資や育てた食糧を当然の如く持つて行こうとしている。自分達は『民間人の権利を守るための弁護士』と称しているがな」

うわ、それはウゼい。

自分達は働かず、ただ意見を叫ぶだけで何もしないと、高校生もびっくりの自己中ぶりだ。この8カ月近くの間、何をやっていったんだろうか？

「もしかして、ここに来た時からずっとそうしてるんですか？」

「最初は我々の物資にも余裕があったから、食料の配給などもやって大人しかったんだがな。我々が仲間以外は支援しないと言った途端、抗議行動を活発化させたんだ」

「食糧とかはどうしてるんです？」

「抗議行動の片手間に農業をやっているから、一日一食くらいしか食べられないらしい」

中沢と大山二尉が話している間にも、左翼集団は棟の入り口前から移動し、刑務所内を練り歩き始めた。デモのつもりだろうか。

どちらにしてもアホらしい。この状況では助け合わなければならぬのに、自分達の意見を押しつけるだけ。それは典型的な皆から嫌われる人間だ。

ただし、大山二尉が言う事には、刑務所内で生活している民間人約500名の内、半分程が左翼集団の意見に感化され始めているらしい。数が多ければ問題も増えるのは当然だが、俺達が浜浦小学校にいた時は問題は（澤田達を除いて）あまりなかった。

下手に知識をつけた大人の方が、殴って言い聞かせる事も出来ないからか。

軍人と民間人と深刻な対立は、いつか破滅をもたらすのではないか。俺はそう思った。

「それで、あそこの家は何故残ってるんですか？」
「ああすまん。あの集団が『ここにいるのは危険だ』とか言って、普段はあの家で住んでるんだ。夜間は危険だし、こちらとしても彼らのせいで位置がばれるのは困るから、所内で収容しているんだがな」

自己中ここに極まれり、か。

何て都合のいい奴らだ。俺達をガードマンとしか考えていないのか？

ちなみに、彼らが昼の間住んでる家は木製で、いざという時はぐさま砲撃で吹っ飛ばせるらしい。というか、緊急時のために柱にC4爆弾が仕掛けてあるんだとか。
さすが大山二尉、抜かりが無い。

俺がそんな事を考えていると横から大山二尉が、地図をずいと突き出してきて言った。

「それで、お前達はどう思う？少ない戦力で小学校に立て籠もっていたのなら、警備体勢も工夫していたんだらう？」

「そうですね……。こちらの方が充実している分、考え方は異なりますが……」

俺は顎に手をやり、差し出された地図を眺めた。

刑務所の周囲には地雷や爆薬を示すマークが隙間無く描かれ、防衛線には穴が無い。地雷原を突破してきたダークシーカーは、セントリーガンと銃座で対応するのだらう。

「爆薬は、廃棄された自動車の中に設置した方が良いと思われます」
「ほう、何故だ？」

「爆薬は地表に設置しただけでは、爆風でしか敵を死傷させられません。その点乗用車内に設置した場合、爆風の威力は減少しますが、その分多数の破片で敵を殺傷できます。出血させればその分敵の侵攻速度は落ち、攻撃力も減少するでしょう」

ついでに、ナパームを自作して爆弾と併用したほうがいいと伝えると、二尉は早速無線機を取り、廃車を移動させて爆弾を設置しろと命令を下した。

たとえ左翼の皆さんが協力してくれなくても、俺達が加われば戦力は多少は上がるだろう。後は、さっさと福田がワクチンか治療薬を完成させるのを待つしかない。

第104話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第105話 登場人物紹介3

軍・政府側

福田 俊二
ふくだ しゅんじ

23歳

所属 日本国防衛軍臨時軍属研究員

階級 三佐程度の権限が与えられている

東の高校生時代からの友人。天才であり、海外の有名大学を余裕で卒業出来るほどの頭脳を持つ。

高校生時代は東と牧と共に、色々バカな事をやっていた。クルピン・ウィルスの突然変異後は、臨時に軍に採用され、アメリカ陸軍のロバート・ネビル中佐と共にワクチンの開発に成功する。

現在は名古屋刑務所を拠点に活動しており、囚人を使っての人体実験や、ダークシーカーを捕獲してワクチン・治療薬の開発を行おうとしている。

目的の為に手段を選ばず、親しくない人間からは冷酷な性格と見られる。

携帯している武器はMARK23自動拳銃。

大山 恵美
おおやま えみ

27歳

所属 日本国防衛陸軍 中部方面隊 第10師団 第35普通科連隊

階級 二等陸尉

福田の警護を命じられた部隊の指揮官。防衛大学校を優秀な成績で卒業し、数度の実戦を経ている。

本州封鎖の際、民間人の救出を優先していた為、本州から脱出し損ねる。ただし、これは福田の意向もあつた模様。

現在は名古屋刑務所に駐屯し、福田のワクチン開発を手伝う為に色々と協力している。

携帯武器はUMP・45短機関銃とP226自動拳銃。

小山 純こやま じゅん

21歳

所属 日本国防衛陸軍 中部方面隊 第10師団 第35普通科連隊

階級 陸士長

大山の従兵。彼女を色々サポートするため、常に大山に付き添っている。

かなりの苦勞人らしく、大山にパシられることもしばしば。しかし文句は言わない。

携帯武器は09式小銃とP226自動拳銃。

高木 俊たかぎ しゅん

20歳

所属 日本国防衛空軍 無人航空機運用集団

階級 三等空曹

無人航空機「プレデター」の操縦手。かつてゲームセンターのフライトシューミレーションゲームの大会で数度優勝し、それに目をつけ

た空軍によって勧誘された。
性格は臆病、内気だが、操縦桿を握ると性格が変わる。

小野田 おのた
勇氣 ゆうき

23歳

所属 日本国防衛陸軍 第1師団
階級 三等陸曹

渋谷警備の為に派遣された狙撃手。本州で感染爆発が起こった際、民間人を救助しようと奮戦するが……。

名古屋刑務所駐屯部隊

兵員数 30～50人（戦闘員のみ。空軍無人偵察機運用部隊や整備・施設部隊など後方支援要員を除く）

名古屋刑務所で研究を行う福田の護衛部隊。装備、練度、士気、どれも充実している。
兵士達の間で発生したウイルスの感染により、部隊のおよそ半数を失う。それ以降、民間人から協力者を募り、戦力を回復させつつある。

民間人

松戸^{まつと} 由梨^{ゆり}

16歳

八方村でイシヴアラ教を率いていた松戸仁の親戚である少女。洞窟内に監禁されていた所を、偶然訪れた東に開放される。それ以降は東達に同行している。

美人で性格は高飛車だが、いざという時はやる性格。実際、八方村で東と共にドンパチをやらかした。

携帯武器はIMIミニウージーとCZ75自動拳銃。

多賀^{たが} マリ

24歳

八方村から東達と行動を共にしている小集団のリーダー。かつては東京都でサバイバル生活を送っていたが、政府のラジオ放送を聴いて西に向かう。

イシヴアラ教団によって八方村に誘い込まれ、睡眠薬を飲ませられたが、牧達によって救出される。モデル体形をしている。

携帯武器はレミントンM700ライフルとS&W M19拳銃。

内田^{うちだ} 勲^{いさみ}

70歳

名古屋刑務所で軍に協力している老人。40年前まで陸上自衛隊に所属し、除隊した後は妻と一緒に農家を営んでいた。

4年前に妻と死別。それ以降は一人暮らし。本州封鎖後、大山達の部隊に救出される。

陸自時代は名狙撃手として知られ、今でもその腕は衰えていない。野菜を育て、軍に供給している。

携帯武器はスコープ付64式小銃とSTイーグル自動拳銃。

イシヴアラ教団

信徒数 約500人

かつて石原 照夫ていおが設立した宗教団体。過激な思想を持ち、警察によつて教祖の石原は逮捕される。

以降、石原奪回のためにテロを計画し武器弾薬を集めていたが、本州封鎖後は教団幹部の松戸仁に率いられ、「理想世界の実現」の為に様々な行動を起こす。

感染者に襲撃された八方村を助け、以降住民を教団に引き入れる。生贄などの行為を平然と行い、外部の人間を招きいれては生贄に捧げている。

装備は自動小銃、軽機関銃搭載の軽トラ等。ただし練度は低いが、異常な信仰心により死を恐れない。

運良く包囲されなかった東によつて通信所と発電所を爆破され、警備体勢に穴が開いた所にダークシーカーズが村内に侵入する。

東によつて数十名が殺害され、感染者による被害も増していた所に、

以前から活動していた山が噴火。教徒は殆どが逃げ遅れ、死亡する。

松戸 仁 まつと ひとし

47歳

イシバラ教を率いる男。過激な思想を持ち、以前は教団で武器の密輸に関わっていた。

教祖逮捕後、テロを画策していたが、本州封鎖によって「理想世界の実現」に向けて行動する。由梨の両親を殺害した後、教団の意向に従わない者を次々生贄にする。

生贄にしようとしていた東達が脱出してからの動向は不明。火山の噴火で死亡したか、感染者に殺害されたものと思われる。

平和実現党

党員数 約50名

左翼的思想を持つ政党。議員数は衆参合わせて10人もいない。

「平和憲法遵守」「非武装中立」「人権擁護」を掲げており、軍の解体を唱えている。そのせいで名古屋刑務所駐屯部隊とは険悪。

物資が枯渇し、軍からの援助が打ち切られてからは毎日デモを行っている。軍が民間人の指揮下に入らないことが気に食わない。また、「民間人の権利を守る弁護士」と称し、働こうとはしていない。

名古屋刑務所に避難している民間人の内、約半数が彼らの思想に感化され始めている。

軍との対立が激しくなっている。

福原ふくはら
穂積ほすみ

57歳

平和実現党党首。本州封鎖前日に名古屋に遊説に来ていて逃げ遅れた。

軍に保護された後は文民統制を叫び、軍を指揮下に置こうとする。が、福田が一笑に付したので、軍との対立が激化。

軍からの援助が打ち切られて以降、名古屋刑務所駐屯部隊が物資を独占しているとして、連日デモを繰り広げている。

第105話 登場人物紹介3（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第106話 side 優(前書き)

帰って来たぜよ!!! (何故か土佐弁)

一応リハビリも兼ねて、少し内容は薄めです。

東さん達が部屋を出て行った後、室内には重苦しい雰囲気のみが残された。

当然である。だって今まで保護してくれていた東さん達から、遠まわしに、

「お前達には必要ない」

と突き放されたのだ。

先月の初春市では、東さん達は「俺側につくか澤田側につくか、どっちかにしろ」と選択肢を示してくれた。

しかし今回は、「自分達に協力しないなら、後は知ったこっちゃない」「来ても来なくてもいい。お前達は必ずしも必要じゃない」と、究極の取捨選択だ。

無論東さん達に付いて行った方がいいのだろうが、ボク達のほとんどは、四国へと脱出する事を願って初春市からやって来たのだ。それを、「あぶねーから俺達はここにいるわ。じゃ。あとはよろしく」と、放り出された。見方によっては、東さん達は身勝手な存在ではないだろう。

でも、東さん達がいてくれたから、ボク達はここまで来られたのだ。だから東さん達を身勝手とか、無責任とか詰る資格は、少なくともボク達にはないだろう。

ボクがそうやって思考の堂々巡りに陥っていると、隣に座っていた

軍司が突然立ち上がった。

「どこ行くの？」

「どこって、決まってるじゃないですか」

ボクの問いに、軍司は「何言ってるんだ」とでもいうような表情をした。

とその時、ロビーの入り口のドアが開き、一人の迷彩服姿の兵士が入ってきた。かなり若そうで、東さんよりも年が若いだろう。

その兵士は全力疾走して来たのか、少し荒い息を吐きつつ、直立不動になって言った。

「小山 純陸士長であります！大山二尉からの伝言で、『我々に協力したい方は、小山について来て下さい』との事であります！」

小山さんはそう言い、部屋の片隅に移動した。ボク達の討論を見守るつもりなのだろう。

が、立っていた軍司は、即座に小山さんの元へと歩きだした。ボクはとっさに軍司の腕を掴む。

「ちょっと軍司、一体どうするの？」

「どうするって、東さんについて行くに決まってるでしょ。あたりまえじゃないですか？」

その言葉で、室内が騒然とする。軍に協力するか、それとも今ある装備で四国に行くか、その議論が再び蒸し返される。

八方村でボク達に合流した多賀さんのグループから一人の男が立ち上がり、軍司に言った。

「お前、あいつらについて行ったって、得する事は無いぞ！それよ、俺達と一緒に四国に行こうぜ」

「アンタは何言ってるんですか？」

軍司のその言葉に、男が「何だとっ！？」と、顔を真っ赤にした。

「さっきの東さんの話、聞いてなかったんですか？四国との通信は途絶したって言ってたでしょ。行った所で、無事な人間がいる保証はない」

「そんなの行かなきゃ分からないじゃないか！生き残ってる人達は、どこかに集まって隠れているのかもしれない」

「だーから、それだと僕達が四国にいく条件自体が崩れちゃってるでしょ」

珍しく軍司が、堂々とした口調で続ける。軍司の言葉で、室内は再び静かになる。

「『四国は無事で、生きてる人間が沢山いる』ってラジオで流れてきたから、僕達もあなた達も四国に向かっていていたんでしょう？なのにもう四国には、いや無事な地域の殆どに新型ウイルスが上陸してしまっただ。これじゃ、四国に行く価値は無いでしょう」

そう言うと軍司は、小山さんに向けて再び歩き始めた。途中で立ち止まり、再びボク達に向けて振り返る。

「そうそう、僕は東さんに助けられたから、ずっと東さんについて行きますよ」

そう言うと軍司は、小山さんと何かを話し始めた。

室内は沈黙で満たされ、皆が押し黙る。やがて、八方村からついてきた、由梨も立ちあがった。

「私も軍に協力するわ。四国に行っても意味なさそうだし」

そう言い、由梨も小山さんの元へと歩いて行った。

続いて多賀さんが立ち上がり、それを機会に次々と立ち上がり、軍に協力すると申し出る者が出てきた。

どうするか迷っている人達は当初の半分にまで減り、ボクはまだどちらに行くか迷っていた。

そして、迷っている人の中に、美里さんもいた。

意外だった。美里さんと東さんは過去に恋愛関係にあり、それが解消された今でも、親しげに話す様子があちこちで目撃されていた。八方村での一件後、東さんと美里さんの仲はギクシャクしているようだ、それでも美里さんは東さんに真っ先についていくと思っていた。

「行かないんですか？」

ボクがそう訊くと、美里さんは悲しそうに首を振って答えた。

「わたし……、龍くんと一緒にいる事が良い事なのか、分かんないの……」

「何ですか？東さんの事、今でも好きじゃないんですか？」

「でも、龍くんはもう、私が知ってる龍くんじゃない。目的のためなら普通に人を殺せるし、それを躊躇することも、後悔することもない。あんな龍くん、私は知らない……」

ボクは「それは違う」と言おうとしたが、口からは何の言葉も出て来なかった。

ボクは、東さんがダークシーカーズや八方村の人間を撃っていた時、その目が悦楽の色を見せていたのを知っていた。八方村では撃たれたのに、笑ってロケットランチャーをぶっ放した。

その事を、美里さんは知ってしまった。

「じゃ、一旦ここで区切ります。我々に協力したい方は、後でもいいのでお近くの兵士に言ってお下さい」

そう言っただけで小山さんが、軍に協力すると言った人達をどこかへと連れて行くとした。

ボクに迷っている暇は無かった。ボクは何も考えず、協力する人達の列の最後尾に走って並んだ。

- 美里さんは、ソファアに座ったままだった……。

第106話 side 優（後書き）

御意見、御感想、アイディアお待ちしております。

第107話 side others (前書き)

今回の主人公は、ある読者様から送られたキャラクター案を使わせていただきました。本当に感謝です。

第107話 side others

2018年 5月18日 20:23 名古屋市市街地

side 愛知県警SAT 第一小隊 稲森^{いなもり} 恵美^{えみ} 巡查長

『ゲンポン（現地警備本部）より全遊撃班へ！後退せよ！！』
んなこと言われなくても、こっちはとっくに持ち場を放棄してるっつーの。

アタシの所属する愛知県警SAT（特殊急襲部隊）第一小隊、遊撃1の名称で呼ばれる部隊は、現在ビル街の裏路地を走っていた。そして後ろからは、ウィルスのせいで凶暴になった感染者達の呻き声が、アタシ達を追いかけてくる。

「小隊長！どこに行くんですか！？」

アタシの前を走る一人のSAT隊員が、一番先頭を走る隊長に叫んだ。
アタシの背後では、壊滅した銃器対策部隊から連れてきた、松原^{まつはら}菜々《なな》が息を切らしつつ、必死に皆に食らいつくように走っている。

「とりあえず警備本部まで後退する！」

息を切らす様子もなく、小隊長が答えた。

アタシのいる第一小隊は、名古屋の市街地の治安維持任務についていた。軍も治安出動していたが、上層部の、いわゆる縄張り争いによって、警察と軍の管轄区域は分かれていた。

日没と同時に、全国でクルピン・ウイルスが大流行。人口が多い名古屋の市街地には、すぐに多くのウイルス感染者が溢れた。

全ての公安官には感染者を射殺する権限が与えられ、アタシ達も民間人を保護する為、感染者を射殺した。しかし時間が経つにつれ、感染者と民間人が入り乱れてしまい、アタシ達警察は発砲できなくなつた。

こうなると取るべき手段は、民間人と感染者の区別なく射殺するしかない。だが上層部は責任問題に発展するのを恐れたのか、現場に下りてくる命令は「感染者のみの射殺」だけだった。

アタシ達は警察に所属する以上、命令に従うしかなかった。警察は市民に奉仕するものであり、その市民を射殺するの気が引けた。安全な国家である日本では、職務中に銃すら撃つたことがない警察官が多かった、という警察官達の事情もあったせいだろう。

その代償は、警察官達の血だった。

感染者との区別がつかず、保護したという民間人が咬まれて感染していたり、あるいは間違つて感染者を保護したり。

訓練でもあまり銃を撃つことが無いせいで、弾丸を浪費した挙句、感染者に囲まれた時に弾切れになったり。

プレッシャーに耐え切れず、職場を放棄してしまつたり。

警察官たちは次々と死んでいった。ワクチンを接種していたせいで

感染することは無かったが、それは喰われて死ぬ、という運命を警官達にもたらした（幸い感染者は首を重点的に狙い、頸動脈をやられて即死する警官が多かった）。

アタシ達のS A T第一小隊は練度、装備とも優れていたの、最初の内犠牲者は出なかった。しかし押し寄せる感染者達の前に、一人が斃れると、次々に隊員達は死んでいった。

アタシは小隊長に民間人と感染者の無差別射殺を進言したが、小隊長はアタシの進言を受け付けず、代わりに後退するという選択肢を取った。

別に小隊長が悪いわけではない。本部から下って来た命令が「感染者のみ射殺」である以上、それに従うしかない。だがそれだと、アタシ達は真価を発揮できず、民間人が感染者から判別している間に殺されてしまう。

そんな死に方、割に合わない。アタシはそう思った。

死ぬならせめて、全力を出してから死にたい。

軍はとつくに無差別射殺を行っているらしい。その証拠に、軍の担当区域の方から爆発音が聞こえてくる。

軍は兵士一人一人が高殺傷力の突撃銃や軽機関銃を所持しているのに対し、警察は大部分の警官が拳銃のみ。治安が悪くなり始め、リボルバーからオートマチックに更新されていたが、それでも不十分だ。

S A Tや銃器対策部隊などの精鋭でも、装備の殆どは短機関銃だ。殺傷力に優れている突撃銃は配備数が少ないし、高殺傷力を持つ狙撃銃は、そもそも運用する狙撃班自体が少ない。

どう考えたって、この事態は殲滅戦の様相を呈している。もはやこれは戦争だ。アタシ達は警官だ。警官は治安を守るもので、軍と違

って戦争をするべきものではない。

軍は警察とは違い、自己完結した戦力・輸送力を持っている。4軍合わせて数千機に上る航空機を持って避難民を輸送しているのに、警察はどうにか3ケタに届く程度の航空機しか持っていない。これじゃ避難民の輸送はおろか、自分達の移動にすら事欠く始末である。こうなった以上、アタシ達はさっさと撤退すべきなのだ。

「・・・ウワーツ!!!」

その悲鳴で、アタシは現実を引き戻された。

アタシの前を走る若いSAT隊員が、上から降って来た感染者に組みつかれた。感染者は抵抗する隊員を怪力でねじ伏せ、その首に喰らいつく。

隊員は、かすれた悲鳴と共に首から血を噴出させた。

菜々が悲鳴を上げて足を止め、他の隊員達が短機関銃を構える。

「この野郎!!」

アタシ達は感染者に向けて、手にしたMP-5F短機関銃を撃った。感染者の体が穴だらけになり、地面に崩れ落ちる。

小隊長が倒れた隊員に駆け寄って脈を測ったが、その隊員はすでに死んでいた。出血多量のせいだろうか。

「上から来ます、小隊長!!!」

と悲鳴が続き、アタシは素早く上を見て、そして目を見開いた。

路地の両脇のビルの壁面を、感染者がパイプやエアコンの屋外機などを掴み、こちらに降りて来ていた。短機関銃の一斉射撃で何体かビルから剥がれ落ちて落下したが、それでも多くの感染者が地面に

降り立った。

そして感染者達は地面に降り立った直後、短距離走の選手並みのスピードでアタシ達に向かってきた。

「逃げる！逃げるんだ！！」

小隊長が叫び、隊員達は一斉に路地の奥へ向けて走り出す。

だがアタシは、もう警察と一緒に行動するのはいやだった。警察官の身分で言うのも何だけど。

まず責任逃れの意志見え見えの射殺命令を下す上層部。そしてそれに何の意義も唱ええず、行動も起こさない同僚達。

どうせ本部に着いたって、また別の場所に派遣され、現場を理解していない命令に従って殺される羽目になるのがオチだ。

「事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてんだ！」という台詞のある有名刑事ドラマがあったが、今無性にその言葉を叫びたい。

だから、アタシは警察を脱走する事にした。

路地の奥に向けて走っていく同僚達のうち、菜々の肩をアタシは掴んだ。

「何するんですか！？さっさと逃げないと」

「アンタ、このまま本部に戻っても、また別の場所に派遣されて無茶な命令下されて死ぬだけだよ。とっくに全滅したアンタの同僚みたいに、アンタ死にたい？」

「っ！しかし本官は……」

「あーっ、もう！アンタ死にたいの？生きたいの？どっち？」

まだ菜々は決心出来ないようだったが、アタシはさっさと部隊を抜け出す算段をし始めていた。

同僚達が路地の奥へ走って行くのを見届けた後、路地の脇にある金網を上りはじめた。金網の高さは大人の身長よりちよっと上くらいなので、すぐさま頂上に達し、アタシは金網から飛び降りた。

「ほら、さっさと来な!!」

アタシが発破を掛けたせいで、ようやく菜々は決心がついたようだった。慌てて短機関銃をスリングで背中に吊ると、金網を上り始める。

すでに着地していたアタシはすぐに短機関銃を構え、左右を警戒。

後ろから菜々を追ってきて金網を上りはじめた感染者を撃ち殺すと、アタシと菜々はビルとビルの僅かな40センチもない隙間を通りはじめた。

元々痩せている体型だったアタシと菜々は、防弾チョッキを装着してもギリギリビルの隙間を通る事が出来た。対して感染者達は、知恵が無い事もあって、アタシ達を通るビルの隙間の前を右往左往するだけだった。

獲物を逃した事が悔しいのか、感染者の一体が吠えた。射殺しようかと思っただが、必要ないので止めた。どの道、弾だつて残り少ない途中、アタシ達がいけないことに同僚達は気づいたらしく、無線でアタシと菜々の名を呼ぶのが聞こえた。返事をしないと、アタシ達は死んだものと思ったのか、それっきり通信は来なくなった。

アタシ達はわずかな隙間を力二のように横歩きでひたすら進み、やがて大通りに出た。大通りのあちこちでは車が横転・炎上していたが、感染者や民間人の姿は見えなかった。

既に全員が感染してしまったか、あるいは民間人は逃げ出し、それ
を感染者が追って行ったのか。どちらでもいいが、無駄に交戦せず
に済むというのはラッキーだ。

菜々はアタシについて行くしかないと思ったのか、最早何も言わな
かった。

アタシはMP・5Fを構え、菜々はMP・5Kを構えると、無人の
大通りを駆けて行った。

数十分も走ると、軍の担当区域に近づいてきたらしく、あちこちか
ら銃声や爆発音が聞こえてきた。ビルの合間から見える空は赤く染
まり、何機ものヘリが乱舞している。

この状況から察するに、軍はまだ健闘しているのだろう。だがそれ
は同時に、感染者がまだ多くいることを示していた。

これは、さっさと軍の司令部を見つけ合流しなければやばい。ア
タシはそう思い、駆け出した。

銃口と視線の向きを一体化させ、ビルとビルの隙間、そして上も注
意しつつ前に進む。歩道には死体や血だまりがあちこちに散乱し、
そうとう感染者が発生している事を思わせる。

しばらく進むと、大きなデパートが建っていた。デパートの内部を
通っていけば、より早く軍の司令部のある西側区域に進めるだろう。
アタシはそう思い、デパートに向けて進んでいった。接近戦になるだ
ろうが、アタシは接近戦は得意だ。菜々はどうかは知らないが、機
動隊の中でも選抜された銃器対策部隊に籍を置いていた以上、それ
なりに役に立つだろう。

菜々が閉まっていた入り口のガラス戸を開き、アタシが短機関銃を
構えつつデパート内部に足を踏み入れた瞬間、

「動くな！」

と声が響き、通路の向こうから強烈な光源が現れた。光を手をかざして遮り、光源の正体を確認する。

通路の向こうにいたのは、フラッシュライトを装着した突撃銃を構える兵士達だった。

数分後、アタシは彼らに連れられて、デパート内部に設けられたという司令部に向かっていた。兵士達によると、軍も被害が大きく、司令部を放棄して新しくここに拠点を設けたのだという。

警察を脱走したことは知られたくないので、アタシと菜々は隊からはぐれたということにして誤魔化した。菜々は本当の事を言おうとしたが、アタシが口を塞いで止めさせる。

おおた大田と名乗った二等陸曹は、アタシ達に「ここで待っていてください」と言うと、いずこかへと走っていった。

元は衣服売り場だったらしい1階の空間は、いまや負傷兵が横になるベッドや、大型の無線機がいくつも並ぶ野戦司令部兼野戦病院と化していた。

鉄パイプと布を組み合わせただけの簡素なベッドに横たわる兵士達は、皆腕や足に咬み傷を負っていた。中には腕の肉を大きく抉られ、痛みに泣き叫ぶ兵士もいる。

そして負傷した兵士達の間を、赤十字の腕章を付けた衛生兵や医官が駆け回り、モルヒネを打ったり点滴をぶら下げている。

元は会計所だったらしきカウンターの上には、今やレジの代わりに大きなデジタル無線機が置かれていた。カウンターにいるのはパートのおばさんでは無く、迷彩服を着たいかつい兵士達である。

ちなみに元々あつたらしきレジは、無傷のまま床に転がっていた。

「空軍小松基地からF-22Jが2機、F-15EJ2機が出撃。どちらも爆装しています」

「太平洋上の海軍空母『加賀』からは、F-35Jが4機。海兵隊広島基地からは、F/A-18Jが4機出撃。どちらも対地装備とことです」

無線機の前に並ぶ通信兵が、せわしなくイヤホンとマイクを弄りつつ報告する。彼らの背後では、指揮官らしき壮年の佐官が指示を飛ばしていた。

菜々は心配そうにあちこちを見回し、負傷した兵士達の傷口を見て、気味が悪そうな表情をしていた。

「小松から計4機か……、少ないな」

「仕方ないでしょう。今や朝鮮半島は混乱の極みにあります。紛争が勃発してもおかしくない状況なので、それを警戒しているのでは？」

「まあ全部で12機来るから、市内を焼き尽くすには十分だろう」

佐官はそう通信兵と言葉を交わすと、デパート内を走り回っている兵士達に向けて、大声で言った。

「よし、全員聞け！『ハンマーダウン』指令が司令部から下された。30分以内にここを撤収する！負傷者はヘリで優先的に輸送する、他は車両で移動だ」

兵士達はそれを聞いた瞬間、物凄い勢いで後片付けを始めた。ベッドで呻いている負傷者を担架で運び出し、大型の無線機を分解し始める。

大田が戻ってきたので、アタシは何が起こるのか訊いた。大田の答えは、

「『ハンマードウン』が実行されます」

との簡潔な答えだった。

何のことかさっぱりなので、アタシに代わって菜々が訊く。

「ハンマードウンって何ですか？」

「つまり、被害甚大です、これ以上被害を拡大させない為に、市内全域をふっ飛ばしましょうって事です」

「それって、まだ避難してない民間人はどうなるんですか？」

大田は苦痛の表情を見せた後、

「・・・指定時間が来たら、無差別爆撃が実施されます」

と答えた。

つまり、時間が来れば民間人でも爆撃するという事だ。

菜々がその答えに異議を唱えたが、アタシが制止した。この現状で生き残ってる民間人なんてそんなにいないだろうし、被害は最小限に収まるだろうと、大田は言っていた。

「30分以内に全要員が市内から脱出します。あなた達もへりに乗って脱出してください」

大田はそう言い残し、自らも撤収準備に加わりに行った。

。菜々は不安そうな顔でアタシを見上げてきた（アタシは身長が高い）

どうするのかと訊かれたが、アタシにはどうしようもない。いくら市内に民間人が残っていても、アタシ達に彼らの位置を知るすべはないし、そこまで助けに行く事はできない。軍なら話は別だろうが、既に撤収準備を進めている軍が助けに行く可能性はゼロに近いだろう。

「……どうしようもないわね」

アタシは、その言葉を言うのが精一杯だった。

10分後、アタシ達は輸送ヘリの着陸場所に指定されている交差点にいた。軍で保護されていた大部分の民間人は既にヘリに載せられ、今頃は名古屋市を脱出しているだろう。

そしてその臨時のヘリポートを守る為に、中隊規模の軍が展開していた。どこからやって来たのか戦車や装甲戦闘車まで戦闘に加わり、時折現れる感染者の群れを戦車砲や機関砲で吹き飛ばしている。

「戦車の近くに寄らないで下さい！鼓膜が破れます！」

大田がそう、声を枯らして怒鳴った。

『弾種榴弾！2時方向、距離800に目標の集団！』

『目標捕捉！』

『撃て！！』

戦車兵達の交信が聞こえ、直後、10式戦車の主砲から轟音と共に光の矢が飛び出した。矢は真っ直ぐ大通りの感染者の集団のど真ん中に突っ込み、直後、爆発が起きた。

着陸するのに邪魔な電柱や電線が排除された交差点に、1機のブラックホーク汎用ヘリが舞い降りてきた。ヘリの側面のスライディングドアが開き、周囲の安全が確認のち、ゾロゾロと残っていた民間人が乗り込んでいく。ヘリにはまだスペースが残っているので、アタシ達もこのヘリに乗っていくことになっていた。

民間人を見捨てて逃げる事が悔しいのか、菜々が俯いたまま前に進む。そりゃアタシだって悔しい。市民を守る為に警察に入ったのに、今やほうほうの体で逃げ出すのだ。

やがてアタシ達がヘリに乗る番が近づき、アタシの前に並んでいた民間人がヘリに乗り込む。アタシも乗ろうとした瞬間、

「誰だ!？」

という声が背後で交錯した。

振り返ると、兵士達が歩道にある地下鉄入り口に向けて銃を構えていた。目を凝らすと、そこには5人程の人影があった。

サーチライトが照射され、その人影を光の下にさらす。

どうやら5つの人影は、普通の民間人のようだった。服には血で汚れた形跡はないし、顔が青白かったり怪我もしていない。

と、次の瞬間、彼らは悲鳴を上げて地下鉄の入り口から地下へ潜ってしまった。

どうやら軍が無差別発砲していたのを思い出し、殺されると思ったのではないか。現に兵士達は、無意識の内に彼らに銃口を向けていた。

ただ、誰一人として彼らを保護しようと思っかけて追いかける者はいなかった。撤収するのが最優先で、保護するまで戦力が回らないのだろう。

その様子を見たアタシの後ろにいた菜々は、彼らが入っていった地

下鉄入り口向けて走り出した。すんでの所で大田が菜々の肩を掴み、

「どこに行くんですか！？さっさとへりに乗ってください！」

と怒鳴った。

菜々は太田を見た。その強烈な意思を持つ視線に、大田が無意識に一步後退する。

「彼らを助けられないんですか！？」

「『ハンマードウン』が実行されます、助ける余裕はありません！」
「なら本官が助けに行きます！！！」

菜々はそう言い、再び走り出そうとした。

太田を始めとする兵士達は困惑した表情を見せていたが、説得が無理だと察したのか、

「……わかりました。じゃあコレを持って行ってください」

と大田が言い、一本の発炎筒フレアを差し出した。

大田によると市内にはまだ数機のヘリが上空を飛行しているらしく、爆撃実行前に広い場所でフレアを炊けば、それらのヘリが救助に来てくれるという。

「気をつけて。無線は軍の周波数と共用のままでしたよね？」

「はい！」

菜々はそう言い、駆け出した。

さっさと避難するのもよかったが、菜々を一人で行かせるのは後味が悪い。

「……アタシも行くよ!!」

と言い、菜々と一緒に民間人を連れ戻すべくアタシも菜々と走った。

『……り返す、市内の全部隊へ。15分以内にハンマーダウン指令が実行される。まだ避難できていない要員は、至急避難場所に向かうか、フレアを炊くか、照明弾を撃ち上げてへりに回収を要請せよ。なお、爆撃実行3分前にサイレンを流す。繰り返す、市内の全部隊へ……』

先程から、軍による警告の放送が流れていた。

地下鉄構内は意外と広く、アタシ達が入った入り口から別の入り口まで結構な距離がある。

アタシ達は地下鉄の構内を駆け抜け、逃げた民間人を保護すべく追いかけていた。

「待って下さい！本官達は保護しに来たんです！」

奈々がそう叫んだが、民間人達が立ち止まることは無かった。5人ほどがアタシ達の数メートル前を走っていて、必死にアタシ達から逃げているのが背中からつたわってくる。多分、捕まったら殺されるとでも思ってるのだろう。

あーめんどくさい。このまま逃げられ続けたら、軍に回収される時間になくなってしまう。

そう思ったアタシは立ち止まり、背中に回していたMP-5F短機関銃を構えると、走り続ける彼らの足元めがけて一発発砲した。

「ひいつー!!」

9mm弾が彼らの足元に弾痕を穿ち、悲鳴を上げ民間人達が立ち止まる。

その様子を見た奈々がアタシに抗議の声をあげた。

「ちよつ、何してんですか!?!」

「仕方ないじゃん、止まらないんだから。それとも、他に手段はあったの?」

「もつとよく考えて下さい!」

アタシ達はそんな事をいいつつ、民間人達に近付いて行く。

アタシ達が近付いてきたことに気付いた民間人達が、悲鳴を上げて座り込んだ。頭を両手で抱え、震える女性もいる。

「こ、殺さないで!」

「大丈夫です。本官達はあなた達を保護しに来ただけです。あ、本官は愛知県警機動隊、銃器対策部隊所属の松原奈々巡查です」

「うそ!軍はわたし達に向けて銃を撃つて来たわよ!」

若い女性が叫び、奈々が誤解を解くべく説明する。その間アタシは民間人達が咬まれていないか体を調べたが、幸い、全員無事なようだ。

ようやくアタシ達が害意を持たないのがわかったのか、安心したように立ちあがった。

「さつさと移動しましょう。軍のへりに救助を要請します」

アタシはそう言い、地上への階段めがけて駅構内を駆けだした。さつきの軍の拠点に戻るより、別の回収地点を探した方が早い。

どこに感染者が居るのかわからないので銃を構えつつ前進する。アタシの後ろに5人の民間人、そして殿を奈々が務めた。しばらく走ると、地上への入り口が現れた。駅周辺の案内板を見てヘリが着陸できそうな広い場所を確認する。幸い、近くに公園があるようだ。

「こっちです！ついてきて下さい！」

アタシはそう叫び、階段を駆け上がって行った。地上に出たアタシは、空を見上げて息を飲んだ。いくつものヘリコプターが上空を南を向けて飛行している。町を空爆するらしい攻撃機のエンジンの排気炎が、空に軌跡を描いた。

アタシは民間人達をせかし、公園の方向へと走った。走るスピードはとても速かったが、死にたくないという思いが疲れに勝ったのか、民間人達は文句を言う事もなくついて来る。

公園の腰くらいの高さの策を飛び越え、芝生を踏んで走る。腰のポーチから発煙筒を取り出したアタシは、点火させて大きく振った。緑色の炎と煙が噴出し、周囲が明るくなる。発煙筒を振り回すアタシを守るように、奈々が周囲を警戒する。

1分ほどした後、北の方角から1機のヘリが現れた。どうやら陸軍のブラックホークらしい。

ブラックホークはアタシ達の存在に気付いたのか、南への進路を変更し、アタシ達に向けて徐々に高度を下げてきた。機体の先端のライトが点灯されアタシ達を照射する。

脱出できると思ったアタシ達は、笑顔で両手を大きく振った。歓声を上げる中、ブラックホークが地上から10メートル程の高度まで降りてきた。

と、その時。突然ブラックホークは高度を上げ、南に向けて飛び去って行った。

「おい、どついう事だ！？戻ってこーい！！」

民間人の中年男性が叫んだ。しかしアタシ達がいくら叫んでも、無線で呼び掛けても、ブラックホークが戻ってくる事は無い。

アタシはその事実には思考停止してしまい、棒立ちになる。と突然、公園の高い柱に設置されているスピーカーが、物悲しいサイレンの音を鳴らし始めた。

まるで甲子園の試合開始時に流れるようなサイレンだったが、今のアタシ達にとってそれは死の予告宣言だった。

爆撃実行3分前に、サイレンを流す。

アタシはその事実を忘れていた。

おそらくブラックホークは、爆撃範囲内からさっさと逃れるためにアタシ達を見捨てたのだろう。どちらにしても、これでアタシ達が市内から脱出する方法は失われた。

今現在の目標は、どうやって爆撃をやり過ぎすかだ。そこらへんの建物に隠れたって、建物ごと破壊されてしまって意味がない。

先程の地下鉄構内へ避難するしかない。アタシはそう考えると、急いで民間人達を誘導し始めた。

「間もなく軍によって空爆が行われます！さっきの地下鉄構内へ戻って下さい！！」

アタシがそう言うと、顔に恐怖の表情を浮かべた彼らは、大急ぎで地下鉄入り口へ向けて走り出した。ぼーっと突っ立っていた奈々を

どつき、アタシも彼らの後を追って走り出す。

腕時計を見ると、既に爆撃実行1分前を切っていた。上空を飛行する攻撃機の数が増え、ジェットエンジンの轟音が街に響く。

ようやく地下鉄への入り口が見えてきた、その時だった。

『スカーフェイス2-1より司令部。これよりハンマーダウンを実行する』

と、無線から流れてきた。

慌てて後方上空を振り返ると、飛行していたF-22Jラプター戦闘機の腹から、何かが投下されるのが見えた。

「やばいやばいやばい！早く！！」

皆転がるように地下鉄構内へと駆け込み、誰も残っていない事を確認してからアタシも後に続いた。

階段を半分降り切った時、地震でも起きたかのように地面が揺れ、続いて狭い入口から見える空が明るくなった。天井にヒビが走り、大きなコンクリート片が崩落してくる。

「巡查長、早く！！」

奈々が手招きする。

アタシは階段の残りをジャンプして飛び降り、直後、爆発と共に地下鉄の入り口が完全に崩れ落ちた。

地下鉄構内に避難してから数時間が経過した。腕時計を見ると、既に午前4時を過ぎている。

政府は本州を封鎖・放棄したらしく、もう無事な地域とは移動が出来ないようだ。発電所も無人になったせいか地下街の電灯は一切消え、周囲は闇に包まれた。

したがってアタシ達も、感染者ひしめく本州に閉じ込められた事となる。

それを知った民間人はアタシ達に詰め寄ってきたが、どうしようもないと答えると、おとなしくしゃがみ込み、すすり泣き始めた。

やがてすすり泣く声も収まってきた頃、何かが倒れるような金属音がした。

アタシと菜々は即座に短機関銃を構え、ハンドガードにマウントされたフラッシュライトを点灯した。闇の中ではライトが照らす範囲は狭く、アタシと菜々はあちこちに銃口を向けていた。

動物の呻き声のような音が響き、続いてライトが一瞬何かが動くのを照らし出した。

周囲は沈黙に包まれていたが、恐怖に耐え切れなくなったのか、一人の男が悲鳴を上げて逃げ出した。

その瞬間、アタシ達のライトが感染者の群れを照らし出し、即アタシ達は引き金を引いた。

暗い地下街を銃火が照らし出し、銃声と薬莖が地面に落ちる金属音、そして感染者達の呻き声と悲鳴が反響する。

他の民間人たちも我先に逃げ出した。今までは延焼が広がっていた危険だと思っていたので地下街にいたのだが、これでは地上の方が安全だったかもしれない。

「下がって、下がって!!」

菜々が悲鳴に近い声で怒鳴り、アタシ達も銃を撃ちながら後退する。9mm弾の直撃を喰らった感染者が、地面をのた打ち回る。

とその瞬間、順調に空薬莖を排出していたMP-5Fが、ガチツという音と共に薬莖を排出するのを止めた。まだ弾倉内に弾は残っているはずなので、きっと弾詰まりに違いない。

アタシは舌打ちして、腿のホルスターからグロツク19自動拳銃を抜いた。弾幕が薄くなった一瞬に近づいてきた感染者を打ち倒し、アタシ達も地上への入り口目掛けて走り出していた。

何度か拳銃の弾倉を入れ替え、階段を上がって地上に出たアタシは、予想外の光景に息を飲んだ。

軍による徹底的な空爆が行われた結果、地上にある物は真っ黒に焼け焦げていた。

骨組みだけになった自動車。溶けて固まった電話ボックスだったらしき物体。ビルは、地上付近が真っ黒に焼け焦げていた。ナパームだけでなくクラスター爆弾も使用したのか、コンクリートの地面が耕されている場所もあった。街路樹は殆どが燃えて炭になり、未だに燃え続けている木もある。

そして、地上のあちこちに横たわる、黒焦げになったマネキンのような物体。肉が焼けたような臭いが、それらが何だったのかを教えてください。

アタシが感傷に浸っている間に、感染者達は続々と地上に出て来ていた。菜々はMP-5K短機関銃の弾を撃ちつくしたらしく、拳銃に持ち替えて発砲していた。

いよいよこれまでか。アタシがそう観念した瞬間、背後から車両の

エンジン音が聞こえた。
振り返ると、そこには数台の装甲車両が停まっていた。装甲車と言っても、警察が保有するバスに防弾用の鉄板を張ったような代物ではない。軍用の、8輪で動き砲弾の破片にも耐えられる装甲車だった。

「伏せてください！」

女の声が響き、とつさにアタシ達は地面に伏せる。瞬間、大型装甲車の屋根に設置された無人の重機関銃が、轟音と共に発砲を開始した。

アタシ達に迫っていた感染者たちは、高威力の重機関銃弾によってあっという間に挽肉にされていた。地上に出てきた感染者は一掃されたが、地下鉄の入り口からなおも感染者達が湧いてくる。

と、今度は装甲車の後部ドアが開き、そこから迷彩服姿の兵士達が降りてきた。1人が太くて長い筒のような物を構える。

「後方安全確認！」

「確認よし！」

「撃てっ！」

次の瞬間、筒から炎が噴出し、直後、地下鉄の入り口が感染者を下敷きにして崩れていた。

その光景を見て、アタシは兵士が構えていた筒が携帯式の対戦車火器だということに気づいた。無駄無く感染者を掃討していく彼らの動きは、まさに訓練された殺しのプロだった。

やがて地上の感染者が全滅した後、数名の兵士達がアタシ達に近寄ってきた。

「助かりました。自分は愛知県警SAT第一小隊、稲森恵美巡查長です」

「ほ、本官は愛知県警機動隊銃器対策部隊所属の、松原菜々巡查であります」

兵士たちはアタシ達を上から下まで見回していたが、やがて彼らの中から一人が歩み出た。どうやら女らしい。

「私は陸軍第10師団所属、大山です。あなた達はなぜここに？」

大山と名乗った二等陸尉がどうやらこの部隊の指揮官らしい。アタシ達がここに残っている理由を告げると、彼らは哀れみの目でアタシ達を見た。

兵士たちはアタシ達が咬まれていないか確認すると、それぞれ自分達の乗ってきた車両に戻り始めた。

「ところで大山さん、あなた達はどうして本州に残ってるんですか？脱出できなかつたんですか？」

アタシが訊くと、大山は曖昧な笑みを浮かべ、「まあ、そんなことです」と言った。

「それより、自分達の拠点に来ませんか？少なくともここよりはマシだと思われませんが」

「拠点？もう拠点なんて作つたんですか？」

アタシは軍が既に拠点を築いたことに若干疑問を抱いたが、ありがたくその申し出を受けた。どのみち、ここに残ってもいいことはない。

アタシ達が兵士達が運転してきた無人のトラックの荷台に乗せられると、車列は出発し、次の生存者を探すために出発した。

こうして、アタシ達の名古屋刑務所でのサバイバル生活が始まった。
・・・・。

第107話 side others (後書き)

御意見、御感想、アイディアお待ちしております。

第108話 side 龍

翌日、朝。

食料と安全と引き換えに、早速俺達は働かされる事となった。物資の調達、警備、野菜の栽培、狩猟エトセトラ。

俺と中沢は、今日は市内の住居にダークシーカーズが潜んでいないか、調査する任務を与えられた。中沢に車両をグラウンドまで持ってこさせる間、俺は医務室に收容されている牧のお見舞いに行くことにした。

医務室は收容棟と職員棟にあるが、牧は職員用の医務室に收容されている。ちなみに收容棟にある医務室は、主に囚人用だ。

「おう、大丈夫か牧？」

「何だ東か………。何の用だよ？」

医務室に入った俺は、武器を預けてから診察室に入り、ベッドに横たわる牧に片手を上げて挨拶した。牧は俺の姿を見るとすぐさま上体を起こしたので、案外怪我は重くないのかもしれない。

俺はベッドの脇に置いてあったパイプ椅子を引き寄せ、そこに座った。

「お前、怪我の具合はどうだ？」

「まあまあだ。先生の話によると弾は貫通しているし、徹甲弾だったおかげで傷口も小さい。骨も重要な血管も傷ついてないから、リ

ハビリ含めて一ヶ月以内に復帰できるそうだ」

牧はそう言い、布団を捲って自らの太腿を見せた。包帯が巻かれている以外、余り変化はない。傷口の周辺が炎症で腫れているくらいだ。

牧は真剣な表情になると、

「で、今後の行動はどうするんだ？」

と訊いてきた。

俺は牧に、ここの駐屯部隊に加わることに。しばらく四国行きは延期すること。そして福田達が囚人達を使って人体実験を行い、ワクチンと治療薬を開発中であることを伝えた。

牧は人体実験を行っている事を知って驚いていたが、それ以上にここに福田がいることに驚いていた。やはり牧も、福田が治療薬開発で重要なポジションを占めているとは思っていなかったらしい。しかし、人体実験を行っているのは性格からして予想の範囲内だと言っていたが。

「そうだ、これは見舞い品だ」

俺はそう言い、一緒に持って来た見舞い品を、ベッドの隣の小さな棚の上に置いた。

図書室から借りてきたマンガの週刊誌（無論2018年5月号分で打ち止め）、同じく図書室にあった映画のDVDとポータブルプレイヤー。そして牧の私物の携帯音楽プレイヤー。

牧はうれしそうにそれらの品々を受け取っていたが、マンガを取り上げると、

「気になったんだが、これらはどっから持って来たんだ？」

と訊いてきた。

「図書室からだよ」

「図書室？最近の図書室はマンガまで置いてあるのか」

俺は笑ってそれを否定した。

刑務所内にあった図書室は、最初僅かな小説くらいしか置いていなかった。しかし数十人の兵士達が刑務所にやって来たので、彼らの暇つぶし用のマンガや小説が図書室に置かれるようになったのだ。そして本州が封鎖された後は、市内のレンタルショップから回収してきたDVDやゲーム。そして書店から調達した本などが置かれ、兵士達の娯楽の為に蔵書はどんどん増えていった。という訳だ。

「何か読みたい本があったら誰かに言え。図書室に大概揃ってるから、持ってきてくれるだろ」

「わかった。そうするよ」

牧と言葉を交わすと、俺は椅子から立ち上がった。「じゃ」と牧に言い、俺は医務室から出て行く。

俺は医務室の受付で預けていたG36Cライフルを返してもらおうと、今度はグラウンドに出るべく出口へと歩き出す。

職員棟の出口の正面には、中沢の乗る新73式小型トラックが停まっていた。

このトラックは通称パジエロと呼ばれ、最近では1/2セトトラックとも呼称されている。主に人員輸送に用いられるが、機関銃を搭載した威力偵察型や、ミサイルを装備した対戦車型、無線機を装備した指揮通信車など、様々な用途に使える万能車両である。

俺がパジエロの助手席に乗ると、早速中沢が車を出発させる。幌を

取り払っているので、冷たい外気が直接俺達に吹き付けてくる。

「牧の具合はどうだった？」

「そんなに怪我は酷くなさそうだった。あと一ヶ月もすれば復帰できそうだ」

「そうか。よかったよかった」

俺と中沢がそう話しているうちに、パジェロは刑務所の通用門までやって来た。門の警備所に詰めている兵士に名を名乗ると、すぐさま刑務所から出ることを許可された。

門を出ると、中沢がアクセルを踏んでパジェロのスピードを上げる。俺と中沢は、豊田市市街地に向け、順調に進んでいった。

第108話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第109話 side 龍(前書き)

いつの間にか60万アクセスを突破してました……。
いつも見てくださる皆様には、本当に感謝感激の嵐です!!

俺と中沢の乗ったパジェロは、豊田市内の地図にマークされた、一軒のマンションの前で停まった。今日はこのマンションで、室内検査と利用可能なものを回収することになっている。

マンションは5階建てで少し小さいイメージを受ける。1階の庭は、手入れする者がいないせいで、草木が伸び放題になっていた。

エントランスから入って一タドアを破って部屋に侵入するのは面倒なので、俺と中沢はフェンスを越え、庭から窓ガラスを破って部屋に侵入することにした。

俺達はそれぞれ武器を持つと、フェンスをよじ登った。フェンスには藁があちこちに絡み付いている。

フェンスから飛び降りると、俺達は庭を経由し、マンションの一番端の部屋へと向かった。窓はカーテンで塞がれていて、内部の様子は伺えない。

あちこちの部屋のベランダでは、取り込む暇も無かったのか、カビの生えた服らしい物体が、風の吹くままに揺れている。

俺が一番端の部屋の窓の前に立つと、G36Cを持ち替え、ストックを窓の鍵付近のガラスへと叩きつけた。ガラスが小さく割れ、すぐさま俺が手をつ込み、鍵を捻る。

鍵が解除され、すぐさま中沢が窓をスライドさせ、部屋に突入した。中沢の持つミニミ軽機関銃は室内では取り回しが悪いので、今回はベネリM3散弾銃のショートモデルを装備していた。ちなみにミニミはパジェロに置きっぱなしである。

俺は中沢に続き、室内に突入した。カーテンをくぐり、すぐさまG36Cを構えたが、室内には誰もいなかった。

中沢は俺に目配せすると、先頭に立って部屋の中を進んでいった。散弾銃は閉所では高威力を発揮するので、中沢を先頭にすることを決めておいたのだ。

薄暗いリビングを通り、キッチン、小部屋、そしてかび臭い風呂とトイレ、玄関も確認した。しかし、リビングと同じく、人間も感染者もどこにもいなかった。

「クリア！」

中沢が叫び、俺達は構えていた銃を下げた。すぐさま、使えそうな物を探し出す。

中沢がキッチンを漁っている間、俺はさっき（ガラスを割って）開けた窓に近づき、カーテンを思いっきり引っ張って、カーテンレールごと叩き落した。これは、ダークシーカーズがこの部屋を根城とするのを防ぐ為だ。

大山二尉達は本州封鎖後も、時間のある限り豊田市内の室内検査をやっていたらしい。しかし時間も人手も足りないので、大部分の建物の内部はまだ調べていないらしい。

「おつ、これは……。見ろよ、ウイスキーが3本もあるぜ」

台所を漁っていた中沢が、そう言って棚から瓶を3本取り出した。持ち帰るため、脇に下げていたバッグにウイスキーを突っ込む。

窓を破り、食料を奪っていく手口はさながら泥棒のようだが、このご時勢なので仕方が無い。

部屋の中は、俺達が部屋に侵入した際に床に落ちたガラス片と泥以外、綺麗なまま保たれていた。特に何かを備蓄していた様子もない。

恐らく、この部屋の住人達は、この部屋を出て行ったきり戻らなかつたのだろう。彼らが死んだのか、無事本州から脱出できたのか、俺には知る術がない。

その後この部屋からは缶詰数個が見つかったが、他には何も無かつた。俺達はこの部屋を出ると、すぐさま隣の部屋へと突入し、使えそうな物を回収する作業を続行した。

このマンションには各階5部屋ずつあり、俺達が1階の部屋を全て検査するのに約50分がかかった。つまり、一部屋辺り10分検査するのに必要だということだ。

1階の部屋全てを調べた俺達は、庭に積み上げておいた回収したものを持ち、塀を乗り越えてパジエロへと戻った。2階以上に侵入するには、マンションのエントランスを通って階段を上る必要があるからだ。

中沢がパジエロをエントランス前まで動かすと、再び俺達はパジエロを降りた。エントランスのガラスの自動ドアは大きく割れ、周辺にガラス片と、血痕らしき茶色い塊がこびり付いていた。

「なあ、ここってダークシーカーズがいるんじゃない？」
「仕方ないだろ。元々室内検査が俺達の仕事だしな」

俺はそう言うと、中沢を先頭に立たせ、通路を進んでいった。狭い階段を上り、2階の廊下に到着する。

さっきは1階だったので窓を破って侵入することが可能だったが、2階ではそれも行かない。マンションのドアは金属製で、蹴破るのは難しい。

ドアを爆薬で吹っ飛ばしたり、散弾銃のスラッグ弾で鍵を破壊する方法もあるが、それだと弾や爆薬がもつた^{ラム}くない。槌をドアに叩き

つけて一々破壊していたら、あっと言う間に体力がなくなってしまう。

なので、どこか鍵がかけられていない部屋を探し、その部屋からベランダを経由し、別の部屋の窓を破って侵入することにした。本州封鎖時の混乱のせいで、どこかの部屋の鍵がかかっていない事を祈るしかない。

俺と中沢は、ドアノブを捻って鍵がかかっていない部屋を探した。すぐに、鍵がかけられていない部屋が見つかり、俺と中沢は室内に侵入する。

その部屋はやはり誰もいなかったが、かわりにあちこちに血痕があった。壁、床、いたるところにあり、床には血の（乾燥して茶色だった）足跡が残っていた。ただし、死体はどこにも無い。

部屋の中は何かが暴れたように、いろいろな物が床に落ちていた。

この状況から鑑みるに、おそらく本州封鎖の少し前、日没直後に事件が起きたのだろう。

咬まれて感染したものの、まだダークシーカーにはならなかった住人が部屋に帰って来て、家にいた家族に手当てを受けていたが、その咬まれたやつがダークシーカーになって部屋の中で暴れ、負傷しながらも家族は慌てて部屋から逃げ出した、といったところか。

キッチンのカウンターには、家族らしき人達が写った写真が飾ってあった。しかし、その半分が血で汚れていた。

無言の中沢を促し、使えそうな物を探し始める。しばらく部屋を漁ると、カップラーメンが数個、そして缶詰やミネラルウォーターのボトルを見つけた。

それらを回収すると、1階と同じくカーテンを取っ払うと、窓を開

けてベランダに出た。そして『緊急時は破って隣に避難してください』と書かれた白い仕切りを破ってベランダを移動し、隣家の窓ガラスを割り、室内に侵入する。

それらの作業を繰り返し、2階の検査を全て終えた。鍵のかがついていたドアを開け、廊下に出て階段を上り、3階へと到達する。

しかし、3階でドアの鍵のかがつていない部屋はどこにも無かった。中沢が困った顔で訊いてくる。

「どうする？ショットガン使うか？」

「うーん。ラペリング道具があれば屋上から降下して侵入できるんだがな……。ま、無いものねだりしても仕方が無いし、ショットガン使うしかないな」

中沢は頷くと、ベネリM3をポンプアクションしてスラッグ弾を装填し、ドアに上下2つある蝶番に向けてぶっ放した。銃声の轟音とともに蝶番に穴が開き、中沢がトドメの蹴りを放つと、金属の引きちぎれる音と共に本来外開きであるはずのドアが、内側に向けて倒れる。

ドアが床へ倒れ、埃が空中に舞い上がる。直後に俺達は部屋へ突入した。

玄関のすぐそばの部屋を確認し、トイレ、風呂も確認する。ドアを開けてリビングに侵入した俺達は、予想外の光景に息を飲んだ。

リビングにある大きなソファには、2つのミイラ化した遺体が座っていた。そしてその足元に、床に横たわる子供くらいのミイラ化遺体が横たわっていた。

リビングには清涼飲料水の空ボトルや保存食品のパッケージがいくつも放置されていた。そのどれもが、随分前に食べられた痕跡があった。

ソファ―に座っている遺体のうち、男物の服を着た遺体の胸には、深々と包丁が突き刺さっていた。もう一体、女物の服を着たほうは、心臓を突き刺された形跡があり、右手の指が食いちぎられていた。床に横たわる子供の遺体は、全身の毛髪が抜けていた。そして女と同じく胸に刺された形跡。

「何だこれは……。家族なのか？」

中沢が呟き、俺は「……。さあ？」と答えた。俺は男のミイラ化遺体に近づき、そしてその手元に手帳が落ちているのを見つけた。手帳を拾い上げ、ページを捲る。

「5月18日

何が起こっているのかはわからないが、大変なことが起こっているようだ。そこら中で人が喰われ、いくつもの銃声が街から聞こえる。テレビを点けた所、どうやらクルピン・ウイルスというもののせいらしい。確か、3週間くらい前に東京で騒ぎが起きていたが、それと関連している、とテレビは言っていた。

(中略)

窓から下を見ると、通りでも人があちこちで喰われている。ここからは出れそうも無い。政府は本州を封鎖すると言っていたが、これでは避難所へは辿り着けないだろう。なので私たちは、救助が来るまでここに立て籠もることにする。

(中略)

政府は本州に取り残された人間は救助しないと云った。私たちにはもう、ここから逃げ出す術はない。せめて美代子と亜紀だけは逃げ延びて欲しいと思ったが、もう無理だろう。

5月19日

感染者がいなくなったので外に出たところ、朝になっていた。

とりあえず誰かと連絡を取ろうとしたが、電話は停電で使用不能。携帯は圏外になっていた。

朝食を食べた後、とりあえず食料調達の為にスーパーに向かったが、そこでは略奪が起こっていた。近所の坂田さんや大川さんを始めた人達が、物資を得る為に殺し合いをしていたのだ。

私は恐怖を感じ、そこから逃げ出したが、途中でさらにいやな光景を見てしまった。女性が道端で、銃を持ったヤクザらしき男達に暴行されていたのだ。

(中略)

5月20日

とりあえず必要な物資は、遠出して駅前の小さなコンビニで手に入ってきた。他も回ったが、すでに略奪された後だった。

車で帰る途中、銃を持った人に追いかけられた。誰かと思って見たら、美代子と仲のいい田中さんの旦那だった。趣味が狩猟と聞いてはいたが、まさか撃たれるとは思ってもいなかった。もう誰も信用できない。

そうそう、今日ここから随分北の辺りを、大きな飛行機が飛んでいた。双眼鏡で見ると、飛行機からはパラシュートが投下されていた。救援がきたのか？それとも援助物資か？どちらでもいいからさっさと助けてくれ。

5月21日

今日、私、美代子、亜紀の三人で決め事をした。

日中、人が近くにいる場合は外に出ない。誰にも見つからない。夜はしっかり鍵をかけ、さっさと眠る。

というのも、うちのマンションの近くを男達がうるついているからだ。道端で女性に乱暴し、持ち物を奪うようなやつらがいるのに、どうやって外に出る？

このマンションは感染者がいると思っているのか、やつらが近づくと心配はない。しかしもし外に出たら、すぐにやつらが襲ってくるだろう。そうになったら私は殺され、美代子と亜紀は暴行されるにちがない。

そうならないよう、感染者と暴徒から2人を守るのが私の義務だ。

今日も飛行機が北の辺りを飛んでいた。一体なんでだろう？

(略)

6月19日

食料がだいぶなくなってきた。食事は一日一回までに切り詰めているが、それでも足りない。

時々外に出ては野菜を育てているが、思ったようにはいかない。スーパーなどもとくに略奪され尽くし、なにも残ってはいない。

いい事といえばいい事のだが、昼間に外をうるつく暴徒が少なくなってきた。代わりに、夜外から聞こえてくる感染者達の呻き声が増えてきてる。

そういえば昼、屋上に上がって双眼鏡で外を監視していたら、遠く

で軍の装甲車らしきものが見えた。軍が救助に来たのか？それとも
疲れた私の幻覚か？

6月30日

食料が遂に尽きた。私は数日前から一切食べ物を口にしていない。
亜紀が外に出て、5月から毎日飛んでいる飛行機から投下されたパ
ラシュートが落ちた辺りに行ってみようと言い出した。いままでは
日中外に出るのが危険だった為、そこに行くことは無かった。しか
し、少なくなつたと言っても、まだ暴徒は外をうろついている。
私がそう言つて制止すると、亜紀は無理やり外に出て行こうとした。
すると突然、美代子が亜紀を殴つた。
今まで暴力をふるうようなことはしたかつたのに。飢えと疲れが皆
を蝕んでいるのだろう。

7月2日

今日、起きたら亜紀がいなかった。テーブルに書置きがあり、パラ
シュートが投下された場所に行つて来ると書いてあつた。
追いかけたかつたが、どこを通るかわからない。悔しいが、帰つて
くるのを待つことにする。

(中略)

日没から少し経つた後、亜紀が帰ってきた。少し顔色が悪かつたが、
本人は大丈夫だと言つていた。

しかし、部屋の鍵を閉め、少し経つと、いきなり亜紀が美代子に襲

い掛かり、指を食いちぎった！私が亜紀を殴って気絶させたが、美代子の血が止まらない。

亜紀を調べてみると、足の辺りに何か咬まれた痕があった。顔色は青白く、牙が生え、毛髪が抜け始めていた。

つまり、亜紀はどこかで感染者に咬まれ、感染してしまったのだ！そして亜紀に咬まれた美代子も感染した！

私のせいだ！自分のことしか考えず、追いかけなかった私のせいだ！だが、もうどうすることも出来ない。

私は美代子に、理性が残っている内に殺してくれと懇願された。そんな事できないと言ったが、『私を愛しているなら、せめて人間の内に殺して』と言われ、私は決心した。

気絶したままの亜紀の心臓に包丁を突き刺し、続いて美代子も刺した。美代子は笑顔のまま、逝った。

美代子は私に生きてくれと言ったが、私にもう生きる目標はない。愛する妻と娘を殺した私には、生きる価値はない。美代子と亜紀のいないこの世界に、私の居場所はない。

死ぬ前にこの日記を書いているが、もうこの日記を見る人はいないかもしれない。それでも書いているのは何故だろう？死ぬのが恐いのかもしれない。

もしこの日記を見る人がいたら、どうか、愛する人を守り抜いて欲しい。私はそれに失敗したが、あなたはそうする義務がある。そして、一人でも多くの人を救って欲しい。

美代子、亜紀。もうすぐそっちに行く。本当にすまない。許してく

れ・・・・・・・・」

日記はそこで終わっていた。

彼は愛する妻と娘を殺し、そして自ら命を絶つたのだ。物資に恵まれていた俺達とは違い、ここは略奪が激しく、日々減っていく食料。そして人間性までも失われ、食料調達に出た娘を追いかけなかった彼は、全てを失う羽目になった。

俺は日記を閉じると、元あった場所に戻した。そして手を合わせて冥福を祈り、立ち上がる。

俺の愛する人は誰なんだ？美里なのか？俺にはわからない。

俺が彼みたいな自体に陥った時、俺は美里を殺せるのか・・・・・・・・
？そうしなければならぬ時が、いつか来てしまうのか・・・・・・・・
？

第109話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

俺と中沢は指定されたマンションの部屋を全て検査した後、刑務所へと帰った。時間は4時少しを回った頃で、日没までは余裕があった。

回収した物資を補給処に搬入した後、シャワーを浴び、夕飯の時間となった。

夕飯は白米、猪の焼肉、野菜の入った味噌汁など、自給自足できるものばかりだった。食堂には全員はいらないので、時間をずらして食べる。

夕食後、俺は自由時間を与えられた。大山二尉曰く、「昼間ずっと働いていたみたいだから、今日は警戒任務には就かなくていい」だそうだ。

牢屋をリフォームした自室に戻った俺は、ベッドへと倒れこんだ。ベッドは鉄パイプを組み合わせて作った物で、簡単な作りで量産性に優れ、すぐ組み立てられるので野戦や災害時のために軍で保管されていたものだ。

元々この牢屋にいた囚人がどうなったのか、俺は考えもしない。あの福田のことだ、きっと胸糞悪いことに利用されたんだろうさ。

ベッド脇のロッカーにハンガーに掛けた迷彩服の上着を放り込み、俺はベッドの毛布へと潜り込んだ。今だ季節は冬なので、部屋の気温は低い。

腕時計を見ればまだ午後8時を少し回った頃だったが、猛烈な眠気に俺は襲われていた。昼間、マンションの部屋を一つ一つ検査した時の疲れが出ていたからだ。

敵がいるかもしれない場所への突入は、必要以上に注意してしまう。閉所での戦闘は、野戦と違って自分が死亡するリスクも高くなる。目を閉じると、あっという間に俺は眠りについた。

俺は夢の中で、過去の記憶を辿っていた。夢で見た最初の光景は、高校2年生の始業式だった。

高校2年生の始業式の日、放課後、皆がケータイのメールアドレスや電話番号を交換している中、俺は一人、自分の机に新品の教科書を詰め込んでいた。

1年の時に親友だった牧は別のクラス、交際していた美里は仕事で学校に来ていなかった。他にあまり親しい友人はいない。1年の時俺の両親が戦死し、その後皆とギクシャクした関係となってしまった。これには俺が、学校に乗り込んできた週刊誌の記者をボコボコにしたのも関係あったかもしれない。

そんな訳で俺が一人、自分の席に座っていると、突然背後から声をかけられた。

振り返ると、そこには端正な顔つきの男子生徒が座っていた。名前が確か、福田と言ったか。

「何の用だ？」

「別に。何の用もないけど、暇だから声かけてみたんだよ」

俺はおかしな奴だと思いつつ、再び前を向き、教科書を机に入れな

がら言った。

「何の用もないのか。暇人だな」

「そうだよ。本当に世の中って暇だよな。君も暇なんだろう？」

「何でそうだと思う？」

俺は軽く驚いた。確かに今日の予定は何も無いし、家に帰ったところで、待っている家族も遊ぶ友人もすることも無い。

「さつきから机に教科書を入れているけど、あまりに作業のペースがゆっくりだね。これはつまり、君が出来るだけ一つの作業にかけ時間を引き延ばして、時間を潰そうとしてるんじゃないか。そう僕は思ったんだよ」

「・・・すげえな、お前」

俺の考えを言い当てた福田に俺は驚嘆した。

そういえば1年の時、福田という名の変な奴がいる。そう何度も噂で聞いたことがあった。何でもテストは毎回全教科百点を取り、家はそこそこの名があるが、本人は変人だという噂だった。

コイツがそうなのか？俺の目には至って普通に見えるが・・・。

「あ、君いま僕の事を変人じゃないかって思ったでしょ？」

「・・・なんでわかった？」

「別に。なんとなくさ」

周りの様子を見るに、福田も俺と同じく親しい友人はいないようだ。というより、皆が福田から離れようとしているように見える。

そして福田と普通に会話している俺を、皆は驚きの目で見ているようだ。俺を指差し、ひそひそ声を交わすのが聞こえる。

だが俺は、既にコイツを気に入り始めていた。コイツといれば、何かおもしろそうな事ができる。そう直感で感じたのだ。俺は福田に手を差し出し、言った。

「東 龍だ」

福田は差し出された俺の手を見て、それから俺の顔を見た。そしてにっこり笑い、

「福田 俊二だよ。よろしく」

そう言い、俺の手を握った。

福田は、俺の紹介した牧とすぐ親しくなった。牧も福田の噂は聞いていたらしいが、実際に会うとすぐに仲良くなれたらしい。友達の少ない俺達は、必然的に一緒に行動することとなった。あちこちで遊び、遠くまで出かけ、3人でキャンプまでやった。そして遂に、学校のクラスメイトからは「3バカ」とまで呼ばれ始めた。俺達の行動は留まる事を知らず、ますますエスカレートしていった。

例えば、近隣の高校の不良生徒にカツアゲされた男子生徒を救う為、不良どもを罠にかけて恐怖に陥れて（暴力的な意味ではなく、精神的な意味で）財布を取り返したり。

教師からセクハラを受けている女子生徒を救う為、教師のパソコンにハッキングして（主に福田の仕事だった）教師の知られてはマズイ事をばらしたり。

違法薬物を購入している他クラスの生徒達を更正させるため、薬物の取引現場をビデオで撮影し（主に俺と牧の仕事だった）、警察に匿名で送りつけたり。ちなみにその映像によって生徒達は更正施設行き、販売していた暴力団員は逮捕された。

俺達は色々行動し、そして3年になった。

3年の夏休み。

クラス替えによって牧が俺達と同じクラスになった。

同級生達は受験勉強に勤しんでいたが、俺達3人は関係なかった。

俺と牧は軍に入隊することを決め、福田は勉強なんてする必要もない。

初春高校は9月の下旬に文化祭があり、そして文化祭は毎年盛り上がる。俺達も強制的に手伝いに召集され、貴重な戦力としてこき使われていた。

文化祭の手伝いの帰りに、近所の喫茶店に立ち寄ることが俺達の習慣となっていた。8月の最終日も俺達はそこに立ち寄り、そして雑談に花を咲かせる。

雑談とは言っても、今の時期が時期だけに、話題は進路関係のことになりがちだ。

「・・・で、お前は本当に海兵隊に入隊すんのか？」

「まあね。うちはビンボーだし、3年も働けば結構な額が貯まるで

しよ。そしたらら大学に行くさ」

俺が訊くと、牧はそう笑った。

今の所、俺達の進路ははっきりしている。俺と牧は海兵隊行き、福田は海外の世界最高の大学からお誘いが来ているらしい。

福田の天才さは留まるところを知らず、全国统一模試では全教科1位という、キ　ガイのような成績だ。更に福田の祖父の友人がアメリカ人で、しかも某世界最高といわれる大学の教授でもあるらしく、その教授が福田に某大学への進学を薦めているという。

「ま、僕は天才だから、余裕で卒業出来るだろうけどね」

「自分で自分を天才って……。お前、家族の同意とかは取れてんのか？」

牧が訊くと、福田は一瞬不快そうな顔をしたが、続けた。

「まあね。あの人たちは自分の事で手一杯だから、好きにしろってさ。金も出してはくれるそうだし」

福田は自分の両親を「あの人たち」という。前に少しだけ聞いたのだが、福田は家族と現在絶賛冷戦状態らしい。

どうも福田家は名家の1つで、莫大な財産を持っている。福田の祖父は病気で死期が近く、それ故親族同士で遺産の相続争いが勃発している。

問題は、福田の祖父が、福田の事を特に気に入っている事だ。福田も親族の仲で唯一祖父とは仲が良い。そして祖父は息子や娘達と仲が悪いそう。理由は主に、息子達から邪険に扱われていて、遺産しか興味がない息子達に幻滅したらしい。

福田の両親達が遺産を巡って醜い争いをしている間に、前述の理由

から祖父が財産を存命中に全て福田名義に書き換えると言ったのが、福田と両親との冷戦の理由らしい。

もともと福田は両親と仲が悪かったのだが、今回の事態がそれに追い討ちをかけた。福田の祖父は近日中に財産の名義を書き換えるようだ。

「高校生の僕が言うのもなんだけど、あの人たちは本当に腐ってるからね。福田家にマトモな人間は、僕と祖父くらいしかいないよ」「お前とそのじいちゃん、そのうち家族から暗殺されんじゃないかねえか？」

と、牧が言った。

「あの人たちならやりかねないね。本当に人間のクズだから」

福田はそう言い、コーヒーを一杯飲んだ。

このままでは重苦しい雰囲気になりかねない。そう思った俺は、別の話題を探そうとした。

直後、少し離れたカウンターの上のテレビが、特番を流し始めた。

『・・・ここからは、日韓紛争に関する速報です。防衛省は先程、陸軍と海兵隊が上陸作戦を行っていた釜山^{プサン}一帯を制圧した、との会見を開きました』

テレビに映っていたのは報道フロアから速報を伝える女子アナだった。同時に、画面情報にテロップが流れる。

店内にいた客全員の視線が、テレビへと集まった。マスターがリモコンを操作し、音量が大きくなる。

「3日前は済州島^{チエジュ}、今日はプサンか。昔なら考えられないことだな」
牧が呟いた。

会見はあっという間に終わり、こちらの損害は軽微だということ位しか伝えられなかった。場面が変わり、再びスタジオへと切り替わる。

「……それでは最前線の^{おおは}大場アナウンサーに伝えてもらいましょう。大場さん？」

「……はい、こちらは釜山の大場です！お伝えしたとおり、先程から戦闘の音が弱まっています！どうやら釜山一帯の制圧が完了したというのは事実のようです！」

画面が変わり、今度は防弾チョッキにヘルメットを被った、中年男性のアナウンサーが映った。アナの背後には陸軍の10式戦車や装甲戦闘車、そして忙しく動き回る完全武装の兵士達が映っている。

「大場さん、そちらの状況はどうですか？」

「……はい！今は軍の拠点となっている、占領された学校にいます。戦車や装甲車、更にはヘリコプターが今までは慌しく離発着していたのですが、今では時々ヘリが補給に訪れるくらいです！」

「大場さん。釜山を制圧したということで、兵士達は何か言っていますか？」

「……先程この連隊を指揮する連隊長にインタビューしたところ、「釜山を制圧したことで、これからの作戦がやりやすくなるだろう」と言っていました！」

大場アナが、戦車のエンジン音やヘリのローター音に負けないうつ、大声で言っていた。

俺達は話すのを止め、食い入るようにテレビを見ていた。店内の他

の客達も、無言でテレビを見つめている。
再び場面はスタジオに戻り、司会を中心としてコメンテーター達が並ぶ風景が映っていた。

『さて軍事評論家の佐藤^{さとう}さん。軍は3日前に済州島を占領したばかりですが、釜山上陸は昨日、制圧が完了したのは今日と、かなり速いテンポで作戦を行っていますね。作戦が上手くいっている要素は何だと思えますか？』

『そうですね……。まずは輸送力が充実していることだと思えますね。防衛軍の前身であった自衛隊では、強襲揚陸艦の類は他国に脅威を与えるとして、あまり装備されていなかったんです。しかし今では軍拡に伴い、作戦行動を行う兵士達を十分に輸送できる数が揃っていますからね。』

航空機の類も前述のように自衛隊では少なかったのですが、今では中型輸送機のC-2や大型輸送機のC-117などを大量に保有していることも作戦成功の要素だと思います。他にも長距離飛行を可能にした空中給油機や戦闘攻撃機など……』

佐藤と名乗るコメンテーターが、その後も話し続ける。

「あの佐藤ってやつ、戦争が始まってからあっちこっちの局で引っ張りだこだな」

「確かにね。戦争特番のチャンネルにしたら、どの時間もどっかの局に映ってるし」

「てか、この2週間で、どんだけギャラ稼いだんだろうな……？」

俺達はそう言葉を交わし、再びテレビへと視線を向けた。

そう、今や日本は、韓国との戦争状態に突入していたのである。
経済が低迷し、失業率が過去最高となった韓国は、政権への不満と

日本への敵意が高まっていた。韓国が不況の中、日本は軍需産業を中心として好景気に沸いており、しかも経済援助を求める韓国に対し、

「まず借金を返してもらおうか。話はそれから」

的な態度を取り、一切援助しなかったのである。

そして15日前、ついに韓国が宣戦布告無しに竹島、対馬を急襲した。日本を攻撃することで国民の不満をそらし、尚且つ対馬を占領すれば、日本を恫喝して経済援助を引き出せると踏んだのだろう。実際、一度民生党が政権を取った時など、土下座外交しかしないほど日本は弱腰だった。

しかし数年前の日本ならまだしも、今の日本は韓国を仮想敵国と定めるほど日韓関係は悪化していた。

日本国民の怒りは爆発し、報復を望む声があちこちから上がった。

即座に防衛出動が発令され、海軍の潜水艦隊により、対馬に向かっていた韓国の補給船団は全滅した。韓国軍は空挺降下、もしくはタンカーを改装した輸送艦1隻から上陸してきたので補給が続かず、数日の内に対馬は陸軍によって奪還された。

韓国に対する報復としてまず済州島を占領する事が決定した。これを阻止せんとする韓国艦隊は潜水艦と攻撃機、そして護衛艦隊の対艦ミサイルの一斉射撃で撃沈された。

空軍によって制空権を確保した後は、もはや一方的と言っていい戦いとなった。済州島に上陸した陸軍と海兵隊は損害を受けつつも、5日で済州島を制圧した。

そして3日前、遂に朝鮮半島への上陸が始まった。手始めとして釜

山に海兵隊が上陸し、そして今日釜山の制圧が終わったというわけだ。

これが数年前なら考えられないことである。防衛出動はまだしも、報復の為に敵国へ上陸することは、自衛隊時代ではあり得なかったはずだ。

「……で、美里は進路について何か言ってるのか？」

俺の正面に座っていた牧が、ずいと顔を突き出した。俺はジンジャールエールを一口飲み、言った。

「……危ないから、考え直してくれって言われた」

「まあ、当然の反応だよな」

福田が、カウンターのテレビを眺めつつ言った。今度は、スタジオでこの戦争は正しいか否かの激論が始まっていた。

既に日本側の戦死者は400名を越えている。その大半が初日に対馬で戦死した、対馬警備隊員達だった。

遺族への保障や何やらで、防衛省は頭を悩ませているらしい。

「この時期に戦争が起こってるんだもんな。しかも戦死者は400人を越えてるし、反対して当然だろうな」

牧が言った。

無論、軍に入るからには自分が死ぬ事だつて想定している。その上で決心したのだが、美里にはまだまだ説明が足りないのかもしれない。次会った時は、きちんと説得しないと。

「牧はどうなんだよ？親は何にも言わないのか？」

「別に。俺んちビンボーだし、両親は俺の進路にはとやかく言うつもりは無いらしいな」

牧が苦笑しつつ言った。

今は軍拡の真っ最中。軍は多くの兵士を必要としていて、入隊者数も増加の一途を辿るが、まだまだ人不足らしい。俺と牧は体力にも自信があるので、一般入隊ならあっさり合格できるだろう。

腕時計を見ると、そろそろ5時半を越える頃だった。そろそろ帰らなければならぬ。

俺達はコップの仲のジュースを飲み干すと、会計を済ませ、店から出た。8月の終わりということもあり、日が傾いてきている気がする。

「それじゃあ、また明日」

「ああ。2学期もよろしく!」

「学校で会おう」

俺達はそう言葉を交わし、帰宅すべく歩き出した

。

「・・・夢か」

家に帰るところで夢は終わり、俺は目を覚ました。窓から光が入って来ていて、朝の訪れを俺に告げた。

懐かしい夢だった。あの頃の俺達は、まだ希望に満ち溢れていた。世の中の汚れも知らず、数年後にこんな未来がやってくるとは、誰が想像していただろうか。

あの頃はよかった。人は皆いつかその言葉を言うが、俺も今呟いた。少なくとも、こんな死に満ちている世界より、ずっとずっとマシな世界だった。

今となつては遠い彼方に去った過去。昔みたいな世界が再建される日は、いつかやってくるのだろうか。

「・・・俺も齢をとつたな・・・」

俺はふと自嘲し、ベッドから降りた。ちょうどその時起床を告げるラッパが鳴り響く。

また今日も、生き残る為に働くか・・・。

第110話 side 龍（後書き）

御意見、御感想お待ちしています。

今回は過去を主に描きましたが、書き終わって戦争の話が多すぎた
と思いました。反省しています。

でももし日本が軍備拡張をしたら、いつかこんな風な紛争が起きる
んじゃないかなとは思っています。実際、韓国は対馬も自国の領土
だと主張していますし。

「・・・いいか、拳銃は至近距離でしか使い物にならない。しかも移動しながら当てるのは至難の業だ。まず君達には基礎から覚えてもらおう！」

ボク達の前に立つ小山さんが、拳銃を手に取りながら言った。

この刑務所に来てから4日目、ボク達は安全と食料を得る代わりに早速働く事を義務付けられた。とは言っても子供が出来る労働なんてたかが知れているので、刑務所警備のための戦力となるよう訓練を受けるのだ。

刑務所内から集められた有望そうな子供達、そしてボク達といつしよに千葉からやって来た子供は、射撃練習場代わりの小体育館へと集められた。

使われていない体育館の内部に弾丸を受けとめるための土を盛り、そして仕切りを取り付けられた射撃台が設置された射撃場には、教官となる兵士と子供達が並んだ。

射撃台の上には拳銃が置かれている。ボクの目の前に置かれているのは、使い慣れたFNハイパワーだ。隣の軍司の射撃台には、もはや軍司の愛銃となったベレッタM92が置いてある。

まずボク達に命じられたのは、拳銃に空の弾倉を装着して射撃姿勢をとる事だった。初春市にいたころから武器を持っていたボク達は、慣れていたので特に何も言われなかった。しかし刑務所内から集め

られた子供達は、今まで武器を持った事がないせいで、あちこちで教官の指摘を受けていた。

「腕を伸ばせ。自動拳銃を構える時は、肘を曲げるな」

「サイトを覗く時は両目を開け。片目を閉じると視界が狭くなる」

あちこちからそんな言葉が聞こえる。

今まで刑務所にいた子供達は、一度として武器を手にした事が無いらしい。というのも、少し前までは兵士が十分いて刑務所の警備は彼らに任せきりにしていたのだが、彼らの半数が戦死したことにより、刑務所の警備に穴が空いたためだ。

緊急事態ということで大人数から志願兵を募ったがそれでも足りず、仕方なく子供にも志願してもらったというわけだ。

「お、アンタ達、良い腕してそうね」

ボクがハイパワーを構えていると、急に後ろから教官の女性に声をかけられた。彼女は稲森といい、本州封鎖前は警察の特殊部隊に所属していたらしいが、本当かどうかはわからない。

「二人とも、構えた姿勢は合格。後は実際に撃って確かめるしかないね」

稲森さんはそう言って、ボクと軍司に拳銃の弾倉を差し出してきた。物資温存という名目で、訓練に使う実弾の数も大きく制限されている。なので、使用できる弾倉はそれぞれ1本だけだ。

ボクと軍司は他の子供達より、訓練のペースが早い。ボクはハイパワーの弾倉を挿入すると、スライドを引いて初弾を薬室に装填した。

安全装置を外し、20メートル程先に設置された人型のターゲット

に向けてハイパワーを構える。ターゲットは木材と紙で作られた、即席の物だ。

狙いを定め、引き金を引く。銃口から炎が噴き出し、スライドが後退して薬莖を排出する。反動をちゃんと受けとめたおかげで、放たれた9?弾はちゃんと狙った場所へ着弾した。

ターゲットの頭の部分に穴が開き、紙と木片が飛び散る。それを確認したボクは、続いて3発ほど連射した。

今度は連射したせいか、ターゲットに着弾したのは2発だけだった。頭部の中心に当たったのは1発だけ。もう1発は頭部の左端に着弾し、残り1発は外れてターゲットの後ろの土堤に突き刺さった。

「ん、やっぱり連射して当てるのは難しそうね」

稲森さんが、ボクの後ろでそう言った。少し調子に乗ったかな、と反省していると、隣の射撃台から拳銃を連射する銃声が聞こえた。

軍司が撃つたのだ。

稲森さんは軍司の狙ったターゲットボードを見て、そして口笛を吹いた。

ターゲットには、胸部から頭部にかけて、5つの穴が一直線に開いていた。軍司が撃つたのも5発だから、全弾がターゲットに着弾した事になる。

「アンタ、すごいわね。でもどうして5発連射したの？」

稲森さんがそう訊くと、軍司は再び発砲しながら答えた。

「感染者はとにかく素早く動いてきます。とりあえず1発でも撃てば動きが鈍くなるからです。その隙に連射してケリをつける、というわけです」

「まず胸を狙ったのは何で？」
「まず胸に狙いを定めて撃つと、反動で銃口が上がって首の位置あたりに狙いが来ます。もう一発撃つと、今度は頭部が狙えます。ま、これは僕の場合ですけど」

軍司はそう言うと、手にしていたスライドの後退したままのベレッタを降ろした。ボクが慌ててターゲットを見ると、ターゲットの頭部は半分無くなり、心臓がある部分には大きな穴が開いていた。ベレッタのスライドが後退しているという事は、装填していた全弾を撃ち尽くしたことになる。ターゲットの様子からして、着弾したのは15発。ベレッタの装弾数は15発。
つまり、軍司は全弾をターゲットに当てた事となる。

「・・・アンタ、やるじゃん」

稲森さんが、再び口笛を吹いて言った。
他の子供達も教官達も、驚いたようにその光景を見ていた。やがて他の子供達も発砲を始め、体育館には銃声と硝煙が立ち込めるようになった。

ボクもハイパワーに装填されていた弾を撃ち尽くし、射撃台に置いた。他の子供達は射撃経験が全くないせいで、ターゲットに当てることは困難そうだった。
射撃を終えたボクと軍司は、他の子供が射撃を終えるまでその場で待機する。カチカチと安全装置をいじっていると、突然体育館のドアが開いた。

誰か来たのかと思って振り返ると、そこにはプラカードやボードを

掲げた大人達がいた。

第111話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第112話 番外編 登場兵器紹介（前書き）

今回も趣味全開の回です。ミリタリー成分が苦手な方はご遠慮ください。

第112話 番外編 登場兵器紹介

- ・・・実在。自衛隊が採用している兵器。
- ・・・実在しているが、自衛隊は採用していない兵器。
- ・・・架空の兵器。

陸上兵器編

軽装甲機動車

小型の4輪装甲車。東達が初春市で放棄されていた2両を使用している他、マリシティ封鎖部隊、渋谷警備部隊、名古屋刑務所警備部隊も使用。

低コストの為調達数が多い。

劇中では、東達の主戦力となっている。

乗員・・・最大5名

武装・・・固定武装なし。ターレットに重機関銃や軽機関銃、ミニガン（劇中設定のみ）、乗員の小銃を据え付けられるほか、対戦車火器をハッチから構えて発射することも可能。

ハンヴィー

多目的車両。人員輸送型から対戦車ミサイル搭載型など、様々な用

途に使用されている。東達が、初春市でアメリカ陸軍日本派遣部隊のものを発見し、回収して使用。

アメリカ軍他、世界中の軍隊が使用。

劇中で登場するのは装甲強化車両。軽装甲機動車に次ぐ戦力として使用されている。

乗員・・・最大6名

武装・・・軽装甲機動車と同じく、機関銃やグレネードランチャー、対戦車ミサイルが設置可能。

12式装輪装甲車

8輪の装甲兵員輸送車。96式装輪装甲車の後継として開発された。渋谷警備部隊や名古屋刑務所警備部隊が使用。

指揮通信車型、偵察警戒車型、化学防護車型など、様々な派生型がある。海兵隊が使用するのは水陸両用モデル。

モデルはアメリカ軍の「ストライカー」装甲車と、現在開発中の「機動戦闘車」

屋根上に遠隔武器システムが設置され、乗員は車内から設置された火器を操作・攻撃が可能。

乗員・・・最大10名

武装・・・12.7mm重機関銃もしくは40mmグレネードランチャー（どちらも遠隔操作可能）。

新73式小型トラック

多目的車両。三菱のパジエロをベースとしている。名古屋刑務所警

備部隊が使用。

人員輸送から対戦車ミサイルの運搬等、用途が幅広い小型車両。通称「パジエロ」

乗員・・・最大6名

武装・・・固定武装なし。重機関銃や軽機関銃を設置することは可能。

高機動車

多目的車両。名古屋刑務所警備部隊が使用。

人員輸送、物資運搬、更には無線機や対空レーダーを搭載することが可能な中型車両。用途が幅広い。

乗員・・・最大

武装・・・固定武装なし。軽機関銃等を据え付けての射撃が可能。

73式大型トラック

輸送用トラック。東達が初春基地に放棄されていたのを使用するほか、名古屋刑務所警備部隊等も使用。

搭載可能な重量が大きく、人員・物資の輸送や対空ミサイルの発射機、レーダー車両としても用いられている。

標準積載量・・・3,5t

武装・・・なし。

10式戦車

主力戦車（MBT）。名古屋市内で民間人がへりで避難する際、感染者の群れを食い止めるために出動。

高性能の火器管制装置（FCS）を採用しており、走行中でも主砲の命中率が高い。他にも自動装填装置を採用したことで乗員が3名になっている他、モジュラー式の装甲を採用し防御力が向上している。

先代の90式戦車よりも軽量化・コストダウンされ、日本全国に配備されている。

乗員・・・3名

武装・・・44口径120mm滑腔砲1基。12.7mm重機関銃
M2 1基。74式7.62mm車載機関銃1基。

89式装甲戦闘車

歩兵戦闘車（FV）。10式戦車と共に、名古屋市内で感染者の群れを阻止するため出動。

以前は調達数が年数両と少なく、それに伴い調達価格も7億円以上と高価だった。しかし軍拡の影響で調達数が増加し、価格も下落した。

歩兵を収容し、前線での戦闘に使用される。

乗員・・・最大10名（乗員3名＋兵員7名）

武装・・・90口径35mm機関砲KDE1基。79式対舟艇対戦車誘導弾発射装置2基。74式車載7.62mm機関銃1基。

航空兵器

UH-60JA「ブラックホーク」

汎用ヘリコプター。マリンスティ封鎖時や本州封鎖時など、色々な場面で登場する。

主に人員・物資の輸送に用いられるが、ロケット弾等を搭載しての攻撃も可能。

乗員・・・最大13名

武装・・・固定武装なし。ドアや窓に機関銃を設置可能な他、ロケット弾やミサイルも搭載可能。

CH-47J「チヌーク」

大型輸送用ヘリコプター。本州封鎖時、初春基地から民間人を脱出させる場面で登場。

10トン以上の物を搭載できる為、多数の兵員の輸送や車両の空輸が可能。また、機体下部のフックで車両や物資を吊り下げて空輸できる。

乗員・・・最大32名

武装・・・固定武装なし。ドアや後部ランプに機関銃等を設置できる。

EH-101「マーリン」

掃海・輸送用ヘリコプター。本州封鎖時、海軍機が総理大臣を輸送する場面で登場。

主に掃海具を搭載しての機雷掃海に用いられるが、強襲・輸送用ヘリコプターとしても使用可能。

乗員・・・最大33名

武装・・・固定武装なし。ドアや後部ランプに機関銃等を設置できる。

F-2

戦闘攻撃機。マリシティ封鎖時に、「滅菌作戦」を実行するため、クラスター爆弾やナパーム弾を搭載して登場。マリシティを焼け野原にした。

アメリカ製「F-16」戦闘機を基に、日米共同開発された機体。

元々は対艦攻撃機として設計されたが、空対地、空対空戦闘も可能。

乗員・・・1名（A型） 2名（B型）

武装・・・M61バルカン砲。他にミサイルや爆弾を搭載可能。

F-22J「ラプター」

戦闘機。本州封鎖時に、名古屋市を空爆する「ハンマーダウン」指令を実行する為、2機が小松基地より出撃。

老朽化したF-4EJ「ファントム」戦闘機を代替するため、導入が決定された（劇中設定のみ）。

ステルス性能を持ち、世界最強の戦闘機とも言われている。

乗員・・・1名

武装・・・M61バルカン砲。他にミサイルや爆弾を搭載可能。

F-15EJ「ストライクイーグル」

戦闘爆撃機。本州封鎖時に、名古屋市を空爆する為、2機が小松基地より出撃。

F-15「イーグル」を基にして作られた戦闘爆撃機。武器搭載量が多く、長距離を飛行しての爆撃が可能。

空軍に先制攻撃能力を持たせるため、日本がアメリカから導入した（劇中設定のみ）。

乗員・・・2名

武装・・・M61バルカン砲。他にミサイルや爆弾を搭載可能。

F/A-18EJ/FJ「スーパーホーネット」

戦闘攻撃機。本州封鎖時に、名古屋市を空爆する為、4機が海兵隊広島基地から出撃。

艦上戦闘機のF-18を基に、武器搭載量の増加とステルス化を行った機体。結果、機体が大型化している。

日本では海軍・海兵隊の飛行隊向けに調達された。海軍はEJ型、海兵隊はFJ型を主に採用している。

乗員・・・1名（E型） 2名（F型）

武装・・・M61バルカン砲。他にミサイルや爆弾、電子戦装置や空中給油用装備を搭載可能。

F - 35 A J / B J / C J 「ライトニング？」

戦闘機。本州封鎖時に、名古屋市を空爆する為、4機が海軍空母「かが」より出撃。

統合打撃戦闘機計画に基づいて開発された、ステルス性能を持つ戦闘機。アメリカが空軍・海軍・海兵隊で共同使用出来るように設計された。

A型は空軍向け通常機。B型は海兵隊向け垂直離着陸機。C型は海軍向け艦上機となっている。

日本は開発計画に初期から参加していなかったが、資金不足で開発が遅れていたところを援助し、優先的に導入できるようになった。

老朽化が始まったF - 15 J戦闘機の代替と、海軍、海兵隊の機体として導入している（どちらも劇中設定のみ）。

乗員・・・1名。

武装・・・GAU - 22 / A機関砲（A型のみ）。他に機関砲ポッド（B型・C型のみ）、ミサイル、爆弾等を搭載可能。

海上兵器

あかぎ

原子力航空母艦。劇中では東京湾上に展開し、官邸を脱出した総理大臣を乗せたEH - 101が着艦。臨時司令部となった他、本州を脱出した避難民を収容した。

日本が通常動力型空母を建造した後、中国に対抗する為開発された。アメリカ海軍空母「ニミッツ級」をモデルに、ステルス化と日本独自の設計を加えた艦。姉妹艦である「かが」も就役中。

乗員・・・艦上・航空要員合わせて約5680名

武装・・・フランクスキウス2基。RIM-7「シースパロー」

対空ミサイル2基。RIM-116 RAM近接防空ミサイル2基。

他に作戦用航空機86機が搭載可能。

かが

「あかぎ」の姉妹艦である原子力航空母艦。劇中では太平洋上に展開し、名古屋市を空爆するF-35Jを4機出撃させた。

スペックは「あかぎ」と同様のため省略。史実では旧日本軍の「赤城」の同型艦は「天城」であるが、まあそんな事はどうでもよろしい。単に作者が名前の響きで選んだだけである。

第112話 番外編 登場兵器紹介（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

プラカードを持って体育館に押し入ってきた大人たちは、開口一番、

「軍による暴走を許すなー！！！」

と怒鳴った。

その光景に、ボク達子供は『は？』といった表情を見せて固まり、一方、教官役の兵士達は『またかよ・・・』というような顔をして視線を背けた。

その間にも、体育館に押し入る大人たちの数は増えていき、彼らの叫ぶ声が体育館内に反響する。

「軍の横暴を許すな！！！」

「我々はあー軍によるうう！徴兵をおお！！断固拒否するううう！！！」

「子供の人権を守れー！！！」

プラカードにも、彼らが叫ぶのと似たような趣旨の言葉が書いてある。彼らの行動を茫然と見ていたボクは、彼らの中に、腰に日本刀を提げている大人がいるのを見つけた。

気になったボクは、隣であきれ顔をしていた小山さんに尋ねた。

「何なんですか？あの大人たち」

「まあ、いわゆる自称市民団体（笑）だ。我々がここに拠点を作って避難民を収容した時に一緒に受け入れたんだが、ここ最近あんなことばかりだな」

「そうそう。働くどころか邪魔ばかりしてくるもんね」

後ろに立っていた稲森さんも、小山さんと同様の意見を持っているのか頷いた。

軍司の顔を見ると、彼は苦々しげな表情をして、自称市民団体の皆さまの顔を見ていた。

それよりも気になったのは、日本刀を持っている男たちの存在だ。彼らはどう見ても一般人ではないし、明らかにカタギの人間ではない。

「じゃ、あの日本刀を持っている人達は？」

「あいつらは何とかって……、確か坏って言ったかな？そんな組の人間よ。よく『ヤのつく人』とか、『道を極めた人』とか、『マル暴』とか言われる職業の」

今度は稲森さんが答えた。

稲森さんは警察にいたらしいから、その筋の情報はよく知っているのだろうか。それにしても、どうみても物騒な人達を、なぜ軍は放っておいているのだろうか。

ボクが訊くと、

「この状況だ。政府が民間人が武器を持つのを半ば公認しちゃってるし、それにここに来てからは暴力沙汰を俺達の目の前で起こしていない。もし事件を起こしたら即拘束するんだが、奴らも用心深くてな」

と、苦虫を噛み潰したような表情で小山さんが言った。

彼らが日本刀を持っているのは、どうやら『軍には屈しない』という意思表示のようだ。そしてその坏組とやらは、この抗議団体のリーダーと繋がりがあろうと、と稲森さんが続けた。

騒ぎはますます大きくなり、不審そうな顔をした兵士達は腰の拳銃に手を当て始めた。事態を收拾するべく、小山さんが一歩出る。

「えーと、今回はどのような御用件でしょうか？」

そう訊くと、抗議団体の中から一人の中年女性が歩み出た。

その顔を見た軍司が、驚きの声を上げる。

「あれって、『平和実現党』の福原党首ですよ！何でこんな所に・・」

福原党首は、新聞をあまり読まないボクでも知っていた。日本における左翼政党、軍の解体と憲法9条復活を目指して行動する。そんな政党だったはずだ。

でも、衆参合わせて議席が両手で足りる程の数しか議員がいない、そんな弱小政党だったはずだ。

福原党首は皆の中から歩み出ると、

「あなた達の行動は憲法違反です！即刻私達の指揮下に入りなさい！！」

と怒鳴った。

この中で最上級者である小山さんは、明らかに面倒そうな顔をしつつも答える。

「失礼ですが、あなた達の指揮下に入る理由が思い当たらないのですが」

「軍人の独断専行は許されていません。これは明らかに文民統制に違反しています！国民の代表である議員の私達には、軍を監視し、

指揮する義務があります！！」

「・・・前に何度も言った通り、我々の行動は政府から命令された、正式な作戦行動であり、あなた達の指揮を受けるとの命令は受けていません」

面倒そうな小山さんは、誰かにこの問答を押しつけようとしているのか、他の兵士達に視線を巡らせた。小山さんの視線を感じた兵士達は、厄介事に巻き込まれたくないのか、すぐに目をそらした。隣で、稲森さんが溜息を吐く。

「あなた達は善良な一般市民を徴兵し、武器を持たせて戦わせようとしています！我々はこれらの行動を見過ごす事は出来ません！！」
「だーかーら！我々に協力してくるのは、全て志願してきた人達です。我々が強制的に働かせようとしているとか、そういう事実はありません。そもそも、志願してきた人達は、ここの警備を手伝ってくれるくらいです」

「っ、それでも！子供にまで武器を与え、戦いに巻き込むのは著しく人道に反しています！！こんな事は止めなさい！！」

福原党首の叫びは、最後には悲鳴になっていた。

福原党首をはじめとする自称市民団体はやめるやめる、指揮下にはいれと繰り返し返すだけ。対して小山さんは、淡々とそれらに答えているだけで、この問答は平行線を辿ったままだ。

子供達は物騒な雰囲気を感じ取ったのか、兵士達の傍に集まって来た。それを見た市民団体の1人が、子供たちをここから連れ出そうとして、腕を掴んで引き寄せようとする。

「ここにいと、あなたも戦いに巻き込まれるわよ」と言い、子供たちを連れ出そうとする団体員と、掴まれた腕を振りほどき、兵士の傍に戻る子供。体育館内に殺気が充満し、爆発しそうになったそ

の時。

「……っせえんだよ！！とつとと帰れ！！！」

という怒鳴り声が、問答の声を一気に静めた。

その怒鳴り声は、隣に立つ軍司の口から発せられていた。軍司は顔を真っ赤にし、怒鳴る。

「あんたらいつつもそうだよな！！現実も見ないで、自分たちの理想を他人に押し付けようとして！！ああ！？理想は御立派だが、その結果がどうなるのかわかってんのか！？ええ！？」

軍司の怒鳴る姿を、体育館にいる皆があっけにとられて見ていた。軍司がこんなに怒る姿なんて、ボクは今まで見たことが無かった。初春市に居たころから、軍司はいつも冷静で温厚な性格だった。軍司が冷静で無くなったのは、ダークシーカースによる学校襲撃と、八方村でイシヴアラ教団に襲われた時だけだ。その軍司が、なぜこんなに怒っているのだろう。

福原党首は何か言い返そうとしたが、その声すら、軍司の怒鳴り声がかき消す。

「徴兵だのなんだのあんたらは言ってるけど、俺達は望んでここにいるんだよ！！文句ばかり言ってる戦おうとしないあんたらに代わって、武器を手にとってるんだよ！！軍の人達だって、多くの仲間を流してまであんたらを守ってたんだよ！！！」

「国民を守るのは、軍の義務で……」

「あんたら、いつつも軍は憲法違反だなんだ言ってるじゃねえか！それが『国民を守るのは軍の義務』だあ！？何ぬかしてんだゴラア！！」

軍司の興奮は最高潮に達し、遂に軍司は手にしていたベレッタを福原に向けた。ヒツと悲鳴を上げて福原が下がり、慌てて兵士達が軍司を押さえる。

どのみちベレッタはスライドが後退したまま、つまり弾倉が空で撃てる状態ではなかったのだが、それでも団体には威嚇になったらしい。福原をはじめとする市民団体員は「やっぱり軍は野蛮だ」「洗脳された子供か、可哀そうに」などと言った捨てゼリフを残し、体育館からぞろぞろと出て行った。

ようやく市民団体が体育館内からいなくなった後、軍司は落ち着いていた。興奮した事を兵士達に謝罪し、頭を下げている。

「ねえ、どうしてあんなに怒ってたの？」

謝罪を終えた軍司にボクは訊いた。軍司はさっきの怒った時とは正反対に、恥ずかしそうにしながら答えた。

「……ああいうの、見ていて腹が立つんです。そりゃあ意見を持つ事は大事ですよ、それに僕だって彼らの意見は価値があると思ってます。」

でも！それを人に押し付けるのは筋違いなんです。大体、軍の人達だって、彼らに協力する大人やここに居る子供だって、皆自分が死ぬかもしれない覚悟してここに居るんです。それを一切考えずに、

のうのと彼らが地と汗を流して作った安全な環境で、自分達を守ってくれる人達を、仕事もしないで非難し続ける。それが気に食わないんです」

「……じゃあ、軍司は何のために、ここで武器を手にしているの？」

ボクが訊くと、軍司は、

「それは、優さんを……」

と口にしたが、慌てて黙ってしまった。顔を真っ赤にし、ボクに背を向けて走って体育館を出ていく。

厄介な市民団体といい、日本刀を持った物騒な大人たちといい、目の前には問題が山積している。これから苦勞するだろうな……。

……でも、軍司は最後に、何を言おうとしていたんだろう？

第113話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第114話 side 龍

2月7日 15:00

愛知県 豊田市内 市街地

『1班、2班、前進!』

『3班止まれ!周囲を警戒しろ!』

『4班は所定の位置に就き、支援体制を整えろ!』

通信が錯綜し、俺達は目の前のビルに突入していった。他の班の兵士達もビルに突入していき、その後継はさながら特殊部隊の突入光景といったところだ。

俺達の後ろには、装甲車やトラックが並び、指揮所のテントが建てられている。テントの下には大型無線機が設置され、指揮官の大山二尉を始めとした通信士達が無線機を操作している。

なぜこんな光景が繰り広げられているか。それは3日前に遡る。

3日前。

「あ、そうそう龍。今度感染者を4体ばかり調達してきて欲しいん

「だけど」

放送で俺を地下研究室に呼び出した福田は、唐突にそう言った。福田の背後、ガラス戸の向こうでは、2人の兵士が何かを持ち上げている。

「は？何言ってるんだお前？」

「だーから。治療薬の実験に必要なだから、感染者が必要なんだよ。わかった？」

「だから、なんでそんな危険な事を、子供にお使いを頼むような感覚で言うんだ？そもそも前、俺に見せた時の感染者はどうした？」

「ああ、あれはね・・・」

福田は背後を振り返り、なんでもないように言った。

「死んじゃった」

ガラス戸の向こうから2人の兵士が、何かを担架に載せて出てきた。担架の上の物体を見た俺は、思わず絶句した。

担架の上に載せられていたのは、凄まじい形相を顔に貼り付けた、ダークシーカーの死体だった。

兵士達はもう慣れっこになっているのか、ゴミを捨てに行くような特に気にもしていないような表情で、死体を載せた担架を地下室から運び出していった。

俺が唾然とした表情でそれを見ている最中も、福田は俺の意などにせず話し続ける。

「・・・でね、まだ試作段階の治療薬を投与したんだけど。若干の間症状が治まっただけで、すぐに心停止して死んじゃったんだよ」
「・・・はあ、それで？」

「試作段階だけど、もっと研究すれば、完全な治療薬が出来ると思うんだ。後はワクチンも研究しないと・・・」

福田は顎に手を当て、何かを考えているようだった。俺はその間に前回来た時にはよく観察していなかった地下室の内部を見回した。よく見ると、壁のボードには何枚もの写真が張られていた。俺はボードに近づき、その写真を眺めて顔をしかめた。

その写真は、感染者の顔を映したものだ。老若男女問わず、顔写真がボードにびつちりと、隙間無く張られている。

「・・・まさか、これ全部実験した感染者の写真か？」

「そうだけど、それがどうしたの？」

「いや・・・。なんでもない」

数十人の「かつては人間だったモノ」に人体実験をして、「それがどうしたの？」だ？コイツは完全に狂ってる。

俺はそう思ったが、口には出さなかった。福田のやってることは、人道上は間違ってる。でも人類全体の利益から見れば、福田のやってることは必要な事だ。

そしてそんな福田を手伝ってる俺達も、狂ってるのかもしれない。

「ワクチンの実験は囚人を何体か使うからいいとして、感染者の方

は、そうだな……。男女最低2人ずつは必要かな」

「まさか、俺だけでやれとかは言わないよな？」

「まさか。僕が戦力を無駄に減らすようなことすると思う？大丈夫、ちゃんと1個班6人構成で、合計6個班を送るから」

今日の午後にもブリーフィングをするから、その後ちゃんと突入訓練をしようね。

福田は最後にそう言うと、俺を地下室から追い出した。

そして現在。

俺達は2日間を屋内訓練に費やし、豊田市内のビルにやってきた。今朝無人偵察機が撮った赤外線写真を見る限り、このビルには少なくとも50体のダークシーカーズが入って行ったらしい。つまり、ここは絶好の狩場というわけだ。

・・・狩られるのが、俺達でなければいいが。

『4-2より各班、FRIDA（前方赤外線暗視装置）で内部の様子を確認した。ビルの3階、オフィスの一角に、少なくとも50人の感染者を確認。オクレ』

無線機から、安全な隣のビルの屋上に展開する4班の兵士の声が流れてきた。

1班、2班は直接感染者と交戦し、3班はビル内部で両班の援護と感染者の捕獲。4班は隣のビルから、赤外線暗視装置による監視と狙撃による支援を実施する。

1班は東側、2班は西側の入り口からビル内に侵入した。

俺は突入する1班のリーダーを命じられていた。この班には中沢や初春市から共に行動してきた兵士達、そして稲森という女性も所属している。

彼女は元々警察の特殊部隊にいたらしい。『らしい』というのは、本人から聞いたわけではなく、あくまで噂だからだ。

そして支援班の4班には、堂々と内田さんがいた。2人とも狙撃の天才なので、支援される方としては心強いことこの上ない。

『1班、そのまま前進してください。3階までの順路に敵はいません。オクレ』

「了解。引き続きナビを頼む。オクレ」

俺は4班からの通信にそう答え、G36Cライフルを構えて前進した。

隣のビルの屋上に設置されたFRIAは大型である反面高性能で、普通のビルの壁程度なら、透過した赤外線で内部の様子がわかる（とはいっても、画像処理された白黒映像だが）。

それに指向性集音機を組み合わせ、さらにどこから入手したのかビルの内部図も揃っているの、ビル内の様子は手に取るようにわかるだろう。

「前進！」

俺を先頭に、6名はビルの廊下を前進していく。

今回、俺達は暗視装置を装着していない。暗視装置を装着すると視野が狭くなり、人間離れた運動能力で俊敏に迫ってくるダークシーカーが、暗闇から迫ってきてもわからないからだ。

このビルに窓は少なく、またその窓も多くが遮光カーテンで塞がれていた。つまり、ここはダークシーカーにとっては絶好の隠れ家ということだ。

なので全員がハンドガードに装着されたフラッシュライトを点灯し、廊下を照らしていた。6個の光源により、暗視装置を使用しなくてもビル内の様子がはっきりとわかる。

階段を上り、4班員のナビゲートに従って3階へと直行する。その間、全員が隙間無く警戒の視線を巡らせ、銃口を暗闇に向ける。

3階に到着すると、そこにはまだ1班と3班は到着していなかった。稲森が無線機のマイクに手を当て、

「松原ア、びびってんじゃないわよ」

と言った。

『だ、大丈夫です！本官はちゃんとしています！』

「あそ。せいぜい漏らさないように気をつけな」

『も、漏らすって何ですか漏らすって！本官は子供じゃ・・・』

そこで稲森は通信を切り、ニヤリと笑った。

通信の相手・・・確か松原といったか。彼女は身分不詳の稲森とは違い、ちゃんと素性が知れている。元々は愛知県警機動隊、銃器対策部隊の隊員だったが、稲森と一緒に大山二尉に保護されたらしい。つまり状況から考えて稲森も警察関係者であることは間違いないのだが、その事を訊いても彼女は曖昧に笑っただけだった。

何か知られてはいけないことがあるのかも知れない・・・。例えば警察を脱走してきたとか。

そんなことを考えている内に、2班と3班も3階へと上がってきた。目標のオフィスはかなり広いらしく、1判と2班はそれぞれ別の入り口から突入する。

「2 - 1より4、オフィス内の様子はどうか。オクレ」

『異常なし。まだ感染者には気づかれていない模様。オクレ』

「了解。これより作戦を実行する。オーバー」

2班のリーダーである2等陸曹はそう言い、俺達は突入の準備を始めた。

一気に全員が突入するため、ドアは爆薬で破壊する。山寺がドアにパネル状の爆薬をセットし、俺達はドアの両脇に退避した。

『やれ！』

本部の大山二尉の命令で山寺がスイッチを押す。仕掛けられたパネル爆薬はドア目掛けて破壊力を集中させ、ドアは粉々に吹き飛んだ。

「突入！突入！！」

俺は叫び、オフィス内へと突入していった……。

第114話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

室内に突入した俺達は、そこで異様な光景を見た。

ダークシーカーズは夜行性ゆえ、昼間には寝る習性がある。が、しかし。

ダークシーカーズは、立ったまま寝ていたのだ。

ドアを破った際の爆音で次々とダークシーカーズが目覚め、何体かが俺達に向けて猛ダツシュし、こちらへ突っ込んでくる。

・・・が、それは自ら罠に飛び込んで行くも同然の行為だった。

感染者の捕獲を目的とする3班の2人の兵士が前に出て、手にしていたMGL140グレネードランチャーを構え、突っ込んでくるダークシーカーに向けて発射する。

ランチャーから放たれたのは、通常のグレネード弾では無かった。発射された弾頭は空中で分解し、中から現れた網^{ネット}が、今まさに飛びかかるうとしていたダークシーカーに絡みつく。

MGL140ランチャーに装填されていたのは、テロ対策・暴徒鎮圧用に開発されたネット弾というものだった。

通常弾に比べ異常に長い弾頭の中にはネットが収められ、弾頭先端の信管によって飛距離が調整できる。発射された弾頭は指定された距離が来るか、何かに着弾すると分解して内部のネットを展張し、対象物に絡みつく。

絡みついた瞬間、ネットには強力な電流が流れ、相手を気絶させる

事も可能だ。

ネットが絡みついたダークシーカーの体に、一瞬強力な電流が流れる。ネットを外そうともがいていたダークシーカーの体が一瞬大きく揺れ、それから動かなくなる。

2人の兵士は次々ランチャーからネット弾を発射し、装填された6発を全て撃ち尽くした。ランチャーを持っていた兵士はすかさず後退し、残った4人の兵士が、それぞれネットが絡みつき電流で気絶したダークシーカーを部屋の外へと引きずり出す。

その間、俺達は3班の兵士たちを援護していた。次々と接近してくるダークシーカーズに向けて、セミオートに設定したG36Cライフルを発砲する。

ホロサイトを覗く暇もなく、レーザーサイトの赤い光点がダークシーカーに重なった瞬間を見計らい、撃つ。被弾しのたちまわる仲間など気にもせず、その脇から次々とダークシーカーズが迫ってくる。

「数が多い！3班の撤退はまだか!？」

『現在2階の階段です！もう少し持ち堪えて下さい!！』

3班の班員が、無線越しに俺達に怒鳴る。

俺の右隣りでは、中沢がベネリM3のショートモデルを構え、セミオートで散弾をばら撒いていた。左隣では、稲森がMP5F短機関銃を、^{ガッ}気前よくフルオートで撃ちまくっている。

室内に突入した総勢12名の兵士達は、ダークシーカーズを接近させまいと奮闘していた。しかしダークシーカーは俊敏に動き、事務机などの陰から陰に移動し、着実に俺達に迫ってくる。

と、次の瞬間、ようやく3班が外への退避が完了したとの報告が入った。すかさず、隣のビルで狙撃支援を行っていた堂々達から通信が入る。

『こちら4-1。狙撃で援護する。その間に後退せよ』

「了解！感謝する！！」

俺はそう言い、「後退だ！」と叫んだ。潮を引くように次々兵士達が室内から退避し、殿を務める俺は、G36Cをフルオートで連射した。

室内の戦力が減ったことで、ダークシーカーズはより早く俺へと接近してきた。しかしジャンプして俺に飛びかかる直前に、次々地面へと叩きつけられる。

堂々と内田さんが、狙撃銃にマウントした赤外線暗視装置サーマルサイトで、窓ガラスをぶち抜いてダークシーカーを狙撃したのだ。

「東、階段まで急げ！！」

M3を発砲し、俺を援護する中沢が叫ぶ。猛然と俺を追いかけてくるダークシーカーが、何体か散弾を浴びて吹っ飛んだ。

俺はようやく階段に辿り着き、入れ替わりにM2火炎放射器を持った兵士が歩み出てくる。

火炎放射器を持った兵士は階段前の壁へ向けて、火のついた燃料を放射した。階段前に炎の壁が出来、勢いよく突っ込んできたダークシーカーが、火のついた燃料をもちに被ったうち回る。

俺達も焼夷手榴弾を次々と投擲し、廊下を火で覆い尽くす。壁のボードに貼ってあったポスターや椅子が燃え始めたが、電気が通っていないこともあり、備え付けられているスプリンクラーは作動しない。

それを見た俺達は、外へ出るべく後退を始めた。もう1本ある隣の階段も、そこから退避する2班の兵士達が焼き払っているだろう。つまりダークシーカーズは炎の壁に阻まれ、俺達を追う事が出来ない。それどころか火は次々と燃え移り、ダークシーカーズは焼死するか窒息死する運命を辿るだろう。

これも福田の作戦だった。実験に使用する個体を確保する一方、自分達に害するダークシーカーズもまとめて処分する。効率がいいと言えはいいが、これは単なる殺戮に過ぎない。

ようやく外へと出てきた俺達を、今まで指揮所に居た福田が出迎えた。

「お疲れさま。おかげで実験に使用する個体は十分揃ったよ。君達はやっぱり優秀だね」

「・・・てめえに言われても、全く嬉しかねえよ」

俺は福田の目を見てそう言った。福田はいつもの笑顔のまま、表情を変えない。

捕獲された4体のダークシーカーには麻酔薬が注射され、拘束された後遮光布で体を包まれてトラックに運び込まれていた。麻酔でぐっすり眠っているのか、ダークシーカーは全く動かない。

俺が後ろを振り向くと、ビルの窓という窓から黒煙が出ていた。俺達が放った炎が、あちこちに回ったのだろう。空気が乾燥し、なおかつ消火する人も設備もないので当然だ。

熱で窓ガラスが割れる音が響く中、ビルの中からダークシーカーズの絶叫が聞こえる。火に巻かれて熱いのか、俺達を殺しそくなって悔しいのか、はたまた断末魔か。おそらくはその全てだろう。

撤収作業に入っている兵士達は、その絶叫を聞き、皆一様に顔をしかめた。

人類の為、自分達の為というお題目を掲げていても、ダークシーカーズは元は人間だ。それをこんな方法で焼き殺していくのは、人間として何か大切なものを失っていくような気がするのだ。

「・・・クソっ」

俺はそう舌打ちすると、拘束したダークシーカーを見張るため、73式大型トラックの荷台に飛び乗った。

『・・・はい、こちら福田です。いつも前もって言うてるけど、この事は機密だから、絶対！に！誰にも話さないように。話した者は拘束した後、恐ろしい処分を課すから注意してね』

無線機から、福田の能天気な声が流れる。

福田の言っている通り、作戦にかかわる俺達には守秘義務が課せられていた。もし人体実験をしていた、なんて事が自称市民団体（笑）が黙っちゃいないだろうし（福田は軽くあしらうのだが）、いまやってる事はギリギリ法に触れていないが、この先どうなるかわかったものではないからだ。

一応政府は福田の実験に人間を使う事を認めているが、いつ言葉を翻すかわからない。そうなったら俺達は、確実に実刑をくらうだろう。

なので感染者捕獲作戦に参加するのは、最初から防衛軍に所属する

俺達兵士と、元自衛官で腕の立つ内田さん、そして臨時軍属研究員である福田だけだ。刑務所で俺達に協力すると言った民間人でも、この作戦に関わることは許されていない。

・・・優や軍司、なにより美里は、こんなことを俺がしていると知ったら、どんな顔をするだろうか。
怒るだろうか。非難するだろうか。それとも仕方ないと同情してくれるのか。

俺は足元に転がる、布で包まれたダークシーカーを見つつ、そう思った。

第115話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第116話 side 優

2月9日 16:00

名古屋刑務所 民間人区画

「おっしゃあ！8切りに10捨て、さらに7渡しのコンボ！上がりい！」

軍司はそう言い、コタツの上に手持ちのカードを放った。それを見て、皆は再び溜息をつく。

「また軍司か・・・」

「何度大富豪になれば気が済むのよ」

「その強運をもっと他で使えっての」

皆はそう言い、しかし一抜けした軍司を除いたメンツで大富豪を続けていく。ボクも大富豪に参加しているが、さっきから貧民か平民しか経験していない。

大富豪のメンバーは大人の多賀さんを始めとして、ボク、軍司、榛名、そして由梨がいる。5人でコタツを囲んで大富豪をしているのには、キチンとした訳がある。

窓の外は、猛吹雪が吹き荒れていた。2月のこの時期に降るのは別に異常な事ではないが、それでも異常な降雪量だ。気温は零下を記

録している。

当然、ボク達民間人は仕事を中断し、自分たちの部屋へと戻るように命令された。訓練も受けていない人間が下手に動けば、視界がままならない程の吹雪で迷い、そのまま凍死する恐れすらあるからだ。

更に悪い事に、発電機に異常が起きたらしい。今技術兵の人が必死に修理しているらしいが、それでも発電量は大分落ちてしまっている。ソーラーパネルは当然使えず、発電用の風車は破損を恐れて使用が禁止された。

・・・当然、電力の使用には大幅な制限が課せられている。

エアコンは電力を食うので使用が禁止。石油ストーブは燃料が貴重なので、当然ボク達に回ってくることはない。ガスストーブはライフラインが死んでいるので、無論、使えない。各部屋で使用可能なのはコタツだけになってしまった。

かろうじて、各部屋にはリフォームして設置された暖炉がある。薪を使うタイプで、ブロックを積み重ねてコンクリで隙間を埋めたものだ。部屋の中に二酸化炭素などが充満しないよう、太いパイプを使った煙突もある。

ボク達は蝋燭と暖炉の光の元、大富豪に興じているというわけだ。

・・・十数分後、ボクと軍司は吹雪の吹き荒れる建物の外に居た。

室内の暖炉の薪が残り少なくなり、薪を持ってくる人を大富豪で決めたのだ。大貧民と貧民に、極寒の中薪を調達してくる仕事を与えられた。

負けたのは、ボクと軍司だった。軍司は都落ちという、大富豪が次のゲームで自分より早く上がった者がいたら問答無用で大貧民になるという制度で敗北し、ボクは普通に貧民となって負けてしまったのだ。

部屋から廊下に出た時点で既に吐く息が白くなっていたが、建物の外は吐く息すらすぐにかき消される程の猛吹雪が吹き荒れていた。可能な限りの寒さ対策をしてきたが、スキーウェアを通り越して寒さが染み込んでくる。

「うっ、寒い・・・」

「さっさと帰りましょう。薪置き場ってどこでしたっけ？」

「あっち？」

ボクはそう言っつて南東方向を指差した。

ここに来てから既にだいぶ日にちが経っているが、それでも刑務所は広いので、度々迷ってしまうことがある。しかもこの吹雪のせいで5メートル先も見えないので、今回はより慎重に行かなければならない。

幸いなことに、ここから薪置き場までは一直線のルートだ。まっすぐ進んで行けば迷う事はない。

ボクは軍司と共に、薪置き場へ向けて歩き始めた。

薪置き場にはあっさり到着した。薪置き場は軍の人達が突貫工事で作った、丸太や板を組んで作った小屋だ。

小屋のドアを開けると、木の臭いがボク達の鼻をついた。四畳ほどの空間の半分に、30センチ程の薪や廃材が積み重ねられている。

隅には薪にするための乾燥した丸太が積み重ねられていた。ボクは部屋から持参したバケツに、次々と薪を放り込んでいった。使った分の薪は戻しておくルールなので、軍司は室内に積み上げられている乾燥した丸太を、小屋に備え付けられている斧で割っていた。

バケツ2つが薪で一杯になり、ボクと軍司は小屋から出た。小屋の中は寒くとも風は吹きつけてこなかったが、外は吹雪の雪と風の寒さが体に突き刺さってくる。

「さ、寒い。さっさと帰ろう、軍司」

「そうですね。このままじゃ凍え死んじゃう」

ボクと軍司は薪の入ったバケツを提げ、建物の方へと戻って行った。
.....

はずだったのだが.....

「あれ？ここどこだっけ？」

「さあ？少なくとも民間人区画じゃないことは確かですが.....」

ボクと軍司は、突然目の前に現れた柵を見て呟いた。

簡単に言くと、ボク達は迷ってしまったのだ。猛吹雪で視界が悪く、さらに不慣れな場所なので仕方がないといえば仕方がない。

目の前に建つ柵は、どうやら民間人立ち入り禁止区画を表す柵らしい。柵のてっぺんには有刺鉄線が巻かれ、『関係者以外立ち入り禁止』と書かれたプレートがいくつも貼られている。

「とりあえず、柵に沿って歩けばいつか戻れるよ」
「何ですかその迷路を歩く時の方法は……」

軍司はそう言いつつも、ボクが言ったように柵に沿って歩き始めた。北東方向に歩いていけば、いつかボク達の建物に辿り着くだろう。歩き続ける事数分、民間人立ち入り禁止区画の建物が見えた。建物の入り口には寒冷地用装備で身を固めた歩哨の兵士が二人立っている。

彼らに道を訊けば、すぐに戻れるに違いない。そう思ったボクは彼らのもとに走って行こうとしたが、突然軍司がボクの腕を掴み、

「ちょっと待ってー！」

と小声で言った。

「どうして？道を訊けばさっさと帰れるのに」

「静かにして下さい。何か言ってます」

軍司はそう言い、しゃがんで雪で覆われた植え込みにボクを引つ張り込んだ。植え込みは入り口から死角になっているので、歩哨からは見つからないだろう。

でも、何故？どうして隠れる必要がある？

ボクがそう思っていると、不意に吹雪の勢いが弱まり、歩哨達の話が聞こえてきた。

「……にしても、さっさとワクチン出来ねえのかな？こんな場所からさっさとオサラバしたいぜ」

「いやいやお前、ワクチンがあればオサラバどころか俺ら無敵だろ」
「ホントあの博士は優秀だよな。俺達とそんなに歳離れてないのに、前のワクチン作ったんだろ？」

「らしいな。前のワクチンを作るのに、一体どれほど犠牲が出たのやら・・・」

ワクチン？博士？犠牲？

どうやら博士というのは、豊田市内でボク達を助けてくれた軍部隊を率いていた、あの白衣の男性らしい。そういえば東さんとも仲が良かったみたいだけど。

話の筋から推測するに、あの博士がワクチンをここで開発しているらしい。でも、犠牲って単語が気になる。

ボクが考えている内にも、歩哨達の話は続いている。

「まあ、あれだけの危険でワクチンが出来ると思えば、ローリスクハイリターンとも言えるよな」

「だな。でもワクチンだけじゃなく、治療薬も開発しなきゃならないんだろ？あの博士過労死するんじゃない？」

「でもよ、なんか後味悪くねえか？あいつら元々人間だったんだろ？」

「しょうがないさ。必要なぎs・・・」

再び吹雪の勢いが強くなり、話が聞こえなくなった。

ボクは話の内容がさっぱりわからなかったが、隣にしゃがみ込む軍司の顔を見ると、軍司は険しい表情をしていた。

歩哨達は交代の時間が来たのか、建物の中へと入って行った。その隙に植え込みから飛び出し、少しして出てきた別の兵士達に、民間人区画の方向を訊く。吹雪も弱くなってきたので、今度は迷わない

で済みそうだ。

交代の兵士達に礼を言い、ボクと軍司は歩き始めた。相変わらず軍司は険しい表情をしていたので、ボクな気になって訊いた。

「ねえ、さつきから険しい表情してるけど、どうかしたの？」

「えっ？ いや何でもありません・・・」

軍司はそう言い、下を向いた。軍司は何かを思いつめた表情をして、黙々と歩き続ける。

もしかしたら、軍司はさっきの話の内容から何かがわかったのかも知れない。ボクはそう思い、軍司に話を聞こうとしたが、相変わらず軍司の表情は固かった。その顔を見て、ボクは質問をするのを憚られた。

軍は軍で動いているそうだが、何を目的にして動いているのか全くわからない。先日装甲車やトラックの大部隊を引き連れて市街地に向かったみたいだが、東さんに訊いても何も答えてくれなかった。そういえば、東さん達とも会う機会が少なくなってきた。牧さんは負傷して医務室から動けないし、他の軍人たちも民間人立ち入り禁止区画に籠もり、滅多にボク達と顔を合わせることはしない。一体何をしているのか、ボク達に知るすべはない。

この刑務所で、一体何が起こっているんだろう・・・？

第116話 side 優（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第117話 side 龍(前書き)

最近、マジで忙しいです。精神と時の部屋が欲しい位です。
そのせいでクオリティが下がってしまっているかもしれませんが、
御理解の程お願致します。

第117話 side 龍

2月9日 23:30

名古屋刑務所 民間人立ち入り禁止区画 第2棟

「・・・まるでゲームだな」

俺は目の前の光景を見て、そう呟いた。

福田と呼ばれこの棟に来た時は、福田がまた何か依頼してくるのではないかと思った。しかし今回は、ある風景を見せられるだけだった。

「現在、高度1000メートル。90ノットで南東に向けて飛行しています」

そう言ったのは、目の前で、無人偵察機の操縦桿を握る高木だ。プレデターのパイロットである高木とセンサー員のもう一人の兵士は、まるでゲームセンターにあるフライトシミュレーションゲームのような筐体に向き合い、飛行するプレデターの映像を頼りに操縦している。

福田が見せたかった物とは、無人機による夜間警戒の様子だった。この警備部隊はプレデター無人機を2機保有し、数日の間をあげて飛行させている。俺達が豊田市にやってきて、古橋が感染し、激しい戦闘の中救援が来たのも、この無人機の偵察のおかげだった。

福田達が政府の命令を受け、名古屋刑務所にやって来た時から装備されていた機体だ。飛ばすには滑走路が必要だが、福田は近くにあった直線で長い距離続く国道を接收し、障害物を取り除いて補強した後、プレデターの滑走路としたのだ。

長距離を飛行させるには指令の電波を飛ばすアンテナが必要だが、それは棟の屋上に組み立て式の大形アンテナを建てた事でクリアされている。

無人機の操縦システムが設置されているのは、民間人立ち入り禁止区画にある棟の視聴覚室だったらしき部屋だ。「らしき」というのは、視聴覚室だった名残を示すのは廊下にかかったプレートのみだからだ。

部屋の中には、これでもかという程機材が搬入され、広がった空間の大半を操縦システムが占領している。ゲーセンのシュミレーションゲームのような筐体、あちこちに設置されたモニター、そしてノート・

デスクトップを問わずにパソコンがいくつも机の上に置かれている。

今日は俺に、監視の任務は入っていない。なので、大人しくプレデターの警戒任務の様子を見る事にした。

「5秒後に進路変更、南西方向」

「了解………。変更」

GPSは使えず、管制してくれる友軍機もない状況では、操縦士と航法士の連携が重要だ。高木の右隣で地図を片手に航路を設定する航法士に従い、高木が進路を変更する。画面に映し出される映像

に従って飛ばすのは、俺だったら絶対に出来ない芸当である。

操縦する高木のテンションも、心なしか高いように見える。いつもオドオドしているのに、操縦桿を握っている間だけ堂々としている。

とその時、センサー員が、

「地上に多数の熱源を確認！北へ向けて移動中！」

と叫んだ。

すぐさま、室内の中心部に立っていた大山二尉が操縦席に駆け寄る。

「何だと？正体は？」

「今からズームします。高木、熱源を中心に旋回、高度も落とせ」

センサー員の養成に従い、高木がジョイスティックを傾け、高度を下げる。とは言っても、画面の中の映像の様子が少し変わったただだ。

プレデターには2つのカメラが搭載されている。1つは高木が操縦に使う、機体の前部に設置された操縦用カメラ。もう1つはセンサー員が地上を監視するための、機体下部に設置された旋回・仰角変更が可能な対地カメラだ。

そのカメラの映像が、壁面の大型モニターに映し出される。モニターには、全力で疾走している白い人影がいくつも見える。赤外線映像なので、熱を発する人間は白く映し出される。昼間に雪が降っていて、地面はいつもより冷えているので、黒く映し出される地面に白い人影がとりわけ目立つ。

その人影の総数は50人程だろうか。どう見たって、人間ではない。

大山二尉が確認のため、赤外線映像から微光暗視装置を使った映像

に変更するよう命じた。センサー員が機器を操作し、今度はモニターが緑色に染まる。

微光暗視装置とは、光量を増幅して映し出す装置なので、赤外線暗視装置と違って白黒の映像ではない。緑色に映像が処理されてしまっただが、人の顔などが見分けられる利点がある。

北部に向けて走ってくる人影。映像がズームされ、人影がボロボロの衣服を身に纏い、頭部の毛髪が抜け落ちているのが分かる。

間違いない。ダークシーカーズだ。

「二尉！目標は恐らく感染者です！どう対処しますか？」

「目標集団とここまでの距離は？」

センサー員が素早く各種計器を確認し、

「約5000メートルの地点です！このままではここに20分以内で到達します！」

大山二尉が唇を噛むのが分かった。

ダークシーカーズは人間よりも身体能力が強化されている。さっきの20分以内というのは人間を基準にした場合で、実際に到達するのはそれよりも早いだろう。

大山二尉は、即座に決断した。

「武器の使用を許可する！目標の集団を殲滅しろ！！」

それを聞いた途端、「了解！」の合唱が起きた。すぐさま高木がいくつかのボタンを押し、

「武器の使用の許可を確認。ヘルファイア発射用意」

と言った。その表情は、気のせいかな楽しそうに俺は見えた。

プレデターには自衛用の空対空ミサイルステインガーもしくは、攻撃用の対戦車ミサイルも搭載可能だ。どうやら今飛行中の機体には、ヘルファイア対戦車ミサイルが3発搭載されているらしい。

プレデターが一度ダークシーカーズの上空をフライパスし、旋回してダークシーカーズを真正面にとらえる（と言っても、画面の中の事だが）。

そして高木がジョイスティックのカバーを親指で弾き、発射用ボタンを露わにさせた。すぐさま、親指がボタンに乗せられる。

「発射！！」

そう言い、親指を押しこんだ。画面の中で前方に向けて白い軌跡が伸び、そして画面中央で爆発が起きる。爆炎と飛散した雪で、ダークシーカーズの様子は伺えない。

俺は視線を壁面の大型モニターに向けた。対地カメラはずっとダークシーカーズの集団をとらえ続けているので、赤外線映像とも相まって、悲惨な光景を俺に見せてくれる。

ミサイルが着弾した地点では、あちこちに白い破片が飛び散っていた。白いイコール熱を発している物体なので、それがバラバラになったダークシーカーズの一部であるという事は明らかである。

そして走っていたダークシーカーズも、先程の攻撃でその数を減らしていた。50体程いたのが30体弱程しか存在せず、しかもミサイルの破片を食らったのか地面を這っているダークシーカーズもい

る。

「ヒヤッハー！命中ウー！！」

「10体は片付けたな。良い腕だ」

「ナイスキル！！」

高木が歓声を上げ、周りの兵士達もそれに答える。いつもオドオドしている高木が、まるで狂人のような有様だ。

いや、狂人は俺達全員だ。

元々は普通の人間だったダークシーカーズを、反撃手段のない状態なのに上空からミサイルで爆殺する。そしてそれを、ゲームで得点でも入れたかのように喜ぶ。そしてそれを讃える同僚達。

俺も一瞬、高木がミサイルを命中させた時「やった！」と思ってしまった。それは俺が、狂い始めている証拠なのかもしれない。

なんだ。美里の言う事の方が正しいじゃないか。

俺はそう自嘲した。

再び、画面の中で、ダークシーカーズの集団にミサイルが着弾する。再び歓声。

今度は、ダークシーカーズは殆ど残っていなかった。それでも執拗に、一体残らず片付けるとでもいうように、3発目のミサイルが発射される。

遂に、刑務所に向けて走っていたダークシーカーズの集団は全滅した。

室内に歓声が満ち、皆が高木を讃える。

刑務所に接近させるのは危険だから、ここから遠い距離で殲滅するという方式はわかる。だが、これじゃまるで虐殺だ。モニター越しの戦闘は、俺達にゲームでもやっているような印象しか与えない。

人間とダークシーカーズ。どちらがマシな存在なんだ？

第117話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第118話 side 龍

2月10日 10:00

名古屋刑務所 収容棟

今日も俺は、福田にこき使われる事になった。

収容棟（囚人がいる棟だ）から、女の死刑囚を一人連れてこい、というのが命令である。何に使うのかは、考えなくたってわかる。

そういうわけで、俺は同じくパシられた小山と一緒に、収容棟の廊下を歩いていく。

すでにこういった事には慣れていくらしい小山は、迷うことなく指定された集団房まで歩いた。途中、本州封鎖以前から刑務所で勤務しているらしい刑務官と数回すれ違った。小山の言う所によれば、彼らも本州封鎖時に逃げ遅れ、そのままここで勤務しているらしい。その数は、軍人よりも多い50人程度だとか。

小山は途中、刑務官の一人から目的の房の鍵を受け取っていた。俺達はその死刑囚がいるという集団房に到着し、小山はすぐさま房のドアに鍵を差し込み、開けた。

房の中には、作業着を着た女の囚人が6名いた。彼女らは小山がドアを開けた瞬間小さな悲鳴を上げ、壁際まで下がる。

「はい、1012番出てこーい。1012番は誰だー？」

ドアを開けるなり、小山は今まで脇に挟んでいたバインダーを見つづ、まるで友人に声でも掛けるかのような軽いノリで言い放った。が、その瞳には感情が見出せない。

「ヒッ」と叫び声をあげ、囚人の一人が震え上がった。小山はその囚人の顔とバインダーの書類の顔写真を見比べつつ、

「お、いたいた1012番。こつちに来い。あ、二曹も手伝ってください」

と言って、ずかずかと房の中に入った。俺も小山に続き、狭い房に入る。

1012番と呼ばれた女は悲鳴を上げ、近寄ってくる小山から逃げようとするかのように、狭い房の中を這いずり回った。が、そんな追いかけてこが長く続く訳もなく、あっさりと1012番の腕が小山に掴まれる。

「はいヒトマルマルフタ（10時02分）、番号1012番を確保。これより連行します」

「いやあああああッ！！誰か、誰か助けて！！」

1012番は悲鳴をあげ、小山の腕を振りほどこうとする。が、俺も小山を手伝い1012番の腕を掴んだので、彼女は全く動くことが出来ない。

俺は1012番と呼ばれる女の顔を見て、どこかで見たことがあるような気がした。知り合いというわけではなく、どこかでチラッと顔写真らしきものを見た記憶しか……。

「さ。さっさとコイツを連れて行きましょう、二曹」

「・・・ああ、そうだな」

「ヤダ、ヤダ、連れて行かないで！！お願い、何でもするから！！」

1012番は「連れて行く」という単語を聞いた途端、勢いよく暴れ始めた。彼女と一緒にいた囚人達は、1012番を哀れみと恐怖の籠もった視線で見つめている。

1012番の懇願は当然のごとながら俺と小山には無視され、彼女は廊下に連れ出された。再び、房のドアが閉まる。

「オラ、とつとと歩け！」

「イヤよ！今まで連れてかれた人は、誰一人として帰って来なかったわ！！お願い、一生牢屋の中にもいいから、連れて行かないで！！」

1012番が叫んだが、小山は無言で拳銃を抜いた。銃口を向けられ、1012番は身をすくませ、黙った。

その間に俺は、持って来た手錠を1012番にかけようとした。が、その瞬間、

「イヤァッ！！！！」

との叫び声と共に、1012番が俺の二の腕に噛み付いてきた。

「痛い痛い痛い！離れろ！」

「このクソ女ア！！」

俺が腕に歯が食い込んでくる痛みを悶え、小山が腰からスタンロッドを抜く。

見た目はただの警棒といった感じのスタンロッドだが、グリップにあるスイッチを押すことで高圧電流が流れる。まず小山は電流のスイッチを押さず、勢いよく1012番をスタンロッドで殴りつけた。脇腹に一撃を喰らった1012番がぐつと呻き声を上げ、俺の腕に噛み付く強さが一瞬弱まる。その瞬間を見逃さず、俺は1012番の顔を腕から引き剥がした。

俺が1012番から離れたのを見て、今度はスイッチを押した状態で小山がスタンロッドを叩きつける。スタンロッドの接した箇所から1012番の身体に電流が流れ、「ぎゃっ」という悲鳴を上げて1012番が床に崩れ落ちた。

が、小山はそれでも追撃を止めなかった。床に倒れた1012番の腹に、容赦なく蹴りを入れる。今度は腹を押さえ、1012番は胎児のように身を曲げた。

「このっ！このっ！このっ！犯罪者がア！！いい加減自分が無駄な存在ニラゲンだつて事に気づきやがれエ！！」

小山はそう叫び、1012番の身体に何発も蹴りを入れる。軍用ブーツの硬い爪先が身体にめり込むたびに、1012番は呻き声を上げた。

ようやくそこで俺は事態を理解し、あわてて小山を1012番から引き剥がす。一瞬だけその形相は凄まじかったが、すぐにいつもの表情に戻った。

「戦意を喪失してる。これ以上やったら死ぬぞ」

「死んでもいいんですよ、こんな人間は」

荒い息を吐きつつ、小山はそう言った。床で身体を丸めている10

12番はどうやら気絶したらしく、逃げ出そうともしなかった。俺は迷彩服の裾をまくり、1012番に咬まれた箇所を調べた。迷彩服の生地は頑丈なので歯を通すことはなかったが、それでも腕には咬まれた傷がくつきりと残っている。

「感染者だったらアウトですよ、二曹」

「ああ、これから気をつける。それよりも目を覚まさない内に、さつさとコイツを運ぼう」

小山は了解と言い、気絶した1012番を肩に担ぎ上げる。念のためきつちりと手錠を掛けた後、俺達は福田の待つ研究室へと向かった。

研究室へは数分もかからずに到着した。研究室とはいっても以前見せられた福田の地下室ではなく、房の壁をいくつもぶち抜いて作られた、房を改造して作られた研究室だ。

研究室には鉄格子と防弾ガラスはめ込まれ、部屋の中心にはベッドが1つだけある。が、そのベッドは普通のものではない。

意識を失ったままつれてこられた1012番は、待ち構えていた兵士と医師達により、早速そのベッドへと寝かされた。ベッドには腕や足に当たる箇所金属の輪が装着されていて、寝かされた1012番はその輪を手足にはめられ、動けなくさせられた。

ベッドに拘束された1012番を除き、全員が部屋から退去する。その際部屋の片隅に、一人の兵士が拳銃と弾倉を1個ずつ置いていった。実験で使用するのだろうか？

とそこでようやく1012番は目覚めたらしく、顔をあちこちに向

けて状況を把握しようとしていた。そして自身がベッドに拘束されている事に気づいたらしく、顔面が蒼白になる。

俺達と一緒に部屋の外にいる福田は、自身の口元にあるマイクに手を当てて、言った。

「ようやく起きたみたいだね」

『ここは？ここはどこなの！？早くここから出して！！』

「残念だけど、今は無理なんだよね」

どうやら福田の声はマイクを通し、部屋の内部にあるスピーカーによつて1012番へと伝わっているようだ。同時に部屋の内部に集音マイクでも設置されているのか、防弾ガラスに遮れていても、壁に埋め込まれたスピーカーから1012番の声が流れてくる。

「さて、1012番、本名池田 真紀子^{まきこ}。君はこれからある実験を受けてもらうことになる。もしこの実験が成功したならば、君は晴れて自由の身だ」

『実験！？実験って何よ！！』

半狂乱の状態の、1012番もとい池田の声が聞こえてくる。俺はその名を聞いて、ようやく彼女が誰かを思い出した。

池田由紀子は、2人の幼い娘を殺した容疑で逮捕された。一見ありきたりな子殺しかと思われたが、彼女はとてもクズだった。

池田は多数の男と関係を持ち、2人の娘を出産した。当然、父親となるはずの男達は姿を消し、池田は1人で2人の娘を育てることになった。

問題は彼女が、自己中心的で理性的な人間でなかったことだ。高校時代にいくつもの犯罪を犯して高校を中退。ホステスとして働いていた。夫は存在せず、2人の娘を抱えた池田の生活は、どんどん貧乏になっていった。

当然、彼女は「仕方なく」働いているだけで、2人の娘の事など大事にしなかった。日常的に虐待が行われ、更には金を稼ぐ為に、娘達の裸の写真を売りさばっていたそうである。

娘達は十分な食事も与えられず、更には池田から暴力を振るわれていたこともあり、遂に2人同時に死亡してしまった。どうにか死因を誤魔化したかった池田は、「ベランダから転落した」と駆けつけた救急隊員に嘘の報告をした。

が、身体に残るいくつものアザや、体重が同年齢の子供達の半分もなかったことからすぐに嘘はばれた。逮捕・起訴された彼女に裁判長は、「身勝手な理由で死に至らしめ、さらには生活費を稼ぐ為に娘の裸の写真を売る事は、残虐な行為以外の何物でもない」として池田には無期懲役の判決がくだされた……。

というのを、2年ほど前に全国ニュースで見たことがある。結構有名な事件だったが、さすがに2年も経っていたせいで忘れてしまったのだらう。

刑務所に送られた後のことは、だいたい創造がつく。クルピン・ウィルスが変異したのち、彼女は福田の行う「実験」の被験者に選ばれ、ここに送られてきたのだらう。そして今日、その「実験」の日が来た。

「君、何週間か前に風邪の予防接種って事で注射を受けたよね？あれさ、実は試験段階のクルピン・ウイルスのワクチンだったんだよね。」

何でもない事のように福田が言ったが、彼女は自分に何が行われるか想像がついたのだらう。ベッドの上で暴れ、逃げ出そうとしたが、鉄の輪は彼女の手足を捕らえて放さない。

『出して！！今すぐここから出してよ！！』

「駄目に決まってるじゃん、そんな事。ああそうだ安心していいよ、ネズミで実験した場合は1匹だけ凶暴化しなかったから」

それは「何十匹」中の「一匹」だったのか。俺はそう言いたくなつた。どちらにしる、池田が人間のままここを出られる確率は、1パーセントかそこらだらう。

『何でわたしがあんだ達に殺されなくちゃならないのよ！？わたしには生きる権利があるはずよ！！』

「君だつて幼い娘を2人、飢えさせた拳銃殺したろ？君だつて彼女達の生きる権利を奪っているじゃないか」

『弁護士！弁護士はどこなの！？今すぐ呼んで、早く！！！！』

「弁護士なんて非生産的な職業の人間、ここにはいないよ。あ、外にうるさい政治家達はいるけどね」

『じゃあその人達を呼んできなさい！！あんだ達のやるうとしている事を止めさせてもらおうわ！！！！！！』

福田はウンザリした様子で俺達を見た。平和実現党あんなやまひを呼んできたりますます事態はややくしくなる。ま、どの道福田にその気は毛頭ないだらうが。

「あのねえ、コレは国の命令なの。まあ僕がそう働きかけた結果でもあるけど。どっちにしろ、君は国から見捨てられたの。つまりすでに君は、国民どころか人間でさえないの。ドゥー ユー アンダースタンド？」

その言葉を聞いた瞬間、池田の動きが固まった。そして訳のわからないことを叫びだす。

福田は近くのテーブルに置いてあった、アルミの盆の上にある注射器を手を取った。そして防弾ガラスのドアを開け、1人で室内へと入っていく。

ベッドに拘束されたままの池田は、室内に入ってきた福田の姿を見たとたん、物凄い勢いで身体をばたつかせ始めた。せめて注射を打たれないようにするための抵抗だったのだろうが、福田が白衣のポケットからスタンガンを取り出した事でそれは解決した。

福田は暴れる池田にスタンガンを押し当て、身体に高圧電流を流した。その体が大きく揺れ、動かなくなる。

一日に二度も電流を喰らうなんて不運だな、などと誰かが軽口を叩いた。誰も注意するものはいない。

福田は大人しくなった池田の腕にゴム管を巻き、血管を浮かび上げさせた。そして、一気に注射を突き刺す。

注射を終えるとすぐに、福田は室内から撤収した。

今打った注射の中身が何かは想像がつく。

クルピン・ウイルスだ。

第118話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

ベッドに拘束されたまま、池田は福田の手によりウイルスを注射された。電撃で気絶していた彼女は目を覚まし、腕に残る真新しい注射痕を見て、顔色が一気に青くなった。

『な・な・な。わたしに何をしたの!?!』

「何って、愚問だね。ウイルスに決まってるじゃないか。君が暴れなかつたら、もうちょっと穏便に注射できたんだけど」

『・・・・・・・・!!』

相変わらず福田は普段と変わらない口調で話していたが、この場でその口調は場違いすぎる。とても、マトモな人間だとは思われないだろう。

そして防弾ガラスの向こうでは、池田が唐突に身体を揺らし始めた。腕を上下に振り、足をじたばたさせる。拘束を解こうとしているのかもしれないが、金属の輪で両手両足をベッドに拘束されているのだ、外せるわけがない。

『出して!ここから出しなさい!!』

「さっきも言ったじゃん、もしこの実験に耐え切れれば自由の身だつて。それに君はもう感染しちゃったから、ワクチンの効果が認められるまでどの道外には出れないよ」

この外道が。俺はそう心の中で吐き捨てた。

福田コイツはとんでもないマッドサイエンティストだ。以前から福田は何

事にも手段を選ばない性格と知っていたとはいえ、まるで他人の命を弄んでいるみたいだ。

そしてコイツのやっていることが、国が命令したということにも腹が立つ。俺達軍人だって国の命令なら何でもやらざるを得ないが、それにだって限度がある。

俺達にだって喜怒哀楽くらいあるが、福田が考えている事はわからない。心の底では実験をいやがり、悲しんでいるのか。それとも嬉々として実験を行っているのか。あるいは何も考えていないのか。俺にはわからない。

そして数分後、池田の様子がおかしくなってきた。

先程まで拘束を解こうと暴れていたが、ついさつきからその勢いが弱まってきた。と同時に、何か訳の判らない事を口走るようになってる。

「君、カメラをズームして。瞳孔の様子を確認するから」

福田はそう部下の兵士に命令し、兵士が手元のパソコンを操作した。どうやら研究室の天井にはカメラが設置しており、それで被験者の様子をモニター出来るらしい。

机の上にあるモニターの映像がズームされ、池田の瞳を大きく映し出した。福田はモニターに近寄り、ボールペンを画面に当てつつ何かを呟く。

「瞳孔は散大し始めている、通常よりも大きい。天井の蛍光灯を見ても余り収縮していない」

続いて、目に見えるはつきりとした異変が池田に起こった。

池田の頭部から、毛髪が抜け落ち始めたのだ。

揺れる頭がベッドに接触すると、頭部からごっそり毛が抜け落ち、池田の頭があちこち剥げ始めた。無理やり引っっこ抜いている感じではなく、少し引っ張られるだけですぐに抜けてしまうようだ。

「あー、こりゃあ駄目かな」

医師の一人がぼそつと呟いた。

今や池田の頭部は、白血病やガンの治療をしている人みたいに、毛髪がなくなってしまうていた。ガン患者などは治療薬の副作用で毛が抜け落ちると聞いた事はあるが、それにしたってこんなに速いペースで抜けたりはしないだろう。

髪が抜け始めるのとはほぼ同時に、池田は暴れるのをやめていた。そしてマラソンを終えた直後のランナーのように、少しづつ息が荒くなっていく。

顔面は真っ青を通り越して真っ白になり、顔の血管が見えるほどだ。開いた瞳は血走り、瞳孔は開いている。

もう、結果は見えていた。

「ウイルス注射から10分、被験者の頭部の毛髪は完全に抜け落ちた。呼吸も荒い」

福田は一人、実験の様子を記録でもしているのか呟いた。

そして……………。

突然、池田は絶叫した。

再び暴れ始めたが、先程までとは違い、その力が強すぎる。池田を拘束しているベッドの金属の輪は、強い力を受けて今にも外れそう
だ。

そしてなにやら叫んでいるが、それはもはや人間の言葉ではない。
まるで動物が吼えているみたいだ。

「君、彼女の拘束を外して」

「え？いいんですか？」

「大丈夫だって。防弾ガラスで阻まれてるし、いざとなったら龍が
あつという間に射殺するさ」

福田はそう言い、椅子に座る兵士が手元のボタンを押した。

直後、ベッドに池田を拘束していた金属の輪が外れた。どうやらボ
タン操作でここから着脱できるらしい。

拘束を解かれた池田は、真っ直ぐ俺達に突っ込んできた。が、俺達
は防弾ガラスの向こう側にいるので、突進してきた池田は防弾ガラ
スによって弾き飛ばされた。

が、そのときの音と衝撃は、俺達に恐怖を感じさせる程だった。俺
を含む兵士全員が無意識にアサルトライフルを構えかけ、医師たち
は脅えたように壁際まで下がった。

そんな中で、福田は一人、池田と俺達とを遮る防弾ガラスの前に佇

んでいた。

「実験開始から15分、被験者が突然凶暴性を示した。先程までの症状と合わせて推測するに、彼女はクルピン・ウイルスの症状を呈している。ワクチンの効果は認められない。・・・実験は失敗した」

福田はそう呟き、じっとガラスの向こうの池田を見つめていた。

池田は　　ダークシーカーは福田の姿を確認すると、まるで怒っているかのように大きく吼えた。それと同時に、再びガラスへと突進する。

何度もダークシーカーがガラスに弾き飛ばされる様を見ていた俺は、ふと部屋の片隅に置かれた拳銃の存在を思い出した。視線を巡らせると、やはり、防弾ガラスの向こうの研究室の床に、拳銃は置かれたままだった。

奇妙な事に、ダークシーカーはその拳銃が目に入っているにも関わらず、何の関心も持っていないことだった。以前豊田市の市街地で古橋が感染した新型ウイルスは、福田の話によればほんの少し知識を残したまま人間をダークシーカーへと変えるはずだった。そしてその新型ウイルスに感染した古橋は、俺達に向けて手にした銃を撃ってきた。

もし福田が注射したのが新型ウイルスなら、このダークシーカーも拳銃の使い道くらいわかるはずだ。もしそうなら、床の拳銃を拾い、俺達に向けて撃ってくるだろう。

「福田、訊きたい事がある」
「なんだい？」

福田はダークシーカーから目をそらさず、言った。

「以前お前は、新型ウイルスにかかると少しは知識が残るって言ったよな」

「うん。そうだけど」

「じゃあ何故あいつは、床に落ちていている拳銃を使わない？一般人だって多少拳銃の使い方はわかるだろ」

「ああ、そのことが。まだ言ってなかったよな」

福田は相変わらず、何を考えているのかわからない表情だ。そして先程と変わらない口調のまま、言った。

「僕は知識がほんの少ししか残らないって言ったよな？」

「ああ。お前がそう言ったんだろ」

「残る知識は、人によって違う傾向にあるんだ。感染前、その人が強烈に憶えていた知識ほど、感染しても残っているんだよ」

「？さっぱり訳がわからないんだが」

俺がそう言つと、福田は呆れたような表情をした。

「まず君たちの仲間である古橋君・・・だっけ？が感染した場合。彼は兵士だったんだろ？」

「ああ。まだ入隊してから数年しか経ってないけどな」

「彼は兵士だった。つまり、銃に関する知識は強烈に持っていたわけだ。君たちは入隊した後、徹底的に銃の取り扱い方と撃ち方を習うんだろ？」

「・・・その知識が、ダークシーカーになっても残されていたと？」

俺が言うと、福田は指を鳴らし、「ザツグレイト！」と言った。その顔は、難しい問題をようやく解いてもらえた、学校の教師のようだ。

「君たち軍人の場合、銃の知識は頭に強烈にあるわけだ。だから感染しても、銃を撃つたりすることが出来る。実際、ここで兵士達が新型コロナウイルスに感染したときも、皆銃を撃ちまくってたよ」

「感染しても銃を撃てるのは軍人だけか？警官とかは？」

「警官は・・・まあ微妙だね。銃の知識はたつて拳銃くらいだし、それに四六時中撃っているわけでもない。まあ感染しても、撃てるのは拳銃くらいさ」

「くらいって・・・。いい加減だな」

「仕方ないじゃん、警官官の感染者には遭遇してないんだから。まあクザで実験した場合、銃を余り使ったことのない奴は、感染者になっても銃は使わなかったよ。牢屋にいる時に徹底的に銃の使い方を教えたヤクザもいたけど、そいつは感染者になったあと、床に置いてあった拳銃で僕らを撃ってきたよ。ま、防弾ガラスが役に立ってくれたけどね」

福田の話をまとめると、こうだ。

まず俺は、新型コロナウイルスに感染した全ての個体が銃を撃てるものと勘違いしていた。だが感染しても銃を撃てるのは少数で、それは軍人や警官など感染前に「銃に関する知識」が強烈に残っている人間だけらしい。だが少数と言っても、今や日本全土には銃火器が投下され、民間人が自衛のために銃を持つ時代だ。銃を撃つダークシーカーが本当に「少数」だといいいんだが・・・。

強烈に残っている知識の内容によっても、感染後の行動は変化するんだとか。

例えば主婦だと、スーパーマーケットがどこにあるのかななどを強烈に憶えている。新型ウイルスに感染したそういった主婦は、感染後はスーパーマーケットに潜んでいたらしい。つまり、感染前に強烈に覚えている場所に隠れる傾向があるんだとさ。

俺は福田の話聞いて、軍人の感染者が狙撃でもしてくるのでは、と心配になった。が、福田は笑ってそれを否定した。

「それは大丈夫だって。いくら生前に狙撃の知識を蓄えていても、感染した後は精密な作業は出来なくなる。狙撃って色々大変なんだろ？なら、精精スコープを覗くので精一杯だよ、とても弾を当てることなんて出来やしないさ」

福田はそういった後、研究室内に麻酔ガスを流すよう命じた。すぐに部屋の天井付近にある送風口から、シューツという音が聞こえ始めた。おそらく、室内で暴れるダークシーカーを麻酔ガスで眠らせした後、別の場所へと運ぶのだろう。十数分もすれば、完全にダークシーカーは眠ってしまうはずだ。

実験が終わり、兵士や医師が片づけを始めた。俺も帰ろうとドアを開けようとしたが、福田に引き止められた。

「ちよつと話があるんだけど、いい？」

あくまでお願いしているようでありながら、実は自分の意見を押し通すような有無を言わせぬ口調。俺は仕方なく首を立てに振り、そ

して福田の根城である地下研究室へと連れて行かれた。

第119話 side 龍(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第120話 side 龍 「地球意思」(前書き)

今回からサブタイトルをつけました。これ以前の話にも、時間が出来次第サブタイトルをつけていきます。

それと、今回の話は殆ど会話で進んでいきます。これは作者に才能が足りないせいでもあります。申し訳ありません。

第120話 side 龍 「地球意思」

「……で、話って何だ？」

福田によって地下研究室に連れてこられた俺は、とりあえず目の前にいる福田に訊いた。この研究室には奴と俺の2人しかない。

「まあまあ焦らないで、とりあえず座ってよ。あ、コーヒーいる？」

「いらん。苦いものは苦手だ」

「あそ。じゃココアでいいや」

福田はそう言ってマグカップを2つ取り出すと、一方にはコーヒーの粉を、もう一方にはココアの粉を大匙スプーン数杯分入れた。そして備え付けのポットからお湯を注ぎ込み、ココアの入ったマグカップを俺に渡してきた。

とりあえず、毒は入っていないだろう。今俺をどうこうするメリックトは無いし。そう思った俺は、素直にココアを飲んだ。甘すぎる。

「てめえ、ココアの粉入れすぎだろ」

「頭を働かせるには、糖分の摂取が一番だよ」

「それにしても入れすぎだ!!」

俺がつっこむと、福田は軽く笑い、そしていきなり真剣な表情になった。

先程までのへらへらした、何を考えているかわからないような表情とは違う。今も何を考えているかはわからないが、それでも福田が

真剣な話をするのだということは、その瞳からわかった。

「あのさ、龍はこれからどうなると思っつ？」

「どっつて、何の話だ？」

「これから、我ら人類がどんな運命を辿るのか、だよ」

福田はそう言い、コーヒーを飲んだ。

コイツは究極の自己中心野郎で、他人はどうなってもいいと考えるような奴だ。そんな奴が、何故人類の運命を気にかける？

俺はそう言おうとしたが、とりあえず先に、福田の問いに答えておく。

「・・・ワクチンか治療薬が完成すれば、人類の勝ち。人類の勝ち。ダークシーカーズの連中に治療薬を打って人間に戻し、復興していく。もし完成させられなかったら、ダークシーカーズの勝ちだ。人類はその数を減らしていったって、遂には地球上にはダークシーカーズが闊歩する時代が来る」

「なるほど。答えとしては80点だね」

「80点？お前、他に何か別の未来があるって言うのか？」

「ああ、あるさ」

福田はそう言うと、ニヤリと笑い、続けた。

「人類でもダークシーカーズでもない、新たな種が誕生する」

その顔は、まるで新発見をした科学者のような表情をしていた。

「・・・お前何言つてんだ？」

「何って、今言つた通りのことだよ」

「じゃあお前はイカれてる。頭のネジはどこに吹っ飛んだ？」

「さあ、もう5・6本どっかにいったかもね」

福田は再びニヤリと笑い、椅子から立ち上がる。俺は福田から、いよいよのないオーラが発せられているのを感じた。それも、邪悪なオーラだ。

「いいか、生物が進化するには、相当な年月がかかるって高校の時習つたろ。生物の授業を受けていない俺でさえ、その事がわかるんだ。科学者のお前がそんな事を言うなんて、本当に学校卒業出来たのか？」

「まあ、イカサマはしてないよ。それと龍、これは真剣な話だから、ちゃんと聞いてほしい」

「・・・はあ。で、続きをどうぞ、博士」

俺が諦めて肩を竦めると、福田は説明を始めた。

「まず、生物の進化は難しい。これは君も言つたよね」

「ああ。俺達人類と呼ばれる新人が現れたのが3万年前。その一手前の旧人と呼ばれるのが現れたのが30万年前くらい・・・だっけ？」

「そう。生物が進化するには少なくとも万単位。下手すると億単位の年月がかかる。突然変異つてのはよく起きるけど、突然変異した種は自然淘汰されてしまう事が多い。ま、僕は突然変異を重ね続けた結果、ここにいてるって学説が一般的だけだね」

福田はまるで講義中の大学教授のように、机と机の隙間を歩きつつ、身振り手振りを交えて話す。

「ま、突然変異しても、その結果得られた能力が環境に適していなければ、変異する前の種によって淘汰されてしまう。逆に環境が激変し、突然変異によって得られた能力が有効活用できれば、突然変異した種が生き残り、元の種は淘汰される。常識だよな？」

「んなことわかってる。さっさと本題に入れ」

「まあまあ落ち着いてよ龍。それで、ここからが本題だ」

福田は立ち止まると、俺の方を振り返った。

「龍はクルピン・ウイルスの事をどう思う？」

「どつって・・・、ガン治療薬が突然変異したウイルスとしか言いようがないんじゃないか？」

「正解。でもさ、おかしいとは思わない？」

「何がだよ？」

「だってさ、いくら基にはしかウイルスを使っているからといって、突然変異を起こすのが早すぎじゃないか？治療薬をつくったクルピン博士は、ちゃんと人間に投与する前に、動物実験とか変異を起こさないか、きちんと確認したはずだ。おまけにちゃんと、1万9人のガン患者に対して治療薬を投与する前に、数人のガン患者に対して臨床試験を実施している。この数人に投与された治療薬は、結局変異する事もなく本来の目的どおりガンを治療した」

「だからなんだ？」

俺は訳がわからず、半ば投げやりに言う。

はしかウイルスを基に作ったガン治療薬が変異し、クルピン・ウイルスが出来た。そこまではわかる。が、それと進化がどうのこうのといった話の、どこに接点がある？

俺が言うと、福田は待つてましたとばかりに言った。

「1万9人のガン患者に投与した後、クルピン・ウイルスに変異した。そして患者は世界中から集められ、そしてそのせいで世界中で感染が広まった。変異するタイミングが良すぎだとは思わない？」

「……」

「まるで世界中にウイルスをばら撒くのが目的だったみたいに、いきなりウイルスが変異した。僕はそう思った。そこで、ここからが僕の仮説なんだけど……」

俺は福田の話を、何も言えずに聞いていた。奴の話は、まるで麻薬みたいに俺を引きつけている。

福田は立ち止まり、そして俺の目を見て言った。

「クルピン・ウイルスはガン治療薬がただ突然変異したんじゃない。人類を新たな段階に進める為に、進化の1段階として変異したんだよ」

進化。

生物が進化するにはウン十万年の歳月を必要とする。人類が地球上に誕生してから3万年、なら進化が起こるのならまだ数十万年はかかる計算だ。

「……何言つてやがる。お前はこれがただの突然変異じゃないっ
てのか？」

「そうだよ。人類はもう行き詰ってる。環境破壊、人口爆発、食糧難。そしてそれらを巡って毎日のように発生する紛争……。もし人類が進化すれば、これらの問題も解決するかもしれない」

「あのな、お前のその主張は、まるで環境テロリストか変な宗教結社の主張そのものだぞ。その自覚はあるのか？」

「あるさ。僕は確実な事しか言わないって、龍も知ってるだろ？」

福田は「当然だよな」とでも言うように、俺の目を見た。

そつだ。福田は今まで間違った事は言った事はない。福田の言う事は全て重要なポイントを抑えていて、しかも正確だ。

じゃあ、コイツの言う「新たな進化」のために、ウイルスが出来たつてののか？馬鹿馬鹿しい。いくら福田の言うことは正しいと知っていても、俺は反論せざるを得ない。

そう思ったおれは口を開こうとしたが、出来なかった。何を言えればいいのかわからない。

その間にも、福田は話を続ける。

「人工的に生物は進化させられない。でも自然に生物は進化する。適者生存ってやつだ。もしこれが、自然の意思だとしたら？」

「自然の意思……？」

「あ、別に地球が意思を持つてるとか、そういう事じゃないよ。環境破壊が続き、他の生物の存在を脅かす人類。これを完全に排除する、もしくは新たに進化を起こし、これ以上の環境破壊を止める。そういう環境のシステムが地球には備わっているんだとしたら、僕は全ての辻褄が合うと思うんだ」

「……続ける」

俺は最早、福田の言うことに反論できなくなっていた。

「クルピン博士の作ったガン治療薬は、ある意味自然にとっては脅威だ。今までガンで死ぬ人間は多かったのに、それがゼロになる。つまり人間が増える。だから自然はこれ幸いとばかりに、人類の口減らしと進化を始めた。それがクルピン・ウイルスさ」

「・・・ウイルスが、自然の為に進化したと。お前はそう言いたいのか？」

「そう考えざるを得ないじゃない。現に日本の人口は以前の3分の2以下だし、他の国はもつと酷い。そのお陰で二酸化炭素の排出や森林伐採やらが止まったんだし、ま、ウイルスの第一段階の目的は達成できたって事かな」

「第一？じゃあ、第二段階もあるってのか？」

「多分ね。第一段階は人類の口減らしを目的とし、第二段階は人類の進化が目的だろうね。現に変異したクルピン・ウイルスに感染したら、以前とは違って銃を使うようになった。人間に近いといえる猿だって石を使って木の実を割ったりするだろ。それと同じさ」

福田の話によれば、クルピン・ウイルスの変異はまだまだ終わらないという。

以前のダークシーカーズはせいぜいそこらへんの物で殴りつけてくるくらいだった（小学校で俺が消火器で殴られたのがいい例だ）が、今回は限定的だが銃も使うようになった。これは、猿が人間に進化したとき、火を使い始めたのと同じだ、と福田は言う。

ならば次は何なんだ、と俺が訊くと、福田は鼻を鳴らし、言った。

「今の感染者たちは、人間とは程遠い身体能力を持っている。強靱な力、持久力、治癒力……。紫外線への耐性が全く無く、知能と人間らしい行動を失ったのは人間よりも劣るけどね。でも、彼らに知能が芽生え、そしていつしか太陽の下での行動も可能となったら？」

「新人類、か・・・」

「そうだよ！どんな病気にもかからず、怪我をしてもすぐに再生し、そして知能は今の人間以上。そんな存在が現れたら、地球にとってもプラスだろうね。環境破壊は現人類ほくらが大きく減ったお陰でストツプしているし、もし彼らに高い知能があったら、環境破壊をせずつ暮らす方法も考え付くだろう。知能が無くても、彼らの行動パターンは動物と同じだから、環境をこれ以上破壊する事もない」

じゃあ、もし新人類とやらが現れたら、お前はどっちの側につくん
だ？俺がそう訊くと、福田は笑って答えた。

僕が提唱しているのはあくまで仮説だ。新人類とやらが実際に現れるのかも不明だし、何より感染者に知能が芽生えるなんてありえない。僕はただ、死にたくないし、この世界をある程度気に入っているから研究を続けている。それだけさ。それに・・・、

「あんなウイルスごときに人間サマがやられるなんて、なんかむかつかない？」

福田は最後にそう言うと、マグカップを机に置いて研究室から出て行った。どうやら、他にも仕事があるらしい。

部屋にひとり残された俺は、手元の冷え切ったココアの残るマグカップを見つめつつ、思った。

福田の話が正しいなら、人類がウイルスに抵抗するのは、自然の摂理に反するんじゃないか？

ウイルスが蔓延する前の人類は環境破壊をギリギリのところまで進

めてしまったし、発展途上国など絶賛人口爆発中だった。それによる飢え、少ない資源を巡っての争いを、ウイルスは一気に力をつけてしまったのだ。

つまり、地球が抱えていた問題はあらかた解決したことになる。あとは人類が絶滅さえすれば、地球環境も以前のように回復していくだろう。

だったら、人間はこのまま消え去るべきなのではないか？

俺がそこまで考えたところで、ふと、美里の顔が頭に浮かんだ。

俺の元彼女。この前までは距離が縮まってきていたが、今では二人の間の溝は修復不可能に思える程広がっている。

・・・それでも、大切な人間だ。

「・・・福田の言うとおりだな。ウイルスごときにやられてたまるか。人類をなめるなってんだ」

俺はそう言うと、椅子から立ち上がった。

美里の他にも、堂々、中沢、牧といった戦友たち。優や軍司といった子供達の命を俺達は抱えている。彼らを危険に曝す事は、いくら相手が環境のシステムといっても、俺は抵抗せざるを得ない。

俺は地下研究室から地上へと駆け上がって行った。

大切な彼らを守る為に。

第120話 side 龍 「地球意思」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第121話 番外編 side others (前書き)

前回の投稿から、大分時間が経ってしまいました。申し訳ありません。

が、今回はその分ボリュームおおめなので、楽しんで呼んでいただければ幸いです。

第121話 番外編 side others

2018年 5月18日 22:00

東京国際空港（羽田空港） 滑走路脇

side 日本国防衛陸軍 東部方面隊 第31普通科連隊 益田^{ますだ}
洋次^{よつじ} 一等陸士

ジェットエンジンの轟音と共に、また旅客機が滑走路から離陸していった。

離陸していったボーイング社製の旅客機を目で追っていくと、他にも離陸した機の翼端灯の光が、よぞらのあちこちで点滅を繰り返している。

随分昔に羽田空港は国際空港となり、24時間離発着が可能な空港となった。が、24時間化したといっても、今夜の離発着数は異常なほど多い。

それもそのはずだ。

今現在、本州全土では殺人ウイルスが蔓延しているのだから。

俺は予備役兵士だ。普段は普通の小さなIT企業に勤務しているが、年に十数日ほど、近くの陸軍の駐屯地に向いて訓練を受けている。予備役になったのは、俺が大学生の頃だった。当時志望大学に不合格になった俺は、月数万円の勤務手当でがでる陸軍の予備役に登録したのだ。大学に合格し、卒業して企業に就職してからも、未だに予備役に登録したままだ。

予備役兵士とは、退役した軍人や志願した民間人から構成されている、非常勤の軍人だ。先進国では人件費の抑制の為、予備役の数が正規軍より多い。

自衛隊が軍に変わってから、それまでであった予備自衛官という制度は予備役兵士という名に変わった。が、その内容は昔と殆ど変わらない。

つまり、有事の際には召集され、任務を遂行する、ということだ。

俺の所属する第31普通科連隊は、予備役兵士を中心として構成されているコア部隊と呼ばれるものだ。指揮官には正規軍の曹以上のクラスの間が当てられ、即応部隊として機能している。しかしいから訓練を受けているからといって、所詮は予備役だ。真っ先に出勤することは少ない。

その出勤する事自体が少ないこの部隊が、この羽田空港に展開しているのには、とても深い訳がある。

三週間前、東京都の埋め立てで出来た島で、あるウイルスが蔓延した。

このウイルスはもともとガン治療薬として作られていたのだが、突然変異し、感染すると凶暴化して人間を襲うウイルスとなってしまったのだという。

島は封鎖され、軍による空爆を受けた。

この後政府は事態を重く見て、軍に治安出動命令を出した。更なるウイルスの蔓延と、パニックに陥った人間による暴動を抑止するためだ。

しかし、全国各地に展開するには、正規軍の兵士だけでは足りなかった。軍拡によって陸軍だけで40万人以上の人員がいるが、それでも足りない。各都市に派遣され、更に交代で警備するのに、40万だけでは足りなかったのだ。

そこで、予備自衛官に召集がかかった。10日前に俺も召集を受け、課長や同僚に白い目で見られつつ（能天気な事に、国民の殆どは普通の生活を続けていた）、指定された駐屯地で命令を受けた。

その命令とは、ここ　　つまり羽田空港の警備だった。

WHOはマリンシティの一件を受け、日本への渡航自粛勧告を出していた。しかしそれでも、仕事で外国からやってくる人間はいっぱいいたし、同様に仕事で海外へ行く人も同じように多かった。

俺達はこの10日、泊りがけで羽田空港に常駐している。検疫や警備などを、空港警察や警視庁の機動隊と共に行った。

一週間が経ち、もうウイルスは死んだのではないかという憶測が飛び交った。事実、2週間以上日本のどこかでウイルスが蔓延したとかそういう話は無く、じきに俺達も撤収するだろうとその時は思った。

しかし今日。

ウイルスは、本州各地で感染爆発を起こしている。

「・・・おい益田！聞いているのか！？」

その声で、俺ははつと我に帰った。

声のした方向を見ると、そこには俺の所属する第2小隊第1分隊の分隊長である、小松こまつ 誠一せいいち 陸曹長が、俺をすさまじい形相で睨み付けていた。第1分隊の他の仲間も、俺を心配そうに見つめている。年に十数日しか会わないとはいえ、訓練できつくしごかれる俺達は、所属分隊の指揮官の顔は恐怖とともに記憶に刻み付けられている。すかさず姿勢をただし、俺は小松陸曹長の方を向いた。

「申し訳ございません！少しぼーっとしてしまいました！」

「普段なら腕立て伏せ50回くらいはさせるところだが、時間がな
いから見逃してやる。それでは伝えるが、空港警備本部から我々に
命令が出た。内容は、これからヘリポートで待機し、ヘリで運ばれ
てきた避難民をターミナルビルまで誘導・警備することだ」

夕方になり、ウイルス感染者はあちこちで人を襲っている。政府は
非常事態宣言を出し、警察と軍に民間人の救助を命じた。

救助された民間人は政府の避難計画に基づき、空港や港から航空機
や船舶で本州から脱出させることとなる。軍の艦船や航空機だけで
は多数の人間を避難させるのは不可能なので、国民保護法やらなに
やらによって民間会社にも命令をだし、民間の航空機によって避難
民を輸送させることとなった。

この羽田空港も政府の避難計画実施場所に指定され、先程から都内から救助した民間人が、軍の輸送ヘリによって次々と運ばれてきている。そして直接空港に来た避難民らと共に、彼らは航空会社のジェット機で本州から避難していた。

数分後、第1分隊はヘリポートまで移動し、空港警察と交代して任務に当たった。

「な、益田。お前の家族は避難出来たか？」

銃を携えつつ周囲を警戒する俺に、同じく隣で警戒する第1分隊の仲間の郷田こむた 秋吉あきよし一等陸士がそつと訊いてきた。郷田とは訓練生時代に会って意気投合し、それからプライベートでもしばしば付き合いがある。

「避難って・・・さあ？」

「さあ？じゃねえ。お前家族の安否はどうでもいいのかよ？」

「別に。だってあんな連中家族でも何でもねえよ」

俺と両親は、とても仲が悪い。彼らは二人揃って教師であり、俺にも同じ道を歩ませようとしていた。それに反対した俺は家を飛び出し、それからずっと冷戦状態だ。

ちなみに俺が志望大学に不合格になった時、彼らは俺のことを徹底的にこき下ろした。それも俺の木に触り、就職してからは一度も実家に帰ってはいない。

郷田はどうなんだ？と俺は言いかけ、そして口を閉じた。郷田は幼いときに交通事故で両親をなくし、それからずっと施設で暮らしていた。予備役になったのも、生計をたてるためだと聞いたことがある。

る。

その時、遠くからヘリのローター音が聞こえてきた。ローター音は段々大きくなり、そしてターミナルビルの陰から、一機の大型輸送ヘリコプターが現れた。

機体の名称はCH-47JA、通称チヌーク。50人以上の人員輸送が可能なヘリコプターだ。機体の迷彩パターンから判断するに、どうやら陸軍所屬らしい。

誘導員の指示に従い、チヌークがヘリポートに着陸する。しばらくしてから機体の後部ランプが下り、中から避難民がぞくぞくと降りてきた。

皆一様に、疲れたような表情を顔に貼り付けていた。中には血でも浴びたのか、顔や服が真っ赤に染まって呆然としているサラリーマン風の男性の姿が見える。

俺達は小松陸曹長の指示に従って、開店するローターの危険範囲に入らないようにしつつチヌークに近づいた。

「皆さんこちらです！我々の誘導にしたがってください！」

と小松曹長が声を張り上げ、先に立って避難民をターミナルビルの方へと誘導する。

俺達は機体から出てくる避難民の列の脇に立ち、彼らを注意深く見守った。もしかしたら救助される前に咬まれてしまった人間がいるかもしれないからだ。

すでに手にした89式小銃には実弾が装填されている。89式小銃は09式小銃の配備と共に旧式化し、正規軍ではほとんど使われていない。もっぱら予備役兵用の二線級火器だ。

しかし旧式とはいっても、人を殺傷するのに十分な威力を持っている

る。もし避難民がここで凶暴化したら、殺害する権利を俺達は与えられていた。

しかし、それは杞憂に終わったようだ。とりあえず今回運ばれてきた避難民達は、誰一人として発症する事無く、ターミナルビルへと収容された。後は避難の列に並び、検疫を受けた後飛行機に乗って本州から脱出するだけだ。

そんなことを考える暇も無く、再び避難民をのせたヘリがやって来た。今回は1機だけでなく、合計10機近い陸海空海兵の混成ヘリ部隊だ。

陸・空軍のUH-60JAブラックホーク汎用輸送ヘリ。海軍のSH-60Kシーホーク哨戒ヘリとEH-101マリン掃海・輸送ヘリ。そして最新鋭の海兵隊機である、V-22オスプレイVTOL機が、続々とヘリポートに着陸した。

さすがに第1分隊の人員だけでは手が足りず、他の分隊の兵士達も避難民の誘導に加わる為に駆けつけてくる。

ヘリから続々と降りてきたのは、殆どが子供だった。どうやら学校で救助されたらしい。

子供たちは半泣きの状態だったので、俺達は彼らが怖がらないよう、優しく連れて行く。中には親を求めて泣き喚く子供もいたので、教師らしき女性が必死になだめていた。

「大変ですね」

「え、ええ……。そちらこそ、色々大変じゃないんですか？」

俺がその女教師に話しかけると、彼女は戸惑ったように俺を見た。泣き止んだ子供を小松曹長が誘導していく。曹長は子供がいるので、扱いに慣れているのだらう。

「子供が多いようですが、学校から避難してきたんですか？」

「はい……。わたしの働く小学校は避難所になっていて、多くの人が集まっていたんです。そこに、あの感染した人達が……」

どうやら教師の話を聞くと、避難民が集まっていた小学校に感染者がやって来て、校内で一気に感染が広まったのだという。彼女と数名の教師たちは生徒を屋上に誘導し、バリケードを築いて屋上に立て籠もったのだとか。それからしばらくして、通報で駆けつけた軍によって救助されたのだという。

女教師との話を終えた俺は、海の方を見た。ギリギリ見える東京湾には多くの船舶が浮かび、そして逃げ出すように南へと向かっていた。

東京湾には海軍の空母が展開しているようなので、おそらく空母に着艦するためだろう、数機のヘリは空港ではなく海の方へと向かって飛んで行った。

空港は避難計画実施場所だけでなく、軍のヘリの補給所ともなっていた。軍の整備員たちが着陸したヘリ部隊に向かい、簡単な点検と燃料補給、そして搭載火器の弾薬の積み込みを行っていた。

それらの作業が終わると混成ヘリ部隊は、それぞれ別の方向へと飛び立っていった。再び避難民を救助に向かったのだろう。

ヘリが飛び立って数十分もした後、俺達は別の命令を受けた。今度は滑走路と外部を遮るフェンス近くに展開し、避難民がフェンスを乗り越えて侵入してこないよう警戒しろ、とのことだ。

さて、滑走路脇のフェンス近くにたどり着いた俺達は、フェンスの外で繰り広げられる光景を見て絶句した。フェンスの向こうは道路で、普段は空港の利用者が運転する車が走っている。

今はその道路が、大勢の避難民で埋め尽くされていた。

通勤ラッシュの電車の中よりも酷い、まさにぎゅうぎゅうづめといった言葉がしつくり当てはまる状態だった。先頭に立つ人間はフェンスに身体を押し付けられ、後から後から詰め掛ける避難民によって身体を押し潰されてしまいそうだ。

「ここを通せ！飛行機に乗せろ！！」

「お願いです、子供がいるんです！こいつだけでも助けてください！！」

「おい押すなよ！！これ以上はもう進めない！！」

「邪魔だ、どけ！」

「押すなって言ってるだろ！！」

「わたしは感染してない！お願いだから飛行機に乗せて！」

聞き取れただけでも、そういった言葉が飛び交っていた。どこかのアイドルのライブでも、これほどの人数は集まらないだろうし、人の発する言葉だけで飛行機のエンジン音がかき消されたりはしないだろう。

サラリーマンが、主婦が、学生が、老人が、子供が、誰も彼も飛行機に乗ろうと詰め掛けていた。押し寄せる人の波に、何人かが飲まれて消えていく。

「・・・ひでえ」

郷田がそう呟いた。それは俺も同意見だった。

「曹長！彼らをターミナルビルに收容する事は出来ないんですか？」

眼鏡を掛けた真面目そうな兵士が、曹長に訊く。曹長は眉にしわを寄せつつ、首を横に振った。

「警備本部からの連絡によると、もうこれ以上ターミナルビルに收容するのは難しいそうだ。それに検疫の問題もある。避難民を飛行機に乗せるまでに掛かる時間は長いし、彼らを全員收容するのは不可能だ」

「じゃあ、あのまま放っておけと？」

「・・・我々に、全員を救う事は出来ん。今は与えられた任務を遂行しろ」

曹長はそう言うと、小隊長と話があるのか、どこかへ歩いて行った。残された俺達は副官の指示で、フェンスに沿って一直線に並ぶ。

俺達兵士の姿を見た避難民は、よりいっそう救助を求める声を上げた。しかし俺達に与えられた命令は、滑走路内に避難民が侵入するのを防ぐ事だ。

仮に滑走路に侵入者があれば、飛行機の離発着の予定は大幅に狂う。それは本州から脱出できる避難民の数が少なくなる事を意味していた。

今もフェンスにしがみつく彼らは、生き延びる為のチケットが欲しいのだ。しかしそれは、早く来て検疫を受けた人間か、政府機関の関係者とその家族に優先的に与えられる。

そのチケットを手に入れる頃には、もしかしたら自分たちは死んでいるかもしれない。彼らはそう考えるから、飛行機に乗ろうと大声

を張り上げ、滑走路へと詰め掛けるのだ。

「・・・帰りてえ」

誰かがそう呟いた。

俺も同じ気分だった。

事態が急展開したのは、俺達が配置についてから1時間も経った頃だった。

相変わらず避難民は続々とフェンスへと詰め掛け、脱出の為の飛行機に乗る列は遅々として進まない。フェンスに詰め寄ってくる避難民の数は、1時間前と比べて大きく増えていた。

道路は完全に人で埋め尽くされ、数センチの隙間も無いようだった。中には人の頭を踏みつけ、人の海の上を歩いて来ようとする者もいたが、たちまち引き降ろされ、袋叩きにあっていた。

「確実に人死んでるだろ、これ・・・」

「ああ。最前列の人間なんか、もう死んでるようなもんだ」

俺と郷田はそう言葉を交わした。

仮に死に掛けている人間を見ても、俺達に出来ることはない。救急隊員が負傷した人を救助しようとしても、人の海がそれを阻むのだ。

とその時、いきなり大きなクラクションが鳴った。

「ん？何だ？」

俺がそう呟くのと同時に、人の海の向こう側から、いきなり大きなダンプカーが現れた。ダンプカーは俺達　　滑走路目掛けて真っ直ぐ走ってきている。

人の海の端にいた避難民は、かろうじて爆走するダンプカーを避ける事ができた。しかし殆どの人間は後ろから人に押されていたので、身動きがとれず、逃げる事が出来ない。

ダンプカーは真っ直ぐ人の海に突っ込み、あちこちから悲鳴が上がった。肉が潰れ、骨の折れる音が鳴り響き、跳ね飛ばされた避難民が宙を舞う。

『こちら本部、何が起こった！？』

装着している携帯無線機のイヤホンから、本部からの通信が聞こえた。すかさず、戻って来ていた小松曹長が、無線機マイクに怒鳴る。

「こちら第1分隊！ダンプカーが真っ直ぐ突っ込んでくる！民間人の死傷者多数！」

『本部了解！絶対滑走路には入れるな！』

「了解、オワリ！！」

曹長は最後にそう言うと、俺達に叫んだ。

「滑走路への進入を止めさせる！」

「止めるって・・・どうやってやるんです！？」

「武器の使用を許可する、絶対に止める！」

曹長の言葉で、一斉に小銃の安全装置を解除する音が鳴り響いた。俺もセレクターをア（安全）からタ（単発）へと切り替え、89式小銃にマウントされたドットサイトを覗く。レンズの中心に映る赤い光点を、ダンプカーの運転席に照準しようとしたが、駄目だった。射線には多くの避難民がいて、ダンプカーの運転席の盾となるような状態だったのだ。

「射線上に多数の民間人！撃てません！」

郷田が怒鳴った。皆小銃を構えたはいいものの、発砲する事が出来ない。

その間にも多くの避難民を引いたダンプカーは、血や油でスピードを落とすつつも、ついにフェンスへと到達した。衝撃音と共にフェンスを支える鉄棒が歪む。

一撃でフェンスを破る事が出来なかったダンプカーは、一度バックし、もう一度突っ込んだ。今度は金網が大きく破れ、鉄棒が大きく傾く。

そしてダンプカーがもう一度突っ込むと、遂に鉄棒が金属音と共に俺達の方へと倒れてきた。ダンプカーはすぐさま、アクセルを全開にして滑走路へと侵入した。

ダンプカーの運転手は俺達を殺そうとしたのか、いきなり展開する兵士達へと突っ込んできた。全員が跳ねられる直前に回避する事ができたが、それが隙を生み、ダンプカーは真っ直ぐ駐機場へと走っ

ていく。

「停まれーッ！！」

という声があちこちから上がり、空港警察の警官や兵士達がダンブカーへと発砲する。面積が大きいから銃弾は当たるが、決定的なダメージを与える事が出来ない。

仮にこのまま駐機場にダンブカーが侵入すれば、運転手が飛行機をジャックするかもしれない。それどころか、もしダンブカーの運転を誤って飛行機にでも突っ込んだら、空港は使用できなくなる。

つまり、多くの人間が死ぬかもしれない。

そう考えた俺はすぐさま89式小銃を構え、セレクターを3（バースト射撃）に切り替えた。訓練の成績はそこそこよかったが、当てられるだろうか？

そんな考えが頭をよぎったが、今は考えている場合ではない。ドットサイトの光点をトラックの右後輪に合わせた俺は、引き金を引いた。

バースト射撃なので、弾は3発発射された。最初の3発は荷台に当たって火花を散らしたただけだったが、続いて発射した3発を、どうにか後輪に命中させることが出来た。

5・56mm弾がタイヤに突き刺さり、タイヤが破裂する。大きくバランスを崩して減速したダンブカーに、更に多くの銃弾が命中する。

全てのタイヤが破裂し、エンジンにも命中したのだろう。トラックは火花を散らしつつ減速し、そして完全に停止する直前に、運転手らしき男が運転席から飛び出した。

が、男が走りだそうとしたその瞬間、彼に多くの銃弾が突き刺さり、あつという間に彼を肉塊に変えた。

どうにか侵入を阻止できた。そう思ったのも束の間、今度はイヤホンが本部の人員の怒声をがなりたてた。

『破れたフェンスから多数の民間人が侵入！あらゆる手段を以って彼らを排除しろ！！』

その声で俺が振り向くと、トラックが突き破ったフェンスから、水道の蛇口を捻ったかのように避難民が滑走路へと押し出されていた。

「戻ってください！ここは侵入禁止です！！」

そう押し寄せる避難民の近くにいた警察官が怒鳴ったが、焼け石に水だった。次々と避難民は滑走路に侵入し、そして声を張り上げていた警察官に、角材をもった男達が殴りかかった。

警官が地面に倒れ、そして次の瞬間銃声が響いた。同時に悲鳴が上がり俺がその方向を見ると、一人の兵士が足から血を流し、地面に倒れていた。

警官を襲った男は拳銃を奪い、発砲してきたのだ。続いて別の兵士に狙いを定めようとした男は、次の瞬間には頭を吹き飛ばされていた。展開する警察の狙撃部隊が、男の頭を撃ち抜いたのだ。

銃声が上がリ、避難民達から悲鳴が上がる。同時に何人かが警官や兵士から武器を奪おうと殴りかかり、つられて他の避難民達も武器を奪おうと行動した。

「武器を奪われるな！正当防衛射撃だ、撃て！撃ちまくれ！！」

第1小隊の小隊長が怒鳴り、フルオートの銃声が次々と鳴り響く。俺も殺気だった目で近寄ってくる避難民を見て、思わず引き金を引いていた。

足を狙ったつもりだったが、放たれた3発の銃弾は、真っ直ぐその頭へと吸い込まれていった。ヘッドショットなんて滅多に出来ないのに、こんな時にしてしまうとは。運がいいのか悪いのか。

同時に仲間を殺されたせい、避難民達の攻撃目標が俺にシフトしたようだった。さらに多くの避難民が俺に近づいてきたので、セレクターをレ（連発）に切り替えた俺は、夢中で彼らに対し、フルオートの銃弾を浴びせかけていた。

タタタタと銃声が響き、避難民達の身体のおちこちに血の花が咲く。接近してくる彼らを掃射しようと思った俺だったが、フルオートで発砲したせいで、あつという間に30発入り弾倉は空になっていた。ガチツという音と共に射撃が止まり、俺は慌てて弾倉を交換しようとマガジンポーチに手を伸ばす。その間にも俺を殺そうとする避難民は近づいてくる。間に合わない。

避難民の男の一人が持っていたナイフが俺に振り下ろされようとした、その瞬間。

男は別方向からの銃撃により、ナイフを持っている手ごと腕を引きちぎられた。

「うぎゃあああああつ!!」

腕を失った男が地面に倒れこみ、千切れた方の手を無事な方の手で押さえつける。俺が銃撃のした方向を見ると、そこには銃口から硝烟を立ち昇らせる89式小銃を構えた郷田がいた。

郷田は空へ向けて威嚇射撃をしたが、殺気だっている避難民に効果はなかった。彼は舌打ちすると、避難民の腕や足を狙って発砲した。郷田が避難民の接近を阻む間に俺は弾倉の交換を終え、郷田へと駆け寄った。

「ありがとう、助かった！」

「どういたしまして！それより後退命令が出ている。さっさと安全な場所へ行こう」

「安全な場所？そんな場所あるかよ」

俺はそう茶化した。いくぶんか心の余裕が出てきたのかも知れない。周りを見ると、他の警官隊や兵士たちは次々と後退していた。きつと後退して駐機場と滑走路を守り、体勢を立て直す計画なのだろう。俺も郷田と共に後退を始めた。近寄ってくる避難民に対しては威嚇射撃を行い、それでも近づいてくる場合は手や足を狙う。武器を持っている奴には、問答無用で頭や腹に銃弾を叩き込んだ。

避難民達はやがて恐れをなしたのか、はたまた冷静になったのか、俺達の武器を奪う事を諦めたようだった。避難民達が俺と郷田から離れていくのを確認すると、俺達は味方のいる駐機場へと走り出した。

ターミナルビルの方からは、未だに激しい銃撃音が響いてくる。ターミナルビルは飛行機に直接乗れる分、パニックも大きいのだろう。

俺と郷田が駐機場の近くまで来た時、混乱のせいで放置されていた乗客輸送用バスの陰から、1つの人影が現れた。俺と郷田はすかさず小銃を構え、「誰だ！出て来い！」と怒鳴った。

バスの陰から現れたのは、中学生くらいの少女だった。彼女は制服らしきセーラー服を着ていたが、前進が血塗れだった。

「何だ、女の子か・・・」

俺は現れたのが女子中学生だったことに安堵し、彼女を保護しようと近づいた。

「君、大丈夫かい？見たところ血塗れだけど、怪我でもしてるのか？」

そう言って少女の肩に手を掛けようとした、その瞬間だった。

「益田、危ない！」

郷田が怒鳴り、続いて俺の下腹部に衝撃が走り、熱くなった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

そう口走る少女の右手には、包丁の柄が握られていた。

包丁の刃は……俺の腹に突き刺さっていた。

俺達は一応、戦闘防弾チョッキ？型というものを着ている。セラミック製の抗弾プレートを挿入すれば、ライフル弾でも食い止められるものだ。

正規軍では新型の防弾チョッキが採用されていたが、予備役部隊である俺達はやや旧式化したこの防弾チョッキを身につけていた。これでも十分使えるからだ。

以外に思えるかもしれないが、防弾チョッキに防刃機能はない。防弾チョッキを構成するアラミド繊維は銃弾の衝撃を和らげ、貫通を防ぐ効果がある。が、先端のとがった物 例えばナイフなどは、衝撃を和らげる前に貫通させてしまうのだ。

それを俺は、今、身をもって体感していた。

腹が熱い。違和感がする。何で腹に包丁の刃が刺さっている。なぜ……

次々とそういった考えが浮かんでは消え、浮かんでは消えた。防弾

チヨツキの内側と、迷彩服のズボンが暖かい液体で濡れている。

少女は俺の腹から包丁を抜いた。その刃は、赤い液体で染まっ
ている。

俺は続いて襲ってきた痛みには耐え切れず、地面へと倒れこんだ。

「キャハハハハハハハハハハッ！！おとうさんも、おかあさんも、
アキちゃんも、みんな殺されちゃった。キャハハハハハハッ！！」

ああこいつ、親類を感染者に殺されて、気が狂ったのか。俺は気が
ついた。が、後の祭りというものだ。

少女は血濡れの包丁を掲げると再び俺に振り下ろそうとした。俺は
痛みで悲鳴を上げる身体をどうにか動かし、倒れたまま小銃を片手
で構えた。

ダンダンダンダン！！という銃声と共に、少女の頭が粉々に砕ける。
初めての片手撃ちで全弾命中なんて、俺には才能があるのかもしれない。

と同時に、猛烈な眠気に俺は襲われていた。まあ仕方ないか、昨日
も一昨日も警備の任務であまり眠れなかったし……。

「益田！しっかりしろ、益田！！」

郷田はそう怒鳴り、防弾チョッキの襟首を掴んで俺を引き摺り始めた。

俺が引き摺られたあとには、まるでぶっとい筆で乱暴に書きなぐったかのような、赤い線が続く。

郷田の声が、コンサートホールにでもいるかのように反響して聞こえるのは、俺だけか？何か視界も霞んできたし。

眠い。

寒い。

目の前が暗くなる。

もはや痛みは感じなくなっていた。

俺の意識は、暗闇へと飲み込まれた。

第121話 番外編 side others (後書き)

この後彼がどうなったのか、あえて描きません。読者の皆様の想像にお任せします。

第122話 side 優 「狩りの時 1」 (前書き)

第80話の武器紹介の更新をしました。今後も更新する予定です。

第122話 side 優 「狩りの時」1

2月21日 09:00

ボク達が名古屋刑務所に来て、3週間近くが過ぎた。ボク達はワクチンや治療薬が完成するまで、当分の間ここに足止めされることとなっている。

無論、その間ただ待つ訳にはいかず、ボク達には労働する事が求められた。仕事はたくさんあるし、刑務所内で軍に保護してもらえろ条件は、「軍に協力的で労働する人」だからだ。

ボク達は子供ということで大入達よりも仕事量は少ないが、それでも毎日働かなくてはならない。特に刑務所内の食糧事情はギリギリに近い状態なので、農業に従事している避難民は多い。

場所は変わって、刑務所の敷地外にある畑に、ボクと軍司を始めとする刑務所に避難する子供たち10人は来ていた。野菜の世話をする為だ。

刑務所内の敷地で野菜を育てるには限界があるので、刑務所の外にも畑を作って野菜を育てているのだ。畑は歩いていける距離にあるのが幸いだ。

さてボク達は、通称「1番」と呼ばれる畑に来ていた。畑は刑務所に近い順に、1番、2番、3番・・・と名づけられている。1番の畑にはビニールハウスが建てられ、一年中野菜を供給できるようになっていた。

「内田さん、いますか？」

ボクは畑に着くと、ビニールハウスの外から呼びかけた。ややあつて、ビニールハウスの中から64式狙撃銃を持った老人が出てきた。内田さんだ。

軍によつて保護される前、内田さんは農業を営んでいた。そのことを買われて、内田さんは農業指導および畑の警備をしているのだ。

「おお、そういうばもうそんな時間か。じゃあ手伝ってもらおうか」「わかりました。じゃあ皆、仕事はわかっているね？」

軍司がそう言い、皆をビニールハウスの中に誘導する。主な仕事は水や肥料を野菜に与えたり、野菜に異常が起きていないか見るだけなのだが、素人に近いボク達だけでは完璧にこなせない。なので今はまだ、内田さんに指導してもらうことがしばしばある。

ビニールハウス内では小松菜やキャベツ、トマトなどを育てている。外の畑ではジャガイモなどを育てていて、大量に収穫できて保存も利くジャガイモは特に多く栽培されている。

「ん」。異常はなさそうだな

植えられた野菜の間を歩いてきた軍司が、野菜の葉や茎を見つつ言った。病気や寄生虫などで収穫量が落ちてしまったら大変なので、そのあたりはきっちり調べている。

30分ほどかかって、全ての野菜の水遣りや異常がないかを調べ終わった。手は泥まみれになってしまったが、誰も気にする者はいない。今や農作業は生きる為に必要なことであり、いくら汚れても不平不満を言う事はない。仮に誰かが言ったとすると、そいつは「このご時勢に何言ってるんだ」と皆に干されてしまうだろう。

「ご苦労様。それじゃあ、気をつけて帰るんだぞ」

刑務所へ戻るボク達に、狙撃銃を背負った内田さんが手を振って見送る。

「気をつける」というのは、ダークシーカーズに対してではない。ダークシーカーズは日中動く事はないし、そもそも夜間の外出は厳重に禁止されているので、ボク達子供にとって脅威ではない。

むしろ脅威なのは、動物園から脱走した猛獣や野生の猪や鹿などだ。それらの動物は人間が減った事で活動領域が増し、近頃では鹿や猪がよく刑務所近辺に出没するようになってきている（その度に狩られておいしく頂かれるのだけだ）。

そして一番の脅威は、やはりあの平和実現党と暴力団だ。なぜ水と油のような二つの組織が協力し合っているのかはわからないが、彼らの目的が軍から権限を奪う事だというのは確かだ。

平和実現党は昼間はデモや抗議に明け暮れ、暴力団は彼らに付き添って周りを威圧していた。暴力団員達が持つ刀は銃と違って脅威度は低い、周囲に無言の圧力をかけるには十分な役割を果たしていた。

そして更に困った事に、刑務所内の避難民達が彼らの思想に賛同し始めていた。軍が避難民達に与える物資は不足気味なので、避難民達の不満が溜まっている。そしてその不満を持つ者は軍を指揮下に置こうとする平和実現党員たちによって、軍に協力的な避難民達の中に平和実現党の思想を広める役割を果たしていた。

刑務所の正門の周りには、いつもと同じく厳重な警戒態勢が敷かれていた。門の周囲には有刺鉄条網が張り巡らされ、土嚢に周囲を囲まれた銃座がいくつも設けられている。

「おっ、優じゃないか。久し振りだな」

門の脇の歩哨詰所には、愛銃のミニミ軽機関銃を携えた中沢さんがいた。いつもの迷彩服にヘルメット、防弾チョッキを装着しての完全武装姿だ。最近あまり会う事が無かったので、ずいぶん久しぶりの再会だ。

「中沢さん！お久しぶりですね！」

「ああ。そっちは元気でやってるか？」

「まあまあ元気ですよ。それにしても、最近何やってるんですか？東さんとかにも会わないし」

中沢さんはその質問に、少し表情を強張らせた。あれ？何か悪い事訊いたかな？

笑って「あいつも最近忙しいからな・・・」と曖昧にした中沢さんは、畑に行った全員が帰ってきているかを、バインダーの名簿と照らし合わせて確認した。事前に確認していた通り、全員ちゃんと帰っている。

「よし、行け」

中沢さんはそう言って、刑務所内へとボク達を促した。心なしか、最近初春市から行動を共にしてきた軍人達も、ボク達に対する態度を変えて来ているようだ。

東さんとはこの3週間全く会うことは無いし、他の軍人達とも食堂などで時々会うだけだ。そしてたまに会った時ですら、話をさっさと切り上げて帰ってしまう。何をしているのか聞き出そうとしても、笑って誤魔化されてしまう。

さっきの中沢さんの態度からしても、彼らが何かを隠しているのは

明らかだ。が、その何かが何なのかわからない。

ボクがその事を考えつつ歩いて刑務所内の車庫付近まで来た時、急に声をかけられた。多賀さんだった。

多賀さんは軽トラの整備をしていたようで、袖を捲った腕のあちこちがオイルで汚れている。

「おつ、優と軍司じゃん。ちょうどいいところに来た」

「ちょうどいいところ？」

軍司が訊き返した。

見れば多賀さんの肩には、いつも使用しているレミントンM700ライフルが掛けられている。刑務所内で民間人が銃を携帯する事が出来ないので（許可が出れば可）、軽トラやその他の服装から見ると、これから猟に行くのだろう。

「ああ成程。これから猟ですか」

「そうそう。でさ、一緒に行くはずの奴が風邪で寝込んでさ。だからアンタ達も誘おうと思ってただけ、手間が省けてよかった」

「延期すれば良いんじゃないですか？」

そう言うと、多賀さんは溜息を吐きつつ答える。

話しによると、最近この辺りで鹿の群れが目撃されたり。数十頭規模の群れだそう。

で、その群れが逃げないうちに、さっさと狩っておこうという考え

だそうだ。しかも鹿は農作物を食い荒らす恐れもあるので、害獣駆除も兼ねているのだ。

刑務所の警備責任者である大山二尉に訊いてみたら、二つ返事で許可が出たらしい。無論武器を携行し、狩った得物はちゃんと分配するのが条件らしかつたが。

「行きます！行きましょう！！行かせて下さいッ！！！」

多賀さんの提案に、軍司が真つ先に賛成した。軍司は銃の携帯が許可制になってしまい、最近実銃を持つ事が出来なくなってしまった。電動ガンなどで練習して腕を鈍らせないようにしているらしいが、ガンマニアの軍司にとって実銃を持ってない事はアルコール中毒者が酒を飲めないようなものだったのだろう。

「行きますよね、優さん!？」

「え?ええ、まあ……。軍司がそこまで言うなら……」

「ヒャッハーツ!狩りの時間だぜい!!」

軍司のテンションが一気に上がった。ボクと多賀さんは軍司の様子に若干引きつつも、狩りに行く為の準備を整える。

多賀さんは軽トラに燃料を補給し、ボクと軍司は武器庫に銃を取りに行く。中沢さんにそのことを話すと「まあ、気をつけるよ」の一言で許可してくれ、さらに内線で武器庫に連絡しておいてくれたので、武器の受領はスムーズにいくはずだ。

「久々に銃が持てる……腕が鳴るぜ!!」

「ああ、そう……」

テンションが上がればなしの軍司を連れ、ボク達は武器庫のある

3号棟に来ていた。

刑務所には武器庫がいくつかあり、軍人用と民間人用に別れて武器が保管されている。軍人用の武器庫には基本的に民間人は立ち入れず、ボク達が初春市から持って来た銃器の類は、多くが民間人用の武器庫に格納されていた。

3号棟の1階の武器庫には、いつも誰かが詰めている。大抵は軍人だが、たまに軍から依頼された民間人もいる。

何と今日武器庫に詰めていたのは、ここまで一緒に来た堂々さんだった。堂々さんは愛用の10式狙撃銃の分解清掃をしていたらしく、武器庫内のテーブルに敷かれた布の上には、分解された狙撃銃の部品やオイルなどが並べられていた。

「おつ、優。久し振りだな」

武器庫と廊下を遮る格子越しに、さつき中沢さんと交わしたような会話をしつつ、堂々さんは分解清掃していた10式狙撃銃の部品をあつという間に組み上げていく。

既に内線で中沢さんから連絡を受けていた堂々さんは、武器庫内の銃架から、ボク達がいつも使っている武器と弾薬を取り出し、カウンターに並べた。

ボクはMP5F短機関銃とブローニングハイパワー自動拳銃を、軍司はM4A1カービン（軍用銃だが、軍司の為に特別に格納されていた）とベレッタM92F自動拳銃を、それぞれ装弾済みの予備の弾倉数本と共に受け取る。一緒に渡された弾倉ポーチをベルトに装着し、その中に予備弾倉を収納する。

「じゃ、次は狩猟用の武器だな。何がいい？」

「そうですね……。とりあえず僕はライフルを。優さんは猟を余りやった事がないので、ショットガンでいいですよね？」

軍司にそう訊かれたので、ボクは頷く。軍司は初春市にいた頃から猟によく出ていたが、ボクはあまり猟をやった事がない。猟に行っても、他の人の手伝いばかりだったので直接得物を撃った事はない。

「じゃあ、米軍マニアのお前にはこれ。優はこれだ」

既に大体見当をつけていたらしい堂々さんは、そう言ってカウンタ―にライフルとショットガンを並べた。

「ウホッ、いい銃……」

「こいつを見てくれ。どう思う？」

「すごく、大きいです……」

某ガチホモ漫画（図書館に何故があった。一回だけ読んでしまい、すぐ後悔した）の掛け合いを軍司と堂々さんをし、一通り終わって軍司がライフル銃を受け取った。

多賀さんの持つレミントンM700ライフルに酷似したその銃は、アメリカ軍や防衛軍でも採用されているM24SWSというボルトアクション式ライフルだ。M700ライフルを基に改良された軍用銃で、威力が高く精度もいい。ただし、ボルトアクション式なので一発撃つごとに装填しなければならない。

どうやらM24SWSライフルは米軍の物ではなく、防衛軍で採用されている物のようだった。刻印が日本語だったからだ。しかし軍司はそんな事にはこだわらず、ちゃんとライフルが動作するかを確かめている。

対してボクが受け取ったのは、イサカM37というショットガンだ。

重量は軽く、12ゲージのシエルが4 + 1発まで装填可能。一発撃つごとに、銃身下のフォアエンドを引いてシエルを薬室に装填する。ボク達はそれらの銃の弾も受け取ると、外で待つ多賀さんのところへ戻ろうとした。その時ふとボクは立ち止まり、堂々さんにも中沢さんにしたのと同じ質問を試してみた。

「あの、東さんって今何をしてるんですか？」

そう訊くと、一瞬堂々さんが固まった。一瞬の間があつて、

「……さあ？あいつは最近いろいろパシられてるらしいから」

と答えた。

やはり何も聞けなかった。もしかしたら、軍人達には何か緘口令が敷かれているのかもしれない。

でも、何で？答えられないような事をやっているのか？だったらそれは一体何なんだ？

ボクはそう訊きたくなつたが、もし訊いたとしても、重要な情報は得られないだろう。逆に警戒されるだけかもしれない。

そう思ったボクは、大人しく礼を言つて武器庫を去つた。後から堂々さんの「気をつけるよ！」という声が追いかけてくる。

「……ねえ軍司。何かおかしいと思わない？」

「奇遇ですね。ボクも多分、優さんと同じ事を考えてます」

軍司は先程までの興奮はどこへ消え去つたのか、いつの間にか真剣な表情になっていた。

「絶対、何か隠してるよね。軍の人達」

「ですね。でも、それが一体何なのかがわかりません。東さんとは最近会ってないし、他の人も僕達と会うのを避けてますし」

その後も話を続けたが、結論は「何かやっているのは確かだが、それが何かわからない」と出た。

軍人たちはしばしば装甲車などの車列を組んで市街地に向かう事がある。何をやっているのかは同行する民間人はいないし、軍人達も口が堅いのでわからない。平和実現党あたりは軍が何をやっているか調査している、と風の噂で聞いた事はあるが、あんな設定マニアの連中が調べた事など、話半分に聞く程度の価値しかないだろう。

「じゃ、早く乗って。得物が逃げるかもしれないよ」

ようやく多賀さんのところまで戻ったボク達は、その言葉で軽トラの荷台に乗った。荷台には昼食のおにぎりと思しき包みや無線機、予備の燃料や工具等が乗せてあった。帰るときに、この荷台に得物が乗っていればいいけど。

多賀さんが車を発進させ、刑務所の門まで向かう。途中、軍用車両の車庫の前を通過したが、昨日までそこに駐車されていた装甲車両数台は、いつの間にか消えていた。今日も市街地へと向かったのだろうか。

門まで来て、詰め所の中沢さんが多賀さんに、外出の目的や人数、帰りの時刻や装備をちゃんと完全に揃えているかなどを訊く。それらをパスしなければ、刑務所から遠い場所へ外出する事は認められていないのだ。

ぼんやりとその様子を見てみると、突然拡声器で割れた大きな声が聞こえた。最早日課と言ってもいい、平和実現党のデモが始まった

のだ。

数十名の平和実現党員達は指揮所のある棟まで行進したのち、棟の入り口付近でシュプレヒコールを挙げ始めた。歩哨の兵士はウンザリした様子ながらも彼らに干渉せず、いつもの光景が広がっている。

「働けよって言いたいところだけど、意見をちゃんと主張するのも働く事なんですよね・・・」

軍司がそう呟いた。

全ての項目をチェックしたのか、中沢さんが「行つていい」というように手を振り、他の兵士が電動で開閉する門を開く。ゆっくりと門を通過した後、軽トラはスピードを上げ、近く（といってもキロ単位で離れている距離だけど）にある森へ向かうルートを走り始めた。

ちゃんと得物が獲れるといいな。ボクは思考を前向きに切り替え、荷台に座って流れる周囲の風景を見る事にした。

第122話 side 優 「狩りの時」1 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

刑務所から数キロ北に行った場所には森が広がっている。ボク達は近くで狙撃銃のスコープの調整をした後、森に入った。

森は手入れする者が消えたせいで、正に自然といった感じになっていた。本州封鎖以前によく車が通っていたらしき場所は、地面が踏み固められタイヤの跡が地面に残っていたが、それも大分草に覆われてわかりづらくなっている。

「自然の王国ですね・・・」

軽トラの荷台に座り、肩に狙撃銃を掛けた軍司が言った。

木々の間からは日光が漏れて進路を照らしているが、それも光量が足りず森の中は大分暗い。鳥の鳴き声があちこちから聞こえ、まるでジャングルにいる気分になった（ジャングルには一度も行ったことはないけど）。

「2人とも、そろそろ降りるよ！」

運転席の多賀さんがそう言い、軽トラが減速し始めた。やがて完全に停止し、ボク達は軽トラから飛び降りた。

この先数百メートル進むと、鹿の大群が目撃された場所にたどり着くのだという。得物を見落とさないよう周囲に目を光らせつつ、地図とコンパスを頼りにボク達は進んだ。

百メートルも進むと、地面に鹿の足跡がいくつもあった。近くには糞もある。

多賀さんは地面にしゃがむと、足跡に手を当てて大きさを測った。

「この大きさだと、オスの大人かな？地面がぬかるんで足跡がまだ固まっていないし、ついさっきまで鹿はここにいたと思う」

そう言うと多賀さんは立ち上がり、足跡の続く方向へ歩き始めた。帰り道がわからなくなるといけないので、僕は赤いビニールテープを木に貼り付ける。これはボクの担当の仕事だ。

そうして歩く事数分、先頭を進む多賀さんが急に立ち止まった。手でしゃがむよう合図し、ボクと軍司は素早くしゃがみ込む。

「どうしたんですか？」

「いたよ、得物が」

軍司の問いに、多賀さんは前方を指差した。そして双眼鏡を取り出し覗き込む。ボクと軍司も多賀さんに倣って双眼鏡を取り出すと、多賀さんの指差した方を覗き込んだ。

木々の合間に、5頭の鹿が見えた。その内の2頭には大きな角が生えている。鹿達はボクらに気づいていないらしく、地面に生えた草を食んでいた。

「あの大きさなら結構肉が獲れるね。よし軍司、やるよ」

「わかりました」

多賀さんと軍司は肩に掛けていた狙撃銃を持つと、多賀さんは近くの倒木に身を隠して銃身を倒木に載せ、軍司はそのまま地面に伏せ、M24SWSライフルの2脚を立ててスコープを覗き込んだ。ボク

は狙撃銃を持っていないので、双眼鏡で目標を覗いて軍司の狙撃支援をする。

これは狙撃手の堂々さんから習ったことだが、狙撃手は基本的に2人1組で行動するのだという。1人は狙撃銃を持って目標を撃ち、もう1人は狙撃に必要な情報を与えたり、周辺を警戒したりする。狙撃銃のスコープで見える範囲は狭く、狙撃に必要な情報、例えば風が吹いているかどうかなどがわかりにくいから、だそつだ。

「風は・・・西風、そんなに強くない」

「西風ですね、了解」

鹿の近くに生えた木の葉は若干揺れている。つまり風が吹いているという事だ。その情報をボクは軍司と多賀さんに伝える。

相変わらず鹿は草を食んでいる。狙撃に風は障害となるので、撃つのは風が止んでからにしなければならぬ。だがその前に鹿が逃げてしまったら元も子もない。

早く止め、早く止め・・・とボクが思うこと数秒、ようやく鹿の近くの木の葉の揺れが止まった。その瞬間、多賀さんがM700ライフルを撃つ。続いて軍司もM24SWSライフルを発砲する。軍司は多賀さんに続いて撃つことを、最初に決めておいたのだ。

双眼鏡の視界の中で、2頭の角の生えた大きな鹿が、ほぼ同時に首に穴を開けて地面に倒れる。銃声が森の中で木霊し、異変に気づいた残り3頭の鹿は一斉に逃げ出した。

観測手は目標が死んだかを最後まで確認する必要がある。地面に倒れた鹿達をその後も見つけたが、2頭の鹿は死後痙攣を起こして四肢を震わせているだけだった。

「目標の死亡を確認」

ボクがそう言うと、軍司が満面の笑みを浮かべた。多賀さんは「よくやった、軍司」と言い、倒した獲物のもとへ走っていった。ボク達も多賀さんに続き、鹿達に近づいていく。

倒した鹿は、どちらもおスだった。メスを倒してしまつと後々獲物が減っていくので、なるべくオスを撃つ事と以前多賀さんは言っていたので、今回はその教えを忠実に守った事になる。ただし今回は鹿が大量発生しているので、オスメス関係なく撃たなければならぬのだが。

さて、狩った後はすぐに処理（主に血抜き）しなければならない。血を抜かなければ、あつという間に肉が臭くなってしまふのだ。

多賀さんと軍司はそれぞれ仕留めた鹿の傍らにしゃがみ込むと、まずは手を合わせて冥福を祈った。そしてハンティングナイフを取り出すと、鹿の胸元に突き刺した。そして肺動脈と大動脈を切る。

たちまち周囲には血の臭いが立ち込め、軍司と多賀さんの手は血で真っ赤になった。面倒だしグロい作業だったが、本来肉はこうやって食べる物なのだ。ウイルス蔓延前の世界では、その過程を誰かが代行してくれていたに過ぎない。

きっと世界にウイルスが蔓延しなければ、ボクはいつまでもスーパーに並んだ処理された肉を食べていたに違いないし、他の生き物の命をもらって生きている事を実感しなかっただろう。

血抜きの終えた鹿を1頭ずつ軽トラまで引っ張り（とても重かった）、ロープを身体に巻いてどうにか荷台に引っ張り上げた。十分な成果だったがボクがまだ獲物を仕留めていないので、移動して再び獲物を探す事になった。

再びボク達は生臭い臭いの立ち込める荷台に座り、多賀さんは運転

席に納まって軽トラを発進させる。荷台は2頭の鹿で占領されており、ボクと軍司はわずかな隙間にどうにかして座り込んだ。もと来た道を引き返し（さっきの道は倒木で進めなかった）、ボク達は荷台から獲物を探す。だが先程の銃声で逃げ出してしまったのか、それともこの辺りには元々少なかったのか、鹿や猪は一向に見つからなかった。

「何もいないね・・・」

ボクがそう言うと、軍司は無言で頷いた。そしてM24SWSLライフルを手にする、ボルトを引いてさっき撃って減った弾を装填する。軍司の目は狩獵者ハンターのそれになっていた。

結局何も見つけれずに森の端まで来てしまった。今日のところは無理か・・・とボクがあきらめムードになっていると、急に軍司が「停まってください！」と言った。多賀さんが怪訝な顔で、荷台の方を振り返る。

「軍司、どうしたんだよ？」

「あそこに誰かいます。人間です！」

多賀さんはそれを聞き、軽トラを停めた。そして運転席から降りると、軍司が指差した方を見る。

「ありゃ本当だ。誰だろうね・・・？」

そう言いつつ双眼鏡を取り出し、覗き込む。ボクと軍司も同じく双眼鏡を覗いた。

双眼鏡で見えたのは、停まっている数台の車と、ヤクザ達と平和実現党の党員達だった。平和実現党の面々の中には、党首の福原穂積の姿も見える。

そして彼らを警護しているのか、10名ほどいるヤクザ達は全員武装していた。いつも持っている刀だけではなく、拳銃や突撃銃で完全武装している。

「AK47・・・いや、AK74か。おつとあれはAKS74カービンか？しかもRPK74にSVDまで持ってやがる。まるで軍隊じゃねえか、一体どこに武器を隠し持ってたんだ？」

軍司が双眼鏡を覗きつつ、なにやらブツブツと呟いている。AKという単語には聞き覚えがあるので、軍司が呟いているのはきっとヤクザ達のもつ銃の名前だろう。

双眼鏡の中では、ヤクザのリーダーらしき人物と福原が何かを話し合っていた。そして平和実現党員達が車からスコップを持ってくると、いきなり地面を掘り始めた。一体何をやっているんだ？

「ここほれワンワン、とでも言うのかねえ？」

そう多賀さんが言う。

幸いボク達は彼らに気づかれておらず、ヤクザと平和実現党の行動を最後まで観察する事が出来た。彼らはしばらく地面を掘っていたが、やがて何かあきらめた顔になって掘るのをやめた。そして出来た穴を埋め戻し始める。

「何やってるんだらうね？」

「わかりませんよ、そんな事。でもあんな重装備のヤクザ、いままで見ただ事がない」

「どうする？東さん達に報告する？」

「今の状況じゃ誰が武器を持ってたっておかしくないし、ヤクザが穴を掘ってました、とでも報告するんですか？」

ボクと軍司がそう会話を交わしている内に、ヤクザ達と平和実現党員は乗ってきた車に戻ると、そのままどこかへと走り去っていった。しばらくしてから多賀さんも運転席に戻り、再び軽トラを発進させる。

ヤクザ達は何が目的で穴を掘っていたんだろうか。ただ掘って埋め戻したのは、穴掘り大会でもやっていたのか？こんなご時勢に？

軽トラが森から出ると、そこには鹿の大群がいた。鹿の群れは森の外で草を食んでいたが、突然森から飛び出てきたボク達の乗る軽トラを見ると、驚いたようにこちらを見て、それから群れ全体がボク達から逃げるように一斉に駆け出した。

「こんな所にいたんだ！こりゃあ50頭はいるね。よし軍司、優、撃つて！！」

多賀さんはそう言うとアクセルを踏み込み、軽トラを急発進させた。たちまち軽トラは走る鹿の群れに追いつく。

軍司は荷台に立て掛けてあったM4A1カービンを取り上げると、ボルトを引いて初弾を装填した。ボクも持っていたM37ショットガンのフォアエンドを手前に引くと、大群の内の1頭に狙いを定めた。多賀さんも運転席から片手を突き出し、M19リボルバーを構える。

「撃て！」

多賀さんの号令で、3つの銃口から一斉に火が吹いた。走る軽トラの上はよく揺れ、狙いは定めにくかったが、それでも何頭かの鹿が被弾して地面に倒れる。

ボクは撃ったショットガンのフォアエンドを引き、M37の装填口から空のショットシェルが排出される。使用しているのは散弾ではなくスラッグ弾なので、1発撃って1頭しか倒せない。だが照準器の向こうには走る鹿の壁が出来ているので、発射された弾丸は必ず鹿のどれかに当たる。

この日倒した鹿の数は20頭近くに及び、ボク達だけじゃ回収できず、刑務所から応援を呼ぶ羽目になった。夕食には鹿の肉が豪勢に振舞われたのは言うまでもない。

しかしボクは、鹿を狩れた喜びよりも、ヤクザ達の不審な行動のほうに気になっていた。この刑務所に来て以来、疑問ばかり増えていく気がする。

軍も不審な動きをしているし、ヤクザ達も変だ。

この名古屋刑務所で、一体何が起こってるっていうんだ………？

第123話 side 優 「狩りの時 2」 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第124話 side 龍 「すれ違い」

2月24日 11:00

暇だ。本当に暇だ。

俺は数名の仲間と共に、関係者以外立ち入り禁止の棟の入り口付近の詰め所に陣取り、入り口の警備に当たっていた。この棟には福田の実験を含め、一般人には見せられないものが色々あるので、軍人や一部の関係者以外この棟には入る事は出来ない。

こいつらさえないなきゃ、のんびり出来るんだがなあ……。

俺はそう思いつつ、詰め所の窓から棟の入り口を眺めた。そこにはいつも通り平和実現党やら護衛らしきヤクザ達の姿があり、彼らはいつも通り抗議行動を行っていた。即ちシュプレヒコールを上げ、プラカードを掲げ、大声で怒鳴る、ということだ。

「おらてめえ！聞いてんのかゴラァ！！」

俺がその声で正面を向くと、帯刀して俺のいる詰め所に向かって怒鳴る、顔を真っ赤にした20代の男がいた。確か名前は坏あくっ 祥吾しょうごだったか。奴は平和実現党と仲がいいこの坏組あくっの組長の息子、というポジションだったと記憶している。

コイツは他のヤクザ以上に何かと突っかかってきており、俺らの間ではより迷惑な存在として知られていた。相手の都合など気にか

ず、所構わず顔を合わせたら怒鳴ってくる。まるで初春市にいた時の澤田みたいな奴だ、と俺達初春市からやって来た軍人組は評価（？）している。

「・・・ああハイハイ、何か御用でしょうか？」

「んだとテメエ！なめた態度とつてんじゃねえぞ！」

俺がぶつきらぼうに答えると、祥吾はさらに顔を真っ赤にして怒鳴った。それにつられて平和実現党員がさらに大きな声でシュプレヒコールを上げ、文民統制を守れたの、食料の独占を許すな、だのと叫んでいる。

抗議活動に加わる民間人の数は、先日から続々と増えていた。主な理由は食糧不足だ。

ここは重要な研究所なので、本州封鎖中は空軍の輸送機が食料を含めた援助物資をいつでも投下していた。しかし本州以外に新型ウイルスが上陸すると、軍は輸送機を飛ばす余裕すらなくなったのか、1月からぱったりと物資投下は途絶えているとのことだ。

それゆえ食料の問題は重要になった。今までは輸送機が投下してくれていたので毎日の食事には余裕があった。しかし今ではそれも途絶えてしまい、備蓄してある食糧だけでは到底持たない。

なので今は鹿や猪を狩り、以前から育てていた野菜を収穫することで食料を得ている。しかしそれでは、刑務所にいる500人の胃袋を満たす事は出来なかった。刑務所の周囲に現れる獲物の数はたかが知れているし（先日優達が鹿を大量に狩ってきたが）、野菜は一部を除いて収穫まで時間がかかる。

毎日飢え死にしない分だけの食料は民間人に行き渡っているが、それは最低限の量しかない。今まで食べていた食事と比べると格段に量は減っており、それが民間人達の不満の源になっていた。

せめてあと100人数が少なかったらな・・・と、糧食班の人間（避難民の中にいた定食屋の主人だった）が嘆いていたのを聞いたことがある。それほど食料はギリギリの量しかないのだ。

そして不満はやがてストレスに変わり、それをぶつける相手を探し始める。そのストレスの捌け口になったのが、俺達軍人という事だ。平和実現党員達はその不満を上手くコントロールし、民間人の中で不満を持つ者を自分達の陣営に引き入れ始めた。曰く、

「軍は食料を自分達だけで独占している」

「食料を求めようと軍に請願しても、武器を以って鎮圧されてしま
う」

「だったら、団結して軍に立ち向かおう！」

というのが、彼らの宣伝文句である。

そして平和実現党の策は成功した。民間人の中から軍に協力的な人間は次々と減っていき、その分平和実現党に協力するものは同じ数だけ増えていった。その数は、すでに300人を越えたとも言われている。

「責任者出て来ーい！！」

という文句が、彼らの中から上がる。この場合の責任者は、名目上は大山二尉、実際には福田となっている。しかしその両名は毎日忙しく、平和実現党の要求に答えることは殆ど無い。

なので俺達警備の人間は、平和実現党の要求を受け流し、彼らが棟に侵入しないように見張るのが仕事となっていた。怒涛の如く上がる要求を馬耳東風、柳に風と受け流す。一々相手にしては日が暮れてしまう。

「今日も一段とづるさいねえ・・・」
「ですぬ・・・」

俺の隣に座る稲森さんが眩き、俺も視線を平和実現党員とは合わせずに答える。今の時間は俺と稲森さんが、一緒に詰め所で警備することになっていた。

こうつるさくでは音楽も聴けず、本を読もうにも集中できない。考え事をしようとしても、すぐに平和実現党とヤクザに邪魔されてしまう。

「あの・・・、すみません」

という声でしたので、俺は正面を向いた。そしてそこにいた人物の顔を見て、思わず目を見開く。そいつも俺がここにいるのが予想外だったのか、同じく目を見開いていた。

平和実現党とヤクザ達の隙間を縫って、詰め所の前に立っていたのは美里だった。最近美里とは色々上手くいっておらず、仲が悪い。たちまち俺達の間には気まずい空気が立ち込める。

そんなことを知らない稲森さんは、規則通り用件を承る。

「はい、御用は？」

「えっと、子供達を使うノートが大分少なくなっているので、それを補充しに来たんですけど・・・」

「へえ、じゃあこの用紙に必要な物と数を書いて」

そう言って稲森さんは机の引き出しから用紙を取り出し、美里の前に置く。美里はボールペンで項目を記入していくが、その間にも平

和実現党は大声で叫び続けていた。

美里はこの刑務所では、軍に協力的な人間の部類に入る。とはいっても積極的に協力するということではなく、食料と安全を得る為に手伝いをしている、といった感じだ。

そして美里は東大出なので、刑務所内では子供達の教育を行っていた。先にここにいた避難民の中にも教師は数名いたが、彼らは全員日組に所属していた。教組は未だに左翼的な組織であり続け、自衛隊が軍に変わってからには更にその傾向を強めている。

当然の事ながら日教所属の彼らは主義信条的に軍に協力する事はなく、平和実現党のほうに参加してしまっている。

刑務所の避難生活の中でも、大山二尉を始めとする大人達は、初春市にいた時の俺達と同じく子供への教育の重要性を理解していた。敷地内の使われていない部屋を教室にして、子供への教育を始めた。如何せん軍にいる人間が子供達に勉強を教える事は出来なかった。任務で暇な時間がないというのもその理由だが、兵士は多くが高卒で、大卒の幹部も数名いる事にはいるが、階級が上の幹部は当然の事ながら忙しい。

なので大卒の民間人から協力者を募り、子供達に勉強を教える事にしたのだ。

「・・・はい。じゃあ龍、アンタ彼女と一緒に行って倉庫開けてきなさい」

項目が字で埋まった用紙を受け取った稲森さんが、壁のフックに掛かる鍵束から一本を取ると、そんな事を言いつつ俺にその鍵を差し出してきた。

え？俺に行けと？美里と2人で？

俺がそう言つと、稲森さんは呆れたような顔で、

「だつて倉庫の鍵を開けるには、最低誰か1人が行かなきゃならな
いって規則でしょ？アンタ鍵を開けに行くのところで騒音を聞き続
けるの、どっちがいい？」

そう言つて平和実現党の方向を指差した。

ここであいつらの喚き声を聞き続け、絡まれるのはイヤだ。かとい
つて気まずい雰囲気のまま美里と一緒に行動するのも、俺には苦痛
に感じるだろう。

うるさいのと気まずいの、どっちがいいか。数秒考えた後、俺の心
の中の天秤は気まずい方に傾いた。もしかしたら途中で話す機会が
あつて、お互いの距離を埋められるかもしれない、と考えたからだ。

「・・・わかりました」

俺はそう言つて立ち上がり、稲森さんから鍵を受け取つた。そして
詰め所のドアを開けて外に出て、美里を促して倉庫の方へと歩き出
す。

俺が外に出たのを見た平和実現党員は、早速俺を取り囲んで抗議の
罵声を浴びせかけた。叫び声を通り越して最早騒音といったレベル
の声に、俺のストレスはどんどん溜まつていく。

そしてストレスが限界値まで溜まつたので、俺は肩に掛けたG36
C突撃銃を手にすると、キャリングハンドル下に設けられているボ
ルトを引いた。ガチャツという金属音と共に弾倉内の弾丸が薬室に
送り込まれる。

その様子を見た平和実現党員達は撃たれるとでも思ったのか、一斉に俺の周りから離れた。実際に撃つつもりはなく威嚇のつもりなのだが、党員達の目には恐怖の色が浮かんでいる。もしここで彼らと戦う事になっても、俺は余裕で彼らに勝つことが出来るだろう。脅威という脅威はヤクザ達の持つ日本刀くらいで、それもヤクザ達を接近させなければ一方的に俺が勝つ。

「よし、じゃあ行くぞ」

「え、あ、うん・・・」

俺はそう言っただけで先頭に立ち、美里を連れて抗議の輪から抜け出した。

抗議団体を振り切った俺は、早速その扉を開けた。倉庫とは言っても使われていない棟の使われていない部屋の一室を、倉庫のように棚を設けたりして改装しただけのものだ。

「んで、何がいるんだ？」

「えっと、これ・・・」

美里がそう言っただけで、おずおずと用紙を差し出してきた。まるで俺に触れたくない、とでもいうような感じだ。

用紙に書き込まれていたのは、ノートが40冊と文房具セットが40個だった。子供達の数も大体40人くらいだったと記憶しているので、今回は一気に全員分調達しに来たのだろう。

俺は棚の間を歩き回り、そして棚に積まれたノートと文房具セットを発見した。倉庫の片隅に放置されていた紙袋を持ってくると、その中にノートと文房具セットを詰め込んでいく。

この倉庫にある物はこういった文房具の他にも、新品の清掃用具や

工具といった軍用品以外の物は大体揃っている。それらは全て、無人となった市内から調達してきたものだ。

5冊まとめてビニール包装されたノートを8組紙袋に放り込み、その上にビニールに入った文房具セットを入れていく。一つ一つは小さいが40個もあれば結構な量になり、紙袋が一つでは到底足りず、もう一つ大きな紙袋を使う羽目になった。

「はい、これで完了」

「ありがとう。それじゃ」

美里はそう言ってさっさと紙袋を持って帰ろうとした。しかしその手が紙袋の取っ手に触れそうになった瞬間、俺は横から2つの紙袋を持ち上げた。

「これ重いぞ。俺が運んでやるよ」

ノートと文房具セットがそれぞれ40個も詰まった2つの紙袋は、結構な重量を持っている。小柄な美里では運ぶのは難しいだろうと考えるの事だが、美里から返ってきたのは、

「いい。自分で運ぶ」

というものだった。

「遠慮するなよ。こんな重い物2つ、お前じゃ持てねえよ」

「いいよ。これはわたしの仕事なの」

「だから俺が持つって」

そういう問答を繰り返す内に、段々美里の言葉に棘が立って来た。俺が2つの紙袋を持って倉庫から出ようとすると、いきなり美里が

叫んだ。

「だからっ！！わたしが一人でやるって言うてるでしょっ！！！」

初めて聞いた美里の怒鳴り声に、俺の足は止まった。その瞬間に美里は俺に近寄ると、紙袋をさっさとひったくった。

「これはわたしの仕事、わたしがやらなきゃならないの！余計なことしないで！！」

「っ、何だよその言い方は！人が親切から言ってるのに！」

思わず俺も怒鳴り返していた。最近美里と会うこともめっきり少なくなり、更に関係も悪化していたことがそうさせてしまったのだろう。

「お前が持つには大変だろうなって思って持って行こうとしたのに、何だよ。何が不満なんだよ！」

「全部が不満だよ！人の仕事を奪っておいて、そういうのを余計な親切って言うんだよ！」

「んだと？こんな世界だからお互いに助け合って……」

「だからそれが余計な事だって言ってるの！！」

美里はそう怒鳴り、更に続けた。

「昔は龍くん、相手を尊重して余計な手助けとかしなかったのに。今じゃあそっういった昔のよかった部分が何も無いよ！龍くんどうしちゃったの！？」

「昔の事は言うな！俺はもう変わったんだよ。お前が見てるのは昔

の俺で、今の俺を見ていない」

「そうだね、確かに変わったね！昔の龍くんなら笑顔でロケットランチャーを撃つて人間を挽肉になんかしなかっただろうし、火山の噴火した村からさっさと逃げ出して、その住民を見捨てたりなんかしなかっただろうね！」

「八方村の件は前も言ったろう、あれは仕方ないことだったんだ」

俺がそう言うと、美里の俺を見る目つきは更にキツくなった。額に皺がより、睨むかのように俺の顔を見る。

「龍くんにとって、人の死は『仕方ない』で片付けられる事なんだ、へえ。それに人がやるうとしてる仕事を自分の考えだけで奪おうとするなんて、ほんっとサイテー！」

サイテー。その一言に俺はキレた。ブチッという音が聞こえたような気がした。もしかしたら頭の血管が切れたのかもしれない。

「何なんだよ、何が不満なんだよ！！俺達が汗と血を流して今まで守ってやっていたのに、それが俺に対する態度かよ！ふざけんな！」

そこまで言つて、俺ははっと気がついた。

美里は泣いていた。大粒の涙を流し、それを乱暴に手で拭くと、美里はぼつりと呟いた。

「なんでこうなっちゃったんだろう。もう何もわからない・・・」

そう言うと2つの紙袋を持ち、美里は俺に背を向けて走っていった。俺はその背中を追う事もできず、ただ突っ立って見ている事しか出

来なかった。

しばらくその場に突っ立っていると、唐突に背後に気配を感じた。振り返ると、いつもの白衣姿の福田が壁に背を預けて立っていた。

「あーあ、泣かせちゃった。女の子を泣かせるなんて、東は悪い子だねー」

「・・・知るか。いきなりキレられ、訳のわからんことを言われて泣かれただけだ」

「はあく。東は駄目だね、相手を思いやる気持ちがないね」

福田にそう言われ、再び俺の頭に血が上り始める。

俺は今まで皆の事を考えて行動してきたのだ。それは初春市でも八方村でもここ名古屋刑務所でも変わらず、そのお陰で犠牲を払いつつも皆は生き残れた。俺はそう考えている。それが相手を思いやる気持ちがないだって？

福田は両手をポケットに突っ込み、よっこらせと壁から離れた。

「あのね、東の『皆の為に』って考えはいいものだし間違ってるなと思うよ。でもそれは、相手の立場を考えなきゃただの迷惑でしかないんだよ」

「・・・俺は出来るだけ相手の立場を考えてきたつもりだ」
「だったらそれが足りなかったんじゃない？」

福田はそう言つと俺の目を見て、話し始めた。

「いいかい？君と仲原の立場は違う。君は軍人であり皆を守る義務

がある。一方彼女は何だ？皆を守る義務はないが、彼女だって大人だ。自分の中に確固とした信念があるはずだ」

「・・・その信念って何だ？」

「さあね、僕はそんな事知らないよ。でも彼女だって君たちに守られっぱなしってのは、色々と重荷を押し付けてるみたいで嫌だったんじゃないか？で、もっと出来ることを手伝おうとしているのに、君は進んでその出来ることを奪ってしまった。そんでもってそれが彼女の目には、『東は変わってしまった』って映ったんじゃないの？」

福田にそう言われ、俺は俺の立場と美里の立場、そして経験を振り返ってみる。

美里は高校卒業後東大に入り、そして卒業した。その間にアイドルとして名を上げたが、それでも彼女は一般人の部類に入る。

一方俺は高校卒業後軍に入隊し、そして今もいる。人を殺し、あらゆる戦闘術を叩き込まれた俺は、国家の為に尽くす義務がある。

何だ、俺と美里の立場が一緒だったのは、高校生の時までじゃないか。俺は美里が同じ大人だと思い、そして俺と同じ考えを持っていると思いついてしまった。それが美里の目には、俺が相手を思いやらないという風に映ってしまったのだろう。そしてそれは正しい。

普通の大学生は講義に出て、合コンを繰り返して、友達とブランド物を買う毎日だ。一方で俺は武器の扱い方を習い、訓練に明け暮れ、どのナイフが鋭いかとか頑丈とか仲間と話し合い私物として購入する毎日だった。それだけで、俺達が一般人と違うのは目に見える。

軍で叩き込まれた考えや行動は、明らかに普通の人とは違うものだ。俺はそれを考えていなかった。いや、こんな異常事態で考える暇がなかったというべきか。

美里のような普通の人間は、どんな理由であれ目の前で人が殺されるのはいやだろう。だが俺達は人を殺すように訓練されているし、あの時の俺は怒りの衝動に突き動かされていた。だから容赦なく八方村のイシヴアラ教徒を殺しまくったのだ。一般人が傍から見たら、確実に俺は精神異常者だ。

美里はその事を言っていたのだ。だが俺は「俺とお前は違う」と深く考えず、美里の考えを一蹴した。

そしてさっき、俺は「守つてやった」と言ってしまった。何で俺は、上からの目線で言ってしまったのか。

俺はなんて間違いを犯し続けていたんだ。

今すぐ美里を追いかけたい衝動に駆られた。しかし俺の足は、意思に反して動かない。

美里に今までの事を謝罪し、それからもう一度やりなおしたいと思つた。だがさっきの出来事で、美里と俺の間には解消できない溝が出来てしまった気がする。

畜生。

第124話 side 龍 「すれ違い」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第125話 番外編 「地獄の黙示録 前」(前書き)

一話に収めて投稿しようと思ったら、とんでもない量になっていたので前後に分割して投稿します。後編は後日投稿します。

第125話 番外編 「地獄の黙示録 前」

2018年 5月18日 東京都上空 UH-1J改ヘリコプタ
I内

side 日本国防衛陸軍 第一空挺団 第一普通科大隊 第一中
隊 第二小隊第A分隊 アルファ

藤野 ふじの 賢誠 けんせい 二等陸曹

『目標地点まであと5分!』

機内通話装置のイヤホンに小隊長の声が響き、俺は顔を上げた。
飛行中のUH-1J改ヘリコプターの窓からは、高速で後方に流れていく都市の姿が見えた。しかし街のあちこちからは炎が上がり、まるで地震直後か暴動でも発生しているかのようだった。
・・・実際は、それらが人だったモノの手によって引き起こされているのだが。

『よしお前ら、装備の最終チェックは済ませたか? 済んでいない奴は40秒で支度しな!』

UH-1J改のキャビンの中では、俺の同僚かつ友人かつ上官であり、この分隊の分隊長でもある竹内 たけうち 栄治 えいじ 一等陸曹が声を張り上げ、皆の装備が正常かを確かめていた。ただし飛行中のヘリの中はローターの回転音で肉声は殆ど聞こえず、会話はもっぱら機内通話装置を介して行われているが。

「大丈夫です、問題ありません」

俺の隣に座る女性兵士がそう答えた。彼女はこの分隊の選抜射手を務める、綾峰あやみね 穂波ほなみ陸士長だった。彼女は竹内と恋人関係にあると風の噂で聞いたことがあり、俺も本人から自慢げに聞いたことがある。無論今は任務中なので、それぞれ公私を使い分けてはいるが。竹内は狭い機内に座る合計8名の空挺隊員の装備をそれぞれ確認すると、今度は操縦席の方を向いてパイロットと何事かを話し始めた。

今の日本は、大混乱に陥っていた。原因は人を凶暴化させるウイルスだ。

ウイルスは本州のあちこちで蔓延し、人が人を襲う事態が次々と発生している、警察力だけではこの事態を鎮圧することは出来ず、こくなる事を予見して治安出動を命じられていた軍がすぐさま作戦を開始していた。

俺の所属する第一空挺団は千葉県船橋市に駐屯する部隊ではあるが、出動を命じられた場所は東京都内だった。空挺部隊というのは機動性が高いからだ。

通常空挺部隊というのは、輸送機から落下傘パラシュートで敵部隊の後方や戦場に降下し、戦闘を行う部隊だ。しかし今回出動する場所が都市部という事で、俺達はヘリコプターでの移動を行っている。

空挺作戦を行うには、気象条件や降下地点の選定が重要となる。作戦が行われる時間帯は夜であり、夜間の降下は危険だ。そして都市部には空挺降下の際に障害となる物が沢山あり（アンテナとかビルとか）、そして降下地点DZとなる平坦な場所も少ない。

そしてパラシュート降下は一度してしまつたら、その後の行動は大きく制限される。一緒に車両も投下できれば話は別だが、市街地に車両を投下しても、着地した際に使える状態ではなくなっているだ

ろう。

『……にしても、まるで『地獄の黙示録』だな』

機内通話装置を介して、竹内が呟くのが聞こえた。その声で窓から外を見ると、確かに『地獄の黙示録』に出てきたシーンを再現したような光景が広がっている。

まず、この救出部隊には40名の空挺隊員が参加している。8名で1個分隊を形成し、それが5個分隊で1個小隊を作っている。UH-1J「ヒューイ」改汎用ヘリコプターに1個分隊が搭乗しているので、UH-1J改は合計で5機参加している。

それだけではなく、救出した民間人を乗せるためのCH-47JA「チヌーク」大型輸送ヘリコプターが4機ある。1機あたり55名が搭乗できるので、200名以上の避難民を空輸することが可能だ。そして観測ヘリコプターであるOH-1「ニンジャ」が1機。そして近接航空支援を行う為のAH-64D「アパッチ」攻撃ヘリコプターが2機、それぞれこの部隊に加わっている。

合計で12機にもなる大編隊だ。そりゃあ『地獄の黙示録』を思い出しても仕方がないだろう。

「いつそ『ワルキューレの騎行』でも流しながら飛ぶか？」

『よせよ……シャレになんねえよ』

俺が軽口を叩くと、竹内はウンザリしたような顔で答えた。

何故階級が1つ下の俺が竹内にこんな口調で話せるかというと、元々俺と竹内は友人で同階級だったからだ。アフリカで行われた^{PKF}国連平和維持軍に派遣された際、俺は武装勢力との戦闘で負傷し、しばらく病院送りになっていたのだ。その間に竹内は昇進したのだが、

今でも奴とは仲良くやっている。

「ま、この機体スピーカーついてねえしな。小隊長だってキルゴア中佐とは程遠いし」

『そういつ問題じゃないと思うんだが・・・目標地点まで4分！』

竹内が怒鳴り、キャビンの真ん中に陣取っていた機付隊員がドアの側まで寄ると、一気にドアをスライドさせて開けた。飛行中なので機内に強風が流れ込んでくる。そして機体外部のマウントを介して装着されていた74式車載機関銃を構える。俺のいる場所とは反対側のスライディングドアも開かれ、空挺隊員が同じように機関銃を構えていた。

命綱をつけているので機体から振り落とされる事はなく、俺は大きく開かれたドアから街の様子を見た。東京都といっても目標地点は大都市ではなく、下には住宅地が広がっている。

『今回の作戦目標は、避難所となっている公民館に着陸し、感染者から避難民を救出することだ。避難民からは30分前に救助要請の通報があつたが、それ以降連絡は途絶えている。全員警戒しろ！』

救出部隊の隊長である、河野 カノ 明三 アキラ 等陸尉の声が機内通話装置から聞こえてくる。飛行中の他のヒューイを見ると、どの機もスライディングドアが開かれ、着陸態勢に入っていた。距離はさほど離れていないので、キャビンに座る空挺隊員の姿が肉眼で見える。

とその時、編隊の最前列を飛行していたニンジャ観測ヘリが急に速度を上げると、一気に目標地点の方向へと飛んでいった。部隊に先んじて目標地点に到達し、生存者がいるかを確認するのだろう。

『目標まであと2分！』

その声で、機内の皆が一斉に弾倉ポーチから弾倉を取り出すと、それぞれ所持する銃器に装填し始めた。機内で銃が暴発するととんでもない事になるので、装填は着陸直前に行うのだ。

俺も5.56mm NATO弾を30発装弾してある弾倉を取り出すと、ヘルメットでコンコンと数回叩き、装備の09式小銃？型に装着した。ヘルメットで弾倉を叩いたのは、叩く事で弾倉内部の弾丸の位置を整え、スムーズに薬室に装填されるためだ。

全長が短縮され、M4A1カービン程の全長しかない09式小銃？型のボルトを引くと、安全装置を掛けて待機する。小銃の銃身下部にはM320グレネードランチャーがアンダーマウントされているが、それにはまだ装填しない。

俺の隣に座る竹内も装備していたMk46機関銃に、ベルトリンクで繋がれた5.56mm弾を装填する。Mk46機関銃は軍でも採用されているミニミ軽機関銃を、銃身を短縮化してストックを伸縮式にし、軽量化と取り回しの良さをしたものだ。この手の装備は、落下傘を装着すれば装備重量が60キロにも及ぶ空挺部隊で使用され、重宝されている。

何故分隊長なのに分隊支援火器を装備しているか？それはこの分隊に竹内以上に機関銃の扱いが上手い奴はいないからだ。ガタイもよい竹内は、通常の小銃などに比べて重量のある機関銃の担当に向いているのだ。

『こちらカササギ01、目標の公民館に到着。FLIR（前方赤外線監視装置）でスキャンしてみたが、移動する熱源がない。生存者の搜索と索敵を続ける』

先行して公民館を偵察していたニンジャから報告が寄せられる。熱源が無いということは、公民館内部には人間がいない事になる。建物内部の赤外線が遮断されるような場所に立て籠もっているのか、あるいは逃げ出したか。

もしくは、既に手遅れか。

『こちらカササギ01。ズームしたところ、公民館の入り口に血痕らしきものを多数確認。窓ガラスも大分割れている』

『畜生、いやな予感しかしないぞ』

カササギ01ことニンジャ観測ヘリコプターの報告を受け、竹内の顔が歪んだ。俺も同じ気持ちだった。

すぐに目標である公民館の上空に到達した。公民館は住宅街の真ん中であり、大きな建物だったので簡単に発見出来た。俺達の機が最初に公民館の屋上に着陸し、屋上を制圧することになっている。公民館の上空をヘリの大編隊が乱舞する中、俺達の乗るヒューイはゆっくり降下を始める。

『いいか、狙撃手^{スナイパー}以外は全員降下だ！綾峰、お前は機内に残って狙撃支援を行え！』

『了解！』と全員が答え、そして機内通話装置を外した。たちまちヘリのローター音で何も聞こえなくなる。ゆっくりと屋上が近づき、そしてヘリのスキッドが屋上に触れた。

「よし、行け行け行けッ！！」

分隊長の竹内がローター音に負けなくらいの大声で怒鳴り、そしてキャビンから飛び出した。続いて俺も飛び出し、しばらく走ってヘリから離れたのち、膝立ち姿勢になつて小銃を構え、周囲を警戒する。訓練された7名の分隊長は、途中でコケることもなく、全方位警戒の体勢をとつた。

それぞれが異なる方向を警戒し、死角を作らない。俺達が乗つていたヘリは綾峰と74式機銃を構える機付隊員を乗せたまま、屋上から離陸していった。すかさず次のヒューイが屋上に着陸し、機内から兵員を吐き出して離陸していく。

小隊の全員が屋上に降りるまで1分もかからなかった。その間俺達はひたすら周囲に銃口を向け、警戒していたが、屋上には誰もいなかった。そして救援が来たのにもかかわらず、誰ひとり屋上に出ない。

これは……。

「全滅してらつてオチはないよな？」

同じA分隊の若い隊員が、ボソツと呟いた。

小隊長も屋上に降下してきて、早速指示を出す。

「よし、A分隊は1階の制圧。B、C、^{ブラボーチャリー}の各分隊はそれぞれ2階と3階だ。Dは階段^{デルタ}の確保。Eは屋上^{エコー}の確保だ。よし行け！」

小隊長の命令で、一斉に各分隊がそれぞれの担当階に向かつていく。屋上から公民館内部に入るための入り口は1つしかなく、D班の隊員が先頭に立ってドアを開け、階段を下りて行った。

全員が銃を構えたまま階段を下り、廊下に軍用ブーツの足音が木霊する。3階でC班の隊員とは別れ、C班の隊員は3階の各部屋の生存者の搜索と、感染者を搜索^{サーチ}して殲滅^{デストロイ}する。

D班の隊員は階段の安全を確保するため、途中で警戒態勢をとったまま、警戒と監視の任務につく。2階でB分隊の隊員とも別れ、俺達は1階へと向かう。

途中、廊下のあちこちに血溜りや人間の身体の一部らしきものが転がっていたのは、きっと見間違いではないだろう。

1階と2階の間の階段を降りる途中、俺達は階段の踊り場に築かれたバリケードを発見した。机やイス、棚を積み重ねられ、ビニール紐で縛られて作られたものだ。しかしバリケードの一部は大きく崩され、人が2、3人は通れそうな隙間が開いていた。

「感染者にやられたのか？」

「いや、バリケードは内側から崩されてる。襲撃を受けてパニックに陥った避難民たちが、慌てて逃げ出そうとしたんだろう」

俺の問いに、竹内が冷静に呟いた。確かにバリケードは力任せに破壊されたというより、人間の手で崩されたといった感じだ。

その時、上で大きな物音がいくつもし、隊員達の「クリア」という叫び声が響いてきた。室内の制圧を開始したらしい。銃声が聞こえないことから、恐らく感染者はいないようだ。

俺達はバリケードを完全に破壊して通路を綺麗にすると、1階へと降りて行った。そこは今まで俺が行った事のある戦場の中で、最も酷いものだった。

廊下の床や壁のあちこちが、おびただしい量の血で染まっていた。

そして人間の身体の一部があちこちに転がり、血だまりを作っている。

「うげえ・・・キモイ」

そういつた声が隊員達の間から上がる。当然だ。俺達が戦ってきたのは「銃を持った敵兵士」であって、「人を喰う人間だったモノ」ではない。

1階には大きな部屋が一つある。選挙の時は投票所にもなるくらい広い部屋らしいが、その部屋には生憎鍵がかかっていた。ドアは2つあるが、そのどちらにもロックされている。

「よし、中村。ショットガンでドアを破壊しろ」
フリーチ

「了解！」

そう言うって分隊の中で一番若い中村一等陸士が歩み出た。そして09式カービンの銃身下部に装着されていたM26MASSショットガンにスラッグ弾の詰められた弾倉を装着すると、ボルトを引いて装填した。

中村はドアに正対し、中村の後ろに俺がつき、更にその後ろに隊員が並び、突入態勢を取る。

「よし、行け！」

竹内の声で俺は中村の肩を叩いた。中村はM26ショットガンの引き金を引き、スラッグ弾をまずはドア上部の蝶番に喰らわせた。すぐさまボルトを引いて次弾を装填し、今度は下の蝶番を撃つ。

これでドアは、鍵が掛かっただけの板きれと化した。中村はドアに前蹴りを食らわせると、一気に室内に突入した。続いて俺も室内に突入し小銃を構えたが、銃口から火が噴く事は無かった。

・・・室内には、生存者も感染者もいなかったからだ。

部屋に突入した隊員達は、内部の惨状を見て思わず口元を抑えた。

部屋の中は死体から流れ出た血で溢れかえっており、ドアがぶち破られたことで部屋の外の廊下まで血が流れ出ていく。

綺麗な死体は一応あった。しかしそれでも、首の周辺が大きく抉られ、器官が剥き出しになっている。

男性のものらしき胴体が転がっていた。「らしき」というのは、性別を判別できそうなものが、その胴体が纏っていたスーツの切れ端だけだったからだ。しかもその胴体ですら、大きく腹部を抉られ、そこにあっただはずの内臓は影も形も無くなっている。

腕の肘から先が部屋の隅に転がっている。小さいので、少年のものが女性のものかは分からない。

女性の頭がごろんと転がっていた。首から下は喰われたのか、影も形も無くなっている。苦痛に歪んだ顔が、突入した俺達を見つめている。

「うげえええええっ」

その言葉と共に、誰かが吐いた。地面に吐瀉物がぶちまけられる湿った音が響く。

俺も吐きたい気持ちだった。そのくらい、この光景は酷過ぎる。こんな光景は地獄に行ったって見られないかもしれない。

まだ電気が生きているのが恨めしかった。もし明かりが点いていなかったら、こんな光景をマトモに見なくて済んだのに。どっちにしろこういった避難所には自家発電装置があるので、結果は変わらなかっただろうが。

「・・・生存者の搜索をしろ」

竹内も苦しそうな表情で命じた。しかしその口調は、生存者を期待したようなものではない。

俺達は酷い光景に打ちのめされつつも、生存者の搜索を開始した。床に転がる比較的綺麗な身体をひっくり返し、ロッカーを開いて中を捜す。しかし、当然ながら誰もいなかった。

「ドアに鍵を掛けたはいいが、窓を破られて侵入されたらしいな」「ああ。おれっちもこんな酷い光景は見た事ねえよ。こんなことからアフリカに行っていた方がマシだったな」

竹内が相槌をうちつつ、室内を見渡す。ちなみに「おれっち」というのは、竹内の一人称である。

無線の交信を聞くに、どうやらどの部隊も生存者は発見出来なかったらしい。すぐさま撤収命令が下される。

屋上に戻ると、公民館から少し離れた場所でホバリングしていたアパッチの編隊から通信が入った。

『こちらドラゴン06（ゼロシックス）。公民館に近づく感染者の集団を確認、攻撃する』

『ドラゴン11（ワンワン）了解。06に続いて攻撃する』

直後、アパッチの機首に装備された30mm機関砲が轟音と共に火を噴き、曳光弾が地上に次々吸い込まれるのが見えた。続いて補助翼^{インテグ}に設置されたロケット弾ポッドからロケット弾が次々と発射され、着弾した箇所から爆炎が上がる。

しばらく攻撃が続き、そして唐突に止んだ。

『こちらドラゴン11、目標集団の殲滅を確認』

『了解ドラゴン11。待機せよ』

混成ヘリ部隊の指揮機も兼ねるカササギ01から通信が入り、アパツチは公民館の周囲を旋回し始める。

そうこうする内に、屋上にヒューイが降下してきた。次々と隊員達が乗り込んでいき、最後に降下してきた機に俺達も乗り込む。

ヒューイが離陸し、公民館が遠ざかっていく。命綱をつけ、機内通話装置を装着する直前、俺は4機の戦闘機が北へ飛んでいくのを見た。

機体の形状から判断するに、それらはF-35J戦闘機であるらしかった。空軍用か海軍用か、あるいは海兵隊用の機体なのかはわからなかったが。

『あの機体、爆装してたわね』

俺と同じく窓際に座る綾峰が呟いた。さすがスナイパー、目がいい。爆装していたということは、当然地上を爆撃するということだ。それがどこなのか、どの程度の規模の爆撃なのか、俺達に知る術はない。

『彩乃ちゃんも出撃してるんかな？』

俺の隣に座る竹内が、心配そうな表情で言った。

彩乃 西浦 彩乃は俺の彼女であり、そして横須賀を母港とする海軍空母「あかぎ」の艦載機である、F-35JB戦闘機のパイロットでもある。幼なじみでもあり、同じ軍に入隊することを選んだ俺達だったが、階級はパイロットである彩乃の方が当然上である。

『藤野、お前彩乃ちゃんと連絡とったか？』

「いや、でもあいつが乗ってるのは空母だし、『あかぎ』は東京湾上に退避したはずだろう。仮に出撃していたとしても、戦闘機に乗ってるんだ。大丈夫さ」

ちなみに竹内が彩乃を「ちゃん」付けで呼ぶのは、俺と竹内、綾峰は全員知り合いだからだ。たまーに暇が重なった時、皆で居酒屋に行ったりする。

開きっ放しのスライディングドアから下を眺めていると、突然通信が入った。小隊長からだ。

『こちら小隊長、ただいま司令部から救助命令が下された。場所はここから10キロ南、避難所にしていされている小学校だ。どうやら生存者が多いらしい』

各機から了解の応答が続き、早速ニンジャ観測ヘリが速度を上げ、小学校があるとされる方へ飛んで行く。アパッチ攻撃ヘリは途中、別の地上部隊から近接航空支援の要請を請けていたので、一時的に編隊を離れていた。

ヒューイも速度をあげ、小学校へと向かう。機体の両脇の機関銃には既に隊員が取り付き、いつでも撃てるよう構えていた。

第125話 番外編 「地獄の黙示録 前」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第126話 番外編 「地獄の黙示録 後」(前書き)

まさかの1万5千字超え。どうしてこうなったし。

第126話 番外編 「地獄の黙示録 後」

『こちらカササギ01、小学校に到達！屋上に多数の生存者を確認
！』

数分後、先行していたニンジャから通信が入った。その声は生存者を発見できたからなのか、ややうわずっていた。

『こちら小隊長、生存者の数は？それと感染者は確認できるか？』

『01、生存者は200名以上いる！感染者は地上に多数確認！それと校内にも多数の熱源を確認した。早くしないと全滅するかもしれない！』

『了解！全機速力上げ！』

小隊長の命令で、ヒューイが更に加速し、地上の風景が次々と後方へ流れ去っていく。エンジンを換装して双発にしたUH-1J改は、原型となったUH-1Jよりも高速になっている。

徐々に、目標地点の小学校が見えてきた。未だに街の明りは消えていないので、その様子が見えつきりとわかる。

校舎の屋上が、避難民らしき人影で埋め尽くされていた。そして校庭にはいくつもの人影が見え、それらは校舎へと真っ直ぐ向かっていた。何といくつかは、校舎の壁をよじ登って屋上に向かっている。

『こちらドラゴン06、校庭と学校の周囲の目標を攻撃する。校舎に取り付いた目標は誤射する恐れがあるので攻撃できない、小銃とヒューイの搭載火器で攻撃してくれ』

『小隊長了解。各隊、派手にやるぞ！！』

直後、2機のアパッチが校庭をロケット弾で掃射し始めた。あちこちで爆発が起き、感染者が爆炎の中に消えていく。

校舎の周囲にホバリングするアパッチは、ゆっくりと校舎を旋回しつつ、機関砲とロケット弾を発射している。ヒューイの編隊がその隙に校舎に接近し、屋上への降下を試みる。

『こちら小隊長、屋上へはラペリング降下せよ！屋上には着陸するスペースがない』

その言葉で、俺達とは別のヒューイが校舎屋上数メートル上空で空中静止する。キャビンからロープが4本屋上へと垂らされ、直後、隊員達がロープを伝って降下していた。

屋上に降下した隊員たちは、すぐさま生存者達の把握を始める。そして屋上から校舎内に通じる階段を下りていき、校舎の窓ガラスを通して銃火がいくつも見えた。

降下待ちをしている間に、俺達は校舎の壁をよじ登る感染者の排除を試みていた。機体の両脇に設置された74式車載機関銃が火を噴き、アパッチが撃ち漏らした感染者や、壁を登る感染者を銃撃する。俺や竹内、綾峰もキャビンから身を乗り出し、手にした小銃で感染者を撃つ。飛行中の機体から発砲しているので中々命中しないが、それでも校舎の外壁が穴だらけになり、教室の窓ガラスが粉々に砕け、弾丸が命中した感染者が地面へと落ちていく。

スナイパーである綾峰の狙撃は正確だった。一発撃つ毎に、壁を登る感染者が地面に落下する。

弾倉を1つ撃ちきったところで、ようやく俺達が降下する番がやつ

てきた。校舎の真上でヒューイが静止し、ラペリング用のロープを俺は持った。キャビンの床には、ロープの先端のフックを引っ掛ける為の窪みがいくつかある。俺は窪みにフックを引っ掛けると、ロープを地上へ放り投げた。

「よし！俺と藤野、中村、萩がまず降りる。今回は全員降下するぞ！」

機内通話装置を外し、竹内がロープを掴む。俺もロープを掴むとスキッドに足を乗せ、一気に身を乗り出した。そして機体に正対すると、スキッドに立つ。

最初に降下する4人の準備が整うと、機付隊員が合図した。その合図で俺達は軽くジャンプしてスキッドから飛び降り、ロープを伝って屋上へと降下する。

右手は鳩尾の前、左手は尻の下の位置におき、両手でロープを握る。ロープを握る強さを調節して降下スピードを調整し、勢いよく屋上に降りないよう気をつける。

若干の衝撃と共に、足が屋上に着いた。素早くロープを身体から外し、背中に回していた小銃を構える。折り畳まれていた09式小銃？型のストックを展開させ、最短位置にしてあったストックを最長まで伸ばす。

屋上には避難民が沢山いた。老若男女関係なく、全員が疲れたような表情をしている。それが武器なのか、血のついた金属バットや角材をもった男が何人か階下への入り口に立っている。

「藤野！グレネードランチャーを使って校庭の敵を排除しろ！」

竹内の声で、俺は小銃にアンダーマウントしてあるM320グレネ

ードランチャーにグレネード弾を装填する。ロックを外して銃身をスライドさせ、そこにグレネードを押し込み、銃身を元の位置に戻してる臆する。そして屋上の淵の柵に銃身を乗せると、照準器を立てて狙いを定めた。

校庭に侵入した感染者の大部分は上空を旋回するアパッチやヒューイ、チヌークの搭載火器で排除されていた。しかし感染者の数は多く、何体かが弾幕をすり抜け、校舎に取り付こうとする。

俺はそこを狙い、撃った。軽い発射音と強い衝撃と共にグレネード弾が飛翔し、そして地上に着弾する。爆発がおき、校舎に近づいていた感染者が何体か倒される。

素早くランチャーを再装填し、もう一発撃つ。再び爆発が起きる。

『小隊長よりドラゴン06！校舎の入り口と非常階段をヘルファイアを使って破壊しろ！校内への侵入を防ぐんだ！』

小隊長の怒鳴り声が無線機のイヤホンから聞こえ、直後、飛行中の2機のアパッチからヘルファイア対戦車ミサイルが発射された。2発のヘルファイアはいったん上昇した後、それぞれ校舎の入り口と校舎の脇に設置された非常階段に向かう。

噴射炎の軌跡を描き、ヘルファイアがそれぞれセットされた目標へと突っ込む。俺の居場所から見たのは入り口へと向かうやつだけだった。

校舎の入り口にヘルファイアが直撃した直後、大きな爆発が起きた。戦車の装甲をも破壊するヘルファイアは、あっさりと鉄筋コンクリート製の校舎の入り口を破壊した。口内に侵入しようとしていた感染者の集団が、崩れる鉄筋コンクリートの下敷きになる。

非常階段の方からも爆音が聞こえ、金属の構造物が崩れる音が鳴り響く。とその時、先程まで盛んに発砲していたアパッチが、攻撃を止めてホバリングしていた。

『こちらドラゴン06、残弾が僅かしかない。補給に戻る必要がある。11も同様だ。しばらく航空支援が行えなくなる』

『小隊長了解。補給後、再び合流してくれ』

『了解、06アウト』

その言葉と共に、2機のアパッチが機体を翻し、南の方向へと飛んでいく。補給所を兼ねた司令部は羽田空港に設けられているので、おそらくそこへ向かうのだろう。

しかし高い火力を誇るアパッチが居なくなったことで、感染者が一齐に襲い掛かってくる。ヒューイやチヌークに搭載された機関銃が火を噴くが、焼け石に水といった具合だ。

その間にも、屋上の民間人達の避難を済ませるべく、工兵によって屋上を囲む柵を切断する作業が進んでいた。

ヒューイから工兵が二人ラペリング降下し、続いてギリギリまで屋上に近付いたヒューイから電動カッターが投下される。屋上は障害物と避難民達で着陸するスペースがないのだ。

電動カッターを手にした工兵達は、成人男性の胸の高さほどある柵を切断し始めた。柵は金属で出来ているので、回転する電動カッターが接触すると、勢いよく火花が散った。

俺達A分隊は屋上の死守を命じられた。避難の要である工兵達を援護しつつ、さらに避難民達も守らなければならない。

だが感染者は壁を伝い、続々と屋上へと向かってきていた。

「感染者だ！撃て、撃て！！」

中村の叫び声が響き、直後、俺の目の前に感染者がぬっと顔を出した。俺はすぐさま小銃を構え、柵を乗り越えようとする感染者を撃

つ。頭を吹っ飛ばされた感染者は、地面へと落下していった。それを皮切りに、あちこちで感染者が屋上に到達する。避難民達の悲鳴が上がり、複数の銃声が木霊する。

俺もモグラ叩きの如く次々と屋上に顔を見せる感染者を撃つ。単発セミオートでは間に合わず、フルオートに切り替えて撃った。

だがフルオート射撃はあっという間に弾丸を消費してしまう。弾倉内の30発はあっという間に撃ち尽くされ、俺は「リロード！」と叫んで後退しようとした……が、その瞬間に、再び感染者が屋上に顔を出す。

俺はそれを見て小銃から手を離し、レッグホルスターのP226拳銃を抜いた。左手は弾倉ポーチから小銃用弾倉を抜き、右手のみで拳銃を保持し、撃つ。小銃と比べて拳銃弾は威力が弱く、しかも感染者は痛みに強いので、倒すには数発直撃させなければならぬ。

とその時、後方から悲鳴が上がった。屋上に上がってきた感染者を拳銃で射殺し、その隙に小銃の再装填も終えた俺が振りかえって見たものは、腕から血を流して倒れる隊員と、口の周りに血をべったりつけ、柵を這いあがろうとする感染者の姿だ。

どうやら隊員は目を離れた一瞬の内に接近され、腕に噛みつかれたらしい。隊員の腕の肉は大きく抉られ、尋常じゃない量の血が流れ出ている。

地面に倒れた隊員を喰おうとしたのか、感染者は一気に柵を上がった。しかしそこで、竹内の持つMk46の連射を浴び、体中に穴を開けて絶命する。

「衛生兵！来てくれ！」

すぐさま衛生兵である大沢士長おおさわが負傷者に駆け寄り、咬まれた腕の体幹側（心臓に近い方）を包帯で縛る。ワクチンを接種しているのが感染の危険性はないが、噛まれた場所によっては大事な血管など

をやらね、死に至る危険性がある。

「このままじゃヤバいぞ！作業は終わらんのか！？」

「もう少しです、待って下さい！！！」

工兵達が悲鳴のような声で答えるが、早く作業を終わらせなければ、避難民どころか俺達の命も危ない。

工兵達は屋上の淵にある柵を、幅5メートル程にわたり、電動カッターで切断していた。ようやく必要な箇所を切断し終えたようで、工兵達は切断された柵を屋上から蹴り落とす。壁を登る途中にその直撃を受け、地面に落下していく感染者の姿が見えた。

『いいぞ！コウノトリ02、校舎に接近しろ！』

小隊長の言葉で、チヌーク輸送ヘリの一機が胴体後部をこちらに向け、校舎へと近づいてきた。昇降式のテールランプが降り、胴体内部が見える。

『もう少し、あと3メートルだ』

小隊長の誘導で、徐々にチヌークが校舎との距離を詰める。ややあって、ガタンとテールランプが柵が切断された部分に接触し、チヌークと屋上が繋がる。

『よしコウノトリ02、待機せよ』

『了解』

チヌークヘリのパイロットはベテランなのか、不安定な姿勢でホバリングするチヌークは微動だにしない。普通は建物の近くでホバリ

ングすると気流が不安定になり、姿勢を維持する事は難しいのだ。

「子供が優先です！子供を先に乗せてください！」

竹内が戦闘を一時中断し、機内へと避難民を誘導する。チヌークのテールランプを足場にして、続々と子供たちが機内に吸い込まれていく。子供なので、定員の55名以上は乗れるだろう。

屋上にいる避難民は合わせて250名近い。チヌーク4機とヒューイに押し込んで、俺達も含めギリギリ全員乗れるだろう。

子供達で一杯になったので、最初のチヌークへリはテールランプを上げ、校舎から離れていった。すぐさま、2機目のチヌークが同じように校舎に近づいてくる。

とその時、無線から悲鳴が聞こえた。校内で感染者の侵入を阻んでいる、BとC、D班からの通信だ。

『こちらB分隊、負傷者多数！これ以上の戦闘続行は難しい、避難民の収容はまだか！？』

『こちら小隊長。各隊、損害状況を知らせる』

その言葉で、一斉に各隊から損害の報告が入る。

幸い死者はいないが、各隊とも負傷者が出ているようだった。屋内での戦闘を強いられている班に被害が多く、中でもB分隊は8名中4名が重軽傷を負っていた。

すぐさま小隊長は、B分隊に後退してC分隊と合流するよう命じた。重軽傷者の合計は12名、今すぐ後送して治療が必要な者はその半分以上だった。

そして途中、司令部から通信が入った。首都圏の救出作戦の指揮を

とる司令部は羽田空港に設置されているのだが、そこがいろいろと大変な事になっていっているらしい。

なんでも、暴徒が空港内に侵入し、空港警察や守備隊との戦闘になっているそうだ。輸送機の発着スケジュールが大幅に狂い、このままでは空港が使用不可能になる恐れもある、との通信内容だった。

すでに2機目のチヌークも避難民の収容を終え、屋上からは子供の姿がなくなった。まだいるのは大人だけだ。それを見た小隊長は、収容を終えた機体はすぐさま羽田空港へと向かうよう指示した。空港が使用不可能になる前に、1人でも多くの避難民を届けようという考えのようだ。

すぐさま2機のチヌークは南に針路を取り、編隊から離れていった。3機目のチヌークも避難民の収容を始める。

「負傷者です、道を開けてください!!」

その声で俺が振り向くと、血塗れの隊員が続々と運ばれてくるのが目に入った。みんな腕や足の迷彩服の生地が大きく裂け、そこから血が溢れ出てきている。

先程負傷したA分隊の隊員もその列に加わり、避難民より先にチヌークへと乗り込む。さっさと後送しないと命に関わるので、避難民と一緒に運んでしまうのだろう。

避難民達は血塗れの空挺隊員たちを見て悲鳴を上げた。が、自分が乗り込む番になると、落ち着いて機内へ足を進める。

負傷者と避難民を乗せたチヌークが離陸していき、4機目が収容を開始する。先程まで避難民で一杯だった屋上にも大分スペースが出来たが、それでも大型のチヌークを着陸させるほどの面積はない。

そして負傷者が大量に発生したせいで小隊の戦闘能力は弱まり、じわじわと感染者が屋上に近づいてきていた。先程まで校内で戦っていた3つの分隊は校内の確保をあきらめ、屋上まで後退してそこで感染者の屋上侵入を阻止している。時間が経つにつれ、負傷者の数も増えていく。重傷者が呻き声を上げ、仲間に担がれてチヌークへと収容される。

避難民で一杯になった最後のチヌークが屋上を離れ、南へ飛んで行く。屋上にはまだ20名ほど避難民が残っているが、彼らは俺達と一緒にヒューイに乗ってもらう。

『よし、避難民をヒューイに乗せる！避難民の収容が完了したら、今度は負傷者と損害の大きい隊からヒューイに乗り込め！』

分隊長が怒鳴る。

俺も5個目の弾倉を交換し、屋上上がったきた感染者を撃つ。竹内がMk46を連射して弾幕を張り、綾峰は狙撃で校庭に侵入しようとする感染者を倒していた。

1機目のヒューイが屋上に着陸し、20人残った避難民が我先にと乗り込む。残念ながらヒューイは15人乗りなので、5人は次の機を待たなければならない。

「侵入を許すな、撃ちまくれ！」

「衛生兵、負傷者だ来てくれ！」

「収容はまだか！？さっさと撤収しないと、俺らも喰われちゃうぞ
！！！」

屋上で戦う隊員のあちこちから、悲鳴のような声上がる。

ようやく2機目のヒューイが着陸し、残った避難民と負傷者を回収して即座に離脱する。3機目が着陸したので、今度は俺達の番だ。

『B、C分隊はこの機に乗れ！D、E分隊は次だ！竹内、貴様の分隊が一番負傷者が少ないから、最後の機に乗り込むんだ！』

「ええ〜！？マジで？」

綾峰が言った。俺達A分隊は確かに負傷者が少ないが、それでも戦闘が続行可能なのは8人中5人しか残っていない。

他の隊員達が次々ヒューイに乗り、撤収していく中、最後まで俺達は戦った。とうとう感染者が屋上に上がってきたが、ヘリに近づけないよう優先的に射殺する。

ようやく4機目のヒューイが屋上を離陸し、最後のヒューイが機関銃を連射しながら降下してきた。感染者と俺達との距離は、もはや20メートルを切っていた。

「藤野！機関銃について皆を援護しろ！！」

「了解！」

俺はそう言っつて、着陸したヒューイへと走った。キャビンへと飛び込み、機付隊員が撃っているのは反対側に設置されている、もう一丁の74式車載機関銃へと取り付いた。

74式「車載」機関銃となっているが、すでにこの機関銃を搭載している車両はない。普通科部隊で同口径のM240機関銃が採用された為、車載機関銃も全てがM240に更新されてしまったのだ。行き場を失った74式機関銃は、代わりにヘリの搭載火器として装備されるようになった。

などというウンチクはどうでもいい。

俺は機銃のグリップを握ると、隊員たちの弾幕が薄い方向へ銃口を向け、撃った。照準器は使わず、数発に1発の割合で混ぜられた曳光弾の弾着地点を見て、照準を調整する。小銃に比べ威力が高く、連射速度も速い機関銃は弾幕を張るのにつてつけだ。屋上に上がってきた感染者らを撃ち、その間に竹内達がヒューイへと走ってくる。

「よし、全員乗った！」

その言葉で、パイロットがヒューイを離陸する。機銃にとりつく俺と機付隊員は、オマケとばかりに屋上に残った感染者へと7・62mm弾をばら撒いていく。

すでにこの空域に残っているのは、俺達の乗るヒューイだけになってしまっていた。他の機体は俺達のはるか先を飛行しているのだから。

機長が針路を南に取り、目的地の羽田飛行場へと向かう。その間俺は機銃に取り付き、下方の警戒をしていた。

数分後。

「私はドイツ大使館に勤務しているカール バツハマンです！誰がこの無線を聞いている人はいませんか！？」

突如、そんな声が俺達の耳に飛び込んできた。カールと名乗る男は必死に救助を呼びかけ、その声と一緒に銃声や、外国語で何か罵っているのが聞こえる。

すぐさま、竹内が通信に出る。

「こちらは日本国防衛陸軍、第一空挺団の竹内一等陸曹です。カールさん、応答してください」

『ああ良かった……。私はドイツ大使館員のバツハマンです。竹内陸曹、あなた方は今どこにおられますか？』

流暢な日本語で、カールと名乗る男が答えた。竹内はパイロットに現在位置を訊き、交信を再開する。

「現在位置は首都高速道路2号目黒線上空、目黒駅付近です。そこらは？」

『ええと、同じく首都高速道路2号目黒線、五反田駅近くです。我々大使館員は派遣されたEU軍によって救助され、現在東京湾に向かっています。しかし感染者の攻撃が激しく、このままでは全滅してしまいます！そちらはヘリコプターに乗っているのですか？なら上空から援護してもらいたい、と指揮官が言っています！』

なるほど、先程から聞こえていた銃声はそのためだったのか。

日本にはアメリカやEUなどがこぞって軍を派遣してきた。人道支援が目的ではなく、ウイルスのサンプルを手に入れるためだと噂で聞いたことがある。

そしてドイツ大使館の職員はEU軍に救助されたのだろう。現在軍は各地に部隊を派遣し、大使館などを護衛しているらしいが、手が回らなかったか、あるいは部隊がやられてしまったようだ。

そしてバツハマン氏の話によると、現在大使館職員はトラックで移動しているようだ。護衛には一個小隊役40名と、装甲車数両がついているらしいが、人の多い（＝感染者の多い）市街地を抜けるには、それでは不十分だ。

「セキレイ04より司令部^{HQ}。EU軍から援護要請が出ている。支援

に向かう許可を」

『……こちらHQ。EU軍に対する支援を許可する。そこから5キロ南に海兵隊の陸上部隊が展開している。そこまで護衛しろ、あとは海兵隊が引き受ける』

「了解、オワリ」

パイロットが司令部との通信を終え、針路を変更する。エンジン音が大きくなり、ヘリのスピードが速くなる。

『よし、藤野は機銃につけ！綾峰は狙撃で車列に近い感染者を排除だ。おれっちは機関銃で援護する！中村、大沢は小銃で感染者の排除を頼む』

竹内の言葉で、すぐさま全員が戦闘準備を整える。俺は74式機銃のベルトリンクを新しい物に変え、他の隊員達はそれぞれの銃に弾を込め、照準を調整する。

すぐに、目標のEU軍の車列が下に見えた。先頭に大型のルクス装輪装甲車が1両、その後ろを2両のVBL装甲車が走る。その後ろに5両のトラックが続き、そして最後尾を指揮車らしきボクサー装輪装甲車が2両固めている。

そして装甲車の屋根やトラックの荷台からは、搭載火器や小銃で感染者の接近を阻止している兵士達の姿が見える。装備はG36やFAMASといったヨーロッパ製の銃器で、車両からも考えると、おそらくドイツ軍とフランス軍の部隊だろう。

車列からは照明弾が打ち上げられ、接近する感染者を照らし出している。ついさつきからこの辺りでは大規模な停電が発生しているため、地上の明りはそれくらいしか見えない。

「こちら竹内です。バッハマンさん、我々のヘリコプターが見えますか!？」

『・・・はい、見えます!この部隊の指揮官は日本語が話せないので、代わりに私が要請を伝えます!我々の車列からはどこに感染者が潜んでいるのかわからないので、それらの位置を伝えてください!あと、できればそれらの感染者の排除もお願いします!』

「了解、それでは援護を開始します!」

竹内がそう言うと、パイロットが一気に高度を落とした。車列の上空50メートル程の高度まで上昇すると、車列が走るのと同じくらいの速さで飛行する。

「見えたわ!車列から2時方向100メートル、ビルの陰に隠れている!」

さつそく、スナイパーの綾峰が感染者を発見したようだ。俺は74式機銃から手を離し、09式カービンにアンダーマウントされたM320ランチャーに照明弾を装填すると、その方向に向けて発射する。

発射された照明弾はしばらく落下するとパラシュートを開き、地上を明るく照らし出す。たしかに、地上に感染者の姿が見えた。

「車列から2時方向に感染者!ビルの陰に隠れています、注意してください!」

竹内の代わりに、副操縦士がそれらの情報を伝える。すぐさま照明弾が、車列から打ち上げられた。

俺は74式機銃のグリップを掴むと、感染者に向けて発砲した。曳光弾がレーザーのような軌跡を描き、次々地上に着弾する。飛行中

の機体で照準器を使っても当たらないので、曳光弾の着弾地点を見て照準を調整する。
竹内もキャビンに伏せ、Mk46の二脚を立てると、地上への射撃を始めていた。綾峰は狙撃銃を使い、トラックに取りつこうとした感染者を排除する。

地上のEU軍の車列は、路上に放置された乗用車が障害物となり、走る速度を落としていた。それがアダとなり、感染者が続々と車列に殺到する。

先頭を走るルクス装甲車が20ミリ機関砲を連射し、近づきつつある感染者を吹き飛ばす。歩兵が装甲車の屋根のハッチを開け、身を乗り出して小銃を連射しているのが見えた。

『こちらHQ。注意せよ！いくら装甲車といっても、感染者の体当たりは強力だ。体当たりを食らって装甲車が横転したとの報告が入っている！』

司令部から警告が来た。装輪式装甲車は通常の車両と比べて重いが、それでも戦車と比べて接地面積が狭く、側面から体当たりをかまされたら確かに横転しそうだ。非装甲のトラックは言わずもがな。仮に感染者がトラックにとりついたら、阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられるだろう。

『援護をお願いします！こちらからでは感染者がよく見えない！』

地上のバツハマン氏の叫び声が聞こえた。へりに乗る全員がキャビンから身を乗り出し、それぞれ銃を構え、撃つ。

俺も74式機銃を地上に向けて連射する。ビルの合間から車列に近付くのが見えたので、そこへ向けて発砲する。ビルの窓ガラスが次

々と割れ、壁に設置されたエアコンの室外機が火花を散らし、地上に落下する。

「撃て！撃って撃って撃ちまくれ！」

竹内が叫んだ。

「言われなくてもやってるわよ！数が多すぎる！」

狙撃銃の弾倉を交換しつつ、綾峰が怒鳴る。素早く弾倉を交換し、ボルトを引いて薬室に弾を装填した綾峰は、スコープを覗き素早く発砲する。

俺も機銃を連射しているが、埒が明かない。俺とは反対側の機銃に取り付いた機付隊員も、残弾に構わず撃ち捲くっている。車列の両脇から感染者が現れ、挟み撃ちにされてしまったのだ。

「海兵隊との合流ポイントまであと1キロだ！全員踏ん張れ！！」

副操縦士がキャビンを振り返って叫ぶ。ここを通りぬければ、後は地上に展開している海兵隊が片付けてくれるだろう。それまで、何としても車列を守り抜く必要がある。

とその時、反対側のドアから身を乗り出し、小銃を発砲していた中村が叫んだ。

「おい、後ろをテレビ局のヘリが飛んでるぞ！こんな時に何やってんだ？」

その声で機体後方を見ると、確かに一機のヘリが飛んでいた。軍用

へりではないようだ。

「TV AZAHII・・・？」

スコープを覗いた綾峰が、機体に書かれている社名を読む。TV AZAHIIといえば、左翼的な報道で知られるテレビ局だ。太平洋戦争中は右翼的な報道をしていたのに、日本が負けるとあっさり宗旨替えをしたことで有名だ。

そしてそのへりからは、カメラを構えた男とレポーターらしきマイクを持った女が、こちらを向いて何事かを叫んでいるのが見えた。きっと俺達が地上に向けて発砲し、「一般市民」を虐殺しているシーンでも撮っているのだろう。

「おいおい、この事態が鎮圧されたら、俺達無関係の市民を虐殺したとか何とか捏造報道されちまうぞ」

「面倒だな。撃墜するか？」

「やろうと思えばテールローター狙撃して落とせるわよ？やる？」

「止めなさい！」

綾峰なら本当にやりかねないので、俺と竹内は慌てて止めた。

AZAHIIテレビのへりは、相変わらずヒューイの後方についたまま、俺達が感染者を銃撃しているのを撮影している。彼らからしたら、これは「おいしい」映像なのだろう。世論は自分達が作っているとってはばからないマスコミは、視聴率の為なら捏造改変なんでもやるのだ。

「もう少し！そのままして下さい！」

副操縦士がバツハマン氏に指示する。車列は相変わらずゆっくりとしたスピードで前進している。路上に障害物は沢山あるし、あわて

てスピードを出して事故を起こしてしまっただけは元も子もない。車列に感染者が接近してきているのに、落ち着いて運転しているEU軍の運転手はすごい。俺はそう思った。

やがて、前方に海兵隊らしき部隊が展開しているのが見えた。展開しているのは戦車や装甲戦闘車を装備している1個中隊だと司令部は言っていたので、あれがその部隊だろう。

上空を飛行している俺達からはよく見えるが、地上のEU軍にその姿は見えないだろう。「もう少しだ、撃ちまくれ！」と竹内が怒鳴り、地上の感染者を掃射する。

大使館員を乗せたトラックに感染者が取り付こうとした。しかし次の瞬間、綾峰の狙撃でその頭が砕け、地面に転がり落ちる。

竹内と俺は機関銃を連射して弾幕を張り、感染者を接近させないようにする。EU軍の兵士達も、あと少しで助かると希望を見出したのか、先程よりも勢いがあるように見えた。

そして、ついに車列が展開している海兵隊部隊と合流した。車列の後を追いかけてきていた感染者らを、前に出た戦車と装甲戦闘車が吹き飛ばす。

「よし、任務完了だな」

『こちらバツハマンです！ここに一同を代表し、あなた方に感謝の意を伝えます。本当にありがとうございました！』

無線からバツハマン氏の嬉しそうな声が聞こえる。地上を見ると、EU軍の兵士達が、俺達に向けて手を振っていた。

車列の護衛任務を終えた俺達は、予定通り帰投する。操縦士が進路を変更し、羽田空港に向かおうとした、そのときだった。

「・・・？あのヘリ、何かおかしい」

後方を飛ぶAZAHIテレビのヘリを見ていた綾峰が、そう呟いた。その声で俺もキャビンから身を乗り出し、ヘリを見る。

さっきまでカメラマンやレポーターが俺達を撮影していたのに、今は機内に引っ込んでいた。そして飛び方もおかしく、ふらふらと飛行している。

「エンジントラブルでしょうか？」

「さあ？でもあの機体は双発だろ。片方エンジンが止まっても、あんな飛び方するか？」

そうこうしている内に、あっという間にヘリは俺達のすぐ近くまで寄ってきた。ヒューイの横20メートルほどの距離を、フラフラ飛びながら追従している。

「危ねえな。警告出すか？」

操縦士がそう呟き、無線機に手を伸ばそうとしたとき、ヘリの機内の様子が見えた。

「な・・・！？」

その光景を見た全員が絶句した。

ヘリの窓ガラス越しに、機内が見えた。その窓ガラスは赤い液体で汚れ、その向こうで、女子アナがカメラマンだった男に襲われてい

た。カメラマンは女子アナを座席に押し倒すと、その首に勢いよく咬み付く。女子アナの首から血が吹き出て、窓ガラスが完全に赤く染まり、見えなくなった。

操縦席の方はもつと悲惨だった。キャビンから操縦席に押し入ろうとする男が、副操縦士ともみ合いになっていた。パイロットがパニックに陥ったような表情を見せ、その度に機体が大きく揺れる。

ヒューイの操縦士も含め、俺達全員が取材へりの様子に気をとられたのが仇となった。突如取材へりは機体を大きく傾けると、そのままヒューイの方に突っ込んできた。

「！ヤバイ、回避だ！」

操縦士が叫び、大きく操縦桿を傾ける。だがそれは、遅かった。慌てて取材へりから距離をとろうとしたヒューイだったが、取材へりが突っ込んでくる速度の方が速かった。取材へりの操縦席がよく見えるほどの距離まであつという間に接近され、取材へりのパイロットが同乗者に首を咬みつかれているのがはっきりと見えた。ついでに言えば、その恐怖の表情も。

パイロットを失った取材へりは、緊急回避しようとしたヒューイのテールローターにぶち当たった。衝撃が機体に走り、続いてヒューイがメインローターを軸に空中で回転を始めた。トルク（メインローターの回転の反作用）を打ち消すテールローターが失われた事で、機体がメインローターの回転方向に回転を始めたのだ。例を挙げると、扇風機の羽を両手で持ち、宙に浮かせたようなものだ。そうすれば、扇風機の本体が回転してしまうだろう。

それと同じ事が、いまヒューイに起きていた。浮揚力を失ったヒュー

ーイは、回転しつつ市街地へと降下していく。

キャビンの俺達は、命綱のおかげで振り落とされずにこそ済んだものの、慣性の法則で回転する機内から放り出されそうになっていた。キャビンの壁に身体を押し付けられ、身動きが取れない。開きつ放しのスライディングドアから放り出されないよう、手掛かりとなるものを掴む。

たちまち地上が近づいてくる。パイロットは必死に機体のコントロールを取り戻そうとしつつ、救難信号を発信する。

「メーデーメーデーメーデー！こちらセキレイ04、セキレイ04、セキレイ04！メーデー、セキレイ04！墜落する！座標はグリッド25、F12！繰り返す、墜落する！座標は……！」

瞬間、大きな衝撃と破壊音。俺達の身体は宙に浮き、天井へと頭をぶつけた。俺の意識は、あっというまに暗闇へと飲み込まれた。

「……い！しっかりしろ！おい！」

そう呼びかける声で、俺は目を覚ました。俺の目の前には竹内がいた。

俺は頭をさすりつつ、身を起こした。今まで横になっていたヒューイの床が、奇妙に傾いていた。

周囲を見ると、綾峰や中村、大沢が床に倒れていた。ドアの窓ガラ

スが粉々に砕け、彼らの身体に降りかかっている。

操縦席を見た。操縦士と副操縦士は、計器板に顔を突っ込んだまま動かない。操縦席の割れた窓から、木の枝が操縦席に入ってきていた。

「・・・ここは？一体何があつたんだ？」

「取材ヘリがぶち当たって俺達は墜落したんだよ！あのヘリ、どうやら感染した人間が乗っていたらしい。それとここは公園だ」

竹内に手を貸してもらい、俺は機体から這い出た。どうやらヒューイは墜落してしばらく滑走したらしく、公園の芝生が数メートルにわたって抉られていた。

振り返ると、公衆トイレらしき小屋に突っ込んだヒューイが見えた。機体はどうか原型をとどめている。周囲には金属片が散乱し、ひしゃげたローターが惰性でゆっくりと回転していた。

「さつさと皆を起こして、それから救援を・・・」

そう言いかけた竹内の声は、何かが吼える音にかき消された。俺と竹内がその方向を見ると、感染者が一体、少し離れた場所にある滑り台の上に仁王立ちになり、こちらを睨んでいた。

俺はすぐさま小銃を引っ拵むと、その感染者に向けて撃った。弾丸が命中し、滑り台から感染者が滑り落ちる。

それを合図にしたように、あちこちから感染者の吼える声が聞こえてきた。

「やばいぞ・・・。俺は皆を起こす、お前は感染者を近づけないようにしてくれ！」

竹内が素晴らしい、キャビンで気絶している皆を揺さぶる。俺は機体のすぐそばにあった、80センチほどの高さのコンクリートの壁を遮蔽物代わりに、注意深く周囲を見渡す。

ややあって、あちこちから何かの吠える音が聞こえた。この公園は外周部を木や茂みが囲っていて、見通しは悪い。

竹内が全員を起こし、被害状況が明らかになった。

まず、キャビンに居た俺達はどうにか全員無事だった。身体のどこかをぶつけたという者は多い（というか全員）が、奇跡的に重傷者はいない。

問題は操縦士達だった。副操縦士は左腕を開放骨折し、折れた骨が傷口から突き出ていた。

操縦士は重傷だった。飛んできたローターの破片が大腿部に突き刺さり、重要な血管を傷つけてしまったのか、出血が止まらない。

「よし、全員防衛態勢を整えろ！操縦士は公衆トイレの中に連れて行け、ここよりは安全だ！」

竹内が指揮を取り、衛生兵の大沢が、重傷の操縦士と副操縦士をトイレの中に引き摺って行く。仮に戦闘になれば、公衆トイレの中より安全な場所は無いだろう。

その間に、俺達は配置に就く。幸い、ヒューイの74式機銃は一基だけ壊れずに残っていた。公園の広場を全体的に銃撃可能だ。

機銃には機付隊員が取りついた。綾峰が公衆トイレの屋上に上り、狙撃地点を確保する。俺と竹内、中村は障害物となりそうなコンクリートの壁に隠れ、襲撃に備える。

道路などには、余っていた手榴弾を利用した罠を仕掛^{トラップ}けておいた。数は少ないが、死角をカバー出来る。

「なあ藤野」

「何だ？」

「弾薬、あとのくらいある？」

俺はそう訊かれ、ポーチをまさぐった。フル装填の弾倉が2本と、今カービンに刺さっている使いかけが1本だけだ。合計で80発もない。そしてグレネードランチャーの破片弾が2発。

拳銃は別だが、そもそも拳銃は威力が弱く近接戦闘用だ。拳銃を使うような事態になったら、弾倉がいくらあっても足りない。

「俺は使っていない弾帯が1つ、今装填されてるのが1つだけだ。小学校でだいぶ使っちゃまった」

「わたしもフルが2本、使いかけが1本だけよ。戦闘になったら長い間保たないわね」

綾峰が周囲を見回しつつ、公衆トイレの屋上から報告してくる。

どうにか生き残っていたヒューイの無線機で中村が救助を要請しているが、救助部隊が到着するのは最短で10分後だということだ。

海軍のF-35も近接航空支援のために向かっているらしいが、すぐに到着するわけではないだろう。

その間、俺達は少ない弾薬でここを防衛しなければならぬ。

すぐに、感染者が姿を現した。木々を抜け、わらわらとこちらにやってくる。

「感染者だ！撃て、撃てー！」

竹内が叫び、Mk46を連射する。接近してくる感染者達がばたばたと倒れるが、押し寄せてくる数の方が多い。俺も小銃下部のM3

20を発射した。広場で爆発が起こり、感染者達が吹き飛ばされる。竹内と綾峰も射撃を開始した。墜落したヒューイの機銃が火を噴き、広範囲に7・62?弾をばら撒いていく。

一旦押し寄せてきた感染者の集団は、俺達の迎撃で全滅した。しかし襲撃がこの一波だけで終わるとは誰も考えておらず、すぐさま銃をリロードする。

俺も今の戦闘で弾倉を1つ消費したので、すぐさま交換した。ボルトを引いて薬室に装填した直後、綾峰が叫んだ。

「来るわよ！今度は沢山！」

「沢山つてどの位だ！？」

「数え切れないわよ！」

そう言つて、真つ先に発砲する。ややあつて、感染者達が姿を見せた。

先程とは比べ物にならない数だった。ゴキブリの大群か？

・・・などと思う暇もなく、俺は小銃を撃つ。弾の節約のために、単発で狙いをよく定めて撃つ。

機関銃を操る竹内だけは別だった。機関銃は連射し、敵の接近を阻むためのものだ。機関銃が初めて使用された日露戦争では、突撃していった日本兵が次々と弾幕にやられた。

うん、その時のロシア兵の気持ちがあったような気がする。

単発で撃つていても、あつという間に弾倉が空になってしまった。交換しようとした直後、俺から離れた場所に配置された中村が悲鳴を上げる。

「最後の弾倉です！数が多すぎる！」

そう言い、弾倉を交換した。足元には空薬莖が大量に転がっている。中村の方を見ると、そこには物凄い数の感染者がいた。どうやら中村の配置された方向に、多くの感染者が押し寄せて来ているらしい。

「ほら、これを使え！」

俺はそう言って、ポーチに残った最後の弾倉を中村に放り投げた。中村はそれをキャッチすると足元に置き、カービンフルオートで発射した。

中村に弾倉を渡したことで、俺のカービンの残弾も30発きっかりになってしまった。グレネードランチャーに切り替え、最後のグレネード弾を感染者達にお見舞いする。

カービンに持ち替え、撃つ。接近してくる感染者達は、ギラギラとした目で俺達を見ていた。

そして遂にカービンの弾が尽きてしまった。ストラップでカービン肩にかけ、レッグホルスターからP226拳銃を抜き、連射する。周囲を見れば、中村もカービンを撃ちつくしてしまったようだ。竹内は短くなつたベルトリックを連射して一気に消費し、拳銃に持ち替える。

ヒューイの機付隊員も、74式機銃を撃ち切つたようだった。自衛用のMP7短機関銃に持ち替え、俺達の傍までやってきて戦列に加わっている。

「ライフル弾が切れた！」

「この地点を死守だ！」

その時、道路のほうから爆発音が次々と上がった。手榴弾を利用したトラップに、感染者が引っかかったのだろう。

だがそれも気休めにしかならない。押し寄せせる感染者を相手にするには、拳銃や短機関銃では火力不足すぎる。

俺達が死を覚悟した、その時だった。

ジェットエンジンの爆音と共に、上空を2機のF・35戦闘機が通り過ぎた。そして無線機に通信が入る。

『こちら海軍第114飛行隊所属、ウィッチワン。現在2機のF・35で飛行中よ』

聞こえたのは女の声だった。

そして俺は、その飛行隊と編隊名に聞き覚えがあった。試しに、その名を呼んでみる。

「・・・もしかして、彩乃か？」

『え、何でわたしの名前を……。もしかして賢成なの！？何でアంతここにいんのよ！？』

先程までの冷静な声とは違ってかわって、俺の聞きなれた声が聞こえた。俺の彼女である、西浦^{にしゅうら} 彩乃^{あやの}だ。

出撃しているとは思っていたが、こんなところで会うとは……。運がいいのか悪いのか。

俺は拳銃を連射しつつ、彩乃と通信を続行する。

「何でって、墜落したからに決まってるんだろ！それより近接航空支援をしてくれるのはお前達か？」

『そうよ。それと、一応わたしの方が階級上なんだから、敬語で話さないよ！』

「了解しました、西浦一等海尉。それでは近接航空支援を要請しま

す！現在の武装は？」

『機銃とLJDAM（誘導爆弾）4発よ。でも爆弾をこの距離で使ったら、そちらを巻き込む恐れがあるわ』

彩乃がそう言った直後、司令部から通信が入った。どうやらあと数分もしない内に、救助部隊が到着するそうだ。

それを聞いた俺は、彩乃に機銃掃射の近接航空支援を要請した。北東から侵入してもらい、2回掃射してもらおう。

「機銃掃射の航空支援が来るぞ！俺が照準するから、皆は退避する準備をしろ！」

俺はそう叫ぶと、ヘルメットに取りつけられたJGV5-V8暗視装置を目に当てた。そしてカービンの側面に取り付けられたPAQ4レーザーモジュールを起動し、目標地点の公園広場を照準する。レーザーは不可視なので、暗視装置を介さなければ見えないのだ。弾切れの小銃を構え、接近してくるダークシーカーズには目もくれず、ひたすら照準する。無防備な俺を、竹内と綾峰が援護する。

『こちらウィッチワン。目標地点を捉えたわ。これより掃射する』

彩乃の声が聞こえ、続いてF-35が北東から侵入してくるのが見えた。こうなれば、もうレーザー照準はいらない。

「来るぞ、全員退避しろ！！」

俺はそう叫び、ヒューイの方へ向けて全力で走った。追いつがってくる感染者を拳銃で撃ち倒し、墜落したヒューイのキャビンに飛び込む。続いて、竹内達が滑り込んできた。

直後、グオオオ・・・という轟音と共に、公園の広場が広範囲にわたって25？機関砲弾で掘り返された。F-35の装備する25？機関砲は、装甲車両ならラクラク撃破する程の威力を誇る。人間に直撃すれば一発で身体が真っ二つになってしまう。そんなものが毎秒数十発の威力で撃ちこまれたら、人間なんてあっという間に挽肉の仲間入りだ。

まず彩乃が乗っているらしいF-35が機銃掃射を行い、続いて僚機も地上を掃射する。一階の機銃掃射で、多くの感染者が挽肉になっていた。

一度俺達の上空を通り過ぎたF-35の編隊が旋回し、再び北東から侵入してくる。隙をついて再び押し寄せてきた感染者達は、もう一度機銃掃射を食らって粉々になった。

『こちらウィッチワン。目標の大部分を排除』

「ありがとう彩乃！」

『・・・もう、階級で呼んでって言ってるでしょ！』

またまた、ツンデレなんだから。

俺がそう言おうとした時、どこからかヘリのローター音らしきものが聞こえた。拳銃を撃ちつつ空を見上げると、突如、木の陰からV-22オスプレイVTOL機が現れた。救助がようやく来たようだ。日本でオスプレイを導入しているのは海兵隊だけなので、あれは海兵隊機に違いない。

オスプレイの後部ランプが開かれ、そこから海兵隊員がランプに設置されたミニガンを連射し、俺達に近付こうとする感染者らを銃撃している。

「よし、ここを離れる！怪我人を置いて行くなよ！」

竹内はそう言うと公衆トイレに入って行った。竹内は大柄で力も強いので、負傷者を運ぶにはうってつけた。

オスプレイは俺達から離れた広場に着陸した。距離は200メートルといったところか。こちらは公衆トイレや木が障害物となって着陸出来ないだろう。

海兵隊員がオスプレイから降りて、機体の周囲に展開する。オスプレイに近づく感染者を排除しているが、俺達の所まで来る余裕はないようだ。

しばらくして、重傷の操縦士を担いだ竹内が公衆トイレから出てきた。その後ろを、副操縦士と大沢が続く。

「藤野、これを使え」

そうやって竹内が投げてきたのは、ヘリ搭乗員の護身用として配備されているMP7短機関銃だった。操縦士は気絶しているので、きつと彼の銃を渡してきたのだろう。

ついでに20発装填の弾倉もいくつか受け取ると、中村が先頭に立ってヘリに向かって走り出した。その後を綾峰、大沢、副操縦士、そして操縦士を背負った竹内が続く。俺は皆が無事にたどり着けるよう、最後尾を走る。

近づく感染者に向けてMP7を連射する。拳銃よりも威力があり、連射も出来て装弾数も多いMP7は、P226よりも戦闘に向いている。

操縦士を担いで動きが遅い竹内に、感染者が飛びかかるうとした。俺はそれを見逃さず、そいつに向けて発砲する。感染者は空中で弾き飛ばされ、鈍い音を出した。

ひたすら走り、ようやくオスプレイの近くまで来た。展開した海兵隊員が俺達を援護してくれるので、走るのに専念できる。

「早く乗れ！」

海兵隊員の一人が叫び、先頭を走る中村がオスプレイの機内に駆け込んだ。綾峰達も続き、最後に俺がオスプレイへと滑り込む。

救助任務を完了した海兵隊員達は、それぞれ死角をカバーするように、お互いに肩を叩いて後ずさり、機内に戻る。最後の一人が乗り込むと、オスプレイは離陸した。

最後にもう一度、彩乃達に乗るF-35が公園に飛来した。そして爆弾を投下する。地上で大きな爆炎が上がる。

感染者の排除ついでに、墜落したヒューイも爆破処理したのだろう。機密の詰まったヘリは、いくら日本でも置いていくことは出来ないからだ。

後部ランプから見える地上が、みるみる遠くなっていく。普通のヘリと違い、オスプレイは飛行速度がずば抜けて早い。

「終わった・・・」

俺はそう呟き、座席に身を沈めた。すると、誰かが俺の肩を叩いた。目の前を見ると、海兵隊員の一人がタバコを差し出していた。

「吸うか？電子式じゃねえぞ？今じゃレアもんだぞ？」

俺は無言で一本受け取った。ライターで火をつけてもらい、口に啜える。

今までタバコを吸った事は無かった。煙を吸って、そしてせき込む。

その様子を見て誰かが笑った。

俺達に乗せたオスプレイは、一路、東京湾上に浮かぶ空母「あかぎ」向け、最高速度で飛んで行った。

第126話 番外編 「地獄の黙示録 後」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第127話 side 優 「終わりの始まり」1

3月1日 10:00

とうとう2月も過ぎ、3月になってしまった。冬は過ぎ去り、春の陽気がここ名古屋刑務所を包んでいる。

そんないい天気なのに、ボク達は授業を受けていた。授業といっても、最低限の一般教養を教えられるだけだ。ここを指揮する大山二尉はボク達がバカにならないよう、可能な限り高校で教えられるような内容の授業を行っていた。軍の兵士や避難民の中から募ってきた大人を教師として、それぞれの年齢にあった授業を行っている。

今日は政治経済の授業だ。会議室を改装して出来た教室に、20人ばかりの高校生が集められ、それぞれ椅子に座っている。教師は塾講師をしていたという若い男性だ。

「・・・というわけで、リーマンショックの影響をモロに受けた日本は、2010年以前は大不況に陥っていました。企業が新卒学生の採用すら控えるようになって、本当あの頃は私も苦労しましたよ」

そう言っつて講師が遠い所を見るような目をする。2010年以前とというと、ボク達はまだ小学校1年か2年といった感じた。その頃のこととは余り覚えていない。

教科書でいかに不況だったかくらいは知っている。でもボクは政治経済の授業にあまり関心がなく、教科書すらあまり開いた事はない。そうこうしている内にウイルスが蔓延し、政治経済については殆ど何も知らないままここまで来てしまっていた。

「さて、そんな大不況に陥っていた日本ですが、どうやって不況から脱却したと思いますか？じゃあ軍司君」

講師が軍司を指名した。軍司は毎回毎回、政治経済の授業は目を輝かせて聞いている。よっぽどの興味があるらしい。

軍司は勢いよく立ち上がった。

「はい！武器輸出三原則の改定に伴う外国への武器輸出、および自衛隊改変に伴う軍拡です！」

「そうです、よくわかりましたね」

講師がそう言うと、軍司は引きつった笑顔を見せて着席した。ああなるほど、軍オタだからこのあたりの時代の政治経済に強いのか。

講師は気にもせず、授業を続ける。

「2009年10月に北朝鮮の弾道ミサイル あっちは未だに人工衛星打ち上げ用のロケットつて言っていますけど が東京都内に落下し、1000名近い死者が出てから、この国は大きく変わりました。当時政権を獲得したばかりの民生党は事態に対処しきれず、責任の押し付け合いをするに終始しました。わずか3カ月後衆議院の総選挙が行われ、再び自生党が政権の座に着きました。ここまでではわかりますね？」

「はい」

という気の抜けた返事があちこちから上がる。ボクは教科書（市内の大きな書店から持って来た奴だ）を捲り、その当時の写真を見た。ミサイルが落下し、市街地が炎に包まれている写真が印刷されている。

「日本の安全保障に対する意識は大きく変わりました。それまでは殆ど触れられていなかった憲法改正の話題が、連日マスコミを賑わすようになりました。そして政権交代から3カ月後、自生党は憲法改正の国民投票を行いました。その内容とは？じゃあ松戸さん」

指された由梨が立ち上がる。

「憲法9条の改憲です」

「そうですね。憲法9条、今じゃ歴史用語ですね。憲法9条を改正した日本は、名実共に戦争が出来る国家になりました。今では集団的自衛権も行使できるようになり、戦闘を伴う海外派遣も行われています」

さて、その後講師の授業は長々と続いた。簡潔にまとめてみるとこんな感じだ。

自衛隊が改変されて出来た日本国防衛軍は、周辺諸国の軍事力に対抗する為軍拡を行った。それまでの自衛隊はたださえ定員数が周辺諸国より少なく、また財務省の圧力などによってその充足率も100%ではなかった。せつかくいい性能の兵器を作っても輸出が出来ないため、その値段は必然的に高価になった。そうすると予算が少ない状況では、最新鋭の兵器がまともに配備できなかった。

軍拡によって状況は一変した。

まず定員が大幅に増やされ、就職難に喘いでいた学生達がこぞつて入隊した。特に陸軍などは15万人体制から40万人体制にまでなったので、陸海空、さらに新設の海兵隊合わせて40万人以上の分

の就職口を確保する事に成功した。人数が増えれば当然彼らが扱う兵器の数が増える。兵器は最新鋭技術の塊だ。電子機器メーカーから鉄鋼メーカーまで、あらゆる企業に仕事が行き渡った。またそれらのメーカーを支えるのは中小企業であり、中小企業はリーマンショック以降仕事が激減していた。降つて湧いた軍拡の波は、それら中小企業が活性化する手助けになった。

更に武器輸出が出来るようになったことで、日本は続々と外国に対して武器を輸出した。手始めとして飛行艇を輸出した。よく売れた。日本の飛行艇は世界最高水準の性能を持っており、また飛行艇自体の需要も高かったからだ。

続いて日本は台湾に対し、戦車や地上配備型対艦ミサイルなどを続々と売った。日本と台湾は共に中国を仮想敵国としていて、利害が一致したからだ。案の定中国は非難する声明を発表したが、日本はそれらを全て無視した。

その後日本は東南アジア各国に、積極的に武器を輸出した。それらの国は中国に領土や領海を脅かされ、至急最新鋭兵器を配備する必要があったからだ。

日本の護衛艦（外国では駆逐艦か）や潜水艦、それらはよく売れた。特に潜水艦はよく売れた。通常動力では世界最高とも言われる日本の潜水艦は、一番売れる兵器となった。

海外との兵器の共同開発も行われるようになった。最新鋭のステルス戦闘機や原子力空母などが配備されるようになった日本は、気がつくとアジアで中国と並ぶ軍事大国となっていた。

「しかし、この軍拡特需もまた、いい事ばかりではありません」

授業も終盤に近づき、講師が言った。

「今や日本の兵器産業は、経済に対して大きな影響を持つといわれています。今はまだ出てはいませんが、その内兵器産業と強い関係を持つ政治家が何人も権力を握るようになるでしょう。いわゆる軍産複合体というやつです。アメリカでは軍産複合体が大きな影響力を政治に対して有しており、10年に一度戦争をするのは最新鋭兵器のテストや新兵器を配備させるためだと言われています」

隣に座る軍司を見た。軍司はさっきまでとはうってかわって、真剣な眼差しで授業を聞いている。

「さらに軍の海外派遣の増加は、戦死者の増加も招きました。海外派遣ではないですが、数年前の日韓紛争の際、日本側には合計で800名以上の戦死者が出ました。海外派遣で戦死した兵士の数は、合計で100名近くに達しています。その他にも過酷な戦闘を味わった事による精神障害も増加しています」

過酷な戦闘か……。普段は余り口にしないが、東さん達は戦場に言った事があると言っていた。やっぱり彼らも、色々と辛く苦しい事を乗り越えてきたのだろうか。

時計の針が11時を指した。授業はこれで終わりだ。張り詰めた空気が緩んでいく中、資料をまとめつつ最後に講師は言った。

「皆さんも今の事だけでなく、未来の事も考えるような大人になってください。今は辛い状況ではありますが、未来の事を自分なりに考え、行動していく事が重要です」

そう言うと、講師は会議室から出て行った。

ボクは大きく伸びをして筋肉をほぐした。椅子から立ち上がり、ボク達民間人の居住区域に帰る高校生が続々と教室から出て行く。

「はー、つまらない授業だったわね」

「うわ由梨！いつの間に！？」

いつの間にか由梨がボクの背後に立っていた。春名や軍司も一緒だ。

「そう思うでしょ、軍司？」

「ええ？そうですか？まあ僕は憲法改正辺りの出来事なら完璧に覚えてますけど・・・」

「大体、とつくに社会が崩壊しているのに政治経済って、何かずれてる気がしない？まだサイバル術を学んだ方がマシよ」

「あはは由梨・・・。容赦ないね・・・」

怒っているような由梨とそれに一步引いている軍司、そして曖昧に笑う春名。うん、いつもの皆だ。

ボクも皆に混じり、一緒に帰ることにした。この後は自由時間、寝ても遊んでも勉強しても（ボクは絶対にしないけど）、何をやってもいい時間だ。

ちなみにボク達高校生は、毎日何らかの事をしなくてはならない。大人達を手伝うか授業に受けるか、あるいは他に皆に貢献できるような事だ。「働かざる者、死ぬ」がモットーとなりつつある名古屋刑務所では、生活する為には自分に出来ることをしなくてはならない。

居住区画へ戻る途中、ボク達はいつも中庭を通る。いつも人が少ない中庭だが、今日はなんだか騒がしい。

中庭に大きなトラックが一台停まっていた。そして荷台から何かを降ろすヤクザ達と中庭に広がってピラを配ろうとしている平和実現党員、そして彼らを制止しようとする兵士や刑務所職員らの姿が見えた。

「またいつもの抗議行動ですか？いい加減に働けってんだあいつら」
「・・・？何かいつもと様子が違うよ？」

そう吐き捨てる軍司と首を傾げる春名。軍司は平和実現党を嫌っているらしく、彼らの姿を見るたびにしかめっ面をする。

春名の言葉で、ボクは平和実現党員達を見た。確かに、いつもと違う雰囲気だ。

いつもはプラカードを掲げて刑務所内をデモ行進しているのに、今日はそういったプラカード等が見られず、また党員達も一箇所に留まっている。唯一主張を示しそうなものはピラだが、それらはまだ配られてすらない。

そして中庭の中央に停まる一台のトラック。状況からしてヤクザ達が保有しているらしいトラックからは、布に包まれた大きな棒状のものが降ろされていた。それも何個も。

「いつもと様子が違うわね・・・」

由梨も首を傾げた。

やがて騒ぎに気がついたのか、続々と刑務所内の避難民達が集まってきた。気のせいか、辺りに変な臭いが漂っている気がする。

中庭は集まってきた避難民で一杯になった。トラックの周りだけは、ヤクザ達が囲んでいてそこだけ円が出来ている。

そして1人の中年女性がトラックの荷台に立ち上がった。平和実現
党の党首であり、政治家でもある福原穂積だ。
福原はマイクを手にすると、大声で言った。

「今日は皆さんに、軍が私たちの味方ではないという証拠をお見せ
します！」

その言葉で、ヤクザ達が地面に置かれた棒状の物を包む布を、勢い
よく取り払った。

「キヤーツ!!」

「それ」に一番近い場所にいた女性の悲鳴が上がった。それに続く
ように、悲鳴が連鎖していく。

「何?何なの?」

「見えない、どいてくれ!」

人垣の後ろにいる避難民達から声が上がる。「それ」を見ようとベ
ンチの上に立ち上がった男性が、悲鳴を上げて地面に転げ落ちた。
ボク達も「それ」の正体を確認しようと、人垣を掻き分けて前に進
む。前に進むたびに、異臭が強くなっていく。

やがてボク達は人垣の最前列に飛び出て、「それ」を見た。「それ」
の正体を知って、思わず絶句する。

ボク達の前に転がっていたのは、土があちこちに付着し、腐乱しかけているいくつものダークシーカーズの死体だった。そしてその死体が着ている服は、よくドラマなどで見る、刑務所の受刑者が来ている作業服に酷似している。

しばらくして、全員がダークシーカーズの死体を見終わったようだ。それを見て福原は満足そうな顔をして、さっきよりも大きな声で続ける。

「皆さん！これはただの感染した人間ではありません！軍によってウイルスを投与され、実験台にされてしまった人達の死体です！！」

第127話 side 優 「終わりの始まり」1 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第128話 side 龍 「終わりの始まり 2」

『中庭で緊急事態！至急事態の收拾を！』

屋上で見張りについていた堂々から緊急通信が入り、食堂にいた俺は食べかけのおにぎりをテーブルに置き、代わりにG36Cを掴んで廊下に出た。

俺の他にも手が開いている隊員は全て中庭に向かい、「緊急事態」とやらを鎮圧に向かう。その中にはこの指揮官である大山二尉も含まれていた。

「何があつた!？」

『ここからはよく見えません。とにかく騒ぎが起きてます。パニックを起こしている民間人もいます』

大山二尉が堂々に問いかけるが、返ってくるのははっきりとしない答えだ。

中庭に近づくにつれ、叫び声が俺達の耳にも届いて来る。壁を通り抜けて声が聞こえてくるといふことは、かなりの人数が騒いでいるという事だ。

「何を騒いでいるんだ!」

中庭に出るなり、大山二尉が怒鳴った。その後が続いて中庭に出た俺達に、非難するような視線が一斉に突き刺さる。

中庭には一台のトラックが停まっていた。そしてその周囲を平和実

現党やヤクザだけでなく、多くの避難民が取り囲んでいる。彼らのほとんどが、俺達に冷たい視線を向けている。

「来たよ……」

「うわ……」

とかいう小さな声が、俺達の耳に届く。

「ほら来ました、皆さん彼らから離れて下さい！」

トラックの荷台に立つ福原穂積が、俺達を指差して叫んだ。すぐに俺達の周囲からざっと人が離れていく。その顔には、何か恐いものを見るような表情が宿っている。

「何だ？何があつたんだ？」

「さあ？でも嫌な予感がする」

ミニミニ軽機関銃を携えた中沢もやってきて、避難民達を警戒する。避難民達は怯えた表情、一方平和実現党員やヤクザ達は、なぜか勝ち誇ったような表情をしている。

「無許可での集会は禁止されているはずです！早く解散しなさい！」

「これを見てもまだそんな事が言えるのかしら？」

福原がそう言うと、ヤクザ達が何かを運んで来て、勢いよく俺達目の前に放り投げた。どさっという音と共に、マネキンのようなものがいくつも地面に転がった。

いや、マネキンじゃない。

俺達の目の前に転がっているのは、土があちこちに付着し、腐敗臭を漂わせるダークシーカーズの死体だった。そして俺らは、それらの死体に見覚えがある。

死体が着ているのは、汚れてはいるが囚人の作業服に酷似している。というよりも、囚人服そのものだ。

これらの事からわかる事は一つ。

実験が、バレた。

民間人を取り囲んでいた兵士達が一斉に絶句する。皆実験が民間人にばれないように、情報漏洩には気をつけていたはずだ。そして被験者の死体は発見されないよう、刑務所からかなり離れた場所に埋めたはずだ。

俺らがやっていた事は非人道的な実験だ。だからそれが露見しないように、念入りに情報漏洩が起きないようにしていたのに。

兵士達が互いの顔を素早く見る。それは誰が情報を漏らしたのか、という疑いの眼差しだった。

「これはあなたが行ってた、人間にウイルスを投与する実験の被害者ですよね？こちらにはしっかりとした証拠もあります」

「・・・一体これをどこで？」

大山二尉が、かろうじてという風に言葉を出す。福原がますます勝ち誇ったような笑みを浮かべ、そして続ける。

「こんな非人道的な事をする連中に従う訳にはいきません。すぐにわたし達に指揮権を移譲しなさい」

福原がそういうと、「そうだそうだ！」という非難の音が、一斉に俺達に浴びせかけられる。元から平和実現党についていた民間人だけではない。今まで軍に協力していた民間人まで、俺達を非難している。

最近食料問題でただでさえ不満が溜まっている所にこんな光景を見せつけられたら、そりゃあ俺達を見限るだろう。

「あーあ、ばれちゃったか」

非難の音が、一斉に止んだ。全員がその声の主を見る。

俺達の前に現れたのは、実験の当事者である福田だった。福田はいつもの白衣のポケットに手をつ込み、俺達に近付いて来る。

実験を行っていた福田が現れた事で、さっきよりも大きな非難の声が上がりはじめた。中には福田に掴みかかろうとする者も出た。俺達はそれを止めようとしたが、次の瞬間福田がとつたのは、意外な行動だった。

なんと白衣の下からMARK23拳銃を抜くと、上空に向けて威嚇射撃をしたのだ。

突然鳴った銃声に、福田に掴みかかろうとした男が驚いて尻もちをつく。悲鳴があがり、ますます俺達から民間人が遠ざかる。

福田は銃口から硝煙の上がる拳銃を構えたまま、銃口を左右に振って民間人に向ける。その度に銃口を向けられた民間人から悲鳴が上がる。

「な、何をするんだ！」

「うるさい。ちょっと黙ってくんない？」

福田はそう言うと、拳銃をホルスターに戻した。今の威嚇射撃で皆ビビったのか、中庭にいた全員が黙った。

「ばれちゃったって・・・、あなた、自分が何をやったのかわかってるの!？」

「何って、人体実験だけどそれが何か？」

「何かって、あなたって人は!！」

福原が顔を真っ赤にして怒鳴るが、福田はどこ吹く風といった感じでスルーしていく。色白の福田と顔が真っ赤な福原は、何から何まで対照的だ。

「人間を使って実験するなんて、なんて非人道的な事を!これは重大な犯罪ですよ!？」

「犯罪?面白い事を言うねえ」

どこかバカにしたような態度の福田に、更に福原達の怒りのボルテージが上がっていく。福原が何か言おうとしたが、福田はそれを遮って続ける。

「あのねえ、これは僕が政府の命令でやってる事なの。つまり首相の命令。首相を選ぶのは国会。国会議員を選ぶのは国民。つまり、

僕がやってるのは国民の認可を受けているのと同じなんだよ。わかる？」

「しかし、だからといってこんな事をするのは……。どう思いますか皆さん、こんな人間に従っていたら、あなた達もいずれは利用されてしまいますよ！」

福原はそう言つて振り返つた。その言葉で、黙っていた民間人達が再び抗議の声を上げる。福田に詰め寄ろうとする人もいて、慌てて俺達は福田に危害が加えられないよう押さえる。

「わたし達はこんな事をしている人間に従う事はできません！指揮権を私たちに移譲して、直ちに実験を中止しなさい！」

「アホですか？僕達がやってる実験は、人類全体の為になる事だよ。仮に君たちがこの実験を妨害したら、下手すりゃ人類が滅ぶ。人類全体と、重犯罪を犯した犯罪者数百人、どっちを優先すべきかわなくてもわかるよね？」

福田がそう言つと、福原はひるんだような態度を見せた。そりゃ、人類全体の方が優先度が高いのは考えなくたってわかる。殺人をやつたような人間のために、人類を滅ぼすのはアホらしい。

「それに勘違いしてるようだけど、僕達に君たちを守る義務はないんだよね。ここに軍が駐屯してるのは、僕を護衛して実験をサポ―トするためだよ。それが最優先任務だ、君たちを守れなんて命令は受けてないんだよ。僕が君たちを守ってるのは、あくまでも『ついで』ね」

福田がそう言うと、突如群集の中から奇声が上がった。

「なめとんのか、ゴラァ！」と声を張り上げ、1人のヤクザが福田に向けて突進してきた。手には何も持っていない。

ヤクザが福田の襟首を掴もうとした直前、護衛の兵士がヤクザの腕を掴み、次の瞬間には地面に押し倒していた。兵士はホルスターから拳銃を抜くと、ヤクザの頭に押し付ける。小さな悲鳴を上げて、ヤクザは固まった。

「さて、どうしよっかなあ……。僕の障害となるものは排除してもいって政府からは言われてるし、

このまま君を撃ち殺しても問題はないんだけどね」

福田は拘束されているヤクザの傍らにしゃがみ込み、いたぶるように言う。まるで虫けらを見るような目で。とても冷たい視線だ。

ヤクザががくがくと震え、顔が真っ青になる。それを見た福田はニヤリと笑い、兵士にヤクザを離すよう命じた。

拘束が解かれると、ヤクザはあどさりして皆のところに戻った。

「自分の権力を維持する為だけに軍を使い、人を人とも思わない。

これがこの男の正体です！皆さん、こんな人間と一緒にいたら、いつかあなたも殺されてしまいますよ！その点私なら皆さんを守れます！」

「好き勝手言うのは自由だけど、僕達の邪魔はしないでよね。出て行くなら」自由に」

福田のその言葉が、皆の運命を決めたようだった。

結局中庭に集まっていた民間人の多くが、平和実現党側についたよ

うだった。平和実現党は近い内にここから出て行くらしい。最も、食料や武器弾薬が少ない状態で出て行って何になるのか。アホなのか？

それと、軍の側に残ったのは100人ほどしかいない。このままでは、今まで民間人達が担っていた機能（食料等々、教育）が上手くいなくなる。

逆に食料や生活必需品は、消費者が少なくなるので余裕が出てくるだろう。まあ、平和実現党はそれらも寄せと騒ぐのだろうが。

騒動の後、情報漏れの原因が徹底的な調査で突き止められた。それによると、被験者の死体を埋めた場所が露見したのは、名古屋刑務所警備部隊の1人の兵士のせいだということだ。

もともとその兵士はワザと情報を漏らしたわけではない。その兵士が刑務所で出会った避難民の彼女に、人体実験を行っているという罪悪感を喋ってしまったのが原因だそうだ。

そしてその避難民の彼女は、平和実現党に繋がりがあった。平和実現党とヤクザは勢力を増す為に、被験者の死体を埋めた場所を徹底的に調べた。

「あーあ、こんなならもつと遠い場所に埋めとくんだったな」
「そんなこと今更言ったって仕方ないだろ。第一燃料消費とか埋めるのに便利な場所とかを考えると、この刑務所に近い場所しかなかったんだから」

福田が愚痴った。

平和実現党とヤクザは死体を載せて処理場まで向かうトラックを尾行し、そしてついに死体を埋めた場所を見つけた。というのが事の顛末だ。

その情報を（意図的ではないにしろ）漏らしてしまった兵士には、

罰として自室禁錮と重労働数時間が命じられた。これが意図した行動だったら、銃殺刑だと大山二尉は言っている。

さて、平和実現党側についた民間人の中には、多賀の仲間もいた。もともと刑務所に来た初日からブーブー文句を言っていたやつだったが、やはり多賀は落ち込んでいた。自分の仲間があっさり離れたのがショックだったのだろう。

初春市からつれて来た子供たちは、俺達の側についたままだった。まあ子供だし、ややこしい事情はわからなかったようで、今までどおり俺達についていればいいと思ったようだ。

美里は、まだ態度を決めかねているようだったが。

第128話 side 龍 「終わりの始まり 2」 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第129話 side 優 「命の価値」(前書き)

最近余裕が無いので今回は短めです。次回は多分長いです。

第129話 side 優 「命の価値」

3月2日 02:00

結局、平和実現党側についた大人達は多くいた。彼らは軍への敵対心を露わにし、平和実現党と行動を共にすることを決めたらしい。そして軍人達は、その行動を止めることは無かった。

ボク達は東さん達の側、つまり軍の側に残ることを決めた。それは軍がやつてる事を認めただけではなく、ただ単に生きるためには軍についていた方が良さそうだという打算的なものからだった。

そして軍側の人間が少なくなった事で、ボク達子供に求められる仕事量も増えた。今までは見張りの仕事は大人達がやっていたが、彼らがいなくなった事でボク達まで見張りをしなければならなくなった。こんな夜中まで起きていたのは、初春市にいた時以来だ。

見張り軍人達も行っているが、いかんせん人数が少ない。軍人は交代制を解いて全員が徹夜状態で、ボク達高校生も交代で見張りに立っている。

さて、今ボクと軍司が見張りを行っている場所は、刑務所の壁際に設置された監視塔だ。鉄骨で組まれた監視塔は高く、塀の向こうがラクラク見える。そして塀の向こうには、いくつかの民家とその周辺に立つテントが見えた。

平和実現党と暴力団の拠点だ。彼らは昼間は刑務所内にいるが、夜になればあの民家へと戻って行く。昨日からは、軍から離れた避難民達の暮らすテントまで増設された。用意周到なことだ、と軍人達は言っていた。

そのテントのある辺りから、わずかな明かりが見えた。双眼鏡で覗

いてみると、避難民達が焚火をしているのがわかった。

「チツ、あいつら……。夜中に明かりなんか点けてたら、ダークシーカーズに位置がばれるじゃないか。今まで何やってたんだ？」

ボクの隣で監視塔に設けられたM240軽機関銃を構える軍司が、舌打ちと共に罵った。軍司が構える軽機関銃の銃口は、平和実現党の拠点へと向けられている。

『無用な問題は起こさないように』と東さん達から言われていなければ、今すぐにも軍司は引き金を引いてしまいそうだ。何がそこまで軍司を怒らせているのか。

東さん。

どうやら東さんと牧さんは、実験を主導していたと名乗るあの福田とやらの親友らしい。親友だったのなら、なぜあんな酷い実験を止めようとはしなかったのか。

東さん達の言い分はわかる。あの実験は必要なことだと、ボクも自分自身に何度も言い聞かせた。しかし、まだ完全には納得出来ない。

だって、生きてる人間をダークシーカーにするんだよ？犯罪者とはいえ、生きてる人間をだよ？ワクチンを作りたいなら動物を使つての実験でもいいじゃないか。

昼間ボクはそう東さんに言った。しかし東さんの代わりに、福田さんが答えた。

『キミは何を言ってるんだい？この実験を行うためにわざわざ全国から囚人をここに運んできたんだよ？実験用の動物なんか殆ど確保

出来ない現状だから、人間でやらなきゃならないんじゃないか。それに、結局臨床試験とかもしなきゃならないし』

つまり、福田さんは人間の命なんて軽いと思っっているのだ。そして何も言わなかった東さんも、いや、福田さんの実験に協力していた軍人全員が、その考えに賛同しているのだろう。

ボクはそう言われ、反論しようとした。しかし、東さんがようやく口を開いた。

『人間の命ってのはな、軽いんだよ。紛争地帯じゃ毎日人が死ぬ。飢えで死ぬ。俺達軍人も人を殺し、殺される。PKFで派遣された先の紛争地帯で仲間がRPGで粉々に吹っ飛ばされても、日本に情報が伝わる頃には「戦死者一名」って短い情報になるだけなんだ。で、ニュースで報道されても、すぐに忘れられる。視聴者の知っっている人間が死んだ訳じゃないからな。つまり、人間の命なんて軽いんだよ』

東さんのその言葉に、ボクは少し納得してしまっていた。ウイルスの影響で人間がバケモノになり、何億、何十億という人間が死んだ。ボクの目の前でも多くの人が死んだ。親友も死んだ。人の命が軽くなければ、こんなに人はバンバン死なない。

「ねえ、軍司」

「なんですか、優さん？」

軍司は機関銃を構え、警戒したまま答える。ボクに目を合わせる事はせずじ。

「軍司って、東さん達の言ってた事に納得出来る？」

「言つてた事とは？」

「人の命は軽いつてこと。あと東さん、というか福田さんがやつて
る人体実験についても」

「納得出来る訳ありませんよ。むしろ納得しちゃいけない」

軍司の口から出たその言葉に、ボクは少し衝撃を受けた。軍司の事
だから、「仕方ない」の一言で終わらせるだろうと思つていたから
だ。

ボクがその事を軍司に伝えたと、軍司は笑つて答えた。

「確かに、東さん達の言つてる事は分かります。軍人と一般人じゃ、
命に対する価値観が違う。だからこそ、僕達は自分達の考えを重要
だと思わなくちゃならないんです。誰もが『命は軽い』なんて考え
ていたら、あつという間に人類は全員ダークシーカーになつてます
よ。『人命は地球よりも重い』なんてきれいごとを言うつもりはあ
りませんが、こんな世界だからこそ、命は大切にしなきゃならない」
「じゃあ、なんで軍司はこっちの側に残つたの？」

ボクが訊くと、軍司は少し考え込むような仕草をした。ややあつて、
答える。

「確かに福田さん達がやってた事は、人道上許されない。でも福
田さん達だつてそれを知つて、罰も受ける事も覚悟して実験をやつ
てるんだと思います。ワクチンや治療薬がなければ、人類は絶滅し
てしまいますから。僕らはそれを知つた上で、彼らの覚悟を受け入
れる事が必要なんだと思います」

「大の為には小を犠牲にしる、つてこと？」

「そうじゃないです。仕方がない事とはいえその犠牲を強いている
大の罪を、僕らは忘れちゃいけないんです。仮に僕らがその罪を忘
れたら、僕らだつて犠牲を強いる側の仲間入り。しかも自分達の手

で直接誰かを殺したり傷つけている訳じゃないから、もっと夕チが悪い」

かといって、平和実現党の思想に賛同するわけじゃないですよ。軍司はそう言って、再び機関銃を構えて周囲を警戒する。

軍司は、既にしっかりと自分の考えを持っているのだ。フラフラとその場で意見や考えを変えてしまうボクとは違い、一本筋のようなものを持っている。

初春市にいた頃は、あんなに頼りなかったのに。死と隣り合わせの世界が軍司を育てたんだろうか？

もはや軍司の表情は少年ではない。男の顔をしていた。

第129話 side 優 「命の価値」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第130話 side 龍 「かつての仲間」

3月5日

牧がようやく隊に復帰した。

ダークシーカーと化した古橋の銃撃を足に受けてから一カ月、傷は完全に塞がりリハビリも全て終えた。そんな牧と一緒に、俺は福田から感染者を1体捕獲してくるように命令を受けた。

「おい、大丈夫かお前？ちゃんと歩けるのか？」

「大丈夫だ、少しくらいなら走ったって平気さ」

俺の質問に、牧は笑って答えた。

牧は長い間病室にいたので、今回はカンを取り戻すことも兼ねた任務なのだろう。感染者の捕獲が復帰後最初の任務とは、牧も不幸ではあるが……。

俺達の行っていた実験が暴露された後、避難民の多くが平和実現党側についた。俺達がいくら説得しても無駄だった。

今まで避難民の協力もあつて上手くいっていた刑務所内の生活は、大変革を迫られた。避難民の大部分の協力が望めない今、今までの体制を変えていくしかない。

子供達に行っていた教育は当面中止され、監視の任務も子供に任せられるようになった。多くの野菜を育てたりするのは半ばあきらめ、必要最低限の分の野菜の世話だけ行うようになった。

ただ、避難民が離反したことによって、必要な物資にゆとりが出てきたのは確かだ。食事も以前に比べて量が多くなったし、頻繁に鹿や猪を追いまわす必要もなくなった。もつとも、平和実現党は相変わらず必要物資を寄越せ、食料は我々が管理すると声高に主張しているが。

隠す必要がなくなったので、実験も大々的に行われるようになった。感染者の捕獲、囚人へのウイルス投与、そして治療薬とワクチンの開発等々……。

しかし、それらに割ける人数は少なくなった。俺と牧しか今回の感染者捕獲任務にあてがわれなかったのも、人材不足が原因だ。

武器庫で牧の小銃や拳銃を受け取り、続いて足となる高機動車を取りに行く。捕獲した感染者を乗せるには、装甲車では手狭だ。かといってトラックは小回りが利かないし車体が大きい分だけ燃料消費も多い。という事で中型の高機動車を選択したのだ。

車庫から整備された高機動車が出され、俺は運転席、牧は幌を張る際に使われるポールにマウントされた、ミニミニ軽機関銃につく。

それにしても、随分と寂しい光景になったな。俺は門に向けて高機動車を走らせつつ、そんなことを思った。

避難民の多くが平和実現党側につき、刑務所から出ていってしまったからだ。彼らは平和実現党の拠点である刑務所の外の民家の近くで暮らしている。家は見通しを良くするため大部分を焼き払ってしまったので当然足りず、テントも作って住居を補っているようだ。昼間は子供達が刑務所のグラウンドを駆け回っていたのに、今では子供のはしゃぎ声なんて聞こえない。俺達の側に残った子供も全員、人手不足の為働かざるを得ず、遊ぶ暇なんてないからだ。

門でチェックを受けた後、市街地へと向かう。途中、平和実現党と避難民のキャンプを通り抜ける格好となるが、彼らから襲撃を受けないよう警戒しなくてはならない。

間違つて人を撥ねないようにスピードを落とす。牧もミニミニが作動するか確認したのち、俺達の乗る高機動車はキャンプに入って行った。

避難民のキャンプにはテントがいくつも立ち並んでいた。あちこちで焚火がされ、狩ってきたらしい鹿や猪がビニールシートの上に並んでいるのが見えた。

途中で避難民とすれ違う度、彼らからは敵意と恨みのこもった視線が向けられる。それらの視線を全て無視し、避難民のキャンプを俺達は通り抜けた。

「・・・俺達、何か悪い事やったか？」

「必要な事でも、恨まれなきゃならない事は沢山ある。気にすんな」
「でもよ、福田が実験主導してたんだろ？そりゃ恨まれるわな。あいつは徹底的にやるし、何よりその言い分が間違つてない」

牧が言う。高校3年生のときに俺と福田と一緒にのクラスだった牧は、福田の性格をよく知っている。今回の実験の事を告げた時も、「あ、やっぱりやってたか」とたいして驚いてはいなかった。

やがて俺達は豊田市市街地に入った。春が近いたためか、あちこちで草や花が芽を出している。ひび割れたコンクリートから雑草が突き出ていたが、それを気に留めるような人間はここにはいない。

放置された自動車の中には錆が回って茶色く変色し、ツタが絡みついているようなものもある。あの車は、もう使えはしないだろう。

「で、目標は？」

「ここから500メートル先、直進しろ」

荷台の牧が地図を見つつナビゲートする。

昨日の夜、無人偵察機が数名のダークシーカーを発見した。日の出の前に、ダークシーカーは小さなビルに入って行った。

今回感染者捕獲任務に割り当てられたのは2名だけだ。以前のように兵力を大量に動員しての作戦は行えず、小規模な集団を慎重に捕えていくのが俺達のやりかたになっていた。

ダークシーカーズのねぐらに自ら突っ込んで行くのではなく、ダークシーカーズをおびき寄せろのだ。

目標地点のビルの前に高機動車を止め、運転席から降りる。道路の脇には放置された自動車が連なっているが、幸いビルの入り口は塞がれてはいない。

一旦入り口からビルの内部に侵入する。窓は遮光カーテンで塞がれており、周囲の様子が見えない。暗視装置を装着しているが、1階のロビーには誰もいなかった。

それを確認した後、俺達はダークシーカーを捕獲する準備に入った。まずはダークシーカーズが俺達に気付かないよう、迷彩服の上着に消臭剤（臭いがキツイやつ）をかける。作業中に気付かれたら、捕獲どころか戦闘になる。

今回は電流でダークシーカーを捕獲する予定だ。高機動車の荷台に積みまれた小型発電機に電線をつなぎ、水の入ったポリタンクを持って1階ロビーへと戻る。

直射日光が入って来ず、しかし広い場所を見つけると、ポリタンクの蓋を開けて床に水溜りを作った。そこへ、発電機と繋がった2本の電線の先端を浸す。発電機を起動したら、水溜りに足を踏み入れた者に高圧電流が流れる仕組みだ。

ダークシーカーを包むための遮光布などを用意し終えた俺は、最後に小さな試験管を持って高機動車から降りた。試験管の中には、輸血用パックからとった血が入っている。ダークシーカーズは血の臭いに敏感だ、という福田の研究結果より、血の臭いでダークシーカーを水溜りまでおびき寄せるのだ。

牧を入り口近くに待機させ、俺は水溜りの近くまで歩いた。既に電線には高圧電流が流れているので、水溜りに触れないよう気をつけなければならぬ。

水溜りにギリギリ触れない場所に血の入った試験管を置くと、それをG36Cの銃床ストックで叩き割る。割れたガラスの間から血が滲みでて来て、周囲に鉄の臭いが広がって行く。

「よし、オーケーだ」

俺はそう言うと、牧を連れて外へ出た。牧は高機動車の荷台に上がって万一の時に備えてミニミ軽機関銃を入り口に向け、俺もG36Cの引き金に指を掛けながら畏にダークシーカーがかかるのを待つ。

数分後、ビルの中から何かが動く音がした。それと同時に足音も聞こえ、次の瞬間、ビル内部から人間のものとは思えない絶叫が響いた。

「かかった!」

俺は牧にそう言うつとビル内部へと突入した。素早くG36Cの銃口を罫を仕掛けた方向に向け、側面のフラッシュライトを点灯する。光の輪に照らし出されていたのは、水溜りの上に倒れ、身体を痙攣させている一体のダークシーカーだった。高圧電流によって筋肉が収縮し、動けないようだ。

周囲を見回すが、他のダークシーカーはいない。それを確認した後、俺は牧に電流を流すのを止めるよう言った。

ややあつて、ダークシーカーの痙攣が止まった。その瞬間を見逃さず、俺はストックを思いっきりダークシーカーの首筋に叩きつけた。気絶したのか、再びダークシーカーの動きが止まる。

高機動車の発電機を止めてやってきた牧に周囲を警戒するよう言うつと、俺はあらかじめ用意しておいた遮光布で気絶したダークシーカーの身体を包んだ。日光に含まれる紫外線に長時間曝されれば、ダークシーカーは死んでしまう。

今回俺達が捕獲したダークシーカーは女性だった。牧がビルの入り口付近を警戒するなか、高機動者までダークシーカーを運んで行く。ダークシーカーの体重は軽かった。女性であるというのも一つの理由だが、その身体に余計な肉が殆どついていないのだ。

筋肉はついていないが、腹は肋骨が浮き出ている。頬もこけているようだ。もしかしたら、食料が足りなくなっているのかもしれない。

気絶したダークシーカーを高機動車の荷台に放り込み、目が覚めても暴れないようロープで縛っておく。俺と牧が一息ついていると、再びビルの内部から絶叫が響いた。

「何だ？」

牧がそう言い、ビルの入口へ目を向ける。

突然、ビルの入り口から、一体のダークシーカーが姿を見せた。

「!?!」

俺達は慌ててそれぞれの武器を構え、ダークシーカーに照準する。引き金を引く直前、俺達の指が止まった。

入り口から姿を見せたダークシーカーは男だった。そして、迷彩服を着用している。

ボロボロにあちこちが擦り切れた迷彩服、その左胸の部分には、まだ名前や所属を表すワッペンが縫い付けられていた。

『普 Y・HURUHASHI』

そう書いてある。

そのダークシーカーは、一ヶ月前に俺達の前から姿を消した、古橋だった。

「古橋……!」

牧が呻いた。

良く見ると、古橋の面影が残っている。毛髪は全て抜け落ち、顔は青白かったが、間違いなく顔形は古橋のものだった。

古橋が立っているビルの入り口は日光が当たっている。何か焼けるような音と共に、日光が当たった部分が黒くなり、煙みたいなのが古橋の顔から上がっていく。

だが古橋は顔が焼けているにもかかわらず、俺達に向けて吼えている。まるで、俺達が憎いともいうように。

「古橋！俺だ、東だ！お前俺達がわからないのか！？」

「そうだ古橋！牧だ！覚えてるだろ！？」

俺達がそう呼び掛けても、古橋は相変わらず吼えていた。そしてついに限界に達したのか、最後に俺達をにらみつけると、ビル内へと戻って行った。

かつての古橋の温厚な性格などは、欠片も残っていなかった。

俺達はすぐさま刑務所に引き返し、捕獲したダークシーカーを福田に引き渡した後、古橋がいた事を報告した。古橋がいるビルに戻り、古橋と接触しようとした俺達だったが、福田はそれを許可しなかった。

「何でだ！何で古橋を連れ戻すことを許可してくれないんだ！？」

「君はもう少し利口かと思ってたんだけどねえ。あのね、その古橋君とやらは、すでに感染者なんだよ？ここに連れて来たって、その思考は動物のままさ。君達と意思疎通なんて出来ない」

「そんな事わからねえだろ！」

牧が怒鳴ったが、福田はそれにも動じず、言い返す。

「感染者には社会的な行動は一切認められない。彼を実験に使ってもいいなら、刑務所（こむ）に連れて来てもいいけど」

「何だと……！」

そう言った福田に牧が殴りかかるうとし、俺は慌てて止めた。福田は忙しいのか、すぐにどこかへと歩いて行った。

不満そうな表情の牧は壁を殴りつけると、居住区画へと戻って行く。一人残った俺は、拳を強く握り締めた。

今までダークシーカーズは敵だった。俺達に危害を加えようとしたら、迷うことなく殺せた。

しかし、俺は迷っている。ダークシーカーと化した古橋を切り捨て、場合によって殺さざるを得ないことを。まだあいつには人間らしい心が残っているのではないかと、心のどこかでは迷っている。

かつての仲間、という理由だけでそんな風に思っているのなら、今まで俺達が殺したダークシーカーズは何だったのか。彼らだってかつては人間で、今生き残ってる人間の中にもかつて彼らと親しかつたやつがいるはずだ。

クソッ……！

こんなに迷ってるんじゃない、俺は頼りにならないじゃねえかよ……
……！！

第130話 side 龍 「かつての仲間」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第131話 side 龍 「和解」

3月7日

「・・・それで、俺に頼みに行けと？」

突然大山二尉から呼び出しを受け、出頭したら突然あることを頼まれた。

美里のコンサートをしてほしいという依頼だ。

大山二尉によると、軍や警察、そして刑務所の人員は相当精神的にまいっているそうだ。極秘の研究が暴露され、今まで守っていた避難民から非難を受け。自分達の味方は少なくなり。

こういった状況で、精神的にくるのは当然だ。だから大山二尉は、慰問の為に美里にコンサートをしてほしいそうだ。美里は何度かCDを出した事もあり、それなりに名は知られて人気のようだ。

だからといって、何で俺が・・・？

「君と仲原さんは親しい関係だと聞いた。我々が頼むよりも君が頼んだ方が、彼女が引き受けてくれるのではと思っただけだ」

「誰から聞いたんです？その・・・、俺と美里が付き合ってたこと」
「福田さんからだ」

「アイツか・・・！！」

何故か俺の脳裏に、うひゃひゃひゃと笑っている福田の顔が浮かん

だ。あいつ、余計な事言いやがって。後で2、3発殴ってやる。断ろうと思ったが、大山二尉が俺に頭を下げてきたので引き受けるしかなかった。

美里のいる民間人の居住区画へと向かう俺の足取りは重かった。数日前に喧嘩してから、俺と美里は一度も話してはいない。顔を合わせても、目をそらして相手を意識しないようになっていた。いつか仲直りする機会が欲しい、とは思っていたが、まさかこんな形で話し合うことがあるとは……。

囚人の収容棟を改修した場所に民間人の居住区画はある。福田の実験で本来そこにいるはずの囚人は次々いなくなり、代わりに民間人を収容したり倉庫として使われることになったのだ。居住区画と言う名の収容棟の入り口から内部に入ると、まずそこにはロビーがある。元々が囚人ようだったので、イスやテーブルが数個あるだけだったロビーは、今では娯楽用のテレビやストープ、本棚などが並んでいた。しかし、そこには誰もいない。当然である。最近までここを使っていた多くの避難民は、今や平和実現党に従って刑務所の外で生活しているのだから。

誰もいない廊下を歩き、階段を上がって2階へ向かう。すでに美里の部屋の場所は分かっている。集団房を改修した部屋の前に立ち、俺は大きく息を吸って、吐いた。以前は鉄のドアがあったのだが、今は普通の合板製のドアに取り替えられ、部屋の内部は見えないようになっている。

ドアをノックし、しばらく待つ。待つ事数秒、ドアが開いて美里が顔を出した。

「誰？何の……」

俺の顔を見て、美里が固まる。すぐに口が閉じられ、美里が伏し目がちになる。

や、やばい……。気まずい……。さっさと仲直りして、その上でコンサートをしてくれるよう頼まなければならないのは俺だってわかっている。

「少し、話があるんだが」

「……それって、今話さなきゃならない事？」

「ああ」

俺はそう言っつて、美里を外に連れ出した。

「……それで、何の用？」

中庭のベンチに座った美里は、冷たい目で俺を見て言った。そしてその声には刺々しさが混じっている。

中庭には誰もいない。今は総動員体制なので、民間人も仕事をしているからだ。交代で休憩を取っている者はいるが、そういった連中は自室に籠もって眠っているだろう。

美里の冷たい態度に、俺の心にはいまさらながら後悔の念がこみ上げてきた。やっぱり美里とは話すべきではない。無理だ。これ以上話せば余計に二人の距離が遠ざかってしまう。

そう考えた俺は、さっさと要件だけ伝えようとした。

「あのさ、歌を歌って欲しいんだ」

「何それ？命令？」

「いや、俺からお願いだ」

「・・・何で？」

「皆色々と疲れてる。だからお前の歌で皆を癒して欲しいんだ。駄目か？」

美里は何かを考え込むようなそぶりを見せ、しばらくしてから口を開いた。

「・・・わかった。話はそれだけ？じゃあね」

そう言つて、美里は立ちあがった。さつさと居住区に戻って行くうとした美雪の手を、俺は思わず掴んでしまっていた。

「・・・何？」

そう訊かれた。俺も何で美雪の手を掴んでしまったのかはわからない。だがこの機会を逃してしまつては、これから先美雪と話すことは無くなってしまふ。

そしたらこの先、ずっとお互いに話すことはない。もしかしたら誤解を解くことなく、二人のどちらかが死んでしまふかもしれない。

そう考えた俺は美雪の手を離れた。そして地面に正座し、両手を揃えて地面につけた。そして上半身をそのまま前方に倒す。

いわゆる、土下座のポーズである。

いきなり土下座した俺を、美雪はびっくりした様子で見ている。「

え、え？え？」と俺と地面を交互に見ている。

「え、何で・・・？」

「今まで、本当にすまなかつた！！！」

美雪の声をかき消すような大声で、俺は叫んだ。目を白黒させる美雪。

「今まで俺は、皆のためって思って行動してた。でもそれは言い訳で、本当は自分の責任の重さに耐えきれないからずっと同じことを言ってるって思考停止していたんだ。俺は皆の気持ちを考えてなかった。皆こんな非常事態だから、俺の気持ちくらいわかってくれるって一方的に思ってたんだ。皆の立場を考えてなかった」

「・・・」

「お前は自分に出来る事を一生懸命にやろうとしてたんだろ？でも俺は、『こんな時だから自分で出来る事は何でもやる』って考えて皆に出来るだけ仕事をさせないようにしてた。お前は自分に出来る事をしようって考えてたのに、それすら奪った。本当に、すまなかつた！！！」

そう言っつて、更に頭を地面に押し付ける。

数秒も経つただろうか。俺の肩が叩かれた。

顔をあげると、美里がしゃがんで俺の肩に手を置いていた。その表情は、柔らかかった。

「美里」

「龍くん、謝らないで。本当に謝るのはわたしの方だよ。わたしも龍くんにごめんだったんだ、こんな非常時に。だから自分に出来る事をしようとしたけど、そんな龍くんなら他の仕事の片手間でも出来る事だった。わたしが精一杯やろうとしてる事は、龍くんにとっては

楽々出来る事なんだなって」

美里は俺の目を見て言っている。その顔には、先程までの険しさはない。声からも刺々しさが消えている。

「わたし、自分が役に立ってないんじゃないかって思って。それでそんな自分にイライラして。それでも龍くんは優しいから、つい当たっちゃって。ごめんね、ホントいやな女だよね」

「いや、悪いのは俺だよ。皆の気持ちを考えてなかったんだ、俺は」
「でもそんな龍くんがリーダーだったおかげで、今日まで皆は生き残れたんだよ。龍くんは正しい事をしてたんだよ」

美里はそう言うのと立ちあがり、俺に手を差し出した。「立って」と言われたので、俺は美里の手を掴み、立ちあがった。

「今までありがとう、龍くん。それからごめんなさい。そして、これからもよろしくね」

「俺を許してくれるのか、美里」

「何言ってるの？龍くんこそわたしを許してくれるの？」

美里はそう言っただけで微笑んだ。俺はその表情を見て、今まで抱えていた何かが消えていくのを感じた。

俺と美里は、また昔のような関係に戻れるんだ。

美里はコンサートを開く事を快諾してくれた。刑務所内の人員は二交代制を取っているので、全員がコンサートに来れるよう2回に分

けて行かう事となった。

「2回も続けて大丈夫か？」と俺は訊いたが、「龍くんと仲直り出来たんなら、何でも出来るよ」と言ってお笑い、さっそく準備に取り掛かっていた。

数時間後。

体育館からは美里の歌声と、熱狂する観客の歓声が聞こえてくる。

ここにいる兵士達も美里の事はよく知っているらしく、コンサートが開かれると知った時には大騒ぎしていた。

ちなみにいま俺は休憩時間中だ。しかし、美里のコンサートには行っていない。中庭にあるベンチに座り、コーヒの入った紙コップ片手に空を眺めている。

美里の歌は、これから先いつでも聴けるんだ。今聴けなくなっただけだ。

「や、何でコンサート行かないの？」

「・・・福田か」

突然現れた福田はいつものようにヘラヘラ笑いつつ（しかし目に感情は宿っていない）、俺の隣に腰かけた。

大山二尉に余計な事を言ったので一発殴ってやろうかと思ったが、止めた。俺と美里が仲直り出来たのは間接的にこいつのおかげともいえる。こんな奴に借りを作ってしまったら、100倍にして返せと言われかねない。

「いいだろ、行かなくなっただけ。これから先もあいつの歌声が聴けるんだ」

「おやおやまあ。何日か前にフラレた時は、世界の終わりって顔してたのに」

「フラれてねえよ!」

そう言つて、軽く福田の頭を殴る。

大げさに痛がつて見せた福田は。次の瞬間には真顔になり、俺の目を見て言つた。

「ま、この先いつまで生きられるかわかんないし。さっさとわだかまりは解消しておかないとね」

そう言つて、よっころしよと立ち上がり、研究室へと歩いて行く。その背中を見送りつつ、俺は紙コップのコーヒを一口飲む。

この先、いつまで・・・か。

たしかに、俺達の置かれた状況は最悪と言つていい。いつ死んでもおかしくない状態だ。

だが、それがどうかしたのか? 皆に危機が迫れば、俺はいつでも戦う。ダークシーカーズが攻めてきたら返り打ちにしてやる。食料が尽きれば、いくらでも猪や鹿を狩る。

そうだ。

ようやく手に入れた幸せを、俺は逃したくはない。

第131話 side 龍 「和解」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第132話 side 優 「感染犬」

3月12日 17:30

隣を歩く美里さんは嬉しそうだ。

数日前に慰問のコンサートを行ってから、美里さんの雰囲気は変わった。今までは沈んでいたようだが、東さんと仲直りしたそうので、明るい雰囲気醸し出していた。

そんなボク達は、今子供たちを連れて畑から帰る途中だった。刑務所内の最近の食料事情は改善され、今まで少なかった食事量が以前よりも多くなっている。そのせいで、収穫する野菜の量もおおくなければならなくなっている。

それもこれも、平和実現党とやらが皆を引き連れて刑務所から出て行ったからだ。人数が減ったおかげで刑務所内の食料や物資不足は解消されたが、本当は他の人に行き渡るべき物資が自分達のために使われているというのは、気持ちいいことではない。

「ま、連中が勝手に出て行ったんだ。残った物資をどうこうしようとかつちの勝手ですよ。そもそも物資は元々つちのもんで、仕方なく連中に配ってたんですよ」

野菜の入った段ボールを抱えた軍司がそう愚痴った。

腕時計を見ると既に午後5時30分を過ぎている。陽は大きく傾き、空が赤く染まっている。あちこちに暗闇が出来ている。日没前に刑務所に戻らなければ門が閉じてしまうので、急がなければならない。

と、ボクが視線を前に戻した時だった。
視線の片隅に、何か動くものが見えた。

目を凝らし、その方向を見る。そして、ボクは絶句した。
木の陰で蠢いていたもの。それは、数十頭の犬だった。そして、普通の犬とは様子が違う。

その犬達は、身体に全く毛が生えていない。灰色の肌が見えている。頬？の肉はボク達を威嚇するかのように釣り上がっており、そこからは鋭い牙が覗いている。狼やライオンならともかく、あんな牙を持った犬をボクは見た事が無い。

そこでボクは、ある事を思い出した。初春市でサバイバル生活を始めたばかりのころ、東さんはボク達にある事を言ったのだ。

『あーそうそう、犬もウイルスに感染するっばいから気をつける。アメリカじゃいくつか例があるらしい。見た目は……』

その時東さんが言っていた見た目と、今ボク達が目にしている犬達の容貌は完全に一致している。
つまり、感染犬。

ボク達は動けなかった。指一本動かせば、その瞬間に感染犬達が襲ってくる直感でわかったからだ。

美里さんは携帯無線機を掴んだまま、軍司は拳銃を抜く直前のポ-

ズのまま固まっている。ボクもFNハイパワーの収まるホルスターに手を掛けたまま、動けない。一秒が何十倍の時間にも感じられる。

やがて耐え切れなくなったのか、ボク達と一緒にいた少女が泣き叫び、そして刑務所に向けて走り出した。それが引き金となり、他の子供達も泣いたり叫んだりしながら、感染犬のいる方向とは逆、刑務所に向けて駆けだす。同時に感染犬達も襲い掛かってきた。

「皆逃げて！早く！！」

美里さんがそう言って、P220拳銃を抜く。軍司もM92Fを抜き、犬目がけて撃っていた。

暗闇が銃火で明るく照らし出され、飛びかかってくる犬達の姿が映し出される。犬達の吠える声、子供達の泣き叫ぶ声と共に、戦闘は始まった。

『おいどうした。何があった　　！？』

美里さんが取り落とした無線機から兵士の声が聞こえてきた。しかしそれを拾って答える暇はない。そんな事をしていたら、あの鋭い牙が身体につきたてられてしまう。

ボクもハイパワーを抜き、飛びかかってくる犬を撃った。3発連射し、一発がボクめがけて走ってくる犬に当たる。「キャン！！」と悲鳴を上げ、犬がひっくり返った。

続いて別の犬を狙おうとしたが、小さい上に俊敏な犬達を狙うのは容易では無かった。しかも拳銃は威力が弱いし、ウイルスは痛覚を鈍らせる効果を持つ。拳銃はお守りにしかない。

ボク、軍司、美里さんはそれぞれ拳銃を撃ちながら、刑務所へ走る

子供達を援護する。子供たちに飛びかかろうとする犬がいれば、真っ先に射殺した。
劣勢であっても、撃ち続ける事が重要だった。撃っていれば犬はひるむかもしれないし、銃声に気付いて増援が来る。

装填された13発を撃ち尽くし、空の弾倉を排出し別の弾倉をポーチから引き抜く。素早く弾倉をグリップに挿入し、スライドストップを下げたスライドが前進する。これで再び撃てるようになった。飛びかかってきた犬の一体を空中で射殺したものの、死んでも犬が止まる事は無かった。犬は撃ち殺された姿勢のまま、ボクめがけて突っ込んできた。

慌てて横に移動し、飛び込んできた犬の死体をよける。すると、地面に叩きつけられた死体を飛び越えて、新たな感染犬がボクに飛びかかってきた。いきなりの事だったので対応出来ず、とっさにハイパワーを握った右手を突き出して防御する。
犬はボクに突っ込んできて、背後にあった木に叩きつけた。背中が勢いよく木の幹にぶち当たり、一瞬呼吸が出来なくなる。

犬はボクの右手に噛みつこうとしたので、慌ててハイパワーをその口に突っ込んだ。引き金を引こうとしたが、犬の牙が手に触れそうになり、思わずハイパワーから手を離してしまった。ウイルスは唾液からでも感染するので、その恐怖からの行動だった。

犬はボクから奪い取ったハイパワーを、首を大きく振って放り投げた。がしゃつと音を立てて、ハイパワーが遠くへと落下する。

だがボクには、もう一つ武器があった。ベルトに下がったケースから取り出したのは、いわゆるスタンロッドというものだった。

見た目は警棒だが、グリップにあるボタンを押すことで殴った際に相手に電流が流れる代物だ。ボクはスタンロッドを構え、グリップのボタンを押す。

飛びかかろうとしてきた犬を、スタンロッドを胴体の横から叩きつ

ける。犬の身体に電流が流れ、犬が地面に崩れ落ちる。その瞬間を見逃さず、すかさず頭にスタンロッドを叩きつけた。鈍い音を立てて、犬の頭がい骨が陥没する。一回大きく犬の身体が揺れ、それから痙攣を始めた。どうやら死んだらしい。

周りを見ると、騒ぎを聞きつけたのか刑務所の方が慌ただしくなっている。監視塔のサーチライトが照射され、ボク達を照らし出す。どうやら子供達は逃げ切ったらしい。

「大丈夫か！？今助けるぞ！！」

そう言つて駆けつけてきたのは内田さんだった。内田さんは地面にしゃがんで片膝を立てると、手にした64式小銃で動きまわる犬達を狙撃しはじめた。老人とはいっても、狙撃の腕は衰えていないようだった。その証拠に、内田さんが一発撃つ度に犬達が倒れている。大口径のライフル弾は犬に有効のようだ。

『優、軍司、美里さん、下がれ！迫撃砲を撃つ！！』

スピーカーを通した大きな声が聞こえ、ボクは慌てて軍司と美里さんの腕を掴み、内田さんの居る場所へ走った。何体か追いつがってきたが、軍司がM92Fを連射して射殺する。

ボク達が倒れ込むようにして内田さんのそばに到着した直後、空気を切る音がして、直後にさっきまでいた場所が爆発した。迫撃弾が着弾したのだ。

破片が飛散し、犬達が引き裂かれてズタズタになる。迫撃砲は数発撃ちこまれ、さっきまでボク達が戦っていた場所には大きなクレーターが出来た。

それでも何体かまだ犬がいたが、刑務所からやってきた兵士達が残りを射殺した。ベネリM4散弾銃が火を噴き、散弾で犬が次々倒れ

ていく。

犬達はどうかやら全滅したらしい。陽は完全に落ち、暗視装置を装着した兵士達が犬の残りがいないか辺り一帯を搜索する。もし残っていたら厄介なことになる。

美里さんは戦闘が終わると地面にしゃがみ込んでいた。軍司は肩をかそつとしたのか、美里さんの隣にしゃがみ込み、そして。

「・・・マジかよ」

軍司のうめき声が聞こえた。振り返ると軍司が懐中電灯で、美里さんの右腕を照らし出している。

そしてその上腕部、白い肌には、犬が咬んだ痕が残っていた。皮を浅く裂き、血が滴っている。

数日もすれば治るような傷だが、問題はそこでは無い。

咬んだのが、感染犬なのが問題なのだ。

「……………」

美里さんが、茫然と呟くのが聞こえた。

第132話 side 優 「感染犬」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

美里が感染犬に咬まれた。

俺はその事を聞くと、すぐに福田の実験室へと向かった。どうやら美里は農作業の帰りに感染犬の集団に襲われ、子供達を逃がすために戦っている最中に咬まれたらしい。

咬まれた時刻は夕刻だったらしい。まだ日が出ていたので油断していたそうだ。そして日陰を移動してきた感染犬に襲撃を食らった。

「クソッ!!!」

俺は走りつつ、そう罵っていた。何も出来なかった自分に対して、だ。

美里達が襲撃を受けた時、俺は自室で就寝中だった。銃声で目が覚めたが、俺が到着した時にはすでに美里は咬まれていた。

感染犬の集団は掃討が完了した。しかし美里が咬まれた事によって、刑務所内には動揺が広がっている。

中庭を駆け抜け、軍の管理棟へと向かう。司令部や武器庫、そして実験室などが入っている棟だ。通信を聞いている限り、咬まれた美里はそこへ移され、厳重な監視下に置かれているようだ。

一般人だったら厳重なチェックを受けるところだが、俺は軍人だったので、入り口から内部に問題なく入る事ができた。福田の地下研究室ではなく、囚人を使つての実験を行っていた地上の実験室に美里はいるらしい。

実験室の前には警備の兵士が2人立っていた。どちらも小銃に弾倉を装着した状態で、扉の脇に立っている。迷わず実験室に入ろうとすると、兵士らに呼び止められた。

「失礼ですが、現在立ち入りが禁じられています」

「何を言ってるんだ？俺は関係者だ」

「東二曹も入れるな、と福田博士からの命令です」

俺は頭に血が上った。美里が咬まれた事により、冷静さを欠いているのかもしれない。

「ふざけるな！美里が、美里が咬まれたんだぞ！俺には会う権利があるはずだ！」

「だーから、駄目だって言ってるじゃん」

思わず俺が警備兵に怒鳴っていると、いきなり福田が現れた。いつもの白衣に加え、手術用のゴム手袋なども装着している福田は、今まで囚人に対して行ってきたような実験の時と同じ格好をしていた。そして福田は、いつものように感情を感じさせないような表情をしている。まるで俺を見下すようなその視線に、俺はキレた。

福田の襟首を掴み、壁に叩きつけた。さすがに警備兵もまずいと思っただの俺を止めようとしたが、福田がそれを手で制した。

「てめえ・・・、こんな状況でもそんな態度をとるのかよ！」

「ああそつだよ。僕は冷静なのが長所の一つだからね」

「なんで美里に会ってはいけないんだ！あいつは俺の恋人なんだぞ！」

「だから？」

福田は一言だけ、そう言った。

「恋人だから何？まさか龍は、自分の彼女が咬まれたからルールを破って会おうとしてるの？軍人失格だね」

「俺はそんな事言つてない！」

「言ってるね。いつもは冷静で、どんな命令にも黙って従う龍がこんなになるなんてね」

福田の冷静な言葉に、俺の腕から力が抜けていく。襟首を掴んでいた手を離し、福田は自由になった。

乱れた白衣を整えつつ、福田は更に続ける。

「あのねえ、君も今まで散々囚人を実験台にしてきただろ。直接手を下したのは僕だけど、君も色々と強力してくれたよね。それなのに自分の彼女が実験台になりそうになったら暴れる？ハッ、笑えるね」

「・・・実験、だと？」

「そうだよ。感染犬に咬まれた人間のデータはまだ採ってない。絶好の機会だよ。だから邪魔しないでね、詳細なデータを採らなくちゃいけないから」

福田はそう言い、実験室の扉に手を掛けた。

「それに、感染した人間の扱いは僕に一任されている。これは君達軍人が従うべき政府が下した命令だ。だから僕が仲原を実験台にしようとして解放しようと、どんな行動を取ってもそれは正しい事になる。ま、感染した人間を解放したらどうなるか、龍は言わなくてもわかるよね」

「・・・」

「『たとえ親しい人間であっても、咬まれたら容赦するな』。これは鉄則だよ。ここは僕が指揮する場所だ。だから君が仲原に会おうとするのは命令に反する行為だ。それに・・・」

そこで一呼吸おいて、福田は続けた。

「今まで散々実験で人を殺してきたのに、親しいからって理由で仲原を特別扱いするのって、おかしいよね？」

福田はそう言っつて、実験室に入っつて行つた。警備の兵士にも手伝わせる事があるらしく、俺は廊下に一人取り残された。

「本当にすまない。もっと警戒を厳重にしていれば・・・」

一階のロビーにあるソファーに座りこんだ俺に、通りがかった大山二尉が頭を下げてきた。警戒不十分がこの事態を招いたと責任を感じているようだ。

「・・・いえ、相手は小型ですから。センサーとかに引つかからなくて当然です。それに無人偵察機が接近を感知しても、ただの犬と誤認したでしょう。近寄らなければわかりませんよ」

俺はそう言つた。本心からそう思っている。

今まで俺達は感染犬に遭遇したことは無かつた。その存在は聞いた事があつたが、実際に遭遇してみなければ普通の犬との違いなんて

わからない。

それに相手は犬が変化したものだ。無人偵察機がその姿を捕えたところで、移動方法などは普通の犬と変わらないのだから判別は難しい。ダークシーカーズは人間が変化したものだ、四つん這いで走る事も多いし、何より集団で走っていけば目立つ。

大山二尉はまだ何か言いたそうだったが、俺に頭を下げ、去って行った。

続いてやってきたのは優と軍司だった。優は泣きながら、俺に頭を下げた。

「ごめんなさい。ボクがもつとしっかり戦っていれば、美里さんは咬まれずに済んだのに・・・」

「僕もそうです。自分の力不足でした。本当にすいません」

俺は下げられた優と軍司の頭を撫でてやりながら、

「いや、いいんだ。お前達は自分のすべきことをしただけだ。お前達が戦ってくれたおかげで子供達は助かったんだ。だから責任を感じるのは間違ってる」

そう言いつつも、俺は頭の中では正反対の事を思っていた。

もつとお前達がしっかりしていれば、美里は咬まれずに済んだ。子供達を助けようとその場に踏みとどまらなければ、逃げ切れた・・・。

そんな事は思っではいけない。その事くらいわかっている。美里が咬まれたせいで俺も不安定になっているのだ。だからそんな事を考えてしまうのだ。

最後にやってきたのは内田さんだった。内田さんは俺の隣に座り、話しかけてきた。

「君は、仲原君に会いたいか？」

「・・・そりゃあ会いたいに決まってますよ。せっかく仲直り出来たのに、これからいい思い出を沢山作っていこうって思ってたのに・・・」

「じゃあ何故会いに行かない？」

「・・・俺は軍人です。上官が会ってはいけないって言ったら会っちゃいけないんです。自衛官だった内田さんだってわかるでしょう？それに美里に会うってのは私事です。軍人は私情で動いちゃいけない」

俺の言葉を聞いた内田さんは、遠くを見るような目をして言った。

「ワシは4年前、妻を亡くした。銀行強盗をやらかした連中が、逃走途中に警察に追い詰められ、ワシらの家に逃げ込んできたんだ。ワシはその時納屋にいて、運よく気付かれなかった。でもばあさんが人質に取られてしまった」

俺は驚いた目で内田さんを見た。内田さんは物悲しそうな目で俺を見て、続ける。

「たまたまワシは無事だった。だが人質になったばあさんは撃たれた。ワシは助けを呼ぼうとしたが、携帯電話なんて持っていなかった。他の家に行こうにも、家の外は強盗が見張っていて納屋から出られなかった」

「・・・それで、どうしたんです？」

「何も出来なかった。何度もばあさんを助けにと外に飛びだそうとした。でも出来なかった。怖かったんだ。昔は自衛官だったのに、飛び出たら撃たれる。死ぬのはいやだ。そう思ってる内にはあさんはどんどん弱っていった。警察が家を包囲して、特殊部隊が突入して強盗たちを射殺した時、ばあさんは既に息をしてなかった」

そう言う内田さんの目から、涙が流れていた。床に点々と涙を零した内田さんは、俺を見て言った。

「ワシがばあさんを殺したんだ。もしあの時警察が来る前にはあさんを助けに行っていれば、ばあさんは助かった。いや、納屋から飛び出て通報するだけでも、結果はかなり違ってた」

「でも、相手は銃を持ってたんでしょう？元自衛官でも危険ですよ。一歩間違えればあなたが死んでいた」

「それでも、大切な人の為に行動して死ぬのは、何もしないで相手を見殺しにするよりはマシだ。ワシは臆病だった。恐いから言い訳を心の中でして、何もしなかったんだ。その結果、ワシは大切な人を失った。仲原君はウイルスに感染したのかもしれないだろうか？だったら何故君は会いに行かない？何故人間でいられる残り少ない時間を、彼女と一緒にいてやらないんだ？」

内田さんの問いかけに、俺の心の中で何かが動いた。

美里はいずれダークシーカーになる。多分今は、実験室に監禁されているだろう。人間でいられる残り少ない時間を、恐怖のまま終わらせていいのか？

美里がダークシーカーとなれば、福田は実験を行うだろう。今までそうしてきたように。そうしたら、美里は死ぬかもしれない。

美里が咬まれてから、大分時間が経っている。残り時間は少ない。

俺は立ち上がった。

「内田さん、ありがとうございます。おかげで俺は、自分がどう行動すればいいのかわかりました」

「ああ、そうか。なら気をつけるんだぞ」

俺は自分の部屋へ走りはじめた。そして内田さんは、黙って俺を見送ってくれた。

命令がなんだ。上官がなんだ。軍人がなんだ。大切な人間が消えようとしているのに、そんな立場は関係ない。その人が幸せな最後を迎えられるようにするのが筋つてもんだろ。

だったら俺は全力で美里に会いに行く。そして彼女と最期の時間を共有する。

今まで殺してきた囚人やダークシーカーズ？そんなん知るか。彼らは俺の大切な人間じゃない。美里とは違う。

美里は俺の大切な人間だ。大切な人間を守りたいから、俺は軍人になったんだ。

俺は既に、自分がどう行動すべきか分かっていた。

自室に戻った俺は、ベッド脇のロッカーを開いた。ロッカーの中には予備の迷彩服や私服がハンガーに掛けられており、そしてその脇にG36Cライフルが弾倉を外した状態で立て掛けてあった。

銃器が個人の部屋に持ち込まれているのは、今が非常時だからだ。通常は武器庫で管理するところだが、緊急事態が発生した時に一々武器庫まで行くのは時間がかかるからだ。その間に被害を拡大させるより、個人で管理してもらった方が色々と便利だと判断しているらしい。

俺は迷わずG36Cを手を取った。別の棚から30発装填の弾倉を

取り出し、装着する。他にも防弾チョッキやヘルメットなどを手早く身につけて行き、あつという間に俺はいつでも戦闘できる格好となった。

部屋の扉に手を掛けた俺は、大きく深呼吸した。

これからする事は、確実に命令違反だ。それどころか軍法会議ものいや即刻射殺されたって文句は言えないことだ。

だがそれよりも、俺は美里に会いたい。せつかく仲直り出来たんだから、最後まで一緒にいてやりたい。

射殺されたっていい。だがそれは美里がダークシーカーになった後だ。

俺はドアノブを下げ、部屋から飛び出して行った。

第133話 side 龍 「決意 1」 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

武器を手にした俺は、まっすぐ美里のいる実験室に向かった。今は総動員体制なので殆どの人員が武器を携行しており、ライフルや拳銃を持って居住区画を出た俺を不審に思う者はいなかった。

居住区画の棟を出て、実験室のある研究棟へ向かう。入り口には歩哨が立っており、案の定呼び止められた。

「二曹、どんな用件ですか？」

「福田に呼ばれた。聞いてないのか？」

そう訊くと、歩哨は「福田博士の命令ですか、わかりました」と言っ
て俺を通してくれた。俺と福田の関係は殆どの人間が知っているから、俺が福田から直々に命令が下っていても不思議ではないと思っ
ているのだろう。実際、他の兵士とは異なる指揮系統で福田から命令を受けた事が多々あるから、そう思っても仕方ない。

だがこれで、強行手段を取らずに済んだ。もし歩哨が福田に確認を取
取ったら、その時点で彼に銃を突きつけ、その上で拘束しておかな
ければならなかった。

研究棟には人の姿が見られなかった。誰にも呼び止められないのを
良い事に、俺は実験室まで進んで行く。

実験室の扉の前には、先程までいた歩哨はいなかった。きつと中で
福田の手伝いをしているに違いない。

俺は大きく息を吐いた。

これは重大な命令違反だ。その場で射殺されても文句は言えない。だが、この機会を逃してしまつては、美里が人間である内に会えなくなつてしまつたろう。そして、俺は一生後悔する。だから、命令違反でも何でもして、今の内に美里に会わなければならぬ。

俺は意を決して、実験室のドアを開けた。

中には数人の研究者と兵士、そして大山二尉と福田がいた。彼らはモニターを覗きこみ、そして彼らの前にあるガラスを隔て、美里がベッドに拘束されているのが見えた。

ドアの開いた音で室内にいた全員が振り返り、そして俺は叫んだ。

「動かないでください！全員武器を床に下ろして！！」

そう言いつつ、G36Cの銃口を彼らに向ける。大山二尉達は一瞬何が起つたか分からないようだった。そして福田はというと、あいかわらずの無表情。

「東二曹、一体何を・・・？」

「いいから言うとおりにして下さい！！」

口を開いた大山二尉に、俺は銃口を向けた。俺の剣幕に押されたのか、やがて次々と兵士達は床に銃を置いていく。

それらを俺の許へ蹴つて寄越させ、それらを回収した後に俺は美里が居るガラス戸の向こうへと足を踏み入れた。

「二曹、何をしているんだ！？これは重大は軍規違反だぞ！」

「わかつてます。でも、美里に会うにはこうするしかないんです！俺は美里と最期の時間を共有したかったのに、あなた達がそれを許してくれない。なら命令違反でも軍規違反でも何でもやるしかない」

福田は相変わらずの無表情で言った。

「そんな事やっても無駄だって、僕は言わなかったっけ？」

「黙れ！」

俺はそう言って、扉を開けてベッドに拘束された美里の傍に行く。ドアは内側からカギがかけれないので、床に置いてあった工具箱の中からバールを取り出し、ドアのレバーに引っかけて開かないようにした。

すぐさま大山二尉達はドアを開けようとしたが、ロックされているので開かない。バンバンとドアをたたき音が出た後、「バーナー持ってこい！」という声が出た。

「龍くん、何やってんの!？」

「美里に会いに来たんだ」

「命令違反なんですよ!？だったら駄目だよ、今すぐ戻って！」

「いやだ!せつかく仲直りしたのに、ずっとお前と一緒にいたかったのに。なのにお前は咬まれたんだぞ!もう人間でいられなくなるかもしれないのに、何で最期の時間を共有する事すら許されないんだ!！」

美里の拘束を解こうとしたが、金属製の腕輪はがっちり和美里の腕に嵌められていた。拘束を解くのを諦め、残り少ない時間を彼女と過ごす事を優先する。

美里の腕にはいくつものチューブが突き刺さり、電極などがモニタに繋がっていた。その様子が痛々しく、俺は目を背けてしまう。

「本当に、今まで悪かったな。俺がもっとしっかりしていれば、も

つといい時間を過ごせたのに……」

「ううん、龍くんは悪くないよ。わたしがワガママとかばかり、自分のことばかり考えてたからこうなっちゃったんだよ」

そう言う美里の目から涙がこぼれおちた。

キスしたいな、とも思ったが、今の美里は感染している。ウイルスは体液を通して感染するので、キスすれば俺も感染してしまう。そして自分を優先してしまう事に気付き、自分を殴りたくなる。

扉の向こうが慌ただしくなってきた。バーナーを使って扉を口ツクするバールを焼き切ろうとしているのか、扉の隙間から炎が噴き出てバールを熱する。

俺達に残された時間は残り少ない。そう悟った俺は最後にかける言葉を探した。しかし、何も見つからない。

「本当に、済まなかった……」

俺がそう言うのと同時に、バールが焼き切られ、扉が大きく蹴られて開いた。ドアの向こうから突撃銃や散弾銃を構えた兵士達が突入り、俺と美里に銃口を向けてくる。

抵抗してどうにかなるものではない。俺は大人しくG36CとP226、そしてさつき大山二尉達から回収した銃器を床に置き、両手をあげる。

すぐさま俺は床に組み伏せられた。右腕をねじり上げられ、うめき声をあげる。

そしてそんな中を、悠々と福田が歩いてきた。福田は床に押し倒されている俺を見下し、そして言った。

「だから無駄だって言ったじゃない」

俺は目だけを福田に向け、呻いた。

「うるせえ、俺は美里と一緒にいるだけでよかったんだ。何でお前は俺達と一緒に居させてくれなかったんだ!？」

「だって、データ採ってなかったもん。君に邪魔されたくなかったんだよ」

「んだと、この野郎・・・」

立ちあがって殴りかかろうとしたが、屈強な兵士に組み伏せられているので動く事すら出来ない。そんな俺に向けて福田は続けた。

「仲原は発症しないから、僕は会いに行っても無駄だって言ったんだけど」

その言葉に、室内にいる全員の動きが止まった。「はあ？」とでも言うかのように、全員が福田の方を見る。

どういう事だ？美里が発症しないって？嘘だ、咬まれた人間は全員発症し、ダークシーカーになる。ウイルスが変異した今では、以前のワクチンを打った兵士すらダークシーカーになる。その証拠に古橋はダークシーカーになり、そして今に至るも戻ってはこない。

「・・・どういう事だ博士？わたし達は何も聞いてないぞ」

大山二尉が訊いたが、相変わらず表情を変えずに続ける。

「仲原が咬まれてからこの1時間、ずっと彼女の血液中のウイルスの数をモニターし続けてきた。10分ごとに採血してるけど、その度に血液中のウイルス数は減っていった」

「それは彼女の抵抗力が強いだけなのでは？」

「いいや、違うね。減るっていうか、どんどんウイルスが死んでいつてる。ただ抵抗力が強いだけではこうはならない。そもそも感染した人間は、あらゆる環境下で1時間ともたずに発症する。彼女が咬まれてから、今どんだけ経った？」

その言葉で全員が腕時計を見る。美里が咬まれてから、既に1時間20分が経過していた。

なのに美里は、顔色一つ悪くない。古橋は咬まれてから数分で顔が真っ青になっていたのに、それすら美里には見当たらない。

美里は健康な人間そのものだった。

「仲原にはウイルスが効かない。それどころかウイルスを殺し、更には無力化する体質なんだ」

「・・・つまり、彼女の血から血清が出来るか？」

「大正解！！彼女の血を研究すれば、治療薬やワクチンが出来るだろうね。つまり彼女は人類の救世主になりえるのさ」

何だ、そりゃ・・・。

俺はそれを聞いて、全身の力が抜けていくのを感じた。

じゃあ、俺が美里に会いに行こうとした事すら、それは無駄だったのか？そもそも美里は発症しないから、最期の時間なんてない。

じゃあ福田は、俺が皆に銃突き付けて、美里に会いに行った事すら無駄な事だと知ってたのか・・・？

「・・・クソツタレ、いつか一発殴ってやる」
「おー怖い怖い。その日を楽しみにしてるよ」

俺は両手を掴まれて立たされた。牢屋に連れて行かれる俺を見て、福田が大山二尉に言う。

「あーそうそう彼僕の親友だから、銃殺刑とかなナシね。せいぜい営倉行きでよろしく」

大山二尉はそれを聞いて、俺を10日間の営倉行きという処分を下した。皆に銃を突きつけて反乱同然の行為をしたにしては、驚くほど軽い処分と言っている。しかし誰も傷つけてはいないから、この程度の処分だとも考えられるが。

実験室から連れ出される俺に、ベッドの拘束を外された美里が声をかけた。

「龍くん、ありがとう。こんな状況でわたしに会いに来てくれるなんて、うれしいよ」

大きな音を立て、営倉の鉄格子が閉まった。営倉は元々あった収容房をそのまま流用したもので、室内は暗く、固いベッドと洗面台、そして便器が据え付けられているだけの殺風景な部屋だ。全ての武装と装備を取り上げられた俺は、固いベッドに横たわった。そしてコンクリートが打ちっ放しの天井を見て思った。

美里がこの世界を救う。彼女の血からは治療薬とワクチンが出来る。俺は危うくその機会をフイにするとこだった。

美里は自由の身になり、今後は研究に協力させられるのだという。

一方俺は菅倉送り、10日間は出られない。

でも、それはそれでいい事だと思った。少なくとも美里がダークシ
ーカーになる姿を見たり、福田の実験で殺されるより、何万倍もマ
シな事だ。

俺は心の中に溜まっていた何か重い物が、すうっと消えて行くのを
感じた。俺は目を閉じ、そして固いベッドの上で眠りについた。

第134話 side 龍 「決意 2」 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第135話 番外編 「死のフェリー」 (前書き)

今回は珠鋼さんという読者の方から頂いたキャラクター案を使って番外編を書かせて頂きました。結構設定を変更したりキャラを深く掘り下げられなかった面があります。珠鋼さん、申し訳ありません！！

第135話 番外編 「死のフェリー」

2018年5月18日 22:00

瀬戸内海

周防大島沖

フェリー「飛翔号」内

side

海兵隊第6師団強襲偵察隊

第1小隊所属

さかまち 坂町 かいと 海斗海兵二曹

状況は最悪だった。船内のあちこちで感染者がうるつき回り、人間を襲っている。悲鳴や感染者の唸り声が階層を隔てていても聞こえて来る。

俺は、部下を二人連れてこのフェリーの操舵室に向かっていた。先程操舵室の船員から救援を求める船内放送が入ったのだが、直後に絶叫と共に途絶えた。

仮にこのフェリーの操舵室が感染者に占拠されたなら、フェリーはコントロールを失って暴走を始めてしまう。それだけはなんとしても阻止しなければならぬ。

「沢霧は前衛だ。生駒、お前は真ん中で、俺が後衛につく」

そう言うと、ベネリM4散弾銃を構えた沢霧三曹が前に出た。09式小銃を持つ俺と生駒三曹ではとっさに感染者が飛び出してきても、一撃で倒す事は出来ない。

水密戸を開き、右舷甲板に出る。まっすぐ前部甲板に向かい、途中のドアから操舵室に向かえる。ついさっきこのフェリーの船内図を見たばかりだから、今でもきちんと隅々まで覚えている。

右舷甲板には感染者はいなかった。転落防止の手摺りの外には大海原が広がっている。東の方角に目を向ければすぐそこに二神島、さらに前を見ると、愛媛県の海岸から発せられる町の明かりが目についた。

だが見とれている場合ではなく、目的地の操舵室に向かう。狭い甲板を、3人で無言のまま前進していく。

甲板のあちこちに水溜まりが出来ている。小銃のフラッシュライトで照らしてみると、その液体は真っ赤だった。近くには肉片が散乱している。

潮の香りを掻き消すほど、周囲に鉄の臭いが漂っている。それらから勘案するに、甲板にぶち撒けられている液体は、人間のものだろう。まさかこんな非常時に、赤いペンキを船体に塗る奴がいるとは思えない。

見なければよかったと後悔したが、それは多分、今ここにいる全員が思っているだろう。本来ならこのフェリーは安全だったはずだ。それが何で、こんな事に……。

そんな思考も、操舵室に通じる扉が見えてきた事で打ち切った。あ

の扉から船内に入り、すぐ脇にある階段を上ればそこに操舵室がある。

沢霧が片手でM4を構えつつ、扉を開く。船内のこの階層には、まだ感染者は来ていないようだ。感染者は乗客が多く乗っている、船室の方を先に襲っているようだ。

そちらの方には別の隊員達が向かっている。一人でも多く民間人を救出できればいいが。

船内に通じる扉のすぐ隣にある階段を上っていく。船内には煌々と明かりが点っているので、感染者が近づいて来てもすぐにわかるはずだ。

階段を上りきり、階段と操舵室を隔てる扉の前に俺達は立った。生駒が後方を警戒するなか、念のため無線でもう一度操舵室の船員を呼び出した。

しかし、返ってくるのはノイズだけだ。無線機が壊れているだけならいいが、俺達としては最悪の事態を想像せざるを得ない。

今度は俺が、扉を開けた。

すぐに、俺の予想が当たっていた事がわかった。

操舵室内を、いくつもの人影が蠢いていた。天井の蛍光灯が、それらの正体を照らしている。

それらの人影は、普通の人間ではなかった。口の周りを血で真っ赤に染め、顔が異様に青白く、頭髮が大分抜け落ちている。

クリピン・ウイルスに感染した人間の末路だ。

操舵室の床のあちこちに、感染者と化す前に死亡した船員の死体が

転がっている。操舵室をうろつく感染者の中に白い制服を纏った船員姿の感染者もいる。ただし、その制服は血で赤く汚れていたが。

おそらく操舵室に感染した人間が入り込み、そこで発症した。船員達は次々と咬まれ、操舵室には俺達が到着する大分前に、感染者と死体しか残っていなかったのだ。

そしてその感染者達が、ドアが開いた音で俺達の方を一齐に見た。目と目が合い、そして次の瞬間、停止したビデオを再生したかのようになり、感染者が飛び掛かってくる。

「撃て！撃つたら後退しろ！！」

俺は叫び、同時に全員が発砲する。操舵室内を銃声と硝煙が見たし、場違いな事に、俺はなぜ自分がこんな所にいるのかを考えていた。

30分前、愛媛県にある海兵隊基地を出撃した俺達は、ヘリでいる一路瀬戸大橋へと向かっていた。本州全土でクリピン・ウィルスの感染者が大発生しており、急速に治安が悪化。

政府と軍、警察は即座に避難計画を実施した。本州の空港や港湾には軍が展開し、避難民の輸送を開始。本州と他の地域を繋ぐ橋には検問が敷かれ、感染者が本州から出ることがないように避難民に検査を実施している。

俺達の分隊も、瀬戸大橋を警備をサポートするために本州へと向かっていた。しかしその途中で瀬戸内海を航行中の船舶からSOS信号を受信、急遽行き先を変更し、救難信号を発信したフェリー「飛翔号」へと向かった。

飛翔号は、本州からの避難民を乗せて四国へ航行している途中だった。俺達が飛翔号にロープ降下すると、船上は異様な静けさに包まれていた。

分隊長の榊原含めた5人と、俺、沢霧、生駒の3人の二手に別れ、船内を探索したが、船内で見たのは予想通りで最悪な光景だった。

船内に隠れていたのか、検疫が不十分で乗っていた避難民が発症したのかはわからなかったが、飛翔号は感染者の巣窟と化していた。あちこちから生存者の悲鳴が聞こえ、乗り込んでいたらしき海上保安官の発砲音がわずかに響いていた。

俺達が降下し救助が来たと思ったのか、唐突に船内放送が繋がり、船員が今いるという操舵室に来るように求められた。事前にヘリの中で確認した船内図を頼りに操舵室に向かっていったのだが、途中で船内放送は絶叫と共に途絶えた――。

んで、最初に戻る。操舵室に着いたはいいものの、そこも既に感染者で溢れかえっていた。

どうにか操舵室を離れた俺達は、とりあえず集結場所に指定された二等船室に向かった。二等船室は船内に入って2階にある。

二等船室は名前の通り、二番目に金がかかる船室だ。一等は個室、二等は二段ベッドが2つ並ぶ部屋。三等は畳が敷かれて雑魚寝するような大広間だ。

俺達が指定された二等船室に向かうと、そこには分隊の他の隊員が

集まっていた。救助したのか、民間人も10人ほど部屋の隅に固まっている。

「遅いですよ、二曹」

同じ分隊に所属する桐沢きりさわ 神無かんな三曹がぼやく。プライベートでは仲がいいが、今は任務中なので階級で呼び合い、敬語もちゃんとしている。

そりゃあ悪かったなと心の中で呟きつつ、船室の中を見回す。どうやら飛翔号に降下したこの分隊員は、全員無事に集合出来たようだ。

「操舵室はどうだった？」

榊原さかき良平ひろし海兵曹長いへいそうが質問してきた。榊原はこの分隊の最上級者であり、フェリーに降下してからは他の分隊員を連れて船内で生存者を搜索していた。

「ダメです。操舵室は感染者で溢れかえってる。下手に突っ込めば全滅してしまいます。機関室の方はどうです？」

「機関室もダメよ。パニックに陥った民間人が中に立て籠もった拳げ句に発症したみたいで、ドアが全然開かない。下手に爆薬で吹っ飛ばす事も出来ないし」

分隊長に次ぐ上級者である榊原さかき千歳ちとせ一曹が答えた。分隊長と名字が同じなのは、実は二人が兄妹だからという噂がある。噂は噂なのでどこまで信憑性があるかはわからないが、セクハラ一歩手前まで一曹にべったりしている分隊長を見ていると、妙に説得力がある。

どうやら分隊長達は操舵室からの連絡が途絶えた後、機関室に向かったようだ。俺と同じ事を考えていたらしく、機関を強制的に停止

させてフェリーの暴走を防ごうとしたらしい。
だが機関室の扉は内側から固く閉ざされていた。ドアを爆破しようにも、下手したらこのフェリーごと沈む羽目になってしまう。

「フェリーの現在位置は二神島沖3キロ。このフェリーは毎時10ノットで南東方向に進んでいます。このまま進んでいけば、2時間後には愛媛県に着きます」

ノートパソコンのキーボードを叩きつつ、木村きむら 響華きょうか三曹が言う。
パソコンの画面には四国を中心とした地図が表示され、赤い線が四国に向けて走っている。この赤い線はフェリーの航路だ。

木村が早送りボタンを押すと、赤線が勢いよく四国へと伸びていく。2時間が経過したのち、赤線は愛媛県沿岸に突き刺さった。

「ヤバいわね……。仮に感染者を乗せたまま海岸に座礁すれば、四国にもウイルスが広がっちゃう」

「木村、海流とかを考慮して、このフェリーが太平洋に出るってことはないのか？」

神無が呻き、分隊長が木村にきく。また木村がキーボードを叩いたが、シミュレーションの結果フェリーが太平洋に出る事はない。

それどころか海流によってフェリーが九州沿岸に漂着する可能性も出てきた。四国も九州も今のところ感染者の数は少なく、軍や警察によって排除されつつある。

そんなところに感染者を満載したフェリーが漂着すれば、予想外の場所から感染者が出現する事になってしまう。そうなれば軍や警察の対応は後手後手に回り、その間に安全地帯が汚染されてしまう。。。

つまり、この船をここで停止させるか、俺達がコントロールを回復

させるか、あるいは沈めるかしない限り、更に感染者が広がってしまふのだ。

船室を重苦しい雰囲気、不安になったのか救助された子供が泣き始め、若い母親が子供の頭を撫でて落ち着かせる。救助された民間人は10人、彼らを脱出させる事が最優先なのだが……。

そこまで考えて俺はぞっとした。救助された民間人は10人。このフェリーの乗客は500人。本州を脱出した民間人を多く乗せていたので、少なくとも600人はこのフェリーに乗っていただろう。その中の10人しか今のところ救助されていない。残りの500人以上はどこに行った？

半分が死んだとしても、200人以上が感染者となった計算になる。狭い船内で200体もの感染者に襲われたら、あっという間に全滅だ。

感染者はまるで猛獣のような運動能力を持っているという。3週間前にマリシティで感染者に遭遇したという軍の友人は、ライオンとチーターとヒョウとグリズリーが人間の形をしているようなもんだと言っていた。つまり、凶暴で運動能力に優れ、しかも死にくいということだ。

「どうします？ 操舵室に行きますか？」

「アホか。途中で感染者に遭遇したら、その時点でアウトだ。第一、感染者を乗せた状態でどこに向かう？」

「……沈めるしか、ないですね」

俺が溜息をつくのと、無線機に通信が入ったのはほぼ同時だった。その通信は、愛媛県沖を航行中の海軍護衛艦「あいづ」から入ったものだった。

内容は、なぜフェリーから救援信号が発せられたのか原因を知りた

いということだった。分隊長がフェリーは感染者で一杯だと答えると、唐突に通信が別の相手に切り替わった。

『こちらは統合作戦本部の河内准将だ。ただいまそのフェリーを撃沈することが決まった』

「はっ！ですが、このフェリーにはまだ民間人も残っている可能性が……」

『残念ながら、15分以内にそのフェリーは沈む。これ以上安全な場所に、危険なウイルスを蔓延させるわけにはいかないのだよ』

河内准将は今いる民間人だけを連れ、フェリーから脱出せよと命じた。15分以内に、護衛艦あいづがフェリーを沈めるといったことだった。

悔しいが、俺達は脱出せざるを得なかった。准将は15分が経過すれば、俺達が乗っていてもフェリーを撃沈すると宣言している。四国や九州にいる人間の数を考えれば、今ここで沈めるしかない事もわかっていた。

通信を終え、俺達はフェリーから脱出するために後部甲板にある救命ボートに向かうことになった。生存者の救助を断念し、10人の民間人を囲んで移動する。

一階ロビーに降りると、そこには感染者の集団がいた。

「全員、撃って撃って撃ちまくれ！民間人に感染者を近づけるな！」

分隊長が叫び、一斉に各々の銃が火を噴く。何体かが倒れたが、残りの感染者が俺達に飛び掛かってくる。

ワクチンを打っていない民間人は、感染者に噛まれたらアウトだ。

俺達は盾になるように戦い、そして後部甲板の救命ボート目指して走る。

右舷甲板にも感染者がいた。先頭を走る分隊長が素早く銃剣を抜き、感染者の心臓に突き刺す。最後尾を固める沢霧と生駒が、近づいてきた感染者を散弾銃や小銃の銃床で殴りつける。

フェリーから少し離れた海上では、護衛艦あいづがすでにこちらに速射砲を向けているのが見えた。わざわざ高価な対艦ミサイルを使わずとも、非武装非装甲のフェリーなんか砲撃で沈められるからだ。

ひたすら走り続け、ようやく救命ボートにたどり着いた。クレーンで船上に吊り上げて固定されている救命ボートに民間人が次々乗り込んでいく。まだまだスペースはあるので、分隊の全員が乗っても余裕があるだろう。

「坂町、生駒、ボートの固定具を外せ！他は2人の援護だ！」

「了解！！」

俺は走り、ボートとフェリーを固定する金具を外し始める。一つ、また一つと金具が外れ、クレーンにロープで吊られたボートが次第に揺れていく。

最後の一つが外れ、ボートは大きく揺れた。

「早く乗り込め！」

その声で俺達は、船縁からジャンプしてボートに飛び乗る。俺達を追って何体か感染者がボートに飛んできたが、十字砲火を食らって穴だらけになって海に落下していく。

他にも飛び込もうとして狙いを外し、海面に叩きつけられる感染者が続く。榊原一曹がボートに取り付けられたクランクを回し、クレインからロープが伸ばされて徐々にボートが海面に近づいていく。

そして遂にボートが海面に着水した。ボートと繋ぐロープが切り離され、エンジンが始動してボートが出発する。

徐々にフェリーが遠ざかっていく。ボートに乗った俺達がフェリーから十分離れたと判断したらしく、あいづが砲撃を開始した。

艦首に搭載された127mm単装速射砲が火を噴き、砲弾が俺達の頭上を音を立てて通過した。砲弾はフェリーの右舷に直撃して大穴が開き、続いて爆発が起きる。

2秒に1回放たれる速射砲弾が次々フェリーに突き刺さり、フェリーはたちまち業火に包まれた。

燃え盛る甲板から、火に包まれた人の形をしたものが海に転がり落ちる。それが感染者なのか、逃げ遅れた民間人なのかはわからない。炎が燃料に引火したのか、一際大きな爆発が起きた。船体が真っ二つになり、フェリーが沈んでいく。

やがてフェリーは完全に海中に没した。あいづから発進した哨戒ヘリがフェリーが沈んだ場所の周囲を飛び回り、浮いている感染者を撃っているのか機関銃の発砲音が聞こえてくる。

上空からボートにサーチライトが照射された。振り返ると、空軍の救難ヘリがボートの上空にホバリングし、海面が風で波立っている。ホイストで救難員がボートに降下してきた。救難員はボートに降り立つなり、ワイヤーを外して俺達に言う。

「大丈夫ですか！？頑張りましたね、もう大丈夫です！！」

早速民間人がワイヤーでへりへ吊り上げられていく。その様子を見て、安心した俺の身体から力が抜けていった。

第135話 番外編 「死のフェリー」 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第136話 side 優 「ワクチン」

最近、刑務所の中が慌ただしくなってきた。軍の人達はやたら動き回っているし、刑務所内にあった物資が一カ所に集められたりしている。

それについて昨日、大山二尉は刑務所にいる民間人を集めて、

「いつでもここから移動できるよう、荷物をまとめておいて下さい」とまで言った。

東さんと美里さんの姿も最近見ていない。噂だが東さんが何かをやらかし、牢屋に放り込まれているのだそうだ。あの東さんがそんな罰を受けるような事をするとは誰も思えず、皆が首を傾げた。

そこに今度は、美里さんが最近福田さんや研究者と一緒に行動しているという噂も加わって、どうやら福田さんの研究が美里さんによって何か進展があったらしいという憶測が流れている。

東さんが牢屋にいるのは、美里さんが福田さんに酷い扱いを受けたので、命令に背いて救出しようとしたのではないか、とも言われている。感染犬に咬まれた美里さんがまだ人間のままだである事からも、美里さんがウイルスに対抗出来る何かを持っていて、福田さんがその何かを使ってワクチンや治療薬を完成させたか、あるいはその寸前だという噂があちこちで立っている。

そのおかげで、刑務所内には活気が戻っていた。一時はこのまま何も進展がないまま、食料が無くなるか、あるいは感染者の襲撃を受けて死ぬのではないかという空気が刑務所内を満たしていたのだ。もしワクチンが出来れば感染せずに済み、安心して四国に向かうことが出来る。そうなれば、夜な夜な感染者に怯えるような生活に終

止符を打つことが出来る……。

そんなボク達も、今は刑務所の物資を運ぶ手伝いをしている。あちこちに置いてある食料や燃料といった重要物資は、装甲車やトラックが置かれている広い倉庫に運ばれていた。ここからいつ撤収する事になっても、すぐに物資を搭載できるようにとの考えからだった。

広い倉庫の中では、軍人の声が飛び交っている。

「おい、5番の箱に入ってるナット持ってきてくれー」

「1、2、3で重機キャリパー関銃持ち上げるぞ。1、2、3……！」

「おいおい、全員載せるにはトラック足りないんじゃないか？」

「刑務所の外にいる奴らは勘定に入れるなつて福田博士が言ってるぜ。トラック4台ありや充分スペースあんだろ」

そんな中をボクと軍司は、段ボールを担いでひたすら倉庫と棟を往復していた。箱の中には予備の被服や毛布が入っている。

出来るだけ運べる重要物資を増やすため、ボク達が持ち出す荷物は最小限に留めるよう言われていた。元々初春市から持ってきた荷物は少なく、リュックサック一つに納まる分しかない。

「もうすぐここから出られるね、軍司。ワクチンがあれば感染だつてしないし、四国にはまだ生き残ってる人だつて多いだろうし」

「ええ……、そうですね……」

ボクが話し掛けても、軍司は何故か沈んだままだった。刑務所から撤収する準備をするように伝えられた直後からずっとこうだ。一体軍司はどうしたんだろう？

「ねえ軍司、最近なんか暗くない？何かあったら言ってよ、相談に乗るから」

「・・・優さん、もし四国に着いたとして、そこが安全地帯だったらこれからどうします？」

「うーん、どうするって言ってもなあ・・・」

仮にそこに人間の街があったら、多分そこに住むことになるだろう。ボクの親はウイルス蔓延時には九州にいたから、多分無事だ。とりあえず街に住んで仕事をしながら、移動が可能になれば親を探しに行くだろう。

そう軍司に言つと、彼は寂しそうな表情をした。

「だったら、優さんとはそこでお別れですね・・・」

軍司の言葉に、ボクは四国に着いたら皆と別れなければならないことに気づいた。東さん達は軍人なので、新たな任務を与えられてボク達の前から去っていくだろう。四国が人間の住める場所だとしても、これまでのように一緒にいられるとは限らない。もしかしたら皆がばらばらになって二度と会えなくなるかもしれない。

でも。。。

「大丈夫だよ。仮に別れたって、またいつか会えるって！」

「・・・そうでしょうか？」

「そうだよ！なんなら、同窓会みたいなのに開いて皆で集まればいいよ！だから心配しなくて大丈夫さ」

「・・・そうですよね。別に死ぬ訳じゃないし、また会えますよね」

軍司の表情が明るくなり、ボクはほっと一息ついた。希望が見えて

きたのに、暗いままだったら何か嫌だ。

と次の瞬間、一人の兵士が息を切らして倉庫に飛び込んできた。

「おい皆！ たった今福田博士がワクチンを完成させたってよ！！」

その言葉で倉庫内が一瞬無音になり、続いて歓声が倉庫を満たした。

「マジか!？」

「ついにやったんだ、俺達！」

「治療薬のほうはどうなってるんだ!？」

ワクチン完成を知らせてきた兵士は、あっという間に同僚に取り囲まれた。皆が皆興奮し、質問攻めにするものだから、らちが開かないと感じたその兵士はハンドマイクを持ち、装甲車の上に立ち上がって知っている情報を伝えていく。

彼によると、どうやら美里さんの血からウイルスの増殖を防ぐ成分を抽出し、旧型ウイルスのワクチンと組み合わせるワクチンが作られたらしい。福田さんが自ら実験台となり、ワクチンを摂取してからウイルスを注射して、既に2日が経っているのに何の変化もないそうだ。福田さんを始めとする被験者全員に何の異常も起きていないらしく、早速福田さんはワクチンの生産に取り掛かっているらしい。

「やったね軍司！これで皆が助かるよ！」

「そうですね。四国を拠点にワクチンを増産すれば、少なくともこれ以上ダークシーカーズの増加を食い止められますし、治療薬も完成させられれば人間を元に戻せます。世界が救われるんですよ！」

軍司もワクチン完成の報がうれしいのか、しきりに笑顔を見せる。どうやら刑務所に残っている旧型ワクチンを元に新型ワクチンを作るので、その生産数は限られるのだという。刑務所に残った旧型ワクチンを全て作り変えた後にここを離れ、四国に向かうのだそうだ。四国にある軍の拠点はまだ壊滅してはいらしく、そこでワクチンの増産をする、と兵士は言っていた。

ボク達は早速居住区に戻り、ワクチンができたらしいと皆に報告した。最初はそれを疑う人もいたが、後に大山二尉がやってきて近道中に撤収するので準備するようにと伝えたと、にわかにお祭り騒ぎが起きた。

居住区は活気に包まれ、今まで貯蔵されていた菓子やジュースが振る舞われた。皆の笑顔を見たのは久しぶりだ。これまでは日々忍び寄る死の不安に怯え、自分達の境遇を嘆いていたのに。人間とはやはり、希望があれば明るくなる生き物のようだ。

皆でワクチン完成を祝った後、撤収する準備を再開した。いつでもここを離れられるよう、先程と比べて作業スピードが速まっている。ボク達も宛がわれていた部屋を片付け、荷物が入ったりユックサクを倉庫に運ぶために外に出た。

皆が外に出て、荷物を運んでいる。途中でボクは、少し気になる人

影を見た。

その人はどこか挙動不審で、人に見つかりたくないかのように動いてる風に見えた。といっても、ボクがそう感じたただけかもしれないけど、一つだけ頭の片隅にひっかかる事があった。

あの人、この前刑務所から出て行かなかったっけ？

第136話 side 優 「ワクチン」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第137話 side 籠 「大脱走」

狭く、薄暗い独房の固いベッドに横たわり、俺は天井を見上げていた。嘗倉行き10日の期限は明日で終わり、晴れて俺は自由の見になる。

上官、というか指揮官に等しい福田や大山二尉に銃を向けてこの処分で済んだのは、福田は俺に恩を売っておきたいのだろう。アイツは友達思いを装っておきながら、その実損得で行動する奴である。俺の処分が軽かったのは、俺にやらせたい事が残っているのか、あるいはおとなしく命令に従わせたいのか。

チクシヨウ、いつか殴ってやる。

それはそうと、どうやらワクチンが出来たらしく、刑務所内が慌ただしくなっている。撤収準備が進んでいるなか、一人こつやって休んでいるのは少し罪悪感を感じる。

美里の身の安全は確保されているらしい。美里の血液からワクチンが出来ることがわかった以上、美里は最重要人物になったはずだ。昼に一度だけ美里が俺に会いに来てくれたが、その時も二人の兵士が彼女の両脇を固めていた。あれは監視というより護衛だろう。

美里は俺に会ってとても喜んでいたらようだ。俺も美里の無事な姿を見てほっとした。

美里は独房に放り込まれて外界から隔絶していた俺に、様々な情報を教えてくれた。ワクチンは美里の血液から抽出した成分を、以前の旧型ウイルスのワクチンと組み合わせることで出来るらしい。刑務所内で今現在完成したワクチンは100。完成した奴からサンプル

ルを差し引いた分を、今刑務所にいる兵士や刑務官、そして民間人に注射しているという。俺にもそのうち打ってくれるようだ。無論旧型ウイルスのワクチンが無くなり次第、新型ウイルスのワクチンも作れなくなる。それからこの刑務所を引き払い、四国に向かうそうだ。

「じゃあ龍くん、また明日ね」

美里はそう言って去って行った。美里が無事なことを確認した俺は、それからずっとベッドに横たわっている。

小さな窓を遮光カーテンで閉めきっているので独房内は暗い。ずっと暗い部屋で過ごしているの、このところ時間や曜日の感覚がわからなくなってきた。差し入れられる食事の回数やタイミングで今が9日目の午後だということはわかる。腕時計は取り上げられているので、詳細な時間はわからない。

俺が美里との面会を終え、ベッドで寝ている時だった。

ドーンという爆発音とともに、建物が揺れた。音と振動からして、爆発が起きた場所は近い。

すぐさま目を覚まし、耳を澄ませる。爆発音は数回鳴り響き、銃声も聞こえる。どうやら銃撃戦が起きているらしい、それも激しく。

と次の瞬間、独房のドアがいきなり開いて室内に光が差し込んできた。ドアを開けたらしい男は片手に散弾銃を持ち、俺に言った。

「おい、ここから逃げるぞ！早く出てこい！」

俺は目を凝らしてその男の顔を見て、そして驚いた。その男はこの刑務所の囚人服を着ていたのだ。

囚人の脱走か？だったらどうして爆発が？そもそも囚人がなんで銃を持っている？

そんな疑問が次々湧き出てきたが、今は情報を得ることが先だ。幸い男からは俺の顔が暗くて見えないらしく、同じ囚人だと思って親しげに話し掛けてくる。

これは好都合だ。俺が軍人だということを知っていたら、あの男はすぐさま俺を撃っていただろう。俺達は囚人を実験で次々殺していたので、相当な恨みを買っているに違いない。

ここは囚人のフリをして、少しでも多くの情報を得ることにする。

「一体何があつたんだ？今の爆発もあんたらがやったのか？」

「ちげえよ。外にいる坏組つてやつらと、なんとかつていう政党が俺達の脱走を手引してくれたんだよ！」

「手引？なんのために？」

「知らねーよ。とにかく俺達を房から出して武器を配っていたから、俺達の味方だ」

その時廊下から狂ったような叫び声と共に銃声が聞こえてきた。おそらくコイツと一緒に脱走したという囚人だろう。

「さっさとこい！軍の連中をぶち殺してやるんだ！」

「ああ、そうだな……」

俺はそう言つて、独房から出ていく。男は外に気を取られていたらしく、俺の方を向いていない。

「じゃあな」

俺がそう言っていると、ようやく男はこちらを振り返り、そして驚愕の表情を見せた。

当然である。助けた相手が、今まで散々囚人を殺してきた軍人だったのだから。

「てめえ、なんで……」

ここにいる？男はそう続けようとしたのだろう。だが俺は囚人が最後まで言う前に、その頭を掴んで思い切り捻り、首の骨をへし折っていた。バキリと木の枝をへし折ったような音と共に首が不自然な方向に曲がり、男の身体から力が抜ける。持っていた散弾銃はもらしておく。

廊下には二人の男女が、手にした銃を窓から中庭に向けて撃っていた。突然二人がこちらを向いた。男の首がへし折れた音で俺に気づいたらしい。

「てめえーっ！」

そう喚き、銃を撃つ。俺は今倒した男の身体を盾にして、飛んでくる銃弾を防ぐ。

二人組の内男の方が持っていたのはVZ61「スコープオン」短機関銃、女が持っているのはワルサーPPKだ。どちらも軽量小型で持ち運びに便利だが、それゆえ威力が弱い。2つの銃から放たれた32口径弾は、一発も男の死体を貫通することはなかった。

死体を盾にしつつ、奪ったレミントンM870ショットガンのソードオフモデルを構え、男の方を先に撃つ。至近距離で放たれた散弾は、男の上半身をボロ雑巾のように変えた。無論、即死である。

それを見て女の方が、狂ったように何かを喚きながらワルサーを乱

射する。何発かは外れ、何発かは男の死体にさらに穴を開けた。弾着の度に盾にした死体があくあくと揺れる。

が、突如銃撃が止んだ。ワルサーの弾倉が空になったのだ。女はパニックに陥りながら、慌てて弾倉を交換しようとする。

俺は盾にしていた弾着でボロボロになった男の死体を放し、レミントンポンプアクションして空のシエルを排出する。

弾倉の交換を終えたワルサーを構えた女は、俺に銃口を向けた。だがそれより先に、俺は引き金を引く。

放たれた散弾は、女の左足に突き刺さった。絶叫とともに女がワルサーを取り落とし、足を押さえて廊下を駆け回る。

再びポンプアクションで空のシエルを排出し、倒れた女に近づいていく。女が落としたワルサーを拾い上げ、涙と鼻水でグシャグシャになった女を見下ろす。

「待つて！撃たないで！命だけは助けて！！」

「お前が知っている事を全部放したら、医務室に連れて行ってやる」「話す！なんでも話しますっ！！」

銃口を下ろし、女の顔をじっくりと見る。なんか見覚えがあると思ったら、その女はあの平和実現党の党員だった。

外では相変わらず銃声が鳴り響いている。さっさと終わらせてしまおう。

「質問その一。囚人達に武器を配ったのはお前達か？もしそうなら目的も言え」

「銃を配ったのは私だけじゃないわ！囚人に銃を配って暴動を起こさせて、刑務所内を混乱に陥れろって命令されたの」

「質問その二。それを命令したのは平和実現党か？そうなら何が目的か？」

「私の上司が言っていたの。詳しくはわからないけど、ワクチンが何とかって……」

「ワクチンが目当てか……！」

恐らく囚人に武器を与えて暴動を起こし、その隙にワクチンを奪取しようとしたのか。だがワクチンが保管場所を知っているのは一部の人間だけで、しかも厳重に保管してあるだろうから奪うのは難しいと思われる。

他にも女からは色々聞き出せた。武器をを大量に持っていたのはヤクザの坏組であり、暴動ついでに囚人達を戦力にする腹積もりらしい。この囚人達はそのほとんどが殺人などの凶悪犯罪を犯しており、銃刀法違反で検挙された者も多い。そんなやつらに銃を持たせたらどうなるか、考えたくもない。

時間もなくなってきたので、最後の質問をして締め括る。

「最後にきく。お前達は刑務所内で誰か殺したか？」

「私は誰も殺してないわ！でもその男達が、看守を一人殺して……」

……」

女の言葉は最後まで続かなかった。俺がレミントンの銃口を女に向けたからだ。

女は何が起きているかわからないといった表情で、声を震わせながら言う。

「……なんで？医務室に連れて行ってくれるんじゃないの？」

「さっきまでそのつもりだったけど、気が変わったよ。お前達が俺達の仲間を殺したんなら、こっちもお前らに情けをかける必要はな

「いよな？」

「私は殺してないって言ってるじゃないの！私は悪くない！！」

「なあ、連帯責任って言葉知ってるか？てかお前が配った銃で人が死んだんだ、責任取れよ」

「……この人殺し！！」

うるせえよ。俺はそう呟いてレミントンの引き金を引いた。散弾を浴びた女の頭が、スイカを割ったように爆ぜる。

俺は女の死体には目もくれず、その身体を漁ってワルサーの弾倉を奪った。二人の囚人の死体も漁り、銃と弾薬を入手する。

まずは他の連中と合流しなけれだならない。恐らく敵はさらに戦力を得るため武器庫を襲っているだろう。そして武器庫を死守するため、兵士や刑務官らがそこに集結している可能性が高い。

窓から外を見ると、あちこちで火災が発生していた。さっきの爆発と関係があるのかもしれない。

ヤクザと脳内お花畑連中をぶっ飛ばし、無事にこの刑務所から出て行かなければならない。俺はレミントンを持ち、スコープピオンを背中中に吊ってワルサーをベルトに差し、武器庫に向けて走り出した。

第137話 side 籠 「大脱走」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第138話 side 優 「革命勃発」

ボクは最初、何が起きたのかわからなかった。

最初の爆発が起きた時、ボクは軍司、春名、由梨と一緒に倉庫へ荷物を運んでいた。ワクチンが完成した今、刑務所から撤収するのは時間の問題だったからだ。

倉庫へ荷物を運び込み、戻って他の荷物を取ってこようという時に、ドーンという轟音と共に地面が揺れた。

最初は、何かの事故かと思った。この刑務所には武器弾薬や燃料がたくさんある。何かの原因でそれらが爆発したのだろうと。

だが爆発音は何度も続き、やがて銃声も聞こえ始めた。最初は散発的だった銃声は時間とともに増え、しまいには銃撃戦を繰り広げているのではと思う程の数になった。

ダークシーカーズの襲撃かとも思った。だがまだ太陽が出ているので、その可能性はすぐに否定された。

「ねえ……、どうするの?」

春奈が震える声で、怯えたように言う。軍司は最初の爆発が聞こえた時点で拳銃を抜き、由梨もホルスターに手を掛け、いつでも拳銃を抜ける体勢を取っている。

ボク達はまだ倉庫の中にいた。爆発音や銃声が響く中、誰も外に出ようとは言い出さなかった。とりあえずここに隠れ、銃声が止むのを待つことにしたのだ。

だが銃声は止むどころかどんどん激しくなり、やがて悲鳴なども聞

こえはじめた。しかも、銃声は次第に倉庫に近づいてきている。

「誰と誰が戦ってるのよ・・・？」

由梨が怪訝な表情で呟く。刑務所内ということもあつて無線機は携帯しておらず、軍人達に詳細を聞くことすら出来ない。

だからといって何が起きているのかわからない中、のこのこ外に出ていく事は出来ない。ボク達に十分な武器があれば話は別だが、今のボク達は拳銃しか持っていない。ライフルやサブマシンガンは武器庫に置いてある。

そもそも銃撃戦が起きているということは、相手は人間だということだ。ボクに人を撃つ覚悟はない。そして他の皆もそのことを望んではいないだろう。

とその時、少し開いた倉庫の扉から外の様子を伺っていた軍司が、何かを見て小さく言った。

「皆、ちょっと来て下さい。あれって囚人じゃないですか！？」

物音を立てないように扉のそばまで移動し、ゆっくりと外を伺う。

倉庫から少し離れた場所を5人の男が歩いていた。全員が銃を持ち、何か言葉を交わしながら刑務所の門の方向へ向かっていく。

男達は一人を除いて、全員が灰色の作業着を着ていた。それはどこからどう見ても、囚人服のそれだった。どうして囚人が外に出ているのか？混乱に乗じて脱出できたのか？

残りの一人にボクは見覚えがあつた。数週間前に平和実現党が人体実験の証拠を暴いた時、そこにいたガラの悪い男だ。

「あれって、何とかってという暴力団の構成員じゃない？どうしてこ

ここに入って来れてるのよ？」

狭い隙間から外を覗こうと押し合いへし合いしながら、由梨が呟く。由梨の言う通りだった。平和実現党と坏組とかいう暴力団は、「ここにいと危ない」云々言って刑務所から出て行つたはずだ。刑務所の出入口は軍が警備しているはずなので、こっそり入るなんて芸当は出来ない。

……連中が正面突破でもしない限りは。

囚人達は狂気じみた笑顔を浮かべ、獲物を探しているような目で周囲を見回していた。その目が倉庫を向く直前、ボク達は慌てて身を引つ込めた。

「……見つけた？」

「見つかってないことを祈ります」

春奈はもはや泣く寸前だった。声を上げて囚人達に見つからないように、必死に口を手で押さえている。

幸運なことに、囚人達はボク達に気づくことはなかった。きひひひと気味の悪い笑い声をあげると、出入口の方に向かっていく。

囚人達の腕にはイレズミがあつたり、大量の注射痕があつた。ヤクザだつたりラリって捕まつたのだらう。

次の瞬間、背後から声が聞こえた。

「どうした？」

「……うわーっ!？」

今まで倉庫にはボク達4人以外誰もいなかった。つまり誰かがこっそり入ってきたことになる。囚人か!?

いきなり声を掛けられて皆驚き、振り返りながら拳銃を構えた。

銃口の先には二人の人影が立っていた。向こうもいきなり拳銃を突き付けられて驚いたのか、慌てて両手を上げた。

「おい、銃を下ろせ！俺だ、東だ！内田さんも一緒にいる！」

その声は確かに東さんのものだった。暗闇に目が慣れてきたのか、だんだん人影がはっきりと見えてくる。

そこに立っていたのはショットガンやサブマシンガンで武装した、迷彩戦闘服のズボンを履き黒のTシャツを着た東さんだった。隣には64式狙撃銃を携えた内田さんの姿もある。

二人が知り合いということ、皆銃を下ろした。一歩間違えてたら、二人を撃ってしまったかもしれない。

「銃を向ける時は相手をしっかりと確認しろって言ったのだ。危うく俺と内田さんは穴だらけになるところだったぞ」

そう言いつつ、東さんはボク達のもとにやってきた。そして少し開いた扉の隙間から外の様子を眺め、舌打ちした。

「連中、もうあんなに囚人を解放したのかよ……。こりやますます厄介だな」

「今までどうしてたんですか東さん？皆あなたの姿が見えないから心配してたんですよ？」

「というか、その銃はどうしたんですか？」

春奈と軍司が口々に尋ねる。

「どうやら東さんは今まで牢屋に入っていたらしい。福田さんという人と揉めて銃を向ける事態となり、幸い死傷者は出なかったものの10日間の営倉行きを命じられたそうだ。ところで営倉って何？とにかく東さんの営倉行きは明日で終わりなのだという。そこに来て今日のこの騒ぎだ。」

「囚人の一人が俺も仲間だと勘違いしてな。まあ牢屋に入ったりや誰でも囚人って勘違いするだろうが、とにかく俺はそいつを騙して独房から脱出した。んでもって一緒にいた女を調べたら、そいつはなんと平和実現党員だった」
「なんであんな脳内お花畑な連中がそんなことをする必要があるの？」

由梨がきく。東さんは忌々しい者でも見るような顔をしつつ、続けた。

「下っ端だったから確実な事は言えないが、連中の狙いはワクチンだ」

「ワクチン？なんでそんな物狙うんですか？」

ボクが尋ねると、一斉に皆から「アホなの？」という目で見られた。ボク、何か悪いこと言ったかな？

「あんな、ワクチンが出来たってことは、世界が救われるって事だ。それはわかるな？」

「ええ。でもなんで、それを平和実現党が狙うんですか？」

「滅びかけている世界を救えるワクチンは、ある意味石油以上の戦略物質となりえるんだぞ。最初にワクチンを開発した国　この

場合は日本か　　は今後、国際的な発言力が増すだろう。なんて
ってワクチン製造のノウハウを持つてるんだからな。日本にちよっ
かいをかけてくるような国には『ワクチン本体や製造法、成分は渡
さない』って言ったら、大抵の国は日本への態度をよくするだろう
な」

「・・・まさか、軍はこれからそうするつもりなんですか？」

ボクがそう言うのと同時に、倉庫にいた皆が東さんを不信の目で見
た。東さんはそんな視線は気にせず、続ける。

「んなことより話の続きだ。んで、ワクチンを作った組織は今後日
本での地位が向上するだろう。誰も恩があるから下手に逆らえない。
政治に進出した場合、政権に影響を持つかもしれない」

「だから平和実現党はワクチン本体と製造法を手に入れて、混乱が
収まった後の日本に君臨したいってわけね？」

由梨が確認するように言うと、東さんは苦々しそうな表情で頷いた。
東さんの話で合点があった。平和実現党は衆参合わせて両手の指で
足りる程の議席しかない。そんな政党がワクチンを使って世界を救
つたらどうなる？

まず、日本での発言力は増すだろう。世界を救った平和実現党に国
民は、衆院選で票を投じるかもしれない。そうなれば平和実現党は
議席が単独過半数になるかもしれない。そうなれば、平和実現党が
政権を握ることになる。

ボクはそこまで考えて、急に胸糞悪くなってきた。人類が滅ぶかど
うかの瀬戸際になっても、まだ権力争いをやろうという連中がいる
事に。

そして東さんが言った事が現実になるなら、ワクチンを開発した福
田さん、さらには彼が一応所属している軍が今後の日本や世界でイ

ニシアチブを取ることになる。日本にはシベリアンコントロールという言葉があるが、それが有名無実化するかもしれない。

「アンタが言う事が事実なら、軍が権力を握ることになるわね？ ワクチン開発の功を盾にして、シベリアンコントロール無視の内閣でも作るんじゃない？ 大臣の殆どを軍人にして、一気に太平洋戦争前の日本にでもするの？」

由梨が茶化すように言い、「ちよつと由梨・・・」と春奈が窘める。だが東さんはその問いに、真剣な表情で答えた。

「大丈夫だ、そんな事はさせない。ワクチンを政治の道具にしようってなら、俺が絶対に阻止する」

東さんはそう言った後、「そもそも福田って、政治に興味なさそうだしな」と続けた。

東さんが言ったなら、彼は絶対に約束を守るだろう。なぜだかボクはそう感じた。少なくとも、東さんに任せておけば安心だという感じがした。

「それより、連中をどうするんじや？ 囚人を味方につけて戦力を増やしておる。数じゃ向こうが何倍もおるぞ」

今まで黙って話を聞いていた内田さんが口を開いた。東さんは少し開いた扉の隙間から外を伺いつつ、答えた。

「素人と暴力団と囚人じゃ、ちゃんと訓練された兵士には敵いませんよ。もつとも、数で押されりやどうなるかわかりませんが」

そう言った後、東さんは今まで背負っていたショットガンやサブマ

シンガンを外すと、突然ボク達に渡した。戸惑いつつも銃を受けつつたボク達の目の前で、小型のワルサーPPK自動拳銃だけを握った東さんは、扉を開けて外に出て行こうとした。

「ちよつと、どこに行くんですか！？外は危険ですよ！！」

「弾が少ない銃だけ持ってここに立て籠もる方が危険だ。お前ら、予備弾あまり持ってないだろ？」

東さんがそう言ったので、ボクはとっさにベルトの弾倉ポーチを探った。刑務所内は安全だと誰もが思っていたので、武装は基本的に拳銃のみ。予備弾もあまり携行していない。

ボクも予備の弾倉は2本しか持っていない。FNハイパワーの装弾数は13発。装填済みのものも合わせて弾丸は全部で39発しかない。東さんの言う事ももつともだ。

「でも、それじゃ東さんも危険ですよ！そんな拳銃一丁で奴らに立ち向かうんですか！？」

春奈が不安そうに言う。だが東さんはショットガンやサブマシンガンの予備の弾を床に起きつつ答える。

「舐めんな、こっちはキツイ訓練受けてここにいるんだ。それに俺は武器庫に行く。味方もそこに集まっているだろうから、武器を手に入れてから戻ってくる」

「じゃあ、俺も……！！」

軍司はそう言ったが、東さんに断られた。理由は「危険すぎる、倉庫を内田さんと共に守ってくれ」とのことだった。

東さんはタイミング見計らい、倉庫を飛び出して行った。ボク達はその背中を追いかける事も出来ず、ただ待つ事になった。

「……にしても、こんな時になっても武力闘争なんて、本当に人間はアホね。本当にいつペン滅んだほうがマシなんじゃない？」

「ちよつと由梨……！」

由梨の不穏当な発言を春奈が窘めようとした。だが由梨は笑って「冗談よ」と言つて、開かれた扉から外を伺う。

数分後、倉庫の外が慌ただしくなってきた。暴力団構成員や囚人達が集まつてきて、倉庫へ向かつてこようとすする。

「連中を倉庫に入れるな！ここを奪われたら厄介なことになるぞ！」

内田さんがそう言つて、64式狙撃銃を撃つた。銃声が倉庫内で反響し、迫りつつあった暴力団員が一人倒れる。

すぐに、反撃の銃弾の嵐が襲い掛かってきた。倉庫内にいくつか転がっていたコンテナに隠れ、盾にしなから反撃する。

刑務所からの脱出が近いこともあり、倉庫にはいくつも物資が集積されている。これらを奪われてしまったら、今後の行動に大きな支障が出る。もしかしたら四国へ辿り着けなくなるかもしれない。

そうなることを防ぐために、ボク達は戦わなければならぬ。それがたとえ、人間相手だとしても。

第138話 side 優 「革命勃発」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第139話 side 龍 「前面戦争」

倉庫で優達には囚人から奪った銃を渡した俺は、一人で武器庫のある民間人立入禁止区画に向かっていた。大した武器もない優達を残していくのは少し不安だったが、あそこで立て籠もっていても誰も助けには来ない。誰かが伝えに行く事が必要だった。

倉庫には途中で合流した内田さんもいる。内田さんは自動小銃で武装しているから、頼りになるだろう。

誰もいない中庭を横切っていく。爆発に伴って発生した火災により、停めてあった73式小型トラックが炎上していた。

手にしたワルサーPPKを構え、左右を見回す。こんな小口径の自動拳銃、接近戦でも威力は弱い。撃ち合いになったらこっちが不利だ。

誰もいない事を確認し、一気に司令室のある棟まで走ろうとした時だった。

収容棟の陰から、二人の男が現れた。手には銃を持ち、俺の姿を見て目を白黒させていた。

俺はその男達が、暴力団の坏組構成員であることに気づいた。構成員達はどうかやら刑務所の探索中に偶然、俺と遭遇してしまったようだ。

いきなり敵と鉢合わせした驚きでヤクザ達の目が見開かれ、その人差し指が引金にかかる。

「やべ………!!」

俺は呻き、そして慌てて燃えている73式小型トラックの陰に飛び込む。拳銃しか持っていない状態で、あんなのと戦ってられない。直後、大量の銃弾がトラックの車体に当たって火花を散らした。二人の男が持っているのは旧ソ連製の銃器。一人はAKS-74Uカービンを所持し、運の悪いことにもう一人は軽機関銃を持っている。

ヤクザが持っているのはRPK軽機関銃。75連発のドラムマガジンを装着し、圧倒的な火力で俺を追い詰めていく。俺は何度か車体から身を乗り出し、ワルサーを撃った。だが一発撃つと、その10倍の銃弾が飛んでくる。

「クソッ！いつからヤクザはマシンガンを持っていいことになったんだよ！？」

ヤケクソになって叫ぶ。AKSもRPKも、思いつきり銃刀法に引っかけた軍用銃だ。連中、今まであんなものを隠し持っていたのかよ。

二人のヤクザは囚人達と違い、かなり手強い相手ようだった。こちらの反撃を警戒して遮蔽物に隠れつつ、RPKの連射力を活かして俺の反撃を封じる。そして俺が動けない間に、AKS-74Uを持ったもう一人が接近してくる。

このままでは蜂の巣になってしまう。俺が銃弾で粉々になったトラックの窓ガラスから顔を庇い、歯を食いしばった時だった。

大きな銃声が響き、RPKを連射していたヤクザの頭が吹っ飛んだ。続いて俺に近づきつつあったヤクザの頭にも風穴が開いた。訳がわからず俺は周囲を見回し、そして俺を助けてくれた人物を見つけた。

「サンキュー、堂々!!」

俺がそう言うと、屋上にいた人影が片手を上げて応えた。屋上から堂々がヤクザを狙撃して、俺を救ってくれたのだ。

「俺最近影が薄いからよ、ここで活躍しないと皆に忘れられそうだし。」

「そんなことは……ないと思うぞ?」

「何で最後が疑問形なんだ? まあいい。そんなことより東、さつさと武器庫に行け! 今無事な兵士はそこに集結してる!!」

俺はもう一度堂々に礼を言うと、武器庫に向かって走る。すぐに背後から、堂々が狙撃を再開した事を示す銃声が響き始めた。

武器庫のある元収容棟は、爆発で酷い有様になっていた。窓ガラスは全て粉々になり、そして兵士達が入口にバリケードを築き、そして襲撃をかけている囚人達に応戦している。

とりあえず敵がいない所を移動し、どうにかバリケードの脇に植えてあるプラタナスまで近づくことが出来た。ここからバリケードまでは10メートル程しか離れていないが、その間に遮蔽物は一切ない。

「おい! おーい!!」

俺がバリケードの向こうにいる兵士に叫ぶ。一瞬彼は俺を敵だと思っただけで銃口を向けてきた。だがすぐに俺が軍人だという事に気

づき、銃口を下ろす。

「東、こんな所で何やってんだ！？お前は牢屋に放り込まれてるんじゃないのか？」

その兵士は中沢だった。中沢は三三三分隊支援火器を連射し、敵を牽制している。拳銃や短機関銃しか持っていない囚人達では、容易に近づけないようだ。

貧弱な武装で攻撃を仕掛けているということは、少なくとも囚人達に賢いリーダーはいないようだ。頭のいいリーダーなら、一旦下がって武装や人数を揃え、その上で攻撃を仕掛けて来る。

「今からそっちに行きたいんだが、いいか？」

「ああ！こつちも人手が足りないんだ！！」

中沢はそう言っ、一緒に応戦していた刑務官に声をかけ、バリケードの一部を取り払った。そこから入って来い、ということらしい。俺は深呼吸して、心を落ち着けた。これから敵味方の銃弾が飛び交う地帯を突っ切るのだ。下手したら、いや、高い確率ですぐに穴だらけにされるかもしれない。

だがここを通らなければ、倉庫で待っている優や軍司達を助けられない。そしてワクチンを奪取して覇権を握ろうとする平和実現党の野望も粉碎することは出来ない。

俺は覚悟を決め、走り出した。

すぐに敵が俺に気づき、銃弾の嵐が襲い掛かってきた。足元で銃弾が跳ね、すぐ近くを何発もの銃弾が掠める。

一発の銃弾が右腕を掠った。一瞬だけ腕に鋭い痛みが走り、そして血が傷口から流れ出す。その痛みに身体から力が抜けそうになった

が、必死に足を動かして走り続ける。

一瞬が何秒にも感じる中、俺はようやくバリケードの中に飛び込んだ。すぐに中沢が机や椅子を積み上げてバリケードを元に戻し、俺のもとに駆け寄ってきた。

腕を見ると、上腕部の皮膚が裂け、そこから血が流れている。ただし大きな血管は傷つけてはいないらしく、放置していて問題ないと判断した。

「大丈夫か！？怪我してるぞ！」

「かすり傷だ、大丈夫さ。それより状況はどうなっている？」

「連中はまず刑務所の外から迫撃弾を撃ち込んできた。密輸して隠匿してたらしい旧ソ連製のやつだが、砲手が下手くそだったのが幸いしたな。こつちに深刻な被害は出ていない」

「迫撃砲は？」

「堂々が対物狙撃銃で、砲手ごと潰した。でも連中は避難民の中から攻撃してくるから、下手にこつちから攻撃出来ない」

つまり民間人を盾にして攻撃しているのか。卑怯というより人間のクズみたいな戦法を取ってくるな。

再び銃声が周囲に響き渡る。囚人達は懲りずに攻撃を続行しているようだ。中沢はバリケードが身を乗り出してミニミを連射し、刑務官らも普段は使っていない散弾銃や短機関銃で果敢に応戦している。

「東！お前の銃は！？」

「これだけだ」

そう言ってPPKを見せると、中沢は呆れたような顔をした。

「お前、こんな豆鉄砲でここまで来たのか？」

「仕方ないだろ、他の銃は優や軍司に渡したんだから」

「優？そついやあいつらどこにいるんだ？無事なのか？」

「第三倉庫に立て籠もってる。さつさと救助に行かないと」

俺がそう言つと、中沢は「ここは任せろ」と言つて俺を武器庫に向かわせた。中沢や刑務官らに礼を言つて、俺は収容棟に足を踏み入れた。

収容棟の内部は以前と様変わりしていた。ロビーに置いてあつたソファーやテーブルはバリケード構築のために全て運び出され、廊下の所々で空薬莖が炎で明るく輝いていた。

そして武器を奪おうと乗り込んできて倒されたりしい囚人の死体がいくつか、外へ運び出されずにそのまま放置されている。念のためPPKを握り、俺は武器庫へ向かう。

屋上からは重機関銃を連射する重厚な銃声が轟いている。戦闘は激しさを増す一方らしい。

武器庫にたどり着くと、早速いくつもの銃口が俺を待ち構えていた。一日に何度も銃口を向けられるとは、本当に今日は最悪な日だ。

「待て、仲間だ。東海兵二曹だ！」

「なんだ東か。お前ここで何やってるんだ？お前牢屋に放り込まれてるんじゃないのか？」

中沢と同じような事を尋ね、仲間と共に09式小銃を下ろしたのは牧だった。実に10日ぶりの再開だ。

俺は今までの経緯を説明すると、牧はすんなり俺を武器庫に通してくれた。武器庫の銃はまだ多くが残っている。どうやら味方がいく

つか持ち出したようだ。

「G36Cは残ってるか？」

「あー、ない。誰かが持ち出したっぽい」

「じゃあ09式小銃は？」

「全部持つてかれてるな」

「チッ、じゃあどれでもいいや」

そう言うど渡されたのは、レミントンACR突撃銃だった。09式小銃に似た外見をしたその銃を受け取り、一緒に放り投げられた30発入りの弾倉を叩き込み、装填ホルトを引いて薬室に初弾を装填する。これようやく、マトモな武器を持つことが出来た。

「防弾チョッキはここにはない。悪いがこれで我慢してくれ」

牧はそう言うて、弾倉ポーチがいくつか付けられた弾帯を渡してきた。ポーチに予備弾倉を6個入れ、俺はそれを身につけた。

弾帯は防弾チョッキと違って防弾能力が一切ない。弾に当たったら一巻の終わりである。

「牧、敵は何か言うてきたか？」

「ああ、とんでもなくアホな事要求してきたぜ」

「何を？」

「『直ちに武装を解除し、大人しく投降せよ。そしてワクチンと福田博士を引き渡せ』、だとき。さっき通信が入ってきた」

アホな要求だな、それは。何で俺達が極左の少数政党と犯罪者の集団に降伏しなけりゃなんのだ？

というか、降伏した瞬間に殺されるのがオチだろう。それで平和実現党と坏組、そして囚人達はワクチンと大量の軍用銃火器、装甲車

を手に入れる。んでもって平和実現党は日本の支配者として君臨し、
坏組は囚人を加えて軍用装備を所持した凶悪テロ集団と化する。
そんなのはゴメンだね。

「福田は何て答えた？」

「『バカめ』ってさ」

「よくあるパターンだなそりゃ。で、連中はカンカンになって攻撃
を仕掛けています」

「そーゆうことさ。それより司令室に行つてこい。福田や大山二尉
もそこにいるからそつちで指示を仰いでくれ」

牧はそう言うと、兵士を数名引き連れて入口の方へ向かつて行つた。
他の兵士を救助に行くらしい。

俺は階段を駆け上がり、司令室に向かった。

司令室に入ると、そこは別の意味で戦場と化していた。

通信士は無線機に向かい合つて他の部隊と連絡を取り合い、壁のモ
ニターには判明している敵の位置が映し出されている。せわしなく
兵士が走り回り、報告と命令を受けていた。

「お、東二曹。どうやってここまで来た？」

そうやって近づいてきたのは、この部隊の指揮官である大山二尉だ
つた。大山二尉は武装を整え、皆に指示を出している。

「囚人がマヌケでしてね、俺を逃がそうとしたんです。無論全滅さ
せましたが」

「そうか。なら現在の状況もわかってるな？」

「ええ。連中、ワクチンを狙つて来てるんでしょう？」

「その通りだ。これが今の敵の配置だ」

大山二尉はそう言って、テーブルの上に置かれた刑務所周辺の地図を俺に見せた。刑務所の周囲に敵を示す赤い駒が置かれ、味方の青い駒が刑務所内部に展開している。

敵は民間人を示す黄色い駒の内部に紛れている。刑務所から出て行った民間人のキャンプからどうやら攻撃を仕掛けてきているらしい。これでは下手に攻撃を加える事は出来ない、民間人に流れ弾が当たる可能性があるからだ。

「敵の規模は？」

「平和実現党員50人、坏組構成員50人、囚人が全員脱走して味方についたとすると、合計は300人以上になる。避難民がいくらか協力しているという情報もあるから、合計はそれ以上になるな」

「こつちの戦力は？」

「戦闘員の兵士40人、刑務官20人、それに協力してくれている民間人が少々。それに警官の稲森さんと松原さんを合わせて、60人弱ってところか」

つまり、こちらの戦力は敵の5分の1。いや、こちらの被害は詳細が判明していないから、死傷者を除けば更に少なくなる。

整備兵は戦闘要員ではないから戦力には含めない。一応彼らも軍人だから銃は撃てるだろうが、彼らが死傷したら今後の行動に大きく支障が出る。だから彼らを戦闘に参加させることは出来ない。

手詰まりだった。こちらの戦力は敵より少なく、更に分断されている。

一般的に軍隊では、攻撃を仕掛ける側は防御側の3倍の戦力を揃えなければならぬとある。敵は俺達の戦力の5倍以上。その計算で言えば、俺達は確実に負ける。

だが俺達はよく訓練された軍人であり、連中は素人や犯罪者、軍人と渡り合えそうなのは坏組構成員くらいしかいない。どうにかこちらの戦力を集結させ、装甲車などの兵器も使用できれば大きく戦況は変わる。

どちらにしても、俺達は生きてここから出て行かなければならない。ワクチンを政治の道具にさせてはならないのだ。

俺がそう口を開こうとした瞬間、無線機から勢いよく声が流れた。屋上にいる監視員からの通信だった。

「大変だ！敵が……！！！」

第139話 side 龍 「前面戦争」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第140話 side 龍 「テクニカル」

俺は屋上の通信員の慌てた声を聞き、窓際に駆け寄った。窓は感染者対策に鉄板を張られ、所々に射撃用の銃眼が開けられている。その銃眼の一つから外を見る。窓の鉄板は度重なる攻撃を受けてあちこちに弾着で出来た凹みがあり、大口径の銃弾を食らったのか所々に穴が開き、そこから外の燃え盛る炎から発せられた光が室内に差し込んでいる。

司令室は2階にあるので、僅かながら外の様子が見える。だが刑務所を囲む塀に阻まれて、近い場所は見えない。

「ここからでは確認できない、何があったんだ？」

俺は無線機で屋上の監視員を呼び出したが、返事がない。聴こえるのはノイズのみだ。
何度呼び掛けても誰も出ない。嫌な予感しかしない。

「東二曹、屋上に行って状況を確認してこい」

大山二尉に命じられた俺は、司令室を飛び出した。階段を駆け上がり、屋上に繋がる扉を開ける。
屋上では、一人の兵士が倒れていた。右足を抑え、呻いている。彼の周囲には血溜まりが広がっていた。

「おい！どうした、何があった!？」

「来ないでください!！」

駆け寄ろうとした俺に、兵士が叫んだ。直後、俺の頭のすぐ傍を空気を切る音と共に銃弾が掠めていった。俺は慌てて屋上に伏せる。あの兵士は狙撃を受けたようだ。敢えて殺さなかったのは、負傷している様子を仲間に見せつけ、救助しようと近寄ってきた所をさらに撃つためか。

まずいことに、屋上の淵には転落防止用の柵しかない。今俺が伏せている場所は狙撃手から死角になっているようで、俺が伏せてからは銃弾が飛んでこない。

だが兵士が倒れているのは俺の淵に近く、さらに足を撃たれたせいで動くことが出来ない。彼を救助しようと近づけば狙撃を受ける。かといってこのまま放っておくわけにもいかない。

どうするかと大山二尉に指示を仰ぐと、堂々が向かっているのを待機せよと言われた。俺はひたすら伏せ、堂々の到着を待つ。

一分程すると、堂々から通信が入った。

『こちら堂々。東、今どこだ？』

「司令室のある棟の屋上だ！どこにスナイパーがいるかわからないから動けない！お前は今どこだ？」

『D棟の給水タンクの上だ。お、いまお前が見えるぜ』

俺は振り返り、D棟の方を向いた。D棟の屋上には給水タンクがあるが、俺から堂々の姿を見ることは出来ない。

あそこなら周辺一帯が一望できる。敵のスナイパーもすぐ発見できるだろう。

というか、あの坏組とやらは一体何なんだ？大量の銃器といい、兵士並に訓練された組員といい、スナイパーといい、テロリストか何かと言った方が早い。

「堂々、まだ敵は見つからないのか！？負傷兵の体力が保たないぞ！」
『焦るなよ・・・と、見つけた。敵スナイパーを確認した。距離は500、南東の方向。家屋の残骸に隠れてやがる。すぐに排除するから待ってる』

その通信の直後、給水タンクの方から銃声が響いた。10式狙撃銃の銃声よりも大きかったので、おそらく対物狙撃銃を使用したのだろう。

ややあつて、

『敵を排除。今だ、救助しろ』

という短い通信が入ったので、俺は立ち上がり、そして負傷した兵士のもとに駆け寄った。兵士を担ぎ上げ、俺は急いで引き返す。そして引き返そうとした時、俺は信じられないものを目撃した。

刑務所を取り囲むように、十数台の車両が接近していた。荷台や屋根に機関銃を設置したその車両は、いわゆる「テクニカル」と呼ばれるものだ。

テクニカルはよく紛争地域で使用される車両で、ピックアップトラックの荷台などに機関銃を取り付けた武装車両だ。威力の強い機関銃などは人間が持ち運ぶには不便だが、車両に取り付けることで簡単に移動式の銃座ができる。俺が八方村で戦ったMG3軽機関銃を取り付けた軽トラも、テクニカルの種類と言える。

通常は普通の車両に機関銃を取り付けただけなので装甲はないに等しいが、今こちらに向かってきているテクニカルは車体が奇妙に角ばっていた。ACR突撃銃の低倍率スコープで確認すると、車体のあちこちに鉄板が溶接されている。まるで装甲車だ。

テクニカルの中には機関銃だけでなく、無反動砲らしき長い金属の筒を搭載しているものもあった。移動式の砲台みたいなものだ。

そして接近してきているのはテクニカルだけではない。数台のブルドーザーがディーゼルエンジンを唸らせ、刑務所向けて前進している。こちらもちやほやり、鉄板が溶接されていた。

いくら建設車両といっても侮ってはならない。アメリカではある男が日本製のブルドーザーに鉄板を溶接して中に立て籠もり、市街地を暴走させて大混乱に陥れたこともあるのだ。

その事件ではブルドーザーの装甲が厚すぎて警察では歯が立たず、特殊部隊のSWATも何も出来なかった。ブルドーザーはその大馬力を活かして進路上のあらゆるものを薙ぎ倒し、燃料が切れるまで暴れ回った。

そんな装甲ブルドーザーが見えるだけで数台、刑務所に近づいて来ている。あんなのが突っ込んできたら、まだ無事な門もぶち破られてしまう。あれを破壊するには対戦車兵器が必要だ。

平和実現党と坏組は、そんなにウィルスのワクチンと治療薬が欲しいのか。今必要なのは人間同士が争うことではなく、協力して生き延びることだというのに　　！

「こちら東！大山二尉、聞こえてますか？」

『ああ、大丈夫だ。何があった？』

「テクニカル十数台と、装甲ブルドーザーが見えるだけで4台！他にもいるかもしれません！どうしますか！？」

そう言うと、大山二尉はしばらく黙った。素人に毛が生えた程度の囚人達や平和実現党員と、テロリスト並に武器弾薬を揃え訓練されている坏組構成員。それらと戦うのか、あるいは後退するのかわどうするか考えているのだろう。

ややあって、大山二尉から命令が下った。

『各員持ち場を放棄。D棟へ後退せよ。繰り返す、D棟へ後退せよ。ただし敵には一切武器弾薬兵器を渡すな』

俺はその命令に従い、負傷兵を担いでD棟に向かった。負傷した兵士は痛みで気絶しており、運ぶのが楽だった。足を撃たれたものの、すぐに医師に引き渡せば問題ない。

2階の司令室に戻ると、中は慌ただしかった。機密書類はシュレッダーにかけられ、コンピューターに入った情報はSDカードにコピーされた後に全て削除される。こんな状況でも機密は機密であり、しかも平和実現党や坏組に引き渡してはならない情報もいくつかある。

負傷兵を衛生員に引き渡すと、またもや大山二尉から指示を受けた。D棟屋上にある、プレデター無人偵察機と交信するためのアンテナを修理する技術兵を援護しろとのことだった。

なんでも襲撃を受けた時にアンテナが破損し、プレデターの操作が出来なくなつたのだという。プレデターは通信がオフラインになると自動でその場で待機し、上空を旋回し続けることになっている。まずはプレデターとの通信を復旧させ、上空から敵情を確認することが必要だった。

プレデターにはヘルファイア対戦車ミサイルも3発搭載されているらしい。コントローラーが可能になれば、ミサイルである装甲ブルドガーを破壊することができる。

俺はその場にいた牧を連れ、D棟に向かう。途中で中沢も合流し、D棟の屋上で堂々とも合流する予定だ。

倉庫に立て籠もっている優や軍司については、大山二尉が救助してくれるらしい。なんでも装甲車を出してくれるそうだ。
坏組や囚人達は、すでに刑務所内部のあちこちで戦闘を行っている。いつどこで出くわすかわからず、移動する時も気が抜けない。

「クソツ！なんでこんな時に、連中攻撃仕掛けてくるんだよ！？」

中沢が走りながら罵る。今俺達は中庭を走っており、D棟は目と鼻の先にある。

だが一気に走り抜けようとした直前に、刑務所内に侵入してきていたテクニカルが一台、俺達の進路を塞ぐように現れた。慌てて建物の陰に隠れた直後、大量の銃弾が俺達に襲い掛かる。

ピックアップトラックの荷台に搭載されたPKM汎用機関銃が火を噴いたのだ。八方村でのテクニカルと違い、銃座には防盾が取り付けられており、なかなか射手が狙えない。

俺達は応戦しつつ、怒鳴り合うように会話する。話し合っている間だけは、戦闘のストレスを感じずにすむ。

「なんでこの時かって？そりゃあお前、俺達がワクチンと治療薬を持って行ったら困るからだろ！！」

09式小銃を単発で撃ちながら、牧が中沢の問いに答える。一発撃つ度、銃弾が数倍になって返ってくる。火力ではテクニカルの方が上だ。

テクニカルには機銃手だけでなく他にも何人か乗っていて、手にしたAK-74アサルトライフルを撃ち放ってくる。軍隊並の装備だ。

「あんなものとかブルドーザーとか準備していた事といい、砲撃と同時に囚人を一斉に解放したことといい、最初から連中は俺達に攻撃を仕掛ける気が満々だったんだよ！！」

「マジかよ！助けるんじゃないかな！？」

「あいつらを助けたのは大山二尉達だという事を忘れてないか！？」

そう言いつつ、俺はACR突撃銃の弾倉を交換した。そしてボルトを引いて薬室に弾を装填すると、銃口だけ突き出して撃つ。俺は牧や中沢と違ってTシャツの上に弾替しか身につけていないので、一発撃たれたらアウトだ。

牧がM320グレネードランチャーを撃ち、中沢がミニミで牽制の弾幕を張る。だがテクニカルは機関銃を連射しながら、徐々に俺達の方に近づいてくる。

よく見れば銃座だけでなく、車体のあちこちが鉄板で防御されている。運転席にはスリットの入った鉄板が張られ、タイヤ回りも防護されている。用意周到なことだ。

俺は機銃の防盾の合間から僅かに見える敵の頭を低倍率スコープの中心に収め、撃つ。射手は頭を撃ち抜かれて崩れ落ちたが、別の構成員が機銃に取りつき、銃撃を再開する。

「どうする、下がるか！？」

「いや、別ルートを取ってもいずれあいつらに出くわす！ここで倒さないと……」

「倒すって、どうやって！？」

「とにかく撃て！撃ちながら考える！！」

そうは言ったものの、俺にだってどうすればいいかなんてわからない。

俺達の放つ銃弾はテクニカルの表面に当たっても火花を散らすだけだった。ACR突撃銃、09式小銃、ミニミ分隊支援火器の5.56mm弾は約1cmの厚さの鉄板を貫通する威力を持つ。だがこの至近距離で撃つても貫通しないということは、あのテクニカルはとんでもなく重装甲であるらしい。

だがライフル弾も阻止する程の鉄板をあちこちに溶接しているせいで、テクニカルの動きは遅かった。だがゆっくり近づいてくる動きが、逆に俺達に圧迫感を与える。徐々にテクニカルが迫ってくる。諦めて後退するか？俺がそう思った時だった。

D棟の屋上から銃火が閃き、テクニカルの進行が止まった。

荷台の射手はなぜいきなり停車したのかわからないようで、一旦射撃を中断して運転席を覗き込もうとした。直後、大きな銃声が響き、射手の身体が真っ二つになった。

『よお、危なかったな』

そう言っただけで俺達に通信してきたのは堂々だった。D棟の屋上に目を凝らすと、堂々がバレットM82対物ライフルを屋上の縁に乗せ、そこからテクニカルを狙撃していた。

いくら分厚い鉄板を張って装甲を強化したといっても、軍用装甲車の装甲板すら貫く12.7mm弾の前には無力だったようだ。今頃運転席の中では、真っ二つになった人体や肉片が散乱するバイオレンスな光景が繰り広げられているだろう。うん、見たくない。

テクニカルに乗っていた残りの敵は、対物ライフルの狙撃に恐れをなして逃げ出した。だが堂々は容赦なく逃げる彼らを撃ち、俺達も反撃に出たことで、あっという間に全滅した。

「堂々、助かった！」

『礼はいいからさっさと来てくれ！早くプレデターのコントロールを復旧させないと』

堂々はそう言っただけで俺達の視界から姿を消した。別の位置に移動して、

他の部隊の援護に向かったのだろう。

俺達は物陰から飛び出し、分裂した人体があちこちに転がる中庭を通り抜けた。D棟の入り口に入る時、この光景は子供達には見せられないなど、俺は頭の隅で思った。

第140話 side 龍 「テクニカル」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第141話 side 優 「降伏か死か」

東さんが助けを呼びに行つて10分が経つた。その間ボク達はひたすら倉庫に立て籠もり、倉庫に侵入しようとしてくる坏組構成員や囚人を銃撃で遠ざけていた。

ついに本格的に侵入してきたらしく、敵が自動小銃や機関銃を装備していることもある。坏組構成員の数が徐々に増え、その上軍隊並の動きをしていた。

「クソツ、なんだよあいつら!? まるでテロリストじゃないか!」

軍司がM870散弾銃ショットガンの切り詰めたモデルに弾シエルを込めつつ、焦っているかのように怒鳴つた。そしてポケットに入っていたシエルを取り落とし、慌てて拾う。

「まったくあの男、何が『助けを呼んでくる』よ! いつになつたら助けが来るのよ!」

由梨が半ばヤケクソ気味に叫び、VZ61「スコープオン」短機関銃サブマシンガンを単発セミオートで発砲する。多分「あの男」というのは、話の内容から東さんのことを言っているらしい。

その長い黒髪を振り乱すように、由梨は遮蔽物のコンテナから身を乗り出し、倉庫の開いた入口から見える囚人達に銃弾をお見舞いしている。しかし敵も動きがよくなって来ており、互いに相手に有効なダメージを与えることが出来ない。

その時、一際大きい銃声が倉庫内に響き、続いて外にいた囚人の一人が頭を吹き飛ばされた。内田さんの64式狙撃銃が火を噴いたの

だ。

「お前達、叫ぶのもいいが撃つんじゃ！奴らが近づいてきたらわざわざに勝ち目はないぞ！！」

内田さんはそう言うて再び引き金を引く。倉庫内に銃声が反響し、木の陰からそつと顔を出してこちらを伺っていた囚人の一人が悲鳴を上げて倒れた。

春名はさつきから気を失っている。内田さんによって頭を吹っ飛ばされた囚人の死体を見て、小さな悲鳴を上げて気絶してしまったのだ。春名はグロい光景がいまだに苦手なので仕方がないのだが、今の状況で戦える人が少なくなるのは厳しい。

ボクもコンテナから身を乗り出し、FNハイパワーを撃つ。だが拳銃なので当然射程や精度の点で命中は望めず、牽制にしかならない軍司の持つ散弾銃と由梨の短機関銃も接近戦用であり、内田さんの持つ64式狙撃銃だけが頼りだ。

倉庫の扉は何度か起きた爆発で歪み、開いたままだった。扉のレールが曲がってしまい閉められないのだ。

そのせいでボク達は直接銃撃に晒されるようになってしまっている。扉が閉められれば少しはマシになるかもしれないが、あいにくこの倉庫は防弾製ではない。閉めたって少しだけ倉庫内に乗り込まれる時間が遅くなるだけだ。

倉庫の壁には銃弾が貫通した穴があちこちに出来、外で燃え盛る炎の赤い光が差し込んで来る。そして坏組構成員や囚人が、銃を手にじわじわ近づきつつある。

この倉庫には食料や被服、そしてわずかではあるが燃料などが集積されている。ここが敵の手に渡ったら、これらの物資はボク達の物

ではなくなる。そうなった場合、ボク達は不十分な装備で四国に向かうことになる。

『わたしは平和実現党所属、参議院議員の辻木清子つじき きよこです！倉庫に立て籠もっている人達、銃を捨てて出てきなさい！わたし達にあなたがたを傷つける意思はありません！わたし達とともに、この国に革命をもたらしましょう！』

外から拡声器を使った女の声が聞こえてくる。参議院議員の辻木とやらが、さつきからボク達に投降を呼び掛けているのだ。辻木は福原と共に何度もテレビに出ているのを見たことがあるが、あの人って秘書の給料が云々とかで逮捕されてなかったっけ？

「帰れ！脳内お花畑女！！」

軍司がそう言つて、返事として銃弾をお見舞いする。辻木は慌てて隠れたが、依然として投降を呼び掛ける声が聞こえてくる。

平和的な人でもよかつたよ。囚人と暴力団構成員を下がらせてから呼び掛けられればもつと説得力があつたんだらうけど、彼らが銃撃を加えてくる中投降しようとする奴はキ〇ガイ以外のなにものでもない。

彼らの言う通り投降したらどうなる？

いや、その前にこの戦いに負けたらどうなるだらう？武器弾薬や装備を全て奪われた状態で放り出されるか、あるいはここで殺されるか。

「ねえ、軍司」

「なんですか優さん？」

「もし、もしもだよ。もし白旗上げて降伏したらどうなると思つ？」

ボクがそう言うと、皆が（気絶している春奈を除く）ボクの方を見た。「アホなの？」とでも言うような目で。案の定、由梨に言われた。

「あんだアホなの？ 投降したところでわたし達の身の安全が保障されると思ってたの？」

「……だよねえ」

「武器弾薬兵器食料その他諸々の物資を全て奪われた上で、男は殺されるかひたすら働かされて、女は連中の性奴隷にさせられるわね。過去の歴史を紐解けばわかることよ？」

性奴隷って。ズバツと言うね。まあそこが由梨のいいところなんだけど。

でも由梨の言う通りだろう。負けたら死か苦痛が待っている。だからボク達は負けることは出来ないし、逆に向こうも全力で勝たなければならぬ。向こうも負けたら、確実に武器弾薬を全て没収された上で追放されるだろう。あるいはボク達はここを出ていくから、刑務所に放置されるかもしれない。

そうなったら彼らはどうなるだろうか？ 答えは簡単だ、内部抗争を起こした後に餓死するかダークシーカーズに襲われてしぬ。元々彼らの食料は少なかったので、今回襲撃を仕掛けてきたのも食料の強奪が目的なのかもしれない。

だが食料が得られず、武器も取り上げられた状態で置き去りにされたらどうなるか？ まず仲間割れが起きる。軍が人体実験を行っていたり食料不足が起きていたから避難民達は平和実現党の側に移ったのであって、利益があるから移ったのではない。食料事情は改善されず、さらに自分達を戦いに巻き込んでいる時点で避難民達の平和実現党に対する印象は悪くなっている。ここで食料を確保出来ず、さらに自分達の安全までもが脅かされてしまったら、避難民達は確

実に暴動を起こす。

「それに投降したところで、軍人は口封じのために皆殺しでしょうね。一時的とはいえ軍属の福田さんがワクチンを作ったのは軍の功績に繋がるから、平和実現党がワクチンを強奪しなら『人体実験を行っていた軍から平和実現党に味方した福田博士が開発した』とか何とかごまかすんでしょう。で、真実がばれないように関わった軍人や刑務官は皆殺し、福田さんも事故死かダークシーカーズに殺されたとか言って始末されるでしょうね。なんせ人の死が珍しくない時代ですから、誰にも怪しまれない」

軍司がM870にシエルを込めつつそう言った。

実際に平和実現党の思惑がそうであつてもなくても、彼らが今現在、ボク達に攻撃を仕掛けてきているのは確かなことだ。そして死傷者も出ている。

どんな理由があろうとも、この事実は変わらない。だから責任者を特定して、然るべき処分を下す必要がある。

なんで、こうなつたんだらうか？

今は人間同士が争っている場合ではないのに、なんで戦っているんだらうか？

今必要なのは争いではない、協力だ。皆で力を合わせて四国に向かい、ワクチンを手渡すのが最優先事項なのに。

こんな非常事態でも争いを起こすほど、人間は愚かな生物なのだろうか？ もしかしてウイルスの蔓延は、そんな人間への天罰ではないのか？

だったらここでワクチンを作ったとしても、それは無駄なんじゃないか？ どうせ人間はまた戦うだらう。

「お前ら救い難いほど愚かだから、ここで死んどけ」というのが、

神の意思なんじゃないのか？

「……さん！ 優さん！ 優さん！！ しっかりしてください！」

軍司のその声で、ふと我に返った。軍司は心配そうな顔でボクを見つめている。

その傍らにはM870と大量の空のシエルが落ちていた。どうやらシエルを撃ち尽くしてしまっただけ、軍司はM92F拳銃だけを握っている。

見れば由梨もVz61を捨て、Cz75拳銃を構えている。由梨の周囲には空薬莖が大量に散らばり、炎の光を受けて赤く輝いていた。

「優さん、弾ありますか？俺はもう予備の弾倉マガジンは2本しかありません」

軍司にそう言われ、ベルトに取り付けてあるマガジンポーチを探した。出てきたのはフル装填されたのが1本だけ。今ハイパワーに入っている分も合わせて、残弾は20発と少ししかない。

「わしもそろそろ64式の弾が無くなる！ あと20発かそこらじや！」

内田さんが発砲しつつ怒鳴る。

「わたしは今入ってるマガジンで最後よ！ もう予備のマガジンはないわ！」

由梨はそう叫んだ。

つまり、皆弾切れ寸前だということだ。しかも拳銃ばかりしかなく、

内田さんの64式狙撃銃もほとんど弾切れしている。

もし弾が無くなったら、ボク達は戦えない。ボク達の反撃が無くなったことを敵が知れば、一気に攻めてくるだろう。そうなればボク達に防ぐ術はない。

一応近接戦用としてスタンロッドを持っているが、これは相手に殴り掛からないと使えない武器だ。敵は銃を持っているから、殴り掛かる前に蜂の巣にされる。

軍司が気絶している春名からM686リボルバー拳銃を借用した。

春奈は元々戦闘要員ではないから整備が簡単なりボルバーを持ち歩いている。ただしリボルバーは威力が高い反面装弾数が少ない。

「なんかデカブツが来たぞ!」

64式狙撃銃の弾を撃ち尽くし、STEIGER拳銃を取り出した内田さんがそう怒鳴った。その声でボクはそっとコンテナの陰から目を出し、そして絶句した。

一瞬、何が倉庫に近づいて来ているのかわからなかった。エンジンの唸る重低音を響かせて、何かデカイ物が近づいてきている。

しばらく見てから、ボクはそれがブルドーザーだということに気づいた。しかもただのブルドーザーではないらしく、全体的に角ばっている。

「鉄板を溶接して、装甲を張ってやがるのか? あれじゃ拳銃だけじゃなくてライフルすら効きませんよ!」

最後の方は悲鳴のようになりつつ、軍司が叫んだ。内田さんが苦々しそうな顔をし、由梨が舌打ちしてCZ75の引き金を引く。

ブルドーザーは倉庫から20メートルほどの距離まで迫っていた。由梨の放った9mm弾はブルドーザーに当たったが、表面に溶接された鉄板に弾かれて空しく火花を上げるだけだった。

ボクや軍司、内田さんも発砲したが、ブルドーザーの進撃は止まらない。ブルドーザーを盾にして坏組構成員や囚人達がその後につき、倉庫に近づいてくる。

これまでなのか？せつかくここまで生き残ってきたのに、人間同士の争いで死ぬのか？

死んだらどうなるんだろう？行く先は天国かあるいは地獄か、それともあの世なんてないのか？

死んだら誰かボクのことを覚えていてくれるだろうか？いや、ないだろう。多分ボクの事を覚えていてくれるのは、九州にいるはずのお父さんやお母さんだけだ。それほど、この一年間で人が死にすぎた。

せめて最期に、お父さんとお母さんに会いたかった。最初のころは何度も二人に会いたくて夜な夜な枕を濡らしたが、それを誰にも見せることはしなかった。親が死んだ子もいたし、年上のボクが泣いていては皆を不安がらせるだけだからだ。でもボクは、今とても泣きたい。

ブルドーザーがゆっくり、しかし確実に倉庫に迫ってくる。皆拳銃を構え、最後まで抵抗するようだ。ボクもハイパワーを握りしめ、そしてブルドーザーに発砲しようとした、その時だった。

シューツという空気を切るような音と共に、何かが物凄いスピードでブルドーザーにぶち当たった。直後、轟音と共にブルドーザーが

爆発炎上する。

その爆発に囚人達が何人か巻き込まれ、敵はパニックに陥った。そしてそこへ、無数の銃弾が浴びせかけられる。

『倉庫にいる人達！　そこから動かないでください！！』

拡声器で増幅された少し割れている声が辺りに響き、続いて倉庫前に何か之急停車した。

8輪のタイヤを持つそれは、この名古屋刑務所警備隊が一両だけ保有する12式装輪装甲車だった。車体後部のハッチが開き、そこから兵士達が飛び出してくる。兵士は装甲車を盾にして、敵に銃撃を加える。

敵も応戦したが、彼らが放った弾丸は装甲車の装甲板に当たり、火花を散らすだけだった。当然だ、軍用装甲車の装甲板は小銃弾くらいなら楽々弾く。

車体上部に取り付けられた12.7mm重機関銃M2の無人銃座が旋回し、銃口を敵に向ける。直後、一際大きな銃声と共に発砲した。吐き出された重機関銃弾は遮蔽物ごと敵を撃ち抜き、その身体を四散させた。さつきまではボク達を圧倒する勢いだった坏組構成員と囚人達は、蜘蛛の子を散らすように逃げはじめた。

『国家権力の犬め！　覚えておきなさい！！』

拡声器のスイッチが入ったままだったようで、辻木がそう罵る声が大きく聞こえた。国会議員がそんなこと言っちゃダメでしょうが……。

「大丈夫ですか皆さん！？　ケガした人はいませんか！？」

装甲車から大山二尉が下りてきてそう言った。彼女もUMP短機関

銃を構え、そしてその銃口からは硝煙が立ち上っている。

よかった、助けが来た。ボクは安堵で身体から力が抜けそうになった。他の皆もほっとしたようで、構えていた拳銃を下ろす。

「東くんが君達を遣したのか？」

内田さんがそう尋ねると、大山二尉は頷いた。東さんは拳銃一丁だけで、銃をもった敵がウヨウヨいる刑務所の中を移動したのだ。

「報告します！敵は一時撤退した模様です。おそらく装備を整えた後、再び攻撃を仕掛けてくるものと思われます」

09式小銃を携えた兵士の一人が駆け寄ってきて、大山二尉に報告する。兵士は見えている限りで8人、他にも車両の中に何人かいるだろうから、全員で15人はいるかもしれない。

「そうか、わかった。三曹、部下を指揮して倉庫にC4を仕掛ける。敵に一切物資を渡すな」

「了解！！」

三曹と階級で呼ばれた兵士は踵を返し、兵士を何人か連れて倉庫内に散らばっていった。彼らの腕には、レンガ大の粘土のような塊が抱えられていた。

あれは、いわゆるC4プラスチック爆弾だろう。まさか、この倉庫を吹っ飛ばすのか？

そうきくと、大山二尉は「そうだ」と答えた。

「ここにある物資を敵の手に渡す訳にはいかない。いくつかは軍用

装備で連中の手に渡ったら大変なことになる」

大山二尉はそう言って、予備の迷彩服などが収まったコンテナを指差した。

そうか、大山二尉は敵に装備を渡してそれが悪用されるのを恐れているんだ。迷彩服や軍服が敵に渡れば、敵は軍人に成り済ますことが出来る。世界は崩壊寸前なので正規にそんな兵士がいるかどうか確認するには時間がかかるだろうし、一般人には確認する術すらない。

もし彼らが兵士に成り済まし、暴虐の限りを尽くしたらどうなるだろうか？国民の軍、ひいては政府への信用は失墜する。平和実現党はそこにもつけ込むつもりだろう。

「でも、持ち出せばいいんじゃないんですか？」

「そんな時間も人手もない。次の攻撃が始まる前にはここを離れる必要がある」

「でも、食料とかはどうするんですか？」

「ここにある分が無くなっても、ギリギリで四国に辿り着けるだろう。さあ行って！早く車両に乗って！爆薬を設置し終わり次第二ここを離れる！！」

大山二尉は話しを打ち切り、ボク達を倉庫から出るように急かした。気絶している春名を軍司が背負い、ボク達は外に出た。

倉庫の前には数両の装甲車が停まっていた。屋根には機関銃が据え付けられ、兵士が周囲を警戒している。

半ば押し込まれるようにして、ボク達は2台ある軽装甲機動車に乗り込んだ。狭い窓から外の様子を眺める。

陽が、だいぶ傾いていた。

第141話 side 優 「降伏か死か」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

D棟にはプレデターの操縦室がある。そして屋上には操作用のアンテナが立っていたのだが、そのアンテナは坏組と平和実現党の攻撃で破壊されていた。どうやら発射された迫撃砲弾が運悪く直撃し、プレデターとの交信が不能になってしまった。

幸いな事に、プレデターは攻撃直前に離陸していた。そしてプレデターは何らかの理由で操縦用の電波が途絶えた場合、操縦が復帰するまで上空を旋回し続けるという機能を持っている。アンテナを直してコントロールが可能になれば再び操縦できるし、その対地カメラを使って刑務所内の状況を確認することも、搭載されたヘルファイア対戦車ミサイルで刑務所内に侵入した敵の装甲ブルドーザーを破壊することも可能になる。ロケット弾や無反動砲などの携帯対戦車火器でも破壊は可能だが、バックラースト後方噴射などの問題で使用出来る場所が限られる。その点プレデターのミサイルは上空から発射されるので、ピンポイントでの空爆が可能だ。

俺と牧、堂々、中沢はD棟の屋上に展開し、攻撃してくる敵部隊を迎撃していた。俺の背後では技術兵達が工具を片手に、損傷したアンテナを必死に直している。アンテナの基部は壊れ、技術兵達は新しいアンテナを建てていた。

「12時方向に敵！」

堂々が叫び、10式狙撃銃を発砲する。中沢は屋上に伏せてミニミ分隊支援火器を連射し、牧が09式小銃に取り付けられたグレネードランチャーを撃つ。

一方俺は、積み重ねられた土嚢を盾にして、三脚に固定されたブローニングM2重機関銃に取り付いた。このM2は大山二尉達の手によって、以前から屋上に設置してあったやつだ。

12時方向、つまり正面に銃口を向け、地上に向けているM2を撃つ。小銃とは比べものにならない銃声と共に、数発に一発の割合で混ぜられた曳光弾がレーザーのような軌跡を夕暮れの空に描く。

刑務所の周辺には、破壊されたり放置された乗用車や、見晴らしをよくするために焼き払われた住宅の残骸がある。坏組と平和実現党そして脱走した囚人達はそれらの陰に隠れながら、じりじりと刑務所に近づいていた。

そこへ俺の放った12.7mm弾が殺到する。12.7mm弾はコングリート程度の壁なら普通に貫通する。木製の壁なら紙のように引き裂く。

民家の残骸からこちらを伺っていた囚人が壁ごと身体を引き裂かれ、人体のパーツが散らばる。周囲の地面が重機関銃弾で耕されたことに怯んだ敵は慌てて後退し、続いて装甲ブルドーザーが前進してきた。

ブルドーザーは運転席の周辺も、分厚い鉄板で覆っていた。元々重機は頑丈に作られており、その上分厚い鉄板を溶接しているのだ。鉄板は装甲板と違って硬さなどが劣るが、それでも厚くすればするほど弾丸の貫通阻止能力が上がる。

装甲ブルドーザーは相当鉄板を溶接したのか、普通のブルドーザーと比べてスピードが遅かった。俺はM2をブルドーザーに向けて撃つたが、停まる心配が見られない。ブルドーザーの後に坏組構成員や囚人が続き、刑務所に向けて前進してくる。

まずいことに、D棟のすぐ近くにある刑務所の塀は、迫撃砲弾の直撃を受けて大穴が開いていた。一人なら楽々入れそうなほどだ。もし敵がブルドーザーを盾にして塀までたどり着いたら、そこから内部に侵入してしまう。俺達の拠点となるD棟は目と鼻の先の距

離だ。

「どんだけ鉄板溶接してるんだよ……。牧、カールグスタフ使え！」

俺がそう叫ぶと牧は頷いて、足元に置いてあった太くて大きな金属の筒を手を取った。

84mm無反動砲、通称「カールグスタフ」。自衛隊時代から保有している対戦車火器だ。戦車の装甲が時代と共に強固になり、携帯対戦車ミサイルの採用もあつて退役するはずだったが、多種多様な砲弾が使用でき、また精密な誘導装置を搭載したミサイルと違って砲弾が安価なため、装甲車両や陣地攻撃用として今だに使用されている。

牧は砲尾を開くと、足元に置いてあった砲弾2発を収容していたケースを手を取った。ケースから砲弾を取り出して砲尾から押し込み、砲尾を閉じて発射態勢を取る。普通は砲手と砲弾の運搬や装填を行う副砲手の二名で運用するのだが、今は人手が足りないこともあつて仕方なく牧が一人で運用している。

カールグスタフの発射態勢が整い、堂々と中沢が牧から離れる。無反動砲は発射時の反動を相殺するため、後方に爆風を噴射する。高温高速のその噴射を食らえば、少なくとも大火傷、最悪シヨック死する。

「後方の安全確認、発射用意よし！」

牧が叫び、俺は「撃て！！」と命じた。

牧がカールグスタフの引き金を引く。直後、カールグスタフの砲身後部から噴射炎が吹き出した。同時に砲口から砲弾が飛び出し、装甲ブルドーザーに向けて飛んでいく。

そして砲弾は装甲ブルドーザーにぶち当たった瞬間に爆発した。ブルドーザーが爆炎に巻き込まれ、燃料に引火したのか派手な爆発が起きる。
壊構成員や死刑囚達が爆発で吹き飛ばされる。彼らの身体が紙のように引き裂かれた。

「……………つしゃあ!!」

牧が叫び、カールグスタフを置く。今にも塀に突撃しようとしていた装甲ブルドーザーは、無反動砲弾の直撃を受けて爆発炎上していた。

どうにか爆発を生き延びた敵は、一旦退いて態勢を整えようとしたのか後退を始める。だが俺達はその背中向けて、容赦なく銃弾を放つ。堂々の狙撃で頭を撃ち抜かれ、中沢のミニミで身体を穴だらけにされ、牧のグレネードランチャーの破片で切り刻まれ、俺のM2重機関銃で真っ二つにされた。

背中を見せて逃げる敵を撃つのは気持ちの良いことではない。だが殺さなければ殺される。もはやこれは権力闘争云々の前に、どちらが生き残るかの戦争だった。容赦すれば、こちらがやられる。

M2に装填してあつた銃弾を撃ち尽くした俺は、近くに置いてあつた弾薬ケースを手にとつて再装填を始めた。普通なら給弾手がいて装填してくれるのだが、今は人手不足なので自分でやるしかない。元々この刑務所に駐屯していた部隊は一ヶ月以上前に新型ウィルスのおかげで半分が死に、挙げ句の果てに今回の襲撃だ。一体何人が殺され、負傷したのか、いまだに正確な数はわかっていない。

ベルトリンクを機関部に押し込み、給弾力バーを閉じた。装填レバーを二度引き、薬室に初弾を装填した。

再装填を終えてグリップを握った俺の視界の隅で、何か動いたのがわかった。俺はとっさにその方向にM2の銃口を向けたが、次の瞬間には、驚愕で目を見開いていた。

それはいわゆるピックアップトラックというものだった。車体の全部に屋根付きの運転席があり、後部には屋根がない荷台がある。

だがそのピックアップトラックは普通ではなかった。荷台には三脚が据え付けられ、その上に細長い金属の筒が乗っている。

いわゆる、車載式の無反動砲である。

「ヤバいやババい逃げる!!」

俺はそう叫び、銃座から離れた。直後、赤い光の矢が銃座の土嚢に突き刺さる。照準補助用のスポッティングライフルを発射したのだろう。通常車載式の無反動砲はスポッティングライフルをまず撃ち、弾が目標に命中したら無反動砲を撃つ。照準を確実にするためだ。今、土嚢にスポッティングライフルの弾が命中した。ということは、次には無反動砲弾が飛んでくる。

シューツという音が聞こえた。俺は近くにいた堂々の防弾チョッキの襟首を掴み、必死に走って銃座から離れる。

車載式の無反動砲は携帯式と違い、重量の制限がほとんどない。だから砲身を長くして命中制度を上げたり、口径を大きくして威力を上げることが可能だ。

今の戦車にはさすがに威力不足かもしれないが、それでも昔は対戦車用として使用されていたのだ。そんなものを人間が食らったら、それこそミンチ肉の仲間入りをするかもしれない。

俺から離れた場所にいたので、中沢と牧を掴むことは出来なかった。

二人は俺の後を追い、無反動砲弾が直撃するであろう銃座から離れる。

と次の瞬間、中沢が大きく姿勢を崩した。屋上に着弾した迫撃砲弾のせいで屋上は大きくひび割れていたりコンクリートが剥がれていて、中沢はそこにつまづいたのだ。

走る俺と牧と堂々、そして離れていく中沢。「中沢っ！」と叫んだ俺が引き返そうとした瞬間、

銃座に無反動砲弾が着弾した。

爆発で発生した炎に一瞬視界を潰され、続いて襲ってきた爆風に吹き飛ばされる。背中からコンクリートの屋上に叩きつけられた俺は、一瞬呼吸困難に陥った。

牧と堂々は屋上に伏せ、爆風をやり過ごしたようだ。無人機用のアンテナを修理していた技術兵達にも怪我はなさそうだ。中沢は、中沢はどうなった？

黒々とした煙が晴れた時、そこには血まみれの中沢が倒れていた。

「中沢ーっ!!」

俺と牧は叫び、そして倒れた中沢に駆け寄る。堂々が10式狙撃銃を構え、無反動砲の射手を射殺した。

中沢の迷彩服はあちこちがずたずたに裂けていた。かろうじて胴体

や頭部は防弾チョッキやヘルメットで守られたようだが、それ以外の部分は砲弾の破片が突き刺さっていたり引き裂かれたりしていた。右足の肉は大きく裂け、その間から骨が見えている。

中沢が呻き声を上げ、どうにか生きていることがわかった。だが全身のあちこちに鋭利な金属片が突き刺さり、大量に出血している。このままでは出血死してしまう。

とその時、技術兵達が「修理完了しました!!」と言って駆け寄って来るのが見えた。

「お前達、中沢を医務室まで連れていってくれ。素早い手当てが必要だ」

「はっ！ ですが、屋上の防衛は……？」

「俺達三人でなんとかなる！ お前達は戦闘員じゃないだろう、さっさとコイツと一緒に下に戻れ！」

「了解しました、東二曹！」

二人の技術兵はそう言って、中沢に肩を貸して立たせた。中沢は身体が大きいので、二人がかりでないと運べないのだ。

重量を軽減させるため、中沢の持っていたミニミとその弾薬を置いて行かせる。

呻き声を上げつつ、中沢は苦しそうに「すまん……」と言った。

「大丈夫だ、お前がいなくてもなんとかなる」

「そつだそつだ、さっさと戻れ」

牧と堂々が茶化すように言う。だが彼らも本当は中沢を心配し、不安なのだ。だから不安に押し潰されないようにふざけて言っているのだ。

「お前は自分の心配をしろ。これは命令だ」

俺がそう言うと、中沢は痛みを堪えて無理矢理笑顔を作り、「了解」と返した。普段は階級なんて関係ないのに、こういう時だけ階級を持ち出す俺は、自分勝手なのだろうか。

技術兵達が中沢を下の医務室に連れていった後、俺はアンテナのすぐ傍で屋上に伏せていた高木のもとに駆け寄った。高木はノートパソコン（軍用なので頑丈に作られているため、異常に分厚い）とアンテナをコードで繋ぎ、さらにノートパソコンにジョイスティックを繋いでいた。ここからプレデターの操作をするらしい。

プレデターの管制室は迫撃砲の攻撃を受け、使用不能になったらしい。今そちらでも技術兵達が操縦を再開出来るよう機器を修理しているが、まだ時間がかかるのだという。

高木が開いたノートパソコンの画面に、上空を旋回するプレデターから送られてきた刑務所の映像が映し出された。

「見えない場所が多いな。ここから操縦は出来ないんだよな？」

「ええ。無人機は有人機の操縦席をそっくりそのまま後方に持ってきたものですから、こんなジョイスティック一本じゃ操縦できませんよ。レバー二本とボタンで鉄人28号じゃないですし」

「……お前、古いネタ知ってるな」

ともかく俺は大山二尉に、プレデターとの交信が再開したと無線で連絡した。大山二尉はすぐさま、刑務所内に侵入した装甲ブルドーザーを破壊せよと命令してきた。頑丈なブルドーザーを盾にして、敵があちこちから攻撃してきているらしい。テクニカルも数台、機関銃などを搭載して随伴しているようだ。

高木がジョイスティックを操作すると、ノートパソコンの画面に映し出される映像が移動した。プレデターの機体下部に取り付けられた対地カメラは操作出来るのだという。

上空から見た刑務所は、あちこちから火の手が上がっていた。そしてところどころで閃光が光る。多分銃火だろう。

「FLIRに切り替えます」

高木がそう言うと、画面が一気に暗くなった。赤外線カメラに切り替えたのだ。

炎などでところどころが白い映像の中、白い人影がちらほらと移っている。熱を発している物体は白く表示されるので、あれは人間だ。

「こちら高木。ヘルファイアの発射準備が整いましたが、敵味方の識別が困難です。後退して建物に入るか、何か対策をお願いします」
「こちら大山、了解した。全員、赤外線ストロボを装着せよ！ ミサイルが降ってくるぞ！！」

無線の向こうで大山二尉が言うと、しばらくしてから、白い人影のいくつかの身体から白い光が点滅し始めた。赤外線ストロボを起動したのだ。

赤外線ストロボは兵士のヘルメットや肩などに装着する機器だ。起動すると赤外線暗視装置越しにしか見えないフラッシュを連続して焚き、敵味方の識別を容易にする。

ストロボが点滅している人影は、点滅していない残りの人影に比べ圧倒的に少ない。それほどこちらに死傷者が出ているのか、あるいは押されて建物内まで後退しているのか。どちらにしてもまずい状況である。

「味方の識別確認。攻撃目標の指示をお願いします。武装はヘルフ

「アイア対戦車ミサイルが三発です」

「刑務所内に装甲ブルドーザーが三両侵入している。それを破壊してくれ！」

「了解、攻撃を開始します」

高木はそう言つて、ジョイスティックの上部にあるカバーを親指で弾いた。中からは赤い発射ボタンが現れる。

赤外線の内黒の映像のなか、ブルドーザーが見えた。排気熱が人間の体温に比べて高いので、人間に比べてより白く表示されている。

刑務所内に侵入しているブルドーザーは、大山二尉の言う通り三両プレデターが搭載しているヘルファイアも三発。ちょうど使い切つてしまう数だ。刑務所の外にはブルドーザーやテクニカルが数両走っているが、それは対戦車火器で破壊すればいい。

刑務所内は建物が多く、さらに周囲を塀で囲まれている。そんな状況ではたいていの対戦車火器が放出するバックブラストにより自分も被害を受けてしまうため、射点が確保出来ずに攻撃できないだけだ。外への攻撃なら問題ない。

ロックオンが完了したことを告げるアラームが鳴り、対地カメラが一台の装甲ブルドーザー捉え続ける。ブルドーザーの周囲に、何人か赤外線ストロボが点滅していない人影がいる。

「攻撃開始！ 吹っ飛ばしてやる！！」

高木が叫び、ジョイスティックの発射ボタンを押す。俺は唐突に、数週間前に高木がヘルファイアでダークシーカーズの群れを空爆した時のことを思い出した。あの時の高木は、人が変わっていた。画面の中心に映し出される装甲ブルドーザーに、白い光点が近づいていく。同時に俺も、上から何かが落下してくるのがわかった。

火災の明かりを反射して、キラキラと光る細長いものが落ちてくる。後部から噴射炎を吹き出し、重力と推進力の力で一気に地上に落下

していくヘルファイア対戦車ミサイルは、次の瞬間建物の陰に隠れて見えなくなった。

直後、大きな爆発音とともに、火災の炎に負けない火柱が立ち上る。

「イエア！ 命中！！」

高木がテンション高く叫ぶ。ノートパソコンの画面の中では、装甲ブルドーザーが爆発炎上して赤外線カメラの白黒映像を真っ白に染めていた。

『よしいいぞ、もっとやれ！！』

大山二尉がそう言い、別のブルドーザーをロックオンした高木が発射ボタンを押す。

画面の中で、ブルドーザーに向けてヘルファイアが降下していく。5秒もかからない内にヘルファイアはブルドーザーに直撃し、画面が一瞬真っ白に染まった。同時に、俺の耳に再び爆発音が聞こえてくる。

『目標破壊、最後の奴をやれ！！』

また、発射ボタンが押される。画面の中で、慌ててブルドーザーから白い人影が離れていく。どうやらブルドーザーが標的となっていることに、ようやく気づいたようだ。

だが彼らが走って逃げ切る前に、ヘルファイアがブルドーザーに着弾した。人影が爆発に巻き込まれ、爆風や破片でバラバラに引き裂かれるのがわかった。

「すべての目標を破壊！ 敵は撤退していきますー！」

高木の言う通り、敵が次々と刑務所内から逃げていく。テクニカルが猛スピードで走り、破壊された門から出ていく。逃げていく敵に対して、赤外線ストロボが点滅している味方が銃撃を浴びせ掛けた。

「刑務所に侵入していた敵の半数は射殺されたか、逃げ出した模様」
『了解。全部隊、今の内にD棟まで後退せよ。撤収準備を進める。』

高木三曹、一旦中に戻って来い』

「了解しました。これよりそちらに」

高木が急に、話すのを止めた。画面にくぎづけになり、「は？」とでも言うように口を開けている。

「どうした高木。何かあったのか？」

「……東二曹。南東方向に、多数の熱源を確認しました。こちらに向けて移動しています」

「何っ!？」

俺は高木のノートパソコンの画面を見た。画面の端っこの方に、いくつもの白い物体が見える。

高木がジョイスティックやキーボードを操作し、その物体をズームした。そして俺は、顔から血の気が引いていくのを感じた。

両手両足を大きく振り、走る人影がいくつも映っていた。10や20ではない、百単位で数えた方が早い数だった。

ダークシーカーズである。

第142話 side 龍 「狩人」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第143話 side 籠 「最終決戦」

俺は高木のノートパソコンの画面に映し出される、刑務所目掛けて押し寄せて来るダークシーカーズの姿を見て言葉を失った。そして屋上に積み重ねられていた机代わりらしき木箱の上に置かれていた赤外線暗視装置を取り上げ、装着する。

無倍率なので遠方の様子はよく見えない。だが遠くから津波のように、白い物が押し寄せて来るのが見える。

今使っているのは赤外線暗視装置。赤外線暗視装置には熱を発する物体は白く表示される。熱を発する物体というのたたいてい人間か動物である。

つまり、今迫ってきているのは確実にダークシーカーズなのだ。あれがマラソンをやっている何百何千という人間でもないかぎり。

「おい高木、大山二尉には連絡したのか!？」

「まだ連絡は取れていません! おそらく通信機が故障したのか、あるいは戦闘が激しく通信に出られないかのどちらかだと思われます!..!」

クソッ、こんな時にかぎって連絡が取れないとは。大山二尉が通信に出てくれるのを待つか、あるいはこちらで勝手に皆にシエルターに待避するよう伝えるかだ。

無論、指揮官である大山二尉と連絡が取れていれば、彼女がすぐさま指揮を下していただろう。だが彼女とは連絡が取れない。だから俺達が考え、行動しなければならぬ。

俺の考えは決まった。

「この場にいる最上級者として命じる！ 高木三曹、お前は無人機で目標の位置を確認しつつ、随時他部隊に報告。俺は他の部隊に撤退するよう伝えるので、他の者はその間感染者の進攻を阻止せよ！ 連中がなだれ込んで出来たら脅威度はヤクザの比じゃないぞ！」

俺が指示すると、皆は「了解！」と答えてそれぞれ行動を開始した。高木はノートパソコンの画面を注視し、堂々は屋上に伏せ、バレットM82対物狙撃銃を発砲する。ここからダークシーカーズまではかなりの距離があり、突撃銃などでは到底弾が届かないのだ。バレットなど、50口径クラスの銃器があれば射程は問題ないのだが、50口径のブローニングM2重機関銃は先程坏組のテクニカルに搭載された無反動砲の攻撃で破損してしまった。なので今俺達に遠くのダークシーカーズを攻撃出来る装備は、堂々のもつM82しかない。

もつとも、敵がもつと接近してくれば突撃銃や軽機関銃の射程内に入るのだが、そうならあつたという間にダークシーカーズは刑務所内に侵入してくる。一分一秒でも、皆が安全なシェルターに待避する時間を稼がなければならぬ。

ふと俺は、初春市にいた時のことを思い出した。去年の大晦日、浜浦小学校にいた俺達はダークシーカーズの襲撃を受けた。今と同じような状況だった。

あの時は俺の力が足りず、多くの子供達が死んだ。俺がここまで連れてきた子供の中には、自らの手でダークシーカーズとなった友人を撃つ、という辛いでは済まされない経験をした者もいる。

だからこそ俺はあの悪夢を再び蘇らせてはならないのだ。あの時と今は似たような状況だ。だが違う所はここには多くの兵士達がいることと、俺には子供達を失って得た経験がある。

あんな地獄、二度と蘇らせてたまるか……！！

そういえば、あの後別れた澤田達はどうなったんだろうか？俺達と一緒に来るよう言ったのに、俺を信用出来ないと自転車北海道に向かった彼らは、今どこにいるんだろうか？

道中で何もなければ、とつくの昔に北海道に到着しているだろう。俺達は途中で八方村だったり新型ウイルスのゴタゴタで予定が大幅に狂ってしまっていた。彼らは無事に北海道に辿り着けたのだろうか？

……いや、そんなことを考えるのは後回しだ。今の俺達は数千体のダークシーカーズの攻撃を受けようとしている。奴らは以前と違って頭もよく、そして武器まで使う。朝まで持ちこたえなければ、俺達の負けだ。そして朝まで長い。

戦って生き残らなければ、他人の心配すら出来なくなるのだ。だから今は、生き残ることに専念しなければならない。

俺は木箱の上に置いてあった携帯無線機を取ると、早速頭にヘッドセットを装着して他部隊と連絡を取る。

「こちら東二曹、誰かこの通信を聞いている者はいないか？ いたら返事をしてくれ、緊急事態なんだ！！」

俺がそう呼び掛けても、返ってくるのは静寂だけだった。まさか、もう全員坏組にやられてしまったのか……？

いや、まだ銃声はあちこちから聞こえている。きっと通信に出る余裕がないか、そもそも俺が通信していることに気づいていないんだ

！ なら余裕を作って気づかせればいい。

「牧、信号弾を打ち上げる！！」

「弾種は？」

「赤だ！」

牧は頷くと、手にした09式小銃の銃身下部に取り付けられたM3 20グレネードランチャーの砲身をスライドさせた。そして通常の榴弾よりも長い信号弾を装填し、刑務所内に向けて斜め上に小銃を構え、M320を撃つ。

ポン、と軽い音と共に、硝酸ストロンチウムが燃烧するシューツという音がして砲口から赤く燃烧する信号弾が撃ち出される。鮮やかな赤い光を発する信号弾は、しばらく飛んでから燃え尽きたのか光が消えた。だが信号弾が発射された一瞬の間に、銃声が途絶えていたのが俺は確かにわかった。皆発射された信号弾を見て、一瞬だけ戦闘を止めたのだ。

赤の信号弾は「敵発見」を意味する。牧が発射した信号弾のおかげでその事が皆に伝わったようで、すぐに通信が入ってくる。

『こちら第二分隊の赤城です。今の信号弾は何なんです？』

「赤城か？ そっちには何人いる！？」

『自分と青野、そして第三分隊の隊員が2名です。敵の攻撃を受けて分断されてしまいました。現在地は刑務所内南東の第9倉庫付近です』

「いいかよく聞け！ 今プレデターで確認したところだが、刑務所の南東方向から数千体のダークシーカーズが接近中だ！ この無線を聞いている者はすぐに周囲の者に伝えるんだ！！ 坏組なんて放つておいて、逃げ遅れた人達をシエルターまで誘導しろ、以上！！」

『本当ですかそれは！？ ……了解しました。これより逃げ遅れた民間人の避難誘導及び感染者の迎撃に向かいます』

他の部隊も次々と俺達と交信してきた。

「こちら大山！ すまない、無線機が破壊されて今まで通信出来なかった！ 現状を報告してくれ！」

「大山二尉！？ よかった、これで指揮を引き継ぎますね……。感染者は南東方向、約3キロの距離にいます。プレデターはミサイルを全て撃ち尽くして偵察しか出来ません。もうすぐ対物狙撃銃と重機関銃の射程に入りますが、D棟の屋上に設置されていたものは敵の攻撃で破壊されました」

「よし、わかった。東二曹、これからは君が防衛戦闘の指揮を取れ」
「はあっ……！？」

いきなり出た大山二尉の指揮権移譲の言葉に、思わずそんなマヌケな声を出してしまった。

この刑務所にいる軍人の中で最上級者は大山二等陸尉だ。俺の階級は海兵二曹、二尉より5つも下だ。しかも俺の上にも上級者は何人かいる。大山二尉を始めとした上級者が次々死傷して指揮が困難になって俺が指揮を引き継ぐことになったならまだわかるが、大山二尉達は今だに健在だ。何故俺が指揮を引き継がなければならないんだ？

「なぜ自分が指揮を？大山二尉は無事なんでしょう？」

「刑務所内外の状況が一番よくわかってるのは君だ。D棟は刑務所の中で一番高いし、そこにはプレデターを操作する高木三曹もいる。刑務所を防衛するには、状況が一番よくわかる場所にいる人間が適任だ。他の者は今手が離せない、君しかないんだ」

「しかし、自分一人では……」

「何も君が全ての指揮をしろと言っているわけではない。君は感染者の接近を阻止するか到達を遅らせる。私は刑務所内を回って逃げ

遅れた者達をシェルターに連れていく』

つまり、刑務所の防衛は俺が指揮を取り、逃げ遅れた民間人や兵士、刑務官達を救助するのは大山二尉が指揮するらしい。確かに大山二尉が防衛戦闘も生存者救助も指揮するのは困難だろう。だが、俺に出来るのか？

『君は初春市で、乏しい戦力で子供達の半数を助けたんだらう？
なら大丈夫だ』

『そうですね東さん！！』

『東さん、あなたなら出来ます！』

突然、若い声が割り込んできた。この二週間ほとんど人と接していなかった俺だが、すぐに誰の声かわかった。

『優、軍司！？ おまえらどこにいるんだ！？』

『大山さんに救助してもらったんですよ！！今撤収準備をしています！』

『逃げ遅れた人達の救助は俺達も手伝いますんで、東さんは安心してダークシーカースの迎撃にあたってください！』

優と軍司の言葉を聞いて、自信が湧いてきた。

よし、やってやる。もう誰も死なせるもんか。俺達は生き延びて四国に向かい、そして世界を救うんだ……！！

「……よし！ 全部隊、自分は東二曹です。たった今、大山二尉から防衛戦闘の指揮を任せられました。自分がこれからは戦闘の指揮を取ります」

俺がそう無線で言うと、『了解』といくつも返事が返ってきた。早速、俺は指揮を下す。

「東より迫撃砲分隊、聞こえていますか？」

「こちら迫撃砲分隊の榊曹長。^{さかき}聞こえている、指示を頼む」

まずは別の棟の屋上に展開している迫撃砲分隊に、南東方向へ砲弾を次々打ち込んでもらう。先程の戦闘で迫撃砲も攻撃を受け破壊されてしまったが、予備の迫撃砲を展開させて砲撃準備はすでに整っているという。

81mm迫撃砲L16の射程は約5キロ、すでにダークシーカーズの群れは射程内に入っている。しかも大群が押し寄せて来るのだ、適当に撃つても当たるだろう。

迫撃砲が砲撃を始め、しばらくして遠くで爆発が起きる。高木がブレダターの映像をもとに弾着観測を行い、弾着地点の修正を指示する。

続いて俺は、刑務所を取り囲むように設置された爆薬が使用可能かを確かめた。放置された乗用車にはC4爆薬がしかけられ、地雷やクレイモア指向性散弾も仕掛けられている。それらの距離は刑務所から500メートル、これで倒せなかつたらあつという間にダークシーカーズは刑務所に到達する。しかも、一回使ったら後はない。刑務所内外を一望出来るD棟の屋上には、それらの罠の起爆装置がある。有線での操作だが、起爆が可能なことを示す緑色のランプはしっかり点っている。花火大会での打ち上げ花火の着火装置にも似た、いくつもボタンとランプがついた起爆装置を置くと、続いてセントリーガンの操作を行う携帯端末を手に取った。

セントリーガンは三脚の上に遠隔射撃装置のついたM134ミニガンを搭載したものだ。赤外線センサーなどが搭載され、接近してくる物体を無差別に攻撃する。あれがあれば簡単に弾幕を張り、兵力

不足を補えるのだが、端末にはエラーが表示されていた。どうやら先程の坏組の攻撃で、機器が破損してしまっただけらしい。

刑務所の壁には装甲ブルドーザーやテクニカルの無反動砲で開いた大穴がある。あそこを今から塞ぐ暇はないのでセントリーガンを配置して時間稼ぎをしようと思ったのだが、故障しているのでは使い物にならない。

するといきなり、さっきまでプレデターコントロール用のアンテナを修理していた技術兵達が歩み出た。

「セントリーガンは自分達が修理に行きます！ 許可を下さい！！」

「危険だぞ？ 感染者はもうすぐ刑務所に到達するし、まだ坏組や平和実現党が残っているかもしれない」

「どっちにしるここに感染者が到達すれば危険です！ 自分達だけでなく、逃げ遅れた人達も危険に曝されます」

「……わかった。頼む」

俺がそう言うと、二人の技術兵は頷いて階下へ繋がる階段を駆け降りて行った。あの二人は電気配線などに詳しいというから、セントリーガンの修理も可能だろう。というか、出来なかつたら言い出したりしない。

だがあの二人だけで修理と自衛は無理だ。他の隊員にも援護させなければ。

「こちら東。今技術兵が二人、南東方向に配置してあるセントリーガンの修理に向かった。誰かその近くにいないか？ いれば、彼らの援護をもらいたい」

『こちら第四分隊の山寺です。久しぶりですね、東二曹。現在海原、白井、黒田とともに行動中です。我々が行きます！！』

「山寺、頼んだ！」

俺はそう言っ
て通信を終えた。

着々と防衛態勢は整っている。ダークシーカーズが到達する前に、
完全にしておかなければならない。

俺達は、ここで死ぬわけにはいかないのだ。

第143話 side 龍 「最終決戦」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

平和実現党や坏組に物資を奪われまいと倉庫に爆弾を仕掛けていた兵士達が、大山二尉の「作業中止！」という叫び声で動きを止めた。軽装甲機動車の中にいるボク達に、兵士達を引き連れた大山二尉が駆け寄って来る。

「さつさとここを離れるぞ！ シェルターに向かう！！」

「ちよ、何があつたんですか？ 倉庫の爆破はどうするんですか？」

突然の出来事に混乱しつつも、軍司が大山二尉に尋ねる。

そつと、隣に座る由梨の顔を伺った。由梨は狭い窓から外を眺め、険しい表情をしている。

「感染者に気づかれた、今大群がこっちに向かって来ている！！」

「大群！？ 数は？」

「詳しい事はわからない！ 東二曹の話だと、南東方向からまっすぐこっちに来ている。数十分以内にここに到達する！」

だから大山二尉は倉庫の爆破を中止して、刑務所内のあちこちに隠れている民間人を救助しつつシェルターに向かうと言う。シェルターは元々あった刑務所の房や地下室を流用して作られたもので、ダークシーカーズの襲撃を受けた際にそこに隠れ、朝が来るのを待つための避難所だ。シェルターは頑丈なのでダークシーカーズの侵入を防ぐ事が出来るが、シェルターに到達出来なかつたら意味がない。しかも避難してくる人に混ざって噛まれた人が内部に侵入する事を防ぐため、一定時間経つたら内部での感染防止のため封鎖される。

時間内にシエルターにたどり着けなければ、ダークシーカーズがうごめく真っ只中に放り出されてしまうのだ。

兵士達が慌てて装甲車や高機動車に乗り込み、急発進する。高機動車やトラックには救助されたとおぼしき人々が、疲れたような表情で座り込んでいた。

「わたし達はこれから残りの民間人の救助に向かう。君達は途中でシエルターに下ろす」

助手席に座った大山二尉がそう言ったので、ボクは我に返った。

ボク達は民間人だし、まだ子供だ。だから大山二尉はシエルターに避難させようとしているのだろう。

そうだ、ボク達は子供だ。だから戦わなくなつて文句は言われぬ。ボク達は庇護されるべき存在であるから、戦いは大人がやってくれ。大山二尉を始めとした兵士も沢山いる。ボク達が戦わなくても、誰も文句は言わない。

ボクは怖かった。今まで散々ダークシーカーズと戦ってきたのに、今さら戦うことが怖くなつたのだ。

ボクの腕が震えている。押さえ付けても震えは止まらない。

今まではダークシーカーズとの戦いだつた。相手は銃なんて使わず、こつちが一方的に撃ちまくって敵がまっすぐ突っ込んで来るのを待つだけだつた。

でも今は違う。刑務所内外に銃で武装した坏組構成員や彼らに協力する避難民がいる。彼らはボク達を敵だと認識し、攻撃してくる。先程までの攻撃の勢いは弱まったとはいえ、今でも刑務所のあちこちに潜伏して攻撃のチャンスを伺っているのだろう。ダークシーカーズが迫ってきている事も知らずに。

この権利争いは今や戦争となっていた。銃弾が飛び交い、砲弾が爆発して建物を破壊する。ボクが今まで経験したことのない戦いが、刑務所内で繰り広げられていた。

八方村でも人間相手に戦ったことがあるが、あの時のイシヴァラ教徒の武装は貧弱だったし、ボク達を殺そうとはせずに生け贄とするために捕まえようとしていた（今思い出すとゾツとするけど）。でも坏組は自動小銃や機関銃に加え、装甲を張ったブルドーザーや無反動砲を搭載した小型トラックを装備している。まるでどこかの紛争地帯の軍隊のようだ。そして練度も高く、兵員の数もボク達に比べて多い。

正直言つて、逃げ出したい気分だった。自分が殺されるかと思うと、身体の震えが止まらない。

もう嫌だ。こんな所にいたくない。さっさと安全な場所に避難したい。それが正直な感想だった。

突然、ガンガンガン！ という激しい音が車内に響き、ボンネットの装甲板に火花が爆ぜるのが見えた。隠れていた敵に銃撃を受けたのだ！

すぐさま12式装輪装甲車の屋根に据え付けられた重機関銃が火を噴き、銃弾が飛んできた方向へ撃ち返す。敵はどうやら放置された自動車の陰から撃ってきたらしく、12.7mm弾に貫かれて自動車に穴だらけになるのが見えた。

「クソッ、こんな時まで人間同士でドンパチか！ 君達、もう少ししたらシェルターだからな！！」

後少しで、ボク達はシエルターに避難出来る。そうすればもう、人間同士の戦いに巻き込まれずに済む。ダークシーカーズとも戦わずに済む。命の危険は格段に減る。

でも、それでいいのか？ 嫌な事、危険な事は大人に押し付けて、自分はさつさと安全なシエルターに逃げるのか？

大人達だってさつさと逃げ出したいだろうに。兵士達だって戦いのせいで死傷者が続出し、今では無事な兵士の方が少ない。少ない兵員で、刑務所のあちこちに隠れている避難民達を救助しなければならぬのだ。

ボクにも出来る事はある。それは銃を取って戦い、彼らを助ける事だ。

さっきの倉庫での戦闘は敵に攻撃されてやむを得ず反撃したようなものだった。だが兵士達と共に避難民を助けるべく戦うというのは、こちらから積極的な攻勢に出るという事だ。当然、危険度も高い。

このままさつさとシエルターに逃げ、自分だけ安全な場所で朝が来るのを待つのか？
それともまだ避難していない人々を助けるため、銃弾が飛び交う戦場に踏み込むのか？

答えは決まっていた。

「大山さん、ボクも戦います。一人でも多くの人を助けたいんです

！」

ボクがそう言うと、大山二尉は呆気に取られたような表情でボクを見た。何か言いたいのか口を動かしていたが、言葉が見つからないのだろう、しばらくしてようやく喋った。

「……本当は来るなと言いたい所だが、今は一人でも多く戦える奴が欲しい。だが戦う相手は人間だ。危険性は今までの感染者相手の戦闘よりも格段に高い。それでも君は戦ってくれるのか？」

「もちろんです。自分一人でさっさと逃げ出して安全な所に隠れるなんて、そんな卑怯な事は出来ません」

大山二尉と運転席の兵士は何か辛い事に耐えるかのように顔をしかめていたが、やがて「よろしく頼む」と言っただけを向いた。

おそらく彼らはボクが戦うのを出来れば回避したかったのだろう。だが世界がこんなになってから、ボクは子供でいる事が出来なくなった。責任を負い、大人にならざるを得なくなった。だからボクも戦わなければならない。子供だから、という理由は通じない。

「軍司、由梨。二人は春奈を連れてシエルターに避難して」

「何言ってるんですか。優さん一人を戦場に放り出す訳にはいきませんよ」

「そうね。それにわたし達の方が、アンタよりも戦えるわ」

軍司と由梨はそう言って互いに顔を見合わせ、ニヤリと笑った。どうやら、二人もボクと一緒に避難民の救助についていくようだ。

どうせボクが止めたって聞かないだろう。というか、ボクには止める権利はない。二人が戦うと決めたのだ。大山二尉がそうしたように、ボクも二人の意思を尊重しなければならない。

「で、この気絶したままの春奈はどうするの？」

「先にシエルターに運ぼう。春奈は元々戦闘要員じゃないし、春奈は衛生要員だ。後からシエルターに避難してきた人達が怪我をしていたら、春奈が必要になる」

ボクはそう言つて、気絶したままの春奈の顔を見つめた。

今度は死なせはしない。詩織は子供達を守るために自ら命を絶つたが、春奈にそんな事はさせはしない。今度こそ、ボクは友人を守つてみせる。

すぐに、シエルターのある収容棟の一つに車列は到着した。

シエルターは刑務所のあるちこちに設置されている。これは一箇所に全員を集めるだけのスペースが無いことや、全員が集まった場所で感染が起きたらあつという間に感染が広がってしまうことからである。リスクを少なくするため、避難場所も分散しているのだ。

車列が停止するなり高機動車の荷台から、救助された人々が飛び降りてシエルターに駆け込んでいく。

収容棟の前には土嚢が積み上げられ、軽機関銃が据え付けられて簡易陣地が作られていた。そして陣地の中には弾薬箱が並べられ、銃が数丁とその弾薬が周囲に並べられている。陣地の中には空薬莖や分離したベルトリンクが散乱し、激しい戦いが繰り広げられていたことが伺える。

「銃を持って！ 補給が完了次第、すぐに出発する！！」

大山二尉の言葉で、ボク達は陣地に置かれていた銃とその弾を手にとった。さっきの倉庫の戦闘では拳銃しか持っていなかったし、その弾も撃ち尽くしてしまった。

ボク達が銃を選んでいる間、内田さんは大山二尉と何事かを話し合っていた。しばらくして内田さんは大山二尉に頷くと春奈を背負い、陣地に置かれていた狙撃銃を持って収容棟に駆け込んで行った。どうやら、屋上から狙撃でボク達を援護し、シエルターを警備するようだ。

ボクは置かれていた武器の中からMP-5短機関銃を手に取った。警察や軍隊でよく使われているこの短機関銃は、ボクが初春市にいた頃からずっと使っていた物だ。ついでに拳銃の弾が入ったプラスチックの箱をポケットに押し込み、ボクは軽装甲機動車に戻った。拳銃は空の弾倉があるので、再び弾を込めれば問題はない。軍司と由梨もそれぞれ武器と弾薬を装備し、軽装甲機動車に乗り込む。大山二尉は別の車両に移ったらしく、車内には運転する兵士とボク達三人しかいない。

「出発する。ドアを……」

兵士が最後まで言う前に、開きつ放しだったドアから誰かが滑り込んできた。多賀さんだった。

「アンタ達ガキだけを戦わせるのは大人の威厳に関わるからね、アタシも行くよ」

多賀さんはそう言って器用に狭い車内を移動し、屋根のハッチから身を乗り出して屋根に据え付けられたミニ軽機関銃を構えた。耳を澄まさずとも、刑務所のあちこちから銃声が聞こえて来るのがわかった。それが坏組に応戦している銃声なのか、それとも刑務所に近づきつつあるダークシーカーズを迎撃している銃声なのかボクにはわからない。

ただ一つわかることは、ここで戦わなければボク達に未来は無いということだった。朝になり、ボク達が冷たい骸になって頃がっているのか、それとも理性を失った怪物達の仲間入りをしているのか。ボク達が死ねば、福田博士が開発したワクチンはどこにも届けられない。人類は救われない。だからボク達は、死ぬ訳にはいかない。

『 行くぞ！！』

無線機から大山二尉の力強い声が流れ、空気を震わせるエンジン音と共に、避難民を救助すべく車列は出発した。

第144話 side 優 「決意」(後書き)

御意見、御感想お待ちしています。

なお、後数回で最終話の予定です。最後まで頑張ります。

第145話 side 龍 「進化」(前書き)

本当に、最近何かクオリティが落ちて来てます。本当にすみません。

負傷した中沢から受け取ったミニミの二脚を立て、屋上の縁に伏せてドットサイトを覗く。遠く離れた南東方向から、何かが群れを成して近づいて来るのが陽が沈んでいる状態でもわかった。まるで津波が押し寄せて来るかのように、横一列になって白い人影が近づいて来る。

まだミニミの射程内ではなく、俺はミニミを構えたまま、脇に置いてあったリモコンを取り出した。刑務所から700メートル、500メートル、300メートルの地点に地雷や爆薬が仕掛けてあり、このリモコンと中継機を介して有線での起爆が可能である。もしダークシーカーズが迫ってきた場合、リモコンのボタンを押せば爆発してかなりのダークシーカーズを倒せるはずだった。

刑務所の周辺の民家は焼き払われており、見晴らしはいい。一カ所だけ民家が数軒とテントがいくつも並んでいる場所があるが、そこは俺達に攻撃を仕掛けてきた平和実現党と坏組の拠点である。平和実現党のために数軒だけ残されていた民家には爆薬が仕掛けてあったはずだが、それは既に解除されたらしく、大山二尉が起爆スイッチを押しても何も起きなかった。俺達は仕掛けられた爆弾を解除出来るような連中と戦っていたわけだが、そんな事は今はどうでもいい。

軍の人体実験を知って刑務所から出た避難民達が参加してからは張られるテントの数が増加したが、今はそのテント村のあちこちで大混乱が起こっている様子が見て取れた。

こちらからテント村を攻撃する事はしなかったので、直接戦闘に巻き込まれて死んだ避難民はいないはずだ。坏組はテント村のど真ん中に迫撃砲を設置して刑務所を砲撃し、こちらが砲撃で反撃出来ない

いよう「人間の盾」を作っていた。幸い堂々が対物狙撃銃で迫撃砲を砲手ごと破壊したが、それでも迫撃砲があちこちから引き出されて来たので、ワニワニパニックをするが如く堂々は狙撃で次々潰した。

ダークシーカーズの接近は向こうも気づいたらしく、かなりテント村の動きが乱れている。

武器を手に取り、残っていた民家に立て籠もる平和実現党員と坏組構成員。彼らは民家に立て籠もると早々に入口を封鎖し、避難民を中に入れる事をしなかった。締め出された避難民達は、着の身着のまま刑務所向かって走って来る。

大山二尉はテント村にいた避難民達に対し、刑務所まで逃げて来るようスピーカーで呼び掛けていた。避難民に紛れて坏組構成員等が侵入してくる恐れもあったが、今はそんなことに構っている暇はなかった。一人でも多くの人を助けなければならぬと大山二尉は言う。

こんな時にくだらないヒューマニズムを、と俺は頭の片隅で思った。散々俺達を罵り色々押し付けた拳げ句自分達から出て行ったのに、なんで助けなきゃならない？俺も福田が主導した人体実験は人道に反すると思うし胸糞悪い行為だが、それが必要な行動だとはわかっている。人道だとかそういうたお題目は、人類がいなければ語れないのだと。だから俺も福田の人体実験を手伝った。

それなのに彼らは自ら出て行ったのだ。要不要ではなく、俺達への恐怖から。

彼らに軍人である俺達の考えを押し付ける事は間違っている。だから彼らが出て行った事を避難は出来ない。だが、完全に納得出来ない俺は、人間としてまだまだ未熟だという事だろうか。

南のキャンプから避難民達がこちらに駆けて来る。ダークシーカーズとの距離はまだまだ離れているが、それはあまり大した事ではない。

ダークシーカーズは人間ではないのだ。リミッターが外れた奴らはオリンピック選手並の速さで走る。避難民の全員がオリンピック選手並の速さで走れるわけではないし、栄養不足で足元も覚束ない。重要なのは、ダークシーカーズが逃げる避難民達に殺到する前に倒すことだった。

「あと200メートル！ 爆破準備をしろ！」

M82対物狙撃銃を構え、先程から狙撃を続けている堂々が怒鳴った。あと200メートル、というのは、最初の爆薬のラインまで200メートルの距離までダークシーカーズが近づいたということだ。人間でないダークシーカーズは、ものの十数秒でそこを駆け抜けるだろう。

「東二曹？ 東二曹はいないか！？」

その声で振り返ると、屋上に二つの人影が上がって来るところだった。濃紺の出勤服に防弾チョッキとヘルメットを着用し、手に銃を持った彼らは、稲森と松原だった。

「なんです？ 今忙しいんですが」

「大山二尉から増援に向かうよう要請を受けた。私達も援護する」

稲森はそう言って、手にした89式小銃を掲げた。

「じ、自分も戦います！ 自分は警察官なのに、民間人の援護を軍人に全部任せておくわけにはいきません！！」

少し震えながら、松原が怒鳴る。そういえば彼女達は警察官だったな、松原は否定しているが。

牧が武器と弾薬は屋上の端にある弾薬箱に入っていると伝え、二人が銃を構える。だがまだ射程外なので、撃っているのは堂々だけだ。

双眼鏡で、700メートル前方の地面を見る。地面にポールが一直線に突き刺さっているのがぼんやりと見え、そのすぐ近くまでダークシーカーズが迫っている。

あのポールに沿って爆薬が仕掛けられている。その後には野菜の如く対人地雷が埋められており、かなりの数を倒せるはずだった。

そして、先頭の一体がポールを飛び越えた。その瞬間、起爆装置のスイッチを押す。

次の瞬間、南東の辺りが真昼のように明るくなった。二秒ほど遅れて、至近距離に雷が落ちたような爆発音が耳に突き刺さる。

廃車に仕掛けられていた爆薬は爆発して周囲に鉄片を撒き散らし、高速で飛翔したそれらにダークシーカーズが切り裂かれる。他にも灯油やガソリンを混合した焼夷薬が仕掛けられ、火のついたそれを被ったダークシーカーズが松明のように燃え上がる。

今の一撃で数十、いや数百体は倒せたかもしれない。だがダークシーカーズはまだまだたくさんいる。数百体倒しただけでは足りない。

爆発で起きた火の壁を突き抜けて、ダークシーカーズが殺到してくる。焼夷薬は付着した物体を燃え上がらせるだけなので、直接被らない限りは効果は薄い。しかもダークシーカーズは人間よりも神経が鈍いのか、痛みをあまり感じない。少しの火傷なんて意味がない。

「セントリーガン、修理はどうなってる!？」

無線機に怒鳴ると、赤井からまだ修理中という報告が来た。

『今電源を近くの車両のバッテリーから引つ張って来てます。あと三分は必要です!』

「敵は三分も待つてはくれないぞ! 喰われたくなくや一分で済ませろ!!」

『了解!』

俺は伏せたままミニミを構えた。ただし、まだ発砲はしない。銃にもよるが5.56mm弾の射程は500メートルそこそこなので、まだ撃つても当たらない。セントリーガンに搭載してあるM134ミニガンは7.62mm弾を使用するので射程はより長いが、今はまだ修理中だ。

南側を見ると、爆発に驚いたのか避難民達の足が止まっていた。松原が拡声器で「早く避難して下さい!」と呼び掛け、ようやく彼らは再び歩き始めた。

早く避難してくれなければ、避難達にダークシーカーズが殺到する。そうなれば敵味方入り乱れる事となり、発砲が困難になる。堂々ならダークシーカーズだけを狙撃する事が可能だろうが、生憎堂々は一人しかいない。

「来るぞ! 射撃用意!!」

M82のスコープを覗いていた堂々が怒鳴る。稲森と松原は屋上の縁の手摺りに89式小銃の銃身を載せて姿勢を安定させ、ボルトハンドルを引いて初弾を薬室に装弾した。

右手でミニミのグリップを握り、左手で双眼鏡を覗く。さっきの爆発をかい潜って接近して来るダークシーカーズを確認して、再び起爆装置を掴む。

走るダークシーカーズの前には、700メートル地点と同じくポールが突き刺され、そこに爆薬が仕掛けられている。先頭を走るダークシーカーズの一体がポールを乗り越えようとして、俺はスイッチを押す。

その瞬間、驚くべき事が起こった。先頭を走るダークシーカーズがポールを目にした瞬間いきなり減速し、引き返したのだ。

俺はいきなりの行動に驚き、起爆を止めようとした。だが間に合わず、起爆スイッチは深く押し込まれていた。

再び爆発が起きた。爆発音は先程よりも速く到達し、今度は距離が近い事もあって爆発音が大きい。

「堂々、何体倒せた!？」

「クソッ、爆炎で見えない!」

ダークシーカーズは先程とは違い、あまり爆発に巻き込まれていなかったようだ。倒れていたり燃えているダークシーカーズの数は、先程のラインよりも少ない。

だが、何故いきなり反転した? ダークシーカーズは獣と同じだ、獲物にまっすぐ突っ込んでいく事しかない。

双眼鏡を覗くと、炎の壁を突き破ってダークシーカーズが飛び出してきた。数は、爆薬を仕掛けたエリアに突っ込む前とそう変わらな
い。

「射程に入った！ 撃て、撃て！！」

俺は怒鳴り、ミニミの引き金を引く。強い反動が身体を揺さ振り、
空薬莢と分離したベルトリンクが次々排出される。

牧、稲森、松原も小銃を発砲する。他の建物の屋上に陣取った兵士
達も銃撃を開始し、無数の弾着の土埃が立ち上る。銃弾が命中した
ダークシーカーズがもんどりうって倒れ、地面でのたうちまわる。
だが発砲する銃の数は、ダークシーカーズの数に比べて圧倒的に少
なかった。銃は連射出来るとはいえ、全てのダークシーカーズを倒
せる程の銃弾を吐き出せるわけではない。

牧、稲森、松原が交代しながら小銃を連射し、堂々が撃ち漏らした
奴を狙撃する。俺はミニミの引き金を引きつ放しにして、津波のよ
うに迫るダークシーカーズに弾幕を張る。

ダークシーカーズの群れが最後の爆薬を仕掛けてあるライン、俺達
から300メートル先まで近づく。俺は堂々に起爆装置を渡したが、
スイッチを押そうとした堂々が驚愕の声を上げた。

「おい！ あいつら爆薬のラインを避けてるぞ！！」

爆発の炎で赤々と照らされる中、さっきまで一直線に刑務所に向か
つてきていたダークシーカーズの群れが、方向を転換して北側に向
かっていた。爆薬のラインの50メートル程先で方向転換をしたた
め、今爆破しても効果は薄いだらう。逆に爆発の炎で視界が悪くな

るだけだ。

何故今更方向を変える？ 餌である俺達はここにいるのに。別にダークシーカーズの前に障害物がある訳ではない。むしろ爆発した際の破片を威力を保ったまま遠くまで撒き散らすために、ラインの周辺はだだっ広い空間になっている。そもそも障害物があつたつて、ダークシーカーズの運動能力ならラクラクと乗り越える事が出来るだろう。

なら、何故？

俺はそこで、ようやく福田が以前言っていた事を思い出した。

『奴らは進化している』

』

新たなウイルスに感染したダークシーカーズは、銃を使えるまでに頭が良くなった。ならダークシーカーズも、色々学習能力が向上したのではないか？

爆薬の目印であるポールは、最初はただのポールとしか連中には映らなかつただろう。だがそれが爆発し、「ポール」爆発する」の概念が連中の脳内に生まれた。

続いて爆発した500メートル地点の爆薬の目印であるポールを見て、「ポール」危険」という考えが連中の頭の中で確定した。

だからダークシーカーズは、爆薬が埋まっている目印であるポールを見た瞬間、ポールを避けたのかもしれない。こんな短時間で学習するとは、とんでもない奴らだ。チンパンジーだって、一つの動き

を覚えるのに長時間の教育が必要なのに。

ライオン並の速さで疾走し、熊並の怪力を誇り、そして学習能力は猿よりも高い。そんな連中を俺達は相手にしてしまっているのだ。

全ては俺の憶測かもしれない。だが、それが事実なら人類の衰退は加速する。このまま放っておいたら、あっという間には地上の覇者はダークシーカーズになる。

ダークシーカーズの群れは北側に向かっている。俺達の居る方向に進んで来る奴はいない。どうやら群れの中に統率する奴がいて、ポールを越えないように指揮しているのかもしれない。

いきなり、群れの中からチカチカと小さな光が瞬いた。次の瞬間、建物の外壁に火花が散り穴が開く。

「撃ってきたぞ!!」

牧が叫ぶ。

ダークシーカーズが銃を撃つところを始めて見た。距離はまだ離れているせいか当たる事はなかったが、それでも近づいて発砲されたら十分危険である。

しかも、ダークシーカーズは怪力だから、射撃の反動を無理矢理殺して命中精度を上げてくるかもしれない。接近されたら、こちらが厄介である。

今回の防衛計画は、ダークシーカーズが南側からまっすぐ突っ込んで来る事を想定されて立てられている。だがこのままでは、ダークシーカーズがラインを迂回して北側から侵入してくるかもしれない。

先程の戦闘で兵士が死傷している上に、あちこちに戦力が分散してしまっている。唯一戦力がまとまって配置されているのがこの南側だ。

先程の戦闘で刑務所の塀はあちこち砲撃され、大穴が空いている。一応そういつた箇所にはセンチリーガンやクレイモア対人地雷を仕掛けてあるが、それもいつまで持ちこたえられるかわからない。

状況は、最悪だった。

第145話 side 龍 「進化」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

刑務所のあちこちから火の手が上がり、連続した銃声が赤く染まった空に響く。生存者救助に向かったボク達はいまだに抵抗を続ける坏組と死刑囚達に応戦しつつ、物陰から物陰へと移動していた。

一番近くにいる生存者は倉庫に立て籠もっているらしい。その倉庫に至る道は坏組の砲撃で倒壊した電柱などで塞がれており、徒歩での移動を余儀なくされた。

「倉庫まで後どれくらいですか!？」

ボクが走りながらそう聞くと、先頭を走る大山二尉は「100メートルくらいだ!」と息も切らさず答えた。さすがに軍人らしく、敵弾が飛んで来る中走り続けているにもかかわらず、顔色一つ変えていない。

車両の警護に最低限の兵士を残しても、倉庫に向かっているのはボクと軍司、由梨、そして多賀さんを含めても10人しかいない。それほど死傷者が出ているということだし、また救助すべき生存者も多いという事だった。迫って来ているというダークシーカーズから生存者をシエルターに逃がすためには、出来るだけ早く收容しなければならぬ。それは戦力を分散せざるを得ない事を意味していた。だからボク達も戦っている。それは誰に強制されたものでもないし、軍司達もボクが戦うから一緒に来たわけじゃないだろう。軍司達も戦いたいと思っていたが、ボクが言い出したことで最後の一押しをされたような形だ。

こんな状況では大人も子供もない。戦える人間は戦う。戦えない人間は、後方で負傷者の手当や補給を行う。皆が協力しなければ、ボ

ク達に明日はない。

しかも今はダークシーカーズが近づいて来ているときている。なのに坏組と死刑囚達はいくまでも刑務所を制圧するつもりなのか、はたまたダークシーカーズの接近を知らないのか、銃を手に戦い続けている。大山二尉達が投降勧告を出して何人かはこちら側についたが、まだまだ抵抗する者達も多い。

とその時、南東方向から響いた大きな爆発音がボクの思考を中断させた。振り返ると、刑務所の壁の上から巨大な爆炎が見える。

「どうやら防衛ラインに仕掛けた爆薬を使ったらしいな。あれで感染者の到達が少しでも遅れてくれればいいが……」

大山二尉がそう呟いて、再び足を動かす。生存者が避難していると、この倉庫は、すぐ近くにあった。

倉庫の前の道路まで行くと、障害物が無くなったためか今まで聞こえていた銃声がより大きくなった。

倉庫の入口では刑務官の制服を着た男性が短機関銃を手に、時々倉庫の扉から身を乗り出して銃撃していた。そして倉庫の反対側にある3階建ての建物の2階からは、坏組構成員か死刑囚らしき男達が、軽機関銃を倉庫に撃ち込んでいた。刑務官が時々応戦するも、火力の違いからか押されているようだった。

「よし、皆聞け。あの倉庫には刑務官の他に5名の民間人がいる。合図したら、あの建物に向かって銃撃しろ。奴らが怯んだ隙にわた

しが倉庫まで走って、それから彼らを誘導する」

大山二尉が皆を集めて言った。ボク達は頷き、武器の状態を確かめる。

まず大山二尉は、坏組構成員達に対して投降するよう大声で呼び掛けた。だがその返事は銃弾だった。ボク達が身を隠しているワゴン車に銃弾が突き刺さる甲高い音が響き、窓ガラスが粉々に割れる。3台停まっていた車のエンジン部分に隠れていたせい、銃弾はボク達に当たる事はなかった。

「クソッ、連中錯乱してやがる……。人間目掛けて無茶苦茶撃ちまくってる」

わずかに身を出して、09式小銃に取り付けられた低倍率スコープを覗いていた兵士が呟く。その間も銃撃は続き、数発の銃弾が2枚のドアを貫通して地面に突き刺さるのが見えた。

「よし、行くぞ……。援護しろ!!」

大山二尉が叫ぶと共に兵士達が一斉に身を乗り出し、手にした銃を建物に撃ち込む。ボクも車体前方のエンジンを盾に、MP-5短機関銃を撃った。

建物のコンクリートの外壁が穴だらけになり、披弾したらしい坏組構成員が2階から落下していく。

建物からの銃撃が止んだその隙に、大山二尉は倉庫へと走り出した。重い防弾チョッキを身につけているというのに、その動きは素早かった。

「奴らをこっちに集中させる！ 撃ちまくれ!!」

兵士が叫び、ボクも短機関銃を単発で撃つ。だが元々射程が短い短機関銃ゆえ、銃弾は途中で勢いを失い狙った場所には当たらない。しかしそれでも牽制程度にはなったようで、大山二尉に向けて突撃銃を構えていた死刑囚が身を引つ込めるのがわかった。

その間に大山二尉は倉庫に滑り込み、しばらくして兵士の一人が無線機で何事か答えた。

「よし、倉庫にいる連中は無事だそうだ。このまま銃撃を続けて、彼らを援護するぞ！」

再び激しい銃撃戦が始まり、倉庫から刑務官を先頭にして生存者達が頭を両手で押さえながら走って来る。

やがてUMP短機関銃を撃ちながら大山二尉がワゴン車の影に駆け込み、「撤収だ！」と怒鳴った。建物への銃撃を続けながら、ボク達は徐々に後退していく。

隣を見ると、由梨がら歳くらいの女の子を抱いていた。泣きじゃくる女の子に「怖かったね。でももう大丈夫だよ」と言いながら頭を撫でていた。

「……………何ジロジロ見てんのよ？」

「いや、由梨っていつもツンツンしてるからさ。子供とか他人が嫌いなのかと思って」

そう言うと、由梨は「不本意だ」とでも言うかのように、いつものツンとした表情に戻って、

「あら、わたしは子供は好きよ。だってこれからいくらでもわたしの言う事を聞くように教育出来るからね……………」

そう言うと由梨は「フフフフ」と怖い笑い声を上げた。やっぱり由

梨は色々黒いようだ。女の子が由梨のその顔を見て再び泣きそうになり、軍司が苦笑する。

「でも、子供達は何よりも守らなきゃならない存在ですよ。彼らは未来そのものなんですから」

軍司の言う通りかもしれない。いくら技術や文明を発達させても、そこに人がいなければ意味はない。子供達は未来を生きる存在なのだ。

このウイルス感染で一体何十億人が死んだかわからない。だがこんな状況でも子供達は生まれ、育っていくだろう。どんなに過酷な世界であっても、子供達はその世界で生きていくしかないのだ。

だからボク達はワクチンを守って、子供達が受け継ぐ未来を少しでもマシな物にしなければならぬ。

子供がいなければ未来はない。だからボク達は子供達と、彼らに渡す未来を守るために戦うのだ。

救助した生存者達を車両のところまで連れていった時には、刑務所の南側から激しい銃声と爆発音が轟いていた。防衛ラインに設置された爆薬のものらしい大きな爆発音は3回聞こえていた。大山二尉が言うには防衛ラインは3つ構築してあるようなので、既に3回爆発音が聞こえたということは、それらの防衛ラインが全て突破された事に他ならない。

「うん？ 何だって……？ クソッ、それはマズい！！」

大山二尉は無線機に何やら罵ると、皆を集めた。車両を停めた場所にはさっきの倉庫から連れて来た生存者の他にも、救助が来た事を

知って慌てて出て来たらしい他の生存者達の姿も見える。

「皆聞け！ 感染者達はこういうわけだか南東方向から一直線に突っ込んで来ないで、刑務所の壁沿いに北から侵入を試みているようだ。このままここには真っ先に攻撃を受ける。子供と女性、怪我人を優先して車両に乗せ、後は走ってシェルターまで向かう！」

ボク達が今いる場所は、刑務所の北側だった。北側の壁には先程の戦闘のせいで大きな穴が空いており、もしダークシーカーズが壁沿いに回り込んで来たなら安々と侵入されてしまうだろう。

でも、どうしてダークシーカーズは獲物^{人間}に向かって一直線に突っ込んで来ないんだ？ 初春市の小学校でも、ダークシーカーズは仲間の死体を乗り越えてまで正面から侵入してきた。ダークシーカーズは運動能力は獣並なので、時間はかかるだろうが刑務所の壁だってよじ登り事が出来るかもしれないのに。

とにかく動きが遅い幼い子供と負傷者を優先して車両に収容し、ボク達はシェルター向かって走りはじめた。負傷者は兵士、刑務官、民間人問わずに多く、車両のスペースはあっという間に埋まってしまった。

車両がゆっくりと進み、ボク達はそれらを盾にしながら進む。どこから銃弾が飛んで来るかわからず、進む速度が遅くなる。

とその瞬間、近くで銃声が響いた。今ここにいる皆は発砲しておらず、また近くに他の部隊もいない。つまり坏組が死刑囚か、あるいはダークシーカーズが銃を撃つたのだ。

信じられない事に、今のダークシーカーズは銃を使えると大山二尉は言っていた。狙撃などは出来ないが、至近距離から銃弾をばらま

くくらいの事はやってのけるといふ。

今までは力と数に任せて押してくるダークシーカーズに向かって撃つだけでよかった。狙いやすい開けた場所から、連続して撃つ事が一番効果的だった。

しかし今は飛んでくる銃弾を警戒して物陰に隠れなければならない。今までとっていた戦術を180度変えなければならないのだ。

ボク達の前方にある十字路の東側から、4人の男が飛び出てきた。手に手に銃を持っているが迷彩服などは着用せず、灰色の作業着を着た彼らは死刑囚だった。

恐慌状態に陥っている死刑囚達を見て大山二尉が発砲するよう言うとうとしたが、それより先に同じく十字路の東側から出て来たいくつかの人影が彼らに飛び掛かっていた。

死刑囚の一人が悲鳴を上げ、手にした拳銃を連射する。だが放たれた銃弾は一発も命中することはなく、死刑囚は地面に押し倒された。首筋を噛まれ、絶叫と共に血しぶきが上がる。

「感染者だ、撃て!!!」

大山二尉が叫び、軽装甲機動車の屋根に搭載されていたM134ミニガンが火を噴く。毎秒50発の銃弾を吐き出すミニガンによって瞬く間に穴だらけになった人影が地面に崩れ落ちたが、次の瞬間、目の前のありとあらゆる場所から人影が飛び出してきた。

異様に青白く血管が浮き出た顔、全ての体毛が抜け落ちた禿頭。そして尖った爪と歯。

刑務所に侵入したダークシーカーズが、ついにボク達のところまでやって来たのだ。

ダークシーカーズに追われていたらしい死刑囚達はあっという間に

地面に押し倒され、その身体にダークシーカーズが群がっていた。骨が割れ肉が潰れる音に混じって聞こえてくる悲鳴は、徐々に小さくなっていく。

獲物にありつかなかったダークシーカーズ達は、近くにいたボク達に狙いを定めたようだった。2台の軽装甲機動車の機関銃が火を噴き、ボク達もそれに合わせて発砲するが、ダークシーカーズは人間離れした動きで狙いをつけさせない。

いや、連中は人間ではないのだ。見た目は人間だが、もう中身は怪物だ。だから容赦してはいけない。ただ撃つのみだ。

無数の銃弾がダークシーカーズに向かって放たれる中、ボク達がいる場所とは別の方向から銃声が轟いた。ほぼ同時に装甲車の車体に火花が散り、銃撃されたのだとわかった。

「屋上にいるよ!!」

軽装甲機動車でミニミ軽機関銃を構える多賀さんが怒鳴り、道路の両脇に建つ建物の屋上に銃口を向けて引き金を引く。銃撃を食らったダークシーカーズが、構えていた短機関銃を取り落とし地面に落下した。

「奴ら銃を撃ってくるぞ！ 身を低くしろ!!」

兵士が怒鳴り、皆が車両を背にして全方位に銃口を向ける。

銃声とダークシーカーズの唸り声の中、ボクは別の音を聞いた。唸り声だが、ダークシーカーズの物と違って本物の動物の感じがする。ボクは、この唸り声を以前に聞いていた。

しかも、数週間前に。

「犬だ！ 感染犬がいる！！」

ボクがそう怒鳴った直後、ダークシーカーズの足元をすり抜けて何かが走ってくるのが見えた。それはボク達の数メートル前で大きく跳躍し、そのまま飛び掛かってくる。

ダークシーカーズと同じく全身の毛が抜け落ちた感染犬の灰色の表皮と、異様に長く伸びた牙。突然の事にボクは身動きが取れず、それらが近づいてくるのをスローモーションで見ているかのように感じた。

が、感染犬は空中で別方向からの銃撃を食らって吹き飛ばされた。見ると軍司がM4カービンを構えており、軍司がボクに飛び掛かって来た感染犬を空中で撃ち落としたのだとわかった。

「優さん、気をつけて！！」

「ありがとう軍司！ 助かったよ！！」

ボクがそう言うと、軍司は少し照れたように顔を赤くしたように見えた、ような気がした。すぐに軍司は別の方向から迫ってくるダークシーカーズと感染犬に対処するため、顔を背けた。

ボクは手にしたMP5短機関銃を腰ために構え、迫り来るダークシーカーズに向かって薙ぎ払うように連射した。弾倉の弾はあっという間に無くなり、弾倉を交換しようとしたボクの視界の隅に、こっちに向かって走ってくる4頭の感染犬が映った。

MP5はその構造上、弾丸を撃ち尽くした場合の素早い弾倉の交換がやりにくい。MP5の再装填を諦めてハイパワー自動拳銃を抜き、

感染犬に向けて連発する。だが単発でしか撃てない拳銃では、猛スピードで迫ってくる感染犬を撃ち抜くのは難しかった。

ハイパワーのスライドが後退したままになり、弾倉内の弾を撃ち尽くした時、3頭の感染犬が地面に倒れていた。だが1頭は無傷のまま、ボクに向けて飛び掛かってくる。

だがボクはスタンロッドを抜き、左足を軸に身体の位置を少しずらした。空中の感染犬に飛んでいく方向を変える術はなく、感染犬は一瞬前までボクがいた空間を通過した。

その瞬間、ボタンを押しながらボクは思いっきりスタンロッドを感染犬の頭に振り下ろした。真上から警棒そのもののスタンロッドの打撃を食らい、さらに高圧電力を身体に流された感染犬は、ぐしゃっという音を響かせて痙攣しながら墜落した。

感染犬を倒したボクはMP5の弾倉を変えようと前を向き、そして目を見開いた。

ボクの数メートル前に、一人のダークシーカーズが立っていた。手には自動拳銃が握られ、その銃口はまっすぐボクを狙っている。ボクが手にした銃には、どれも弾は入っていない。他の人達はそれぞれ目の前のダークシーカーズと感染犬に対応するのに精一杯で、ボクの前に立ったダークシーカーズに気づいた人は少ない。そして気づいたとしても、ダークシーカーズの銃が火を噴く前に倒すの間には合わないだろう。

くそ。

こんなところで、ボクは死ぬのか……！？

向けられた銃口に、身体が動かなくなる。接近されるまで気づかなかった自分の不注意を罵りつつ、ボクは思わず目を閉じた。

バン！！ と銃声が轟いた。

しかし、ボクには何も起きていなかった。

もしかして頭を撃ち抜かれて即死し、すぐにあの世に来たからなのかな？ そんな事を考えつつ、ボクはうっすらと目を開けた。

ボクは死んでいなかった。

変わりにボクの目の前で、軍司が腹から血を流しながら地面に倒れ込んでいく様が視界に入った。

「軍司！！」

由が叫び、ミニウージー短機関銃をフルオートで撃ってボクの前に立っていたダークシーカーズを穴だらけにする。

その様子を見て、ボクはようやく軍司がボクの盾になって撃たれたのだとわかった。

「軍司

！！」

ボクの口から、絶叫がほとばしった。

第146話 side 優 「被弾」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第147話 side 籠 「戦線崩壊」

連続した銃声と共に肩に強い衝撃が走り、ドットサイトの向こうで弾丸を食らったダークシーカーが地面をのたうちまわる。しかし他の連中は倒れた奴を気にも止めず、その顔に憤激の形相を貼り付けて全力疾走してくる。

「クソツ、何体いるんだよ!? キリがねえ!!」

牧が半ば悲鳴のように叫び、09式小銃の銃身下部に取り付けられたM320ランチャーを撃つ。軽い音と共に擲弾が弧を描いて飛翔し、ダークシーカーズの中心に落下して爆発する。飛散した破片で何体か倒れたが、焼石に水だった。ダークシーカー達は倒れた仲間死体を乗り越え、後から後から続いてくるのだ。

刑務所のあちこちから不気味な咆哮が轟き、それを掻き消すかのようにならぬ銃声が響く。俺達がいる南東方向を迂回して北側から刑務所に侵入したダークシーカーズは、兵士やまだ残っていた死刑囚達の反撃を受けてもなお攻撃を続けている。皮肉な事に、真っ先に攻撃が集中すると思われていた南東方向の俺達は、今だ大した被害は出ていない。

が、それもいつまで保つかわからない。刑務所の北側から侵入すると同時に、後続のダークシーカーズが南東方向からの攻撃を始めてきたのだ。壁に大穴が開いた北側の防衛に兵士を送ってしまったばかりの状況で、その攻撃にずっと持ちこたえられるかはわからない。設置してあった地雷や爆薬も大半が既に使用されており、ダークシーカーズの進撃を食い止めるのはほとんど銃撃だけになっていた。幸い修理が完了したセンチリーガンが先程銃弾をばらまいて多くの

ダークシーカーズを倒してはいるが、連射のし過ぎで残弾が心許なくなっている。手元の端末に映し出される残弾数は、先程から恐ろしい勢いで減り続けている。

救いはほとんどの避難民のシエルターへの收容が終わり、刑務官や兵士らも徐々に待避していつている事か。ダークシーカーズとの戦闘で兵士と刑務官には今の所死者は出ていないが、坏組と平和実現党、そして死刑囚達との戦闘で多数の死者が出ていた。

平和実現党が攻撃を仕掛けて来なかったら、こちら側の死者は出なかった。つまり全力で戦う事が出来た。戦闘で刑務所の壁に穴が開かなければ、もっと防衛戦闘がやりやすくなっていた。いや、そもそも戦闘さえ起きなければ、ダークシーカーズに刑務所の位置を察知されることはなかったのではないか……？

ダークシーカーズがここを察知したのは、激しい戦闘のせいかもしれない。あんなに銃声や爆発音が轟いていたら、数キロ離れていても聞こえただろう。

しかもダークシーカーズは人間以上に五感が発達している。遠く離れた場所で銃声を聞き、^{人間}餌がいる場所を嗅ぎ付けたのか……？

だがそれを今言っても仕方がない。今は目の前に迫る敵を倒す事以外に余計な事は出来ない。

この夜を乗り切らなければ、俺達に明日はない。そして福田が何百人という死刑囚を実験台にし、俺の大切な美里のおかげで完成したワクチンもここで無くなる。そうなれば、人類にも明日は無くなる。

美里。

今までいろいろあったが、俺はお前の事が大事だ。その事に再び気づくまで長いこと時間がかかってしまったが、俺は美里の事を愛している。だから福田に逆らい仲間に殺される危険を侵してまで、感

染犬に噛まれた美里を助けに行つた。

結局美里の身体にはウイルスへの耐性があつて俺のやった事は無駄になつたが、それでも俺は大事な事に気がつけたんだ。

美里はワクチン製作の最重要人物だから、この戦闘が始まる前から護衛がついていた。おそらく戦闘が始まってからは真っ先にシエルトーに避難させられたに違いない。多分、美里は無事だ。もし刑務所の人間が全滅するとしても、死ぬのは一番最後になるだろう。

だが俺はいつまで生き延びられるかわからない。死の一步手前でどうにか踏み止まっているような状態だ。目の前には無数の敵。後方に安全な退路はない。最悪の状況だ。今夜生き延びるには、多分一生分の運を使い果たしても足りないだろう。

美里。

死ぬとしても、最期に一目でいいからお前に会いたい。最後に会つたのが俺が独房にぶち込まれていた時なんて、最悪過ぎるだろ？

今まで順調にベルトリンクで繋がれていた銃弾を吸い込んでいたミニミがガチツという音を立て、俺の思考は中断させられた。見ればミニミの箱弾倉の開口部から出ていた弾帯がなくなっている。納められていた200発を撃ち尽くしたのだ。

「装填する、援護を！！」

そう仲間達に叫んで、近くに置いて会つた新たな箱弾倉を探ろうと手を伸ばした……が、何も掴めなかった。見ると俺の周囲にあるの

は空薬莖と分離したメタルリンクだけだった。ミニミ用に用意してあった弾帯を全て撃ち切ってしまったらしい。

シャツの上から着用していたタクティカルベストのポーチからACR突撃銃用の弾倉を取り出し、ミニミに叩き込む。ミニミは突撃銃の弾倉も使用出来るようになってるのが救いだ。

だが30発しか装弾されていない弾倉では、あっという間に弾が尽きてしまう。早々に弾倉は空になり、新たな弾倉をポーチから取り出す。

俺が再装填している間、牧や稲森、松原が火力の不足を補う。小銃をフルオートで連射し、弾幕を張る。堂々もこれほど接近されては対物狙撃銃が使い難いと思ったのか、10式狙撃銃に持ち替えて撃ち続けていた。

ぱらぱら、と軽い銃声が響き、屋上の転落防止用の柵に火花が散る。銃を持ったダークシーカーが撃ってきたのだ。銃を所持して撃てるダークシーカーの数は全体から見れば少ないが、今までのように見晴らしの良い場所から銃撃を加える事は出来ない。見晴らしが良いという事は敵からも丸見えという事であり、必然的に狙われる確率も高くなる。

『こちら赤井、残弾僅か！ 指示をお願いします！！』

先程までセントリーガンを修理していた赤井達から通信が入る。セントリーガンを修理した後赤井達はそのまま塀の大穴付近で防衛戦闘に当たっていたが、そろそろ限界だろう。ダークシーカーズが刑務所の塀に到達したら真っ先に狙われるのは、地上にいる赤井達である。

と、今度は別の兵士から通信が来た。

『こちら小山二曹！ 民間人の収容が90パーセントまで完了しました！』

小山の声に、俺は赤井達にシエルターへ撤退するよう命じた。もうダークシーカーズは刑務所から200メートルもしない距離まで近づいている。全力疾走されたら数十秒しない内に到達してしまう。ここはセントリーガンでどうにか持ちこたえ、その間に赤井達を撤退させる方がいい。

俺は脇に置いてある携帯端末を見て、セントリーガンの残弾数を確かめる。セントリーガンに搭載されているのは毎秒50発の連射速度を誇るM134ミニガンだが、連射速度よりも弾詰まりシヤムを起こさない性能が求められているので、大きく連射速度も落とされている。だがセントリーガンの銃撃は止む事がない。搭載された動体センサーが次々と接近してくるダークシーカーズを感知し、絶え間無く弾幕を張っているからだ。

セントリーガンの残弾は残り500発を切った。このまま連射していたら30秒も保たない。弾が尽きたら人力で補給するしかないが、補給する弾ももはやない。

『了解！ 赤井以下3名、撤収します！！』

そう言って通信が切れ、下から聞こえて来る銃声が一気に少なくなる。後に残ったのは、セントリーガンと俺達の放つ銃声だけだ。

赤井達が撤収した直後、

「よし、そろそろ俺達も……」

そう言って振り返った俺の目が、驚愕に見開かれた。

屋上の西側に、ダークシーカーが5体いた。その内一体が、手にし

ていた短機関銃を片手で構える。

南東方向から接近してくる敵を迎え撃つ事に気を取られていた堂々達は、突如屋上に現れたダークシーカーズへの対応が一瞬遅れた。

どうして、ここに？ そんな考えが頭をよぎる。

銃を構える前に、ダークシーカーの持った短機関銃が火を噴く方が早かった。

「うわっ！」

「がっ！」

短い悲鳴が仲間達の間から上がり、血が飛び散る。その光景に、俺は古橋の事を思い出していた。

噛まれ、ダークシーカーズの仲間入りをしてしまった古橋。福田の実験に使うために女のダークシーカーズを捕獲した際、偶然出くわした古橋。

ダークシーカーズになった古橋は今、何をやっているだろうか？
今この場所に来ていて、人間を襲撃しているのだろうか？

そんな考えが、一瞬の内に頭を過ぎった。俺はミニミを構え、絶叫と共に屋上のダークシーカーズを向けて発砲する。

銃を持ったダークシーカーズが胸を撃たれ、衝撃で身体を吹き飛ばされ屋上から落下していく。もう二体を倒したが、残った二体が一気に襲い掛かってきた。

だが他の銃声が轟き、その二体も胸や頭を撃ち抜かれてその場に崩れ落ちる。

「ああっ、クソッ………！」

そう呻きながら、硝煙が立ち上るP226拳銃を構えた牧が身を起こす。他の面々も身体を起こした。

「大丈夫か皆!? 誰か撃たれた奴はいないか!？」

俺が怒鳴るように聞くと、呻き声が二つ上がった。堂々と稲森が撃たれたのだ

幸い二人とも撃たれたのは脚であり、しかも出血量は少ない。松原があたふたしながらも手早く応急手当をする横で、俺と牧は再びダークシーカーズの迎撃に戻っていた。

「いつの間にアイツら屋上に侵入してたんだよっ!？」

「北側から侵入した奴らが、もうここまで来たって事だろ! 赤井達が無事にシエルターにたどり着いていればいいが……」

「んな事より、早く俺達もシエルターに行かないと食われちまうぞ!」

牧が叫びながら小銃を連射する。空軍の無人偵察機フレターの操縦士である高木も、今やパソコンをMP7短機関銃に持ち替えて、新しく屋上にダークシーカーズが侵入して来ないかを見張っていた。

ミニミを連射していると、突然ガチツという音と共に射撃が止まった。不発弾かと思えばポルトハンドルを引こうとしたが、接着剤でくっつけたかのようにポルトハンドルそのものが動かない。連射のし過ぎで、機関部の部品が熱で変型してしまったようだ。数百、いや数千発も絶え間無く銃撃を続けていたのだから当然である。

舌打ちしてミニミから弾倉を外すと、足元に置いてあったACR突撃銃と携帯端末を拾う。端末に映し出されるセンチリーガンの残弾は、既に200発を切っていた。

既にダークシーカーズは刑務所内に侵入している。そして外からも続々と押し寄せて来ている。どうにかセンチリーガンで頑張ってい

るが、その弾もすぐに尽きる。

しかもこちらの戦力は、堂々と松原が負傷した事によりさらに落ちた。既に中沢が宣戦離脱している今、俺と堂々、そして松原だけでしのぐのは不可能だ。一応銃の訓練は受けているとはいえ、空軍兵士である高木は自分の身を守るだけで精一杯だろう。

「二人とも走れるか？」

そう堂々と松原に尋ねたが、二人とも立つだけで精一杯のようだ。すでに出血は大分収まっているが、顔は激痛に耐えるかのように歪んでいる。というより、脚を撃たれて走れる方がおかしいのだが。負傷者二名。無事な者は4名。内一名が空軍兵士で銃撃戦は本職ではない。このままここに留まっても、死ぬ確率が90パーセントから100パーセントに上がるだけだ。

俺はとうとう、一緒にいる仲間達にも撤収するよう命令した。もう民間人はほとんどがシエルターに避難しただろう。だったらこれ以上の戦闘は無意味である。俺達もシエルターに避難して、朝を待つしかない。

「撤収だ！ 牧、堂々を担げ。松原さんは稲森さんを頼む！ 高木、お前は俺と一緒に四人を援護しろ！」

皆が頷き、牧と松原が堂々と稲森を肩に担ぐ。二人の両手が塞がってしまうので、俺と高木が負傷者を担ぐ二人を援護しなければならぬ。

「来ましたあ！」

情けない悲鳴を上げて、高木がMP7を連射する。刑務所に既に侵

入っていたダークシーカーズが、屋上に上がってきていたのだ。見れば既にセントリーガンも弾切れになり、ダークシーカーズの刑務所侵入を防ぐ物はなくなった。俺は弾薬箱に一丁だけ残っていた旧式の9mm機関拳銃とその弾倉を手に取り、「行くぞ！」と叫んで屋上から階下に向かう階段を下りていく。俺の後に牧と松原が続き、最後尾を高木が守る。

既にダークシーカーズは、建物内にも侵入していた。狭い階段の中を唸り声を上げて飛び掛かって来るダークシーカーズを撃ち倒し、死体を跨いで下に下りていく。訓練を積んだ牧と松原は、負傷した堂々と稲森を担いでいるというのに移動する速度が落ちていない。まあ、牧の場合は、堂々が他の隊員に比べて小柄だという理由もあるだろうが。

負傷した二人も、ただ担がれているだけではなかった。拳銃を構えて隅や天井を警戒し、いつでも撃てるような体勢を取っている。

「一階だ！ ここから走るぞ！！」

そう叫んでから、一階の廊下に出る。Tの字の横棒の部分に当たる廊下には、両端にそれぞれ一体ずつダークシーカーがいた。

口の周りを真っ赤に染めたダークシーカーが、短く吠えて一気に走って来る。俺はまず東側から近づいているダークシーカーを撃ち、身体を半回転させて西側のダークシーカーを撃った。

二体のダークシーカーは頭を撃ち抜かれて絶命し、走っていた惰性で死体が廊下を滑っていく。同時にACR突撃銃の弾がなくなり、俺は代わりに9mm機関拳銃を構えた。

わざわざ玄関に向かって時間を無駄にすることはせず、廊下の窓を開けてそこから外に出る。まず俺が外に出て周囲を警戒する中、牧と松原が堂々と稲森を引っ張り出す。

「……悪いね」

稲森が激痛を我慢しながらも無理矢理笑顔を浮かべ、俺達に言う。いつも男勝りの稲森がそんな事を言うのは、なんか違和感があった。最後に高木がモヤシのような細い身体を外に出し、9mm機関拳銃を腰だめに構えて進もうとした瞬間、唐突に無線機から人の声が流れた。

『あーもしもし、東はいるかな？』

こんな状況でも脳天気そうな声で言ってきたのは、福田だった。

第147話 side 龍 「戦線崩壊」(後書き)

御意見、御感想ありがとうございます。

第148話 side 優 「再会」

先程まで盛んに響いていた銃声や爆音が、徐々に減っていつている。代わりに増えているのは、刑務所内部になだれ込んだダークシーカーズの発する唸り声や叫び声だ。そして、それらが聞こえてくる距離は、段々近づいて来ている。

「走れ、とにかく走るんだ!!」

大山二尉がそう怒鳴り、走りながら構えたUMP短機関銃を連射する。建物の陰から姿を見せたダークシーカーが銃弾を食らって斃れ、一緒にいた残りの数体が一斉に飛び掛かってくる。

ボクは手にしたMP5短機関銃を、連発に設定して撃った。当たるか当たらないかはどうでもいい。奴らに対してとにかく銃弾をぶち込みたかった。倒したかった。殺したかった。

既に他のシエルターの収容数は限界に達し、ボク達はシエルターに入る事は出来なかった。なので今は地下にある福田博士の研究室に向かっている。地下研究室のドアはかなり頑丈に作られているらしく、簡単なシエルターになるらしい。とりあえず動ける者は全員が（にしたってそんなに数はいないが）地下研究所に向けて走っている。

だが研究室に向かって走る人数も大分少なくなっていた。途中で坏構成員や死刑囚の生き残りの襲撃を受け、数名の兵士が死傷した。さらに銃を持ったダークシーカーズの攻撃で負傷した者もあり、負傷者は全員途中でシエルターに後送した。

軍司も、その負傷者の中に入っていた。

ダークシーカーに軍司が撃たれた時、ボクは自分でも驚くほど気が動転していた。ボクは仲間をまた失うかもしれない恐怖と悲しみに、ただ慌てふためき泣き喚く事しか出来なかった。そこまで慌てていたのは、軍司がボクをかばって撃たれたのが原因かもしれない。あの時ボクがしっかりしていれば、軍司はボクをかばう事もなかった。いや、撃たれるにしてもボクが撃たれていればよかった。そんな気持ちで、ボクを襲っていた。だが腹を撃たれて大量出血している軍司は応急手当を受けながら、泣き喚いているボクに言ったのだ。

『……こんな時になっちゃいましたけど、今言っておきます。僕は、優さんが好きでした』

その言葉を聞いたボクは、その時頭の中が真っ白になった。

そんな言葉を軍司から聞くとは思ってもなかったからだ。そしてそんな言葉を聞くのは放課後の教室か、遊園地の観覧車の中でだとも思っていた（もうどちらも遠い過去の物になってしまった気がする）。少なくとも、悲鳴と怒号で満たされた銃撃戦の最中で聞く言葉ではない。

しかも、告白の相手がよりによってボクだったのだ。場違いにも頭が真っ白になってしまってもおかしくはない。そんなボクは、思わず聞き返していた。

『……なんで、こんな時に？　そしてなんでボクなの？』
『だって優さん、僕が好きなそぶりを見せても、全然気づいてくれなかったじゃないですか……。今までいろいろ伏線張つといたのに、どこまで鈍いのやら。……気づいてなら、今言わなくていつ言うんですか……。？』

軍司はそこで大きくうめき声を上げた。止血のため衛生兵に腹部を押されたのだ。

腹部の貫通銃創から溢れ出す血は、ボクから見れば今にも軍司が死んでしまふんじゃないかと勘違いさせるのに十分な量だった。

もしかしたら、軍司は自分が死ぬと思っっているから今告白してきたのか？　イヤだ、そんなのイヤだ！！

もう仲間を失うのはイヤだった。大晦日、死んだ仲間達。子供達。子供達を傷つけまいと、噛まれた自分の頭を撃ち抜いた詩織。顔面の表皮を食われていた少年。四肢を失った状態で運び出されてきた少女。彼らの顔が、浮かんでは消えた。

ここでまた仲間を失えば、今度こそボクは立ち直れなくなる。大晦日の時、ボクは思わず東さんに八つ当たりしていた。今回はもう八つ当たりする事はなく、その前に絶望で頭を撃ち抜いてしまっただろう。

『……なんで、ボクなの？』

『さあ、なんでだろ……。？　でも、とにかく、今まで一緒にいて確信しましたよ。僕は優さんが好きだって……。』

軍司はそこで一度言葉を区切ると、大きく息を吸った。

『罰当たりですけどね、僕は世界がこうなったからこそ優さんに出会えたから、こんな世界にもいいところはあるんじゃないかと思え

ますよ。もしウイルスが広がらずダークシーカーズが現れなかったら、僕は優さんと出会えなかったんですから……」

軍司は最後にそう言って、車両に乗せられて他の負傷者と共にシエルターに運ばれていった。その後シエルターから負傷者達を収容したという連絡が入ったが、軍司がどうなったのかはわからない。

腹部の傷は深かった。もしかしたら軍司は死んでしまいかもしれない。そう考える度、ボクはその場に座り込んで泣きたくなった。だが大山二尉達がそれを許さない。しゃがみ込んでいたボクを引きずるようにして、福田博士の研究室へと連れていこうとした。

だからボクは、この気持ちを怒りに変えて、それをダークシーカーズにぶつけることにしたのだ。出会ったダークシーカーズは全部殺す。それが撃たれた軍司の敵討ちであり、大晦日に殺された皆への供養だった。

「うおおおおおっ！！」

そう叫びながら銃を連射する。弾丸を食らったダークシーカーズが倒れ、痛みのにたうちまわっていても、トドメとばかりにさらに銃弾を撃ち込む。とにかく、ダークシーカーズを苦しめた上で殺したかった。

「あなた、今までで一番強くなつてない？」

由梨がミニウージー短機関銃の弾倉を交換しながら、ボクの顔を見て言った。この場にいる無事な高校生は、もはやボクと由梨しかいなかった。

坏組の物だったらしい、真っ黒焦げになった荷台に機関銃を搭載した軽トラックが突っ込んだ建物を横切ると、突然、ボク達の前に一人の人影が現れた。フラフラとしたその足取りに一瞬感染初期のダークシーカーかと皆が思い、一斉に銃口が向けられる。

「はは……軍靴が……軍靴の音が聞こえるわ……」

そうわけのわからない事を呟きつつ現れたのは、倉庫前でボク達に投降するよう拡声器で言っていた、平和実現党の辻木清子だった。見れば辻木の左手から血が滴っている。親指があるはずの位置には何もなく、手の平のあちこちに歯形がついて血が流れていた。どうやら、ダークシーカーズに襲われた際に親指を咬み千切られ、ほうほうの体で逃げ出してきたらしい。

だがダークシーカーズに噛まれたという事は、自らもウイルスに感染してダークシーカーズの仲間入りしてしまう事を意味する。今はまだ発症していないようだが、じきに正気を失うだろう。新しいウイルスに対応したワクチンは美里さんのおかげで完成したが、それだつて感染する前に投与しなければ意味がないのだ。

「どうします？」

「噛まれてるから助けても無駄だ。行くぞ」

兵士達と大山二尉が言葉を交わし、再び走り出す。ボクもその後について走り始めたが、ボクは大山二尉達が単に噛まれているという理由で辻木議員を見捨てたのではないと直感で悟った。

直後、新たなダークシーカーズの小集団が現れたが、それらのほとんどはボク達には向かわず、呆然として辺りをさま迷っている辻木議員に襲い掛かった。

「ひいつ！？ やめて、話し合いましょう！？ 治療を受ければきつと良く……ぎゃああああっ！！ 痛い痛い痛い！！ 止めて！！
うぎゃあああああっ！！」

走って距離を稼いでいたため辻木議員の姿は直接見えなかったが、その断末魔の叫びがかえってボク達に罪の意識を植え付けた。別にボク達が悪い訳でもないのに。

福田博士の地下研究室があるという建物は、以前ボク達が吹雪の日
に薪を取りに行った帰りに迷い込み、兵士達の不審な会話を聞いた
場所だった。関係者以外立入禁止だったので、当然ながら今まで一
度も入った事はない。

後ろを振り返ってダークシーカーズがついて来ていないか確認して
から、大山二尉が皆に建物の中に入るよう指示する。後をつけられ
ていたら、いくら隠れても意味がない。もつとも、ダークシーカー
ズは臭いで人間の位置を捕捉出来るので、隠れた場所を嗅ぎ付けら
れるのが少しだけ遅くなるくらいだろう。

建物の中はこの騒ぎが嘘だと思えるほど静かだった。窓も割れてい
ないし、誰かに押し入られたり荒らされた形跡もない。

「こつちだ、急げ！」

思わずその光景に見とれていたボクと由梨に、兵士の一人が叫んだ。
慌てて、ボクも彼らの後に続いて走る。

長い廊下の途中の壁に、大きな鉄扉があった。大山二尉が何事か無
線に吹き込むと、金属の軋む音と共に鉄扉が開いた。

「こつちです。早く！」

中からは散弾銃を手にした刑務官が顔を出し、ボク達を手招きした。まず年下のボクと由梨が、地下研究室に続く狭い階段を下りていく。途中で武器庫らしいロッカーや壁にかかった白衣が並ぶ小部屋を通り、ようやく研究室に出た。学校の教室を二個くらい並べたくらいの大きさの研究室の手前には沢山の机とそれに乗ったパソコンや器具が、奥の方にはガラスの壁で囲まれた小さな空間があった。その中には金属製のベッドが一つあり、それを見下ろすように白衣の福田博士が立っていた。

「美里さん！」

福田博士の後ろに立っていた人影を見て、思わず叫んでいた。福田博士がガラス戸を開いて、狭い室内に皆を招き入れる。

小部屋に入ったボクは、ベッドに横たわっていたものを見て思わず銃を向けそうになった。全身の体毛が抜け落ち、肌は異様に白くなくて血管が透き通って見えるのは、ダークシーカー以外の何者でもなかったからだ。どうやら、女のダークシーカーらしい。

「福田さん、これは……？」

「ああ、薬で眠ってるから大丈夫だよ。コイツは前に東達が捕まえてきた奴さ」

「博士。こんな非常事態に、感染者をこんな場所に入れていいんですか？ コイツが目を覚まして仲間を呼んだりしたら……」
「そんなときゃ撃ち殺しやいいでしょ」

大山二尉の疑問に、福田博士は白衣の下に下げられた拳銃の収まっ

たホルスターを叩いて答える。ダークシーカーの目は閉じられているが、全力疾走した後のように胸は激しく上下していた。どうやら眠っているのは本当らしいが、それでもこんな時にダークシーカーと一緒に狭い空間にいるのは、不安以外の何物でもない。

と、その時、小部屋にあつた事務机の上に置いてあつた無線機が鳴った。福田博士はそれを手に取って何事か言葉を交わすと、刑務官に研究室のドアを開けてくるように言った。刑務官は無言で頷くと、さつきボク達が下りてきたばかりの階段を駆け上がった。いった。

「今の無線、誰からです？」

「ん？ 東から」

「龍くん！？ 福田くん、龍くんは無事なの！？」

博士の言葉に、美里さんが声を大きくして詰め寄った。そういえば東さん、牧さん、福田博士、美里さんは高校の同級生だったと以前聞いた事がある。どう見てもマッドサイエンティストの福田博士に美里さんが普通に話し掛けられるのも、その事が影響しているのかもしれない。

東さんが無事だと聞いた美里さんは、ホツとしたような表情を見せていた。東さんと美里さんは恋仲らしいから、恋人の無事を聞いて安心するのは当然だろう。

そういえば一時期東さんと美里さんの仲は険悪だったと聞いていたが、今の様子を見る限り関係は修復されたようだ。仲が悪く空気がギスギスしたままなのはボク達としてもイヤだったので、二人が仲直りしたのは素直に喜ぶべき事である。

しばらくすると、装備が擦れあつた微かな金属音と共に階段を兵士達が下りてきた。東さん達だ。

全員がどこからか血を流していた。しかも堂々さんと稲森さんは足を撃たれているらしく、圧迫包帯を増して止血した上で牧さんと松原さんに背負われている。幸い今すぐ緊急手術が必要となりそうなほどの怪我ではないが、それでも二人の顔が痛みに歪んでいるのがわかった。

「美里！」

美里さんの姿を認めるなり、9mm機関拳銃を握った東さんは駆け寄った。そして東さんと美里さんは熱い抱擁を交わす。まるで映画を見ているかのような光景だった。

「おいおい、イチヤイチャすんなら余所でやってくれ。堂々が興奮して出血多量で死んじゃまうだろ」

背負っていた堂々さんを下ろした牧さんが、笑いながら言う。その横で堂々さんは、「俺はチエリーくん並の純情キャラじゃねえよ」と呟いていた。

しばらく美里さんと抱き合い、それから東さんは福田博士と向き合った。その瞳は睨め付けるように福田博士を見ている。

「で、なんで俺達を研究室（じゅうけんしつ）に呼んだ？」

「なんでって、僕と仲原をを守ってもらうために決まってるでしょ？ 仲原は言わずもがなだし、僕はワクチン作製に欠かせない人間だ。少なくとも僕達は生き残る必要がある、例え君達が全滅したとしても」

その言葉に、研究室にいる全員から非難するような視線が福田博士に突き刺さる。だが博士は、そんなのを全く気にしていないかのよ

うに飄々としていた。

確かに福田博士の言い分は正しいが、それでも直截的に言い過ぎだ。もう少しオブラートに包んで言えばいいと思うのだが、いい意味でも悪い意味でも他人の目を気にしないのが福田博士の特徴かもしれない。

「お前、朝になったら一発殴っていいか？」

「僕は三佐相当の地位の人間だよ、東。僕を殴ったらまた独房行きだけど、それでもいいなら止めはしない」

「畜生、いつか殴ってやる」

東さんがそう言った直後、ガンガン！ と何かを叩くような音が地下研究室に響いた。その轟音に思わず皆黙り込み、音のした方向を見る。音は階段の方、つまり入口がある方から響いてきている。

「クソツ、もう嗅ぎ付けられたか！！」

大山二尉が舌打ちして、皆にガラス戸の向こうに下がるよう叫ぶ。ダークシーカーズの侵入を食い止めるため、階段の途中にもある鉄の扉が閉められるが、いつまで保つかはわからない。

皆がガラス戸の向こうに下がり、手に手に銃を構える。最初に感じたよりも実際は小部屋は広く、十人以上が入ってもまだまだスペースはあった。

入口の鉄扉を叩く音はますます大きくなっていく。ボクは今度こそ終わりだと、直感的にわかってしまった。

第148話 side 優 「再会」(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第149話 side 龍 「再会」 (前書き)

今回短めです。力が、力が出ない……。

どうやら、今度こそ終わりのようだ。俺はそう悟った。

階段にはダークシーカーズの侵入を防ぐための鉄扉が、階段の入口と途中の小部屋、そして一番下にある。それぞれ護衛艦の水密扉の如くレバーを倒せばいくつものロックがかかるが、今までの経験から言えば絶対に安全とは言えない。一番確実なのは侵入しようとしてくるダークシーカーズを全部倒す事だが、敵の数は圧倒的に多い。数分もしない内に弾切れになるのがオチだろう。

福田が旧型ワクチンを基に作り替えた新型ウィルス対応のワクチンがあるが、完成したばかりで臨床試験も済ませていない代物だ。効果が未知数である以上、実際に噛まれて試してみるというわけにもいかない。効果があった所で、ダークシーカーズの仲間入りが出来ず全身を喰われて苦しみながら死んでいく展開しか浮かばない。

それ以前に完成したワクチンは、他の研究者の手によってシエルタ―に運ばれてしまった。ワクチンがあってもなくても、絶望的な状況は変わらない。

バン！！ という轟音と共に、何かが倒れるような音が響いてくる。階段の入口にある最初の鉄扉が破られたらしく、ダークシーカーズの叫び声がより大きく聞こえてくる。

「何て馬鹿力だ……！」

大山二尉が呻いたが、それでどうにかなるものではない。皆が手にした銃に弾を込め、その顔に悲壮な表情を浮かべる。福田だけがい

つもの高い所から見下ろすような顔のまま、兵士達を盾にするように部屋の奥へと進む。

どの道ダークシーカーズが侵入されたら、この小部屋も安全ではない。鉄の扉が破られたのだ、防弾ガラスの扉なんかダークシーカーズにとってはベニヤ板も同然だろう。

俺手にした9mm機関拳銃の弾倉を交換し、その時になって俺は、自分の手が震えている事に気づいた。

くそ、止まれよ。そう思っても、手の震えは止まらない。今までこんな事はなかったのに。海外に派遣されて実戦を経験し始めて人を殺した時も、去年の大晦日ダークシーカーズに囲まれた時も、震えた事はなかった。

俺の手が震えているのは、きっと美里との仲が戻ったからだろう。初春市にいた時は俺と美里の仲は完全には戻っていなかった。しかし今では、再びお互いの気持ちを知りあう事が出来ている。俺は美里が好きだし、美里も俺を好きなのだろう。俺は再び戻ってきた大切な人を　　美里を守りたいのだ。

だがそれは無理な相談だろう。ダークシーカーズは鉄扉をぶち破りながら進んで来る。対して俺達に逃げ場はなく、弾薬も残り僅かだ。この状態で生き延びるには、奇跡が起きるだけでは足りない。

こうなるんだったら、俺はもっと早くに美里との関係を修復しておくんだった。そしてもっと楽しい思い出を作っておくんだった……！世界が崩壊した中、かつてのような楽しみは味わえないだろう。だがここでキャッチボールをやっていて笑顔だった少年達のように、辛い日々の中でもささやかな楽しみは見つけられたはずだ。

俺は今まで皆を守るといふ義務感に押し潰されそうになり、そんな些細な楽しみすら味わえなかった。ここに来て自分の考えを押し

通すばかりで他人の事はほとんど考えず、そのせいで一度は美里との間に深い溝を作ってしまった。

壊れた世界でも、幸せを見つけようと思えば出来た。でも俺は、それをしなかった。

「……すまない」

思わず、その言葉が口が漏れ出た。隣の美里の手を強く握るが、美里はいつものような全てを包み込むような笑顔で俺の顔を見上げた。

「何で謝るの？ 龍くんは精一杯頑張ったんでしょ？ ならこの結果にわたしは文句を言わない。そりゃ死ぬのは怖いけど、好きな人と最期までいられるならこれ以上の幸せはないよ」

その笑顔を見て、少しは救われたような気がした。

牧や堂々、今はここにいないが中沢を始めとした、この地獄が始まってからずっと一緒だった仲間達。優や軍司、春奈など初春市で出会った子供達。多賀や由梨など狂った村で出会った仲間。そして福田や大山二尉、小山や高木といった、人類の未来のために行動していた連中。

その他にも様々な顔が俺の脳裏を過ぎる。マリシティで戦死した分隊長達。守りきれなかった子供達。俺達と袂を分かった澤田達。新型ウイルスのせいでダークシーカーと化した古橋。

世界が壊れてから出会った人々は、こんなにも多かった。全員が善人ではなかったし、全員が生きているわけでもない。だが普通の、平和な時代だったら絶対に出会っていなかった人々だ。

その点だけは、クルピン・ウイルスの蔓延がもたらした良い面だった。もしウイルスの蔓延が無かったら俺と美里の仲は一生修復されなかっただろうし、仲間達との絆が深まる事も無かった。

鉄扉に何かが叩きつけられる轟音は、さっきよりもはっきりと聞こえるようになった。階段の中腹の扉も破壊されたようで、階段に通じる研究室の鉄扉は先程が轟音と共にあちこちがへこんで来ている。

「最期まで、お前を守るよ」

俺はそう言っつて、美里を小部屋の奥へ押す。せめて死ぬなら、美里を守ってから死にたいと思う。俺は美里が先に死ぬのは見たくはない。

これは俺のエゴかもしれない、美里も俺が先に死ぬのを見たくはないかもしれない。だが、ここまで色々つまづきながら、みつともなくても生き延びてきたのだ。最期にカツコつけたって、文句は言わないだろう？

美里や優、由梨を福田と一緒に小部屋の奥へ押しやり、研究室の入口の鉄扉を見つめる。皆覚悟を決めたような顔をして、手に手につでも撃てるよう銃を構えた。

鉄扉は怪力のダークシーカーズの突進を何度も受け止めているせいか、扉の表面はあちこちがぼこぼこ出っ張っている。蝶番やロックはいくつか弾け飛び、後何回か体当たりを食らったらドア枠ごと外れそうだ。

とその時、部屋の隅のベッドに拘束されている女のダークシーカーが目を覚ました。獣同然の鋭い視線をぐるりと巡らせ、今にも破れそうな鉄扉の方を見て吠えた。

それにつられたのか、扉から聞こえて来る轟音のペースが増す。このダークシーカーは鳴き声で仲間を呼んでいるのだろうか？

「まったく、うるさいなあ」

十秒程叫び声は続き、そう言って福田が机の上にあった注射器を取り上げた。そしてベッドに縛り付けられたダークシーカーの腕に繋がる管に、注射器の液体を注入していく。

すると注射されたダークシーカーは徐々に落ち着いていき、最後には目を閉じた。胸は激しいながらも上下しているので、鎮静剤か麻酔薬でも注射したのだろう。

「こいつ、殺そうかなあ？」

「やめとけ。今殺したところで、俺達が死ぬ運命は変わらん」

MARK23拳銃を弄びながら言う福田に、牧が答える。牧の言う通り、ここでダークシーカーを一体殺したところで、俺達が死ぬのを送らせられるわけではない。

やがて残っていた蝶番やロックもほとんどが破壊され、残りのロックは一つだけになった。次一回体当たりを受けたら、あの鉄扉は完全に破壊される。そうなったら研究室にダークシーカーズがなだれ込んで来るのは確実で、この小部屋を囲む防弾ガラスが破られるのも時間の問題だろう。俺達にできるのは、精々残った銃弾を全てダークシーカーズに叩き込み、一体でも多く道連れにする事だけだ。他のシエルターに避難した連中は無事だろうか？ 軍司は優を庇ってダークシーカーズに撃たれたらしい。せめて他の連中に生き残ってもらわなければ、俺は死んでも死にきれない。

そしてついに、重い鉄扉が木の葉の如く勢いよく研究室内へと吹っ飛び、それに続いてダークシーカーズがわらわらと侵入してくる。

とつさに銃を構えかけた俺達を、大山二尉が手で制する。今撃つたところで目の前は防弾ガラスなのだから、跳弾となつて室内を飛び回り、俺達が一足先に死ぬだけだ。撃つのはダークシーカーズが防弾ガラスをぶち破った時だ。それだつて長くは保たない。

ダークシーカーズが吠え、次々俺達に向けて突進してくる。肉が叩きつけられる鈍い音がいくつも響き、防弾ガラスの表面が汚れる。研究室に侵入したダークシーカーは少なく見積もつても50体。残りは狭い研究室に入られないので、階段や地上の廊下にたむろしているのだろう。

「何体倒せるか競争だな」

堂々が苦しそうに唇の端を吊り上げながら、机に手をついて呟く。負傷した堂々や稲森も傷は浅かったため、こうして銃を持って戦おうとしている。

やがてダークシーカーズに異変が起こった。突如ダークシーカーズの突進が止み、階段から一体のダークシーカーが下りてきた。すると研究室にいたダークシーカーズは一斉に脇に飛びのき、道を空ける。まるで海を割って道を造ったモーゼのようだった。

「……なんと、まあ、な」

そのダークシーカーの姿を見て、牧が驚いたような顔をする。堂々

は言葉が出ないのか、口を開けたままその顔を注視していた。美里や優もその顔に驚愕の色を浮かべている。他の兵士達も、服装からそいつが誰かわかったようだ。

ボロボロに擦り切れた迷彩服。ダークシーカー特有の全身の体毛が抜け落ちた禿頭。青白く、血管が透き通って見える肌。だらりと下げられた右手は、MP7短機関銃を握っている。

「……久しぶりだな、古橋」

かつて俺達の仲間であり、今はダークシーカーと化した古橋 雄大
一等陸士が、そこにはいた。

第149話 side 龍 「再会」 (後書き)

次回、狂気の科学者編最終回……多分。

御意見、御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5489g/>

脱出

2011年12月2日21時55分発行